
俺、転生したんだと

メドローア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺、転生したんだと

【Nコード】

N61760

【作者名】

メドローア

【あらすじ】

ちよつと違う転生物をかきたかった。『限りなく一般教員に近い魔法先生』香坂隼人が紡ぐ麻帆良ライフ、よろしければご堪能下さい。 鬱展開注意。

零 目 流 れ の 中 か ら 外 れ る の は 特 別 で も あ り 異 端 で も あ る (前 書 き)

処女作ですが、よろしければ

零匹目 流れの中から外れるのは特別でもあり異端でもある

自分に向かってくる白っぽい乗用車、それが生前最後に見た光景だった。

「はい、目が覚めましたか？ おはようございます」

「あ……はあ、おはようございます」

「元気がないですねー、イイですか？

一日の始まりは即ち朝のあいさつから、大切にしくちやいけな
いんですよ」

あれ？どこにいるんだ俺は？

それにおはようございます？

ちゃんとそんなあいさつはしたはずだし、朝食も食べてゴミ袋片手

に家から出たはずだ。

あと目の前のねーちゃんは誰だ？

白っぽいローブみたいなものに身を包んだパツキン、な。

知り合いに金髪はいなかったはずだし……前に部長に連れて行って貰った店で見たくらいか。

でもここまで鮮やかな女の子はいなかった気がするんだけどさ。

「聞いてますか、お兄さん」

「……あ、すいません、少々考え事をしていましたもので……。」

それにしても綺麗に整頓された部屋ですね」

「そうですか？　そう言われると照れてしまいますね」

ウム、俺のデスクなんかとは大違いだな。

仕事の書類なんか散乱しちゃって、家も会社も変わらない腐海のようってヤツだ。

大学の一人暮らし時代はゴミがそこら中に散らばってたからな。

……見るに外国の人だな、日本語が上手なもんだ。

デスクの上には重ねられた書類、手に持ったペン、それでPC。どこかの重役の部屋にでも紛れ込んだかね？

いや、そうか。

今日は取引先に行く予定があつたな。

昨日は夜更かししちゃってたからボーっとした頭で家を出たけど、ちゃんと会社について取引先の相手の相手の所まで辿り着けてたってこと

か。

……って事は心象最悪か！？

若そっただし実力で昇りつめたって感じだろ。

しまったなあ……失敗したら部長になんて言おう？……じゃなくって。

「申し訳ありませんッ！！」

「……はい？」

「せっかくお時間を取っていただけたというのに自分の勝手な都合で無駄な事を……誠に申し訳ないです！！」

「いやいやいや！ 何頭下げてるんですか！？」

そんなことしてもらう理由はこっちにはこれっぽっちも！！」

「そのような事は……。×商事様に多大な迷惑をかけてしまったことは事実です！！」

「……。×商事？ 違いますよ、ここは」

そう違う……ってア？

「……ここ。×商事？」

「違いますよ」

「……自分 社より来た香坂と申しますが……？」

「はいはい、『香坂隼人』さんですね、合ってます合ってます」

「やっぱり。×「商事じゃあないですよ」……そうですか」

……。×商事じゃない。

となりやあここはどこだ？

社って事はないな、こんな美人さんいたら大してデカく無いウチの会社だったら噂になるだろ。

どこかの店の客引きで捕まっちゃったか？

衣服に乱れはねえ……って事はまだサービス前だ。

指名料とかでいくらかかるか知らんけど、さ。

「はい、コレ」

「……なんですか、コレは」

「一万円だったら足りるだろ？ まだ俺はなんもしてないもんな」

「あのー香坂さん？」

「ダメだ、ダメだぞ、もう金は無いぞ。」

さっきの一万だって俺の虎の子、小遣いの中からひねり出した俺の限界いっぱいだ」

「もしかしてそーゆーお店と勘違いしてます？」

「へ、違う?」

「はい、違います……と言っよりなんでそうなるんですか……」

いや何でって……ねえ。

金髪のねーちゃんが白いローブみたいな着て目の前にいたらさ、誰だってそう思うくね?

「コホン……イイですか、香坂さん……落ち着いて聞いてください
ね」

「へいへいへい」

「……なんか投げ槍になってませんか?」

そりゃなるでしょうよ。

ふつつーに考えてくれよ、ふつつーのにさ。

朝起きて出て来たかと思えばアンタみたいなのが目の前に居るって何の罰ゲーム。

俺は普通に会社行くはずだったってのにさ。
悪い夢だな、間違いない。

「貴方は死にました」

「いや意味がわかんね」

「ですから「宗教の勧誘? だったらもつと信心深い人狙ってくれよ」……いい加減私も怒りますよ?」

いい加減怒りますよって、何さそれ。
いきなり死にましたとか、こんな部屋連れてくるとか、頭おかしい
のはそっちだつての。

ため息ついちゃてさ。
つきたいのはこっちだつて。

「……落ち着いて下を見てください」

下ね下……下……した……したああああああつツ!？」

脚ないんですけど!!
俺の足が無いんですけど!!

「——ツツ!——ツツツ!——!」

以下数十分にわたり怒鳴ったんだそうな。

「落ち着きましたか？」

「ノド痛いつす……」

「まあしっかり叫んでましたからね。

と言う訳でここは死後の世界です、そしてここは転生課です」

死後の世界……。

ゴメンよ、美和、ゴメンよ、幸。

俺、死んじやったみたいなんだ。

「香坂隼人、24歳、地球日本某県某市にて妻と娘と生活。

父親の名前は香坂隆、母親の名前は香坂京子、現在某県某市にて農業を営んでいる。

両親との仲は極めて良好、やや孫バカの二人に辟易。

小中高と公立の学校で学ぶがセンター試験で思うように点が出ず地元よりランクを一つ落として大学を受験、一人暮らしを始める。

中学の時より陸上を続けており長距離を専攻、体力はあるようだがタイムは思うようになかったため最高実績は県大会出場」

……ほつといてくれ。

「高校生の時、同じ部活に所属していた、当時武田美和と付き合いを始めるが三カ月で破局。

哀しみにくれて友人と暴走族を結成。

原因は彼女の浮気、妊娠による高校中退……というより貴方が二号さんだったみたいですね」

「知ってんだよそんな事は!!」

「すつ、すいません……」。

えと……大学二年時、美和とその娘、幸に出会う、事情を聴き自分のアパートに住まわせる。

自分は友人の家にそれから一年転がり込むが、友人の家は半分、自分のアパートはすべて家賃を負担していた。

大学三年生で童々「はいそこは飛ばそうね」して同棲開始、両親に事情を説明してそのまま婚姻届を提出。

卒業と同時に亡くなって持て余していた祖父母の家に両親とともに居住開始。

社に合格し、勤めているってこんな感じですか？」

「そうですね、俺にあったでかい事件はそんなもんですね」

何コレ？

なんで見ず知らずの転生課とか意味のわからん職員の人に俺の半生読まれなきゃいかんのんだ！？

理不尽だよな。

幾ら知ってるからってそんな事言われたってさ。

……理不尽だよな。

「意外にヘビーな人生過ごしてますね」

「一発ぶん殴るだけで許してくれた母親と、笑って許してくれた豪

「快な父親に感謝してます」

レディースの総長と、いつも運ばれて来た警察署の警官で成り立った夫婦です。

『愛は留置所で生まれる』ってのは母ちゃん一番の名言だと思うんだわ。

俺も留置所で愛、生まれるかと思えば微塵も無いしさ。黒歴史だな、アレは。

「で、本題に入りますが先ほども言ったようにここは転生課です。

ありとあらゆる地球上で死滅した生物を次なる生物へと魂を淨化し、転生させるのが仕事ですね」

「……もう好きにしてくれ」

「では続けます。

普通ならば、貴方のようにここに呼ばれる訳も無く魂の乗せられたベルトコンベアーで流れ作業的に次なる生物へと振り分けていくんですが……！

淀みというものがどうしても出来てしまつて、捨てなきゃいけない訳です。

そんなことである程度魂もいろんな所を循環させないといけないんですね」

意味わかんね。

美和ちゃん、今度生まれてくる息子の名前何にするかまだ決めてなかったっけ？

もう俺死んだけどさ。

……笑えよ！

笑えねえよ。

「ある一定数の魂ごとに別世界に送り込んで、逆に向こう側から新しい魂を運んできて交換する訳です。

その時溜まった淀みを一緒に吐きだす訳ですね、こちらから向こうに。

吐きだせる、言い方は悪いですがゴミ処理所となる地球もいつばありますし」

地球がいつぱいあるんだってさ。
いつこじゃん。

もうわけわかめ。
帰ってビールでもグイッといきたいねえ。

「それを私たちは仮想地球と呼んでいます。

地球に存在する億千の作家から生み出された物語により人々が感銘を受け、その影響により生み出されたのが仮想地球です。

要は人の想いの塊ですね。

そこは実際には存在しない訳ですが存在するという矛盾を含み構

成されていて、その物語が終われば人の想いと全能なる意志、つまりは原作者の影響を受けなくなり自立した世界として存在し続けるようになるのです。

無論私たちからの影響も受けず、本物の人の想いが負荷されない
ので淀みもそれ以上の仮想地球も生まれる事も無く。

まあ仮想地球も本物の地球と機能的にそこを除けば変わらないんですかね」

帰りたいーい帰りたいーい。

もう俺ベルトコンベアー組みでイイよ。

何になんの？

人？犬？猫？鳥？植物？

何でもイイよ、意識とかどうせ消えるんだろ。

「仮想地球に淀みと共に捨てられる魂、それが今回ちょうど貴方に当たってしまった訳です」

「しっつもーん、淀みとか捨てたらかそーちきゅーが危なくないですかー」

「それは大丈夫です。」

淀みがその物語で出てくる事件や敵に変化しますので、それを解決したり倒したりする方、つまり主人公が居るでしょう？

彼らが消し去ってくれるという訳です」

って事は俺が事件運ぶってことだよな。

……ヤバくね？

「イヤイヤイヤ、それはダメだろ」

「そう言われましてもほぼ必然的に解決される訳ですから。

淀みが本物の地球に溜まってしまつと確実に崩壊へと運ばれるような事が起きてしまいます、解決できる主人公となる方が居ないのですから。

ですが仮想地球ならば主人公が解決してくれるのです……苦肉の策ではありますが」

沈んだ顔されてもさ。

俺にはかんけーねーしさ。

話がデカすぎるっての。

それよりマジ返せよ。

無理ならベルトコンベアー乗せろよ。

……それが無理なんですな、わかります。

「それで貴方を仮想地球、今回は『魔法先生ネギま！』に送ることとなりました。

ご存知ですか？」

「漫画だろ、マガジンでやってたラブコメ」

最初しか知らんけどさ。

子供が来て、何か年上相手にエロいことする漫画だった気がする。魔法使ってエロい事すんのか？

どーせならスクランが良かったなあ。

アレは昔から読んでたし。

単行本派ですよ俺は。

「それでタダで送るってのも悪い気がしまして、何でも好きな願いを一つ叶えて差し上げますよ」

「あ、別にいいです」

だってラブコメだろ？

能力とかいらねえし。

モテたいっつー願望は人並みにはあるけどさ。

美和ちゃんに惚れこんだし、さ。

だからバカな男に引つかかって、孕んで中退で両親からも勘当されて。

結局捨てられたってのに、わざわざ手出して助けたんだもんな。

なーんか自分で言ってる嫌味なヤツに見えるな、俺。

まあいいか。

好きだったから好きでやったんだし、もういいさ。

「……何か無くないですか？

魔法がある世界に行くんですよ？ 無限の剣製とか王の財宝とか

テイルズの技とか、何かあるでしょ？」

「別にないんですけど……ってか無限のなんたらとかなんすか？」

「……知らない？」

「いええゝす」

「アニメとか漫画とかは？」

「人並だと思っただが……DBとかは知ってるし、ダイ大も知ってるし、ぬゝべゝも」

「あんま見ない人ですか？」

「立ち読みとかはジャンプ以外しないですが」

「そ、そうですね……」

てかなんだ？

そんな力みたいなの貰って転生とやらをする人が多いのか？

そっち系には疎いからよくわからんのんだが……。

まあ聞く限りはそうなんだろうな。

てか普通に転生する流れになってる俺にびっくり。

認めちゃってるし、いつの間にか手が消えて丸っぽくなってる気がするし。

魂ってマジで人魂みたいなんだな。

……もしかして意識とか消える系か、やっぱ。拙いよな、それは。

「一つあるんだわ」

「お、なんですかんですか、じゃんじゃん言っちゃってください」

「えとー美和ちゃんと幸と、あと母ちゃんと父ちゃんがこれから苦労しないようにして欲しいっす。」

出来たら美和ちゃんには俺以上にイイ旦那が出来て、これから金とかに苦労せずに……。

お腹にいる俺の息子と、俺の娘の幸にもそれが適応されたら更にいいんだが」

「自分ののは？」

「いいや、どーせ一般人として過ごすつもりだし」

「……原作に関わりやすい立ち位置に転生しなきゃいけないんですけどね（ボソツ）」

ホント俺にはもったいない嫁さんと娘だったからな。

俺の事お父さんって呼んでくれたし。

美和ちゃんもさ、イイ子だもん。

俺の惚れて惚れて惚れ抜いた女だし。

「それはサービスでして差し上げますので、ご自分の事を」

「じゃあ転生する時美和ちゃんと幸の記憶消してくれるか。

ずっと想ってたって、寂しいだけだしさ」

「……死んだ時も妻を庇って車に撥ねられ、ここまで来てまだですか」

「惚れたんだから仕方ねえって」

ホント仕方ねえ。

やーさんぼくなってた幸の親父が来ても、俺は躊躇わずぶん殴れたもん。

惚れたせいだ、好きになつたせいだ。

そうなつちまったらなつたもんが負けだわ。

俺の持論だけどさ。

「それもサービスです。

でも何かしなきゃいけないのが規則なんですよ……ハマったゲームとかは？」

「特にねえと思うんだが」

「そんな事も……ってあるじゃないですか、コレが！

では貴方にはハマったゲーム『テリーのワンダーランド』より『魔物使い』のスキルと貴方の長年のパートナー『スラぼつ』を差上げます」

テリーか、確かにあれはやり込んだ。
てか死ぬ前の日の夜もやってたんだっけか？

最初のスライムに何となく愛着わいちまって、結局配合しまくって
耐性上げまくったのはイイ思い出だな。

ドレアム、ローズバトラー、スライムつつうパーティだし。

「魔物使いと言っても無条件で人外に好かれる訳ではありません。

ただその職としてのスキルと、貴方の育成により才能の限界突破
が出来るというくらいのは能力です。

後は……コレもサービスです」

肩掛けバック？

テリーがかけてるヤツか。

「中には無限に魔物の餌と燻製肉と骨付き肉と霜降り肉が入って
います。

貴方の育てる魔物たち専用の食料ですので、そこら辺を承知して
お願いします」

「……いや別にいらんのだが」

「正直に言えば私はとても驚いていて、そしてとてもイイ気分です。
貴方のような人間に出会えるとは思っていなかったというのが本
音ですから」

「聞いてる？　んなことどうでもいいから美和ちゃんと幸の辺を…
…」

「そうやって他人を、惚れた相手とはいえそう思いやれるのはとても素晴らしい事だと思います。」

「こんな状況なら、普通は欲望が剥き出しになるものです」

「もしも〜し」

「それでは素晴らしいこれからを、貴方の生に幸あらん事を」

「イヤイヤおいおい。」

「それよりも、俺はいいから、美和……って誰だ？」

● 零 匹 目 流 れ の 中 か ら 外 れ る の は 特 別 で も あ り 異 端 で も あ る (後 書 き)

難
し
い

一 匹目 『魔法』 っつつても俺にとっちゃあこんな印象（前書き）

二 二つ目、投稿。

一匹目 『魔法』 つつても俺にとっちゃあこんな印象

転生したんだな、俺って。

そう気付いたのは生まれて相当経ってからだった。

てつきり今から思い返せば、赤ん坊のころから意識があるのかな？
なんて思ってた。

ま、冷静に考えりゃ赤子にそんな思考力ある訳もねえんだし、俺の
脳みそ叩き込んだらパンクするわな。

気付いたのは中学生の頃。

ホント思い出すというより気付くって感じが言葉としてあっていると
思うわ。

例えばテストでイイ点がとれて、ココ塾でやったからだ、とか。

無性に持つてく必要がある気がするものがあって、学校行ったらそ
う連絡されてたからだった、とか。

ハンバーグが食べたくなつて、それは朝母ちゃんに予告されてたか
らだった、とか。

まあたとえば変かもしれないけどそんな感じ。

道理で中学生の辺りまでテストでまるで苦労せんかった訳だ。

俺のスラぼうが目の前に姿を現したのもその辺りからだな。

それまではいたはいたが見えなかった、のかね？

まるでいた気がしねーもん。

目が覚めたら目の前に青い身体のあいつが居たんだもんよ。

ビビった、叫んだ、殴られた……母ちゃんに。

父ちゃんも母ちゃんも前世とまったく同じってのはありがたい。顔もまるで変わってねえし。

強いてあげるなら眼とか髪とか、その辺が少々変わってたね。後デコが狭くなってた。

顔？普通だと思うがね。

目付きは母ちゃん譲りの三白眼で悪いがそれ以外は普通だろ。昔っから変わらず強面。

やんちゃやってた頃、俺のメンチ切りはほぼ無敵だったからな。イイ思い出だ、思い返せば。

スラばう？イイヤツだぜ、相棒だな。

ぬぼーっとしたあの表情だけかと思えば普通に喜ぶような表情も出来るし。

しゃべりやしねえけどさ。

ぴぎーってのが鳴き声。

可愛いもんだぜ。

大抵俺の頭の上か、転生課のねーちゃんから貰ったバックの中にいるな。

アレもスゲーもんで、ぬっとぬっとになってるのかと思えばそんな事もねーし。

スゲー頑丈でガキの頃から社会人になった今も愛用してる。

肉まで出そうとして突っ込めば肉が出てくるけどそれ以外はふっのバック。

これがいちばん身近な魔法か？

後はホイミ、もといベホマか。

これで俺怪我の経験と風邪の経験無しだかな。

ありがたいこつて。

で、あと一つは目の前のガキンチョ関連についてか。

今じゃ社会人の俺。

麻帆良って名前の学園都市に生まれて、小中高大とそこに通って。

中学ん時転生したって気付いて、私立なのに大丈夫か？って思ったんだよ。

その頃の大人な発想はそれくらいか。

知識はあるけど精神が幼かったんだな。

よく言うのかどうかはわかんねえけど『精神は肉体に引つ張られる』んだと。

そんな訳で俺は中学生の時は中学生だったし、小学生の時は小学生で大学生の時は大学生、社会人一年生の今はそんな感じってことだ。

話は逸れたけど麻帆良で働く人間で、子供が居る場合あらかじめ給料のいくらかが振り込まれる事になってんだってさ。

それで全部負担されて通えるようになるんだと。

イイシステムなのかね、いまいちよくわからんが。

「考え事か、隼人」

「いやな、紅茶より日本茶がイイなと思ってさ」

「抹茶でも点ててやろうか？」

「そこまではいいや、安っぽ〜い茶葉の緑茶で俺は十分。」

こんな高そうな紅茶なんてとてとてもってヤツだ」

「ふん、このようなモノには金を掛けるのが普通だ。」

本物に触れるという事はそれだけで精神を豊かにする」

「高尚な考えで、俺にはさっぱらぶーだ」

俺の言葉に嫌な顔を作ってるこいつ。

なんだかんだ言ってもう十年くらいの付き合いになるのか。

ずーっと中学生やってんだぜ、信じられっか？

多分こいつが目に見えての俺にとっての魔法。

何年も友人としていんのに昔っから微塵も姿がかわんねえ。

『真祖の吸血鬼』らしいがどーも信じれんな。

気付いたのは俺が中学の時。

確かに三年として卒業したはずのこいつが後輩になってたんだから驚きだ。

思わず『あ、ダブリ』って言っちゃった俺は悪かねえ。

「てか明日の宿題やったかテメエ」

「何故に後輩の意見を聞かねばならん、私は先輩だぞ」

「イヤ俺のは適当に対応してやつからいいけどさ、新田センスのく
らいはやつとけよ」

「……新田か」

「そ、鬼の新田」

「代わりにやれ」

「んじゃ俺の仕事代わりにやってくれ」

「何故私がおm「じゃあやつとけ、後がメンドイぜ」……わかつて
るさ」

新田先生もイイ人なんだがな。

まああの人の良さがわかるのは中学卒業してからだな。

そんな訳で目の前にいるこいつの名前は『エヴァンジェリン・A・
K・マクダウエル』。

世界最悪最強のまほーつかいなんだと。

まあそうは思えんけどさ。

なんでも英雄に縛り付けられてんだって。

そんな描写あったっけ？ またーく覚えてないってのが俺の心情。

そんなこんなで中学生生活十三年目、阿保らし。

まほーつかいならとつとと解呪とかやれよ、って思ったのは俺だけ

じゃねえ。

でも出来んのだと。
最強じゃねえじゃん。

「隼人、俺二モソノケーキ寄越せ」

「へいへい、ホレ口あける。」

わかったわかった、スラぼうにもやつからな」

「ケケケ、俺ノ余リダケドナ」

「びぎーびぎー」

「莓やつから我慢してろ」

「ぴうゝぴうぴう」

「聞き分けのイヤツだ」

その関連から今スラぼうと一緒に膝の上にいる人形『チャチャゼロ』。

エヴァ長年の相棒らしいさ。

血が見るのが好きならしんでよー俺とスプラッタやらホラーを見てるな。

切れ方が違うだの血の噴き出し方が違うだの。

その辺は知らん。

精々俺は金属バットとかコンクリートとか、ちっこいナイフとかそのレベルだし。

「隼人、腹が減った」

「ケーキ食ったろうが」

「だが腹が減った」

「絡繰帰って来るまで我慢してろ」

「無理だ」

「俺の食い掛け喰うか？」

「何故お前の食い掛けを喰わねばならんのだ？」

「じゃあ我慢してろ」

性格ははっきり言ってわがままだ。
ガキのつつ冠詞が付くが。

時たまに妙に年上臭くなるんだよな。
ま、どーでもイイが。

まあこれが俺にとっての『魔法』の認識。
ここの髭長い学園長にその事は黙っといってくれとも言われてるが。
そう言われたのもエヴァに気付いてからだな。

魔法は秘匿しなきゃいけないんだと。
まったくなにかわからん。

どーでもイイ気もするのは俺だけじゃない事は間違いないね。

後は魔法使いと退魔師の知り合いがいるくらいか。
仲イイのはちょびっと。

てか生徒にもいるんだぜ、スゲくね？

そんな俺も今では立派な魔法先生扱い。
魔法先生ってのは魔法が使える先生……まんまだな。

なんでなったのか、コレも簡単。
スラぼうが見つかった。

だから魔物使いなんですっていったらその日から魔法生徒になった。

隼人くんびつくり。

一大拠点なんだと。
まったくもって意味わかめ。

そんなこんなで俺も働いてます。
だから夜中にこうやって森の中でティータイムと洒落込んでるわけ
ですがね。

やんなるやんなる、マジでやんなる。
でも家売り払ってどっかで農業始めた両親に仕送りもしなきゃいか
んし。

金はあるに越したこと無いからさ。

特別手当出んのよ。

なんか両親が引っ越して行った時には妙な感じだったけど……。

気のせいだよな？

「……来たぞ、私はタルいから動かん」

「てかお前月一とかでしか出て来んのんだから働け」

「知らん、眠いんだ私は」

「吸血鬼のくせにか？」

「今は人と変わらん、文句ならナギに言え」

「ナギって人知らんし」

「……そう言えばそうだったな」

「電話すつか」

ポケット、支給用携帯電話と。

「あ、こちら香坂隼人ですが」

『香坂先生すか、本部に何か用すか？』

「……そいや今日は春日の担当だったか」

『そゆことっすね』

「エヴァが動かん、逃げていいよな」

『イヤ私に聞かれたって』

「お前だったらどうする？」

『逃げるっす』

「そか、さんきゅ」

『あいあゝい、今度テストでも流して下さいっす』

「機会があればな」

方向性は決まったな。

とつとお茶道具を片づけてと。

シートからエヴァを立たせて、ヒョイツと持ち上げて肩の上に。
ごつつい身体は父ちゃん譲り。

190cmの110kg超だから相当なもんよ。

コイツくらいならゆーゆー。

「隼人、殺ンネエノカヨ」

「俺そんなの苦手だし、一晩過ごせば手当出るんだからさ」

「ケケケ、悪党メ」

「イイだろ別に、高畑先生いるし」

「マアドーデモイイケドヨ」

てな訳でとつと逃げよ。
近い気するし。

「ぴう」

「ヒヤハハー、イイ乗り心地ダゼ！」

チャチャゼロ、ゼロの乗ったスラぼうを俺が追っかける。
まんまスライムナイトだな。

そいやこの世界、DQ関連が全部なんだよ。
ビックリだな。

とりあえず帰って明日の準備しねえと。
さっき何人かとすれ違っただし大丈夫だろ。

一 匹目 『魔法』 っつつても俺にとっちゃあこんな印象（後書き）

小説書くのは難しい。

二 二 目 中学生が一番はっちゃけた時期だよな（前書き）

お気に入り登録して下さい。読者様に感謝を。

二匹目 中学生が一番はっちゃけた時期だよな

……ねみい。

昨晚遅くまで起きてたつてのに朝っぱらから働かなきゃいけねえつてのもつらいとこだよな。
仕方ねーけどさ。

……だが眠いわ。
早引きしてえなあ。

「眠そうだな、香坂」

「あ、おはようございます、新田先生」

「ああ、おはよう。」

疲れでもたまっているのか？」

「あはははは、昨日遅くまで起きててつい」

「……若いなあ、香坂。」

だが若いからこそそれくらい乗り切らんでどうする」

「ごもつともです」

「職員会議までに校内回って目を覚ましてこい」

つと投げて寄越された缶コーヒー。

……こうゆうことが普通に出来るって渋いよなあ。

「……あざっす」

お礼の言葉にも手を軽く上げて自分の机に向かうだけ。

……渋いぜ。

カツコイイ大人ってヤツだな。

てことで机の上のスラぼうとゼロを頭に乗つけて、さてはて行きま
すか。

なんでゼロが居るかって？

昔っからそうだからとしか言いようがねえな。

中学生の時にエヴァに知り合って、魔法って存在知って魔法生徒に
なって。

で、エヴァの家に招待されてゼロと知り合って。

スラぼうも気に入ってたみたいだし、仲良くなっただってことだ。

後はいろいろあって。

機会があればまた話すさ。

そんなこんなで多分高校生くらいの時からこうやってゼロを頭に乗
つけるようになったもんだ。

ヒかれる事もあったが、まあイイのさ。

最近はいいつ、スラぼうみたいに魔法使いとか以外には見えなくな
るようにも出来るし。

ま、『コッチノ方ガオモロイゼ』とか言ってるそんな事ほとんどねー
んだけどな。

お蔭さまで『人形先生』とか変なあだ名ついてら。

けどまあそれだけで受け入れられるってのも不思議なもんだ。
さすが魔法使いの町、にんしきそがいまほーとやらが完璧だな。

「……あああつ、やっぱ俺にはこーゆーコーヒーがあつてゐるわ」

「俺二モクレ」

「今やってたら確実に変人だろうが」

「安心シナ、テメエハモウ変人ダ」

「だとしても嫌なもんは嫌、なあスラぼう」

「ぷ〜ぷう」

「テメツ、隼人ノ肩持ツノカヨ！」

「さつすが相棒、一味も二味も違うねえ」

「ぴぴうぴぴう」

長年の付き合いゆえか、ゼロもスラぼうの言葉はしっかりわかるんだよな。

ちなみに俺は他にも大抵の異形の言葉はどんなんでもわかるからな。イヤイヤその辺は『魔物使い』としてのスキルなのかね。

ま、これで夜の警備とかでも戦わず済ませれるってことはとーってもありがたいと思うよ。

触手系と語り合ったのはいい思い出。

ローズバドラーのキョウコを思い出すね。

昨日の警備も大した文句言われなかったし。
いつもの事だからだけどさ。

俺の魔法使い（笑）たちから印象は『限りなく一般教員に近い魔法先生』。

滅多に戦わないエヴァの緩衝材程度の役割みたいだな。

個人的にいい印象は持たれてねえし。

やっぱあん時『魔物使いです（キリッ』とか言わなきゃよかったか……。

もうどーしよーもねえけどさ。

そんな俺が役立たず扱いされ、避けられてる理由は主に三つ。

一つ目は魔物使いなこと。

いい印象なんて微塵もありやしねえ。

職業差別だな、まったくさ。

ま、魔法使いにとっちゃ倒すべき敵なんだろうさ。

スラばうは可愛がってくれるヤツもいんのに……見た目って大切だな。

『人も魔物も見た目が九割』、本出したら売れるかな？
覚えてねえけど。

まあこの理由は許容してくれる人がほとんど。
陰陽師だって『前鬼』と『後鬼』だっけ？

妖怪使役してんだからな、それくらいはさ。

二つ目は使役する魔物がスラぼうなこと。

……やっぱ雑魚キャラオーラが出てんのかね、スライムって。

「ぴいぴう〜ぴうう」

「ケケケ、中々歌ウメエジヤネエカ」

「びぎ〜」

「エヴァでも誘ってカラオケ……行くかね、麻帆良内にも有るよな」

「シカシ演歌トハ渋イゼ」

スラぼうゲーム通りならスゲー強いはずなんだがな。

まあ全開で戦わせた事はないからよくわからんが。

エヴァやゼロ曰く下級の鬼を一撃で粉碎したからな、体当たりで。

やっぱ攻撃って体当たりなんだな。

それでこそスライムだとは思うが。

ゲーム通りだったらマジどんなもんだろ？

ドレアムのタカシが攻撃役で、ローズバトラーのキョウコが回復補助役で。

役割違うよなあと思った俺は悪くねえはずだ。

で、スラぼうがオールラウンダー。

攻撃、回復、補助を均等に出来る様に振り分けて。

特技を覚えられるのは全部で八つだったが、そう考えれば後七つか？

確か……攻撃が『ばくれつけん』に『ビッグバン』に『グランドクロス』に『マダンテ』。
補助が『いてつくはどう』に『だいぼうぎょ』に『さそうおどり』。
回復が『ザオリク』と『ベホマズン』。

……そいやあ『ベホマ』使えたんだよ。
ザオリクって使えんのかは怖いけど、多分無理……だよな。
そう考えればザオリクがベホマに変わったのかね。
てかそう考えたいな。

ぶっちゃけ戦闘だったらばくれつけんとさそうおどりくらいしか使わなかった気がするが……。
マダンテ覚えさせるのは夢だったし。
グランドクロスは画面に十字がでるのがカッコよかったんだよな。
ビッグバンは耐性上げるために配合してたゴールデンスライムが覚えただけ。

正直パラメーターの『やせい』以外は全部999のMaxだったし。
呪文とか使う必要がねんだよな。
+99はふつーに付いてたし。

本気とか……怖いな。
DQシリーズは7までやったけど、ボスとか神とか魔王だろ？
そんな???系から大したダメージ受けなくなってたウチの子だからな……。

ま、考えないようにしよう。

三つ目が一番避けられる理由。

そんなにみんなエヴァの事嫌いなのかね？

俺にとっちゃあただふつーの女の子に見えるんだが。

教育か？

北の総書記さんとこみたいに危うげなことしてんのか？
その辺もさっぱらぶーだ。

「隼人センサー、おはよー」

「あぶぶ、お姉ちゃん待ってよー……あ、おはようございます」

「おー、おはー」

「元気ないな、ダメだよそんなんじゃ」

「眠いんだよ、俺は。」

相変わらず元気だねえ」

「元気な方が楽しいじゃないですか！」

ごもつともで。

俺もしっかり寝てればこのテンションにまだ付き合えるかね。
だが今は眠い……。

「じゃあまた授業でねー」

「バイバイです」

「おーコケんなよ」

「子供じゃないもん!!」

そんなところが多分子供だよな。

昔は誰もそうだけどさ。

いやいや、俺も老けたかね。

さてはてそろそろ職員会議、行きますかいにい。

しかし……だけどさ、普通に俺夜の警備とか駆り出されてるけどさ。

魔法使ってエロいことする漫画だよな、コレ。

……なんでだろ？

勉強も、まあ中学生レベルだわ。
そりゃそうか、俺中学教師だし。

大学卒業したての新米理科教員つてのが今の俺の肩書き。
文系か理系かってのは最後まで悩んだんだが、結局捻りも無く理系。

専攻は生物だな、魔物使いな俺らしくね？

最近は理科離れが進んでるらしいからな、しつかり楽しさを教えんと。

と言う訳で俺の授業は実験とレポートがほとんど。宿題もレポートのまとめだし、大学っぽいのか？

担当するクラスは新任だけあってまだ少ない。

一年に二つ、二年に一つ。

週に三回ずつだからまだまだ空き時間はある。

大変だが結構やりがいあるね。

ま、元々教師志望だったんだもんで。

転生前は大学落ちてどーでも良くなっただんでやめたけどさ。

「てけとーにグループ組んだか？

だったら今日はガスバーナーの実験するんで火には十分気を付けるように」

「……はい」

そんな俺が今居るのは一番多分、知る限りはっちゃけたクラス。

エヴァも所属してる1-Aだな。

「いつも通り口頭だからてきとーにメモ取るか教科書見るように。

ガスバーナーの下に丸っぱいでっぱりがあるがそれが重要、上が『空気調節ねじ』、下が『ガス調節ねじ』、反時計回りに回したら開くが今はちゃんと閉まってるか？」

「開いてるのがあるよ」

「よし、前に使ったクラスに乗り込んで時計回りに回して閉めとけ。」

閉まってるのが確認出来たら元栓に繋げて、元栓を開いてやれ」

「横向きを縦向きにすればいいのかにゃ？」

「そうそう、明石みたいに開けたらマッチに火を付ける。」

で、ガス調節ねじを開いてガスバーナーに火を移しな」

「付いた！」

「その後は空気調節ねじを開いて赤い火を青くしとけ。」

それが出来たグループから渡したもんを注意して燃やしてけ。

これが今回の授業だが何が燃えた、燃えないだけだったら評定が低くなるから注意しとけよ」

「じゃあどうすればいいんですか」

「考える、いつもみたいに。」

俺が言っただってつまらんしどーせ頭に入らん、自分らでけとーにやってみとけ。

グループだけじゃなくってクラスで協力しろよ」

「……はい」

ウム、イイ返事。

さて俺は、椅子にでも座つてのんびりしとくか。
後は出してもらった宿題にでも目を通して。

「相変ワラズ適当ダナ」

「これぐらいがちょうどイイんだよ。」

自主性を高める的な？」

「物八言イイヨウツテカ」

ほっとけ。

でもいろんな奴らが居るわな。

一つ一つ観測するヤツ、てけとーに燃やすヤツ、
見てるだけのヤツ。
十人十色？ 個性的なモンで。

「隼人にいゝわかんない」

「……あのね、幾らお前妹分とはいえ教師と生徒、オケ？」

「オケオケ、でね隼人にい、いまいちわかんないけどどうすればいいの？」

わかってねえよ、コイツは。

その呼び名もな、せめて授業中は止めて欲しんだがな。

「桜子よ、そろそろ怒っちまうよにーちゃんは」

「暴力教師だ！」

「スクープだッー！」

はいはいゴンゴンと。

うずくまってんじゃねえの。

体罰は禁止とはいえ多少は必要だろ。

そこは変えねえよ、俺。

職員室でもわかれるんだよな、否定派と肯定派で。

ちなみに俺は肯定派、トップな新田センセな。

「ううー可愛妹分の頼みなのに……」

「鼻屑はダメだろ、教科書読めよ」

泣き真似してんのは『椎名桜子』。

俺の実家、もう売っぱらっちゃったからねえけどその向かいの家の娘。

かーなり年の離れた幼馴染ってところか。

中学の時から寮暮らしだったけど、実家に帰るたびに遊んでやってたもんだ。

桜子のところは共働きだったからよくウチの実家に入り浸ってたし。母ちゃんはアレで専業主婦だし。

俺の住んでた男子寮にもよく遊びに来てたな、泊りもしばしばだったさ。

桜子が嫌な事があつたら俺の部屋で泣き明かしてた事もよーあつた。ホント妹だな、年はちょうど十違うし。

俺が22でこいつらが12だからな。

「ほにゃらばお色気攻撃で……」

「おむつ換えて、おねしょの始末して風呂で身体洗ってやったヤツからどうやって色気を感じろってんだ？」

「セクハラだ!!」

「ヘイヘイうるさいうるさい」

「センサー、自首したら罪は軽くなるんだよ？」

「裕奈、親父さんによく言っというてやろう」

「大人は横暴だああああ!!」

つてあつという間に喧騒がクラス中に。
ハア、諦めよ。

相変わらず騒がしい限り、テンション高いもんだ。
まあそれでこその中学生だとは思うがな。

二匹目 中学生が一番はっちゃけた時期だよな（後書き）

原作開始までどれくらいかな……。

三匹目 友人に年齢やその他もろもろはきつと関係ない(前書き)

今回は日常パート

三 四 目 友人に年齢やその他もろもろはきつと関係ない

俺の友達って誰だろ？

スラばうとエヴァとゼロと、絡操はなんか他人行儀だから違うか。
桜子は妹分だし、新田センセはどこまで行っても恩師だしなあ。

教師関連で言ったら……ガンちゃんと神多羅木さんかね？

あと式集院さんも。

見事に魔法先生ばっかだな……。

まあ必然的に付き合いはする訳だけどさ。

そんなこんなで今日は四人 + α で居酒屋。

俺と真也さん……神多羅木さんの事ね、が入った瞬間店内が息を飲んだのは気のせいだと思いたい。

光さんが教えてくれたけど、ガンちゃんが言うに俺はヤクザの若頭、真也さんはイタリア辺りのマフィアのボスに見えるんだと。

強面ってやだね、ホント。

まあわかっててワザとそれっぽいスーツ二人で着てんだけどな。

「うっ、」注文は……」

「じゃあとりあえず生大四つでイイっすかね？」

「うん、それと焼き鳥、枝豆、もろきゅう、牛すじ煮込みを四人前ずつお願いするよ」

「後レバナニラを二人前で、神多羅木はどうする？」

「俺はとりあえずそれで構わん」

「はい！　すぐに持つてきます！？」

……ビビってたな。

あの女の子バイトかね？

男もいるってのに……情けね。

多分新入りなんだろうなあ。

「お持ちしましたっ！！」

早いな。

ホントにビビってんじゃん。

涙眼だし。

……ハア。

「ありがと、バイト頑張ってくれよ」

「……はっ、はい！！」

一応フォローしたが……めんど。

「相変わらずだがそれはどうでもイイ！

なんで『闇の福音』の従者を連れて来ているんだ！！」

「ケケケ、気ニスンナ」

「そんなことできる訳ないだろうが!!」

「クアアツ、喉に染み入るビールが美味い!」

「俺二モ、俺二モクレ!」

ほいほい。

確かこの貰ったバッグの中に……あつた。
ちっちゃめのゼロ用ジョッキ。

注いで注いでつと。

「クアア、ウマイゼ!」

「流すな!」

「まあまあガンドルフィー二君、酒でも飲んで落ち着きたまえ」

「……ここの焼き鳥は中々だな」

「ぴぎいぴぎ」

わかったわかった。

えとゝホレ、魔物の餌。

コレはこれで美味いだろ?

手の平出して……食ってる食ってる。
可愛いもんだなあ。

大体男だけの飲み会はこうやって始まるな。
ゼロは女だけどさ。

で、大体最初に酔いつぶれんのがガンちゃん。

「だいたいな〜わかっているのかあ〜。

私たち正義のまほーつかいはあくをたおさねばいかないんだッ！
」

「チャチャゼロくん、コレ僕の娘なんだけどね、かわいいだろ〜」

「マアマアダナ」

「聞いているのか！！」

「あの〜真也さん」

「安心しろ、認識阻害の魔法はかけている」

相変わらず仕事かはえーや。

出来る男ってヤツ？

羨ましーかぎりでござんすよ〜。

「『闇の福音』だぞ、あくのだいめーしだぞ」

「でもエヴァこの学校守ってるし、学校にも十年以上通ってんじや

ん」

「それはそうかもしれないがなー呪いが解けてないのだからまだわるいんだ」

「ナギノアホガ来テネエダケナンダガナ」

「にしても『英雄』もわからないものだね」

「実際見てみないとそこは……あ、光さん、グラス開いてますよ」

つと頼んどいた生と入れ替え。

真也さん？　そこでスラぼうと戯れてますけど。

「『英雄』のやること全てが正しい訳じゃないから。

ガンドルフィーニ君も……もう少しまともな教育の魔法学校に通っていればここまでではなかったはずなのだがね」

なんでもメガロセンブリアなる国は英雄マンセーな風潮があるんだと。

メガロセンブリアなんて国聞いた事も無いけどさ。

そこ出身で、でっかい戦争があつた直後くらいに学校に入学したんだってさ。

世間は英雄一色ムード。

染まる染まる純粹無垢な若きガンちゃん。

な〜んか変な感じだな。

………そいえば漫画の最初、魔法学校卒業したん………だっけ？

いまいちよく覚えてないな。
どーせならもうちょっと読んどけばよかったかも。

魔法使いたちにもいろいろ事情があるんだな。
ガンちゃんも多分エヴァの事ふつーだと思ってんだろうが……。
認めるのは、これまで全部ひっくり返すのはムズイんだろうさ。

「あくはあ……たおすべきいなんだ」

俺も知らなかったから、無知だからこそあーやって友達になれた訳だ。

今度どつか遊びにでも行くか。

まあいつも麻帆良でのショッピングには付き合わされてる気がせんでもないが。

「……じゃ、酔い潰れちまってますけどどうします?」

「わたしはよってぬあゝい」

「酔ッ払イハミンナソウ言ウンダヨ」

「……びっく」

「スラばう君も酔ってるみたいだしね、いつものおでん屋は?」

「行かねば飲みに来た気がしない」

「あははは、ごもつともだね」

「少し退いてろ……」
「ディク・デイル・ディリック・ヴォル

ホール 春の香りよ 仲間に元気を活力を 健やかな風を レフエ
クティオー”」

おーイイ香り。

なんか頭がスツキリ胸もスツキリ。

これが魔法、か。

便利なんだからさ、もっといろいろ広めればイイのにさ。
やっぱよーわからんや。

「おでん屋に行くぞおおっ！！

チャチャゼロ、今日こそ貴様らがどれだけ悪か教え込んでやる！
」

「俺モイロイロ武勇伝聞カセテヤルゼ」

「チャチャゼロ君の武勇伝か、是非とも聞いておきたいね」

「ぴぷうぴっ

「行くぞ、香坂」

ういゝす。

大根がんもジャガイモ。

焼酎をグイッと、これこそ飲みだねえ。

「ありがとございました！！」

もうビビられてねえか。
頑張ってくれよ、バイト君。

年下でも友人は友人。
仲良しはいる。

「……」

「そかそか、大変だなお前も」

「……」

「お、お前も見たの!？」

「……」

「わかってんなあ、やっぱりあそこは突き落としてこそだよな」

「……」

「言えてる、コアなお前は見所が違っねえ」

「何言ッテンノカワカンネ」

「ぴぎぎい」

「嫉妬ジャネエ、退屈ナンダヨ」

「ぴ……ぴう」

「テメエカ、……テメエモ隼人イタホウガイイダロ？」

「ぴう！」

「ソウユークッタ」

ここは世界樹広場。

美味いと評判の肉まん片手にベンチの上。

そんな俺の膝の上のはいつもと違って三人乗っかってんな。

一人はスラぼう、一人はゼロ。

で、も一人が『ザジ・レイニーデイ』。

よくわからんが懷かれた。

好いた惚れた腫れたとかの懷かれ方じゃなくって。

なんつーか父親に甘える的な？

この子魔物だし。

やっぱ魔物使いだからか？

好かれやすいのか、それとも無口なコイツの会話に付き合えるからか。

まともに会話できんのは俺が新田センセか、ザジのクラスの委員長くらいだからな。

寂しかったんじゃないね、多分だけど。

寮に住んでるわけだが、全国津々浦々、いろんなところから来てるもんさ。

この子は魔物だから、魔界……なのかね。
いろいろあるんでござんしょ。

「そいやあザジってどこ出身だ？」

「……」

「へえ、魔界の結構深いところ……貴族とか？」

「……」

「ってそりゃ結構な御令嬢じゃねえのか!？」

「……」

「じゃあねえちゃんと一緒に綺麗な格好とかしてたわけだ」

「……」

「照れなくつたってイイのにさ」

魔物使いのスキル持ちの俺。

そのせいかどのせいかはよくわからんが、魔物に対しての恐怖感みたいなのは無くなったな。
なんでだろ。

それはそれ、として見れるんだよな。

偏見とかこう……周りの意見に左右されず。
ま、魔物限定なんだけどさ。

だからエヴァとも友達になれたのかね？
あとザジとも。

それと魔物が一瞬で分かるようになったな。

こっ……… どれだけ隠そうとしても、肌で感じるみたいなの？

そう見れば1-Aってそーゆー巣窟なのかね。

桜咲はそうで、龍宮もそうだろ？

薄そうだからハーフか何かだと思うけどさ。

そう考えればやっぱりまほーつかいの一大拠点なんだな。
だから夜の警備とかもなくちゃいかん訳だ。

デカイもんにはなんでかわからんが絶対それを嫌うやつらがどんな
もんでも出てくるもんだ。

嫉妬か嫌悪か羨望か、そこいらはやっぱりよくわからん。

魔法先生には成っちゃったが、あんまふかーくに関わりすぎないつ
てのがいいのかもな。

「……」

「聞いてくれるってか？」

「……」

「ししっ、そんなのは十年早いぜ」

「……」

「イヤ魔界での年齢は知らんけどさ、とりあえずここでお前が酒大っぴらに飲めるようになったら、また相談にでも乗ってくれや」

「……」

「ん、さんきゅな」

「俺ガ聞イテヤロウカ？」

「悪人のゼロに言うのもなあ」

「ケケケ、御主人モ丸クナツタカラナ、俺モ影響受ケテンダヨ」

「丸いゼロはゼロらしくねえさ」

「ジャア今日ニデモ警備二連レテケ」

また人が切れるのを見ろという訳ですな。
ま、イイけどさ。

ヤンキー時分の喧嘩は随分ヌルイもんだっただってことかね。

友達はきつとき、種族も関係ねえよな。

「グルルルッ」

イヤはやまさかさ。

ドラゴン？ワイバーンと友達になるとは思ってたね。
人生ってのはホント訳わからん。

そんで俺の数十倍もありそうなコイツ相手にふつーに向かい合って
尚且つ冷静な気持ちで居られるんだから魔物使いスキル様々だな。
俺が図書館島入ったら、飛んで迎えに来てくれんだぜ。

「俺ト刻ンデ遊ブカ？」

「グルルルッ」

「……何テ言ッテンダ？」

「猫風情がアタイに逆らうなんて百年早いよ、だつてさ」

「ケケケ、トカゲガ生意気ナロキイテンジャネエゾ」

「グルルグルガルル」

「食べてあげよか子猫ちゃん？だとさ」

「今日ハ久々ニ竜ノステーキデモ食エルナア」

スラぼう、とりあえず逃げとこか。

と、ゼロを離して離脱離脱と。

「ぴうう」

そだな、相変わらず仲がイイねえ。

ここに通り出したのは五年くらい前、大学受験のための勉強でだが。まあ麻帆良はエスカレーター式で行けるけどさ、とりあえずはな。

そんな訳でスラぼうゼロ引き連れてここに来た訳だが。なんか呼ぶ声がしたんだよ。

エレベーター見つけて下まで降りてみると俺ビックリ。

ワイバーンが居ましたとさ。

いや、仲良しになれたってのがマジで信じらんね。

ま、テリーは魔王とか従えてた訳だしな。

そう考えりやまだまだか。

「ケケケ、トカゲガア」

そう言いつつ指先から鋭い爪を出しつつあるゼロ。

見る見るうちに顔の周りがふさふさな毛で覆われていきます。

W a o、何と見事なT A T E G A M I。

……俺のせいなんだよなあ。

スラぼうにあげてるバグの中の肉。

これをゼロが食ったのが全ての始まりだよな。

確か俺の中学の頃、エヴァに知り合ってアイツの家に遊びに行くようになった頃、ゼロはただの人形だったね。

けどなんかの拍子にゼロが食って、それが何度か重なって、いつの間にか人形からジョブチェンジしてたんだわ。
もうわけわからん。

エヴァが言うに特別な効能があるそうな。

元々魔物専用の肉で、アイツでも理解不能な特殊な術式が刻まれてんだって。

しかも出した時はただの美味しい肉、俺が手渡ししたり投げたりして食わせるとその妙な術式が刻まれ始めるんだと。

さすが魔物の餌、さすが燻製肉、さすが骨付き肉、さすが霜降り肉。
……肉の魔力は恐ろしいね、ホント。

だってさ魔王だって下手すりゃ引き寄せるんだもんな。

まあ魔物使いのせいだな……って俺のせいかな。

思わず笑っちゃったね、わかった時は。

すぐさまエヴァに殴られたが。

その後ギャグでエヴァに手渡しで骨付き肉上げたらマジでぶん殴られた。

母ちゃんの影を見たね、背後に。

さすがさいきょーのまほーつかい……ちょっと物理的に強いのは妙

な感じだが。

成程な、道理でエヴァによるエヴァのためのエヴァだけのゼロが、
アイツほっぽいて俺にくつつき周りだした訳だ。

端的に言えば『チャチャゼロがおきあがりこちらをむいている、な
かまにしますか?』ってとこだ。

そんなこんなで完全にゼロはエヴァから独立した個として存在する
ようになっ たんさ。

今では香坂隼人パーティーの二人目……笑えねえよ。

その上魔物としての能力を上書きされるというアレ。
意味わかんね。

俺はふつーに食っても人間のままなのにさ。

やっぱ魔物使いだからかね?

エヴァの见解によると『魔物専用の肉に合わせるため肉体が引きず
られていった』そうな。

現に目の前のワイバーンにいくら肉あげても、またーく変化の兆候
は見えんもん。

『因果律を捻じ曲げるふざけた魔法具』なんだってー。

なにそれ、怖いんですけど。

ゼロもそんな感じらしいし。

普段は人形っぽい身体そのままだけど、気合い入れれば肉が付くし。
ゼロが言うに『気』と『魔力』らしいが。

俺にはさばーり。

でもエヴァに何百年も付き従ってたんだろ？

それにDQでも人形みたいな魔物っているし、ゼロは魔物なんじゃねえのかって疑問はあったんだが。なんでもエヴァのせいなんだとさ。

俺の思った通り他の人形とは一線を画した存在なゼロだが、生憎持ち主だったエヴァの魔力が弱まってて。

そのせいで普通じゃないが『限りなくただの人形に近い存在』になつてたんだと。

それに肉の魔力が勝つたらしいな。

肉スゲエ。

「小手調べダゼ、『ギラ』!!」

そう言うときゼロの肉球出て来た手の平から、熱そうな閃光がボロボロと帯状に広がりワイバーンの『リリー』に直撃。

怯まずリリーは耳を塞ぎたくなるつか塞いじまうほどの咆哮。

まあドラゴン系は火と閃光に耐性あるのが基本だよな……じゃなくつて。

……なんでこうなつたんだ？

俺は限りなく一般人として居たかつたんだがな。

絶対俺の知ってる『魔法先生ネギま!』じゃねえな。

転生課のねーちゃんきつと間違えたんだらうね。

ゼロですか？

何になつたかつて、そりゃ簡単だろ。

テリーの『けもの系』なら恐らく最強の『キングレオ』。

見た目はまんまドーナッツ屋のライオンのな。
でも腕も脚も二本のままだよな。

……言わんとい。

三匹目 友人に年齢やその他もろもろはきつと関係ない（後書き）

恐らくこれが最大の御都合主義

この作品一番のチートアイテム『魔物の肉』であります

ゼロの所もちょっと無茶がある気がしますね

四匹目 幾ら大人に見えてもガキはガキ（前書き）

恋愛要素もそれなりに。

四匹目 幾ら大人に見えてもガキはガキ

はつきり言えば俺は鈍感ではないと思う。

人からの好意はある程度は理解できる、これは転生前の経験があるからね？

だから、さ。

「隼人先生、私作ってみたんですが……よろしければ食べていただけませんか？」

こーやって四時間目の授業が終わって。

待ってましたとばかりにお弁当箱を渡されてさ。

『あ、イイ人なんだな』なんてアホらしい考えを抱く事はない訳だ。

「「那波さんだいた〜ん」」

「おーっ隼人にいモテモテだねえ」

「うっひっひっひ、コレは面白いネタが来るかもよ」

「H A H A H A H A、楽しくなって来たあ！」

だーってる桜子、捻り潰すぞ。

くびり殺すぞ朝倉。

鼻エンピツしてやろうか、春日？

……なんてこと言えりゃあイイのに。

きよつ、教師はツライ……。

人の目が無かったらどいつもこいつも米神にゲンコツ当ててグリグリしてやんのにさあ。

女ってのは男に比べて早い段階で大人だわ。

で、早い段階で『恋』とかそんな感じのモノに興味を持ち出す訳だな。

本質的に恋愛に興味深々なんだろうね。

見ろよオイ、いつもならとつとと飯食いに行っちまう桜咲や長谷川までもが聞き耳立ててら。

……どうすりゃイいんだろうね。

いやまあさ、返す答えは決まってるだが、だが！
断る訳でござんすから、なあ。

那波……『那波千鶴』、か。

惚れられる理由なんざないとは、まあ思ってたんだがな。

可能性があると予測してたのは桜子……はないとして。

桜咲か龍宮かザジか、でもそれくらいなんだがな。

ま、魔物使いのスキルに基づいての『もしや』なんだが。

エヴァ？有り得んな。

天地が引っ繰り返しても向こうから俺に、なあんて事はありえねーよ。

そんな訳でだ、実際夏休み終わって二学期入って、授業以外でも連絡とったりしてたのはそいつくらいだし。

あとはエヴァとは遊んでたし、春日と朝倉と他のヤツからもたまにメールがPCに入ってたが……くらいだな。
レポートは手書きでもPCで作ってもどっちでもOKにしてっからな。

あと偶に連絡事項とかアドバイスするってことで俺のアドレス、みんな知ってるわけだ。

だが那波が目立ってそんなアクションを俺に起こしたなんてことは無かったな。

うむ、今の今まで皆無だ。

そりや会えばお話くらいはするけどさ。
わかんなかったねえ、マジで。

那波と夏休みなあ。

一回会ったか、公園かどっかで。
でも多分それくらいだが……後は二学期始まって学校で、だな。

「いかが……でしょうか？」

ムズかゆいな、正直。

後は周りの視線がうっとい。

イヤね、ぶっちゃければ可愛いと思うよ。

胸もデカイし、いつも見せる大人っぽさと色っぽさの中にどこか幼さが同居してるし。

容姿だって十分に花丸だな。

ま、だが。

「悪いな、俺は貰えねえや」

「ちよつ、隼人にいここは貰うべきじゃないの!？」

「そうよ!そんな風に那波さんの想いを無下にしないでいいじゃない!!」

桜子はまたイジメるとして神楽坂か。

そいやーコイツは高畑先生の事が好きなんだっけか?

応援も成程、したくなるわな。

……完全に俺悪者じゃねえか。

ヤイヤイヤイヤイ姦しいこつて。

「第一に!!」

デカイ声だしたからビクツと止まる。

とりあえずさ、黙らせるのが先決だしさ。

てかエヴァよ、そんなふーにニヤツいた眼でこつちを見んなよ。

「那波よ、お前いくつだ？」

「12歳です、ですが歳の差は……」

「ああうんまあそこはいい、別に年上好きになるなとは言わん。

がな、お前は12のガキだ……幾ら外見やら性格が大人ツぽかろうが俺から見れば10も年下のガキで、桜子とも鳴滝姉妹とも大して変わらん。

そんな10も下のを好きになるような趣味嗜好は、残念ながら今の俺には無い訳だ」

「……はい」

「加えて今俺には惚れた女が居る……コレはマジにな。

だから諦めろ、俺が今のお前になびく事は万に一つも有り得ねえからさ」

俯いてるが……言いすぎたか？

イヤイヤここはビシッとはつきり言っとかねえとな。
心を鬼に、中途半端が一番ダメだし。

だが、な。

全部諦めろとは言いきれねえや。
なんでだろ？

好きなあの人にはコクってないし、諦める以前の問題だし。
俺にそんな経験ないはずなんだがなあ。

……ま、いつか。

「それでももしお前が俺の事を諦められないってんだったら5年後にもう一回来い。」

年月经て、恋も友情もいろんなことを経験して、もっと本当の意味で大人になって来い。

その時俺に恋人が居るのか奥さんが居るのかは知らんが、そんなのほっぽり出してお前のところに行きたくなるくらいに女を磨け。

「いい女になって俺を惚れさせてみな」

……静かになっちまった。
どーでもいいか。

クサイ台詞だったかねえ。

とりあえず今日の昼飯考えんな。
ラーメンでも食べに行くかね。

「アホダナ」

「何がだよ」

「ワカンネエヤツニハワカンネエヨ」

意味わからん。

「ぴうう」

だよなあ、スラぼう。

……バカなのか、アイツは？

告白に近い行為を断るのはイイ。

隼人が惚れた女がいるというのは私も知っている。

『拒絶する』というのはあの性格だ、恐らくそうなるだろうとは思っていた。

なんだかんだいって義理堅く一本筋の通った、侠気あるヤツだ。

知る限りの経験から照らし合わせると、一度惚れた相手には惚れぬくようなタイプ。

……那波如きでは、いや中学生如きにアレを落とすことは出来ないだろうとは思っていたしな。

だがな……あの断り方では駄目だろう。

理解していない、まったく以て女というものを。

そう好きな男に言われて、『はいそうですか』とおめおめ引き下がる女がいるはずがないだろうが！！

ホレ、そのうち火種が出てくるぞ。

「……隼人にい……かつこいー」

皮肉だなあ、隼人。

お前の妹分が叩き込んだぞ。

火に油かガソリンか。

飢えた狼に肥え太った羊か、正義君に悪の魔法使い……か。

まあその辺りはどれでも構わんが、起きるべくして起きる反応だ。

「何アレ何コレ！ お父さん以外にこの裕奈ちゃんがキュンとしちやったよー！」

「あははははっ、春日……顔赤いよ？」

「そんなのは朝倉もだってーの。」

「しかしバカだねえー香坂先生も」

「大人だ……」

「大人の男だ……」

「かつこえかったなー香坂センセ」

「わっ、私には高畑先生が！？」

『「いい女になつて俺を惚れさせてみる」、か。
素面でそんなこと吐ける貴様はすごいよ。』

ドラマか小説かのセリフを引用したんだとは思うがな。

ククク、そうやって偶に突拍子もないことを仕出かす。
昔からその辺りは変わらん、隼人。

普段は『転生している』からか、少々ジジ臭いところがある普通の男だというに。

あんな所が偶に顔を出す。

だからこそ見ていて飽きない。

だからこそ長らく友人を続けてきてやっているのだ。

喜びありがたがれよ、隼人。

お前はこの『闇の福音』が対等な友として認めてやっているのだからな。

フツ、アイツの持つ『魔物使い』としての本質から、私も影響を受けているのかもしれない。

『個を個として見られる』というのはここまで心地よいことだとは思わなんだ。

だからこそこうも丸く……なってしまったのか。

嫌な、気分ではないさ。

友のことを考え、一喜一憂するというのもな。

まあだが……。

「千鶴さん、……その……」

「ええあやか、惚れ直しちゃったわ」

「……ですわね、貴女の性格からすると」

「ふふふっ……『ガキ』……『たかだか12のガキ』……」

アレは知らんぞ、隼人。

あの眼は完全に『恋に目覚めた女の眼』だ。

あの眼にはガキも大人もババアも関係ない。

ただ一心に惚れた相手のため、己を高めていくだろう。

厄介だぞ、実に厄介だ。

それにお前の影響はあの女だけに及んだようではない。

人の考えなど簡単に変わる。

ただ少し何かの影響で意識してしまったら、それ以上の男が現れるか貴様に失望するまで燃え上がり続けるだろう。

クククツ、隼人。

貴様が落とすのが先か、落とされるのが先か。

アイツもいることだしな。

刺客は一人ではなく、皆が前途ある若者どもだ。

貴様は右往左往するだろうな。

そんな様子を見ながら私は楽しませてもらうとするよ。

まあ泣きついて来たら、相談くらいには乗ってやろうか？

相応の対価は頂くがな。

……ハア、なんか今日は倍疲れちゃったわ。

那波な、那波……もったんね。

大人びてたってガキだかなあ。

これから俺好みに育てるなんて……っつと。

冗談だぜマイハニー。

付き合ってなんかないけどさ。

まああれだけハッキリ言っただけだし。

とりあえず何とかなるだろ。

「ケケケ、楽シクナルゼ」

「ぴうぴう」

「イヤイヤ、ゼロの期待してるようなことはねーよ」

「ワカンネエゼ？」

わかるっての。

それよか帰って飯の準備しなくちゃいけねえんだよな。

コンビニで買って帰ろっかな……。

イヤやっぱ俺にはもったいないねえ。

でも……なんか何もしたくねえなあ。

やっぱ肉まん買って帰ってバイクでも吹かそっかね？

『Z？』、ガキの時分から転生前も憧れてたんだが、結局大人になっても手が出なかつたんだよ。

だが向こうとこつちじゃあ違う！

夜の警備のおかげで特別手当は出るし。

金掛けまくって旧車の仲間入りしてるコイツをカスタムしまくったからな。

休みはかつ飛ばすか、磨いたりするのも楽しみの一つだな。

……わかる？

あのマンガ読んでさ、子供心刺激されまくったわけだ。

こつちでも向こうでも高校の時までは『ゼファー1100』だったからな、勿論『ファイヤーボール』の。

いろいろあつた時は遠くまで行っちゃまうわけよ。

エヴァも呪いがなけりゃダンDEMしてでも連れてってやんのにさ、残念だわ。

「かつ飛ばそうぜ、スラぼうにゼロよう」

「ケケケ、イイジャネエカ」

「だろだろ？」

「ぴぴいう！」

「テメエモ乗り気ダナ！」

「ぴう〜」

俺、風になります……。

つてことだとつとと帰って準備すつか。

学校にも乗ってくる時もあるんだがな……いやな顔する人がいるわけね。

イヤイヤ別に禁止されてるわけじゃねーんだけどな。
いろいろあるんだよ、俺にもよ。

自然と足取りも軽くなっちまうぜ。

さってはって手早くいきましょ。

ゼロ用のライダースーツとかもあるし、着せてやらんといかんし。

スラぼう？スラぼう……は……っておろ？

……教員寮の俺の部屋、電気ついてね？

「泥棒入ラレテヤガルッ！ ダセエｗｗｗｗ！！」

「ほっとけチキショウ」

盗られる物なんざありやしねえよな？

通帳があつたか。

でも特殊な講座とかだからそがいまほーとやらがあらかじめかかってるはずだし。

魔法使いにでも侵入されたか？

いやでも管理人は強い人らしいし。

わざわざ俺の部屋狙う理由がないわな。

大丈夫か、俺はもんすたーますたー香坂隼人だし！！

……自分で言つて寂しくなつて来たわ。

「あ、すみません……俺の部屋……」

「いやゝ隅に置けないねえ、アンタも。

あんなかわいい子彼女にしちゃうなんてさ！！」

「……かわいい子？」

「あたしがおばさんだからかね、美人の彼女さんだよ。

海に二人で行っちゃつて……もう！結婚式には呼んでおくれよ！

」！

……意味わからん。

俺と女が海で並んで立った写真な。
男とは行ったが女とは無いな。

違うぜ！俺は童貞じゃ……童貞じゃ……アレ？

こつちじゃ確かにさ、高校の時引っかけたので卒業してるわけだが。

向こうでは……向こうでも、経験有ったはず……。

あつたっけ？

大学の時に……こう……アレ？

……とりあえず置いとくか。

ともかく今は目の前の事だわな。

知ってる女なあ。

あの人か！？

……イヤイヤ無いな。

京都に居るはずだし。

「あらあら、お帰りなさい、隼人先生」

「……は？」

「ご飯作ってみたんですけどお口に合うか……部屋も掃除させていた
ただいとききました。」

いくら独り暮らしとはいえダメですよ、あそこまで散らかしては」

「あ……いや……」

「……あら、こう言った方が良かったですか？」

「ご飯にします、お風呂にします、それとも私にします？」

……なんでだ？

なんで那波がいんだ？

が、言うことは一つ。

「帰れ、とりあえず帰れ、可及的速やかに帰れ。

嫁入り前の女が付きあってもねえ男の家に来るな」

「あらあら」

「あらあらじゃねえ、もっとちゃんと人の気持ちも考えろ」

とりあえず追い出して。

……文句は無しか、意外に聞きわけのイイヤツだな。

ま、今回おかしい事やってんのはアイツだし。

ハア、一応明日……は土曜だから週明けにでも礼を言わんなあ。

もー今日はとつとと食って海まで行こう。

うん、そう決めた。

四匹目 幾ら大人に見えてもガキはガキ（後書き）

最終的にどうもっていかうか。

五匹目 好きな人の前では声がつい大きくなるのは仕方ないよな？（前書き）

隼人の好きな人登場

五匹目 好きな人の前では声がつい大きくなるのは仕方ないよな？

例えば目の前に美人な女が居るとしよう。

それが例えば好みなら、男はきつとモーションを掛ける筈だ。

しかも惚れているなら尚更それは苛烈になるのが普通だよな？

そんな訳で健全な俺にはちゃんと好きな人が居る。

「こんばんわ、今日はよろしくお願いしますよシスターシャーケティー！」

「いえ、こちらこそよろしくお願いします」

……ヤベエ。

相変わらず超美人だ。

しかももうちよつと表情は硬いかもしれんけど笑い掛けてくれて……。

はあ……脳髓がとろけちまいそうだわ。

服装はいつも道理。

さすがに夜の警備にスーツ着てて汚す訳にいかんからな。

黒いタンクトップが上半身を覆って、漆黒のライダージャケットをその上に。

下に掃くのは闇色のレザーパンツにゴツゴツしいブーツ。

……ちよつとイカつかったか？

変な印象与えてなけりゃイイけどさ。

口も臭くは無いはずだな。

軽く飯食って三回歯磨きして洗口液で三回口ゆすいできたし。
スラばうにもゼロにも確認してもらったからな。

「そう言えばこうやって二人で警備というのは初めてかもしれませ
んね」

話しかけられちった。

どう返すどう返すどう返す!?

悪い印象を与えず尚且つ相手に気さくな人だと思わせれるように…
…。

ってイヤイヤイヤ今どんなギャグが浮かぶんだっての。

浮かばねえよ!ぱっぱらぱーだよ!!

もうアレだな。

俺の脳みその機能の八割以上がシスターシャークテイの麗しい姿を
『視る』ためと鈴のような可憐な声を『聴く』ために神経使ってる
からだな。

ってそうじゃなくて!なくて!

とりあえずとつとと返事を!!

「そうですね」

……そうですねってなんだよ!!

違っただろそこは!違っただよそれは!!

何アレ!絶対陰険か卑屈かその辺の人間に見られちまうよ!

オラ俺の頭の上の二人！

なんか言ってこの場を和ませてくれ！！

「……ケケケ」

なんか言えよテメエ！！

なんでケケケ笑いだけ！？

あるでしょうよ！もつと！いつもみたいに！！

口からぼんぼん軽々言葉を出してくれたらイイだけなのに！！！！

「クスクス」

笑ってくださった……。

口元に手を当てて上品に笑ってくださった！！

なんでかわからんがゼロ！お前はよくやった！！

しかしな……ウムウム。

……眩しすぎて直視できん……。

だがだががしかし！網膜にこの顔を刻みこまねば！！

きつ、気合いと度胸を胸に逸らした顔を……！

「随分と出会った当初とは印象が変わってしまいましたね」

「ア……アハハハハッ！？ そりゃもう俺だって『香坂先生』ですからね！」

「クスクス……、そう言えばそうでした」

ここは天国だな、間違いない。
だって今俺の前に天使が居るんだぜ？

もう、なあ……アレだ。

昔から考えれば到達なんて出来ないと思ってたところだからな。
もう何してんのかわかんね。

ぼんやり視界に映るシスターシャークティの桃色の唇が動いてる。
そっか、なんか喋ってたんだ。

返事しねえと……って俺の唇も動いてないか？

やば……自分で言ってる何言ってるのかわかんねーってどうよ、俺。

久々だから刺激が強いぜ。

さすがシスターシャークティ、スゲー魅力だ。

他の女相手だったらこうはならんのにさ。

やっぱ……『惚れてるから』だよ。

「ぴききー」

あ、スラぼう？どしたよ？

「……来てます」

「何がっすか？」

「侵入者二決マッテンダロウガ」

間髪入れずに捻じ込んでこなくったってイイのにさ。

「んじゃスラぼう、頼めるか？」

「ぴつきー！」

ウハハハ、気合十分だな。

だったら大丈夫大丈夫……って視線を感じるんですけど。

シスターシャークテイ？

「香坂先生、貴方はそのスラぼうくんに戦わせるつもりなのですか？

自分よりも何倍も大きな相手に」

「へ？ いや……まあ、俺魔物使いなんで……」

「そうですか……そうやって貴方は自身は安全なところに隠れる訳ですね」

……はい？

「それが悪いとは言いませんが……昔の貴方はもっと違いました。

あの頃の貴方は間違っていたかもしれないませんが、もっと人としてあたたかかった」

「へっ？ちよっ、一人でどこ！？」

「私が全てやりますので、応援を読んでください」

ちよつ待つて……あのさっきの俺に注がれた目線は……。

「軽蔑ガ籠ッテタナ」

「ぴうう」

……。

「死ンダカ？」

「……ヴァ……エ……エ……ア」

「……んあ？……んああ……くう……」

「……先生……まり……ターは……ので」

「……エヴァ……おお……ヴ……」

「……誰だ……私が寝ている、というのに」

「……えもおおおん！エヴァえもおおおおん！！」

「ぬおあ！？……誰だ！侵入者！？……隼人！？」

「エヴァえもおおおオオオオオオん！！！！」

「何してる！？やめんか！泣くな！抱きつくな！ 貴様の泣き顔は
気色悪いんだ！！」

「おどろわばぜうがあううううあああかあああ！！」

「やめろと……言っとなるだろうがアアアア！！」

■ ■ ■

「落ち着いたか……ったく、貴様のせいで見る！私の服が鼻水まみ
れだ！！」

「おう、すまねえ」

「……ハア、茶々丸、ティッシュを箱でくれてやれ」

「イエス、マスター」

「あでいがど」

「……とりあえず、どんな状況だ？」

私をこんな夜中に叩き起こしてくれて……。
ふざけているな、まったくもって……。あふっ。

「おんどるふんどらひんどらばああああっ!!」

「貴様は黙ってろ」

目の前の机から乗り出すような隼人の顔はとりあえず蹴り飛ばしておいて。

……情けない、いつもの強面がグシャグシャではないか。

「御主人容赦ネーゼ」

黙ってるボケ人形。

そんな事はイイからとっとと状況を説明しろ。

「ぴう!ぴぴぴーぴうう!ぴぎぎぴいいうぎぴぎっ!!」

成程な。

要はスラぼうを前面に出し戦おうとしない隼人にあのシスターが呆れた訳か。
自業自得だ。

しかしアイツの昔を知っているあのシスターだからこそ出た言葉。
まあ知らなかったら、言わないだろう。

『魔物使い』である隼人がとった戦い方は普通なのだからな。

……が、端的に言おう。

「……………くだらん」

なんで私がそんなことのために時間を割かねばならん。

予想は付く。

大方私に話を聞いてくれとでも言いに来たのだろう？

……スラぼうかチャチャゼロが。

「帰ッテモ泣イテヤガッテ寝レネエンドヨ」

「ぴぎぎ」

寝る……………か。

元人形のお前が言うようになったものだ。

もう『キングレオ』だったか？

ライオンか何かの魔物としての因子をその身に宿しているからな、完全に。

人形ではなくなってしまったのだな。

喜ぶべきか、何と言ったらイイか。

怒るべきか？歴戦の勇士である従者を盗られてしまったのだから。

だがまあそれは何度も何度も繰り返した論争だ。

もう今更蒸し返すつもりはない。

代わりに隼人という『ホンモノの友人』を連れて来たのだ。

器の大きい私として、許してやるとしようじゃないか。

それよりも今は目の前のコイツだ。
泣き止んではいるが『泣き』に入っている……適当に対応してやらねば帰りそうにない……。
ハア、友とは面倒な物だな。

「で、どうするんだ」

「どうするつつたってさあ」

「自分で決めろ、自分でな……甘えるなよ？」

あのシスターの言ったように昔でも思い出せばいいだろう」

昔、か。

そう思えば隼人の人生はあのシスターによって変えられたようなものだからな。

クククツ昔か。

思えば教師になったのは驚きだったな。

いやはや本当に『不良が教師になる』を上演してくれるとは思わなかったさ。

隼人が中学三年生の頃から高校三年生の頃まで、麻帆良に通っていたならば一度は耳にする集団があった。

それがコイツが総長を務めていた暴走族『蜿墮亞蘭弩』。

何度聞いてもふざけた名前だ。

どこからそんなややこしげな画数の多い漢字を持ってきて当て字にするのだろっな。

隼人が言うに『カッコイイから』らしいが、私にはよくわからん。

今は髪の毛をオールバックに纏めているが昔は気合の入ったリーゼントだったさ。

ダボダボのズボンを履き、胸にはサラシ、纏うは特攻服。恐らくオールドタイプの不良だった。

まあいろいろ抗争はあったらしいぞ。

隼人と以下数名で結成していた少数のグループだったからな、最初は。

『古い』など他のグループからよく馬鹿にされていたか。

その度に細く剃った眉を歪めて、デカイ排気音響き渡らせて殴り込みに行っていたさ。

……懐かしいな。

ちょうど隼人と会って一、二年経ったくらいの頃だったか。

あの頃は夜にも静寂などが訪れず、喧騒が溢れかえっていた。

麻帆良の不良たちの群雄割拠の時代だったんだろうよ。

中でも隼人のグループは凄まじかったな。

喧嘩のたびに重傷者が出るのは当たり前、乗ったバイクで人を踏みつけたり、学校の備品も壊すわ壊す。

逆らって来るのは不良も教師も、時に出張って来た魔法先生すら関係なしに反抗する。

校舎に向けて全速力のバイクで突っ込むチキンランも良くやってい

たな。

そういえばジジイに向かって唾吐きかけて、叩き潰されていた事もあったか？

ともかくアイツらは他のグループとは一線を画した存在だった。

まあ私に言わせればまだまだだが、見ていて気分のイイものではあったさ。

見境無しではなく、関係ない者には手を出さない姿勢も好感が持てた。

年下の幼馴染の椎名とその友人となった明石もよくアイツのバイクの後ろに乗っかっていたのを見た覚えもある。

私も乗った事があるが、バイクで風を切るというのも中々に気分のイイものだからな。

まあやがては不良どもの頂点に立った隼人。

どつかを凄まじい速さで駆け抜けたから『音速野郎』とか真紅の髪から『麻帆良の紅鬼』とか、チャチャゼロを頭に載せているから『悪魔人形』とか異名まで付けられていたのさ。

今ですら不良たちからは伝説的扱いを受けている。

その当時勤めていた教師からは今だ煙たがられているようだしな。バイク通勤した時など、目線がスゴイぞ。

ま、結局アイツらのグループは一代限りで潰したみたいだが、その原因がああなのシスターだ。

確かアイツが高校三年生の春、麻帆良大学に留学生がやって来た。

魔法生徒でもあり、シスターを志す大学一年生『シャークティ・ヴ
エンド』。

あの女はあろうことか教師でも腫れもの扱いし、一部の人間を除き
接触を出来るだけ避けようとする隼人たちのグループの溜まり場に
単身乗り込んでいった。

後はよくは知らんが、二ヶ月か三ヶ月経った頃にはグループは解散
されていた。

で、あのシスターに惚れたこいつが出来あがった訳だ。

何百年と生きているが人生とはわからないものだなあ。

「……強くなるぜ」

「ほう、これまで修行の一つもしなかった貴様がか？」

「ああ、惚れた女にあそこまで言われて引き下がるってのは俺じゃ
ねえ。

スラぼう無し」「……ぴう……」 じゃなくって一緒に戦えるくらい
にはならねえとな」

「そうか……では頑張ってくれ」

「イヤイヤイヤ、ちょっと待ってくれよ!!」

「……なんだ？」

「ほら……なッ！ わかるだろ、長い付き合いなんだし」

「クククッ、ならばわかるだろう？ 何を対価に差し出す」

「今度遊んでやるよ」

「ケーッケケケケケ！ソリヤイイ対価ダゼ！！」

「ぴぎぴうぎー！」

……右手に魔力だ。

私の今持てるだけ、ありったけの魔力を集めて収束してエエエエエッ！！

貴様の！隼人の！シャクに障る顔面を打ち砕く！！

「ふっざけとんのか貴様はああああアアアアッッ！！！！」

五匹目 好きな人の前では声がつい大きくなるのは仕方ないよな？（後書き）

彼、かなりのやんちゃをしてた訳ですね

六匹目 その場のノリほど怖いもんは無い（前書き）

いつの間にかお気に入り登録百件突破。
本当にありがとうございます。

六匹目 その場のノリほど怖いもんは無い

……スゲ。

これがだいまほーってヤツか。

「ふふん、見直しただろう?」

「いや、基準がいまいちわからんからな」

「おつ、お前と言うヤツは……」

まあスゲエってのはわかるけどさ。

ボトルシップの親戚かと思って触ってみればギンといつの間にか青い空の下。

夜だったはずなのによ。

なんでもエヴァが昔造った『別荘』なんだと。

一日この場で過ごさんと抜けない代わりに、外での一時間とここでの一日が同じ時間らしいね。

うらしま太郎の逆バージョンらしいわ。

しっかしこれぞ『魔法』って感じだわな。

……いや待てよ、何か段々非常識が日常になってる気がするんだが。

イヤッ!ここはそんな事は置いておけ!!

何よりシスターシャークティとお付き合いしてあわよくば結婚するために!!

「さて、何か誓うのはイイがとりあえずここに連れて来てやったんだ。

対価として貴様の血を寄越せ」

「……やさしくしてね？」

「貴様がやるとホラーだな」

そうも言わなくつてもイイのにさ。
てか血とか美味しいのかね？

こんなの見ると『吸血鬼だなあ』と思えちまうよ。

しっかしなんかの時に言つてたような気がするようなしないような。
よくわかんねーけど血の中の『魔力』を吸うんだろ？
俺のってそんなにあるのかねえ。

前にも飲まれた事はあるが、曰く『単純に美味しい』んだと。
魔力とかその辺はよくわかんねえけどさ。
これも魔物使いの特性なのかね？

「……けふつ、そこそこだな」

「そいつはどーも」

「で、隼人は一体どうしたいんだ？」

「とりあえずさっき言った感じなんだが」

スラぼうと並んで戦える感じになりたいんだよ。

そーすりや俺も昔の俺みたいになれんじゃん。

てかさ、俺もやった事はあるんだぜ。

でもさあ……勝てる訳ねえじゃん！

魔物ですよあちらさんは！

鬼で狐で烏でよーわからん悪魔やらですよー！！

人間相手なら何とかなるかと思えば何ともならんし！

『気』？『魔力』？んなもん俺は知らねーよ！！

なんで明らかに俺よりひよろっちいやツが軽々俺の事ぶん殴って吹き飛ばせるわけ！？

なんで殴ったら石とかが砕けちっちゃまうわけ！？

なんで日本刀でズツパズツパ鉄とかバターみたいに斬っちゃまうわけ！？

もうわけわかんね！

俺の常識どこ行っただ！！

物理法則カムバアアック！！

「ム、それは理解したが……気になった、というか前々から気になってたんだが。」

スラぼうは強いのか？ そうは見えないが」

へっ？あつ、あゝスラぼうね。

……知らね。

全力とか怖くてやらせてねーし。

「隼人、貴様は一度死に転生してスラぼうと魔物使いとしてのスキルと、そのバッグを得たと言っていたな」

「まあそうだけどさ」

転生した事はエヴァには話してる。

後知ってるのはスラぼうは当たり前としてゼロ。

絡操はなんか取りに行ってるから聞こえてなかったら、三人だな。

『話した』と言うより『吐かされた』という表現があっているとは思うけどさ。

ゼロが魔物に変わってた時だな。

グワングワン頭揺さぶられながら、結局ゼロっちまったってわけだ。

……しっかしスラぼうの強さか。

確かに試してみた事ねーな。

さてはて、どうしたもんか……。

「ぴう？」

「ケケケ、ヤツテミリヤイイジャネエカ」

「ああ、私も構わんぞ」

「ヘイヘイりょーかい」

「つたく。」

怖いんだからな、マジで。

どーなっても俺は責任取らねーかな。

「スラぼう……全開でやったれ！『グランドクロス』……！」

「ぴうう……ぴiiiiiiiiii……！」

……アレ？なんかスラぼう光ってるんですけど？

なんかスゲー風がギュインギュインスラぼうの周りをまわってるんですけど？

まほーなんてもんに疎い俺でも何かヤバ気な感じがするんですけど？

はははははは。

さすがスラぼう、ちょーっと魔力が強いかもな。

な、エヴァ……ってマジやめて！

顔真つ青じゃん……！！

「ちよつ、待て！隼人……なんだこの魔力は……！！……？」

イヤ違っ！魔力でも気でも無い……『感卦の力』が近いがそれとも違っ……！！

なんだかよくわからんが凄まじくデカくて尊く神聖な気配がするんだが……！！……！！」

「ヒヤッハアアア！サスガスラぼうダゼ……！！」

「ゆーてる場合か、このボケ人形……！！」

……どーすんの？

「呆けている場合か隼人……！！」

貴様の魔物だろうが！ とりあえず狙いを私たちのいない上に定めさせろ！！」

「おつ、オウツ！ 上に向かってぶちかませ！！」

「ぴぎいいいいっ！！！！」

カツと辺りが光に包まれて。

そこからどーしたかはよく覚えてねえけど気が付いたらエヴァの家の外だったな。

みんながみんな荒い息吐きながら、地面に寝そべってたさ。

後さ、その日エヴァの家で見たの朝のニュースで、月に巨大な十字の紋様が刻まれたって報道があったけどさ、ウチのスラばうにはなんの関係もねーよな？

ま、俺個人の意見としては興奮したシスターシャークティが俺に話

しかけてくれたんでスゲー嬉しかったんだっただけだよ。

結局、学園長から小言とかも無しでよかったわな。

エヴァが言うにスラぼうから放たれた『グランドクロス』の速度があまりにも迅くて、周囲に痕跡すら残さないほどにエネルギーが圧縮されてたんじゃねーのかって。

ほんの一瞬だけ学園に張ってるらしい、『結界』みたいなのが途切れたから寝てたところを叩き起こされたって光さんが愚痴ってたけどさ。

ま、エヴァの家の屋根はしっかり十字に穴が空いてたからさ、結局徹夜で塞いだんだけどな。

『別荘』とやらもメンテナンスしねーと使えなくなったらしいし。

……俺のせいじゃねーよな？

「……正直甘く見ていた。」

まさかこれ程とは、……一応聞くがアレが最強か？」

「イヤ……確かダメージ値がそれより高い『ビッグバン』ってのを覚えてるな」

「……『ビッグバン』……宇宙創造の……隼人、わかっているとは思うが」

「わかってるわかってる、使わねーよ」

「ケケケ、スラぼう……『ビッグバン』ヤッテミネエカ？」

「ぴい？」

「ボケ人形があああつ！！」

「ケケケケケケ」

あらま、追いかけてっ。

でもさあ普通の女の子になってるエヴァじゃ『キングレオ』の力宿したゼロは捕まえられんだろ。
ほれ、からかわれてっし。

「御苦労ダゼ」

「いつかつ……はあ、はあっ、バラバラに、してやるっ！」

「マスター、冷たい麦茶です」

「ああ、よくやった」

「皆さんもどうぞ」

「さんきゅ」

……くうつ、今日は熱いわけじゃねえけど一気に飲むならこれだろ。後はビールかね。帰ったら晩酌でもすつか。

「後さ、エヴァ」

「……なんだ？頭が痛くなりそうで聞きたくないんだが」

「全部の魔力を一気にに放出する最強の呪文『マダンテ』ってのもあるんだわ……」

「絶対に使わせるな」

了解つと。

怖くて言えねえよ。

『グランドクロス』でアレだからな。

下手すりゃ地球崩壊するんじゃない？

ははははは……笑えねえってのがここまで辛いとは思ってもみなかったねえ。

……しかし『マダンテ』ってどっちだろうな？
テリーだったら全魔力放出による防御力無視の、属性無し魔法だったはずなんだが。

漫画の『ロトの紋章』だっけ？
アレだったら『極大五芒星』つつうメラ系・ギラ系・ヒヤド系・イ

オ系・バギ系の魔法をフルパワーで合体させるもんなんだよな。確かそれでテリーだったら、それらの系統の呪文すべて習得しといて、加えて一定のステータスに達したら覚えれるつつオマージュ的な事もしてたし。

そう考えりゃテリーだったら『グランドクロス』はバギ系統の呪文なんだよな。

でも？とかになると関係ない、ただゾンビ系の敵に効果絶大な呪文になってるしさ。

で、元ネタの『ダイ大』の『グランドクルス』は『気』の全力解放。

どんなもんなんだろ？

……試すか？

いやでもなあ……うむう……。

DQの呪文もいろいろ最初とは変わってきてるからな。

テリーとか普通だったら大凡の固定ダメージだったが、ダイ大の大魔王『バーン』曰く『魔力の強さによって呪文の威力は変わる』らしいし。

ただの『バギ』でもスゲー事になりそうだな。

ゼロがいつの間にも覚えてた『ギラ』は大丈夫なだけどさ。

それと『MP』はこっちのエヴァが言う『魔力』とどう違うんだ？

『かしこさ』ってのはどう関係してんだ？

呪文を放つ速度とか？呪文の威力とか？呪文を放つのに必要な魔力量とか？

ゲームだったら後ろ二つはほぼ一定で、『かしこさ』は呪文習得に必要な値だったはずだが。

あと『マホトーン』で呪文を封じられるのは口がきけなくなるからだがさ、こっちには『無詠唱』ってのがあるんだろ。
一応詠唱が出来なくなるらしいから呪文が使えないってことになってるがさ、そこんとこどうよ？

……ああ、わからん！！

とりあえずアレだ、やってみりゃいいんだ！！

「スラぼうさ、あつこに木があるだろ」

「ぴう」

「そこに向けて『バギ』とか出来るか？」

「オイッ！何をしているんだ貴様は！？」

「大丈夫だつてさ……あ、魔力は最小で頼むぜ」

「ぴううぴい！」

スラぼうがそう言った瞬間ズバズバツと木が刻まれた。

こう、ほぼスラぼうの声とタイムラグ無しに、指定した木とその後ろにある数本がズズンと重めな音を鳴らして倒れていったわ。

……かまいたち出すんだつたよな？真空の刃的な？

桜咲がやってんの見た事あるがあんなに速いもんだつたのかね？

そこんとこどーよ。

「……どんな錬度だ」

「そんなにスゲーのか？」

「自分が放つのとタイムラグも無しに目標に一撃を与えられるというのがどれだけ恐ろしいモノかわかっているのか？」

しかも魔力の隠蔽がハンパないぞ。

この私ですら発動の瞬間ほんの僅かな、それこそ私が撃つ『魔法の射手』一矢分より更に少ない魔力がコイツに集まったことくらいしか確認できなかったんだ。

それに……見る、この断面を」

うはーツルツル。

立ったら滑ってこけるんじゃない？

「一流の剣士ではここまでの断面を形成できん。

もしこれが出るとしたら、私が知る限りの最強の剣士であるあの女くらいのモノだ」

あの人か……スゲー強いんだっけ。
ちーっと苦手なんだよな。

ま、俺のせいなんだが……気が滅入る。

しかしエヴァの一番弱い魔法に使う魔力よりずっと少ない……か。
エヴァの魔力がどれくらいかわかんねーんだが。

吸血鬼のモンスターもいた気がするがどれくらいの魔力かは覚えてねーな。

ま、とりあえずアレだ。

「んじゃ全開で『バギ』やってくれつか？」

「待て待て待て待て！　どれほどかわからんのに貴様は！！」

「GOダゼ！」

「チャチャゼロオオオオオツ！！！！」

「ぴういいいつ！」

今度もまたタイムラグ無しに前方の木が切り開かれちゃったよ。

あ、でも撃った後スラぼうが俺の方に跳びかかってきてくれたんだが、その時若干風を纏う的な事態になってたな。

威力？

ん、スゲーよ。

だって前にあった木々が扇形にドンツと刻まれて倒されて、切り株がいつぱいできてんだもん。

ちよつと先、うんイヤイヤちよつと先なんだが。

10mか20mか30mか40mか50mか、その辺はわかんねーけどその先くらいまで木が無いのさ。

イヤイヤその先からはちゃんとう木が生えてるんだがな。
……もうわけわかめ。

後でわかった事なんだがそれでスラぼうの消費MPはテリーと同様
たった『2』だったんだよ。
なんでわかったかって？

後どれくらい撃てるって俺がスラぼうに聞いたから。

そしたらさ、『五百回』だってさ。
んで『その前のは五十回』だって。

礼儀正しいイイ子だろ？

六匹目 その場のノリほど怖いもんは無い（後書き）

この作品最強のモノの名はこのスラぼうだぁ！というところ。

コレは変わりません。

七匹目 いろいろやってみて帰結したのがコレって……（前書き）

お気に入り二百件突破……ホントありがとうございます。

七匹目 いろいろやってみて帰結したのがコレって……

『スラぼうはヤバい』と言うところがあった最近。

まあちゃんと俺が言えば弱めの威力でやってくれるんだけどな。

一発一発の最弱呪文が、『2』とか『3』とか『5』とかで放てるもんがせんめつまほーとかには及ばないが上級魔法に匹敵する威力があるんだと。

……まあ同じように『ギラ系』が使えるゼロは、それなりの威力だったんだが……。

やっぱスラぼうがパネエってことだわ。

だって『メラ』でさ、ドドドドッってスラぼうの思うがままに操れてちっさいのに木でも岩でも貫通して、貫通したもんは例外なく燃えだすんだぜ？

だって『ギラ』でさ、ボボボボッって一瞬で目の前が火の海になるんだぜ？

だって『ヒヤド』でさ、スッコーンって鋼鉄の塊にも突き刺さってあつーまにかっちこっちに氷結しちまうんだぜ？

だって『イオ』でさ、バツコーンって爆発したかと思えば地面にすげーだけクレーターが出来てんだぜ？

もう嫌、イヤイヤ割とマジで。

で、まあマダンテは『極大五芒星』の方だったみたいだな。

そうじゃなかったとしても『全系統覚えて習得した』みたいな認識がされてるようだわ。

でねーと『メラ系』は『ビッグバン』からの派生だとしてもそれ以外が説明つかんもんよ。

……とまで考えが至ればさ。

やっぱ思っちゃうわけよ。

『合体魔法できるんじゃないね？』ってさ。

『閃熱大炎メゾラゴン』とかさ、『氷刃嵐舞マヒアロス』とかさ。
そして何より『メドロア』。

『正と負』、つまり『メラ系』と『ヒヤド系』の呪文を極め、熱エネルギーを操作する魔法力をスパークさせることで、触れるもの全てを消滅させる効果を持つエネルギーに変え放つ呪文。

『大魔導士マトリフ』が開発しその弟子である『大魔導士ポップ』の代名詞ともなった『メラ系』と『ヒヤド系』呪文双方の頂点に位置する極大呪文。

『神の金属』と称される『オリハルコン』も、この攻撃に耐えることは不可能ってアレ。

もうね、最初見た時はマジで燃えたよ。

こうさ、弓を引くみたいにさ。

鳥肌立ちまくったのを覚えてるわ。

カッコよすぎるだろ、あの人は。

てかあの物語の登場人物はどいつもこいつもイカしてたかな。

ま、こんなよーわからん世界に来ちまった俺ですが。
憧れる気持ちはスゲーあるわけですが。
使わねーし使わせねーよ。

だつてさ、怖いし。

『グランドクロス』でアレだぜ？

あの物語じゃどっちが上かはいまいちよく覚えてねーんだが。

とにかく使わんさ。

「おい隼人」

どしたよエヴァ？

「私は貴様から対価を貰った、だが私は貴様に対してまだ何も出来ていない。」

このまま放っておくというのは私の誇りが許さん」

「イヤ別にイイのに、スラぼうのせいで『別荘』とやらは使用不能になっちまったし。」

友達だしさ」

「……むう、いや……まあ、そうではあるがやはり私の気が済まないのだ！」

お前は黙って私から鍛錬を受けていればイイー!!」

「ケケケ、照レテヤガル」

「ぴいう」

「ぬっ殺すぞ貴様ら」

て、事で修行みたいなのが始まった訳だ。

待って下さいシスターシャークティ！

アンタに相応しい男に俺はなるぜ！！

■ ■ ■

「とりあえずは『魔法』からだ、貴様が魔法使いと言うのは想像も出来んな」

「俺もまほーつかいデビューか」

「クククツ、まあどだい無理な話だとは思うが……いろいろ試してみんな」

この杖を握って”プラクテ ピギ・ナル 火よ灯れ”と唱えてみる

「おう……コホン、”ぶらくて ぴぎ・なる 火よ灯れ”……出ねえじゃん」

「当たり前だ、ポツポ出来てみる、苦勞など誰もしないだろう」

「だっけどさあ」

「……とりあえずは『魔力』を感じることが先決か。

私の肩に手を置け」

「置いたぞ」

「よし……イイか、微弱ではあるがこれが『魔力』だ。

つまりこれを自分自身体内で……っとどうした？」

「……勃ちしまった」

「……フンッ!!」

「にむがあああああぁっ!!折れたアアアアアアアアアッ
ッ!!!!??」

■
■
■

「ええい次だ!元々貴様に『魔力』など繊細な物は似合わない!!

『気』だ!生命力を還元して作りだす『気』を使え!!」

「いあ……ヴあかんでーんだ、ががつ」

「いつまで股間を押さえている」

「デメエのせいだろうがッ！！！」

「たくスラぼう、『ベホマ』」

「ぴういい」

「おーさんきゅさんきゅ」

「へその下3寸辺りにある『丹田』に力を込めろ」

「屁が出そうなんだが？」

「出すなよ……チャチャゼロ、お前が流してやれ」

「アイサー御主人」

「おおう、くすぐつたいぜい」

「ケケケ、ギンギンジャネエカ！」

「カッカッカ、『ベホマ』でしっかり復活したみてえだな！！！」

「昔ハリーゼントト合ワセテ二本天高クソビエ立ッテヤガッタカラ
ナ！！！」

「おうよ！アヘアヘだぜ！！！」

「「アッハッハッハッハッハ！！！！！」」

「ぴううい！」

「……死ね、阿保ども」

■ ■ ■

「よっせいしょ！どっせいしょ！！」

「……ハンマーはまあまあだな」

「おうよ！しかしさ、何故にハンマー？」

「素手は『魔力』や『気』がものになるまでは使い物にならない」

「だからさ、何故にハンマー？」

「人の話は最後まで聞け。」

貴様は人並み外れた体格を持っているだろう？」

「まあな、結構パワーには自信あるぜ。」

『気』やら『魔力』やら無ければ素手喧嘩じゃ負け無しだからな」

「……魔法先生を昔倒した時はどうやったんだ？」

「あゝあれか、あん時は一回負けたんだよ」

「ほう？」

「デ、ソノ次ノ日ソイツノ授業ガ有ル教室デ待チ構エテナ」

「教室の扉開けた瞬間顔面に一撃だ！

あとはマウントとって隼人フルボッコタイム的な！？」

「ぴぴう！ぴぴう！」

「外道だな」

「ほっちよけ。」

でもさあ……ハンマーなあ」

「なんだ、何か文句でもあるのか？」

「やっぱどうせなら『魔法』とか『気』とか！

それがダメなら刀とか銃とかがいいぜ！！」

「戦闘を舐めるなアアアアッ！！」

■ ■ ■

「て事でさ、龍宮……銃の使い方とか教えてくんね？」

「……まあいきなり過ぎて何と言ったらいいのかわからないが。

それは依頼かい、香坂先生？」

「再提出のレポートをなかった事にしてやろう」

「……ハア、頷いてしまうのが学生のツライところか。

とりあえず遠距離武器の経験は？」

「無いな」

「修行トカナンテマツタク縁ガ無カッタンダゼ？」

「今まで生きて来れたのが不思議だよ」

「ぴう！」

「ああ、君が居たからか……。

ところで香坂先生、スラぼうは一体どれくらい強いんだい？」

「あゝまゝウム、アレだ、多分スゲーつえーぞ」

「スゲーつえーってのがどれくらいかはわからないが……そう言わ

れると更に気になってしまつよ」

「企業秘密だぞ」

「企業秘密かい？」

「二人だけの秘密だ」

「それは卑猥なモノを感じるね」

「この前あつた月の報道、アレってウチの子のせいなのよね」

「冗談だろ？」

「はははははははは」

「ケケケケケケケケ」

「ぴいうぎつ」

「……冗談だろ？」

■ ■ ■

「どんなもんよ？」

「……それは言って欲しいのかい？」

「おうともさ！中々才能あるんじゃない？」

「そうだね、ゴツいIMIデザートイーグルを使っても微塵も銃口がブレないのは驚愕だよ。」

私も一応『魔力』で強化しているというのに、先生からはそれが感じ取れない」

「使えねーっての、俺ってば『限りなく一般教員に近い魔法先生』だぜ？」

「そう言えばそうだったね。」

ま、でも私を一瞬で『魔族と人のハーフ』と見抜いて、その姿を見せてもまるで様子が変わらない人を一般教員だとは思えないんだが？」

「魔物使いですから」

「成程、納得したよ」

「で、俺の射撃の才能は！？」

「百発近く撃つといて一発も的にかすりもしなかった先生にはこの称号を贈ろうか。」

『無能』だね、まるで外国の映画に出てくる名も無き銃使いだよ」

「……ぜってーに当たらねーってことかよ」

■ ■ ■

「ほりゃ！とるあつ！どるああつ！！」

「ストップストップストオオオッブです！！」

「へへへん、どんなもんよ桜咲！」

俺ってばどれくらいの剣才あるよ？」

「とりあえず！とりあえず！！とりあえず！！！！」

刀をこっちに渡してください！！」

「へいへーい……で、どんなもんよ！？」

「ええと……あの、その……ですね」

「おう！」

「テメエニ教エルナラ犬ニ教エタ方ガマシダゼ」

「……まったくまたご冗談を。」

なっ、桜咲!!」

「あうう」

「マジで？」

「というより先生、不良だったんだろう。」

木刀とか金属バットとか、使わなかったのかい？」

「なんで龍宮が付いて来たかは置いといて。」

ま、俺の信条は素手喧嘩だったからな」

「ツーカー素手喧嘩シカ出来ナカッタんだガナ」

「一言多いわコノヤロー」

「ぴう」

■ ■ ■

「大丈夫です先生! だったら『気』とか『魔力』で身体強化すればいいじゃないですか!!」

「刹那の言っただ通りだ。」

なんだったら私が『魔力』を先生に流してあげようか？」

「私は龍宮のように『魔力』は使えませんが『気』は使えます。

『気』でよければ私が……」

「いやーそいつはちょっと遠慮しとこかなー」

「……別段変な事をする訳ではないよ？」

「私も含めて皆が昔、通った道ですから恥ずかしがる事は」

「いやさ、さっきエヴァとゼロにやってもらったんだけど……」

「コイツ勃テヤガッタカラナ」

「ぴい」

「……これが……セクハラ、か」

「変態やああああああああああつ！……！」

■ ■ ■

「新田先生……強くなりたいです……」

「香坂、お前はわかっているとは思うが『強さ』とは肉体的強さだけではないのだぞ。」

精神的、社会的、経済的、さまざまな強さがある」

「もちろんっスよ、昔からパンピーに手を出した事はねーっスから」

「ふふっ、そうだったな。」

お前は昔から他のチンピラとは一味違っていた」

「……なんかそう言われると照れちまいますわ」

「まあマトモな道を歩み始めて、それでも昔の事を思い出してお前を嫌う先生方は今だいるからな。」

偶には私でなければガス抜きに付き合ってやろっ」

「そいつは飲み……って意味で？」

「それじゃあ足らんのだろう、香坂。」

久々に私が捻ってやろっ」

「おっ！新田センセの柔道が久々に見れる訳ですね？」

ま、いつも通り俺が勝つ訳ですが」

「ふん、最初だって最後の蹴りが決まっていたらあの時点でお前の

チームは潰れていたさ」

「にはははは、じゃいつやります?」

「今日の放課後柔道場でだ。」

逃げるなよ、香坂?」

「もちろんっスよ」

■ ■ ■

「んな事で学園長、なんか強くなるための手っ取り早い方法とか無いっすかね?」

「無いの、強さとは才能とそれ以上の努力によって培われていくもの。」

地道に一步一步、歩んで行くのが正解じゃよ」

「そんなこと言っても学園長いだいなるまほーつかいじゃねえっすか!!」

まぎすてる・まぎじゃねーっすか!!」

「関係ないわい」

「……魔法つてしよせんこの程度かよ……」

「否定はせん、魔法は万能ではない。」

そう言うならば人の心の方がよっぽど万能じゃよ」

「なんかスゲー教育者っぽい事を」

「ワシ、教育者じゃもん。」

まあ本国でも、それこそ全世界探してもワシに向かって唾吐くような根性や度胸のある人間はおらんよ。

お主はきつと大丈夫じゃよ」

「……丸めこまれた気がすんなー」

「ホッホッホッホッホ」

■ ■ ■

「強くか……、好きな人にそう言われれば燃えるのが男つてものだからね」

「そうゆーことです。」

あ、ちなみに光さんはどーやって奥さん落としたんすか？」

「僕かい？僕の場合は飲食店に勤めていたからね、通い続けたよ」

「この人一週間のうち五日間も来てたんですよ、信じられますか？」

「それだけ夏輝に惚れてたってことだからね」

「もうっ！」

「ウッハーココデ惚気カヨ！？」

「カアアツ！羨ましい限りっす！」

「ぴう！」

「あははは、隼人君にもそんな人がきつと現れてくれるさ」

「出来るもんならそれがシスターシャークティであって欲しい！！」

「……隼人おにーちゃん、コレ痛くないの？」

「ああコレ、まあ痛くないぜ、男と男の友情の証みたいなものだからな。」

「……いや、でもそれだったら新田センセだとおかしいのか？」

「すい……」

「ハッハッハ、照れるぜい」

「おー」

「……わかっていると思うが隼人君、一応確認しておくよ……」

「大丈夫っすつてば、まだ三歳じゃねーッスか」

「かつこいい、かつこいい」

「は・や・と・く・ん……!!」

■ ■ ■

「つーことでナイフの使い方を教えて欲しいんだわ」

「私か？私でよければ構わないが……そのチャチャゼロもそこそこ使えるのではなかったか？」

「いやまあそーなんだがさ、ここは何となくだがガンちゃんに」

「『何となく』と言うのは気になるが、まあそちらの人形ではなく私を選んだ香坂は正しいな」

「ケケケ、俺ダッタラスグニ刻ンジマイソウダカラナ……テメエクライ弱イノガチヨウドイインダヨ」

「ほう、弱い……？貴様のような信念も無い人形より私が弱いだと！？」

「ワカリキッテンダロウガ、一瞬デ三枚二下ロシテヤンゼ」

「……香坂、少し下がっている」

「イイカ隼人、見ルツテノモーツノ稽古ナンダツテサ」

「粉々にしてくれるわああああっ！！」

「ケーッケケケケ、遊ンデヤンヨオオオオッ！！」

「仲良しだな」

「ぴう」

■ ■ ■

「指パッチンすか？」

「ああ、フィンガースナップと言っただがな」

「……指パッチンっすか？」

「ああ、そうだ」

「フィンガー……指パッチンするか？」

「しつこいぞ、香坂」

「ういゝっす、でコレは？」

「魔法薬だ、魔力の無い者はこれを媒介に強力な魔法を放つ。

指に染み込ませろ」

「おゝ冷たくてイイ感じ」

「弾け」

「うつす!!」

——ぴすっ

「んぶっ……!!」

「ケッケケケケケケケケ!!」

「ぴいうぴ!!」

「笑ってんじゃねーよテメェら!!」

■ ■ ■

「全滅……ハンマー以外全部才能無し……マジで……？」

「地道に努力しろ、という事だ。」

偶になら付き合ってやらん事も無いが、自分で気張れ」

「どーせ俺なんて牧場の香りがいつかし出すんでしょーね」

「……そうならんように鍛えればいいだろうが」

「そうだけどさあ……こうさ、それまでにシスターシャークティが誰かと付き合っちゃったらどーすんだよ……！」

「あのお固い鈍感女にそれはまず有り得んな」

「デモ司祭トシスターツテ怪シイヨナ」

「……待て、ハンマーを持ってどこへ行く」

「クソジジイを殺して来てやんよ……！」

ブツ千切って来てやらアアアアアアアアッ……！」

「止める茶々丸」

「イエス、マスター」

「叩き潰すぞ糞ビッチがッ!！」

「申し訳ありませんがマスターの命令ですので……」。

加えて私にはそのような生殖行為目的の機能は付いておりませんので、その表現はおかしいかと思われます」

「……女がそんなこと言ってんじゃねーよ」

「ぴうぴぎーう」

「スラぼっ?……こっ、コイツは……!?!」

■ ■ ■

「どんなもんっすかシスターシャークテイ!

俺も意外にやるっしょ!！」

「その……そうですが……あの……」

「ええ〜と、何か?」

「こっ、香坂先生はそう言っご趣味でも……いえ申し訳ありません!

人様の趣味に口を出すなど、まだまだ修行が足りませんね!!」

「……したーしゃーくてい?」

「でも、あの、わっ……私はこれで失礼します!!」

「へっ、ちよっ、なんで……カムバアアアック!!」

「ケケケケケ」

「ぴう」

「シャークティイイイイイイツツ!!!!」

「ウルセーゾ」

■
■
■

「まさか才能があるのが『鞭』とはな……。」

成程、魔物使いらしいではないか」

「ケーケケケケ、S M野郎! S M野郎!!」

「うぐう……ひっくっ……うぐええええっ……びiiiiiiiiっ
!!」

「その才は私が生きた経験の中でもずば抜けているが……鞭か。」

クッククック、貴様は運命とやらの嫌われているのではないか？」

「ぴい！」

「シヤァクデイ、イイイイイイイイイッ！……！」

七匹目 いろいろやってみて帰結したのがコレって……（後書き）

会話文だけというの中々に書いてて面白いものですね。

八匹目 若い頃の話は今聞かされると恥ずかしいもんだ（前書き）

今回も日常パート

八匹目 若い頃の話は今聞かされると恥ずかしいもんだ

いーあーるさんすー。
ちゃーしゅーめーん。

「…………自分で使ってなんだが、スゲーな」

今俺の手の中には一本の牛追い鞭。

ぱぱぱっらーぱぱらーとかいう音楽とともに現れるカーボーイハットのおっちゃんが使ってんのと同じものだな。

そいつの柄を持って振る。

ずっとダラリ垂れ下がっていた先っぽがヒュルンと進んで目の前に置いてあった缶に絡み付く。

戻すように手首のスナップを利かせりゃ、開いたもう一方の手の平の中に缶が。

…………信じられねーのは俺が一番だよ。

ホントなんつーか手が伸びたみたいってのが俺の印象。

思うがまま、自由自在、変幻自在。

どんな表現でもイイけどさ。

鞭が自由に操れるようになった訳で。

これで俺も前線に出れる訳で。

エヴァが言うにそれこそ十年二十年かかって得られる技術をたった一週間二週間で得てんだと。

どーでもイイ。
マジどーでもイイ。

鞭とか……カッコつかねーじゃねえか。
どーせ俺はSM野郎なんですよー。

……自分で言ってた悲しくなってきたわ。

いやね、戦えるようになったのはうれしいんだよ。
けどさけどさ、シスターシャークティの目に籠ってた軽蔑が別の意味での軽蔑に……変わっちまってさ。

ま、『武器』として理解してくれてるみたいでだんだん緩やかにはなってるんだが。

でもさ、ちょーっとお固いあの人にはそれでもまだ、なあ。

それに普通は鞭って『武器』じゃねーんだな。

拷問用の道具なんだと。

そーとー打たれたヤツは痛いらしくってな、その痛みからショック死するのも出てくるくらいなんだと。

魔物やらがいる世界に身を置く鞭使いは、鞭に『魔力』とか『気』とか込めていろんな効果を付加して戦闘用にしてるそーな。
ちなみに俺が『まほネット』、まほーつかい達専用のネットワークの通販で買ったこの牛革の鞭は強度はかなりのもんで、『打撃』に近い効果を出せるように魔法が掛けられてるんだと。
しかも俺が込めなくっても常時かかっているタイプ。

エヴァにも見てもらいながらそこそのやつを買ったわけなんだが……送料と手入れ用の道具も併せて¥1129 / 800也。

ひやくじゅうにまんきゅうせんはっぴゃくえん……ありえねー。
百十二万九千八百円だぞ！！

俺の教師としての手取りが大体月あたり二十万そこらだから……ほぼ半年分。

ボーナスが年二回で、合わせて大体八十万位。

俺の金がひらひらと消えて行っちゃまうよ……。
もうね、悔んだって仕方無いんですけどねー。

まあ年収三百万ちよつとで、週一くらいで特別手当が出る夜の警備に出てるからな。

他の人と比べりゃ高給取りなのかもしれんけどさ。

「ぴいう！」

……どしたよスラぼう。

隼人君は今沈んでるんですよーっと。

まあ肉はいつでも食えるし、スラぼうとゼロの飯代は無しだからイ
インだが。

野菜とか果物とか、他にも菓子とかもふつーに食うからなこいつら
金欠ちゃんなんですう。

エヴァはまるで援助してくれんし。

だから最近は大カバりばっか。

エヴァの家行ったり光さんの家に行ったり、ガンちゃんや真也さん
やたまに新田センセ。

出来るもんならシスターシャーケティがイイんだが。

まあ俺にはまだ早いな。

でもなあ、イカンよなあ。

なんとかせんとなー。

みんなみんなやさしー人ばっかでもう俺はさ。

「びぎ！」

「あゝ悪い悪い、いつものヤツな」

「俺二モヤレヨ？」

「ヘイヘイ、俺は訓練になってひじょーにありがたいです」

……ため息ばっかでも仕方ねーさ。

買っちゃまって、どーせこれくらいしか才能ないんだしさ。

あとは……ハンマーか？

土木現場でバイトしてたからかね、そこそこに使えるものにはなるんだそーな。

……『牧場作り力？』って言われちゃったけどよ。

ホントもう嫌んなるわ。

つつたつてハンマーなんざ買えねえからエヴァに頑丈なの一つ貰ったんだが。

ホントに頑丈なだけの代物。

なのに対価に血を寄越せとか言うんだぜ！！
しかも週に三回を二か月！！

テリーには剣の才能あったのにさ。

ちょっと期待とか、やっぱ男だからしてたのにさ。

鞭とハンマー……いやハンマーもカッコよさがわかってきたからイ
イんだが鞭とか……。

「ぴい！」

「へいへい」

今はとりあえず前だ。

鞭を振り回して、しっかり先端に勢いをつけて……スラばつに絡ま
せる。

かと言って『打ち付ける』のはノーだな。

んで上に向かって放り投げる！

「ぴいぎ！」

お次はゼロ。

同じように上に放り投げる！

「ヒヤッハー！」

次は五つ並べてる缶を投げる、投げる、投げるっと。
落ちてきたもんを絡みつけて再び上に。

簡単に言えばお手玉だな。

ほーんと俺の意志通りに動くってんだからすげーもんよ。

左手で鞭を握りお手玉しながら右手にエヴァから貰ったハンマー握って素振り。

いつもは別々にしてんだが今日は何んとなくな。これが俺の修行風景。

個人的な意見ではさ、山籠りとか座禅組んだりさ。てつきしそんなことするんかと思ってたさ。

……地味だわ。

エロいことする漫画でこんなことするとは……。舞台裏はわかんねーってヤツなのかね？

「あ、初めまして、自分『瀬流彦秀介』と言います」

「こちらこそご丁寧に……」。

ガンドルフィーニの妻で『令子』と申します」

「瀬流彦！こうやって飲むのは久々だな」

「うん、香坂くんも久しぶりだね」

瀬流彦は大学の同級生だかな。
でも俺は女子中等部に配属されて、コイツは男子中等部に配属。

なっかなかに会える機会が少なかったってヤツだわ。

ま、来年からはよーわからんけど女子中等部に移転になるらしいが、
つー事でこうやってガンちゃんの家に集まって騒いでるってわけよ。

まあガンちゃんは聖ウルスラで、光さんは初等部で、真也さんは男子
高等部なんだがな。

やっぱ魔法先生同士よく会う機会が出てくるから、こうやって集ま
る訳で。

が、どーも引つ込み思案なところがあるみたいでな。

あんまこんな感じの飲みには瀬流彦来なかったんだよ。

でもま、一つの踏ん切りって事で今日は引つ張って来た訳だ。

「……相変わらず若い奥さんだねえ、ガンドルフィーニ君」

「確か香坂より一つか二つ上だったか？」

「一つ上つすね、なんで今24歳？」

「え？えと……ガンドルフィーニ先生、お幾つですか？」

「34だが、何かあるかね？」

「いやっ、そんな意味じゃ……」

「ガンちゃん、怖がらせたらいかんだろうよ」

「何！？私はそのような事はしていないぞー！！」

「ケケケ、顔ガ恐ロシーンジャネエカ？」

「だからなんで貴様が居るんだ！第一だなー！！」

「理解しているさ……香坂」

「へいへいわかってますよっと。」

「スラぼう、ゼロ。」

「て事で今日は、な。」

「帰ッたらオールナイトダゼ」

「ぴぎっ！」

「……マジかよ。」

「明日も一応学校あるんだがなあ。」

「休みも近くなって、テスト期間中だから授業はねーけどさ。」

「騒イデヤロウカ？」

「頑張らせていただきます」

「ぴぎぴぐ」

「と言う訳で、帰る前に酔い止め買お。」

「若いからまだ大丈夫だとは思うがねえ……。」

「俺も酒には強い方だとは思っし。」

「……けどゼロはザルなんだよなあ……気が重いぜ。」

ガンちゃんは魔法界出身で、大学の時こつち出て来たらいいね。けど結婚した令子さんは一般人……まあ一般人。んなわけで家じゃ魔法は一応隠さなきゃいかんのだと。

いずれは話すって言ってたけど。

今娘さんが四つで再来年度に小学校入学だから、その頃には話したいってさ。

家庭の問題はてきとーにそちらでやるんでしょうが。

ま、まだ話してないって事でスラぼうとゼロは無理な訳だ。家に置いとく訳にもいかんからいつつもつれて来てるけどな。

「こんにちはー、わたしあやっていいいます!」

「亜矢、この時間だったらこんばんはだろう?」

「はい、こんばんはー」

「よつす、亜矢ちゃんおひさー」

「はやとにーちゃんおひさー!」

「おうさ!……で、ほい瀬流彦、パス」

「へっ?ちょっ!?」

腹に向かつて突っ込んで来た亜矢ちゃんを隣にパス。相変わらず元気娘だねー。

光さんとこの娘さんの『真紀』ちゃんは引っ込み思案なのにさ。

……しかしガキの扱いに慣れてねーな。

ガンちゃんも光さんも真也さんも、もちろん令子さんも周りでニヤツいてるだけだし。

憐れな犠牲者なわけね……。

まあどこでだつてある洗礼だわ。
甘んじて受けたまえよ。

で、宴も始まつてそこそこな訳だが。

やっぱ最初に酔っぱらうのはガンちゃん。
相変わらず酒に弱いねえ。

「うひゅ〜」

「今日は静かだね、ガンドルフィーニ君は」

「喧嘩相手が静かつすから」

「喧嘩相手？」

「瀬流彦も、ここではないところに来ればわかる」

「はっ、はい！」

ビビんなくつたってイイのにさ。

やっぱ強面だもんな、真也さんは。

……睨まないでくださいね。

自分もだつてのは重々承知してますわ。

「そーいえば神多羅木！おまえはいーったいどうなんだ！」

「……何がだ？」

「あー葛葉先生との恋話だね、僕も気になってたんだよ」

真也さんは昔っから。

俺の知る限りじゃ葛葉先生が多分だけど離婚する前から、あの人に惚れてんだよな。

『葛葉刀子』先生は真也さんと同じく男子高等部の教員。

きょーとしんめーりゅーとか言う、確か桜咲と同じ剣術の流派に身を置いてるんだと。

師範代らしいからかなりつえーらしいね。

しかしあの人と確か幼馴染なんだよな。

……その話は置いとくか。

で、京都で魔法使いと結婚して、こっちの関東の麻帆良学園に移り住んで来たんだと。

けど離婚。

『西を裏切つてまで東に来たのに！』つつつてたらしいね。

西とか東とかよーわからんのんだが、何でも昔っから仲が悪いらしいわ。

確かエヴァに教えてもらった気がしたんだが……あんま覚えてねーな。

要はアレだよ。

昔っから日本にもこんな感じの、魔物とか退治する機関があつて技術があつた訳だ。

それが現在京都にある『関西呪術協会』の元で、技術が『呪術』であり『陰陽術』だったりして。

後は刀使つて退治してた戦闘集団『神鳴流』だっけ？

まあそいつらが日本を守つてたんだが開国と共にまほーつかいがやつて来た訳だ。

で、麻帆良に本部を置く『関東魔法協会』を立ち上げちまつて。

んな訳で簡単に言つと『ウチの縄張り荒らしてんじゃねーよ』みたいな感じだよな？

うんうん、多分そんな感じ。

で、そいつらが仕事奪われたりして恨みを持ちだして、ここの転覆狙おうと侵入して来るのを止めるつてのが警備の一番多いパターンだな。

後侵入してくんのはいろいろ理由があるらしいけど。

俺にはどいつもこいつも理解出来んのばっかだったな。

関西じゅじゅつきょーかいのヤツらの理由ならよーわかるけどな。

で葛葉先生の事だが。

しかし真也さんは自分からアプローチは決してかけない。

『静かに見守る男』つて立ち位置にいるから一向に関係は前に進まねえつて状況だな。

前に聞いた事はあるんだが……。

『俺はアイツの幸せを見ればイイ』なんてカッコイイこと言つち

やってさ。

ヤケ酒とかその他もろもろにいつつも付き合っただけで。

『アイツが惚れた相手と幸せになるのが俺の幸せだ』……。

渋いけどさ、渋いけどさ。

真也さんどーすんのって話だよな。

「俺は前に言った通りだ」

「カタいね、神多羅木君も」

「それが俺の性格だからな」

……相変わらずなこつて。

「あのつ、じゃあガンドルフィーニ先生は？」

……ほう、そいつを聞きたいか？

いい感じだねえ瀬流彦。

盛り上がるぜい。

ちなみに俺の事になんねーのは知ってるから。

生徒にはまだ知れ渡ってないみたいだけどよ……結構有名らしいわ。
なーんであの人は気付いてくれねーのかね。

「待て！わたしのはなしはいいだろう！」

「え、わたしパパとママのおはなし好きだからききたいよー」

「イヤイヤ、亜矢はなーんとも聞いただろう？」

「もっかいきくー!!」

「じゃあ俺が話そうかね」

「香坂!？」

「まあいいじゃないですか、私との馴れ初めですよ？」

ね、せーんせ

「先生!!??」

じゃあ話そうかね、昔の昔のお話をさ。

■ ■ ■

「むかしむかしある所に……つつつても麻帆良で五年以上も前の話なんだがな。」

そこに一人の、熱意あふれる教師がいたわけだ」

「パパだ!」

「そそ、当時27歳の聖ウルスラに勤めていた男性教師『ハルト・ガンドルフィーニ』にはいつも一つの悩みがあった。」

それが担任していたクラスの問題児『多田令子』、当時高校三年生だな」

「ママってふりょーだったんだよ」

「いつ!？」

「ふふふつ、照れちゃうわ」

「令子ちゃんは結構なやんちゃをしてたみたいだね。」

夜遊びやら暴力沙汰やら……補導経験も結構あるみたいで毎回迎えに行くのがガンドルフィーニ君の役目みたいになってたのさ」

「あの頃ウチの家、いろいろ大変だったの。」

親に対する反抗みたいな感じでね……今から思えば寂しかったのよ」

「いつもどんな事をしてても必ず迎えに来てくれるガンドルフィーニ。愚痴れば延々と聞き続けてくれたコイツに段々と多田は惹かれていった」

「で、徐々に真面目になってった令子さんだけどさ、過去の遺恨つてのはどこでだって出てくるもんで。」

暴走族のデッカいグループにも出入りしてたんだがな、そーゆーところはあんま途中抜けとか許してくれねえわけよ」

「それでね、どうしたかと言うと」

「ほーふくにきたんだよ!」

「……報復……」

「多田が美人だったという事もあったんだろう。」

教師と一緒にいる事が許せなくなったそのチームの男たちは、聖ウルスラに乗りつけて多田を攫って行った」

「なんか青春ドラマみたいですね」

「ガンドルフィーニ君は焦った。」

自分のせいで令子ちゃんを危険な目に合わせる事になってしまったのだから。

助けなきゃいけない、でも助けようにも……まあいろいろある訳で一人で乗り込んでも勝てない」

「そこではやとにーちゃんのとーじょーだ!」

「俺が暴走族の総長やってたってのは知ってるよな?」

「うん、一応は……いろんな伝説とか耳に入ってきたし」

「そんな麻帆良最強だったウチのチームに単身やって来てさ……何したと思うよ?」

「うおあつ！言うな！言うなよ香s「あなたは黙っててね」もがっ！？」

「『多田は俺の惚れた女なんだ！だから助けたい！何でもする！協力してくれ！』ってさ。」

涙ボロボロ流しながら土下座して言いに来たんだよ！！」

「……すこっ」

「で、無事俺らが乗り込んで潰して、いろいろあつて卒業と同時に結婚したって訳だ」

「麻帆良では結構有名だよ、令子ちゃんも凄かったし。」

卒業式の日到校門でね、『これからも私の事教育して下さい』って逆プロポーズさ」

「予測はしていたからな、それなら映像があるぞ」

「わたしもみたことあるー」

「くっ、黒歴史だ……」

「私はとっても嬉しかったんですけど？」

「……だから香坂くん、ガンドルフィーニ先生の事を」

「そーゆー事、友達だもんな」

「……うるさい」

「ま、瀬流彦君も恋をしたまえよ。」

「しっかり応援するからね」

「あはははは……遠慮したいです」

「瀬流彦せんせい……いつしよにはずかしいことになりましたよ」

「ちよっつ、ガンドルフィーニ先生!？」

八匹目 若い頃の話は今聞かされると恥ずかしいもんだ（後書き）

飲み会ですので最後はg d g dな感じに仕上がっております。
ガンドルフィーニ先生と奥さんの年齢を少し変更しました。

九回目 教師として生徒との付き合いは大事（前書き）

今回も日常編。

会話文だけの形だけとなっております。

偶にこんなのを挟んでいこうかと。

九匹目 教師として生徒との付き合いは大事

〴〵二人の妹分〴〵

「てことでテストも終わった訳で答案返すが、今回も平均80点才ーバー。」

よーやってくれた、俺の給料も増えるってもんだ」

「じゃあ隼人にいなんかオゴってー！」

「んじゃ来年もしっかりテストで点とって俺の給料に貢献してくれや」

「わわ？無視はヒドイ」

「そうだヒドイにや」。

それに何であんちゃん私があんちゃんの事あんちゃんって呼んだら怒るのに、さっちゃんが隼人にいつて呼んでも怒んないのさ！？」

「はいゴンゴンと。」

あんね、いちおー俺教師、お前ら生徒、公私混同はいかんぜ」

「ケチンボ」

「昔は不良だったくせに」

「ゆーちゃんの言うとおりだー、不良のくせに」

「バイクで学校のろーか走ってたのに」

「坂上先生ボコボコにしたくせに」

「お酒学校で飲んだのに」

「私たちにも飲ませてたもん」

「煙草だつて吸ってたにや」

「お風呂入れてくれた時に私たちの裸を穴が開くくらいギョインギョイン見てた！」

「一緒に寝たとき布団の中で変なところ触って来た!」

「変態だー」

「ロリコンにや」

「……デメエら」

「ふにゅっ!？」 「はにやっ!？」

「そうか、遊んでやってねーのがそんなに寂しかったか。

わーった、バイクのケツにでも乗つけて風の方こう側まで連れてってやんよ」

「ちよつ、アレめちやくちや危なかつたじゃん!!」

「葉っぱで頼つぺた切れちゃったんだよ!!」

「まー細かいこと気にすんなや。」

兄貴分がせーっかくカワイイ妹分のために遊んでやるって言ってるんだからさ」

「いやっ!? くぎみー!美砂!タスケテー!!」

「くぎみー言うな!」

「うん、まあ……ふぁいと」

「まき絵!亜子!アキラ! ゆーなちゃんがいじめられてるよっ!!」

「バイクかゝ、私乗ったこと無いなあ」

「ウチもあらへんな」

「私も……楽しい?」

「免許取ったら買えばいいじゃねーの、楽しーぜ大河内。」

ま、今から行くのは怖いんだけどさ……俺は楽しいけど」

「ひっ!」「はう!」

「んじゃ、逝こか？」

「いやあああああああつ！……！」

■ ■ ■

〈普通と異常〉

「ん……おお、長谷川か」

「あ、ども」

「人待ちか？」

「そんなんじゃないです、偶には外に出なきゃと思っただけで……」

「相変わらず老成してるというか冷めてんなあ……ガキなんだからもちつとはちゃけてもイイんじゃないね？」

「私はこれくらいでイイんです。」

「てかウチのクラスがおかしいんすよ」

「ほう、どの辺が？」

「どの辺がって……わかるでしょう？」

明らかに幼稚園児とか大学生とかおばさんとか、ありえねえのが集まってるじゃないっすか」

「んで、どこが変なわけ？」

「どこがってだから……」

「お前には異常でもアイツらにはそれがふつーなの。

お前があれくらい背がチビだったりデカかったら、それがお前のふつーだろ？」

「……そう、ですけど」

「異常ってのは俺みたいなのを言うんだよ、バリバリで不良やってたし」

「はあ」

「ま、俺が言いたいのはだな……ガッコは勉強するところじゃねえ、ダチを作るところだ！！」

てことで気の会うヤツ、一人くらいは見つけるよ」

「……善処します」

「政治家かよ」

「……ドースンダ、新田ノジジイニモ目付ケラレテンダロ？」

「ぴう」

「あの人こーゆーところはかなり気にするからな……。」

んゝそだな、誰かに頼むのが一番だろ」

「誰ダ？」

「パパラッチとシスター」

■ ■ ■

く優等生二人く

「つい事で今年度最後のレポートを返すわけだが、相も変わらずずば抜けて出来のイイやつがいる。

て事でどいつもこいつも見習つよーに」

「「「はゝい！」「」「」

「んじゃ超と綾瀬から」

「いやはや照れてしまっネ」

「完成度の高いレポートだな、自分なりのまとめがわかりやすいところの上ねーわ。」

お前教科書会社にでも就職しねえか？」

「むふふ、この超鈴音のお眼鏡にかかる相手がいたら考えてやつてもイイヨー!」

「調子に乗んな糞ガキ」

「アイヤー、天才の頭がグルグルになちゃうネ」

「まー頭イイのは認めるけどさ、辞典とか図書館にはなるなよ。」

知識なんて使えてナンボ、寧ろ知恵のほうが大事だと俺は思うし……お前に限ってそれはねーとも思うが」

「教育されちゃうとはビックリだネ」

「一応教師で、お前らよか濃密な人生送ってますから」

「ホホウ、それは是非とも聞きたいヨ」

「てめえが酒吞める年頃になったらな。」

んじゃ次は綾瀬」

「毎回思つのですが、こつやつて渡されるのは少し恥ずかしいです」

「気にすんな気にすんな、出来るってことは何であれスゲー事だろ

うよ。

褒められてナンボだと俺は思っぜ」

「……そうですか、まあもう言っても変わらないと思うのでいいです」

「そかそか……で、綾瀬のほうは相変わらず考察がハンパねーな。

他の勉強も気合いれりゃあいいのに」

「勉強は嫌いです。

先生の授業は実験とレポートしかないから嫌でも覚えてしまっただけです。

適当にやってたら再提出ですし」

「楽しくねーか？」

「いえ、私はこんなモノの方が好きです」

「そっかそっか、二人ともいい学者になれるぜ」

「……頭撫でるなです」

「私たちはもう立派なれでいヨ！」

「少しでも色気を付けてから反論しな、ガキンチヨ」

■ ■ ■

（鶴の進撃）

「あらあら隼人先生、奇遇ですね」

「……もう外真つ暗だけどな」

「あらあら」

「……あんね、頑張るのは勝手にすりゃあいいけどよ。

毎度毎度言うが、俺の心は揺れてねーぜ？」

「ふふふつ、いいんです。

私が隼人先生といられて嬉しいんですから」

「ほほつ、今のはちよつといいかもな。

大学生くらいだったなら軽く落ちるぜ？」

「遠慮しときます……私の好きな相手は今目の前にいますので」

「強情だねえ」

「運命だと思ってますから。」

そうなれば女の子は強いですよ」

「ガキの論理だな」

「ガキですもの」

「……前言撤回、お前はガキじゃねー」

「ホホホホ、老けてるって……言いたいんですか……？」

「いんや、テメエは悪ガキだってことだわ」

「幼いころから落ち着いてましたので、ツケが来たんじゃないやありません？」

「俺じゃねえヤツに清算してもらえ。」

しかしな……もうちょい迫るのに躊躇いとか持つ時期じゃねえのか、中坊ってさ」

「『惚れた相手にはガンガン行って攻め落とす』、おばあちゃんにはそう教わりましたの」

「んならそのばあちゃんには会ってみたいかもな」

「婚約の報告ですか？」

「テメエの抑え方を聞きだすんだよ」

「あらあら」

■ ■ ■

（秘密取引）

「……来たか」

「来たっスよ」

「来タ」

「ブツは」

「しっかりココにあるって」

「んじゃさっス」「おおーっとその前に！しっかり報酬を貰わないといけないっスね」……好きなモン頼めコラ」

「んじゃすいませーん！

とりあえずタン塩とネギ塩タンと特上カルビと特上ハラミと特上ロースとユツケと生レバ。

全部3人前ずつで……ドリンクは私がコーラでココネはオレンジ

「ジュースでよかったっけ？」

「ウン、ご飯とキムチモ……」

「ヘイヘイ、んじゃそんなところで……頼まないんスか？」

「……キムチ盛り合わせとコンゴウ5人前とご飯の大を三つ！

後生ビールの大とご飯用の取り皿を二つくれ！！」

「うひゃーお金大丈夫なんスか？」

「大丈夫なわけねーだろうが！

よりにもよってJ〇J〇苑で高いもんばっか頼みやがって！！

せめて安い肉頼めよ！！」

「安いのは頑張りや食えるっスからねー。

せーっかく私ら苦労したのに安いのか……そりゃねーっスよ」

「頑張り、ハヤト」

「……ありがとな、ココネ……あと隼人先生で」

「俺ノジヨツキモ出セヨ！」

「注文来たらな」

「ぴぎぴぎ」

「わかったわかった、飲ませてやつからさ」

「ムッフ、相変わらず仲良しっスね」

「んなこたあイイからとっと出せ」

「ヘイヘーイ、今回はレアっスよ！

「なんとって寝顔と私服姿を激写！！　これは私に食わせてよかったっしょ！？」

「……これ持つてるし、私服はアイコラだな」

「バレタ、さすがハヤト……せんせー」

「ケケケケケ、モチット上手クヤレヨ」

「ぴぎ」

「なっ、なはははははは……んじゃそーゆー事で」

「まあ待てや糞ガキ、おにーさんとお話でもしよっか………？」

「焼く焼く、オニク」

「マズハタン塩カラダナ」

「ぴう」

「どつか事務所に連れ込む気っスね！？可憐な美空ちゃんを汚すつもりっスね！？」

「しねーよ、とりあえずシスターシャークティの写真はスゲーー！残念だったが。」

とりあえず今日はそれ以外の頼み事でも聞いてもらっかな

「……レモンが合う」

「クウウツ、ビール二合ウゼ！」

「ぴうい！」

「……ハメ撮りとかっスね！？」

「えっ、春日って需要あんの？」

「あ、それマジで傷付くんでやめてください」

「カルビカルビ」

「メシノ上ニ一回置クノガ基本ダゼ」

「ぴいぴう」

「長谷川の事な、ちょっと朝倉と一緒になんとかならんかとね。

こんなのデメェらに言うのは間違ってんだろっけどさ、フィーリ

ング的に合いそうだしさ」

「休み時間とかに話すのがテンションの上がったアイツか、そんな時に一緒にいる私くらいっスもんね」

「頼める？ スンゲー長谷川に失礼なことしてると思っけどさ、このまま行くと新田センセの指導室にGOなんだわ」

「ういゝ了解っス」

「じゃあ朝倉に電話して呼ぶか」

「パンピー呼ブノカヨ！？」

「まあな、急げよ？」

「鬼畜ガ！」

「ぴぎ！」

「あっひゃっひゃ、私らはゆーっくり食べさせてもらっつスよ」

「ミソラ、悪い人……」

「でもそいやあ春日も『クラス内ではおしとやかに』つつってたけど結局3ヶ月と持たなかったな」

「H A H A H A H A H A ! ! ! !」

■ ■ ■

〈悩み事〉

「……ハア」

「さてと、とつとと来年度の準備をしねーと」

「……ハア」

「予定じゃ三年が1クラス、二年が2クラス、一年が1クラスか…

…」

「……ハア」

「一年坊主どもが一番ネツクだな……ま、今年を思い出せば何とか
なっか」

「って先生、何かツツコンで欲しかったんですけど」

「んな時は自分で言え、甘えるなよ村上」

「うう……手厳しい……」

「で、何か用か？」

「イヤッ、その用ってほどでもないんですけど……」

「じゃあ俺は仕事があるからさ」

「ヒドくないですか!？」

「いつもこんなもんだろ？」

「いつ、言いかえせない……」

「で、何の用だ？　俺も一応社会人でさ、暇ばっかじゃないんだわ」

「ああ、えと……その……今度幼等部で劇をして欲しいってちづ姉に頼まれて……」

「俺はいかねーぞ」

「そうじゃないんです！　そうじゃなくてその……役がちよっと恥ずかしくって……」。

ちづ姉が園児たちとシナリオ作っただけですけど、主人公にしてくれたのは嬉しいんですけど」

「じゃあやればイイじゃん」

「でもタイトルが『ナツミンの奇妙な冒険』ファントム・ネギット』ですよ！」

意味が分かんないです……！」

「えーやりゃあイイじゃん、以上！」

「何故に!？」

「頑張つてガキが作ってくれたんだからさ、笑いながらリクエストに答えてやるのが年上つてもんだろ？」

「うぐっ」

「ま、安心しな。」

「恥ずかしいんなら俺が痛みを他のヤツにも分けてやっからよ」

「えと……それは、どーゆー事で……？」

「ちょうどイイのが三人いるからさ。」

「那波にもそうやって連絡しとけや」

「……？」

■ ■ ■

「三時の茶飲み」

「……ずずっ」

「花粉症とは大変だな」

「もう三月だからな。」

魔力を封印されて便利な事などありはしないぞ」

「じゃあ頑張つて魔法を解くか、ナギつて人を待ってるよ」

「……ふんつ、貴様が解こうと男気でもみせんのか」

「俺にそんな才能ねーのは知ってたんだろ？」

「言ってみただけだ」

「そか」

「ああ」

「……でもま、俺は封印されて貰ってた方がラッキーだけどな」

「……何故だ？」

「友達が絶対そこにいてくれて、行ったら会えるって結構貴重なんだぜ」

「お前のために麻帆良にいらとでも言うのか？」

「イヤ……麻帆良にいるならいつまでも、こうやって茶と暮くらは付き合ってやるって事だ」

「せめてそれは私に多少なりとも善戦できるようになって言え」

「テメエが強すぎんだろっが！」

「当たり前だ！ 私を一体誰だと思っている！！」

「だーくえヴぁんじえる」

「……貴様の呼び方なら馬鹿にされている気しかせんぞ」

「気のせいじゃねーの」

「それは隼人が決める事だ」

「んじゃ気のせいだな」

「そうか……」

「……」

「……」

「『別荘』だっけ、直ったか？」

「魔力が足りん。」

何故だか知らんが『大停電』の日は多少ではあるが魔力が戻るかな、その日に直すさ」

「あゝ学園全体のメンテの日な……イヤイヤ、その日は侵入者多く

なるから警備に駆り出されるって事で、学園長が呪いを大量の魔力使って緩和したとか言ってたか？」

「知るか、私の魔力だ、私の好きなように使っよ」

「わリーヤッ」

「クククッ、悪の魔法使いだからな」

「俺も頑張って風邪にでもなるっかね」

「それではアピールチャンスが減ってしまうぞ、小悪党？」

「そいつは……困るな、大変困る」

「そういう事だ、貴様は私のフォローでもしている」

「ヤダし」

「期待してるぞ、隼人」

「知らねーよ」

「……」

「……」

「偶には抹茶もイイだろう？」

「偶には、な」

■ ■ ■

「同じ痛みを受けた者達」

「よゝ、中々におもしれー劇だったわ」

「……殺す」

「クハハハハ、運動音痴の長谷川じゃ無理だ」

「テメエのせいで私も非常識の仲間入りじゃねーか！」

「うつわ、私まで非常識扱い！？」

「和美はふつーじゃねーじゃん。

カメラ持って張り込みとかする中学生なんていねーわな」

「奉仕嫌いのシスターも普通じゃないからね、美空」

「私も普通じゃないとか……？」

「村上……アレをやりきるお前はもう普通じゃねえよ」

「千雨ちゃんの言う通り」

「『もっ、もうゆるさーん!』、『キレた……私の中の重要な何か
が……!』。」

アハハハハハハッ、さいっこの役者じゃん!」

「うう……恥ずかしくてもう幼等部の前を通れないよ」

「ま、気にすんな気にすんな。」

んじゃ俺はお前らてきとーに使える道具も見つけたし、帰るわ」

「逃がすか性悪!」

「弱みを私たちだけ握られるってのもなーんか嫌だしねえ」

「おおっ、なら飛びっきりのがあるっスよ」

「え、何々?」

「ちょうどイヤ、耳に入るくらい大っぴらに頼むぜ」

「……」

「……」

「……」

「につ、逃がすなああああつ!」

「
「
「
遅いから!」
「
「

九匹目 教師として生徒との付き合いは大事（後書き）

ところどころに伏線を。

大したものじゃない気もしますが……。

十匹目 大人だろうがガキだろうが嫌いな人間がいるのは普通（前書き）

物語は少しずつ原作に向けてです。

十回目 大人だろうがガキだろうが嫌いな人間がいるのは普通

三月になって、春休みになって。

んな事になったってさ、やっぱ俺ら教師には仕事がある訳だ。

来年度の授業予定だったり、行事予定だったり。

まあ俺は受け持ちの授業が他の先生に比べれば少して仕事少ないからまだ楽なんだがね。

と言ってもまだ二年目までちよいつとの一年目である俺には手が回らない事もいっぱいだわ。

そー考えればクラス受け持ったりしてる人はスゲーよな。

生徒31人の管理も併せてしなきゃいけねーんだからさ。

さらに忙しいのが学年主任。

仕事の量自体はよーわかんねんだが少なえのかもしれないけどさ、重要度は比べ物にならんわな。

主任はつまり責任者、『責任者の仕事は責任をとること』なんて当たり前のことかもしれないがーなり大変だわさ。

人間誰だって、俺だって責任なんてさ、取りたくねーもん。

その立場にいる新田センセ、胃潰瘍とかにならなきゃいいけどよ。

ああ、後は他の人の仕事が終わらねーと帰れねえから辛いって言うてたっけか。

今度なんかねぎらいにお酒でも送ろかね？

まあある程度仕事を片付けた俺であります、瀬流彦が来年度からこっちに移って来るんだよな。

そんな訳でその準備に駆り出されてら。

教員のデータとか、俺にはよくわからん事は新田センセとか事務の人がやってくれるから、俺は物理的な事だな。

麻帆良学園本校男子中等部にあるアイツの机から荷物をこっちに移して……結構大変だわな。

他の先生と比べれば比べ物にならんけどさ。

ちなみに俺は去年からだ、一応瀬流彦と合わせて来年度の二学年、新田センセが学年主任務めるエヴァやら桜子やらがいる学年の担当だな。

ま、偶にHRを手伝ったり、デカイ行事の時はその学年の括りで動くようになってるだけなんだが。

だったら最初っから、一年目から瀬流彦こっちでやらせりゃいいのについて思ったのは俺だけじゃねーな。

「えと……僕の席はここか」

「ちなみに俺はお前の隣な」

一番給仕とか出来るような、コーヒーマーカーに近い位置なんだよな。

ま、それぞれの学年の下っ端の役目だから仕方ないんだがよ。

どーせなら瀬流彦とじゃんけんで席の位置を変えとかゆーイベントがあっても良かったのに……。

「とりあえずコーヒーでも淹れてもらおうか」

「えーっ!？」

しかし一学年にクラスが24もあるマンモス学校だからな、麻帆良は。

さすがは『学園都市』の名に恥じないってヤツだわ。
それに更に俺らみたいなのと、副担任が付くクラスがいくつかあるから、一学年当たり50人近い教員がいるんだよ。

「冗談冗談、まあ最初だから俺が淹れてやるよ」

「あつ……うん、ありがとう」

それをまとめるのが学年主任の仕事な訳だから……その苦勞はハンパねえな。

ガキどもまとめるよか、その何倍も大変だろうよ。

少しでもそれを緩和するためにさ、一学年に学年主任は三人いるんだが。

だったら学年主任って呼び方は、ちょいとおかしい気がするんだよなあ。

ちなみにA～H組までが新田センスの担当。

I～O組までとP～X組はまた違うベテラン教員が担当してるわけだ。

俺らみたいなのもどのグループかに組み込まれてるんだわ。

もちろん俺は新田センスの担当。

『もちろん』って言い方はおかしかったかね？

机の並び方もそれに準拠してて、担当する学年主任を机を置いて、その前面にそのグループに配属された教員の机を順番に向かい合わせに並べていくんだわ。

ちなみに俺は一番新田センセから遠い位置、よく俺のどこまで来てくれるんだがさ。

心配してくれてんのかね……、ホントありがたい事だな。

「おや、相も変わらず悪趣味な人形を頭に載せているなあ、香坂」

「……そすか？俺は可愛いと思うんですけどねえ」

「ふくくくくつ、その年にもなってお人形遊びかあ……幼稚」

「童心を忘れねえって、俺は素晴らしい事だと思うんすよ」

「過ぎれば醜いだけだ、そしてお前は醜いだけだよお。」

「……君は次の四月からこちらに来る瀬流彦くんだねえ？」

「へっ、あつ……はい、数学を担当します瀬流彦と言います」

「向こうの先生から話は伺っているよ、優秀で快活な若者だと」

「あつ、ありがとうございます……」

「だからこそこのような屑と……クズと……仲良くしてはいけないよお。」

「君までもが腐ってしまうからねえ」

「……誰がクズだ、あアン！？」

クズとは言っじゃねーか……なア。

顔見るたびに突っかかって来やがって……このクソジジイが。
蛇みてエにしつけーンだよ！！
ねちー男は嫌われるだけだ！！

だから奥さんにも逃げられたンじゃねーの、H A H A H A H A
H A H A H A ！！！！

「……ほう、随分と敵意たっぷりな目だなあ。

反抗的な態度をとるのはよろしくないと私は思うよあ？

大人な対応をしないとねえ、キミも大人なんだからなあ」

「……はいっす、すいませんでした。

では俺も仕事があるので……」

「……ふう、キミは年上の教師が目の前にいるのに、コーヒーの一杯も入れれないほどに気が利かないのかねえ？

だからこそ屑！クズ！！……なんて言葉が私の口からつい飛び出してしまつのではと、考えるべきだと思うのだがあ」

「……すいませんでした、申し訳ないです」

こっ、殺してやりてエッ！！

確実に俺は今人の殺せそうな笑顔を向けてるな、目の前のクソジジイに向かつて。

瀬流彦とかビビってんじゃねーの。

あまりに沸騰した頭で、目を逸らせば暴れちまいそうで、目の前の
澱んだ眼を見る事で精一杯だがさ。

周りの人間は何時ものように見て見ぬふり。

そりゃそーだ、誰だってこのクソジジイに目え付けられたくねーも
んな。

俺だってそうだ。

だから我慢……ガマン……！！

俺が悪いつてのも一応は有る。

ケジメは付けたつもりだが、それでも有る！！

だから我慢だ、香坂隼人！

爆発しちまうほど、俺はガキじゃねーだろ？

なんたつて転生だつてしてんだからな。

「……ブラックでよろしいですか？」

「ミルクを一つに砂糖を四分の一だけ、入れるにきまつてるだろう？」

キミは目上の人間の好みすら、一年たつても覚えてないのかねえ」

「申し訳……ありませんでしたッ」

テメエの好みなんざ死んだつて覚えるか！！

これでもちゃんと新田センセが取りまとめる先生らの好みは間違
いなく覚えてんだよ！！

俺のコーヒーは美味いつて評判なんだよ！！

イラつくイラつくイラつくイラつくイラつく！！
殴りてエ殴りてエ殴りてエ殴りてエ殴りてエツ！！
拳を！顔面に！！たたつき込んでやりてエエエエエエエエエエツ
ッ！！！！

……がつ、がまんだ、がまんだ、がまんだ。
ここで殴ったら昔と同じだろう？

俺は香坂『先生』だぜ……やればやれる男よ！！

うしっ！持っていく……か。

「お席に置けばよろしいでしょうか？」

「イヤ、キミの席に置いてくれればイイよお」

「……ハア、わかりました」

俺の席？

書類はねーよな。

……うん、ねーな。

「どうぞ」

「……マズいな、仕事も遅いうえに内容まで腐っているとは……ま
ったく考えられないねえ」

「精進します」

零れたって……零れたって……零れ……たって……！？

「おおすまないねえ、つい人形にぶちまけてしまったよお。

まあ洗えば……イイだろう？」

座らせてた……ゼロ……と、スラばうにかけやがった！！

「テンメ×「落ち着け、香坂」新田アツ！！離s「落ち着けと言つとるだろうがツツ！！！」……………」

振り翳して顔面に叩き付けたろうとした右腕。
手首握り込んで止められちまった……。

……新田センセごと叩き込む事も出来るっちゃ出来るんだが……出来ねーよな。

「ああ新田先生か、すまないね、キミの担当しているその屑！の人形についてコーヒーを零してしまつてねえ」

「……坂上先生、ならば謝るといふのが何より一番に行うべきだと私は思いますが」

「すまないね、キミ」

「それ以外にも謝罪を」

「謝罪？ 私がついつかりと、犯してしまった愚行はそれだけだと思うがねえ」

「私の下に付く立派な教師！ 香坂先生を屑と呼んだことを謝罪し

ていただきたい!!」

「……ふくくくくつ、それは事実だろう。

その肩が！クズが！！昔何をしていたかというのは貴方もご存じだろう？」

「元不良が更生して教師になったという事がそこまでおかしいか！！」

「この男は私に手を出したあ！！」

馬乗りになり何度も何度もその拳を思いっきり私の顔面に叩きつけたあ！！

そんな人間が屑で！クズで！！なくてなんだというのですか、是非とも……教えてもらいたいものですねえ」

「その事は香坂はさんざん貴方に謝ったはずだ！

更生した高校三年生の時から、教師になったこの一年も！！

私は貴方に謝罪をしていない香坂を見た事がない！！」

「だとしても、私の心に残った傷はとても大きく深いもの……謝罪だけで許せるものばかりではないねえ。

それに……屑を！クズを！！更生させてやるのも教師の仕事……私はむしろ感謝の言葉を貰いたいところだよあ」

「それがっ……それが教師を預かる学年主任の姿かアッ!!」

……いかんっす!

そいつは……ダメっすよ、新田センセ。

俺のために拳まで振り上げてくれたのはスゲーうれしんですけどね。やっぱいかんっすよ。

「坂上先生の言う通りです、自分がクズでした」

身体が爆発しちまいそうだ。

胸が熱く燃えあがってる感じだな。

胸が冷たく冷えあがってる感じだな。

「自分がダメで、自分にご指導していただいてる坂上先生は全く悪くありません」

ギシギシと全身の筋肉が悲鳴を上げてる気がすらあ。

エヴァに教えてもらって、でもぜーんぜん出来なかった『気』が、俺ん中で渦巻いてる……気がする。

「なので……」

両膝を地面に付く。

べったりと手の平を広げて床に付ける。

額を冷たい、ちよつと薄汚れたそこにひっ付ける。

「……これからも、ご指導ご鞭撻のほど、どうかよろしく願います」

土下座だ…… 思えば自分からコイツにやったのは始めてかもしれない。

「こっ……さか……」

「ふくくくくくつ、わかっているではないかあ。」

いつも精々そういった態度でいたまえよ、キミい」

だが覚えとけや、坂上。

……俺の土下座は、安くはねえぜ？

そんなこんなでその日の放課後。

俺は…… というより俺ら二年団は一つの教室に集められてんだわ。

スラぼうにゼロ？

もちろんアイツいなくなってすぐさま、学園のシャワールーム借りてきれいに洗ってやったぜ。

しかしアイツは…… アイツ…… は…… 思い出すと頭の中で幾万と殴りつけてんな。

アイツの名前は『坂上・S・和利』。
俺が不良時代にフルボッコにしてやった魔法先生だ。

だからスラぼうを見せてっからしつかりとコーヒーを……かけてエ
……行きやがったアツー！

ゼロの事もエヴァの元従者って知ってっから、巻き込んだツツー！

まあそうでねかったとしても、アイツはきつとやっただろうがねえ
……！！

……落ちっこ。

知りたくもねーのにガンちゃん教えてくれた。

ガンちゃん、昔アイツと一緒にだってグループ組んでたしさ。

今は俺と仲良くしてるせいで嫌われてるみたいだけど。

性格的には自分が正しいと思った事を曲げない超々頑固者。

そしてその『正しい』の範疇に入っていない、要は俺みたいなのが
大っ嫌いらしいね。

『正義とは正しき者の身に齎される称号』とかよー、ホントまーっ
たく理解できん理論を持つてんだと。

で『どのような場合も正義は正しく悪は間違っている』と徹底的な
までの勧善懲悪っぷりらしいね……ガンちゃんが言うにだけど。

そんなこんなで自らを『正義の魔法使い』と語るグループのリーダ
ー格なんだと。

『エヴァどっか行け、無理なら殺せ』派のリーダーでもあるし。

なんでも代々教会に仕える騎士の家系らしくってさ、昔御先祖をエヴァに殺されたんだとよ。

だから嫌いってところもあるらしいけどさ、そう考えりゃあんなの皆だよな。

戦争だっていっぱいあった訳だしよ。

でも今までしつこく個人に対して言ってるヤツらなんざふつーはいねーだろ。

そっちで殺されたりはしてねーのだったの。

その相手にはエヴァと同じくらい恨みを抱いてんのかっての。

意味わからん。

ホントわけわかめ。

ま、それは置いて、とりあえず俺の嫌いなヤツだ。間違いねえや。

でで、そいつもあわせてこの教室にいるんだが……。

「ホホッ、待たせたの」

呼んだのは学園長なんだよな。

何の用事かは知らんけどよ、まあなんかの用事なんだろうさ。

てか高畑先生もいるじゃん。

かーなり久々に見た気がするんだが……。

担任クラス受け持ってたのに何してんだろうね。
出張多くね？

ほぼ副担任の『源しずな』先生が受け持ってたよな。

だったら誰か別の人を担任にすればよかったのにさ。

源先生は学園長の秘書も兼任してるし。

……ホント意味わからん。

「ここに集まってもらったのは他でもない、新任の先生についての
事じゃ」

新任の先生？

こんな集まりいつもしてんのかね。

そこんとこどーっすか、新田センセ。

……驚いた顔だな。

やっぱ異例の事でもあるのかね。

異例な……異例ねえ……大量に来るとか？

だったら別に振り分けられるか……。

わからん、俺にゃわからん。

「来年度の三月に、彼はここ麻帆良に来てもらい教職についてもら
うこととなってる」

政府のお偉いさんの息子とか？

それくらいしか浮かばねーよ。

「そしてそこで正式に教員として採用できるかを検討した結果、再

来年度より『担任』と言う座についてもらう手筈となっておるのじや」

……ハア！？

担任……担任！？

おかしくね！だってだって、実習明けの一年目のペーパーが担任になるってことだろ！？

順序的におかしいだろ！

だったら俺を先に担任とかにしるよ！！

「学園長、それは間違っているのではないでしようか」

「ふむ新田先生か……彼はオックスフォード大を首席で卒業するであろうが、それでもかの？」

「いえ、教職に学歴は関係ないというのは学園長こそよくご存じかと思われますが……」

「そうじゃの、そこでワシはそんな彼をサポートできる人間を副担任に就任させる心積もりじゃ」

「なればその人間を担任に据え、その彼を副担任にすればよろしいではないですか。」

『中学生』とは多感な時期……現場を少しでも知る人間が担任になるべきです」

「……違いなの」

だよなあ。

んじやなんで担任になんて思ったんだ？
間違ってるよな、ぜってーに。

「が、それでも彼を担任に据えたい理由が有る。

それは彼、『ネギ・スプリングフィールド』君が『10歳』だからじゃ」

……はい？

えと……俺いくつだっけ……23だな、うむ。

で、10歳……いつだ？

13年前だな……バリバリの小学生だわ。

口ぶりでは担任になるっぽいが……おかしくね？

イヤイヤイヤだつてさ、10歳だろ……。

んで担当するヤツらがここに来るって事は、14歳くらいな訳だ。

「年上を教育する！？ それはおかしーだろ！！」

「おかしくはないさあ。

自分より年下の少年に指導される事で生徒の自意識を高めて、自立した大人に育て上げようと考えているのですねえ。

さすがは学園長ですよお」

何言ってんのアイツ。

バカなの、バカなの、ねえバカなの？

なっ、瀬流彦、お前も言っただれ。

「……『スプリングフィールド』、『スプリングフィールド』……
『英雄の子』……まさか、けど……それも、いやっ……」

「おーい、聞いてつか？」

……無視だよ。

まーとりあえずトンデモ論を言ってるって事は解った。

てか担任やらせる前に初等部に通わせるよ。

そっちが先だろ。

おつくすふおーどだか何だか知らんけどさ、ガキに31人まとめ上げて、その上『教育』が出来る訳ねえだろうよ。

「言いたい事があるというのは重々承知しておるわい。

じゃからの、その意見はまた明日、午前十時からまったく同じこの部屋で話し合おうと思っておる。

一人一人に意見を聞くからの、自分自身の意見を育て上げて来るように。

赴任はまだ完全な確定ではないしの、その可能性もあると考えておいてくれるかの」

「学園長！ 話はまだ！！」

「まあまあ新田先生、とりあえず明日と言う事で……」

……行っちゃった。

コレって夢？

……あ、夢じゃねーのか。

そいやーココってばガキが教師で、年上の生徒に魔法使ってエロいことする漫画だった。

十匹目 大人だろうがガキだろうが嫌いな人間がいるのは普通（後書き）

明確な嫌なキャラが欲しかった。

と言う事でオリキャラ、ガンガンご指摘どうぞ。

十一匹目 誰にだって譲れないモンは有るもんだ（前書き）

ちよつと長めです。

十一匹目 誰にだって譲れないモンは有るもんだ

そんなこんなでその日の夜。

ガキが教師として、しかも担任として麻帆良に来るっつートンドモ発表を受けた日の夜。

今度は体育館に先生が集められてんな。

さつきと違うのはみんながみんな『魔法先生』だって事だわ。

今日の警備は生徒だけにやらせるみたいだわさ。

龍宮のヤツは『イイ稼ぎになりそうだ』ってスゲーうれしそうな顔したたけどよ。

どこのおっさんだよって話だ。

ま、それは置いてやっぱ『ガキ先生』の話についてなんだろうねえ。

アレは漫画だったからへえ〜と許容できたがさ、やっぱ現実的に来るとなればまったく別の話。

一にありえねえ、二にありえねー、三にありねえっての。
常識的に考えてさ、絶対間違ってたな。

いつくらちよ〜と他と比べれば『異常』ととれる麻帆良だろうとさ、超えちゃいけねー線ってのがあると思うんだよ。

『担任』は結構でかいぜ？

エヴァや桜子らのクラスは『問題児の巣窟』な〜って不名誉な称号を得てるけどさ、そいつは高畑先生のせいでもあるじゃん。

よーわからんがまほーつかいの英雄なんだろう？

あの人にしか解決できない事件とか、あの人であるべき事柄とか、いろいろあるらしくよく海外に出張してるけどさ。

それでもあのクラスのヤツらほっぽってイイって事にはならんדר

……ウム、ちげーねーや。

だつたら最初つから源先生を担任として付けるとかさ。

あの人が学園長の秘書として大変なら、他の人を担任にするとか。

ま、高畑先生優秀だからさ、どうしてもあの人を担任にしたい理由とかがあるなら俺みたいになつてもそつちに手が回せるのを副担任に据えるとかさ。

……いろいろ、あると思うんだがなあ。

じゃねえや、とりあえず今は目の前の事柄。

どーせ『ガキ先生』についての事なんだろう？

しかしなんでこつちで独自に話し合いの場を持つ訳？

二の次じゃね？現場が一番じゃね？

「や、隼人君」

と思つてるうちに光さんに……勢揃いだな。

ガンちゃんに真也さんに瀬流彦。

それと……。

「隼人くん、ひさしぶりだね」

「明石さんの方も久しぶりです」

「おお、すっかり大人になっちゃって。

何度見ても昔とは印象がまるで違うよ」

「若かったんすよ、あの頃は」

「フッフ、そう言われると時の流れを感じるよ」

そんなこと言いつつある目の前の、笑顔の若い兄ちゃん。
これで40超えてるつつーんだから不思議なもんだわ。

この人は麻帆良大で教授を務めてる魔法先生『明石裕二』。

桜子と合わせてもう一人の妹分である『明石裕奈』の親父さん。

この人は昔っからスゲーと思うよ。

だっていくら桜子の親が大丈夫って言うからって不良相手に子守り
なんて頼まねーよ。

それを楽々やってのけるんだから、やっぱ敵わねえなって思えちま
うね。

じゃなくって！

「あゝこの集まりってやつば」

「そうだね、隼人君の言うように『子供先生』についてだと思っよ」

「集まるという事は『議論と多数決』だろう」

「『議論と多数決』……なんですかい、それ？」

「うーん……簡単に言うただね『我々魔法使いは民主主義を大切にする』、という風潮があるんだ、昔からね。

まだ組織だった魔法使いがおらず、一人一人が在野で魔法学を含めたさまざまな学問を研究していた頃にも、魔法使いたちは何年か何十年かに一度、何人かが集まって会合を開くという風習があったんだ。

今の魔法使いたちとは比べ物にならないほどに頭が良く優秀な人たちが、今ある形式化した魔法を作り上げているわけだけど……。

だからこそ知っていたんだ、『一人だけでは到達できない境地がある』という事もね。

どうしても誰か一人が物事を多方面から見続ける、という事は難しいからさ」

……つまり『納豆は不味い』といって不味い納豆しか知らなかったら結局納豆は不味いまま。

美味しい納豆を知ることなんざ出来ねえけど、他の人からの意見を貰えば納豆は美味くなったり食べれるようになったりするってことか？
例えばはかなりおかしい気がするが……。

納豆美味しいよな。

「そんな会合で例えば何かを決定する時、魔法使いたちは幾昼夜と話し合いを続けて、多数決を元にその物事を前へと運んで行ったん

だ。

議論を行えば行っほど次々に新しい意見や見解が現れ、それをいろいろな角度から見る事が出来たからさ。

まあ普段籠っていたからこそとばかりに自分をアピールしたり、ストレスを発散させたり、単純に議論を楽しんだり……娯楽でもあったみたいだし。

で、最終的にどれを決定事項とするか、議論に参加した全員で決めたって事だね」

「……律義にそれを守る理由とかは有るんすか？」

「そうだね、多分だけどその会合を始めた魔法使いたちが最初に偉マギ大なる魔法使いと呼ばれることになったからかな。

基本的に『魔法使いたちの最終目標は偉大なる魔法使いになる事』マギステル・マギって考えが昔からあるからね。

真似をして少しでも彼らに近付けれるようになって思うのさ」

「で、いつの間にかそれが当たり前になってたと」

「そんなとこかな。

まあ偉大なる魔法使いは『成るモノでは無く成っているモノ』マギステル・マギだと僕は思っただけだね。

『議論と多数決』自体は僕は好きだしさ」

まあ民主主義だの多数決だのは基本だもんな、現代社会じゃ。

てことはかなり進んでたってことかね、魔法使いさんらの文化は。

「あの……それで何を決めるんですか、明石教授」

「そうそう、決めるのは『英雄の息子』、『ネギ・スプリングフィールド』の修行場を本当にここにすることになって事だと思っよ」

……決定じゃねーんだな。

俺らんとこ来たからてーつきり完璧決まりきった事かと思ってさ。

生き生きした明石さんの話はさらに続いたね。

まあ全部わかったからイイんだが……。

籠ってた訳だな、明石さんも。

今度飲みにも誘おうかいねえ。

で、だ。

明石さんの言う事をまとめると……。

魔法学校を卒業した人間には必ず『卒業証書』が渡される訳だが、それには魔法がかけられてるらしいね。

それこそずっと昔から、変わらず利用され続けて来たらしいわ。

何でも『本質を見抜く魔法』らしいが俺にはさーっぱり。

聞くに開けば『その人間が人として魔法使いとして、成長できる修行場を示してくれる』つつ、占いかね、そんな魔法がかかってんだと。

ちなみにガンちゃんも瀬流彦は『日本で学生をすること』で、光さんは『食文化に触れること』で、真也さんは『魔法界にて旅をすること』だったらしいな。

明石さんは『魔法の歴史を新しく解明すること』で、そんな訳で教授になってんだそう。

イメージに合ってるよな。

ま、そんな事であるけど何でもそうだけど例外ってのがあらしい。それが今回みたいな件。

『本質を見抜く魔法』により成長できる場に行く事は出来るんだが、なんでも少々融通の利かない魔法でもあるんだと。

例えば明らかに力量不足なのに『ドラゴンと戦ってこい』とか『紛争止めてこい』とか無茶苦茶な課題が出されたり。

例えばなんかの理由で無くなってしまった魔力溜まりを指して『そこに赴いて魔法使いと生活して来い』とか。

例えば男なのに『女子高校生になって生活しろ』とか。

他にも嫌悪感を抱かれているところに行けとか。

これまでの結果を見るに、統計的にほぼ確実に修行場に行った魔法使いたちは一周りは大きくなれるんだと。

でもまあイヤイヤ明らかに無理だろ……って感じの指令も出てくる訳だ。

で、今回もそんな感じ。

『10歳の中学教師』なんて絶対にありえねえ事柄だ。

『倫理的におかしいだろ』と『議論と多数決』により認められたな

らば、次の候補を魔法により出させて違う修行場に行く訳なんだが……。

なんでも今回はめるでいなまほーガツコが『先方の意見により決定する』というふざけた決定が出した訳だ。

要は丸投げ、舐めてやがるぜ。

ビシッとビシッと！断るのが当然だと思っ俺はおかしくねーよな？

そんなこんなで『議論と多数決』。

言っとくがアレだぜ、俺は絶対に認めねーよ。

体育館に集まった魔法先生たち。

麻帆良中から集まった、この学園を守る勇士たちじゃ。

この者たちと今から議論を繰り広げ、多数決によって決定を行おうと思う。

つまり『ネギ・スプリングフィールドを教師として麻帆良に迎え入れるか、否か』を。

ワシ個人として、『麻帆良学園都市学園長 近衛近右衛門』としての立場ならば当然の如く新田先生のように『NO』だの。子供に、高々10のヒヨッコに、勤まるほど教師とはヤワで甘い職業ではない。

もし教育者としてそれを心より奨励する者がいたならば、『気が狂うとる』と間違いなく言いきってやるわい。

じゃが、『魔法使い 近衛近右衛門』としての立場ならば……ワシは、そう言いきる自信がない。

魔法使いたちの心の支えでもあった『紅き翼』のメンバーはタカミチくんを残して姿を消してしもうた。そう、ただの一人も残さず……の。

そして一番の『英雄』と讃えられ、『マジステル・マギ偉大なる魔法使い』となった最強の魔法使い、『サウザンド・マスター千の呪文の男』と謳われた男『ナギ・スプリングフィールド』は死んだとされておる。

魔法使いたちは今、進むべき標を見失っておるのじゃ。

じゃがナギのヤツはただでは死ななんだ。

息子という大いなる希望を残して彼は姿を消したからの。

その希望が今回議題に上り、麻帆良に来るか否かを決める相手である『ネギ・スプリングフィールド』。

ワシは……わからぬ。

ココに来させるのが彼のためなのか、否か。
生徒たちのためなのか、否か。

彼が来る可能性が有るかもしれぬという事で『ネギ・スプリングフィールドの為に集めたクラス』をワシは作り上げてしもうとる。

ワシは間違っておる。

教育者としても、人としても、ただの孫バカな爺としても。

そこまでわかっておりながらも、ワシはわからぬのじゃ。

何が正しくて、何が間違っておるかが。

ワシは一体、どうすればよいのじゃ？

生徒たちの事を第一に考えるべきなのかな？

それとも新たな『英雄』の誕生に全力で手を貸すべきなのかな？

わからぬのじゃ、ワシは。

『旧世界の賢者』とも称されたワシであるというのに。

だからこそ、そんな気持ちもワシを押し出しこの会合を開いた。

『議論と多数決』は魔法使いたちにとっては大切な事柄。

昔から綿々と続けられてきた歴史に則り、ワシはこの場でその問題にケリをつけようと思う。

このか、エヴァ、アスナちゃん、刹那くん、あのクラスに集められた少女たち……そして、ネギくん。

耄碌したこのジジイを許してくれとは言わん。

怨んで憎んで、ワシをいつかその手で裁いてくれ。

心のどこかで許される事を望んでおる、この愚かな下種を。

「それではこれより『ネギ・スプリングフィールド』をこの麻帆良で教師として働かせるか、否かについて議論を行う！

意見のある者はどんどん出していつてくれい！！」

といつても千近い人間による議論じゃからの。

騒がしくなる事は間違いないと思うが……どうなるか。

「へい、ぜってーに間違つてると俺は思うね」

ホホッ、いきなり一発目で、のっけから否定かの。

さすがの胆力じゃ、香坂くん。

「中学生をガキに教えさせる？

頭にウジ沸いてんじゃねーのか、考え出したヤツはさ」

「ふんっ、屑に！クズに！！教わるよりは幾万倍とマシだと思うがねえ。

私はとても構わないと思うがあ」

「……んじゃ坂上先生、是非ともそのガキをきょしにするべきだつてアンタの意見、その理由が知りたいね……！！」

いざ始めたわけじゃがの……この議論はどのような展開になるか、

それはわかりきっておる。

浮かび上がるのは二つの意見。

皆がそのどちらかに付き、何度も激突するであらう。

即ち……

「新たな『英雄』を育て上げるのは我々正義の魔法使いたちの使命ではないかあ」

『英雄』に固執する、魔法使いや裏の武芸者たち。

「ふざけんなよ！ そのせいで中学生生活をぶっ壊される生徒の事を考えてみやがれ！！」

それと『教育者』という立場から異を唱える者たちにの。

「『大事の前の小事』とはよく言うではないかあ」

「小事だ…… テメエは人一人の人生が小事だったのかッ！！」

「彼が英雄となればその何倍もの人々を救う事が出来るだろうなあ。

それに優秀と聞くが…… あっという間にキミなどよりは良い教師になると思うがねえ」

口を開こうとした香坂くんを止めたのは神多羅木くんだの。
そして前に出たのが明石くん。

「子供を持つ親の身から言わせてもらおうよ。

全力を上げて僕は却下したいね、子供より年下の教師に教えてもらうなんて事は」

「何故ですかあ？」

「ありとあらゆる分野で、ただ『知能』の面だけを除いてまだまだ未成熟な子供ですよ。」

「10歳の、そんな彼に教えてもらいたいとは誰だっと思わないです」

「足りないのならば補い教えれば良いではありませんかあ。」

その為に私たち『教育者』がいるのですからあ」

「それは『教育者』という存在を取り違えているよ。」

本当にあなた自身がそうならば、まずは生徒の事を第一に考えるべきだ」

「考えていますよ、もちろん第一にい。」

生徒は先生からの指示待ちではなく、自分から動くようになるう。

『優秀な教師は生徒を育て、優秀な生徒は教師を育てる』……知っているでしょう？

それに『未来の英雄』から授業を受けるとは……なんと貴重で代え難い財産となるではないですかあ」

あんどり口を空けて固まっておるの。
まあちよつと無茶な論理じゃからのう。

じゃが一理あるというのも確か。

昨今の生徒たちは『自主性』や『やる気』に欠ける者たちもしばしば目に付くしの。

己の好きな物事には手をこまねいておるがそれ以外は誰かに言われぬと動かん。

そう考えれば『動かざるを得ぬ』、そんな状況を必然的に作り出せるし。

誰かしつかりとした補佐がおれば何とかはなるかも知れぬ。

言うように『教師が生徒を育て、生徒が教師を育てる』ような構図も作る事が出来る。

むう……授業担当を担任にするクラス一つだけに絞り、仕事をクラスの引率と授業だけにしてやれば……。じゃがそれ教師じゃないの。やったらやりっぱなしと言うも……褒められた行為ではないわい。

次に口を開いたのは……武集院先生か。
しかしカツコイイ名前だの。

「初等部教員の僕から言わせてもらうと彼には是非『先生』ではなく『小学生』になつて欲しいね。

『英雄の息子』というのは確かに大したネームバリューだけど、それでも僕にとっては『10歳』という年齢が気になるよ。

同年代の人と同じ空間で同じ物事を学び体験することは、精神的にも肉体的にもとても大事だ。

『英雄』にはいつだってなれるけど、今しか出来ない物事だつてこの世にはいっぱいあるんだよ?」

「それは『普通の子供』だろう?」

『英雄の子供』とはまるで能力も立場も何もかもが違うのだよお」

「僕には違うとは思えないよ」

「違うのだよねえ存在からしてえ。」

身に宿す才能も、信念も、意志の強さも何もかもが、まるで愚鈍な者たちとはねえ」

「貴方は子供たちを平等と扱わないのか!」

「あたりまえだろう。」

人は生まれながらにしてすべてが違うのだよお。

容姿も能力も国籍も立場も経済力も、ありとあらゆる事柄が違っているなんてことは当たり前じゃないかあ。

それをすべて平等に扱うなどとは……それこそ世界でも変えないと無理だと思うよお」

まあ教師も人じゃからの。

よろしくなくとも、自分の好き嫌いで生徒に対する態度を決めてしまう者がほとんどじゃ。

それこそ聖人君子のように、まったく誰に対しても同じように接するなどと言う事が出来るのはほんの一握りにすぎぬ。
いくらそう在ろうとしてももの。

それが普通、それが当たり前じゃ。

……しかし世界を変えろとはまた突飛な考えを。
誰もが幸せで平等な世界、かの。

じゃがそれは素晴らしいのかもしれぬが……ワシは遠慮したいわい。
人生は山あり谷ありじゃからこそ面白い。
自分と違う人間があり、自分とは違う考えがあり、自分がまるで理解出来ぬモノがある。

じゃからこそその世界、じゃからこそその人じゃ。
そこんところ、どう思つかの？

まあそれは置いとくわい。
それよりも坂上くん、お主は一体どうするつもりなのかの？

少々偏見に固まった論理。

それでは付いて来る者もついて来ぬ。

『教師としてあるう』という想いは誰しも心の中にあるからのう。

さてはてどうする気じゃ？

「……間違っている」

罵り合う喧騒の中にポツンと落ちたこの声は……ガンドルフィーニくんか……。

どちらに対して彼は言っただんじやろうの。

一番と言っていいほどに、彼は昔と比べて変わった人間じゃ。

それが良い方向か、悪い方向か詮議するのは置いておくとしての。

「坂上先生……貴方は『英雄の息子』を『英雄』として育て上げるべきだと考えているのですね……？」

「そうだと言っただうなるう……？」

「ならば……ダメですッ、ここでは」

「……ほう……何故ですかねえ……」

獲物を目の前にした『蛇』を思わせるような笑み……。

……いかなぞい、ガンドルフィーニくん……その先の言葉を口にしては。

わかっておる、お主の言いたい事は。

いずれ誰かが口にする事じゃ。

じゃがそれを言うては、戻れなくなるぞい。

一気に炎は燃えあがり、もう誰にも止める事は出来のうなる。

恐らくネギくんが麻帆良に来る事は『確定』する。

気付いた神多羅木くんが止めに入るが遅い。

その前に口からこぼれ出しておった。

「この麻帆良学園には『闇の福音』ダーク・エヴァンジェルと称された最悪の魔法使い！

『吸血鬼の真祖』でもある『エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル』がいるのですよ！！

彼の『千の呪文の男』サウザンド・マスターに敗れ、生き永らえた悪の魔法使いが！！

魔法使いたちにとって大切な財産である彼を、もしここで死なせてしまったらどうするのでしょうか！！？」

……決まったの。

「……ならば倒せばイイ……ならば倒せばイイ！！

彼の『英雄の息子』と力を合わせて悪を倒せばイイではないかあ

！！

それこそが『正義の魔法使い』である我らの使命なのだからあ！

！！」

「自分の身の丈もわからないのか！

彼女は『英雄』だからこそ倒し封印出来たような存在なのだぞ！！

魔法学校を出たばかりの少年にそのような真似が出来るわけがないだろうが！！」

「出来るのだよ『英雄の息子』なのだからなあ！！

我々は『正義の魔法使い』だ！『悪』であるあの者を恐れぬ強き力と心を持った存在だあ！！

それに『未来の英雄』の助力が加わる……勝てぬわけがない！

「無茶苦茶だ！！」

「無茶苦茶ではない！どんな物語であろうとも魔王を倒して勝利を勝ち取るのは『正義の心を持った人間』なのさあ！！

そうでなければ『紅き翼』が『墓守の宮殿』で斯様なまでに噴出した悪魔を薙ぎ倒し勝利を掴み取る事など出来なかったあ！！

そうでなければすべての国をまとめ上げ最終決戦に臨む事など出来はしなかったあ！！

そうでなければ今我々がここに居るなど出来はしなかったあ！！

そして我々は成れるのですよ……新たな『英雄』の助力にい、立ち会えるのですよ……『英雄』の誕生にい。

魔法界の歴史に新しき歴史を刻むための立役者と……讃えられるでしょうなあ」

ここ麻帆良にいる魔法使いや裏の武芸者たちは他の所における者たちに比べて強い力を有している者がほとんどじゃ。

麻帆良が世界的にも有数の『霊地』であるために、そこを昔から悪用される事を防ぐために。

他人より優秀な者たちが集まってきておる。

厳しい鍛錬に打ち勝ち力を手に入れた者たち。
つまり『エリート』たちじゃ。

じゃが裏を返せば『英雄になりたくてなれなかった者』でもある。

『紅き翼』のように駆け抜けたくもそこまでの力は無い。

じゃが人に比べれば誰もが称賛し讃えられるような力は持つておる。
本国に帰れば高位の術者とされ、本国の魔法騎士団にも劣らぬ力を、
彼らは有しておるのじゃ。

力ある者には相応してプライドを持つておる。

『英雄』に成りたくて、そう呼ばれたくてここまで来た者たち。
じゃがくすぶつておった者たち。

そこに『英雄の息子』が現れた。

そして『悪の魔法使い』という餌もそこにある。

しかも『闇の福音』という熟れに熟れた餌が。
ダーク・エヴァンジェル

食指が動かぬ訳がない。

必然のように、ネギくんを麻帆良に呼ぶべきであるという意見が体
育館中を覆い尽くしたわい。

「ガンドルフィーニッ!!」

「神多羅木……私……は……このようなつもりじゃなかった!!」

「……わかっている、がもう少しこの学園を理解しろ。」

優秀ゆえに『英雄願望』の強いものたちが集まっているのだから」

「ふくくくくつ、貴方がたもその時は手伝ってはくれませんかねえ？」

「断る」

「……神多羅木先生……なぜですかなあ？」

魔法界では『風刃』と称され、本国の騎士団長を務めていたほどの貴方でしょう？」

「俺は今の日常が気に入っている。」

それに『英雄』などと……影響だけ、爪痕だけ残して去っていく者など俺は好きになれん」

「神多……らぎ……」

「それに……貴様に付くと友に嫌われてしまうのでな」

友……か。

神多羅木くんは経歴も強面も災いして、麻帆良に来た当初は避けられがちだったからの。

それを関係無しに突っ込んで、喧嘩をしていたのが香坂くん。まあ単純に当時の彼には戦って負けたのが気に食わなかっただけじやったようじゃが……。

「ぴぎう!？」

「俺が火い吹いたあああああつ!？　ウソう!？」

ひよっ、何事じゃっ？

口から火を吹く人など聞いた事が無いぞい！

火を吹けるとしたら……それは恐らく人ではなくドラゴンか、魔獣の類じゃ。

……って今度は冷気を吹きおった………どういう事じゃ？

『?……イヤ?……マジで……職業とか……』と聞こえるが何の事かの？

「ってそうじゃねー!!」

さっきから黙って聞いてたって俺にはさーっぱりわからん。

がな、ひとーつだけわかる事があるわ」

「気になるねえ、何かなあ？」

「人の親友に手エだそうたア………何様じゃテメエらは!!」

叩き潰すぞコルアアツツ!!!!」

「切り刻ムゼ………アア!？」

「ぴぎ!ぴぐいつ!!!」

「……『気』も『魔力』もまともに扱えぬ、火と氷を吹くバケモノだったキミに言われてもねえ。」

キミは一体何が言いたい訳だい？」

「簡単だよバツキャロー」

『英雄』とは何なんじやろう。

人に必要とされる者、人を動かす力のある者。

時勢を見極める者、流れに誰よりもうまく乗った者。

莫大な成功した者、多くの者に施しをした者。

事件の有る場に居ることのできる者、被害を出さず事件を解決できる者。

常識を破る事が出来るほどに圧倒的な強さを持つ者。

様々じゃがその中でワシは一つの形として、思うモノがある。

「エヴァに手エだしてみろや……魔法使いだろうが英雄だろうが俺が殴ってやんよ！！！」

『友の為に怒り全てに刃向える者』。

それもまた『英雄』の一つの形ではないかの？

どう思うかの、エヴァ。

……ホッホッホ、無視とはいけずじやの。

十一 匹目 誰にだって譲れないモンは有るもんだ（後書き）

理論やら麻帆良の現状は独自解釈。

十二匹目 大変だがやりがいがある事ってスゲー貴重（前書き）

いつの間にか総合評価四ケタ……。

皆さん本当にありがとうございます！

十二匹目 大変だがやりがいがある事ってスゲー貴重

「学園長！　どういう事ですか！！」

「イヤ……ワシに言われても困るんじゃないが……」

「この『採用決定』の書類に押された判子は貴方のモノでしょう！！」

何故に話し合いの前にこれが可決されているのです！！」

今俺こと香坂隼人は麻帆良本校女子中等部にある学園長室に新田センセといえるんだわ。

で、なんでここにいるかだが朝来たら職員室の掲示板にドンっと『ネギ・スプリングフィールドを来年度の三月から教員として麻帆良学園は採用する』つつ意味わからんもんがデカデカ張られてたから。

ねえこれどーゆーことさ。

イヤ確かにさ、昨日の夜の『議論と多数決』だったら『採用派』の多数により可決されちまいやがったぜ。

マジ英雄がそんなに好きなのかね。

意味わかんねーよ。

しかも議論はとりあえず終えて次の日にでももう一回やんのかと思つてりやさ。

なんか金髪のねーちゃんが出て来て『正式に可決と言う事で、本国とメルディナ魔法学校に伝えてきます』だってよ。

ぼーぜんだわ、呆然。

連絡員みたいな人らしいけどね。
ぜってー陰謀だよ陰謀。

だって普通じゃねえじゃん。

もつと長いスパンの議論になるべきだろ。

今日のご飯はなんだろうな、見たいな軽いノリで決めて言いもんじゃねえ訳だし。

「……昨日の夜の、多くの者が書類を出しておるのじゃ、『可決でよい』との。」

麻帆良が多数決を重要視しておるのは知っておるじゃろう?」

「そうっ……かもしれませんが!ですが!」

「お主はワシが心よりこれを奨励しとると……思っておるのか?」

「そうではありませんが私と香坂と瀬流彦くん以外のすべての教師が賛成などとなることはありえぬでしょう!」

そうなんだよな。

三人除いた全員が可決とか……それこそありえねーもん。

学園長がなんかやったのか?

それともアイツが……やったのか?

「オヤ新田先生、決まった事をいつまでも嘆いても仕方ないと私は思うのだがねえ。」

それより私は『これからどうするか』を考えることが重要だと思

「うよお」

「坂上……先生……！！」

「その通りじゃ、決まっちゃったことじゃからの」

坂上のヤロウはどっからやって来たよ！？

てかふざけてんのか、このジジイは。

決まったからってさ、納得出来るもんと出来ねえもんがあるだろうよ！

ガキが中学生を教えるんだぞ！

ガキが！四つも年上の相手を！その教員を！務めるって事だぞ！！

あーりーえーねーなんだっての！！

『英雄』だかなんだかんだか知らんけどさ！

オドレ、舐めてたら追い込みかけっぞコラッ！！

「じゃからの、ワシは考えて恐らくベストな対応策を思いついた。

のう、香坂先生」

つてはい？俺？

「お主は来年度より2・A組の『副担任』となってもらう！

そしてネギくんが来しだい『担任』となり、試験に合格すれば『副担任』となる彼の手綱をしつかりと握るように！！」

……マジで？

え……えっと……えあゝ……うん。

マジで？

「学園長！それはd「ならば私はこの一年指導教官を兼任させていただきますたい！教師のなんたるかを香坂に叩きみたいのです！！」だから新田s「よかろう、励むように」学園長！？」

……おーけー、とりあえず落ち着こうか。
意味わかんね。

いまいち状況に付いていけねーんだけど。

「香坂！返事はどうした！！」

「ウオオオッス！！不肖香坂隼人！全身全霊を持って務めさせていただきます！！！」

「ウム、善きに計らえい！」

……アレ？

どーしてこーなった、どーしてこーなった。

「……ふむう……、コレはこちらに使って、出来るだけ鋭利に……」

「……ヴァアア……アアア……アアア……アアア」

「となると形は……、ならば量を考えて……しかし……」

「エヴ……アアアアアア……アア……アアアア……アツツ！
！」

「ここ……は、これでええええい！！どこのどいつだ！？」

「エヴァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアツツ！！！！」

「隼人！私は貴様の足りない脳みそじゃ理解できない事をしている
のだ！！黙ってる！！！！」

「聞いてくれよ聞いてくれよ聞いてくれよ！！！！」

「黙れと言つとろうが！！」

「まあ聞けそら聞けやれ聞けドーンと聞け！！！！」

「うつうつ！とつとと話せ！！」

「俺教師になった！」

「お前は教師だろうが！」

「俺ってば教師になった！！」

「だから貴様は教師だろうが！！」

「俺は教師になったんだアアアアアアアアツツ！！！！」

「貴様は教師だと言つとるだろうがアアアアアアアアアアアアツツ
！！！！」

■ ■ ■

「と言う訳で今日から君たちは二年生になる訳だけど、そんな君たちに紹介したい人がいる」

「転校生！？」

「ムムム、この朝倉さんの耳に入らないとは……出来る！！」

「美人に食券10枚！」

「可愛い系に食券15枚!」

「副担任のしずな先生は学園長の秘書も兼任してるからね、別の先生に代わってもらおうという事さ。」

では『香坂先生』、どうぞ」

「……今日からテメエらの副担任にやらせてもらう事になった『G TK』ことグレート・ティーチャー・香坂だ!」

「隼人にいだ!」

「あんちゃんだ!」

「2年A組!」

「ヤンキー先生!」

「おうよ!夜露死苦!」

「よろしく!」

「違う違う、こう上目使いで見上げる感じで睨みつけて……夜露死苦ウ!」

「夜露死苦ウ!」

「はははは、仲良しだね」

■ ■ ■

「香坂、教師であろうと人に変わりは無い。

だがそうであってもすべての者に平等に接しろ」

「うつす」

「何故だかわかるか？

それは私たちが教師だからだ」

「うおっす！」

「担当するクラスに誰一人知らず話せない相手を出すな。

お前というトップの下に集まったチームの一員だ、知らぬ話せぬは恥だ！！」

「オッス！！」

「ありのままの自分で生徒に向かえ、壁を作るな。

大人よりもずっと多感だ、壊れ物を扱うようにやさしく、時に力強く接しろ！」

「ハイッス！！」

「大丈夫だお前なら、期待しているぞ」

「ウオオオッス!!!」

晴れて副担任になった俺だが……大変だ。

まさかね、びっくりね、オレマジビツクリ。

思わずゼロみてえにカタカナ言葉に成っちゃまうわ。

もう六月になっちまったわけで、文化祭まであとちょっとな感じだが。

高畑先生、あの人何やってんの？

出張多くね？てか出張多くね？イヤマジで出張多くね？

一月の内さ、一週間くらいしか学校に来ない時あるってどうよ？

イヤね、あの人も酒呑むようになってさ。

そーとーに大変そうだったのはわかるんだがな。

いかんだろ、そいつは。

だつてさ、担任だぜ？

学園長マジであの人何考えてんのつてヤツだ。

イヤ、学園長じゃなくつて別の人が担任クラスとか決定すんのかね？
その辺はさ、よくわからんけど、もーちよつと考えてくれねえとガキどもが困るぜ。

アンタの孫もこのクラスにいるでしょうよ。

後、最近学園長が妙に優しくて怖いな。
俺は不手際とかやってねえよな？

そんなこんなで、今俺は図書館島の地下にいる。

ワイバーンのリリーがいつも通り迎えに来てくれて、どつかの金持ちの別荘みたいところで仕事中。

学校でやつても良かったんだがな、文化祭が近いから準備やっててどーも目移りしちまう。

やっぱまだ若いからな、遊び盛りつてヤツだわ。

でも仕事は腐るほど残つてんだよな……。

んな訳で最近はこの仕事残りを片付けて、教員寮にはほぼ寝に帰るつてとこだな。

イヤ楽しんだけどね、ツライわなあ……やっぱり。

しかし『麻帆良祭』になる度に毎年思う事だけどさ、年々レベルアップしてるよなあ。

派手になってるっつか、自重しなくなっただっつか。

ま、生れてこの方麻帆良っ子の俺が言うんだから間違いねえな。

……ハア、疲れた。

目がショボショボするわ。

「ケケケケケ、中タイケルジャネエカ」

「グルルッ」

「ぴぎっ！」

しかも隣じゃ俺の事お構いなしに酒吞んでっし……。

「隼人モ呑ムカ」

「デメエ……わかってやってんだろ」

「知ラネ……ングングングプパアアッ！酒ガ美味イゼー！」

……ムカつく。

「ハアッ酒ガ呑メル呑メルゼエ酒ガ呑メルゼエ」

「グルグルグルルルル」

「ぴぎぴぎぴっぎぴぎぴぎぴぎ」

デメエらもかよ……やんなる、もう。

歌ってんじゃねーよ！！

「ケケケケ」

「グルルル」

「ぴぎぴぎー」

ブッチーン。

アレだぜ俺、キレちまったよ。

ひっさびさに暴れちゃおっかなーって感じ？

もうねボツコボツココースだぜ？

謝るなら今のうちよ、今のうち。

ねえやっちゃうよ、マジやっちゃうよ、ガチでやっちゃうよ！？

「ケケケ、ヤツテミナ」

「やったるうじゃねえかクルアアアアッ！！」

へその辺りに気合を入れて熱いモノを生み出すイメージ。

さらにそれを持ち上げるために胸のあたりに気合を入れて、上げるに従いドンドンと熱く熱く燃えさからせる。

それを喉から口に、口から外へ向かって吐きだす！！

吹き出す呼気とともに吐き出された『火の息』はスラぽつとゼロ、リリーを覆い尽くしてやったわ！！

「ぴーうーぴーうー」

「アッタケー」

「……グル？」

「こんなモンだっけわかってたよクソツタリヤアッ！！」

スラばうは酒に酔って寝てるし、ゼロにはちょうどいい暖房扱いだし、リリーに至っては気付いてもねーんだけどな！

どーせ俺なんてさ、所詮こんなもんですよーだ。

『氣』だって対して扱えねーしよ、バツキャロー。

「アイカワラズノ雑魚ツプリダナ」

「うるせーよチキショウめ。」

その内アレだぜ、『氣』を楽々使ったって俺超強くなっちまうよ？」

「コノ前初メテ全身ニ『氣』ヲ巡ラセル事ニ成功シタクセニヨ」

「……俺ってば大器晩成？」

「ケケケ」

『氣』で全身強化とか難しすぎだろ。

フィーリングで出来るような天才じゃねーんだよ、俺は。

しかも初めて成功してさ、調子に乗ってめっちゃ高く跳んだらさ……
そこで『氣』がキレちまうし……。

真っ逆さまで、背中から地面にぶち当たって悶えちまったわ。

笑えよ。

笑えねーよ！

……まあそれは置いて、若干てかかなり人外じみて来た俺です。コレは転生課のねーちゃんの勘違いなのかね？

『テリーのワンダーランド』の『魔物使い』のスキルを得たはずなんだが。

なんでかよーわからんが『DQ?』と『DQ?』に出てきた『職業』の一つ、『魔物使い』と『魔物ハンター』としてのスキルもくっ付いてるらしいな。

喜んでイイのかわかんねーよチキショウ。

どーせならさ！『戦士』とかさ『武道家』とかさ。

欲を言えば『バトルマスター』とか『パラディン』とか『レンジャー』とか『ゴッドハンド』とか。

そんなふーに男らしい職業の方がカッコは付くよな。

ま、もう慣れちまったからイイんだけどよ。

しかし『職業』たあ驚きだな。

『ダーマ神殿』っつー特殊な場所があつて、その祝福と加護によつて新たな力を得る道を指し示してくれるんだっけ？

ゲームだからよーわからんけどさ。

ともかくそこに行けばその『職業』に応じた呪文だったり特技だったり覚えられるようになるんだわ。

ま、一度付いた『職業』でしっかりと自分自身を練磨していかにならんのんだけどさ。

んなのである『職業』の一つが『魔物使い』であり『魔物ハンター』で有る訳だ。

魔物を懐かせる事が出来て、本来魔物しか扱うことのできない『ブレス系』の特技を扱う事が出来るようになる訳だ。

『ブレス系』ってのは『特殊な効果を持つ息』の事。

『MP』消費無しに扱える『特技』の範疇に入るからさ、強力なモンだとかかなり使い勝手がイイんだよな。

確かだが結構なバリエーションがあったはずだな……俺の『職業』だとあんま使いもんになんねーけどよ。

ゲームで使えるような強力な『ブレス』を覚えるのはまた別の『特殊な職業』なんだよな。

まんまモンスターの気持ちになると付く事が出来る『モンスター職』と呼ばれるようなヤツで習得できるのだけ。

残念ながら俺はやっぱり意味ねーってヤツだよコノヤロー。

……しかし本来俺が貰ったスキルが属するはずの『モンスターズ』だった場合はさ、『ブレス』は力量を上げていく事でガンガン強くなってくんだよな。

けど使用するのに『MP』が必要になってくる……。

そこんとこどーなんだ？

正直『MP』と『気』か『魔力』の違いは俺には分からんし。てかりリリーが火吹けるじゃん！！

「リリーさ、お前火を吹く時『魔力』とか使ってる？」

「……グルウ」

「そか……何となく吹いてつか……」

そーなんだよな。

俺も『なんとなーく』な感じで火とか冷気を吹いてるわけだしさ。

……しかし俺が吹いてんのはホントに『火の息』なのか？

どっちの『職業』でも『火の息』は覚えなかったはずで、『火炎の息』を覚えるはずだしよう。

冷気の方は多分『冷たい息』のような気がするが……謎だな。

まーアレだ、足りねえ頭でいくら考えたってどーせわからん。

また今度エヴァにでも聞かかね。

それよかとつとと仕事、区切りが付くとこまでやらねえとな。

やる事はいっぱいある訳だし、終わったら文化祭準備の方にも力込めなきゃいけねーし。

ウチのクラスは確か喫茶店するんだっけか？

『和服喫茶』らしいな。

和服なんざ成人式の時か、たまに顔出すエヴァの『茶道部』でくらいしか見ねえんだよな。

……普通かね？

民族衣装なのにさ、何かさみしいわな。

……夏も近いし、浴衣でも買ってみようかねえ。

十二匹目 大変だがやりがいがある事ってスゲー貴重（後書き）

なんだかんた言ってまだまだ弱い隼人である訳です。

十三匹目　ちよつと人より変わってる事を『個性』って呼ぶそうだ（前書き）

この小説を書くにあたって、最初に浮かんだ書きたかった事柄は三つありました。

一つ目は『ぶっ飛び過ぎていない魔物使いな主人公と最強スライムとチャチャゼロライオン』。

二つ目がこのお話で登場です。

十三匹目　ちょっと人より変わってる事を『個性』って呼ぶそうだ

んな訳で明日から麻帆良祭。

今日は丸々麻帆良祭準備の時間で、授業も無くなってどいつもこいつも自分たちの仕事にかかりつきりってヤツだ。

教師の俺にも、もちろん仕事はある訳で。

麻帆良祭の時には外から大量に人がやってくるからその対応とか、生徒がはっちゃけ過ぎねー様に見守ったり、危ない感じの喧嘩が起きたら止めに入ったり。

ま、腐るほどに仕事は有るわけよ。

三日間のうち空いた時間空いた時間で、ちゃんと遊べる時もあるんだがな。

その時間は……なんつーか予定が……入る予定なんだよ！！

俺はやったる！

気合を入れてシスターシャークティにで……でえとの……そう、デ―トの約束を取り付ける心積もりなんだわ！！

……しかしねえ……どう誘うべきか？

メルアドは一応知ってるけどさ、そーやんの男らしくねえもんな。やっぱガガツと教会に行つてババツとぶちまけるのが一番だわ。

なんて言おうか……。

ベタに『学祭一緒に廻りませんか？』とか、ストレートに『俺とデートしてくれませんか？』か。

なんかをダシにすんのはらしくねえから却下だし。

むう、迷う。

「おお、先生待ったかネ？」

「イヤイヤ、ちょうどイイ考え事が出来たわ」

つとんなこんなウチに超が来ちまったか。

ま、呼び出された訳だからな。

悩み事だろうとは思うが……てか生徒から相談受けんのって実は初めてじゃね？

先生として成長したんかね。

そうだったらうれしい限りだけどさ。

クラスはまだ準備中だけど、なんでも『聞いて欲しい事がある』ってメールが入ってたんだよな。
んな訳で指定された世界樹広場に、俺は来てるんだが。

天才の悩みなんてしょーじきまったく予測も付かんのだがなあ。

ややこしいことじゃなかったらイイんだが……っと、イカンな。
ちゃーんと向き合ってやらんと。

コイツが他の誰かに相談したんか知らんし、どんな気持ちで来たんかも知らんけど。

少なくとも俺に対してなんか感じて、『俺に相談する』って事を決めて来てくれたわけだしさ。

「……ウッシ、超さ、コーヒーとか飲むか？」

「奢ってくれるのかナ」

「ガキンチョに出させるほどふざけた根性してねーよ。

で、何飲む？」

「……じゃ、お茶とかでイイヨ」

「ヘイヘイ」

さてさて自販機でボトル入りを一本買つて。

……夏も近くなつて来てっからか、日も長くなりだしたなあ。
夜が近いのに寒くなってきたしさ。

「ホレ、まあ座れや」

「失礼するネ」

「でだ、早速だがなんか俺に用か？」

「……せつかちだネ、先生ハ。

女の子の扱いがわかってないヨ！」

「そう扱って欲しけりゃあと五年くらい経つて言えや」

「むううつ……ま、イイカ。

私の我儘で先生、いろいろ大変なのにここまで来てもらった訳だし
ネ。

「じゃあ単刀直入に言うネ」

……なんだろねえ。

段々気分が上がって来たんか、楽しみにもなってきたぜ。

しっかしジツと俺の目を見てくるんだなあ。

人と話す時にそうするのは正しいけどよ、中々に恥ずかしいんだわな、こりゃ。

なのに超は……超は見れてる……か……ん？

アレは……どこだっけか……。

ありゃ……確か……ああ、そっか。

……新田センセ、教師って大変なんだわなあ。

俺って副担任としての仕事、出来るか不安で仕方ねえっすわ。
でもっすね、俺の昔の経験も、まんざら捨てたもんじゃねえみたいすよ。

「実は私は……何と火星から来た火星人人ネ！！」

「んじゃ地球防衛軍の香坂隼人さんがぼっこぼこにしてやんよ」

「イヤ冗談ネ、だからそうやってボキボキ指鳴らさないで欲しいヨ」

……ハア、なんかパツと気が抜けたな。

「……冗談か、マジで」

「オヨ、マジに信じてしまふとは……私も遂に悪女でびゅーネ」

「茶化すな茶化すな。」

まあその辺はどーでもイイんだが……来年くらいかね？」

「……何がかナ」

「ドーンと祭りで華上げるのに、男も女もカンケーねえもんな。」

俺は麻帆良にでっかい歴史刻んでやるくらい、ド派手にやりゃイイと思うぜ？」

「……私がやるかは置いておいテ」

「やるくせに、どデカイもんを打ち上げるくせに」

「じゃやると仮定して、先生はその口ぶりは何かやったように聞こえるネ。」

是非とも参考にしたいヨ」

「俺は前夜祭で門燃やした、他校の生徒と乱闘して初日のパレードをぶっ潰した、世界樹にでかでかと『香坂隼人参上』って彫り込んだ」

「それは派手にやりすぎネ……」

「二日目は逃げ切ったんだがな、三日目は新田センセにつかまって、二人留置場の中で過ごしたぜ」

イヤイヤ懐かしい思い出だな。

そのせいで中三の時から高二の麻帆良祭まで、新田センセがいつつも付きつきりでいたし。

一回ガンちゃんに変わったんだが振り切ったぜ。

ガンちゃんはじめちゃくちゃ新田センセに怒られてたっけー。

俺も後でぶん殴られたけどさ。

今は返らぬ俺の青春……ってヤツ？。

「だからよ、テメエ一人が、他のヤツと一緒にやるのか知んねえけどよ……ま、ガキ如きのやんちゃくらい俺が全部受け止めてやんよ。

だからクイがねえように、ガツンとやってやんな」

「だからそんな事やるなんて言ってないヨ」

「まあやらねーんだったらそれでもいいけどさ、やるんだったら俺はそうするって事だわさ」

「新田先生がそうしてくれたから力？」

「イヤ……俺がやりたいからだ」

考え込んでんな。

そりゃそっか、ちよいと脈絡なさすぎたもんな。

……昔は『お前のやる事などお見通しだ』なんてあの人に言われてイラッと来たもんだが、その時新田センセはこんな気持ちだったのかね？

「それは例えば……わたわったつ……私が……火星人でも力？」

「俺副担任、お前担当生徒。」

吸血鬼だろうが悪魔だろうがハーフだろうが機械だろうが留学生だろうが、宇宙人でも未来人でも超能力者でも、それはかわんねーよ」

「……ホントに……受け止めて……くれるの力？」

「新田センセみてえに、受け入れてやつから覚悟しとけ。」

……そう行くと超は教師になるな、俺みたい……って泣いてんのか？」

「ちがうヨ……こっコレは……目から唾液ガ!？」

「ハイハイ、拭いてやつから」

「……痛いネ」

……コイツも親元離れて大変な訳だもんなあ。
天才も、やっぱガキだな。

しかし泣くとはな……そこまで思いつめてた事があったのか？
まあコイツはちょっとアレっぽいし。
いろんな奴がいるもんだ、中学生もさ。

「……アハッ」

今度は笑ったか。

経験してても、わかんねー事はいっぱいだな。

俺も新田センセに対して、笑ってたのかね……？

ま、あの人と関わる時はいつでも、楽しかったのは間違いないわ。

■ ■ ■

「ケケケ、チャント教師ヤツテンジャネエカ」

「似たような経験があっからさ、ああ言えたんだろうね」

「ぴぎー」

「そだなあ、あの頃ははっちゃけてたなあ」

「火種片手ニバイクニ跨ツテ門ニ突ツ込ンダノハ楽シカッタモンダ」

「怖いもんなんか何もねえと思ってたし」

「ぴうう」

「そうそう、アレで愛車が無くなっちまったんだよな」

「隼人ノケツガ爆発シタカト思ッタゼ」

「なはははっ、違えねーや」

「ぴいぎう」

「……ま、俺らの思い出話より超だが……。

なあ……スラぼうにゼロさ、俺ってばてっきりあのクラスで一番
アブナイのはエヴァだと思ってたんだわ」

「ドンナ意味デダ？」

「俺は関係ねーけどさ、他の教師陣が接する時にちょっと注意すべ
きだって事で」

「ぴーぎぎ」

「ケケケツ、確力二授業八隼人ノ以外出テコネエカ寝テルシナ」

「でもよお、違ったんだな」

「アア？」

「超はとびつきりだわ……俺が見た中でもとびつきり……イイ感じ
だ。」

個人的にはあの子大好きだ」

「……ソイツハ教師トシテカ？ソレトモ……」

「後者に決まってるだろ」

「ケケ……ケツケケケケケケケケケケ！ダツタラ俺モ大好キダー！！」

「ぴぐいいいいっ！！」

「おうさ、サイツコーにイカしてんぜ……なァ、超鈴音」

.....
クヒュクヒュクヒュッ。

.....
クヒュッ。

.....
クヒュクヒュクヒュフフフフフフフフフフ。

めたんだろウネ。『隼』のように強く雄々しく逞しく速くこの世に存在するどんな男よりも魅力的な人間になるよう二。そうに決まっているだろウ？この世に存在する人間はすべて貴方と言う『捕食者』の為に遣わされた『餌』に過ぎないのだから。男も女も子供も大人も老人も健康者も身体障害者も魔法使いも非魔法使いも英雄も民も人も悪魔も神も妖怪も鬼も全部全部全部全部貴方を輝かせるためにこの世に生れて来タ。だてそうだろウ？そうでなければ意味がわからない腐ったこの世界がある意味がわからない訳だから、この世は貴方の為だけ為だけに有るちがないじゃない力。

そういえば先生、私は貴方の忠実な僕になるとあの日あの時あの場所決めて貴方に誓ったのにその補佐を出来ていなかったのはホントに悪かたと思っているネ。そう考えたらまずは誰もかれも資本は食事からだからお弁当を作て渡そうと思っていたヨ。明日からお弁当そうお弁当を作つていこうと思っていて、明日から明日からでずつと想つていたのだガ、結局いつもいつもいつも渡すはこれまで怖くて渡せなかつたんだタ。でも大丈夫ネ、私は貴方の食べたモノしか食べないネ。ここ麻帆良に来てから食事の全てはいつもいつでも先生と一緒にだネ。なんてそうネ、私のような女が貴方と違うモノを食べるなんてとてもおこがましいと思うしそうしたいとも思わないヨ。大変だったかなんて劳いの言葉はかけてくれなくてもいいネ。貴方の忠実な僕として当たり前的事だと思っているカラ。けれど出来る者ならば一緒に食べたいなんておこがましい考えを抱く私を許して欲しいヨ。ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。私は貴方の為なら何だって出来るし、これまでもこれからもずつとそうして来てそうしていくのだカラ。だからほんのちよつとだけでいいから私に情けを欲しいネ。これまでだつて貴方に不用意に近付く女や男を何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も殺そうと考えてしまったけど、私はいつだって我慢して来たネ。先生に迷惑がかかるからって思っ

て私は私は私は私私私私私私私は、我慢して来たネ。でもイイヨ、私にはここが良くてここが似合っていてここに居たくてここで貴方をオモウことが幸せなんだカラ。でも受け入れてくれたから少しだけ前に出てイイのかネ？

それで先生、怒らないで聞いて欲しいんだガ私、今友達なる者が出て来ましたネ。違うネ、先生の事をオモウのを忘れていた事なんてこれまであなたを知った時から一秒一分一時間一日一昼夜、寝ている時も起きている時もご飯を食べている時も歯を磨いている時も学校に向かっている時も誰かと話している時も授業を受けている時も機械をいじっている時もお風呂に入っている時も、忘れた事なんてありはしなかつたネ。ただ適当に話をするだけでちゃんと知り合ってしまったと言うだけヨ、本当に何も無いネ。信じて欲しいヨ。今から今も今まですとくだらない相手だと思ってたヨ。喋ってしまったが、何故今でも喋ってしまうのかが意味がわからないネ。やっぱりこう言う事はちゃんとやっておいた方がイイかと思て。内部の裏切りにより堅牢な信頼関係を築いていたチームが崩れる事だであるから、私は私の全てを先生に知ておいて欲しいと思ているヨ。もとも私は絶対に裏切らないし先生がどんな事をしたて私はその後を付いていくと決めているのだがやはりこれくらいは、通過儀礼のようなものでも思て貰えばイイと思うネ。

ああでも先生はイイネ、他の人ともしかり付き合うべきヨ。さきはあんな風に言てしまったがどんな事になろうとも私は大丈夫ダカラ。これまでだて麻帆良に来るまでは羅列された文字列と全部でも一時間に及ぶかどうかという映像の中の貴方だけで私は、7歳の時から一年二年三年四年五年間もこうやって貴方に会うまで、矮小で脆弱な肉体ではすぐさま弾け飛んでしまうほどに巨大で膨大で強大で長大で雄大で広大で壮大な想いを育て続けることが出来たのだからネ。多分その時間があたからこそ私はこうやって他の下等な下種どもでは決して決して決して辿り着けないような真理と出会う事が出来たのだから、やはり私にとって重要な時間だたと思うヨ。あまり堅い事

ばかり言て固い女なんて思て欲しくないからネ。だて可哀想ネ、私ばかり貴方に触れあう事が出来るようになったラ。先生もそう思うダロウ？」

写真写真写真でも貴方はどこまでも澄んで輝いているヨ。

ああそうそうそうそうそうそうそうそうダ！！

愚かで愚か愚かな私であたの力！！

「んっ……ああそうネ大将、是非ともサビ抜き寿司が欲しいところネ。

そうそう辛いヤツだヨ。

なに、そいつはカラシだテ？

まったくわんこだと思えてしまうナ。

わんこといえばラーメンだがヤ、だがやだがやがだやがだやがだやががやがやがだやがだや。

おおおおと、落としてはいかんネ。

むにゅにゅありりりり、口が口で口だから、酸っぱいモノがいっぱいースレ。

……あぁっ……そうそう汁気汁粉、あんころ餅でなナッツ。

ムライがーの、食べるバンね、食べていい顔ネ？

頭グチュグチュ身体グチュグチュ超リンシチューただ今かんセー。

びちゃびちゃぬばーん塊りグツチュン頭がくるブ」

……違うネ。

やらなければならない事があたではないの力！！

机引き出し中から出すのは愛用のメスちゃん。

白銀の輝きがスバラシネ、これによって私は何度も何度も何度も貴方を残す事が出来たのだカラ。

……んっ……あああっあんっ……はあ……っ。

嗚呼駄目になりそうヨ。

頬に切っ先が突き刺さるというだけで私の股間は有り得ないくらいに濡れ出して来たネ。

コレも全部全部先生のおかげで先生のせいだナ。

でもそれよりも早くこの切り取った先生の温かくて大きくて少し硬くて無骨でこの世の何よりも美しい造形品が触れてくれた私のような下等種の切り取った頬を、保存せねばならないネ。

私の唇を……いかんヨ。

おこがましい、触れていただいた私が自らそこに赴こうなんて事はあつてはならないネ。

「……見ていっんっ……あうっ……んっ……だけっうっうっ……」

身体が熱い吐息が熱い頭が熱いヨ。
ギリギリとチャイナ服を勃つた乳首が擦りあっていくネ。

「こんなつ……にも……あつううんぐ……触れてええつ……貰え、
タ……」

私の髪が私の皮膚が私の爪が私の血が私の靴が私の服が私のペンが私の私の全てガ！！

目の前の特注の容器の中に一つ一つ詰められているネ。

いつまでもいつまでも先生との思い出を残すためニイ。

「アガギギギイガアガガギギギギリルルギイリリリリリリ
リリ……」

熱い……身体が熱いヨ。

R U . . . R U . . . R U R U I I R A

```
RURURURURURURU!IIIII
RIIIIIIRAAAA!
```

服なんて……鬱陶しい。

貴方には何もかもを曝け出したいカラ。

このような布切れさえも貴方と私の間にあてはいけないと思うカラ。

クヒュツ。

[illegible]

……先生……隼人先生……私の全て、私の主、私の……私の神……。

十三匹目　ちよつと人より変わつてゐる事を『個性』って呼ぶそうだ（後書き）

百数十年後の未来からたつた一人でやって来た、スプリングフィールドの血を受け継ぐ天才美少女が狂つてないはずがない。

と言う訳でどうしても書いてみたかった『狂人　超鈴音』。

自分で書いていて何が何だか分からなくなつてしまいました。
ムズイです。

ぶっちゃけた意見をお待ちしております。

十四匹目 ハプニングがあるからこそ祭りは盛り上がる(前書き)

麻帆良祭スタート。

十四匹目 ハプニングがあるからこそ祭りは盛り上がる

「和服喫茶にようこそ」

「……………」

「お、気合入ってんなあ」

「……………」

「そか、昨日は楽しみで寝られなかったんか。」

「にじししっ、まだまだ二人ともガキだな」

「……………」

「知らねーよ、ホントは幾つだろうが。」

「そつなるってのはガキだってことだ」

「……………」

「拗ねなくったってイイじゃねえか。」

「二人ともしっかり和服にあってるしさ、客寄せに貢献してんぜ」

「……………」

「悪い悪い、注文だったっけか？」

んじゃまあ……ここは場に合わせて宇治茶と栗羊羹で、サービスしてくれよ？」

「……………」

「うっは、ケチくせーぞ。」

それでも俺は副担任さんですよ、ねぎらい的なのがあってもいいじゃん！」

「……………」

「おおっ、饅頭つけてくれんの！？」

太っ腹だなあ……いい嫁になれるぜ」

「……………」

「へえ、料理得意なあ知らなかったな。」

お前も……マジで？最近のガキはすげーや」

「……………」

「女の子の嗜みとくるか……ま、そういうのが出来るってのは誇るべきことだわ」

「……………」

「マジで！？貫通済みなんか！？」

「……………」

「うつそぴょんって……あんな、そーゆー下ネタは女同士だけにしとけ。」

まあ相方は真っ赤になってるけどさ」

「……………」

「うむうむ、仲良きことはいいことかな」

「アスナ、何てザジちゃんがゆーとるかわかる？」

「私がわかるわけないでしょ……いいんちょにでも聞きなさいよ」

「なんか盛り上がってるです」

「ムムムツ、ラブ臭の……予感はないっばいね」

「らっ……ラブって、進んでるねー」

「のどか、そのアホの戯言はほっとくです」

「ヒドゥッ……？」

■ ■ ■

「続、和服喫茶」

「あら、いらっしやいませですわね、隼人先生」

「雪広か、なかなか様になってんな」

「これでも着る機会は人並み以上にはありますので」

「金髪に和服……か。」

まあ前だったらありえねえ青とか赤とかもあるんだから、気にしちゃいけねーな」

「……………」

「違えねーや」

「ほほほほっ、照れてしまいますわ」

「……………」

「ふふふっ、そうですわね」

「……………」

「イイこと言った、イイこと言ったぜ。」

まあでも動きなんかはやっぱ雪広の方が滑らかだよな」

「……………」

「先生が悪いんだろ……………しょうがねーよ、お前は庶民だろ？」

「……………あの、先生？」

もしかして、というより絶対ザジさんの他に誰かいますわね」

「まあな」

「……………」

「相坂さんですよ！？あの『座らずの席』の！？」

「ちゃんとお前の隣にいるぜ、和服着て。」

俺も授業の時は名前呼んでるだろ？」

「……………」

「いつも一緒に班を……………気付きましたでしたわ」

「……………」

「幽霊……………でもそのような事関係有りません！」

クラス委員長たる私がクラスメイトの事をわからないなどと言う事は……委員長失格ですわ!!」

「……まあそう言わなくってもいいじゃねーか。

俺とザジがグルになってからかってるだけかもしれないだろ？」

「いえ、例えそうであつたとしても相坂さんは我がクラスの一員……こうなれば是が非でもお姿を見つけて差し上げますわ!!」

「……………」

「そだな、まあ頑張ってみな」

「ふう……………はあああああつ!!雪広あやか流!友情の心眼術!!」

「……………ちは……………いさ……………しなんか……………です!!」

「見えましたわ!そこにいますわね、相坂さん!!」

「おおー、スゲー」

「……………」

「方向が違つなら言ってください隼人先生!!」

■ ■ ■

「続々、和服喫茶によっこそ」

「あら先生、来てくださってたなら言っていただければよかったのに」

「邪魔しちゃ悪いだろ？」

それに三人も捕まえてるからお「先生はよくっても私は嫌なんです」……そか」

「……………」

「そうですね、続ける千鶴さんもあしらう先生も、すごいと思いますわ」

「あらあら、そう言えばコレ、手作りで仕上げた特製のケーキなんです」

「和服喫茶なのにか？」

「……………」

「ザジさんの言う通り、それだけじゃ用意できるモノが少ないんですもの。」

『来て下さった方には皆様に満足を』、例えどのような状況でも

「コレはもてなす側として当たり前的事了」

「……………」

「なるほどねえ…………さすがイイとこのお嬢さん二人、ゆーことが違うわ」

「それで…………いかがですか？是非とも食べていただきたいと思ひますの」

「あゝ…………うつし！ちよつと貸しな」

「あの、何を…………？」

「おおつ、生徒と教師の禁断の愛！大スクープだねこりや！！」

「朝倉黙つて退いてろ、…………を捻り潰すぞ」

「何を！？すごい気になるんだけど！！」

「ホレホレそこ行くガキども、にーちゃんがケーキ奢つたる」

「マジで！？」

「食つてイイの？」

「でも…………お母さんが知らない人から食べ物貰っちゃいけませんつて」

「安心しとけ、那波は知つてんだろ？」

「うん、いつも来てくれるちづるせんせーだ」

「アイツがデメエらにやるってさ」

「あ、ホントだ！ちづるせんせー！」

「僕らホントに食べていいの？」

「ホントもう、ずるい人です。」

「……食べちゃダメな訳ないでしょ」

「ありがとー！」

「俺このでっかいチョコが乗ってるとこ……ってああああっ！にーちゃんチョコ食ったー！」

「中々に美味かったぜ」

「ずっきーぞずっきーぞー！」

「んじゃお次はイチゴを「俺が食う！」ホレ糞ガキ、口開ける」

「あがつ……うまいぜ！」

「にーちゃん、僕も！」

「私も食べていい？」

「おつよ！お、皿か……ザジさんきゅな」

「……………」

「那波も食つか？」

「…………ふふふつ。」

隼人センセ、『あ〜ん』ってしてくれるんですか？」

「十年はえーよ」

「あらあら……、じゃあ十年後に予約入れときますね」

■ ■ ■

く超包子にようこそく

「オオ、隼人センサーいらっさいませアル！」

「おつ……って客じゃねーよ、見回りの途中ってヤツ。

古菲もそいやあ店員なんだっけか」

「もちろんアル！何か買ってくアルか？」

「……まあそれもイイか。」

「んじゃ肉まん十個頼むわ」

「了解アル！サツキー！！」

「元気だねえ」

「ケケケケ、阿保ダナ」

「ぴうい」

「先生、来ていたのかネ？」

「まあホントは通り過ぎるだけだったんだがなあ。」

「てか繁盛してんな、お前の店」

「そう言われるとテレテレになてしまっヨ」

「ひっひっひ、照れろ照れろ……って超、左頬に怪我したのか？」

「ああ、ちょっと切てしまてネ。」

「心配しなくても大丈夫、大したことないヨ」

「……そか、そうだよなあ」

「その通りネ！穴が空くほど見つめられて……視姦されたかと思たネ！！」

「ハツハツハ、無い無いそれはねーよ」

「酷いヨ！女心がぶっ壊れちまうネー！」

「持て来たアル！……って超も来てたアルか！？」

「へっ……まあ……そうネ！クーだけにいにに任せておくと不安だからからネ」

「ほえ……バカにされたアルか？」

「遅いな、気付くのが……まあいいわ。

俺そろそろ警備だからさ、二人とも楽しんでほっちゃけて来いよ」

「おーアル！」

「……私楽しわた私は楽しんでるから大丈夫ヨ！」

「おう……楽しみにしてるわ、いろいろな意味で」

■ ■ ■

く散歩部へようこそく

「いやはやまさか、来てくれるとは思わなかったでござるよ」

「見回りにゃちょうどいいからな、てきとーにガイドでもしといてくれ」

「あいあい、了解でござるよ」

「……しかし相も変わらずバカでかい木だな」

「『世界樹』と呼ばれているでござるから。

ちなみにk「そいやあ長瀬知ってつか？」……何がでござるか？」

「『世界樹』ってのは俗称みたいなもんなんだぜ。

元ネタは北欧神話の世界を体現し、『アースガルズ』、『ミズガルズ』、『ウートガルズ』、『ヘル』なんかゆー全部で九つの世界すべてを内包する『ユグドラシル』から来てるんだわ。

『世界樹』ってのはそいつの日本語読みだしな」

「もっ、もちろんでござる！」

それで正し「正式名称は『神木・蟠桃』、ここ麻帆良学園の中央に聳え立つ象徴とも言っていいもんで、樹高270mという世界に類を見ない巨木なんだよな。

ちなみにあの『西遊記』の主人公『孫悟空』も天界から『齊天大聖』って称号を貰った時に管理してた桃園にもあったらしいな。

なんでも『蟠桃』ってのは天界の神さん専用の桃で『仙桃』とかも言われててさ、食ったら不老長寿になるんだと」……あうう」

「どしたよ、長瀬」

「拙者のいる意味がないでござる！」

「説明してくれんだろ、麻帆良歴1年ちよつとのお前が麻帆良歴23年の俺にさ。」

たーのしみだわなあ」

「ううう……イジメでござるよ……」

「冗談だぜ？」

しかしマジに取るたあデカくたってまだまだガキだな」

「……からかわれたでござる」

「もっと修行に励むように」

「からかわれたーでござる」

「ホレホレ、次のアレはなんだ？」

「……言わないでござるか？」

「言わねーよ」

「……ホントでござるか？」

「クドいな……俺言っちゃまうよ？」

「それはダメでござる！」

アレは……」

何度目かもわからぬ麻帆良祭。

大学の時からだから、もう十年以上になるのか……月日が経つのは早いモノだ。

このまま何事も無ければいいが。

まあ大丈夫か、今の御時世あつたとしても軽い乱闘やいちゃもんくらいだ。

昔と比べれば格段に楽になった。

……酷かったからな、香坂が生徒だった頃は。

常に数人体制で、先生方はアイツに目を光らせていなければならなかった。

私もその監視役に選ばれた事はあったが……取り逃がして新田先生に説教されるとは思わなかった。

25を越えていたからな、正面から『怒る』なんて事をしてくれる人はいなくなってしまうていたからな、面を喰らってしまったよ。

ふっ、昔から考えれば……あの頃の私は今の私を理解できないだろう。

『正義』と『英雄』に盲信して、本当に私が行すべき事を見失ってしまったていたあの頃の私には。

私が一番最初に魔法を教わって、そんな時に経験した気持ちなど吹き飛んでしまっていた。

まるで微塵も、私の中から消えてしまっていた。

只あるのは『悪滅ばすべし』の思いだけ。
狭く硬く小さな人間であった。

今になってわかる。

そうでは無くなったから分かる。

口にしたいにするのは難しいが、具体的に何についてかというのは難しいが……わかる事は確かだ。

あの頃から言えば私は変わった。

悪いとは思わん。

イイのかどうか……わかりきっているだろうに、まだわからん。

……まあ今の自分に満足はしているさ。

それよりも、このまま何事もなく終わってくれればよいモノだが……。

そうなれば最終日に亜矢と令子と一緒に麻帆良祭を周れる。
どこへ行こうか？

高音くんや佐倉くんがくれた券を、使わないというのも気に引けるからな。

そこへ行こうか、二人を連れて。

麻帆良祭が終わったら、式集院先生と神多羅木と瀬流彦先生と明石教授と香坂とスラぼうと……飲みに行くのもイイのかも知れんな。

……アレも付いて来るのだろうか？
付いて来るだろうな、恐らく。

その時はまた、私が貴様の悪を証明してくれる。
楽しみにしておけよ？

「キヤアアアアアツツ！??」

絹を引き裂くような叫び声！女性のか！？

『魔力』を脚へと供給し、風を切るように走る。
人混みを抜き去り、景色を置き去りに。

身体能力には自信があるからな、少しの『魔力』でもコレくらいは……出来る！

「何があつ……た……ッ！！？」

「人が……人が……ああああああああ……」

拙い！精神的にパニックを起こしている！！
成程一般人にはキツイ光景だ。

悪いがスツと意識を落ち着けたり、眠らせたりする魔法は苦手なん
でな……少々手荒で悪い。

「あああああッ！？」

恐らく目の前の女性には黙視できないスピードで、彼女の顎をこす
る。

脳を揺らし、脳震盪を起こさせて彼女を寝かせるか。

つと、汚れぬようにスーツを置いてやらねば……。

……お気に入りだったんだがな。

ではない！

携帯だ、連絡せねば。

「はいはいこちら教員本部」

「式集院先生ですか？こちらガンドルフィーニです」

「おお、ガンドルフィー二君。

あ、ちょうど良かったよ、麻帆良祭終わったら飲みにも行かないかい？

もちろんいつものおでん屋はハシゴするとして」

「それもイイ……ってそうじゃありません！

ポイントC - 29にて事件発生です」

「乱闘とかかい？」

「いえ。

『魔力』も『気』も残照は感じられませんでした……何らかの並々外れた勢力を持つ者の干渉により、暴行を受けたと思われる男子学生を十数名発見しました。

制服から見るに他校の生徒、いずれの生徒にも骨折や筋肉の裂傷が見られます。

加えて目撃し、精神的ショックを受けた女性を一人保護していますので、至急治療魔法使いを派遣して下さい」

「……喧嘩……なんて軽いモノじゃないよね？」

「一方的な虐殺ですね、喧嘩ではないですよ。

これだけの膂力を持つ相手でしたら、それこそ数mの大きさの巨人が必要ですね。

そんな人物、目撃した人とかはいます？」

「さすがにそれは無いかな」

「でしたらココ数時間の監視カメラの映像も洗って下さい。

後探索・探知魔法の得意な魔法使いと、ある程度の白兵戦の出来る方も呼んでいただきたいです。

一般人に紛れて、残虐行為を働いた人物がいる様ですから」

「うん、了解。

あとちよつとで着くと思うけど……他にも何かあったりする？」

「そう……ですね。

しいて言えば……皆が左頬を、左頬の皮膚だけを鋭利な刃物のようなもので正方形に切り取られているようです」

十四匹目 ハプニングがあるからこそ祭りは盛り上がる（後書き）

超にいろいろな意見をくださって、皆様本当にありがとうございます。

これからも執筆頑張っていきます。

十五匹目 izzard、突っ込む時はツッパって（前書き）

麻帆良祭二日目の夜の事。

十五匹目 いったって、突っ込む時はツッパって

ん〜今日はつつかれたな〜。

チアリーダーでینگでステージ立って、その後バンド見て。

あ、来年は誰かと組んでやるのもイイかも!?

ほにゃらば円と美砂に言おーっと。

ゆーちゃんも誘おっか?

ギターちよつとだけ弾けたよね!

私はドラム!隼人にいに教えてもらったのだ!!

とゆーより隼人にはダメダメだに。

せーっかくカワイイ妹分の私とゆーちゃんが今日和服喫茶で店員してたのに……こにゃいんだもん!!

「昨日は来たのに今日来ないなんて差別だー、横暴だー、兄貴分失格だー」

「……どつたの、急に叫んで?」

「謝罪と賠償を要求する二ダ」

「隼人先生の事じゃないの?

ほら、今日は来なかったし」

「そーいえばゆーなと二人でぶつくさ言ってたわ。

愛されてんねー、あの人も」

「にいちやんにいちやんって擦り寄ってくる妹二人はさすがに疲れ
ると思ったんじゃない？」

去年は捕まって、かなり奢らされてたみたいだし」

「あゝそいえばそうだった。

あの時に初めて、二人と隼人先生が並々ならぬ関係だつてみんな
に知れ渡ったんだ」

「強面でちよつと近寄りにくかった先生が、ウチのクラスのお祭り
娘二人に手を引かれてさ、妙な衣装に妙な仮面で練り歩いてたもん
ね」

「そうそう、一気に今までのイメージが碎け散っていったっけ」

「兄貴分も大変つて事じゃない？」

まあそう言うより例えるなら……」

「ふしやあああああつ!!」

「我がままな猫二匹と飼い主？」

「言えてる!!」

むむむむううっ!

もう桜子ちゃんは怒っちゃったよ!!

こうにゃれば三日目はたーっぷり遊んでもらわにゃいと……。

一日目のパレードはズー……とこれまで一緒に見て来たのに、電話しても出なかったし。

むふふふっ、どうゆー事にしちゃおっか？

明日はじえんじえんやる事もないし、隼人にいとゆーちゃんと一緒にいない麻帆良祭もなんか変な感じだもんね。

「ほにゃらば隼人にいに電話して呼び出すのだー!!」

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃん、隼人にーちゃんですよ
っつと」

「よく来たのじゃ！明日私とゆーちゃんと遊ぶのだいー!!」

「前夜祭は遊んでやったじゃねーの。」

残りは後夜祭だけな、ちゃーんとそう言っただらろーが」

いーケチだい。

どーせやる事にゃんて無いくせに！

二人の美少女連れて歩けるのにっ!!

「仕事あつから、教師だし」

「サボればイイじゃん！」

「社会人舐めんな糞ガキ」

つつううッ！

頭の上で星がちかちかだよ。

慣れちゃったけど！！

「そいじゃー今から！」

「フリーな、行くとこあんのよ」

……ありや？

ありやりやりや？

「俺の顔になんかついてつか？」

「んーん、そんなにや事ないよ」

「そか……、んじゃまあそんなとこだ。

二日目の夜は何もねーんだから、しっかり寝て明日徹夜できるよ
うにしとけよ。

もち、桜子だけじゃなくって柿崎に釘宮もな」

「はーい」

「了解です」

むう……むうむうむむう？

にゃーんか隼人にいがいつもと違う気がするよーな……。

チャチャゼロちゃんもいつでもどーりだし。
隼人にいもいつでもどーりだもんね。

でも……にゃーんか変な気がするもん。

うんうん、桜子ちゃんの勘がビンビンでギンギンだよ!!

いつもどーりなのにい……。

「桜子さ、まあ俺も悪かったとは思ってるわけだ。

で、コレ詫びな」

「ほによ?……おおおつ、『世界樹シユークリーム』だ!!」

「マジで!? 喫茶『ユグドラシル』の学際限定メニューの!!」

「一か月前から予約しても手に入らないかも知んないってゆーアレ
ですか!?!」

「そそ、あつこの店長は俺の知り合いでな、頼んどいたら流してく
れんだよ」

「コレ食べてないからだ! 毎年三人で食べに行ったもんね!!」

「桜子ズルイ!!」

「私なんてひとかけらしか食べた事ないのに!」

「にゅふふ、毎年三つは食べちゃうもんね」

「ブルジョアめ！」

「どんな感じ、食べた感想は！桜子！」

「んゝ……もう胸キュンキュンキュンッ　って感じ？」

「「桜子様！是非とも私たちにも！」」

にやははははっ、どーしちゃおっかな。

ってありや？隼人に行っちゃうの？

「しっかり寝ろよ、明日は楽しみにしてんぜ」

ひりゃひりゃ手振りながら行っちゃった……。

むううつ、やーっばなんか変な感じ。

にやにが変なんだろ？

いっつもと一緒にやんだけど……。

わかんないゝゝゝゝん。

むふ〜むむむつ。

なーんか変な感じだったにや〜、さっきのあんちゃん。

いつもどーりなのにもどーりじゃなかったもん。
コレはましか……。

「むむむつ、ビビつと来た！コイツは事件の予感だぜ……」

「うんま〜」

「とろけてまうわ〜」

「飲み込むのがもったいないや」

「聞いてる!?!」

『世界樹シユークリーム』をさっちゃんと食べてないから! ってあんちゃん来た時には思ったけど、やっぱそれはなんか違うし……。

なんだろなあ。

ホントにいつも通りのあんちゃんだったんだよ!!
なのになんか違ってた……。

違ってたというよりなんか変だったかにや?
ちょ〜つと足りないような気が、ゆーなちゃんはしちゃったのですよ。

「あ、ゆーちゃん! 隼人にいに会った!?!」

「にししっ、もちろんさあ！」

でもさ、なんかあんちゃん変じゃなかった？」

「うんうん、にゃんか変だったよねー」

さっちゃんも思ったのか！

こりゃ何か……アルね……。

コイツはバババントとあんちゃんの妹分として、解決しちゃわない
といけないねえ。

「てかさ、ゆーなに桜子、隼人先生ってどんな繋がりがある訳？

『ユグドラシル』がこんな限定商品流してくれるってさ」

朝倉か。

やゝっぱり新聞部として気になっちゃうのかにやゝ。

そしたら私たちが新聞に！？

むふふふつ、一躍有名人だよ！

「ほほう、その質問にはこのゆーなちゃんが答えてあげよう！

あんちゃんの妹分として！！」

「ハイハイ、だったら私も答えちゃうよ！」

「ほうほう、実のところはどんなもんよ？」

「あんちゃんはさ、昔は泣く子も黙るような不良だったのさ……」

「それでね、授業をスポポンッとサボってた時に溜まってたのがそこだったのだ」

「……そんだけ？」

「でね、にやかよくなったんだってさ」

「ありきたりだなあ、なんかさ。」

もつと嘘！マジで！？……みたいなのが欲しかったよ」

あの頃のアんちゃんはすごかったもんね。

私が最初にさっちゃんにあんちゃんを紹介してもらった時は、不良さんだったもん。

バイクにも良く乗っけてもらったにや。

海とか三人乗りで！

あんちゃんの膝の上に、紐かなんかでぐるぐる巻きにされて。

いやー今思い出せばかなり危なかったかも。

でも楽しかったにや。

お酒も飲んだし！タバコは吸ってないけど……。

いろいろな物を見せてもらったにや。

ちよーどお母さんが死んじゃった頃で、ズーンってなった頃。

動物園行って、遊園地行って、山に行って、川に行って、釣りに行って、スキーに行つて。

さっちゃんと一緒に連れまわしてくれたから、私もこーやっている
んな事を楽しめる様になれたんだもんね!!

『元気は最強』って、お母さんに教えてもらった事を思い出させて
くれたもん。

だからあの頃のおんちゃんは……おんちゃんは……あの頃の？
私が最初におんちゃんに会った時は……あ。

「わかったあああああああつ!!」

「私も!今日の隼人にはリーゼントじゃなかったんだ!!」

「それだよ!!」

そっかだから変だったんだ。

「……なあなあゆーな、せやけどいつつも隼人先生ってリーゼント
じゃあらへんやんか」

「うぬ、オールバックじゃん」

「でもでもさ、今日のおんちゃんはリーゼントじゃないと変だった
んだよ!」

「そうそう、昔みたいに……って事はゆーちゃん!」

「さっちゃんもそう思う？」

「もちろんにやり！」

「てことは……！」

「ってことは……！！！」

「「お祭りだアアアアッ！！！」」

ついに十四度目を迎えた、麻帆良祭。

月日が経つのは、終わってみれば早いモノだな。

……ナギのバカは、もう十四年も私をここに縛り付けているのか……。

十四年も、私は放りっぱなしにされているのか。

『九年前に死んだ』なんて言われているがな、そんな事はどうでもいいんだ。

只の一度で構わない。

もう一度だけ、私はアイツに会いたい。

会って見てもらいたい、今の私を。

今の私は、一体お前にどんな風に映るんだろうな。

『光に生きる』と言ったお前に、私の今はどう映る？

毎朝早い時間から起きて学校に向かい、くだらない授業を受けて、ただ無気力に一日を過ごし、夜が来れば眠る。

夜の眷属たる『吸血鬼』であるこの私が、真昼間に中学生ごっこをしている様を。

ナギよ、お前は一体どう思う？

「……下らん自問自答だ」

「マスター、そろそろ寝ませんと明日の朝起きられませんかよ？」

「構わんさ、茶々丸。」

どうせ私にとっての学園祭は、二日目だけのようなものだからな」

そう言えば、必ずと言っていいほどにあいつは麻帆良祭の二日目を私と過ごす。

だからこそ、そんな言葉が私の口から出てくるようになったのだからな。

まったく……律義なヤツめ。

元はと言えば忘れてしまいそうになるような口約束だったというのに。

もう十年近く、愚直にアイツは守っていてくれるのか。

……思えば最初に会ったのも、この時期だった。

私が一年生の売り場で、接客をしていた時か。

あの頃はまだ、『悪行が少々重いせいで偶々呪いが三年間では解けず、ナギも来なかった』と思い込んでいた頃だったな。

そんな訳もないとわかっていたというのに。

初めてできた友人の記憶の中から私が消えて、私と言う存在が酷く空虚に見えていた。

『目の前の人間にとっていてもいなくても変わらない存在』なのだと、柄にもなく悲しみに暮れていた頃だった。

所詮私がわかるのは『魔法』に関係している者たちだけ。
そんなものたちは必ず私を避け、私を目の敵にしていたさ。

『精神は肉体に引つ張られる』からな。

六百年近い歳月を過ごしていたとしても、私にはまだまだ10歳の子供としての部分が残ってしまったという事だ。

百年近くぶりに、久々に私は心から、泣いてしまっていたよ。

そうだな、そんな時だった。

アイツは、私の前にやって来たよ。

ちょうどそうだ、今みたいな排気音を吹きならして。

「あ、ダブリ」

「ハッ、誰がダブリだ」

「テメエだよテメエ、すっかり三年で卒業したと思ってたんだがねえ。」

中学で一年生からやり直したか……」

「クククッ…… コレは呪いのせいなんだよ」

「呪いとか…… イタい子か？」

「何様のつもりだ、私に向かってイタい子だとは……。」

この『ダーク・エヴァンジェリオン闇の福音』、『エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル』
に向かってなア」

「ウハ、マジもんだ」

「……クククッ、貴様もこの問答が好きだな」

「懐かしいだろ？俺らが最初に会った時の思い出じゃん」

「まあ、な」

真紅の髪をいつものように後ろに逆立てて。

分厚い胸にはサラシを巻いて、その上に纏うのは昔の特攻服。頭の上のチャチャゼロも、お揃いか。

スラばうは鉢巻だけだな。

「随分と懐かしい恰好をしているじゃないか」

足元は地下足袋、下は大工が履いているようなアレだ。成程、オールドタイプと呼ばれる訳だ。

「気合入れていかねえと、むこうさんに失礼だろ？」

そう言って私の隣にドカツと腰を下ろす。

特攻服の背面にでかでかと刺繍された『蛭堕亞蘭弩』。

その下に総長であったコイツの名前、その下にチームの一員であった五人と五人の名前か。

『友達だし入れてやんよ』なんて言葉と共に、私の名前まで書かれているからな。

『柄撫輪雲是離雲・柄威・毛威・魔苦墮宇柄流』か。クククツ……バカだな、コイツは本当に。

まあ当時小学生になるかならないくらいだった妹分二人の名前も書かれている時点で、やはりコイツらは頭がちよっとおかしかったんだと思うさ。

更に書かれた『天上天下唯我独尊』、『喧嘩上等』、『走死走愛』。

たった十一人で、実質は六人で麻帆良の不良共のトップに立った悪童たち。

他のヤツらも気のイイ奴らだ。

なんとつて『チームの一員だから』なんて理由で私にかかった呪いの一部を吹き飛ばし、今でも私の事を覚えていてくれるのだからな。本当に……バカどもだ。

「つーわけでだ、エヴァさ」

「なんだ、総長？」

「俺と一緒に、深夜のツーリングと洒落込まねえか？」

「楽シイトコ、連レテッテヤンゼ」

「ぴういつ!」

ニヤリと歪んだ口元。

昔のように爛々と、激しい炎を宿した瞳。

ああ、今夜は中々に楽しい日になりそうだ。

「リーゼントにはしないのか？」

「そっちの方がらしいぞ」

「髪の毛が足りねーよ」

十五匹目 izzard、突っ込む時はツッパって（後書き）

桜子と裕奈の口調が……ムズイです。

十六匹目 動くのも見送るのもそれなりの覚悟が必要（前書き）

いつの間にやらお気に入り七百件突破。
ホントありがとうございます。

十六匹目 動くのも見送るのもそれなりの覚悟が必要

麻帆良祭二日目の昼頃。

昔はよく不良共がたむろしていた場所で暴行事件が起きた。

一方的な虐殺。

皆が皆喉を潰され、筋肉を引き千切られ、骨をへし折られ、
まともに生活を送るには何年と言う時間が必要になってくるであ
ろ、それくらいの傷害を与えていた。

『今の麻帆良にそこまでするような、昔のヤツらのように頭のネジ
が外れた奴がいるとは思わなかった』。

それが率直な、私のこの事件に関する印象だった。

すぐさま発見したガンドルフィーニ先生から、近くを見回りしてい
た我々教師陣に連絡が飛んできたな。

救急車が呼び出され、『侵入不可』を示すロープが現場に張り巡ら
された。

辺りは一時、騒然となっていたさ。

私がちょうど現場に付いた時は、倒れ伏し呻く男子学生のようなモ
ノを救急隊員が搬送を行っていたな。

年若い教師や、潔癖なところがある教師たちは口を押さえ、胃から
喉にせり上がる熱いモノを抑えようと必死な顔だったさ。

私は、『見慣れている』というような妙な感覚だった。

教師としてこのような姿となった学生を見慣れている、というのは
誠に遺憾な事ではあると思う。

が、そんな思いを胸に抱き、だからこそそのような状況を昔作り出

していた香坂の方に自然と私の視線は移っていった。

私の隣に立ち、昔より少しだけ大人になったような風貌を見せる香坂は、じっと目の前を刺すように見つめていた。

そしてやがて、理知的になりつつあった香坂の瞳は段々と、段々と燃えさかるような炎を宿し始めた。

爛々と、全てを焼き尽くすような光。

一方でギシギシと、凍てつくような冷たさを垣間見せる、独特の光。

昔香坂が、麻帆良では知らぬ者のいないほどの不良だった時、よく見せていた光だ。

たった五人だけを引き連れて、集まっていた不良どもに突っ込んでいく時。

校舎の壁に向けて全力で、バイクを走らせるチキンランをやった時。一介の走り屋として、麻帆良を貫くように走る国道をバカみたいなスピードで突き抜けた時。

コイツが何か大きな騒ぎを起こす時、決まってこんな目をしていた。

だからこそ私は、『この事を全て自分に任せる』と豪語した香坂の言葉を擁護し推奨した。

他の教師たちは皆がその言葉に意見した。

年若い教師一人に、まだ被害が広がるかもしれない事件をすべて任せるとのこと。

コレは明らかに愚策であるのだから。

どこから見ても、どこから考えても。

多くの人間を動員し、この事件を起こした人間を捕まえるということが最も正しい選択であるのだから。

だが私はその意見を全て握りつぶした。

偶々その場にいた教師の中で、私が一番年長者であり、主任と言う立場にあつたため。

『どのような事が起こったとしても責任はすべて私が負う』と続けた私に、それ以上とやかく言う者はいなかった。

結局この事柄は、すべて香坂に一任させる事になった。

そうしてペコリと私に一礼したアイツは、ズンズンと迷うことなく足を踏み出していた。

あの眼をした香坂は、私の知る限りどのような男よりも強かった。

それは単純に腕っ節の強さではない。

香坂は確かに強い。

が、そんな香坂よりも強い人間は麻帆良にはまだまだいる。

目の前のガンドルフィー二先生や神多羅木先生。

恐らく腕っ節の強さなら彼らの方が上だろう。

だがそれでも、香坂は私の知るどのような男よりも強いのだ。

アイツのしなやかでいて硬い。

燃え盛り凍て付く闘志を備え持った、鋼の精神をその身に宿した男を私は見た事がない。

アイツの心は、私の知る限りどのような男よりも強い。

だからこそ私は、アイツにすべてを任せた。

そしてそんな私がこれからしなければいけないのは、アイツの後始末だ。

それが私がするべき仕事なのだから。

日はすっかり沈み、今日の夜は何事もない麻帆良祭二日目の夜は死んだかのように静かだ。

その静寂を切り裂くように、走り抜ける排気音が私の耳に飛び込ん
で来る。

アイツだな。

多分ではあるがタンスの中から引つ張り出した特攻服を身に纏い、傲慢不遜に麻帆良を走り抜けているであろうアイツの姿が目に見え
る。

ニヤリと、自然と頬がつり上がるのを感じていたさ。

徐々に大きくなる排気音。

私は麻帆良のメインストリートをコツコツと歩いていく。

徐々に、徐々に大きくなる排気音。

少しだけ下がった眼鏡を、クイと持ち上げる。

そんな視界に飛び込んできた光。

耳をつんざくような排気音。

一陣の風が、私の隣を通り越していった。

小さくなる音と、自らを誇示するテールランプ。

フツと、小さく微笑んでしまった私は更に足を進める。

香坂本人は意識してやっているのかどうかは知らないが、アイツはあの容貌で麻帆良を練り歩いていたのだろう。

ならばその顔を、目にする者は大勢いたはずだ。

そんな昔のような猛々しさを醸し出す、香坂を見て他の者はどう思うだろうか？

もし私がそうならば、間違いなくとるであろう一つの行動がある。

故に私は麻帆良本校女子中等部の寮に近付き、耳に聞こえた排気音を『やはり』という感情と共に受け止めていた。

「ちよつと！誰ですのこんな夜中に！！」

「俺か？俺は『豪徳寺薫』だぜ、お嬢ちゃんたち」

「そんな事聞いてんじゃないのよ！

とりあえずウルサイそのバイク止めなさい！！」

「加えて言うならば、ここは男子立ち入り禁止の女子寮ですわ。

早々にお立ち去りになってくれませんか？」

「わりーわりーな、人を迎えに来てんだ。

それさえ終わればとつと行くからよ」

「人！？アンタみたいなのと知り合いの女子中学生なんてい」「ほら、やっぱ薫兄ちゃんがパシリだったにや」ってゆーな！？」

「にやはははは、薫兄ちゃんだしね」

「桜子さんまで！？」

「おいおい二人よう、それはねーんじゃねえか？」

喧騒を聞きつけ集まっていた人混みの中。

もう寝る準備もしている者も多いところで、三人の人間は一際異彩を放っていたな。

白い特攻服の背面にでかかど赤で刺繍された『蛭墮亞蘭弩』。

その下に総長であった香坂の名前と、その下にチームの一員であった五人と五人の名前。

そこに一つと二つ、描かれた名前が見えた。

「まあ来たならイヤ、とつと乗ってくれよ」

香坂が中学三年生でチームを立ち上げた時、小学六年生で一番の下端だった男『豪徳寺薫』。

成程今でも下端なようで、『蛭墮亞蘭弩』のお姫様二人を迎えに来たようだな。

「乗った〜!」

「落とすなんて事しないでよー!」

そして香坂の妹分でありチーム全員の妹分であった『椎名桜子』と『明石裕奈』か。

小学生になるかならないかのアイツらを入れていたのだ、やはり香坂たちは変わっていたんだろうな。

結局潰すまで、以降他の人間を誰一人としてチームに入れなかったというのに。

「じゃあ総長は姐さんのところに行ったみたいだからな、俺らも追っぞ」

「あり？姐さんって……覚えてる、ゆーちゃん？」

「いやー全然。」

女の子って私らとチャチャゼロちゃんだけじゃなかったっけ」

「薫兄ちゃんは頭も悪かったもんさ」

「……そうか、二人は姐さんの事を……。」

オウ悪い！俺の勘違いだったみたいだな」

「じゃあ早く……！」

「GOだぜ……！」

つと、話が逸れたか。

とりあえず、私は私のやるべき事をせねばな。

「悪いがそれは止めてもらえるか？」

「あ、新田のおっちゃん！」

「やつふ」

「……椎名、明石……もうお前は私の担当の学生だろう？」

その呼び方は止める」

昔はよくそう呼ばれていたな。

懐かしいモノだ。

昔の格好に、思わず気持ちも戻ってしまったところか？

「おやっさん……イヤイヤイヤ、おやっさんが出て来たからって俺らは止められねえぜ！」

総長が昔みてえな顔してたんだ……なんかデカい事があるにきまつてるからな……！」

「そつ……そうなのだ！」

隼人にいが昔みたいな顔してる！」

「だったら私ら妹分も向かうのが……スジってもんだぜ……。
なぜなら私らは！」

「「爆走天使だから……！」」

……そういう問題ではないんだがな……。

「ともかく、俺は行かなきゃなんねーんだ……！」

「豪徳寺、それは誰かに言われてか？」

「イヤッ……そうじゃねーけど」

「ならば確認してみろ。」

それとだ……香坂は『俺一人に任せろ』と言った……コレの意味は、わかるな？」

「……うぐっ……」

香坂のチームは強かった。

だがそれ以上に、少なかつたからか皆が皆、繋がっていた。

互いが互いの気持ちを理解し、相手の行動を分かり合っているようなヤツらだった。

故に、香坂の言葉を耳にした豪徳寺は、それ以上進もうという気配を見せなかった。

「えっせつかく着替えたのに」

「髪だつて昔のあんちゃんみたく固めたのに」

成程、見れば二人ともリーゼント。

おもちゃを取り上げられて拗ねた子供のような顔を私に向けている。

まあそのような顔をされても、私はどうしようもないのだがな。

「ま、イイヤ。」

ほにゃらば今日はぐっすり寝て、明日隼人にい後夜祭でいっっぱい奢ってもらうのだ！」

「おっしやー！そうときまればお風呂にやー！」

それが正しい。

お前たち二人の切り替えの早さは、相も変わらず素晴らしいと私は思うぞ。

「お前はどつする？」

「あゝ、俺もあいつらみたいにするっす」

「それがいい、安心して寝ておけ。」

お前らもわかっているだろうが、今の香坂は……「」「」史上最強、天下無敵!!」「」だろう?」

隼人のバイクの後ろに身体を預け、私は地下の用水路?のようなところを走り抜けている。

しかし……麻帆良の地下にこのような巨大な物があつたとはな。十四年もいて、まるで気付かなかつたぞ。

「御主人ヨ」

チャチャゼロか?

何の用だ。

と言うより少々臭いな。

まあ仕方ないのかもしれないが……先ほどまでは臭いもなかったというのに。

「御主人八今、『世界樹ノ魔力』トヤラノ影響デアル程度ハ魔法、使エンドロ？」

「まあな。

バカみたいな奔流の一部が私に流れ込んでいる。

全盛期とはいかんが……そこらのカスどもでは相手にならんさ」

「ケケケ、ソレナライイゼ」

「ぴうぴう」

何だ？

隼人は私をどこか戦場にでも連れだすつもりなのか？

……まあ昔の特攻服姿だからな。

それも有り得ん事では無いとは思っていたが……何故に私だ？
戦わせる気か？

「一応な、あぶねーかもしれねえし」

「……つまらん相手なら私は動かんぞ」

「そんな時はスラばうとゼロにでも頼むからイイわ」

そう言つてバイクはさらに進む……が。

何だコレは！

ドンドンと臭いがキツくなっている！

生臭く汚染されたニオイ。

食い物が腐ったような、鼻が曲がるニオイ。

何らかの薬品のような、人工的な鼻を刺すニオイ。

見ればハエもそこら中にいるではないか！！
不衛生この上ないぞ！

「オイ隼人！貴様私をどこに連れて行くつもりなのだ！！」

「ケケケ、御主人気が短イゼ」

「ぴううぎ」

「叩き壊してやろつか、貴様ら……」

スラばうは無理な気がするが……そういう問題でもないしな。

「昔ナ、ココヲ好きデ拠点ニシテタ阿保ガイタンダヨ」

昔？

拠点云々の話だとすれば……暴走族時代の頃か？

「コンナクセーシキタネートコヲダゼ？信ジラレルカ？」

「まるでその者の感性がわからぬな。」

やむを得ずではなく好んで、なのだろう？」

頭がイカれているな」

「ぴぎー」

「スラぼうノ言ウヨウニ、ソコノハイカレテナダ。」

人ヲ壊ス事ニ何一ツ感ジネエ……マ、俺モソウナングガナ」

それはそうだ。

チャチャゼロは元々私に襲い来る襲撃者を『殺す』ための手段として、私を吸血鬼にしたあの男を『殺す』道具として作り出した殺戮人形だ。

そんなチャチャゼロが妙な倫理観や道徳理論を持ちだして来て『人を殺せない』なんて言って貰っては困る。

だからこそチャチャゼロに人のような理性は無かった。

今のように『楽しみに』話すなんて事は有り得なかった。

狂言回しのような事は、昔からよく口にしていたが……。

何かを食べるだの、寝るだの、殺し以外に興味を持ったの。

そんな人らしい感情を手に入れ、それに従い行動し、口を開きだしたのは隼人と出会ってからだ。

コイツもまた、隼人によって影響を受けているという事だ。

「デナ、ソナナ『人』トシテオカシヤツガイタコロニ、今マタ
『別ノ人』ガイルンダヨ。」

ソイツニ会イニ行クツテコトダゼ」

「……待て、何故私がそいつに会いに行かねばならんだ。」

「氣ニスンナ、ハゲルゼ」

「誰が禿げるか――！」

つとそんな内に付いたか。

薄く古ぼけた扉が開かれ、光が通路に向けて漏れ出しているな。

「ココで待つてもイイぜ？」

「ハッ、鬼が出ようが蛇が出ようが握りつぶすのがこの私だぞ!？」

高々人如きに何故、私が退かねばならん」

「あ、そ……んじゃまあ行きますか」

「ケケケケケ」

「ぴーぴ」

ギギギと錆びた音を上げて、扉はゆっくりと開かれた。
部屋に入った途端きつくなる腐臭。

だが……何だ……コレは……？

中の部屋は10m四方ほどの、正方形の部屋だった。
これまでの通路と同じようなコンクリートで形成され、少々無機質な感じが漂う。

そんな部屋の中に、よくはわからないが訳のわからぬ、高そうな機械がいくつも置かれていた。

加えて部屋の中心に近い所に敷物が引かれ、その上に机。
そして散乱している難しげな数式や文字が羅列した紙。

「ケーーーーケケケケケケケケケ！愛サレテルジャネエカ！……！」

「ぴうぴ！」

「……さすがにちょっとよそーがい……ココまでかあ」

が、そんなモノはどうでも構わん。

部屋中、壁から天井に至るまで。

床以外のすべての空間が隼人で埋め尽くされている……。

正確に言えば隼人の写真。

目線から見れば隠し撮りされたであろう者がほとんどだ。

……そして、壁の一角。

他とは違い極めて清潔に整頓された一角。

そこに張られた写真は他とは少し違っていた。

他のどこの写真も隼人一人か、スラばうとチャチャゼロを加えて映っているというのに。

その写真だけは、写真のなかの隼人の隣には必ず同じように微笑んだ女が居座っていた。

「……クヒュッ……」

耳に付く、気色の悪い笑い声だ。

「……クヒュクヒュクヒュッ」

まさかこの女が、こうだとは思ってもみなかった。

「……クヒュクヒュクヒュフフフフフフフフフ」

写真の中の女は、壁の前にひかれた薄汚れたシートの上に裸で横たわっていた。

のっそりと緩慢に、女は身体を持ち上げた。

フラフラフラフラ、首が女の頭を支えきれないように、左右に揺れているが見える。

「ああああああああああああ先生が先生で先生の先生の

教えてくれるか？
なあ、『狂人 超鈴音』よ。

十六匹目 動くのも見送るのもそれなりの覚悟が必要（後書き）

狂人始動。

うまく書けているか非常に不安です。

十七匹目 自分らしくあるために必要なモノは人それぞれ（前書き）

お気に入り八百件突破、総合評価二千突破……夢じゃなかろうか？

十七匹目 自分らしくあるために必要なモノは人それぞれ

超のメスによって切り裂かれた傷口は、スラぼうの『ベホマ』という回復呪文によりみるみる塞がっていった。

隼人が言うに、体力は回復しないがそれ以外の『ありとあらゆる傷を一瞬で治す』効果があるらしいが。

正に、凄まじいの一言だ。

更に言えば広域にその恩恵を齎す『ベホマズン』という呪文もスラぼうは会得しているらしい。
やはり規格外だな。

で、そんなスラぼうと、その主人である隼人と、アイツのモノになっってしまった元我が従者は……。

「えへえへえへへへへへへへへ。」

いつかいつか、先生にこうやて食べてもらえる日を夢見てたネ」

「ハア……中華だけかと思えば超ってさ、普通の家庭料理も作れんだな」

「もちろんヨ、この私をなめちゃイカンネ。

はっ、はははははははははははははははははははははは……と、人……隼人隼人隼人先生は、和食が好きだて知てるからネ、いっぱいいっぱいーっばい勉強したヨ」

超に会い何らかのことをするために……多分であるが隼人に括るその心を解きほぐすために、やって来たのだろうか？

だとしても私を完全無視して何をしとるんだ！

私は知らない子なのか！？知らない子なのか！？

だったら連れてくる意味がないだろうかアアアアツ！！

「そのバカども！！」

「俺ら？」

「当たり前だろうが！

大体私を連れて来て置いて無視するとはどういう見だ！！」

「だがよく、エヴァが俺らがこっちに来た時に付いてこなかったんじゃないかねーか」

ム……むむむうううう。

「そんな事は関係ないんだアアアツ！！」

「ケケケ、我ガママナ御主人ダゼ」

「ぴぎ」

こんな臭い中で食事が出来る貴様らに言われたくはないわ。スラばうは鼻があるのかも定かではないからイイとしても……チャチャゼロ、貴様は獣の力を得たのだろうか！！おかしくないか、絶対的に。

……貴様は……一体……この私を……ナンダトオモツテイル？

瞬間私の右拳は壊れたラジオのように笑う超の頬に吸い込まれていった。

ガアアアンと大きな音を立てながら機械の群れに飛び込んでいった超鈴音。

殺しはせんが……イイ様だ。

「……やりすぎじゃね？」

「知るか。」

……安心しろ、殺してはいないさ、副担任殿」

「ケケケケ、久々ニ悪ダツタゼ御主人」

「ふんっ」

「びぎぴー」

ホコリを舞い上げる薄汚れた部屋。

さて、これで適当に気絶していてくれれば、後は引きずって帰るだけで構わんだろう。
胸糞悪いがな。

「高々十数年しか生きていない、気を狂わす事でしか己を守れなかった矮小な貴様如きが……この私相手に随分な態度をとるではないかアツ!!」

「知らない知らない知らない知らない知らない知らない知らない関係ない関係ない関係ない関係ない関係ない関係ない関係ない関係ない。」

[illegible]

私には……私には私には私には！私には！私には！！！！隼人先生しかないノ二！！！」

ハッ、下らん。

「知るか、高々ガキの我がままで我が友を……貴様のような壊れた女の依り代とするな!!」

「我が友て……照れる!!」

「びぎーっ！」

「ケーーーーッ ケケケケケケケケケケケケケケケ！」

……後で必ずその態度を後悔させてやる。

ともかく超鈴音は私の言葉を聞くと、ガクガク身体を震わせプチンと糸の切れた人形のように、上半身をだらんと落とした。

声が聞こえる。

「……大将……今日はすまないヨ。

せかく私の大切な大切な人を連れて来たというニ。

猫がいたね猫が猫が猫がいてしまったヨ。

作り置きのパザがグシャグシャになってしまったネ。

サビ抜きでカラシもカラシも抜いていたのニ。

炭火で冷やして冷凍庫でドロドロに溶かしていたはずだたのニ。

後は炊飯器に入れて保温すればよかただけなのニ。

タルタルぎゅういちちで美味しーと言われるラララララララ
バラライラだたのニ。

猫がいたね猫が猫が猫がいてしまったヨ。

どうすればいいと思うヨ？

牛は我慢したネ。

大切なあの人の為だと思テ。

そのお蔭で私もトロがいぱい食べれたカラ。

猫がいたね猫が猫が猫がいてしまったヨ。

……大将……猫は握てくれる力」

「クククッ……下らぬ自問自答など不要だ。

来い……貴様の腐った脳みそごと吹き飛ばしてやる」

私の声が聞こえたのか、超鈴音は重そうな頭を持ち上げた。
ニスマリと笑うヤツの口は、耳まで届きそうな錯覚を私に抱かせる
ほどに、歡喜に裂けていたさ。

```
RURURURURU!!!  
IIIIIIIIII  
IIIIIR!!!
```

ヤツからの初めの接触は投擲された数本のメスだった。

尋常ならざる速度で、正確に私の顔目掛けて向かって来る。

クククツ……、狂った割には随分と普通な攻撃ではないか。そしてその後には貴様が続くという訳か。

超鈴音よ。

貴様は敵意を持って私に盾付いた。
幾ら狂気に彩られているとはいえ、他の『正義』を自称する口だけの魔法使いどもにはまるで出来なかった行為だ。

その行為に賞賛を与えよう。

貴様に心からの拍手を与えよう。

故に、私が持ち出せる全力を以って、貴様を叩き潰してやろう。

貴様は速い。

メスを追う貴様は強化された肉体に『魔力』を用いての『瞬動術』にて私に接近する。

成程、相当な錬度だ。

貴様は確かに速い。

が、私にとっては遅い、欠伸が出るほどに。

私の肌を傷付けたくば、その十倍の速度を持ってこい。

「レフレクシオー
” 氷楯 ”」

『瞬動術』は確かに速く、ある程度の一線を越える相手同士の闘いでは必須テクと言っても過言ではないのだが、欠点は多数存在する。

『直線移動しか出来ない』というのがその一つ。

まあ小さく繰り返し返せばその欠点は無くなるのだが、頭に血が上っているようだな。

その事を知っているだろうに、行っていない。

戦いの場に於いて、『心は熱く頭は冷たく』。

私や貴様のように理知的な者にとって、コレは基本だ。

隣の阿保どもでは、また少々勝手が違ってくるのだがな。

メスと超鈴音の間に氷で出来た盾を差しこむ。
ガアアンと何かと何かがぶつかる音。

飛来したメスを軽くかわし、くれてやろう超鈴音。
私からのプレゼントだ。

ニウイス・カースス
「氷爆」

脆いな、超鈴音。

所詮壊れる人間はみな、脆い人間だ。
狂いきっている人間は、弱い人間だ。

六百年という気の遠くなるような月日を『狂いながらも己を己で保ち続けた』私に、貴様が叶う道理など無いのだよ。

弾けた氷の盾による冷氣と爆風が超鈴音を襲う。
生まれた水蒸気による煙幕の中、血で身体を濡らしながらも更にヤツは私に向かい来る。

バチバチと電気のようなモノを纏った拳が私に迫る。
光の灯らぬ眼で、狂ったように私を貫きながら。

……やはり、弱いな、超鈴音。
貴様がたとえ幾千幾万幾億回足掻こうとも、私に貴様が届く事など、有り得んよ。

迫る力に私の力を少々加え、そのベクトルを変更する。
ふわりその身体は持ちあがり、重力と、貴様自身の力と、私の力によって、硬いコンクリートに叩き付ける。

僅かに動きを止めた超鈴音を魔力の込もった特製の糸で縛りあげる。
ついでにこの服も引き裂いておくか。

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああつ！！！！」

「黙れ、耳障りだ」

鋭く尖った爪で喉を潰す。
カヒューカヒューと今度は乾いた呼気が口から洩れる。

相当な激痛を伴っているだろうに……やはり哀れで弱い女だ。

「昔ノ御主人ミテエダナ」

「うるさいぞ、ボケ人形」

「コイツハバカジャネエカラ狂ッタンダロウナ。

御主人ハバカダカラ狂ッテネエノニ」

「誰がバカだ貴様はアアアアアッ！！！！」

「ケーーーーッケケケケケケケケケ！！」

氷漬けにしてやろうか……割と本気でな。

「まま、イイじゃねえか。

誰もかれもがエヴァみてえに強かねーんだからさ」

「ムうう……ふはっ……フハハハハハハハ！当たり前だ隼人！！

私は『闇の福音』、ダーク・エヴァンジェル『人形使い』、ドール・マスター『不死の魔法使い』、マガ・ノスフェラトゥ『悪しき音信』、『禍音の使徒』、『童姿の闇の魔王』と呼ばれた史上最強の魔法使いなのだからアッ！！！！」

「自己顕示欲ノツエーヤツダゼ」

「ぴぎぴぎ」

「……………」
ニウイス・カースス
「氷爆」

「又オアッ！？アブネッ！！」

「……………ぴぎ？」

そこそこに『魔力』を込めたはずなのだが……ほぼ無傷か。
スラばうの全力がますます見たくもあり、見たくなかったな……。

それに、だ。

私は隼人の言うように強くは無いさ。

ナギのバカを必死に求めたのも、自分で自分が今の自分に耐え切れなくなりそうだったからだ。

私と同等か、それ以上の力を持ったアイツ。

弱い相手では私を受け止めてくれそうになかったから、これまで受け止められるだけの力を持ったヤツがいなかったから。
だから私はあの男に傍にいたいと思っていた。

一人でいるのは慣れたと思っていたても、そんなの自分自身で出て来た感情を踏みつぶしてきただけだ。

あの男を見た時、自分を受け止めても決して壊れそうにない力を見た時、抑え込んでいた感情が鎌首をもたげてきた。

私が私でいるためには、あの男が必要で、あの男でしかダメなのだと思います。

「超さ……んゝま、アレだ。」

俺をそこまで想うようになったのにな〜んかあったんだと思う。

けど俺はそれを聞かぬー」

だが、それもまた違った。

確かに受け止めてくれるのは、これまでもこれから、おそらくあの男だけだろう。

「なんでとかどうしてとか、俺にとっちゃあどうでもイイしな。

ま、だがテメエがもうちょっとばかし手遅れな状態だったのは俺もわかるわ」

私が私で私らしくあるために。

その手段は何も、受け止めてもらう必要なんてなかった。

「けどよ、イイじゃねえか、狂ってたってよ。

それが超で、これまでの人生で積み上げて来た『超鈴音』つつう女なんだろう？」

只少しだけ、私自身のこれまでを私であるとして受け入れてくれれば、それだけで私は私でいられた。
それを、お前が教えてくれた。

『へえ〜スゲーな。』

だって三国無双的なアレだろ？

男としてはやっぱ天下無双とか万夫不当とか、憧れちまうもんよ
！！！』

『……お前、私の言った事を聞いていたのか？』

『イイじゃねーの、それがエヴァなんだし。』

殺すのだって俺には関係ねえ相手だし、正直どうでもイイし。

俺の大好きな『関羽』だって『呂布』だって人いっぱい殺してる
し』

『むう……まあそれはそうだが……』

『てか吸血鬼なんだよな？だったらホレ』

『……なんだ、コレは？……肉？』

『食ったら俺の仲間になるんだわ！』

さあ食え！魔物使い香坂隼人さんがお前を引き連れてやんよ！！』

『……………』

『あり？無反応？何故に？魔性の肉なのに？』

隼人、お前は私なんかよりずっと強いさ。

私を私のままで受け入れてくれた貴様はな。

私が誇るべき友だ。

「だから……食いな、超鈴音。

お前がお前であるために、俺が必要だってゆーんだったらよ……俺がテメエの前を走り続けてやらあ。

テメエ一人ぐれえに追い付かれねえ程速く、俺はどこまでも走って行つてやんよ。

ま、女として扱って欲しけりや俺に追い付くくらいして、俺を惚れさせなきや無理だけどな!!」

そう言つて、スラぼうが頭にのせて来たバッグの中から燻製肉を取り出す。

パクパクと口を開けたり閉じたりしている超鈴音は、ボロボロと涙を零しながら目の前の肉にかぶり付いた。

「俺の後ろ、着いて来たけりやどこまでも付いて来いや!!」

「ぴぎぴぎっ!!」

「俺ラノ後ロダケドヨ!!」

「……うぐっ! うん……うん……!!」

成程、隼人。

貴様が私をここに連れてきた理由が少しわかった。

私と、超鈴音は少々似ているのだな。

まあアレだぞ、隼人。

一応わかってはいるかとは思うが私はココまで弱くない。
それだけは言っておいてやる。

なぜなら私は貴様の友だからな。

十七匹目 自分らしくあるために必要なモノは人それぞれ（後書き）

狂人超鈴音を書いていたらいつの間にかエヴァに食われていた……
アレ？

十八匹目 本物の友達は何より大切なもんだ（前書き）

二年時麻帆良祭編、とりあえずここで終了となります。

十八匹目 本物の友達は何より大切なもんだ

やっちまったなあ。

まあ多分ああするしか方法はなかったとはいえ……やっちまったなあ。

生徒を魔物化させちまうとか……俺はさあ……！！

……まあもうどんな風に言っちゃっても、仕方ねえからイイんだけどよ。

うむ、俺は俺の出来る最善をやったに違いねえ。

後悔なんてしねえのさ！！

……結局シスターシャークティとデートも出来なかったけど、後悔なんてしねえんだよ！！

……泣きてえ……。

「大根くれ大根」

「あいよ……つてか随分と沈んだ顔してんじゃねーか、隼人」

「うつせバーカ、教師の俺は高々おでん屋のテメエと違って悩む事がいっぱいなんだよ」

「んだとあアツ！捻り潰したろうかッ！！」

「来いや来いや、三秒で潰したんぜ？」

「上等だロリコンがッッ!!」

「桜子と裕奈連れて来たとき一番鼻息荒かったのは teme だろうが!!」

「やめんか、バカども。」

香坂も高木も私に免じてここは矛を収める」

「「うつせえ新田! teme は黙ってる!!」」

ってアツちいいいいいつ!?

大根が俺の顔にいいいいいいッッ!!??

「ナイスアシストだ、オヤジ」

「ドラ息子とそのダチ如きにや、俺もまだまだ遅れは取らねえよ」

容赦ねーな。

ハア……ま、気も抜けちまったけどさ。

遂に終わった麻帆良祭。

今は後夜祭で、どいつもコイツもそこら中で騒いでるわ。

で、俺が今居るのはいつものおでん屋。

俺が一緒になってチーム組んでた『高木政利』の親父さんがやってる屋台のおでん屋。

継ぐんだって政利が言って、もう高校卒業してからだから……五年近くも修行してるわけだ。

ま、そこそこの味になってんじゃねーの？

「あ、大根と人参と卵と昆布の追加イイかな？」

「ウィーッス」

「でだな〜亜矢がだな〜、もうかわいくってな〜」

「ガンドルフィーニ先生、酒臭いですって、ちよっ誰か」

「焼酎、お代わりだ」

「あいよ」

「政利兄ちゃん、私はハンペンとがんも！」

「私は……ってお父さん、こぼし過ぎだよっ！」

「あはははは……ついね」

で、今ここにいんのは俺と新田センセとガンちゃんと光さんと真也さんと明石さんと瀬流彦。

後は付いて来やがった桜子と裕奈。

スラばうとゼロもいるけどさ、とりあえず身動きとれねーわけだ。今は桜子の膝の上にいるぜ。

「総長！ビール買って来ました！！」

それと豪徳寺薫だ。

てか薫よ、総長はそろそろ止めて欲しいんだがねえ。

「薫、俺に寄越せ」

「政利…… テメエは酒かつくらいながらやる気か？」

「いやっ、まあそうだ…… って親父だつて焼酎飲んでんじゃねえか！」

「バツキャロー、積み上げて来たもんがちげーんだよクソガキ」

「だゝつてよ。」

ま、テメエの分まで俺が飲んでいてやらあ…… ンゲングッ…… プ
ハアアッ！ビールが染み入るぜ！」

「人が飲めねえつてのに…… 表に出るや隼人！タイマンだコラア！」

「イイゼイイゼ、ちょゝつと最近ストレスしか溜まってねーんだよ」

声はいらついているが顔はニヤニヤニヤついてんぞ、政利。
コイツ線はそこまで太くねーのに結構なパワーあるからな。
しかも蹴りばつかだし。
男なら拳で来いよってんだ。

「隼人にいに大根三つ！！」

「私にあんちゃんにちくわと卵！」

「オイオイ隼人ばっかかよ……」

「大丈夫っす政利さん！俺が政利さんに賭けますから！！」

「……うれしかねーよ、バカ」

にししっ、イイ気味だぜ。

「ニヤついてんじゃねーぞ！気色ワリー顔で！！」

「黙れ童貞！」

……おりよ？プルプル震えてやんの。
事実だからなあ……ちよつとキツイよな。

「俺は硬派で純情なんだよオオオオオオツ！！」

「付き合って五年でやつとキスまで持つてくヤツはただのヘタレだ。

しかも業を煮やした向こうからだし」

「死に……死に晒せ隼人オオオオオオオツ！！」

「ケケケ、テメエに負けるほど耄碌してねえんだよツ！！」

政利の蹴りが俺のドテツ腹に突き刺さって、俺の拳が政利の横顔を殴りつけて。

後はさんざん愚痴りながら殴り合って、気付いた時にやもう朝だったな。

スラぼうとゼロ頭に乗つけて、久々に桜子を右側に、裕奈を左側に置いて、ヒリつく体と一緒にパツチリ目を覚ましたわ。見つかったら淫行とかで捕まらなきゃいいんだがなあ。

まあ周りに親もいるし教師もいるし、大丈夫だろ。道の真ん中、どってり寝てるけどさ。そんな奴ら探せば麻帆良中にいるわ。

「悩ンデンノ力？」

「別に……悩む事なんてありやしねえじゃねーの」

「ぴぎ」

「ケケケ、スラぼうノ言ウ通りニテメエラシイジャネエカ」

「おうよ、さんきゅ」

だよな。

ウジウジグジグジ悩むのは俺らしくねえわ。

どーせやつちまった。

そんなら俺は俺らしく、いつもみたく思うがままに、かっとなで行きゃあいいじゃねえの。

それが俺なんだしさ。

ウツシ！楔ぎ完了！！

結局超……じゃねえや。

鈴音のヤツは俺が転生課のねーちゃんに貰った『魔物の肉』を食つてすぐさま変化を見せた。

ゼロの時は何回か繰り返してつてヤツだったんだがな。魔物への成り易さとかなんかあるんかねえ？

んあ、にしても……くあぁっ……ねみい……。歩いて眼でも覚ましてくっかなあ。

となりやあ両側のコイツらを退かさねえと。

普通に立って見れば……腕にくっ付いて来たか……。

あゝよし、薫に預けよう。

後は知らね、何とかなるだろ。

朝日浴びて歩くのも悪かねえな。

今度バイク飛ばして海まで行って、日の出でも見て来ようかね？

鈴音が変化したのは『ハーゴン』。

思わず納得しちまった俺は悪くねえよ、きっと。

となれば俺が『シドー』か。
邪神様扱いとか……清廉潔白とは言い難いし、どっちかつつたら
そっちか……。

『ハーゴン』は『DQ?』で現れたとある邪神を崇める宗教団体の
教祖だった存在だな。

魔物を中心とした軍隊も率いてて、その世界で最高峰の『ロンドル
キア山』の山頂に神殿を構えて、魔界とも通じているんだっけ？
強い魔物とかを魔界から引っ張ってこれる訳だから、かなりの魔力
の持ち主だったって訳だ。

ロトの子孫である王女を犬にも変えてるしな。

てーっきりラスボスかと思えば、しつかり次が出てくるんだからさ。
最初はちよつとばかりビビったもんよ。

結構いろんな特技使って来て、強かったってのは覚えてる。

強い部下引き連れて、でもそれより更に強くって、けど『マホトー
ン』が偶に効いたりつつうお茶目もあって、俺個人では結構好きな
ボスだがな。

最後の散り様も、悪の大神官らしく自分を生け贄に捧げてっし、イ
カした感じだったわ。

……そー考えつと鈴音のヤツも……。

イヤイヤイヤ、俺は魔物使いさんな訳で、邪神様じゃねーから大丈
夫だろ……多分だが。

ウムウム、ちげーねえや。

しかし『悪霊の神々』つつうサブタイトルだったが神って結局『
シドー』しか出て来なかったんだよな。

なんでも『DQ?』で出て来た『エスターク』とか、『DQ?』で

出て来た『ミルドラース』がそれに当たるって聞いたことある気もするが……。

ま、どっちでもイイや。

とにかく俺がビシッとバシッと、しっかりしてりゃ大丈夫だろ。楽観的かもしれないけどよ。

「ぴぎぎ」

「確かにな、まあ昔を思えばアレくらいは……さ」

「停学一週間ダカラナ、ヨカッタンジャーノ？」

「俺なんて一カ月喰らった事あるからな、まだまだってヤツだ」

「ケケケ、比ベル相手ガテメエラダカラナ」

「ぴぎ」

暴行事件に於いちや、ちゃんとし鈴音を学園長のところに引っ張って
ってそれなりの処置をとってもらったわ。

で、その内容が『超鈴音を一週間の停学に処する』つつつヤツ。
まあ俺もそれなりだと思うわな。

被害から言えばかなり寛大に見られた訳だがそこには理由がいくつか。

一つは監視カメラの映像。

鈴音が何かしている場面が映った訳じゃねーんだが、それまでの男子学生どもの行動が映ってた訳で。

そいつらは女子学生やらにちょっかい出したり、屋台をちょっと良くねえ方法でひやかしてたり。

ま、そんな感じに素行がイイ相手じゃなかったって事だ。

てなことで襲われてやむを得ず過剰防衛に至ったというのが認められた訳だな。

女でよかったなあ、鈴音。

二つ目はその過剰防衛の度合い。

『やりすぎじゃねーの』って声も上がった訳だが……ま、ここは麻帆良な訳だ。

イイ意味でも悪い意味でも、常識が通用しにくい場所だわさ。

広域指導員やつてる高畑先生が『デスメガネ』とか『笑う死神』とか呼ばれて、迷惑かかるくらい暴れてるヤツらを武力的介入で止めたって『是』とされてる訳で。

んで他のまほーせんせーも、そんな風に事を納めたって何ら問題無しって事になってんだぜ。

『なのに生徒はダメです』なんて戯言、俺は許さねーよ。

案の定『立場が違う』だのほざきやがった先生がいるが、そこは必死こいて黙らせた。

後さ、新田センセやらガンちゃんやらも擁護してくれたしさ。ありがたい事だわ。

それで結局さっきの結果に落ち着いた訳だ。

『俺がすっかり見張って面倒見ますんで』って言ったら坂上の野郎がまた嫌味言つてきやがったが、気にもならなかったな。俺も大人になったもんだわ。

只アイツより鈴音の事って思ってただけなんだがな。

後で、てか魔法先生だけになってまたお話がされた時にガンちゃんに聞いたんだけどよ。

鈴音つてちよつと危ない人間扱いされてたみたいだな、まほーつかいらの中てだが。

何でも『危険思想を持つ』だの言われてたらしいわ。

やだねーホント。

そんな風に生徒を決めつけちまうなんてさ。

俺もそうだったんだろうねえ。

……思えば他人事じゃねえからな、マジで。

そっちの方も『俺が全部責任もってまとめます』って言っただけだったわ！

ガンちゃんにギャーギャー喚き散らされたけどさ。

イイんだよ、俺はそれで。

つーことで鈴音は俺担当の『魔法生徒』扱いになったな。正式に、そんな風を持っていた。

そうなれば俺が全部責任取れるし、『教師は責任をとる仕事でもある』って新田センセに教わったし。

てか俺も初めての部下？持ちになったんだな。

な〜んか変な感じだが、ワリー気分じゃねえことは確かだわさ。

鈴音もちゃんと俺が言ってやればなんとかなるだろ。

俺が言えば何でもしそうで怖いところもあるが……まあ生徒で年下のメスガキに変な事させねえよ。

思わずそっち方面に頭が持ってかれちまったが……大丈夫だ。

そこまで俺もゲスなつもりはねえしさ。

つと、世界樹広場まで来ちまったか。

考え事しながら歩くと、結構距離が稼げるもんだ。

「オオ！老師！」

「……待て、誰が老師だ？」

「もちろん老師が老師アル！」

「あんな、お前生徒俺副担任、わかる？」

「もちろんアル」

「じゃあさ、何で俺が老師になる訳？」

いつもみたく隼人先生でイイじゃねーの」

昨日は多分徹夜しただろうに、元気だねえ。

さすが古菲、イイこった。

バイタリティーあふれるってヤツだ。

「老師は老師であて欲しいと思ったから私は今日から老師の事を老師と呼ぶ事にしたネ」

イヤ、意味わかんね。

何故に老師になったんだ？

てか老師ってスゲー偉い人の事だろ？

俺コイツに特に何もしてねえと思うんだがな。

「老師も一緒に稽古どうアルか？」

「イラネ、ちゅーごくけんぽーとか、俺にゃ出来そうにねーし」

「アイヤー、残念アル」

……純粹なヤツだな。

ホントに残念がつてるわ。

ははっ、コイツはイイヤツだわな。

「んじゃ俺は行くけど、てけとーに振り替え休日楽しめよ」

「了解アル！」

じゃ、俺も戻ってあいつら起こして、帰ってもつかい寝ましようかね。

「老師！」

「あんな、だから老師は止めろ」「ありがとうございますアル!!」…何が？」

「んゝよくわかんないヨ……でもありがとうアル！」

「……そか」

「そうアル!!」

鈴音の事、ちつとばかり不安なところもあったが……大丈夫だな、こりゃ。

「なあ古菲……お前友達いる？」

「大親友がいるアル!!」

「にじししつ、そつか。

ほんじゃまあ今度、そいつとおでん屋連れてってやんよ」

「ホントかネ!？」

「まあな」

「美味しいアルカ？」

「……そこそこだわさ」

「老師の親友さんがやてるアルカ？」

「ちげーよ、アイツは……」

そだな、アイツは……。

「ただの悪友だ」

十八匹目 本物の友達は何より大切なもんだ（後書き）

次話はちよつと時間が飛びます。

原作開始に向けてズンズン進みます。

十九匹目 楽しい時間が早く感じるのは当たり前（前書き）

あやか口調……凄まじくムズイです。

十九匹目 楽しい時間が早く感じるのは当たり前

麻帆良祭も終わり、今日で一学期も終了。

思えば早いモノでした。

『楽しい時間は早く過ぎてゆく』とは言いますが、まさにその通りだったと、私は思いますわ。

明日から夏休みになる訳ですが、夏休みもまた早く過ぎていくんでしょうね。

ふふふつ、このクラスになって、特に二年生になって、流れる時間はなおさら早くなったような気がします。

それだけ私がこのクラスで過ごす時間を心地よいものと感じているからでしょうか。

ココだけのお話ですが……一年生の時は、少々不満と言うモノを私は抱いておりましたの。

担任の高畑先生は、よく出張でクラスを放りっぱなしで出張に出かけておりました。

まあそれでも、ちゃんとクラスの方々の事を把握していた、と言うのは知っておりますわ。

正直舌を巻く、と表現すればよいのですかね？

驚きと共に、やはり学園長のお孫さんであるこのかさんの担任を任されるだけあって優秀であると知りましたわ。

……まゝ、あゝ、初等部からの腐れ縁のおサルさんにそう言えば散々高畑先生を称賛する言葉を並べてきやがりましたので、かなり鬱陶しかったのですが……あら？

オホホホホホ、委員長たる私が少々汚い言葉を……。

……ゴホン。

ともかく優秀ではありましたが中々私たちと触れ合う機会は少なかったというのが、私の印象でしたわ。

その「せいで」、またまたおサルさんがギャーギャー喚き散らしやが……ゴホン。

はい、で、次ですわ。

学園長先生は、そのことを見越しておられたのでしょうか。

私たちのクラスに高畑先生のいない間、世話……と言うのは表現がおかしい気もしますが、担当してくれる副担任の先生をあてがって下さいましたわ。

……ですが！……その先生は普段学園長先生の秘書を務めておられる源先生でした。

もちろんあの方にも優先すべきお仕事がある訳でして、結局いつもいつも来られる訳ではありませんでしたの。

仕方がない、というのは理解してはいるのですが……どうも私たちだけが少々蔑ろにされている。

考えすぎかもしれませんが、そう感じてしまいましたわ。

それで結局、私たちのクラスに来られる先生は担任でも、副担任でも無いお二人になりました。

一人目は二年生のA・H組主任である『新田明彦』先生。
現代国語の教員で広域指導員も務めておられ『鬼の新田』なんて異

名をとる、少々厳しい先生ですわ。

おっしゃっている事は至極真つ当で正論。
だからこそ疎ましがられているのですが、私個人としては、新田先生は嫌いではありませんの。

煩いとか、煩わしいとか、もちろん私も中学生ですので思う事は多々あります。

ですが、あの方は誰よりも『教師』である先生ではないのか。
私はいつもそう思っておりますわ。

例え相手が誰でもどんな立場でどんな状況にしようとも、自分の理念を枉げず、どんな生徒にも平等に接する。

……このような事、普通は出来ませんもの。

生徒の事を、その本質を心から理解していて、だからこそ苦言が口を跳び出す。

その言葉が必ずその生徒の為になると信じて、口酸っぱい言葉をいつも漏らしていますわ。

……まあ普通に接していればガミガミと鬱陶しいだけの先生ですが、私も『委員長』という立場にいるからこそ、少しだけ新田先生の事が客観的に見れたのかもしれないわね。

二人目の先生は昨年度から教員におなりになった『香坂隼人』先生。理科教員で、この方も新田先生と同じく広域指導員を務めておられ、『麻帆良の竜』なんて異名を持たれている先生ですわ。

隼人先生はお若いためか私たちと距離の近い先生で、話の合う方もかなりいらっしやるみたいですね。

隼人先生が言われる事は至極単純。

『自分の好きなようにしろ、但しその行動に見合った責任を取れ』
というもの。

ですので騒がしく元気のいい我がクラスで、隼人先生の重いゲンコツをくらった事の無い方はおりませんわね。

私も少しばかり元気で可愛らしい少年を眼にして……まあそんな感じですね。

隼人先生もまた新田先生のように、真っ直ぐと私たちを見てくださいます。

他の先生の授業は必ずボイコットしていたエヴァンジェリンさんも、先生の授業だけは受けておりますし。

後は、少しだけ無口なザジさんも隼人先生とだと饒舌になったりしていますの。

……そう言えばクラスの方の事なのですが、何故ザジさんとあまりお話をされないんでしょうね？

とてもユーモアあふれる方ですが……勿体無いですわ。

まあそんな感じで一年生は過ぎて行きましたの。

そして二年生に進級した時、何でも隼人先生が学園長先生方と議論を交わし合ったそうで。

源先生の代わりに副担任に就任されましたわ。

副担任になられた隼人先生ですが、そんな先生と親しい方も我がクラスには沢山いらっしやいます。

なんといえますか……教師と言うより『兄』のような感じで接しやすいんですの。

「ヤハー！ いんちよ、考え事にゃ〜？」

「あんもー、そんな難しげな顔してたら小じわが増えちゃうよん！」

「だっ、誰が老け顔ですか！！」

「にやはははっ、緊急離脱！」

「ゆーなちゃんひっさーっ、ムーンサルト回避いっ！！」

凄まじい身体能力ですわね……驚きですわ。

隼人先生と親しい方々、その筆頭に挙げられるのが桜子さんと裕奈さんですわね。

彼女たちは隼人先生とは幼等部の頃から知り合いなそうで、『妹分』という立場にありますの。

なんでも隼人先生が暴走族の総長さんだった頃からの知り合いで、お二人も暴走族の一員だったそうです。

聞いた時は本当に驚きでしたわ。

その上チーム名を聞いて更に吃驚。

『蛭墮亞蘭弩』というチームは幼かった私でも聞いたことがあります。

何と言いますか……学校で配られるプリント。
ちようど……そうですね、夏休みの注意事項を知らせる様なそれ
の『危険なため近寄ってはいけないモノ』の項目に載ってましたも
の。

まあ実際に接して見れば、まるでそんな事は無い方だったのですけ
どね。

やはり少々誇張表現をしていたのだと、今になって懐かしく思い返
しておりますわ。

それと……今つけられている異名に『違あう』とお二人は文句をブ
ーたれてもいました。

昔は『麻帆良の紅鬼』と呼ばれていたそうで……やはりカブツたか
らでしょうか？

「はいはい、いいんちょイイ感じだよ、その表情」

「もちーつと胸の強調が欲しいとこっスねー」

「はあ、こうです……って何やらせるんですの!？」

「まあまあ気にしちゃダメだつて。」

売り上げの三、四割くらいはあげるからさ」

「小遣い入ったら新しい陸上シューズが欲しースわ」

他に親しい方と言えば朝倉さんと春日さん。

お話のノリが合うらしく、親しげに会話されているのをよく見かけ

ますわね。

お二人に千雨さんを加えて、三人いつも一緒にいるのがクラスでは普通ですわね。

一年生の最初の頃は、少々人との間に壁を作っていたようにも見えた彼女ですが、いつの間にか二人のツツコミ役と言う立場に収まっています。

まあ、傍から見ればお二人が千雨さんにちょっかい掛けて、と言う感じですが……。

ホホホホ、仲良しに見えるんですから構わないじゃありませんか！

そつえば夏美さんとも仲良しですわね。

千雨さんの部屋に集まって何かしているようですが……是非とも見学に行きたいものです。

「隼人先生の弱点かい？」

「あいあい、いつもてけとーにバカにされてるのは悔しいでござるよ。」

「ここでガツン！と、拙者の恐ろしさを見せつけるべきだと……」

「……まあお前がそう言うなら構わないが……私は知らないね、特に」

「私もだな。」

「というより椎名さんや明石さんに聞いた方が良くないか？」

「……『史上最強、天下無敵』って言われたでござる……」。

それよりも何かあるでござるっ！？」

「悪いね、楓」

「むう……まあ、すまない」

「……今日も隼人センサーにバカにされる時間が始まるでござるお」
長瀬さんがこのクラスで隼人先生にからかわれている、というのは周知の事実。
なんでも所属する散歩部の麻帆良祭も催しの際、いろいろあったらしいですわ。

クラス一番のクールビューティである龍宮さんとも対等にお話していらっしやいます。

他の先生方が少々気押されるような雰囲気を持たれている彼女にも、あまり気にせず隼人先生は接していますわね。

それに少し固くツンケンした態度をとっている桜咲さんとも。

新田先生が隼人先生の指導教員となっていていろいろ叩き込まれておられるようですが……。

誰に対しても同じように接する態度と精神は、新田先生の教えによるものなのでしょう。

「あやか、何を見ているの」

「そう……ですわね、このクラスを。」

今日で一学期が終わる訳ですが、とても……とても楽しかったと思いますの」

「ふふふつ、それは私の未来の旦那様が副担任ですから」

「……ちづるさん、そういったモノはあまり言わない方がイイかと」

「大丈夫よ、ちゃんと教会での結婚式には最前列で招待するから」

「誰もそんなこと言ってませんわ」

あらあらと微笑むのは寮で私と同室になっているちづるさん。

去年の九月、隼人先生に告白に近い行為をとって振られてしまった
「振られてないわ、ちょっと私を熟らせてイイ女にしようと思った
だけよ」……だそうです。

『イイ女にして惚れさせてみな』という言葉を胸に、ドンドンと彼女は魅力的になっていきますわ。

料理などの家事も、女らしい仕草も。

この前の麻帆良祭でなど、10人以上の男性にアプローチを掛けられたそうです。

その事を隼人先生に報告したら『付き合っちゃえよ』と無下にされたようですが……。

まあそれを更なるバネとして、磨きを掛けると張り切っていらつし
やいm!?

「……あやか?」

私も一度見せてもらった事がありますが……私にはいまいちよくわかりませんでしたわ。

雪広の家の者として、勉強不足でしたかしら？

古菲さんは隼人先生を『老師』とお呼びになって、どうも尊敬の念を抱いているようです。

何かが二人の間にあつたようですが……人が立ち入ってイイモノと悪いモノがありますから。

いずれ、お二人の口からもし聞かせていただけたら、その時は最高のおもてなしをしながら、耳を傾けたいですね。

「……………」

「……………」

「……………」

「……ええい、私に構う必要がないだろうが」

「……………」

「知らん、本人に聞け」

エヴァンジェリンさんとザジさんも隼人先生とは仲がイイですわ。お二人とも隼人先生相手だと饒舌になりますし、私個人としてはうらやましい限りです。

ザジさんとは私も親しくお話できるのですが……。恐らく彼女の隣にいらっしゃる相坂さんとエヴァンジェリンさんと

は、恥ずかしながら余り……。

やはり私もまだまだだと、隼人先生を見ていると思えてしまいますの。

ともかく、先生とこのクラスと過ごしていく時間はまだ一年と二期もありますわ。

これからがまた、楽しい時間になれば……。

ふふふつ、愚問でしたわね。

きつと楽しく過ごせるこれからを、大切に心に残していきたいですわ。

私の、私たちの一度っきりの中学生生活ですもの。

つとあら、もうそろそろ隼人先生の来る時間ですわね。

今日は高畑先生も御一緒でしょうか？

そうなればおサルさんが……？

「やあ、ちよつと遅くなつたね。

じゃあこれから一学期の修了式をするから移動しようか。

欠席は……いつも通りだね」

「高畑センサー！隼人にいは？」

「ああ、隼人君か……彼は出張中だよ」

出張？聞いてませんわね。

「どこにいったんですかー」

「そうだね、今は多分……イギリスのウェールズだ」

うーん、日本語って覚える物が多いんだなあ。
ひらがなもいっぱいあるしカタカナもあるし、漢字だってあるんだもんね。

でも修行として『日本で先生』をしなくちゃいけないんだから……
うん。

頑張らなくっちゃ！

イイ成績で試験をクリアして『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』に、父さんみたいに僕はなるんだ！

だから今日も勉強しないと……。

あ、魔法の勉強もしなくちゃいけないんだ。
大変だなあ。

でもへこたれないぞ！

僕はなんとって『先生』だもん！！

「ネギ、貴方にお客さんが来てるみたよ」

「お姉ちゃん……僕にお客さん？」

僕にお客さんって誰だろう……タカミチかな？
何しに来たんだろ。

十九匹目 楽しい時間が早く感じるのは当たり前（後書き）

ついに原作主人公登場。

二十匹目 ガキはガキらしくいるのが一番大事（前書き）

いつの間にかお気に入り登録四桁……正直ちょっと信じられないです。

二十匹目 ガキはガキらしくいるのが一番大事

「あのっ……はじめ、まして……その、『ネギ・スプリングフィールド』……です」

なんか滅茶苦茶ビビられてね？

どーせ俺は強面ですよっと……ハア。

ま、それは置いてだ……コイツなの？
マジなの？ねえマジなの？

思った以上にガキだ……。

聞いちゃあいたが数えで10歳、実質9歳か。

小学校とか行く時分だもんなあ。

それが先生とか、何の悪ふざけだつてーの。

ぜってーに頭のオカシイ子が育つぜ、こりゃ。

常識やら人付き合いやら、まともに出来ねーヤツになっちまうわ。

コイツもそうで、ウチのクラスのヤツらも毒されていきそうだし。
なんとかしなきゃいけねーよな。

英雄が必要？知るか。

こちらら思春期の大事な時期を預かる先生でい。
んなもんかんけーねーんだよ。

しかしそうなりゃこいつをどーするかだが……。
あゝ……ウム。

迷惑か？イヤイヤそれでも、そうだとでもわかってくれるか？

「…………あのっ」

ん？

ああ、そか。

「おー悪いな、そいえば自己紹介もクソもしてねえんだったわ。

んじゃ改めまして、俺は麻帆良学園で理科の教員やってる『香坂隼人』っつーもんだ。

ま、よろしく頼むぜ」

「あ、うん……………よろしく、ハヤト」

……………成程、常識もねー糞ガキだ。
ふざけてんな。

英国式？んなもん知らねーよ。

こちらら前世も今世も、純正培養の日本人じゃい。

「——ッッ！？」

「ネギッ！？」

「ちよっ！アンタ！いきなりコイツに何してんのよ！？」

「何って……………ゲンコツくれてやったんだが、こんな風にさ」

「——ッッウウウ！？」

「アーニヤ！？

あつ、貴方は本当に何を考えているんですか！子供相手に手を上げるなんて！！」

……そっか。

こんな風に怒ってやる大人がこのガキどもにはいねー訳だ。何でか知らねえけどさ。

そりやおかしい子になっちまうわな。

「むむうゝ、もう怒りました！

”ラス・テル マ・ステル マギステル……”！」

「あつ……たしにの頭おおおつ……” フォルティス ラ・ティウス リリス・リリオス……”！！」

うはっ、なんか詠唱とか始めやがったし……。

ありえねーわ、どんなガキだよ。

今までまともな教育、受けて来てんのか？

個人的にやこんなガキは好きだが……教師になるとなればまた別の話だかな。

コイツは、心構えどうこう以前の問題だ。

ちーと、生意気な糞ガキ二人を躡けてやるのが先だわさ。

勿論、俺流でなあ。

「て事で、スラぼう、ゼロ……ちよいと頼むわ」

「ぴぎ」

「ケケケ、アイサー」

「魔h「ぴぴ」もがつ!？」」

「アーニヤフ」「ビローン」ひひや、ひひやがああ!？」」

スラぼうを坊主の口の中に入れて、ゼロがお嬢ちゃんの舌を引っ張って詠唱を止める、と。

これでとりあえずは大丈夫だろ。

……そいやあさつき隣で唸ってたのは……気絶してるし。
何なの、この女？

まあイイか。

ともかく俺は目の前のヤツらを、相手にしなきゃいけねー訳だしさ。

「とりあえずだ、あきらかに目上の俺をいきなり呼び捨てにすんのはどーかと思うがな？」

「ひひやひやひひやひよ!！」

「……あア……なんか文句あんのか……!？」

ビクッと一回震えて涙眼になりやがった。
ま、俺のメンチ切りはハンパねーからさ。

完全に二人とも、俺に吞まれてんな。
とりあえずこれでまともに話は聞いてくれるだろ。

さてはて、んじゃまあコイツらをこれからどうすつかね？

んう……アレ？
私はさつき。

そう、気絶しちゃってたのね。

確か、日本から来年ネギが卒業課題で行く修業先の学校の先生が来て下さってたんだわ。

なんでも『ネギの指導教員になる』先生らしいけど。

強面で、頭に人形と変な魔法生物を乗つけたガタイのイイ、男の先生だったわね。

今だにネギが先生になるなんて事、信じられないけれど……。でも、それでも課題として出て来ちゃったんだものね。

ネギは大丈夫かしら？

おじい……じゃなくって、校長先生も修業先からの正式な訪問だつて言つてたっけ？

それで高畑さんみたいにどれだけ優秀な人かなつて思つてたら……そう！いきなりネギとアーニヤに手を上げたのよ！！

大きな身体の大人が、小さな子供二人に！！

あの子たちはまだ子供なのよ！

それなのにつ……あ、あんな風な痛そうなゲンク「ネカネお姉ちゃん！見て見てコレ！！」ってアーニヤ？

お花と草で編んだ帽子……かしら。

スゴいわね……どうなつてこんな形になつてるかまるで分らないわ。

「スゴイでしょ！私とハヤトで編んだのよ！！」

「アーニヤちゃん、誰を呼び捨てにしてんだ……ん？」

「そつ、そんな事いつたつていきなり『お兄ちゃん』なんて呼べるわけないじゃない！！」

「ネギは呼んでつぜ」

「ネギはボケでバカだからイイのよ」

「そかそか。」

あ、それよかこれから紙飛行機作るんだがテメエもやつか？」

「KAMIIHIKOUKI!?何それ?私もやる!!」

アーニヤ、あの香坂……さんだったかしら?

あの人の所に走って行っちゃった。

ネギは……ネギも、香坂さんと一緒に机に座って楽しそうに笑ってるわ。

「おにいちゃん、どうやって作るの?」

「まずはだな、この折り紙を半分に折ってな」

「ケケケ、不器用だな」

「ぴぎ」

「うっ、うっさいわね!これから本気出すのよ!!」

……どうなってるの?

なんで私の気絶してた間にこんなに仲良くなってるの?

だってさっき、ネギとアーニヤを叩いてたじゃない。

なのになんで……そんな風に嬉しそうなの?

「ホッホッホ、不思議そうじゃな、ネカネ」

「校長先生……あの、一体何が……」

「簡単な事じゃよ。」

あの二人は間違った事をした、それに対してあの青年、香坂くんが怒った。

そしてそれを二人は理解し、納得した……ただそれだけじゃ」

「ですが、ならば口でそう言えばいいじゃありませんか！

何も叩く必要なんも「ネカネ、何故ないと言える？」……それは、あの二人はまだ子供ですし……」

「そうじゃの、子供じゃ。

だからこそ私たちは間違っている」

間違っているって……！

確かに、今ネギとアーニヤは楽しそうにしているけど、でもそれが叩いていいなんて理由にはならないじゃない。

「……ネカネよ、お主も私も……酷く過保護じゃの」

過保護って……そんな事は……。

「親がおらず、村を失い心に大きな傷を負った二人。

誰もがこれ以上あの二人が傷付く事を恐れ、大切に大切に接していた。

そんな二人じゃからこそ、私たちは真っ向からあの子たちに向き合って怒ってやらなければいけない場面でも、怒ってやっていなかった」

「でも、それでも……叩くのは」

「……本来、間違った事をした子供を叩いて怒ってやるのは親の役目、大人の役目じゃよ。」

それに、ホントに悪いと思っておらなったら、二人が彼に懷いている事もないじゃろう?」

ネギもアーニヤも、とっても楽しそう。

手に持った紙を投げて、フラフラそれが風に乗って進んでいるのを見ているだけなのに。

普通の子供みたいに、遊んでる。

少しネギの紙が前に落ちて、少し後ろにアーニヤの紙が落ちただけ。それだけなのに……あんな純粋な顔、私はずっと見てない。

「良いか、ネカネ。」

人が成長するために、時には『厳しさ』と『痛さ』が必要なのじゃよ……私たちのような『やさしさ』だけで、人は成長せぬ」

……『厳しさ』と『痛さ』……。でも、それでも私は……。

「お姉ちゃんッ、さっきの僕の見てた!？」

「あ……ええ、ネギの方が遠くまで飛んでたわね。」

風の魔法を使ったの？」

「違うよ、魔法は使ってないんだ！ほら！」

コレって……『誓約の黒い糸』？

魔力を封じ込める効力のある……。

じゃあネギは今、魔法使いじゃなくなつてただの人？

「ネギ、何でコレ……」

「うん！『魔法なんて使わなくなつたつて、楽しい事を教えてくれる』
つてお兄ちゃんがね！」

それでね、アーニヤよりもずっと遠くまで飛ばせたんだよ……！」

「ボケネギー！今度は私が勝つんだからとつと持つてきなさいよ
……！」

「あ、うん！今行くから！」

あ……魔法使いじゃなくなつて、ただの子供。

そう言えば、ネギがこうやって何かで遊んでるの、魔法学校に入つてから見た事ないわ。

ずっと、ずっと、ずっと。

魔法の勉強をして、ナギさんみたいに『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』になる
つてずっと、ずっと、ずっと。

ネギはずっと、魔法としか触れ合っていない。
アーニヤにはネギ以外にも友達がいるけれど、ネギにアーニヤ以外の友達がいるなんて聞いた事もなかったわ。

魔法学校の先生に怒られているのも見た事がない。
校則を破つても、何をしてもしゃ『英雄の息子だから』って、ネギが罰を受ける事なんてなかった。

いつも、いつだってネギは特別扱いだった。

でもそれって、正しい事なの？
本当に、それは正しい事？

……違うわ、そんなの全然正しくなんてない。
間違ったら怒る、悪い事したら叱る、こんなの誰だってされるべき事じゃない。

「へっへ〜ん、ネギ！どんなもんよ」

「むむーっ、何やったの？魔法使ったとか！？」

「アンタと一緒に封印したでしょうが！」

ま、これが実力の差ってヤツよ」

「ネギ、お前はさ、飛ばし方がわりーんだよ」

「へ？飛ばし方？」

「ちよっ！ハヤト「ああ！？」……お兄ちゃん、言わないでよ！」

「ケケケ、イイカクソガキ、飛バス時ハダナ」

「ぴぎう」

「チャチャゼロ「アア！？」……ってアンタなんかにお姉ちゃんなんて呼ぶ訳ないでしょ！！」

「ケーッケケケケケケケケケケ」

「地面と水平に紙飛行機を動かす感じでな」

「チャチャゼロのバカーッ！！」

なんで、香坂さんはネギの事を叩いたんだろう？

だってそれは、ネギがいきなり香坂さんの事を呼び捨てにしたから。初対面の人を、しかもいきなりファーストネームを呼び捨てにする風習、確か日本にはないのよね。

だからもしネギが日本に行って、そんな失礼をしないように怒った。

そこに間違ってる事なんて、何一つもないじゃないの。

ホントに、本当にネギやアーニヤの事を思ってるなら、私は、私たちは香坂さんみたいに叱って、怒ってやらなきゃいけない……。

そして魔法だけじゃなくって、あんな風に遊んであげなきゃいけないんじゃないの。

だって二人とも、まだただの子供なんだから。

「野球……じゃねえや、ベースボールとかした事あるか？」

「ううん、僕やったことないよ」

「私もー、コレは何？」

「コレハナ、『グローブ』 ツツテコイツテ相手ノ顔面ヲブン殴ル
ノガ『ベースボール』ダゼ」

「ええっ!？」

「ぴぎー」

「ボールヲ持ツテルヤツガ殴ル側ダゼ」

「知らなかったわ……という訳でボールキャッチ！ネギ覚悟!!」

「あぶぶぶぶつ」

あんな風に、あんな風に遊ばせてあげるのが、年相応の事をさせてあげるのが、私たち大人の役目なんじゃない。

『英雄になる』とか『英雄の息子』とか『魔法使い』とか、そんなものは後回しにしておいて。

……なんで、そんな簡単な事がわからなかったのかしら、私たちは？

バカみたい、ホントにバカみたい。

ずっと一緒にいた私たちよりも、今会ったばかりの香坂さんの方がずっと、ネギとアーニヤの事をわかってるなんて……。

私は、一体何なの？

「お嬢ちゃん、ちよいとイイか」

「へっ？あつ、はい、何ですか？」

「あのさ、キャッチボールとか出来る人？」

「はあ、少しなら……ですけど」

「うつし、んじやお嬢ちゃんピッチャーな」

ピッチャーって……あのピッチャー？

「むっ、無理です無理です！あんな風に投げられないです！」

「イイのイイの、てけとーで」

「てけとーって、あの、ちよつと……」

「んじや三球交代でやれよー」

「最初はわたs「俺ダゼ」ってなんでだからあんたが出てくんのよ

「!!」

「ケケケケケケ」

「ケケケ……じゃなあああい!!」

「じゃあ僕が……」

「アンタは最後に決まってるでしょ!!」

何で、私はこんなところにいるの？

手にグローブをはめて、ボールを持って、バッドを構えてるネギに向かつて。

「お姉ちゃん、僕ホームラン打っちゃうからね!」

あっ……ネギ……。

「無理無理、なあお嬢ちゃん?」

……香坂さん……。

「……ふふふっ、そうね……お姉ちゃんだって、結構やるのよ?」

結局、香坂さんは三日間ウェールズに滞在してたわ。

これまでずっと私と寝てたネギが『お兄ちゃんと寝る！』って言うて、三日間何するにも香坂さんと一緒にいた事は、ちょっと妬けちゃったけど。

それでも、村が襲われてから今までで、ネギが一番楽しそうに過ごしてた。

勿論アーニヤもそれはそう。

帰る前日なんてあの子も香坂さんが寝てた部屋に忍び込んで、三人で一緒に寝てたもの。

三日間で、香坂さんはいろんな事をしながら二人を遊んであげてた。日本から持って来たって言うてた野球の道具でキャッチボールをしたり、持って来ていたお手玉とかで遊んだり、『鬼ごっこ』っていう遊びも教えてくれたわね。

それ以外にも川に行って泳いだり、丘の上から坂を滑ったり、これまで全然ネギやアーニヤが出来なかった『子供らしい遊び』でずっとずっと、遊んであげてたの。

その間は二人とも魔力を封印された状態で。

大変だつて、今までより体が重くって疲れるって二人とも言ってたけど、二人ともとっても楽しそうな顔をしてたわ。

『魔法じゃなくて、自分の力で出来た事が嬉しい』って。

ご飯も、私も食べたんだけど日本の料理をいっぱい作ってくれたの。
えと……『OKONOMIYAKI』と『TEMAKIZUSHI』
と『MISOSOUP』と、あと『TENPURA』も。

香坂さんが帰った後も、よく二人にまた作ってねだられるんだ
けど……決まって二人が言うのが『お兄ちゃんの作ってくれた方が
美味しい』って。

やっぱりちよつと妬けちゃうわね。

日本の方で用事があるからって言って帰る時も大変だったわ。

あんなに、駄々っ子みたいにネギが泣くなんて思ってたから。

それで、帰る時香坂さんはこう言ったわね。

今私たちがいるのと同じ飛行場で。

『日本に来な、もっと楽しい事やらせて、見せてやつからさ』って。

私は今飛行場にいる。

私と校長先生が見送りで。

これから日本に行くネギとアーニヤを見送ってる。

夏も終わろうかという時期に、二人は日本に行く。

「ネギ、アーニヤ、向こうに行っても香坂さんに迷惑かけちゃダメ
よ」

「大丈夫だよ、お姉ちゃん」

「そうそう、ポケネギの世話はちゃんとして私がやるから」

「ふふふつ、そう……。」

休みになったら私も遊びに行くかもしれないから、その時は案内してね？」

「うん！」

「良いか二人とも。」

己の目で見、己の肌で感じよ。

何が己のやるべき事で、どのような道を己が進むかを」

「任せといて、おじいちゃん」

「おゝい、二人とも、そろそろ行くよ」

日本からのお迎えは高畑さん。

本当に、二人は行っちゃうのね。

「じゃあお姉ちゃん、行つてきます!!」

香坂さんに会って、私も少し変れたかしら？

大事な二人に、初めて手もあげてしまったわね……。

でも、それが普通、それが当たり前。

それが家族で、それが大人の役目だもの。

「ええ、いつてらっしゃい」

ネギ、アーニヤ、私は二人のお姉ちゃんとして間違ってたのかもしれないわ。

でも、それでも私は二人のお姉ちゃんだから。

二人が日本で沢山の事を学べる事を、私は願ってる。

そして今度会うときは、きっと私も成長して、本当のお姉ちゃんになってるから。

そうしたら、きつともっと、楽しくみんなで笑えるわよね。

二十匹目 ガキはガキらしくいるのが一番大事（後書き）

ネギ来日、八月の終盤の出来事です。

ちよっとかけ足になってしまった気がしますね。

二十一匹目 戦う術は人によりけり（前書き）

主人公が出てこないとは……。

二十一匹目 戦う術は人によりけり

『英雄の息子』は何が他の人と違うんだろうね？

才能とか、期待とか、権力とか。

まあその辺はいろいろあるのかもしれないけど。

でもこうやって普通に、普通に緊張している姿を見れば、僕としては何も違わないと思えてしまうかな。

「大丈夫かい、二人とも」

「あつたりまえでしょ！」

「はっ、はい！」

サウザンド・マスター

……『千の呪文の男の忘れ形見』に『ウェールズの悲劇』の生き残りの少女か……。

境遇は知ってるけど……うん、こう見るとやっぱり普通の子供だね。

こんな小さな少年を『英雄』に仕立て上げる。

僕たち魔法使いはそんな事までしないといけないほどに、進むべき道を見失っているのかな。

差し詰めこの少年が英雄になれば、この少女は彼を支えた人物として大々的に取り上げられるんだろうさ。

キャッチコピーは『悲劇の村から希望を胸に、大空に飛び立った一対の翼』ってとこかな。

うーん、中々にセンス溢れてるね。

バカみたいだ、ホント。

『みたい』じゃなくって、きっとバカなんだろうな。

何かに括り、何かにへばり付き、そんな事でしか自分で歩く事も出来ない。

自分の意志で、自分の足で、今を見据えて立ち上がる事も出来ない。

それが今の、僕たち『魔法使い』か……。

『英雄』なんてモノを必死に求めている、『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』に成るべくして魔法をその身に修める。

そして、彼の英雄たち『アラルブラ紅き翼』に憧れるのが当たり前。
その大前提が、そもそも間違っているんだと思うよ。

昔から、ちょっと僕は魔法使いの中では異端らしい。

みんなが攻撃魔法を習得して喜んでいるのを、僕はちっとも理解出来なかったから。

魔法学校に僕も通っていて、魔法というモノに触れて、もう二、三十年になるかな。

それでも僕は、学校で必修魔法だった『魔法の射手』しか攻撃魔法を覚えていないんだ。

そんな僕は、自分がおかしいとは思わない。
でもそんな僕は、周りから見るとおかしいらしい。

まったく言ってイイほど、僕にはそれが理解できないよ。

人を傷つけない為に、弱い人を守る為に。

そう言う、そう公言する人間が、魔法使いたちが、なんで攻撃魔法ばかり覚えるんだろう。

どうして『人を傷つける技術』を覚えて、喜んでるんだろう。

やっぱり僕にはそれが理解できないんだ。

確かにもし僕が強い力を持っていたら、僕は僕や僕の大切な人たちを傷つけず済むのかもしれない、守れるようになるのかもしれない。でもどうしてそれが『攻撃』である必要があるんだい？

別にそれは幻術でも、捕縛でも、逃走でも、転移でも。

その出来事がある状況から逃れる事の出来る魔法ならば何でも構わないじゃないか。

まさか『被害を起こす可能性のある存在は磨り潰しきらなければならぬ』なんて考えているからなのかな？

だったらやっぱり、僕はそれが理解できないよ。

勿論僕だって男の子だ。

『自分は世界で一番強くって、どんな奴らも僕には敵わない』。
そんな風になりたいだなんて、思った事はもちろんあるさ。

でも段々と年をとって、大人になって。

多分10歳くらい……今日の前にいる彼らと同年代の頃には、そんな事も考えなくなっていたんだ。

ちょうど攻撃魔法の基礎、『魔法の射手』の授業が始まった頃だったよ。

講師の先生が詠唱を開始して、手に持った杖に魔力が集まって、魔力の弾丸が目標であった岩に向かい、それが粉々に破壊されていく。

僕の周りにいた僕の友達や僕のクラスメイトは騒ぎ立て、興味深々にそれを見ていた。

『早く自分もアレが使えるようになりたい』だなんて、これまで真面目に授業に取り組んでいなかった人たちも、必死になって、躍起になって。

どうにかして『攻撃の手段』を身に付けようとしていたんだ。

でも僕は……ただそれが怖かった。

簡単に誰かを傷つけることのできる技術を手にしている。

怪我を与え、酷ければ大怪我になり、下手をすれば『殺してしまう』ほどの外傷を与える事の出来る技術を。

そんな技術を喜々として使う周りの人間が、僕は怖かったんだ。

『我々の世界とは異なる世界からやってくる異形の者たちを元の世界に返すべく、コレは必要である』。

駄々をこねて習得を嫌がる僕に、講師の先生はそう告げた。

それまでの成績が結構優秀だったからかな。

講師の先生は僕に目を掛けてくれてたみたいで、どうにかして僕にそれを覚えてもらおうと説得を続けてくれたね。

そうこうしているうちに授業は進み、結局僕もほんの少しだけそれが扱えるようになってしまった。

僕は初めて『実際にそれを異形に放つ』状況に、僕は進んでいったんだ。

少し開けた平原の、幾人もの講師が立ち会った、展開した結界のよ
うな空間の中で、僕は初めての『殺し』の現場を体験した。

地面に描かれた魔法陣の中から出て来たのは大小30cm程、1m
程の大きさの、『小鬼^{ゴブリン}』のような存在だった。

その日の課題は『実際に習った魔法の射手で、目の前のそれを撃ち
殺していく』ことだった。

正直言つて、気分が悪くなったね。

ゲームのような感覚で目の前の存在を打ち消していく。

一定のダメージを与えれば消えて異界に還る、そんな事くらい僕だって知っている。

でもそれがどうしたんだい？

この世界からいなくなるのだ、まるで僕たち人が死ぬかのように。

その行為をあつさりやってのける周りの人たちが怖かった。

目の前にいる、泣き叫び決死の抵抗をする彼らよりも、僕たち人のほうがよっぽど化け物だと思ったんだ。

結局見るに堪えず、僕はその場で一人も殺す事が出来ず、意識を飛ばした。

気が付けば僕は医務室のベッドの上で、僕は『意気地無しで弱虫のダメ魔法使い』というレッテルを張り付けられていたよ。

……思い起こせばその頃からストレスで過食をするようになって、こんな太っちゃな体型になって。

そこから食べる事が大好きになったんだっけ？

思えば不思議な事だよね。

まあそれは一先ず置いておいて、そこで僕は気付いたんだ。

このまま修行を続けていれば、自分も『ああ』なってしまうことに自分も何も思わずに、ナニ力を『殺す』ことの出来る化け物になってしまう。

それは僕には耐える事が出来なかったんだ。

「あの……、そう言えば弐集院先生、今日は僕、神多羅木先生に……」

「修業だったかな。」

時間は短いかもしれないけど為になるだろう?」

「はい!僕の全然知らなかった事とかを教えてくれるんです!」

「私もネギも、ガンガン強くなってるからね!」

「……そっか」

今は僕ももう大人で、『殺す』という行為……言い方が悪かったかな?

『還す』という行為が悪い事だとは思わないし、それもまた必要なんだって解る。

でも僕は、それをしたくない。

我が儘だっただけでわかってる。

還さなければならぬ状況にあっても、その行為を他の人に押し付ける。

その場に僕しかいなかったら、僕は誰か救援を呼ぶ。

そして僕はその行為に手を染めない。

僕は卑怯な人間だ。

だから僕は攻撃魔法を必死に習得しようという人の気持ちがわからない。

だから僕は『アラルブラ紅き翼』なんて言う大戦の英雄、要は大量殺人者に憧れる人の気持ちがわからない。

だから僕はどんなモノでも構わないけど『悪いモノを討つ』事が正義だと考える人の気持ちがわからない。

だから僕は『電子精霊』や『封印術』や『幻術』の魔法を必死に勉強して、前に出て戦ってくれる人たちのサポートをしている。

結局はその行為に手を貸す事になってるわけだけど、『だって前線に出ろよ』なんて言われるかもしれないけど。

僕は卑怯な人間だから、僕は直接その場に出たくないんだ。

……笑っちゃうよね、ホント。

でもこれが僕の道で、誰になんて言われようとこのやり方を貫くって決めたから。

だからこそ、僕は。

「でもなあんでボケネギだけならまだしもこの私まで、小学校に通わなきゃなんないのよ」

「イイじゃないか、アーニヤちゃん。」

同年代の人たちは向こうでは周りにいなかったんだろう?」

「そう……だけど……、でも私よりずっとレベルの低い人間と一緒にいるなんて!!」

「彼らは君たちよりずっと器用に折り紙を折れるよ」

「ホントですか!？」

「うん、それに君たちの知らないたくさんの事を教えてくれるさ。」

どうせ二人とも二月までだからたった半年だ。

そんな経験が人生にあつたって、得は有っても損にはならないと思っよ」

「言っただね、アンタ!聞いたわよ!!」

「構わないよ……でも、僕は一応君たちの担任だからね」

「ふわぁーい」

「……ぷっ」

「ひよっひよあんひゃー!!」

隼人くんを訪ねて二人がやって来て、二人に会って、彼が僕を連れて学園長の前で『二人を初等部に通わせたい』って言った時にすぐさま賛成したんだ。

僕は前に出ない。

僕は後ろにしか立たない。

僕は誰かのサポートしか出来ない。

だからこそ僕はその人が本当にその人らしく戦えるために、その人が本当に成長できるために、行すべき事をやっていきたいと思っている。

二人に会って、二人を見て、僕はやっぱり二人には初等部に通って欲しいと思った。

同年代の子供たちと魔法の使えない普通の子供と触れ合って、彼らから様々な事を吸収して欲しいと思う。

その上で誰に言われるでもなく、彼らが『英雄』を目指すならばそれはそれで構わないと思う。

その為に必要な才能も、人脈も、土台もすでに持って、出来上がっているのだから。

ネギくんが父親の影を追い、『二代目千の呪文の男』とか呼ばれるようになってもイイと思う。

アーニヤちゃんがそんな彼のパートナーとなつて、魔法使いたちの大きな看板となつてしまつても、それはそれでイイと思う。

だってそれはいろんなモノを見て、いろんな事を経験して、僕たち大人から様々な事を言われて。

その上で自分たちが決めて進んだ道なんだから。

僕は子供である彼らに、僕がやるべき事をやった後ならば、僕はどんな道を目指しても応援し、支援すべきだと思うんだ。

その時ちゃんと自分の意志で、自分の意見で、誰の為になく自分の為に、歩いていけるような人にしていく事。

それが僕たち『大人』の役目で、それが僕たち『教師』の役目だと思っっている。

随分と投げっぱなしな考えだって思えるかもしれないけれど。

もし間違っつて、もし誤って、どうしようもない状況に陥った時。

そんな時に助け、支えてくれる人たちはきっと彼ら自身が見つけ、彼ら自身の傍にいるだろうから。

そんな人を見つけるためにも、僕は彼らに初等部に通って欲しいと思う。

でももし、そんな時に僕らを頼ってくれたならば、お尻を蹴り飛ばしてあげるのも僕らの役目だと思う。

まあ何にせよだ、僕が言いたい事はただ一つ。

「はいみんな、おはよう」

「」「おはようございまーす！」「」「」

「うん、おはよう。」

さっそくだけど、急な話だけど今日から転校生を二人ばかり紹介するよ」

この状況を楽しんで欲しいって事……それだけだ。

「今日からこの学び舎で世話になるアンナ・ユーリエウナ・ココロ
ウアよ！アーニヤって呼んでよね！」

「あ、あの、ネギ・スプリングフィールドです、よろしく願います」

二十一匹目 戦う術は人によりけり（後書き）

ネギとアーニヤ、小学校に入学する。

そこまでの過程などは次回に書く予定です。

ともかくアンチネギ打破には彼に常識を付ける事が大切。
そうなるためにはネギ節も必要ですかね？

二十二匹目 朝飯はとりあえず食っていくべきだろ（前書き）

総合評価が3000を突破していた……。
皆様本当に、ありがとうございます。

二十二匹目 朝飯はとりあえず食っていくべきだろ

……眠い。

ああ……何時だ……コノヤロー。

……うああ、六時とちよつと……か、起きねえとなあ……。

「……うゆ……お姉ちゃん……」

ココは俺の名前を呼んで欲しかったかねえ。
ま、どっちでもイイけどさ。

とりあえず起きられるかね。

顔洗って、歯磨いて、朝飯の準備してやらねえとなあ。

コレで弁当まで用意しなきゃなんねーんだったら大変だったけどさ、
初等部は給食制でよかったわ。

イヤイヤ、割とマジで。

昼飯の準備に弁当作るとか……そいつはさすがに疲れんぜ。

「……お前らも起きるか？」

「……オウ」

「びぎびぐー！」

「朝カラテメエ八元気ダナ」

スラばうとゼロひつ捕まえて洗面所。

朝一からテンション高いスラばうは若干アレだが……慣れたし、何よりおかげで遅刻したことないかな。
目覚ましいらすだし、ラッキーなモンだ。

「いつも言ってるが俺の頭の上から下りて歯を磨けや」

「ケケケケ……ブウェツ」

「……ぷえっ」

「テメツ！女ノ顔二吐キカケルトカアリエネエダロ！？」

「それはこっちの台詞じゃボキヤアツ！

毎朝毎朝飽きずにに同じ事やりやがってよう！！」

「……ぴぎ」

あゝああ、髪の毛が歯磨き粉でベツトリとか……ねえわ。
もうこれも慣れちまつたけどさ。

冬に近付いてんだからさ、朝風呂は風邪ひきそうで嫌なんだがなあ……ここ数年風邪になんてなってるねえけど。

スラばうは綺麗に歯磨きできるのによ。

ゼロはワザとだろうが、ネギもアーニヤのヤツもいつも零してっかな。

もうちょつと綺麗に使って欲しいもんだわさ。

まあ元々部屋が酷く綺麗な訳じゃねえけど、度が過ぎてつと偶に来る桜子とか裕奈になんて言われっか……。

そいえばまだ二人には会ってねえんだっけ？
紹介とかは……ま、機会があればで構わねーよな。

「ホレ、二人とも洗ってやつから」

「ぴぴっ」

「キャツ、野獣ノヨウナ目デ見ラレテンゼ」

「ここぞとばかりに肉を付けてんじゃねーよ、人形ボディが」

「ぴっぎ」

「ケケケ、違イネエ。

股ノ下、ソノ中マデ見ラレテンダカラナ……責任取レヨ？」

「身体洗ってやってるだけだろうがアホたれ。

それと責任云々は身長が140cmくらいを越えたらな」

「御主人、アウト」

エヴァと風呂に入ったことなんざねえよ。

それくらいの常識、ちゃんと俺は備えてんだしさ。

桜子と裕奈は小学校卒業するくらいまで風呂に入れてやってたが…

…まあ桜子と裕奈だからな。

ネギを入れてやってはそれを思い出すもんだわ。

風呂嫌い？そんなもん俺の前じゃあ通用しねえよ。

風呂入って、身体洗って、サッパリして、湯船浸かって、一日の疲れ落として、風呂上がりの一杯を楽しむ。

これぞ風呂の醍醐味。

香水やらで臭いを誤魔化すなんざ、俺は許しませんぜ。

お蔭で最近は冷蔵庫の中にフルーツ牛乳が常備されてるわ、瓶の。今度でっかい銭湯でも二人連れてってやっかなあ。

しかしアーニヤのヤツは風呂入れてやるつつってんのに嫌がるんだよな。

桜子と裕奈で置き換えれば有り得ねえことなのに……海外の精神的な成長も早いのかね？

……ま、ネギがいるからだとは思っけどさ。

女心は複雑ってか？

ガキでも女やってんだわな……感心感心。

「スラばうはタオルにくるまってくれりゃいいだけだから……楽だわ」

「ぴぎっ」

「ケケケ、女ノ髪ダゼ、大事ニシロヨ？」

「わーってるわーってる、動くな動くな」

ドライヤーでゼロの髪を梳いて乾かす。

量も少なーし、時間は大してかからんけどさ、やっぱ面倒は面倒だ

わな。

次いで俺のも。

短髪オールバックに纏めやすいように型を付けて、と。

……にしても若干俺の髪の色、くすんでる気がするんだが。
禿げる前兆とかだったら勘弁して欲しいもんだわ。

せめて四十、五十になってからにしてくれよ……？

「……炊飯器のスイッチは押してたし、軽くパツパとやつちまうか」

「今日ノ飯八何ダ？」

「ご飯、みそ汁、豆腐、焼き魚、納豆、ほうれん草のおひたしだが、
文句あつか？」

「ぴぎぎっ」

「変ワリ映エシネーナ」

「イイだろうが、慣れてるもん食うのが一番だぜ？」

つと、先に冷蔵庫に入ってる『特製ローストビーフ』は片付けち
まっとけ」

「アイサー」

「ぴう」

さすがに『魔物の肉』原料のモンは食わせれねえからな。

処理してもらったかねえと……。

朝起きたらネギとアーニヤが魔物になってました、とかマジ勘弁だしさ。

さてはてそいじゃあ野菜切って、魚を火にかけて、作り置きのおひたし取り出して。

この辺は中高と寮生活で、大学時代はアパート借りて一人暮らしだった賜物かね。

店で出す料理なんてもんは作れねえけど、家庭料理くらいは俺にだって出来るかな。

ズー……とカップメンやらジャンクフードってのもダメになるしよ。

ま、とにかく普通に食える飯くらい作れるってこつた。

お好み焼きとか鍋とか焼き肉とか、人集めてやる方が得意だけだよ。

そいつは置いといて、そろそろ居候二人を起こしに行くかね。

もうすぐ七時だし。

初等部に遅刻しちまうってヤツだわ。

ネギとアーニヤは今日日本にやって来て、教員寮の俺の部屋で生活している。

まほーがっこの授業課程を終わらせた二人は、卒業試験みたいなもんをやる訳だが、何でもそいつは三月から始まるらしい。

つまり八月から二月までの半年間、そこは普通卒業試験の為の準備だっけに充てる時間らしいわ。

だがさ、そんな時間何もこれまでずっと勉強して来たコイツらに、また勉強させとくなんて間違ってるだろ。

そりゃ試験は試験で大切に、全力を持って取り組むべきだろうよ。けどまともに遊んだ事も無かったネギやアーニヤを、そこに漬け込み続けるってのは絶対的に間違ってるね。

という事で、俺は二人を日本に招待した訳だ。

ネギは『教師になる』ってのが課題らしく、アーニヤは『占い師になる』ってのが課題らしい。

ネギはこっち着て麻帆良で教師たちの働きを見てりゃ、自然と教師としての振る舞いも身につくんじゃねえのか？って寸法。

アーニヤもこっちで占い師の練習なんかをいろんな人相手にやってりゃ、ロンドンに行ってもそつなく客の相手が出来るんじゃないの？って事だな。

まあどちらにせよだ、そんな事言いつつ二人のケツを叩いた訳だが、ガキ二人がそうやって働くってのは全く正しい事じゃねえ。

そりゃ金銭的に問題があつてやむを得ず、つつー状況ならまた話は違ってくる。

がよ、二人はそうじゃねーわさ。

二人とも親はいねえらしいが援助してくれる人間は大量にいる。

『英雄の息子』だからか、『ウェールズの悲劇』の生き残りだからか、その辺は知らね。

けどガキがガキらしくいられる様な状況を作るのに、必要な要素は

全部そろってるわけだ。

だったら答えは一つだ。

ガキはガキらしくいればいい。

年相応のガキらしく遊び、学び、思うがままに動けばいい。

誰しもがそうやって、少なくとも日本ではガキがそうやって過ごすのが普通なんだからな。

二人は今日日本にいる訳だし、そんな風になればいいじゃねえか。それが俺の意見だわな。

て事で光さん連れて、学園長に頼んで、二人の初等部入学を認めてもらったって訳だ。

そんな時坂上の野郎も居やがったが……まあ俺がねじ伏せてやったってヤツよ。

まずアイツは『ネギが訳の分らぬ思想に毒されたらどうする』って言うてきやがった。

イヤイヤ、小学生がそんな思想持つてるわけねーだろ。

それに訳のわからぬ思想に毒されそうになったら、真っ直ぐ立てれるように張り倒してやりやあいじゃねえか。

後アレじゃね？

そんなモンに一々ふらふら左右されるようなヤツはさ、『英雄』になんてなれねーだろ。

俺の、個人的な『英雄』のイメージだけどさ。

『英雄』ってヤツはたとえどんな事があってもデメエを貫き続ける事が出来るから、何か一本通し続ける事が出来るから。だから『英雄』って言われるんじゃないかね？

周りから何と言われようと時に弾き返し、時に受け入れ、自分を枉げず生きていくヤツが『英雄』だろ。

物理的に強いとか弱いとか、そんなもんはかんけーねーと俺は思うわ。

『劉備』だってそうじゃん。

特段腕っ節が強い訳でも、頭がイイわけでもねえ。けど『劉備玄德』は『英雄』じゃねえか。

ま、そんなとこだ。

お次は『魔法の腕が落ちたらどうする』だどさ。

……だったら教えてやりやあ伊いじゃんな。

学園長はスゲー魔法使いなんだろ？

高畑先生も、真也さんも、なんか二つ名とか付いてるレベルなんだよな。

て事は、ある程度世界が認めた強い人な訳だろ……ガンちゃんやらは知らねーけど。

だったら教えてやればいいじゃん。

実際魔法使って、ウェールズでドンパチやってんのかどうかは知らねえけどさ。

現場に出て、実際にやり合ってる人間が麻帆良にはいる訳で。現実的にまほーがっこーで、おりこうさんに勉強するよか大分二人の血となり肉となるだろうよ。

そりゃ現場には出さねえけど。

その辺はせめて後五年経ってからだな。

そしたら今度は『貴様らに毒されたらどうする』だよ。

はははっ……そんな坂上に俺は言っちゃったぜバーローめ。

あの時の俺は輝いてたね。

シスターシャークティに見て欲しかったもんだ。

『坂上先生も教えてやりやあいいじゃねえか。』

そんなくだらねーもん気にするほど、ちっばけなヤツは少なくとも俺の周りじゃいねえんだよ』ってさ。

まあ実際問題、資料によるとネギは『光』、『風』、『雷』系統の

魔法が得意で、アーニヤは『炎』、『風』系統の魔法が得意なんだと。

んでガンちゃん言うに、この学園で一番『風』系統の魔法が得意なのが真也さんで、『雷』系統が得意なのが学園長らしいね。

それで一番『光』系統が得意なのが坂上で、『炎』系統が得意なのがウルスラの教師の『ヘゼル・ダイナー』。

学園長はいろいろ仕事がある訳だし代役を頼むとしてもだ。

習い事は出来るもんなら、一番巧い人に頼むのが基本だろうよ。

そいつが自分と合うか合わないか、その辺はまた追々考えていくとしても。

普通はそうなんじゃねえのかね？

ホントにネギとアーニヤの為にって考えるんだったらさ。

好きとか嫌いとか、そんな問題じゃねえんだよ。

ま、そんなこんなで二人は週四回、そいつらから魔法教育を受ける事になった訳だ。

坂上も俺がそう言い放ってやりゃあ、次いで口を挟まなくなったし、納得したって事だろ。

初等部編入も二人も学園長も坂上もわかってくれた。

『纏めといた方がイイ』とか言う意見で、ネギがアーニヤに合わせ二人同じ学年になっちまったが、まあ初等部に通わせてくれることになったし、その辺は構わねえや。

ネギのねーちゃんの、ネカネちゃんには散々電話口でブーたれられ

たが。

理解して、納得してくれたわ。

何でも『自分も日本に行く』って頑張ってるみたいだな。となれば来年は大学生かね？

確か薫のヤツと同じ年だった気がするわ。

住むところが俺んところになったのは、二人が希望したから。

寮にぶち込むつつうのはさすがにな。

一応初等部用の寮もあるはあるが、初等部に通う殆んどが麻帆良内に自分の家を持つてるヤツらだし。

一気に生徒数が増えるのはある程度自分が持てるようになった中等部からだって事。

て事で例にもれず、一応こっちでの保護者扱いになってる俺んところにいる訳だ。

そこで坂上は……反対しなかったんだよな。

やっぱアイツも離婚して向こうにいるとはいえ、ガキの親だって事だわさ。

つと、物思いにふけてちゃ拙いわな。

二人起こして、飯食わしてやらねーと。

二つ並んだ赤と黒のランドセルに、ハンガーに並んで掛けられた二つの初等部用の制服。

……コレ見ると、やっぱガキなんだわなあと改めて思えちまうね。

麻帆良の教員寮も、結構広いんだよ。

キッチン付きのリビングに風呂にトイレに後部屋が二つ。
一人暮らしの俺にや、ちよつとも寂しいかね。

シスターシャークティと同棲とかしてりや……夢が広がるわ。

まあ悲しい妄想は置いて、ネギはいつも俺が寝てる部屋で一緒に、アーニヤは偶に遊びに来る桜子裕奈用の部屋で寝てら。
アイツらの私物もあるんだが……まあその辺は気にしねーよ。

とりあえずんな事よか。

今やる事はとりあえず一つ。

「起きろガキども、飯の時間だぜ」

朝飯は一日の資本。

俺の作ったもん無下にするなんぞ、許さねーよ。

二十二匹目 朝飯はとりあえず食っていくべきだろ（後書き）

中々にストーリーが進まない。

そしてオリキャラが名前だけですが登場。

それとアーニヤが『風』系統が得意というのも独自設定です。

『炎』が得意なら、『風』が得意でもおかしくない気がするのですが……どうでしょうか？

二十三 目 男の喧嘩は素手が基本（前書き）

若干支離滅裂な気がします。

二十三匹目 男の喧嘩は素手が基本

「暇だね」

「んじゃこつちでトランプに混ざるか？」

「一応仕事なんだが……まあ、侵入者もないようだし構わないよ」

そんじゃ龍宮も加えて五人か。

しつかり混ぜて、シヨットガンシヤツフルは出来ねえけど、まあイイだろ。

「テメエハ平民スタートナ」

「ん、了解だ」

「……鈴音、お前大富豪俺大貧民、オケ？」

「違っネ違っヨ間違てるネ。」

世界は隼人先生を上、私を下にする事で定まてるヨ。

何かの拍子でこんな結果になってしまったけどいつでも隼人先生が私を搾取する側で私が搾取される側……こんなもの誰だて知てる宇宙の真理ダカラ」

「いやゝ俺初耳だわ……なっ！」

「私に危ないパスをくれないで欲しいよ」

「ケケケ」

「ぴぎぎぴ」

薄情なヤツらだわ。

別にいいけどよ。

鈴音のカードを貰ったらなーんかつまんねえゲームになっちまうし。
……ハア、仕方ねえか。

「俺見学してるわ」

「逃ゲタナ」

「ぴぴ」

「逃げt……てないね、香坂先生は。」

だから超、その危なげなメスを仕舞ってくれと嬉しいんだが？」

今俺らは夜の警備中。

麻帆良学園の裏にある森のとある一角で、こつやって侵入者がいないか見張ってるんだが……暇だな。

はつきり言つて誰も来ねーんだからさ、こんなモンで特別ボーナス貰っていいのか不思議でたまんねえよ。

まあ平和だし、俺は金もらえるし、いいんじゃないかとてけとーに納得させてるが。

働いてる実感がねえのに金だけ貰えるつつーのは、なんか人間腐っ
ていきそうな気がしないでもねえけどさ。

俺とスラぼうとゼロ。

それに俺担当の『魔法生徒』になった鈴音。

この四人が夜の警備のいつものメンバー。

基本この四人で週に一、二度警備をしてんだが、稀に追加メンバ
ーが入るんだよ。

それはウチのクラスのエヴァだったり、絡操だったり、桜咲だっ
たり。

他の魔法先生と合同で警備に当たる事もあるな。

で、今日はウチのクラスの『龍宮真名』。
ゴツゴツしい銃器扱う犯罪者。

かるーく無視されてるでもねえが銃刀法違反だぜ、明らかに。
桜咲もそうだし、ゼロもそうだし、ガンちゃんもそうだし。
まほーつかいとかうらのぶげいしゃってヤツらは、常識的に考えり
や犯罪者だらけだな。

まあ人間はよわっちいから道具と頭を使って戦うのが基本だし。
その辺はこっちの事情を知ってりやアレなんだが、やっぱりどーも
な。

不良時代の喧嘩だと、デカイ刃物でもバタフライナイフだったし。
……そいえば一回ポン刀持ち出してきたアホがいたっけか？
ま、軽くおねえねしてもらったけどよ。

「ぴぎっ」

「そか、誰か近付いてっか」

「安心するネ、隼人先生に盾突こうなんて脳みそが三回転半くらいしてる畜生どもは私が、私の手で、私の全力を持って、私の魔法で私のメスちゃんで、私が私を私に私で私の視界に入た瞬間弾け飛ばすカラ」

……相変わらずだねえ。

ちゃんと学校ではまともに生活出来てんだから、そこは良しとすべきなのかね？

ネジはいつも通りにすっぱ抜けてっし。

こんなヤツは好きだがさ……っと、まあ構わねえや。

あん時コイツをずっと俺の後ろ付いてこさせてやるつつたんだもんさ。

だったら俺は俺らしく、精々鈴音に失望されねえよーにかっ飛ばしなきゃいいんだかな。

だがまあ、とりあえずアレだ。

「鈴音、下がってる」

この香坂隼人さんが女前に置いて後ろでのほほんなんざ、有り得ねーんだよ。

「ココは俺の見せ場だぜ？」

「……えへっ……えへへへへへへへへへへへへへ……」

「キヤー隼人クーン、カツコイー」

「ぴぐぐっ」

「照れるじゃねえか」

「仲良しだね、先生たちは」

褒め言葉だな、龍宮よう。

ともかく来たってんなら準備だコノヤロー。

鞭とハンマーがあるが、まあ鞭でいいだろ。

エヴァに選んでもらったアレを手にとって、スラぼうが教えてくれた茂みの先を見る。

さつてと、出来るもんなら話が通じる相手が好ましいんだが、我儘は言えねえな。

今日は私のクラスの副担任でもある香坂先生たちと夜の警備だ。相も変わらず、いずれ戦場になるかもしれない場所とは思えないような、和やかな雰囲気がいどりに漂っているね。

香坂先生は麻帆良でも有名な魔法先生だ。

それは高畑先生や神多羅木先生、葛葉先生やヘゼル先生のように武闘派で有名な訳ではない。

坂上先生や明石教授のように、指揮能力の高さで有名な訳でもない。

式集院先生や瀬流彦先生やシスターシャークティのように、何かの分野に著しく特化しているから、香坂先生は有名だ。

けどそれは少し、人から見ればよろしくないモノらしいね。

人と人が本気で殺し合うような、戦場を渡り歩いていた私から言わせれば、実に下らない感情だと思う。

所詮何かの隠れ蓑を作り上げて自分の力を正当化しているが、私たちがその身に修めているのは、殆んどが『殺しの為の技術』だ。そこに何がよろしく、何がよろしくないなんて感覚は存在しない。あるのはどちらがより優れているかだけ。

優れている人間だけが今日を明日へ繋げ、劣っている人間が今日を今日で終わらせる。

突き詰める必要もなくあるその真実。

何がよろしくて、何がよろしくないなんて考える方がバカらしいとは思わないかい？

……ひとまずその議論は置いておこうか。

ともかく香坂先生は私たち全員を一步後ろに下がらせて、右手にだらんと地面に垂れ下がった鞭を手にかけていた。

かなり高身長だと自覚している私よりも更に高い身の丈に、筋肉質でゴツイ体格をしている、強面の香坂先生が鞭を構えているというのは実にシニールだ。

始めこの姿を見た時、ギャグか何かだと思えてしまってた笑わせてもらったよ。

それよりは今チャチャゼロが手にしているハンマーの方がよっぽど似合っていると思うんだがね。

「俺二頼ッテモイイゼ？」

「ケッ、ココは俺の見せ場なの。」

女はだーって後ろで見てる」

「キヤー、ザコノ隼人クンカツコイー」

「バカにすんなよチキシヨウめ!!」

そんな香坂先生には夜の警備の度、いつも一緒に出張るメンバーがいる。

その内の一人が『闇の福音』ダーク・エヴァンジェル初代従者、『殺戮人形』キリング・ドールの『チャチャゼロ』だ。

六百年の長きに渡り、彼の闇の大魔法使いと共に歩み続けた有名な『魔法人形』。

曰く赤い血と肉の饗宴が何より好きな、残忍な性格らしいね。

……まあその噂も今の彼女を見ていれば、まるでそうは見えないんだが。

いつもいつでも香坂先生の頭の上に陣取り、仲良さそうにベッタリだよ。

朝起きるのも、歯を磨くのも、食事をとるのも、授業をするのも、仕事をするのも、テレビを見るのも、お風呂に入るのも、寝るのも、全部が全部と一緒にやってるらしいからね。

やっぱり噂のようには見えないさ。

「ぴぎぎ」

「オウ、気合い入れてくんぜ」

「ぴぐう……ぴ」

「……ったりめえだろ、見くびんなよ？」

二人目……うん、二人なのかな？

ともかく二人目は私もこれまで一度も見た事のない魔法生物、『ス

どこからどう見ても、明らかに超は狂っている。

『何が』と言えば恐らく『超鈴音という存在全て』が狂っているね。

初めて魔法生徒として私の前に現れた超は『麻帆良の最強頭脳』としての顔も、『超包子オーナー』としての顔も、気さくなクラスメイトとしての顔も。

全て剥ぎ削ぎ落したような、そんな印象を私に与えるようだった。

昔そんな人間を幾人も見て来たから解るが、間違いなくコレが本当の『超鈴音』だろう。

となれば私たちに見せて来た顔全てがウソだったという事になるんだが……それはそれさ。

知ったからと言って、私は何も変えないよ。

幼い頃から戦場を渡り歩いたせいかな、私は酷く臆病らしい。

だから私は獲物、愛銃がないとまともな生活すら送れなくなっている。

戦場から離れ、もう一年と半年くらいは経つ。

だが今でも枕もとに獲物を置いておかないと上手に寝る事も出来ないし、獲物を身に触れさせておかねば辺りを歩くことだって出来ない。

そんな私が超の姿を知ったからと言って態度を変えたら、彼女から

何をされるかわかったモノではない。

超を担当する香坂先生からも、それは同様だ。

小心者の私が、そんなことする訳もないだろう？

とにかくその三人が、香坂先生が夜の警備と一緒に行うメンバーだ。そこに今日は、私は傭兵として、学園長に雇われてこの場に立っているという訳だ。

そんな三人を引き連れる香坂先生は『魔物使い』。

本来人が倒すべき、殺すべき、憎むべきであると教わるはずの彼らと、ともに歩む者さ。

「ってんだよ、鬼吉かよ。」

またここ侵攻に呼び出された訳？」

「ガッハツハ、久しいの、香坂。」

僕は強いからの、いろんな陰陽師からおふぁーがあるんじゃない」

「よーゆーわ、散々呼び出されてるくせにさ。」

それは弱い証拠なんじゃねーの？」

「ほっとかんかい。」

一応言つとくがの、僕は本当はクソ強いんじゃからの？

鬼吉なんて名前はお前が勝手に呼んだだけの名前じゃからの。

僕は寛容な精神で、呼び出しに答えてやつとるだけじゃい」

茂みの奥から顔を出したのは日本の代表的な妖怪である『鬼』だった。

中々の威圧感を醸し出すその姿は目測で身の丈3m、手に黒々とした金棒を持ち、虎縞の腰布を巻き付けて。

赤い皮膚にボサボサの赤い髪に赤い瞳、頭に一本赤い角を生やしている。

お伽話や物語の中に出てくる『鬼』を体現したかのような姿だ。

そんな鬼は親しげに笑いながら、香坂先生に近付いていく。

「デメエだけか？」

「イヤ……後ろに団体さんがおるわい」

「んじゃいつもみてえに……かね」

「ああ、最近はこれだけが楽しみじゃからの」

そしてピタリと、歩みを止めた。

向かい合う香坂先生と鬼。

これから何をするかというところ……何の事は無い、要は『タイムマン』というヤツだ。

何でも、もう十年近くこんなことを続けているらしいね。

地面に寝そべっていた鞭。

それは私が瞬きをするような一瞬の内に、姿を消した。

パアアンという弾けた音と同時に、鬼は痛そうに手を振るう。

「相変わらず鞭だけは上手いもんじゃ」

「ハハッ、アレだぜ？今日は俺勝っちゃうぜ？」

連続して、空気の弾けた音が辺りに響き渡り、その度に鬼は痛そうに呻き声を上げる。

フム……私の眼は『魔力』を込める事によって『魔眼』に変化するんだが、それでも追い切れぬほどの速度を鞭の先端は出している。辛うじて解るのは、鞭の先端は鬼の身体に当たっていないということかな。

腕を交差させ、頭を守っていた鬼はバツと見えない鞭を振り払うか

のように腕を開いた。

「ちみっちい真似してんじゃねえわいのう!!」

タマ付いとんのかオドレはッ!？」

「んだとコルアッ!

上等じゃ三下……正面から潰してやんよオオオッ!!」

……かなり安い挑発なんだが、手に持っていた鞭を手放す香坂先生。

鼻屑目でも極めて微量で弱々しい『気』を全身に纏わせて、真正面から鬼へと駆けて行った。

その腕を後ろに大きく引き、力強く地面を踏みしめ放たれた拳打は鬼の腹に吸い込まれていく。

バスッと腕力の無い人間がサンドバッグを殴りつけたかのような音が響いたね。

そして何かが私の隣を過ぎて行った。

目の前には腕を振り抜いた体勢で、『一人』立ち尽くす赤い鬼。

意識を彼方に飛ばされた超に腰を乗せたチャチャゼロは、ケタケタと笑っている。

これが、香坂先生との夜の警備でたまに見る光景。

なんでも長年顔を合わせたせいで、術者が召喚する魔物の一部と友人関係になっているらしいね。

香坂先生と魔物の誰かがこんな風に戦って、決着がついたら適当に喋って、業を煮やしてやってきた術者を気絶させてお別れ。

そんな付き合いを、何年も続けているらしい。

私たちのクラスの副担任である香坂先生は『魔物使い』。
偶にだが、随分と変わったやり方で夜の警備を行う魔法先生だ。

二十三匹目 男の喧嘩は素手が基本（後書き）

隼人が弱い。

ココまでとは自分もちよっと吃驚です。

二十四匹目 誰かと知り合ってたのは偶然なのかね？（前書き）

原作が近づいたと思ったら遠ざかってたの巻。
まだ十話以上必要な気がします……。

二十四匹目 誰かと知り合ってたのは偶然なのかね？

この世界に『運命』というものはあるのだろうか。

たとえどれだけ離そうとしても、どれだけ触れさせまいとしても。

結局出会い、知り、理解し、踏み出し、踏み込み。

そんな切ろうとしても切れない、切ったと思ってもいつの間にか繋がっている。

嫌になるほどの、考えたくもない、強烈にして苛烈な『縁』。

二度と刃を握ることもないと思っていた細腕でも、やがて『破魔』の剣を握り。

二度と血を見ることもないと思っていた青と緑の瞳も、やがて『魔法』を目にし。

もう二度と向かわなくても構わないと思っていた戦場に、向かってほしくないと思っていた戦場に、やがて向かっていくのだろうね。

僕が止めても、彼女はやさしい娘だから。

自分よりも幼い少年を放っておけるような性分じゃないから。

震える足に力を込めて、溢れ出す恨み事で自分を鼓舞し、全身を覆

う恐怖を振り切り。

『少女』はきつと『戦士』に変わる。

初めは師匠や仲間の意思に影響を受けて、時が経ち自発的に生まれた意志によって。

僕は二度と彼女を昔のような環境に、追い込みたくはなかった。

並び立てると言うならば、千の言葉で、万の言葉で、僕は彼女を飾り立てよう。

なぜなら彼女はただの少女だ。

ただ中学生を送る、人より少し強気で元気な少女だ。
乱暴で粗暴なところもあるが……優しい少女だ。

過去の事柄など、何ら問題にはならない。

ほんの僅か人より特殊な環境に生まれ、育ち、空虚な生を生きてきた。

人が持っていないような、誰かにとっては手にしたくなるような特殊な力を持っていた。

でも、それだけだ。

今の彼女には、その何もかもが無関係だ。

重苦しい過去に蓋をし、偽りかもしれない今の中で、彼女は輝くように笑っている。

クラスメイトと、友人と、掛け替えのない親友と、偽りではない仲間たちと。

『下らない』と言われようともそれは本来在るべき日常だ。
彼女の年代の子供ならば、本来誰しもが受け取るべき日常だ。

だから僕は彼女を守る。

たとえそれが人として正しくない行為であろうとも。
僕が彼女を守るならば、僕は他に何もいらぬ。

でも僕は表立って彼女を守るなんてことは出来ない。

『姫』の傍に在るべきは『騎士』だから。

僕はどれだけ足掻こうとも『騎士』にはなれない。

きっと泥を啜り地べたを這いずりまわる『兵士』が僕にはお似合いで、『兵士』にしかなれないから。

『姫』の手を取り笑うことも、『姫』の悲しみを受け止めることもそれは全部『騎士』の役目。

『兵士』の僕がやるべきことじゃない。

『兵士』の僕にできることはせいぜい滑稽な道化になり、『姫』に笑ってもらうことだけ。

悲しみからほんの少しだけ気を逸らし、『騎士』が来るまでの場を持たせることだけ。

でも『兵士』だからこそ、いつも『姫』を想い『姫』を見ている僕だからこそ、僕は彼女に笑ってほしい。

『姫』と『騎士』は、少女と少年は、彼女と彼は。

出会ってしまった、この極東の地で。

まるで物語のページのように、大きなうねりに流されたかのように、『運命』に導かれたかのように。

二人は二人を認識した。

たとえどのような対応を取ろうとも、たとえ彼がこの地を訪れていなかったとしても。

いつか必然のように、彼女と彼は出会っていたと、僕は思う。

学園長からの報告を受けた時も、『いつか来ると思っていた日』が来

た』、そんな印象だった。

けれど彼は弱く幼い。

心も体も戦闘力も意志も想いも、彼は弱く幼い。

そして彼もまた子供だ。

『運命』を仕組まれた『英雄の息子』もまた僕ら大人が守るべき子供。

少年らしい日常を送らせてあげるべき子供。

僕ら大人がまっすぐと、育て上げるべき子供だ。

自らの意志で、自らの足で、道を作り上げていくその日までは。

彼もまた守られるべき存在であってほしい。

香坂くんの彼らしい意見によって、彼は初等部で学ぶことになった。けれどそれはわずか半年、されどそれは半年もの間。

香坂くんや触れ合った人々、同年代の子供たちによって、彼にも成長してほしい。

ゆっくりと、のんびりと、自分のペースで構わないから。

僕が憧れたかつての仲間たちのように、強い男になってほしい。

『少女』は『戦士』となり、『姫』は刃を握り、彼女はきっと向かい来る困難に立ち向かうだろう。

僕がどれだけ邪魔をしても、僕がどれだけそれを拒んでも、僕のような薄っぺらな存在を弾き飛ばし、きつと彼女は戦場に立つ。

いずれ『少年』もまた『騎士』となり、『姫』と背中を合わせ、彼に力を貸す『仲間』とともに大空へと羽ばたいていく。

けれど僕はその翼に掴まることはできない。

僕はそんな人間じゃないから、僕には僕の役目があるから。

僕は過去の人間で、『世界』が望む次世代たちの翼には不釣り合いだしね。

僕は僕の役目をやり遂げる、僕は僕の生き様を通す。

世間では『英雄』の一人に数えられているけれど、僕はちっぽけな人間だ。

伸ばし差し出した手で視界に映るすべてを守るなんてできない。

それに……僕の手はいつだって一人に伸ばし差し出されていたから。

師匠から戦い方を習ったのも、エヴァに更なる高みへ這いあがるために協力してもらったのも。
血反吐を吐き、全身の骨を折り、筋肉を潰し、泣き喚き、それでも力を求めたのは……。

『英雄の息子』として生まれた彼には同情する。

『次世代の英雄候補』に選ばれた彼女たちには同情する。

だがそれでも僕は僕を貫く。

たとえ彼らと敵対することになろうとも、たとえ彼らをこの手で殺すことになろうとも、たとえ……彼女に恨まれることになろうとも。

決して僕は僕を枉げない。

それが『兵士』である僕だから。

『僕の全ては彼女を守るために』、それが僕『高畑・T・タカミチ』という男の道だ。

今日は学校もない休日。

ってことで遊びに行こうかと思ったんだけどね。

昨日遅くまで起きてたから目が覚めたのが昼過ぎてから。

このかは私が起きたの確認したら買い物があるってどっか行っちゃ
うし……。

まあ着いてけばよかったんだけどね。

食材の麻帆良大の農学部で安売りしてるからそこに行くって、何人
かと出ていちゃうし。

朝にあるんじゃないの？っていうツツコミは無しで。

偶にはさ、昼過ぎてからもあるんじゃない？……知らないけど。

それで今買い物にでも行こうかなあって外に出てんだけどね。
でもなあんで、コイツしかいなかったのかなあ。

「なんですの、アスナさん」

「何でもないわよ、いちいち突っかかってこなくったっていいですよ」

「……せっかく一人寂しくしてらした貴女について行ってあげているというのに……」

ハッ、どーせ委員長も一人だったくせにさ。

よくこんなこと言えるわよね。

「そう……そんなにも私の事が嫌でいやがりますか……！」

「そんな事一言も言っていないでしょうが！」

「もう何年の付き合いだと思っているんですの！」

貴女の低能なオツムで考えることくらいお見通しですわ……！」

かあああっ！コレだから付き合い長いってのは……。

まったくもって何て腐れ縁！

学年がどんだけ上がっても必ずコイツがいるし……！」

「やりますの？

かるーく転がして差上げますわよ、お・さ・る・さん」

「うっさいわよバカあやか……！」

「……………」

カッチーンと来ちゃったからさ、仕方ない仕方ない。

がおおつて吼えてみたんだけど……反応なし？

「ねえちよつと、なんかそうやって返されると調子狂うんだけど……」

「……いえ、その……久々にそうやって呼ばれたと思ひまして」

へ？……ああ、そーゆーこと。

いつからだったからかわかんないけど、コイツの事を『委員長』って呼ぶようになってたんだっけ。

昔はこのかみたいに『あやか』って呼んでただけだね。
なーんでか『委員長』に変化。

ま、コイツがずっと委員長やってんのが悪いわよねえ。

それに、一つ言うんなら……。

「なんか気色悪いわ」

「……そうですか……そんなにアスナさんは私に潰されたいでやがりますのね……？」

「シヨタコンには無理よ」

「オジコンの貴女に言われたくないですわよ！！」

今日の服装はスカートじゃなくてズボン。

しーっかりアンタの間抜け面、蹴り飛ばしてあげるから覚悟しときなさいよ！

「おお、ナイス！ちょうどイイ！ぐーっどたいみんぐ！」

ふんっ！と力を込めて蹴ろうとしたところに飛び込んで来た声。

頭に人形を乗つけた厳つい大柄の男の人。

そんな変人、変人が多い麻帆良でもウチの副担任しかいないわよね。

にかにつか笑顔でこっちに近付いてきた隼人先生。

九月に入ってちょっと涼しくなってきたけど何それ？って感じのタ
ンクトップ。

相変わらずガタイに似合った筋肉よね。

うん、知り合いじゃなかったら怖くて近づきたくないわね。

目付きも鋭い強面だし。

スーッ姿はほとんどヤクザだもん。

ま、私らの事かなりわかってくれるイイ先生なんだけどね。

隼人先生の担当してる理科だけは、私赤点とった事ないしさ。

六十点下回った事ないって絶対スゴいわ！！

……他？知らないわね、何のこと？

「買い物かなんかですか？」

「そそ、買い物なんだわ、麻帆良大の農学部の方にさ」

「そう言えば千鶴さんも夏美さんを連れてそっちに行くって言うて

ましたわね」

「麻帆良大農学部の野菜は美味いからな、安いし。

週一の買い出しに行くんだよ」

「へえ、自炊するんですね、隼人先生も」

「まな、俺だって飯くらい作れんぜ。」

「……ちなみにテメエらは？」

「私はさ、ほら、このかがいるから」

「お菓子作りは得意ですわ」

お菓子だけでしょうよ、アンタは。

「……ま、アレだ、女は台所に立てとか言わねえけどさ、出来とい
て損はねーぞ」

そよね、毎回このかに任せっぱなしだし。

偶にはお手伝いとかも悪くないかもね。

今度言ってみよっかな。

「隼人お兄ちゃん、歩くの速すぎなのよ！

置いてって迷子に……そう、ボケネギが迷子になったらどーすん
の！」

「おう、ワリーな」

……妹さん？

違うわね、顔が似てなさすぎるし。

髪の色はちょっと似てるけど、それだけよね。

「隼人先生、こちらの可愛らしいお嬢さんは？」

あやかに言われてギョツとしてる。

気付いてなかったのかしら、私たちの事。

「あのっ……うう、恥かいちゃった……」

「ま、気にすんなや。

コレで気兼ねなく話せるだろ？」

「気になるわよバカーッ！」

結構気が強そうね。

ま、ガキはそんなに好きじゃないけど、コレくらい元気だったら見て気分いいわ。

女の子らしいところもあるみたいだし。

「ホレ、自己紹介しろ」

「あ、そだった……えと、『アンナ・ココロウア』って言います。

『アーニャ』って呼んでください」

「コレは」丁寧。

私は『雪広あやか』、隼人先生が副担任をなさっているクラスで委員長をやらせて貰っていますわ」

「……うっはー、ホントに先生やってたんだ」

「ねえどーゆー意味？俺さーっぱりわかんねーんだけどさ？」

「いひやいいひやいいい」

なつかよしね。

てか外国人だったんだ。

どんな関係だろ？

誘拐……とかは無いうけど……まさか！？

惚れた相手とか！？

……無いわね。

「コイツは俺とこで今居候してるガキの片割れな。

外国の……まあ友人みたいなから預かってさ、ココの初等部通ってんだよ」

「片割れって事はもう一人いるって事よね」

「そう……じゃねーや！

時間やべーんだった！！

ワリーが神楽坂に雪広、コイツら預かってくれ!!」

「預かかっていきなり言われても!？」

「てけとーに連れまわしてくれりゃーいいからさ。」

三時間……イヤ二時間くれーで構わねえ!

アレだったらユグドラシル行って俺のツケって事で飲み食いして
てくれてもイイし!!」

「ちよっ!隼人先生!？」

「頼んだ!野菜が売り切れちまうんだよ!!」

……行っちゃった。

て事はガキのお守!？せつかくの休みの日が!？

……ハア。

まあいつか、いつも隼人先生にはお世話になってるし。

「じゃあ私は、初対面だし、アヤカさんって……呼べばいいのかな
？」

「……ふふっ、アヤカで構いませんわよ？」

「え……でも、日本で初対面の、しかも年上の人を呼び捨てとかし
ちゃいけないって隼人お兄ちゃんが、言ってたけど……」

「そうですね、確かに私とアーニャさんは初対面ですわ。

ですけど……もうお友達でしょう？

だったら友人同士なら、呼び捨てでもきつと隼人先生は何も言いませんわ」

「え、う……うん！よろしくね、アヤカ！！」

ガキの割にはイイ子っぽいし、この子の友達ならね。
ユグドラシルで食べ放題しててもイイわけだしさ。

「あの……お姉さん……」

「へ？私？」

声がした方見てみれば、赤毛のガキンチョ。

メガネなんかしちゃってさ、頭良さそうな感じよね。

「その……さっきお兄ちゃんと話してて……」

「隼人先生？ってことはアンタが片割れ？」

「……？」

……まさか男の子だとは。
てつきり女の子だと思ってたわ。

「あゝ、えと……そう！アンタ、名前は！？」

「あ、すみません……初めまして、僕『ネギ・スプリングフィールド』って言います」

姉弟でもないし、大丈夫なの？

ま、いつか。

その辺は隼人先生が何とかするでしょ。

「そ……ああ私は『神楽坂明日菜』ね。

ちよつとだけアンタらの世話頼まれちゃってさ。

よろしく頼むわね、ネギ」

二十四匹目 誰かと知り合ってたのは偶然なのかね？（後書き）

今作のタカミチはこんな感じ。

表立って彼女を守る勇氣は持てないけれど、裏から全てを犠牲に彼女を守る決意をした忠義の士。
こんなスタンスが彼です。

二十五匹目 飯の香りにゃ親しいヤツらとの雑談が良く似合う(前書き)

原作開始まで大きいイベントをあと三つ、小さいイベントだったら
後四つ？

まだまだ遠いです。

二十五匹目 飯の香りにや親しいヤツらとの雑談が良く似合う

「え……えええええええつ!？」

そんなに私の聞いてないよおおおおおつ!..」

朝っぱらからウルセー奴らだ。

まあこのクラスで静かな日を探す方が難しいか。

……ははは、そんな風に感じれるようになったちまうとはな。
慣れって、マジでこえーわ。

「ムムム、コイツはスクープの予感だね」

「うっしっしっし、協力したげよか？」

「待った、まずは状況をしっかり知らないと……」

目の前の二人に促されて、声のした方を向いてみりや神楽坂と委員長に詰め寄る椎名。

ぶつくと頬をふくらまして、いかにもご立腹って感じだな。

椎名があそこまで感情を露わにするって事は……アレ? 思い付かねーや。

……ああ、元々あんな風にテンション高いヤツだったか。
初等部の時からそうだったな。

いやはや、私なんかとはまるで違うね。

『現実主義な皮肉屋』が私だしさ。

アイツを私に求めたって仕方ねえし、そうなりてえとも思わねえけどよ。

「隼人にいに新しく弟分と妹分が出来てたなんてさ！！」

「へっ？何それ？私も知らないよっ！？」

……成程、香坂先生の話か。
だったら妹分が飛び付く訳だ。

香坂先生か……うん、まああの人とはまともな先生だ。

元ヤンで、ガタイのイイ強面で、頭の上に人形乗っけちゃいるが……そこさえ無視すりゃまともな教師。

授業もしっかりしてっし、ホームルームにはちゃんと現れるし。
担任とは大違いってヤツだ。

てかなんで担任になんねーのかが不思議なんだよな。
若くってキャリアがねーからかね？

高畑のヤローは月の内最低でも一週間くらいは学校来ねえのによ。

……そう考えるとやつばまともだよな。
那波の告白も袖にしてたしさ。
アレが大人の対応だよ。

初等部通ってた頃、暴走族組んでた話は聞いたことあるし、かなり

やんちゃやつてたつてのも聞いたことある。
激しい騒ぎを目撃した事もあるけどよ、まだあの人は『普通』の範疇の人間だ。

少なくともウチのクラスみてーに、常識外れた部分は持つてねえし。
あつたとしても頭の上の人形ぐれえだろ。
アレはまだ許容できるさ。

そんなことより第一！一年の頃から思つてたけどよ！
ウチのクラスはぜってーに他と比べておかしいんだよ！！

何であんなに留学生が多いんだよ！
何で幼稚園児と年齢不詳の老け顔どもが同じクラスにいるんだよ！
普通に考えてありえねえだろ！？

極めつけがロボだよロボ！！
何であんな明らかに人外のロボットがクラスにいて誰も不思議に思わねんだ！？

思い返せば初等部の時からだ！
どっかこの学園はおかしい！！
この学園はおかしいんだよ、どっかが！！

……まあそんな風に叫んでもよ。

扶養されてる、養われてる私にやどーしようもねえんだがな。

諦めてるよ、ある程度は。

けど高校入ったらバイトして、大学はぜってーに麻帆良から逃げ出してやる。

今は目の前の……出来ちまった『友達』みてえなヤツらと、適当に過ごすわ。

一人でP C イジッてるよか時間が流れんのもはえーしな。

「……コレは肅清が必要だにー」

「むふふふつ、あんちゃんはどうしてあげちゃおっかにゃ」

もうすぐ開始のチャイムが鳴る時間を差す時計の針。

そいつをチラリ一瞥した椎名と明石は、いつも香坂先生が入ってくる扉の前で、チシャ猫な笑みを浮かべてやがる。

アイツら二人が香坂先生の妹分つても麻帆良じゃ有名な話。

まあ香坂先生が有名人だかな、仕方ねーってヤツだ。

何でそんな関係になったかだとか、その辺はどーでもイイんだが、ともかくあの二人はそんな立場だ。

彼女じゃあるめーしよ、何でそんなに不機嫌そうなのかがわかんねーよな。

「にしつ、チウちゃんはなーんで二人があんな風に何ってんのか分かんないみたいだねえ」

「……わかんねーよ、んなもんさ。」

てか美空よ、てめーだってわかんねーだろうが」

「イヤイヤわかるって、私にも妹分はいるしね」

……ああ、あのチビツ子か。

ちよこちよこ美空の後付いて回ってっから、私とも顔見知りなんだよな。

ガキはやっぱ、アレくれーが可愛いもんだぜ。

「要はさ、スネてんの。」

『私たちを差し置いてアスナやいいんちよに教えてるなんて、私たちの事どー思ってるのさ』ってね」

「あはははっ、桜子もゆーなも可愛いもんじゃん！」

「ガキだな」

「しゃーないって、私たちだってガキだし。」

ふつーはさ、兄貴分とか姉貴分がいりやそんなもんっしょ」

「一人っ子の私にゃわかんねー」

「ほら、アレじゃん。」

千雨ちゃんが私たちがいなくなると不安になると一緒だって」

「なんねーよ」

「ひどっ!」

およつとワザとらしく泣き崩れる和美はほつといてだ。
そろそろマジで鳴るな、チャイム。

つと、思ってみりゃあ椎名は助走をつけて、椅子を踏み台に扉に向けて跳ぶ。
対する明石の方は机の上に仁王立ちだ。

つてか椎名拙い!
そのまま扉にぶち当たんどぞ!?
流血沙汰とか勘弁してくれ!!

「ういーっす、おはようさんだtem「桜子ちゃんフライングキーツクー!」ほふうっ!」?

かと思つて見れば、ジャストタイミングで教室に入ってきた香坂先生。

飛んで振り切つた椎名の蹴りは、全く予期してねえみたいだった先生の横っ面に叩き込まれて、グラツとバランスを崩す。

んで容赦なく鳩尾に叩き込まれた明石の肘。

「ゆーな特製エルボー・ドロップ!」

メキツとか、ちょっと怪しげな音を立てて、香坂先生の巨体は床に倒れ込んだ。

後はその上に乗リ掛かった二人が駄々っ子パンチ。

「隼人にいの女たらし！ホモ！」

「昔の硬派なあんちゃんはどこ行っちゃったんだ……あたしやかなしーよ！！」

新たに妹分やら弟分を作るってのは、ココまで古株に文句言われるもんなのか？
いや……コレは目の前の二人が特殊なのか。

……『大好きな兄貴分』ってヤツか。
香坂先生が組織してた暴走族にも所属してたみてーだしな。

昔噂になったんはこいつら二人だったか。
そう考えりゃ、親もスゲーわな。
不良に愛娘預けんだからよ。

ま、でもだ。

「にゅい？」

教室入った途端に蹴り飛ばされた香坂先生が、黙ってるわけねーよな。

体罰、何それ？みたいな感じでゲンコツ振らせて来る教師だしよ。

しかも相手は妹分二人……容赦はねーだろうさ。

「……さーっぱりよ、俺ってばテメエらの言ってる事が意味わかんねえんだが……俺に対してよーそんな事できたもんだわなあ」

椎名の足首を手につつた香坂先生は、上に乗った二人を押し退けて立ち上がった。

必然的に、ぶらんと逆さまにつるされた椎名。

尻もち床についた明石も、ぽえーっと放心してら。

「俺は嬉しい、嬉しいぜえ……桜子。

まさかそんなやんちゃん子になっちまうとはよ、俺は非常に嬉しいねえ」

「にやつ……にやはははははつ、でしょでしょ!？」

んゝなんて言うかズビビンッな感じ?イカしてたっ!？」

「そだな……イカしてたぜ、サイッコーに」

ほふっ、と息を付いた椎名。

イヤイヤ、そんな場合じゃねーだろ。

逃げれるかどうかは別として、逃げようと努力すべきだな。だってよ、香坂先生の血みてえな朱色の眼は、ジッとテメエを貫いてんだぜ?

「でさ、桜子」

「にやにかな、隼人にい？」

「やってくれたんだからやりかえされたって、文句なんざねーよな……？」

そう言ってからはずぐだった。

掴んだ手で椎名を引つ張りながら教壇の上に尻を置いた香坂先生。その膝の上にうつ伏せに寝転がされた椎名。

空いた手で人形を頭に乗つけるのも忘れねえ。

がっちりと肩の下辺りに手を添えて椎名を動けねえように固定した先生は、そこから躊躇いなく制服のスカートを捲り上げた。

……ははっ、猫柄とか結構子供っぽいパンツだな。
じゃねーよ！何やってんのあの人！！

もう一本の手は？

そりゃそーですよ！振り下ろさんと振りがぶられてますよね！！

「ちよっ！隼人にい！？」

「昔みてえによーやってくれた。」

だからさ、俺も昔みてーに仕置きしてやんぜい」

スッパーンと抜ける様な快音。

次いで……。

「にみやあああああああつ!?!」

椎名の叫び声。

……うわゝマジかよ。

普通はやんねーよな、あんな事。

「やんちやなのはっ！歓迎だがっ！教師にあんな事！やってんじやねーぞコラッ!!!」

「にぐっ！にぎっ！にぎやっ！にみやあああつ!!!」

イヤ、アンタ人のこと言えねえだろ。

坂上先生相手に無茶やったってのは有名だぜ？

まあお蔭で今でもぞんざいな扱い受けてるってのは知ってるけどよ。

『自分の行動には責任を持て』、コレが香坂先生が私ら相手によく言う言葉だ。

やったらやった分だけ、相応のモノが返ってくる覚悟をしろって事だよな。

比較的、つーかかなり自由にやらせてくれる先生だが、ココは絶対譲らねえ。

世間的に見てちと間違っただことしたら、そん度に相手側に最初に頭

下げんのは香坂先生だ。

それでウチのクラスは普通と比べてちとおかしい。
程度が何にせよ、問題が舞い込んでくることはよくある。

神楽坂と委員長が高校生相手に啖呵切ったとか、届け出も無しに長瀬と鳴滝姉妹が時間通り寮に帰ってこなかったとか、和美が踏み込んでいけねえ様な領域のモンを記事にしたとか。

ウチの天才コンビが発明したもんで工学部の一部がぶっ壊れたとか、古菲が間違って一般人に被害を出したとか、友人がナンパで困ってたからって相手叩いて帰ってきた大河内やら釘宮を追っかけて阿保どもがやって来たとか。

他にもあげりやまだまだあるんだが、とにかくそんな事はよくある。

その度に香坂先生が副担任のおかげで前に出て、私ら庇って、んでその後私らにぶち込まれるゲンコツ。

コイツが半ばパターン化してっからな。

教師ってのはそーゆー仕事らしい。
責任取って、謝って、間違いを間違いとわからせるのが仕事なんだと。

大変だねえ、教師って言う仕事はよ。

先生もそうだったからかね？

けどさ、文句も言わずこなす先生は、やっぱまともなイイ教師だよな。

「k t k r！スクー p」香坂隼人が現れた、しかし香坂隼人はまだ朝倉和美に気付いていないようだ……」……あ、朝倉和美は逃げた……」

とりあえず話は置いて、そいつは賢明な判断だな、和美。
あんな事態になんのは拙い。

スクープなんぞより、女としての尊厳の方が大事だろ。

虚ろな目の椎名を教壇の上に寝かせて、先生は片割れに目を付けた。
尻もち付いた状態で、ビクツと身体を震わせた明石。

蛇に睨まれた蛙か、まるで動けなかったみたいだな。
ま、いずれあんな状態になるってのは分かってんだから、ホントなら逃げるべきなんだろうが……。

しっかり恐怖を刷り込まれてるみてえだな。

いつもはそんなもん、完全に吹っ飛んじまってるけどよ。

「あんちゃんの鬼！悪魔！変態！鬼畜！大魔王……！」

女の子にあんなことして恥ずかしくないのか……！」

「しかたねえさ、俺ってば大魔王なんだろう……？」

後さ……ゆーな、一つだけ教えといてやらあ」

明石が逃げようと立ち上がり振り返った時には、すでに腕を香坂先生に掴まれてて。

涙眼な明石と対照的に、先生はにっこりと笑ってやがった。

「……大魔王からは、逃げられねえ」

「にぎっ……にぎゃああああああああつ！……！」

……後は言うに及ばずだ。

まあ……アレだ。

中学生の女子に、人前であんな事されるのは死ぬほどキツイって事だな。

私らにはせいぜいゲンコツ。

重くって痛いんだが……随分と軽くって痛くないんだな。

「あーん、カワイー！！」

「二人同い年？何歳なの！？」

「同い年じゃないわよ！」

私が数えて9歳で、コイツが数えて9歳だからね！！」

「アーニヤ、それじゃ一緒だよ？」

「解ってるわよボケネギ！」

「アンタはいちいちうつさいのよ！！」

結局授業が終わったんだが、桜子と裕奈に『着いて来ない』つつー
選択肢はなかったみたいだな。

ちやっかり俺の仕事がひと段落するまで部活で汗流して、しっかり
俺の帰り道について来て今教員寮に至る、という訳だわ。

「もーかわいいにゃー……じゃなくって！」

ふっ……アタイの事は、『姐御』とでも呼んでくんな……」

「あ、私は桜子ねえがイイな。

ほりゃほりゃ、呼んでみて」

「困ってんだろぅがアホたれども。

んな事よりとっとと飯の準備をしろ」

「ケチー、手伝えー」

「野菜切ってんだろ？」

「もつと手伝え」

「野菜切ってんだろ？」

まな板でトントーン昨日、農学部で買ってきたニンジン切る。
結局来ちまったもんは仕方ねーからな、ネギとアーニヤ合わせた五人で晩飯の準備してるって訳だ。

ネギとアーニヤも、ただ居候させるつてもアレだからな。

風呂掃除やらゴミ出しやら買い物やら、いろいろ家の手伝いをさせてんだよ。

料理はまだやらせたこと無かったから、今日がデビュー日だわ。

記念すべき一発目の献立は『カレーライス』。

イギリスで食ったことあるのかどーかは知らねえけど、こっちで食わせてやったら大喜びしたメニューの一つだな。

ま、一発目の料理としては妥当な線だろ。

「お兄ちゃん……目にしみる……」

タマネギか……。

そいつはしかたねえ、誰もが通る道だ。
洗礼をしっかりと浴びてろ。

「ネギきゅん、そんなにや時はコレさ！」

すいちゅゝめがね」

「WO!さんきゅ!私に貸して!!」

「ちよつ、アーニヤ!」

「フツ、仲がイイのはイイ事だぜ」

「裕奈、そのキャラ止めろ、似合ってねーから」

「やっぱり?」

そんなこんなに雑談交えながら、出来上がったカレーライス。出来るもんならエヴァもこの場に呼んでやりてかったんだが……ま、アイツはらしくねえか。

今度誰かに預けて、遊びに行つて飯でも食つか。

ともかく今は目の前。

スラばうとゼロが一緒に食えねえのはアレだな。フォロー入れてやんねーとき。

「んじゃ手を合わせろ」

パンと小気味のイイ音。

やっぱこうやって食卓囲むつてのは気分イイもんだわさ。

「いただきますだ」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」

二十五匹目 飯の香りにゃ親しいヤツらとの雑談が良く似合う（後書き）

桜子と裕奈との絡みとバーン様の台詞が書きたかった、それだけです。

二十六匹目 人によって気に障るモノは違う（前書き）

総合評価が四千を越えている……。

ホントに、こんな拙い作品を評価して下さい皆様方、ありがとうございます。

これからもよろしければお付き合いください。

二十六匹目 人によって気に障るモノは違う

「ねえアーニヤ、お兄ちゃん喜んでくれるかな？」

「当たり前でしょ！」

「なんたつてこの私が作つたんだからね!!」

黒焦げにして、ボロボロにして、ようやく完成にこぎつけたんだもん。

今日でちょうど、日本にやって来て一ヶ月。

初等部に通い始めて三週間かな？

麻帆良に来て……ま、そこそこの毎日を送れてるわ。

これもいちおう隼人お兄ちゃんのおかげだし。

私が天才美少女だからつてのもあるけどね!!

お友達もいっぱい出来たし、ゲームとか漫画とかショッピングとか
いろんな事して遊んだし。

楽しいわ、ホントに。

メルディナ魔法学校に友達はいたけど、こっちみたいに何かして一
緒に遊ぶなんてことはなかったもんね。

せいぜいお茶とお菓子を一緒に食べて、魔法のことについて話すく
らい。

昨日のアニメがどうだったとか、あのドラマの展開は予想外とか、
新しいお菓子がどこで出たとか。

そんな風な、『ふつー』の会話はなんてなかったからさ。

授業はちよつと退屈だけど、楽しさは有り余るってヤツ。
『給食』もみんなで食べてるからか、とっても美味しいし。

……まあ一つ気に食わないことがあるとしたら……。

「……？　どうしたの、アーニヤ」

「なんでもないわよボケネギ」

かっこいいカツコいいカツコイイ、こいつがクラスの女子だけじゃなくって違うクラスとか、他の学年の女どもにも言われてることね。つたく、コイツのどこがイイのかまゝつたくわかんないけど。

泣き虫だし、ネカネお姉ちゃんと隼人お兄ちゃんと離れるのだから嫌がる寂しがり屋だし。

お風呂嫌いだし、一人で寝られないし、料理は下手だし、ボケだし、バカだし、ボケネギだし。

ま……でも、真剣になつて顔はちよつとだけカツコイイ……って違う違う違あぁう！！

やっぱ気のせいよ気のせい！

まったく！　周りのみんながそう言うから私も勘違いしそうになっちゃったじゃない。

「アーニヤ？」

「うるさいうるさいうるさああああい!!」

「アンタはちよつと黙ってなさい!」

「むうつ……僕何も言っていないじゃないか!」

「ちよつ! まつ! ?」

「肩とか掴むな! 顔が近いのよ!!」

「はっ、離しなさいよっ!」

「嫌だ! ちゃんとアーニヤがなんで怒ったのか聞かないと離さない」

「誰かに見られたらっ、どうすんのよ……?」

「どうもしないし、関係ない。」

「僕はただアーニヤの事が知りたいだけなんだ」

「ボケネギ……そんな事言われたら、私……。」

「どうすれば、イイのよ。」

「どうなっちゃうのよ。」

「アーニヤ……ね、教えてよ、僕だけに」

「ネギが近い。」

「赤い髪も、茶色の瞳も、整った顔も。」

「ずっとずっと私が見て来たネギが近い。」

「唇も、私とネギの唇も、近い。」

……バカ……バカ……バカ、バカ、バカ、バカ、バカバカバカバカバカバカ。

私のせいじゃないもん。

ネギが無理矢理迫って来たのが、悪いのよ。

そう、私のせいじゃない。

ただネギが、ボケでバカのネギが、どうして持って私に迫って来たから。

私が……したくてキスするんじゃないm「君たち、ココは中等部の校舎なんだが」にぶあっ!？」

「めぼっ!？」

「……成程、可愛いカップルだな」

「ちっ……違っわよおおおおおおおおおっ!!!!」

「ういゝっすデメエら、帰りのHRの時間だぜ」

扉を開けて教室の中。

放課後まであとちょっとって事で、どいつもこいつも張り切ってんねえ。

ウチのクラスは部活に入ってるヤツらがほとんど。

日々活動に励んでら。

帰宅部のヤツは帰宅部で毎日楽しそうだし、いやはや青春してんな。

俺のも楽しかったんだが……世間的には褒められたもんじゃなかったしさ。

後悔なんざしてねーんだが、なんつーか、こいつらが大会出たーとか、賞を取ったーとか。

そんなのは自分の事みてーにうれしいもんだ。

俺にや経験できなかった青春だかな。

教師ってのは、んなのを感じれるんだからさ、イイ職業だわ。

そう考えりゃ……ガキが出来たらせってーに親バカになりそうだねえ、俺ってば。

生徒でコレだし。

……ハーフってさ、ほぼ確実に美形になるよな。
それにシスターシャークティは美人だしよ。

俺は強面だが……さ。

ウッシ、もちつと気合い入れてアプローチかけねえとな。
今でも頑張ってるつもりなんだが、どーやら足りねーみたいだし。

夢はまったくもって、広がっていくもんだわ。

まあ実際問題マジで頑張らねえと。

清楚なタイプのシスターシャークティをどう扱っていいかいまいち
わかんねーんだもんよ。

女とくっ付いて、デートしたりだとか、そんな関係になったりだと
か、一通り経験はあるんだがさ。

二人ばかりとそんな事になったが、まるでタイプが違うかな。

不良だった俺のノリにしっかりと合わせられるようなヤツ。

つまりは若干粗暴なアウトロー。

元氣してっかな……なぐんで俺が言っても仕方ねえか。

一人目の時も二人目の時も……っつーか不良らしくっての？

二人と付き合ってたからな。

まあ二人目はなし崩しの感じだったんだが……。

いつも一人目のヤツに『雌狐』だの文句言われてたしさ。

考えればヤバい事してたもんだ。

一人目は中一の時から高三までだからほぼ六年、二人目は高一から

だから二年くらいか。
長年連れ添って一人目とはほぼ夫婦に近い関係で、そのまんま結婚するもんだと思ってたんだが。

結局俺が俺の我が儘で、シスターシャークティに惚れちまって、フツちまったからさ。

思い返せばあん時はスゲー事になったさ。
桜子と裕奈はわんわん泣くし、エヴァには殴られるし。
政利らは何にも言わなかったけどよ。

二人目もヤバかった。

いつもの澄ました顔は置き去りに、涙と鼻水でグシャグシャ。
『捨てないでくれ』って喚くし。

ハハッ、そう考えると俺って相当な事してんだな。
本気でクズだわ。

まあでも一番つらかったのは一人目のヤツの態度だったつけ。
何も言わなかった、ホント何も俺に言ってくれなかった。

泣きもせず、喚きもせず、文句も言わず。
ただ一言『そうか』つつつて、結局それっきり会ってねえ。
俺が17の時だから……もう六年以上会ってねーや。

もうコレでイイんだと俺は思うけどさ。
会いに行く……会いに行くのも、な。

住所変わってなけりやそれもまたアレだが……。
美人だしさ、男だっているだろうよ。
もう六年以上経ってんだしさ。

……行ってみるか、今度の休みにでも。
みっともねーのかね、俺の態度って。

「隼人にい、HRしないの？」

「っとフリーな、考え事してたわ。

「ぞ
んじゃ連絡事項をてけとーに言って、ちゃっちやと終わりにすん
ぞ」

いかんいかん、思考の海に沈んじまってたか。
仕事は仕事、しっかりしねえとな。

なあ、香坂隼人よう。

「ま、大した知らせはねえんだが……とりあえず最近暗くなんのも
早くなつてつから、下校時は複数人で、人通りの多いところを帰れつ
てとこかね。

後はそろそろ十月になつから衣替えの時期だ。

服を押し入れの中から出して、手入れくらいしとけや」

「……はい！」

「よっしゃ、イイ返事だ。」

「んじゃま、連絡あるヤツはいるか？」

「あ、はい、保健委員から連絡です。」

えと……最近急に肌寒うなつとるから、風邪引く人が増えとるみたいで。

「せやからしつかり手洗いうがいをしとくよーに、だそつです」

……あゝいけねえ。

考え出したらアイツの顔が頭に浮かびまくつちまう。

ま、イイヤ。

どーせ会いに行つたつてさ、袖にしてくれんだろ。

あつちの方はどーもそうはなりそうにねえが、アイツなら多分よ。

出来るもんならおもつくそぶん殴つて欲しいなんざ思つちまうんだが……やっぱ我が儘か？

ちよつと楽しみになつてきた俺は、やっぱ悪い男なのかねえ。

「……………」

「週末曲芸手品部でイベントをやるそうですわ。」

世界樹広場でやるそうなのでよろしければどうぞ、との事ですの」

なんか土産でも持ってくかね。

俺は日本茶派だがアイツはコーヒー派だったし。

確かキリマンジャロが好きだったよな。

コーヒー研とかあったっけ？

イイ豆でも分けてもらって来るか。

「フム、悪いが少々構わないか？」

しっかし……どんな顔して会えばイイんだ？

昔みたいにつてのは拙いよな。

あの頃は付き合ってた訳だしさ。

……ハア、考えてもいまいちわかんねーや。

ともかく会ってみりやなんも「香坂！聞いたのか！！」って！ちよっ！？

「ウオッス！なんか用でしょうか！？」

「……ふう。」

お前に客人だ」

「俺につすか、新田先生？」

「ああ、HRは終わっているのだろう」

「まあさっきので一応は」

「なら入っても構わんか。」

それと言っておくが騒ぐなよ」

「おつ、お邪魔します……」

「あ、いたいた隼人お兄ちゃん！」

「「「きゃああああ……ああっ……」」」

とりあえず騒ぎ出す前にクラスのヤツらを新田先生と眼で威嚇してと。

つてかネギにアーニヤ？

何故にココにいるよ？

「香坂、お前に渡したいモノがあるらしくな。」

それと……不本意ではあるが彼はアレだろう？」

そーいえばそうだった。

いやはや、初等部通ってつからすっかり忘れちゃってたが、ネギは三月からここの教師になるんだったわな。

何とかして止めさせてえんだがさ、コイツばっかしはどうもいかなーみたいだし。

ったく、まほーつかい様方のこーしょーな考えは俺にはさーっぱり。マジわけわかめ。

まあ明石さんに聞いたんだが、一つだけだがひっくり返す方法は有

るらしいが。

その方法を使えばいいんだが……やっぱ俺にやどーしようもねえ事だからよ。

願わくばってとこだな。

成程、新田先生は教師の仕事の見学とかをさせてた訳ね。
いろいろネギに教えつつ。

不本意だつて言いながらも、教師として行すべき最善の行動を行う
新田先生はやっぱスゲーわな。

俺も帰って、ちよつくらネギに教えてみつか……新米の意見だけだよ。

しかし俺に用ってなんだ？

「はいコレ、クッキーをね、授業で焼いたの」

「僕からも、はい」

「おお、さんきゅ。」

しかしよ、帰ってからでもよかったじゃねーの」

「そうなんだけど……まあアレ。」

いつつも隼人お兄ちゃんにはお世話になってるし、お礼ってヤツ
よ」

「アーニヤがね、一番最初に渡したたって聞かなくつて」ボケネギ
！そんな事は言わなくつていいのよ！！」どつ、怒鳴らなくつてイ

「いじゃないか」

「そか……けどさ、勝手に入ってくんのは褒められたもんじゃねぞ。」

て事で新田先生、校門まで出来れば……」

「安心しろ、元よりそのつもりだ」

「ちよっ！そんな風に言わなくてもイ」いつも言ってる、『行動には責任を』ってよ」うぐっ、そーだけど……」

神楽坂か……。

ガキは嫌いだったけどさ、結構二人に会うことが多いみたいでさ。

雪広と一緒にあって、遊んだりしてくれてるみてーだ。

何かねーちゃんみてえだな。

どちらにせよ仲良しが出来るってのはイイ事だわ。

「けどま、ありがとな。」

二人みてえな弟分と妹分持てて、俺は幸せもんだぜ」

「えっ……えへへっ」

「とーぜんよっ！！」

可愛いもんだわ、二人とも。

クッキーか……大事に食べねえと。

そっか、昼に光さんから来てたメールはこーゆーわけね。
確かに嬉しいサプライズだ。

「じゃあお願いします」

「フム……ではネギくん、アーニヤくん、行くとするよ」

「あつ、はい！お兄ちゃん、帰ったら感想聞かせてね！」

「不味いなんて言ったら殴ってやるから！！」

つて事で行っちゃまったネギとアーニヤ。

あゝクラス連中に絶対詰め寄られるわな。

……ま、仕方ねーか。

「デメエら、とりあえず席に付けや。」

聞きたい事あるヤツらは挙手、一人一回で頼むぜ」

「とりあえずあの二人の名前と関係を！」

「男の方は『ネギ・スプリングフィールド』、女の方は『アンナ・ココロウア』、初等部の四年生だな。」

で、関係の方だが……二人の保護者と知り合いでな、こっちでの

保護者みたいな感じになってんだよ。

まあウチに居候する新しい弟分と妹分ってとこか」

「あの二人に美味しいモノを食べて欲しいんですが……邪魔してもよろしいですか？」

「二人に聞け。」

後だ、俺はいなかったとしても文句言っなよ」

「二人は付き合ってるんですか？」

「さあ？見た感じ、幼馴染だがそこまで発展してねーみてえだな」

うつひゃ、人気者だわ。

やっぱ子供と小動物はかわいがられる対象なのかね？

けどこいつは長引きそう……ん？

何か足りねーよ……なっ！？

「おおっ、ワリーなデメエら！俺ウンコだ！！」

「はっ、隼人先生！？」

「肛門からこんにちはしそうだからな、質問はまた明日って事で！！

じゃー気を付けて帰れや！」

喚くクラスのヤツらを置き去りに、教室を飛び出す！

ともかく走らねえと！！

コイツはちつと……拙い状況だわ。

「ゼロ、フリーが先行してくれ」

「アア、ドコヘダヨ？」

『隼人、何があった』

エヴァからの念話か。

まったくもって携帯いらずたあ便利なモンで。

『おい、聞いているのか？』

「おう、聞いている。

悪いが『別荘』だっけ、アレ引つ張り出してくれっか」

『……わかった……がだ、ともかく理由を教えろ』

「スイッチが見つかった。」

俺なんか軽いもんじゃねー、マジものの危ついスイッチがさ」

「ぴぎぎっ」

「……ケケケ、確力ニソイツハ」

『拙い……か』

「喜んでくれてたみたいだね」

「まあね……あ、でだけどこれからどうする？」

「アーニヤ、今日は神多羅木先生に修行つけてもらう日だよ。

忘れてたとか……」

「……ちよつとツライから目をそむけただけよ。

わかってる、ちゃんと言わないと何言われるかわかったもんじやないもん」

「うん、だったら早くいき」オオそこノ少年少女、ちよとイイかネ」
……ふえっ？」

「……どこの誰よ、アンタ」

「先は教室二いたんDAがネ、気付いてもらえなかつたのハ寂しいヨ」

「お兄ちゃんの、生徒さんですか……？」

「MAあね、ヨクよ苦お世話にナていRUし」

「ふうん……じゃあ私たちに用って何よ」

「ちよと……ネ……クヒユツクハ……あゝンん、私TOお刃なし、しナいかネ……？」

二十六匹目 人によって気に障るモノは違う（後書き）

スイッチON！狂人始動！！

二十七匹目 思ってたよりも根っこが深い事はしばしば（前書き）

前半チャチャゼロ視点の彼女口調なので、読みづらいかもしれません。

加えてこの話では、読者様方が恐らく不快に思われる描写があります。

もしそれでも構わない、という方だけよろしくお願いいたします。

二十七匹目 思ってたよりも根っこが深い事はしばしば

ソコニ躊躇イナンザ無カッタ。

のーもーしょんカラノわんあくしょん。

着テル麻帆良中ノ制服ノ中ニ隠シタ斬レ味鋭イめすハ、『狂人』ノ
目ノ前ニイルガキニ匹目掛ケテ進ンデヤガル。

一人四本、計八本。

狙イ八目ト胸元ト両太腿。

隼人や魔法先生トモノ言葉ヲ聞イテ学校ニイルウチハ『魔法障壁』
ヲ展開サセテネエガキニ匹ニヤ、确实ニ直撃シ、洒落ニナンネー怪
我ヲ与エチマウダロウヨ。

マ、俺様ガイナケリヤダガナ。

「ヒヤッハーツー！」

めすトがきニ匹ノ間ニ身体ヲ滑リ込マセテ、『肉』ヲ付ケタ手カラ
伸バシタ『爪』デ叩キ落ス。

ケケケ、御主人ト殺リ合ツタ時ヨリ威力モ速度モ上ガッテンジャネ
エノ。

魔物化ノ影響ダロウヨ。

恐ロシイゼ……ッテカ！？

ケーッケケケケケケケケケケ。

「チャチャゼロさん？ あの……どうかしたんですか？」

「ってそれより話しちゃ拙いでしょ！ 魔法がバレたらどーすんのよー！」

「ダツタラ『魔法』ナンテ言ウンジャネーヨ」

ケケケ、短絡思考ガ。

がきダナ、マジデヨ。

マ、俺八別ニ『魔法』ガバレタツテ痛クモ痒クモネーンダガサ。

……がき二匹ガ『狂人』カラ攻撃ヲ受ケテイルツテ事ヲバレネエヨ
ウニスルダケデ手一杯ダゼ？

ツタクアノ阿保モ、メンドクセー事言ツテクルモンダ。

ケケツ、『殺セ』リヤ楽ナノニヨ。

ドーセナラアイツ、『教師』ジャネクツテ『ヤクザ』カ『軍人』カ
『戦争屋』ニナリヤヨカツタノニサ。

ソシタラ俺、人ヲ殺シ放題ダゼ！？
今更言ツタツテ仕方ネーケド。

「がきドモ、兎二角デメエラハトットト行ケ。神多良木ノ野郎ト用
事ガアンジャネーノ力？」

「うん……何か合ったのかな……。あのっ、すいませーん、どこか調子でも悪いんですか？」

ツテコツチ近付イテンジャネヨー！

ちやちやぜろチャンノ可愛クテチツチャナ手ニ持テルめすノ量ハソロソロ限界ダゼ？

折角回収マデシテルツテノニ……弾イテ誰カニ被害ガ出タラ俺ノ霜降り肉ガぱぁニナンジャネーカ！！

肉汁じゅわじゅわノ旨味タツプリガ……アンマ食卓ニ上ンネー俺ノ楽シミガ……。

今日ハびーるト一緒ニがつがつトイク予定ガ！！??

……食ウカ？

イヤイヤデモ鉄力別ノ素材力、ソノ辺ハナンカワカンネーガ……。美味クネエヨナ。

ダガシカシツ！俺ノ霜降り肉ノ為ニツ！！

……デモナア……。

「……居なければ良かタ……そう何よりもお前らガ！いなければバツ！……アハハハハッ！……そうダ、そうヨ、そうダタ、そうじゃないカ、いなければよかつタ、いなければよかつタ、いなければよかつタ……。私がこうなたのモ、彼がこうなたのモ、彼女がこうなたのモ、子供がこうなたのモ、少年が少女がこうなたのモ、青年が大人が老人がこうなたのモ。」

『業』……業、業、業、業、業、業、業、業、業、業、業、業……だト、拭い去れ

ぬ『カルマ』ダと人は言う！！

ならばその根源を消せばいいではないか。そうだ……クヒュツ……クヒュヒュツ……実二、簡単ナ、事じゃ、ないカア……」

『狂人』ハ気色ノワリー笑顔ヲ作ツテ、手ヲ前ニ突き出ス。

……オイオイオイ……『魔力』集メテンノカヨ！？

狙イハ……雄がき！

サセルカ！ 霜降り肉ノ為ニツ！！

「……爆ぜ口……弾け口……潰れ口……千切れ飛べ……アハッ、アハハッ。ねえご先祖さま、かわいゝ子孫ノ、お願いだヨッ……ちょっとそこまデ、これから後ずト、ただのたんぱく質になてくれるカナ……？」

「ふえっ？」

「……”……イ……オ……”」

爆竹何百ト纏メテブン投ゲタヨウナでかい音。

俺ハ可愛イライオンチャン。

耳ガイカレチマツタラドーシテクレンダ？

「……邪魔……するノ？ ねえねえ、貴女は私の邪魔をするノ……？ 何で邪魔するノ？ どうして邪魔するノ？ 何故邪魔をするノ？ 私……とても正しいことしてるだヨ……」

雄がきノ頭上デ爆発。

『イオ』ナ。

隼人ガ言ウニ相手ノ頭上デ爆発ヲ起コシテ全体ヲ攻撃スル『呪文』
ラシーガ……。

ケケケツ成程、頭ニ血ガ上ツテヤガンナ。

イツモ使ツテル時ニ比ベテ威力モヨエーシ、発動モオセーシ、範囲
モセメー。

腕蹴リ上ゲタダケデ外シチマウンダカラヨ。

ケー！ツケケケケケケケケケ！！

『全体攻撃呪文』ノ名ガ聞イテ呆レルゼ！！

「へっ！？ネギ！つちよ！さっきの『魔法』！？」

「でっ、でも『詠唱』も『始動キー』も何も無かつたんだよ！！
それに『魔力』だってほとんど感じられなかつたし！！」

ウハーヤベー、俺ノ霜降り肉ガ遠ノク……。

拙イゼ……ドウシヨ？

マジ『殺シ』チマウカ？

……ケドンナコトヤツタラ隼人ガ何テ言ウカ……。
メンドクセーガ嫌ワレンノハ勘弁ダゼ。

一応俺ノ『主様』ダカンナ。

ケー！ツケケケケケケケケケケケケケ！！！！

コリヤアイツノ声力。

……ケケツ、ホイジャ後チヨツト、氣張ツテミツカ。
来タラ隼人ニ丸投ゲスリヤーイイシ。

「ナンデダ？　ンナモン俺ノ為ダ。　テメエニ騒ガレット、イロイロ
メンドクセーンダヨ」

「ケケケツ、
テメエ二俺八殺セネーヨ」

[illegible]

「ケヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤアアアアアッ！！ ショー………
タイムダ」

両手ヲ掲ゲ、縦横無尽ニ動カス『狂人』。

ソノ延長線上ガガン弾ケテ爆ゼテイク。

「シナトロクセー腕ノ動キジャ、コノ俺ハ捉エランネエゼ？」

シカシ……ケケケツ、ナンカ楽シクナツテ来タゼ。

シカシヨ。

「ああうあああああああああああああああああ
うああああああうううううううううううううう
あああああああああああああああああああああつ
つ！！！！？」

普段『神』ミテ一ニ信奉シテル隼人ニマデ躊躇イナクめす突キ立テル
ルタア……何ガアンダ？

アノ雄がきトコイツニヨ。

マ、俺ハ霜降り肉ガ食エレバドーデモイイケド。

ぶっちゃけ油断してた。
油断というか慢心？
どんな状態になってんのかわかんねえが、俺は大丈夫だろつつつてさ。

「いやはや……スゲーじゃん、鈴音ってばさ」

「感心しとる場合か、この脳無しが。」

貴様はとりあえず、サククリ食い込んだメスを全部取り出してから口を開け」

へいへいって。

つ……と、コレで十本目か。

かなりの量、突き立てられてたんだわな。

「ぴぎっ」

さんきゅな、スラぼう。

メスを抜いたところから『ホイミ』で癒す。

『DQシリーズ』でも一、二を争う有名呪文だよな。

傷もみるみる塞がってくしさ……毎度毎度、お世話になってますわ。

俺らがいんのはエヴァの『別荘』の中。

偶に、遊びに来るようなところなんだがよ、げんじつーかんとはべつじげんに在るらしいわ。

だからいくらここで暴れようとも、外には影響が出ないんだと。

ホント便利な限りだねえ。

……まあスラぼうの『グランドクロス』を受けて、一時期壊れてたんだがな。

とにかく今は目の前のコイツをどうにかしねえとよ。

折角エヴァにも協力してもらったんだし。

来年になれば、毎日顔合わすであろう人物と毎回こんな事になってたら……そりゃ拙過ぎるぜ。

鈴音はどうやら落ち着いてっつーか……小声で何か呟いてるみてーだ。

……とにかくだな、鈴音は俺の生徒で、俺の舎弟。

何とかこの状況からは引きずりださねーとき。

いろいろ俺の面倒事も増えるしなあ。

まあその辺は後で考えとしても、やっぱり年頃の女の子が狂ってばつかじゃつまんねえだろうよ。

狂気は……出来るかどうかは別として。

俺が発散させてやるとしてもだ、放課後くらいまでは孕んだまま飲み込まれず、テメエを保たせられるようになってもらわねーとな。

って『テメエ』が『狂った状態』なんだっけか？

……ま、いつか、どっちでもさ。

どっちがどっちでも『超鈴音は超鈴音』だしよ。

それよかどーゆー状況なんだろうね？

エヴァは思考中みてーだわさ。

「殺シテ来テヤローカ？」

「阿保、舎弟殺すバカがどこにいた」

「ケケツ、ツマンネーノ」

「ぴぴぴぎ」

「……ケケケケケ」

ゼロは危ねえ発言。

……現実的に、俺も殴って正氣に戻すくれーしか対策が考えようがねえんだが……。

これまでの経験上で会ったヤツらはみんながみんな、そんなんでコミュニケーションとってたかな。

ぶん殴って戻るんならそーするのに、てか今も行く気満々なのに。エヴァに『マツタ』を掛けられてるんだわさ。

俺なんざよりずーっと博識なエヴァの方が、解決案とかイイの出ししてくれるんじゃない？

てことでちつと様子見中だな。

まあ明らかに鈴音は不安定っぽいし、のんびり構えてる訳にも……いかなーって事だがよう。

「……隠しタ？隠されたの力？」

ぶつ放して来ちゃうわけ？こっちに向けて！！

「『魔法』が……使えるだー！？やはりおかしい！有り得んぞ！！

最初にこの女を見た時に私が受けた印象は、タカミチと同じだったはずだ！！」

「火の精霊 27柱 集い来たりて 敵を射て”」

「『魔力』を『魔法』として放つには歪過ぎる『魔力経路』！！

だというのに何故！！？」

「魔法の射手 サギタ・マギカ 連弾・火の27矢”」

「貴様は『魔法』が使えるというのだ！！！？？」

俺らに向けて迫る火の矢は27本。

それらをスラぼうが弾き、ゼロが斬り裂き、絡操が撃ち落とす。

「オルアツ！」

俺はエヴァ直撃コースの一本に拳を当てて叩き落とした。

つつつううつ、あつちーなあオイ！！

「ラスト テイル マイ・マジックスキル マギステル 火の精霊 27柱 集い来たりて 敵を射て”」

鈴音は更に詠唱を重ねる。

てかさつきエヴァは何が言いたかったんだ？

「隼人、コイツはおかしい！！『魔法』が使えている！！」

「イヤ、そりゃ見ればわかるんだが……てか『イオ』だって使えんじゃねーの。」

だったら『魔法』は使えるだろ？」

「ええい！そう言う問題じゃないんだっ！！」

イヤ、意味わかんねーんすけど……。

「順を追って説明してやる！

誰だろうが普通の人間ならば、鍛えれば『魔法』は扱う事が出来る、そこに技量の大小は有るとしてもな！！」

「クヒュフフフフフツ……”魔法の射手 サギタ・マギカ 連弾・火の54矢 セリエス イグニス”
！！」

向かって来る火の矢はさつきよりも多く。

目の前に着弾する魔法の矢。

スラぼうが、ゼロが空を駆けて叩き落としてら。

「だが時には存在する！何らかの障害により魔法を使う事が出来ない人間がな！

それは単純に『魔力』を持っていなかったり、タカミチのように詠唱しても『魔力』により精霊をかき集められなかったりと理由は様々であるが……そこら辺はどうでもイイ。

大切なのは目の前の女はその類いだという事のみだ……！」

「……けどさ、鈴音は使えんじゃねーか」

目の前でガンガン火の矢がこつち来てるし。
明らかにコイツは『魔法』だろ？

「イイか、少し黙って聞いてろ。」

そんな『魔法』を使えない人間を使えるようにするにはとりあえず二つの方法が存在する。

一つはその根底、『使えない』人間の存在自体を『使える』別の存在に書きかえる事だ。

コレは『邪法』の一つに数えられ、お前の『魔物の肉』による『魔物化』もそう。

普通は酷く面倒な儀式を行い介す必要があるんだが……お前のそれは必要無い、故に異常なんだよ。

ただ食べるだけでその過程を行う事が出来るから厄介極まりない」

何かそー言われると傷付くんだが……。

まあ聞くと、それがホントだとすれば『魔物の肉』はやっぱかなり危ねーもんみてえだわ。

ほいほい誰かに使った、なんてこたあねえが……気を付けるに越したことはねえや。

「やっぱ勘違いじゃねーの、エヴァのさ。」

昔から『魔法』は使えたんじゃないのか？」

「そうか……そう言う事かつー！」

何言ってるの、いきなり？

「先の言葉だが……違わんさ、私はこの女と同じような状態の間を、昔幾人も見た事がある。」

それを見間違えるなどという事、有り得はせん。

その人間たちは総じて後天的に、人工的に『魔法』を使えるようになっていた」

……つまり鈴音は今『魔法』を使えてっけど、そいつは『ナニカ』から影響を受けたためだっってことかねえ。

昔は出来なかったけど、何かして出来るようになった的な？

んなもんどっちゃでもイイんだがなあ。

まほーを使える使えないとか、俺にや関係ねーし。

ってかエヴァよ、何故にそんなに俺を睨む訳？

「……この女と同じ状態になっていたのは、概して幼い子供か若い人間ばかりだった。

『魔法』を使えることのできる人間に、どこからともなく引き取られてきた存在が、今のこの女と同じような状態であった」

もはや狙いなんざ定まって無かった。

虚空に向けて無茶苦茶に、ただ我武者羅に『魔法』をぶつ放す。

何がここまでコイツを追いつめてんだ？

てつきり俺自身、原因は俺だと思つてて、すっかり俺の後ろを付いて来てくれるつつたんだから、解決したもんだと思つてた。けどそうじゃねーみてえた。

そうだけど、そうじゃねえ。

俺だけじゃなくって、俺よりもっと深く鋭いもんが、鈴音の中に入り込んでるような。

そんな気がするんだわ。

「『魔法』を手っ取り早く使えるようにするにも、『魔法』を使えない人間をさせるようにするにも……そこには一つの方法がある。

古来より綿々と受け継がれてきた、正式で、正統で、本式で、名

実ともに、理になつた、正道たる方法がな。

表と裏、聖と邪、光と闇、太陽と月、陽と陰……そして、男と女

んでエヴァの話を聞きながら、なんとなーくだが予想は付いた。
だからさ、そんな俺はよ……。

「……超鈴音は……恐らく幼少期より数年間、『魔法使い』である
一人、或いは複数の男から犯されているという事だよ」

頭の中で、デッカい『ナニカ』がぶっ千切れる音を聞いた気がした
んだわさ。

二十七匹目 思ってたよりも根っこが深い事はしばしば（後書き）

房中術とか、精気とか、仮契約もキスするからそうですね。

人と人との性的なつながりは、魔法にとって深いかかわりがあるみたいです。

後、セクストウムが可愛すぎて生きるのがツライ。

彼女を絡ませるべく、少々今後のシナリオを修正予定です。

そしてネギ、頼むから君のハーレムに入れないで下さい。

二十八回目 みんな自分の中には何かがいる（前書き）

自分の拙い筆で読者様方を不快な気分になさせてしまった事をここに深くお詫びします。

そして少しずつ、超自身を物語に馴染ませていこうと筆を取る次第であります。

よろしければこれからも鋭いご指摘、よろしくお願いいたします。

二十八匹目 みんな自分の中には何かがいる

物心ついた頃から、かわるがわる、代わる代わる、カワルガワル。

頭がイイらしい。

忘れる事なんてなかた。

初めては伯父デ、その次も伯父デ、その次も伯父デ、その次は父だ
た。

『魔力』は有るらしい、沢山、タクサン、たくさん。

でも外に『魔法』としては出せないらしい。

エリートの家系、偉大なる名を受け継ぐはずなの二。

火星に残された希望であり罪な私ハ。

知識としては知ていタ。

私に適応されるとは思てみなかタ。

父も叔父もそうで、母も伯母もそうだタ。

そんな父と母は兄妹だタ。

火星に散らばる種は一ヶ所に集められタ。

不毛な大地より、青く輝く土地へと帰るためニ。

何年、何十年と続けられてイル。

私たちは希望であり罪だタ。

その内何も無くなタ。

享受するだけの日々。

『魔法』の訓練を受け、『精』を受け続けるだけの日々。

元々私には何もなかタ。

偶然だタ。

けど運命だタ。

資料室、過去を記した書物。

私はそこに『魔王』を見夕。

『魔王』は『英雄』だ夕。

『魔王』は『人』だ夕。

『魔王』は『人外』だ夕。

『魔王』は『男』だ夕。

『魔王』は『教師』だ夕。

『魔王』は『幸福』だ夕。

『魔王』は『不幸』だ夕。

『魔王』は『夢』だ夕。

『魔王』は『悪夢』だ夕。

『魔王』は『願い』だ夕。

『魔王』は『希望』だ夕。

『魔王』は『絶望』だ夕。

書物の内二、映像の奥底二、私は初めて私を見夕。

私は『魔王』に『幸福』を見夕。

私は『魔王』に『夢』を見夕。

私は『魔王』に『希望』を見夕。

私は『魔王』に『私』を見夕。

私はその日二、私が私として生まれ夕。

『魔王』は私の『神』とな夕。

私の日々に色が付い夕。

『魔王』は『炎』だ夕。

私には『炎』の適性があ夕。

私と『魔王』に繋がりを感じタ。

私は『魔王』に『幸福』を貰タ。

『魔王』は実在しタ。

会いに行きたいと思タ。

いつか私を見て欲しいと思タ。

私は『魔王』に『夢』を貰タ。

『魔王』は多くを従えていタ。

人も魔も過去も経歴も何も関係ナク。

喰われ続けた私も受け入れてくれるかもしれないと思タ。

私は『魔王』に『希望』を貰タ。

『魔王』の前では感情があタ。

『魔王』の前では感覚があタ。

『魔王』の前では『幸福』を覚えタ。

『魔王』の前では『夢』を見れタ。

『魔王』の前では『希望』を感じられタ。

『魔王』の前では私は『人』だタ。

『魔王』の前でだケ、私は『兵器』ではなかタ。

私は『魔王』に『私』を貰タ。

だからたとえどのような事が起ころうとモ、私は誓タ。

必ず向かうト、必ず会うつト、必ず捧げるト。

『根源』は構わない、会えば殺すだけだカラ。

だからその日は喜んだ。

また『魔王』との繋がりが増える気がして。

m w : あえ h ばえ w じゃお r を喚び出すの二。

私の中には『幸福』と『夢』と『希望』しかなかった。

私の中には『魔王』と『私』しかいなかった。

その日からそこは私だけになた。

炭の上デ、灰の上デ、塵の上デ。

やがて私は過去へ向かた。

理論だけは頭にあた。

資料も頭に残していた。

材料も手に入るようになた。

タイムマシンを作るのに三年の月日が過ぎタ。

そして会タ。

そして捧げタ。

資金と技術は用意シタ。

取り繕い生み出した自分で以ッテ。

『幸福』と『夢』と『希望』を全て叶えてくれた『魔王』の為ニ。

だから私は過去を変えル。

『魔法』を世界に知らしめ『本物の英雄』が受け入れられる世界を作ル。

誰もが自分として生きていられる世界ヲ。

ありふれた悲劇の無い世界ヲ。

『魔王』が処刑されたという不正と歪みと不均衡だらけの過去を消し飛ばしてみセル。

なのに私の中には何かがいる。

私の中には『魔王』と『私』と『ナニカ』がいる。

私ハ、一体……どこを見ればイイのダロウ？

最近酷ク、不安になってくる。

古来より『魔』と『性』の関係は極めて近い。

性器は『魔力』や『気』を溜めるのに重要な器官でもあるし、なればそれを繋ぎ合わせる性交は言うに及ばず。

『魔女』も本来は人ならざる者と交わり、その力の一部を受け継いだ者の事である。

『房中術』も有名だろう。

人が持つ、三大欲求の一つ。

人が人として生きるために、それは極めて重要なモノだ。

『食』も『眠』も『性』も。

コレが人という存在の基本でもあるのだからな。

今じゃ倫理的な問題やらで、双方合意の上でしかそのような手法を取らない場合がほとんどだ。

だが昔は違った。

奴隷制度があった時代、魔法使いにとって幼い子供は手ゴマであり、イイ捌け口だった。

今もメガロセンブリアでは奴隷制度があるらしいが……どうだろうな？

『難民を守るため』など大義名分を掲げているが、昔を知る私からしてみれば下種な考えしか浮かばん。

……まあ私は悪の魔法使い。

そのような奴隷がどうなろうとも、微塵の感慨も浮かばないんだがな。

重要なのは目の前の女がその状態であるという事。

そして目の前の女が何かしらの手段により隼人を知り、犯されコマとして扱われる以外先の無かった未来に、『幸福』や『夢』や『希

望』を持てたという事だ。

私がナギに出会った時のように、私が隼人に出会った時のように。

『狂った』のはコイツの心が弱かったと言うよりも、コイツが隼人を知ってしまったからだろうさ。

日常が日常ではないとわかった。

薄汚れていない光り輝く場所があると知った。

自分は人らしく生きられるかもしれないと願ってしまった。

普通を知り、未来を見つけ、希望を抱いてしまった。

そして現状とそのギャップ、そのあまりの違いに耐え切れなくなり意識を飛ばしてしまったのだろうよ。

それを知った時、目の前の女は私のように強くなかった。

それをわかった時、目の前の女は私のように前を見ていなかった。

それを願ったとき、目の前の女は私のように自分を知らなかった。

目の前の女は私だ。

そうになったかもしれない私の姿だ。

「見くびってんじゃないよ、なあ鈴音」

だがそれがどうした？

私は強く、貴様は弱い。

私は立ち、貴様は伏せる。

私は進み、貴様は躓いた。

私は捻じ伏せた！私は突き進んだ！！私は蹴散らした！！！

「高々ガキ一人見ただけで崩れるほどにテメエの中の俺はちっぽけなのか……？」

私も貴様もその身に何かを飼っている。

私は『吸血鬼』を、貴様は底知れぬ『ナニカ』を。

ならば飼い馴らしてみせろ！！

捻じ伏せる！突き進め！！蹴散らせ！！！！

「ふっざけてんじゃないやねえコルアツ！！来いや鈴音！！」

テメエの中に何がいののか、何があつたのか……ンなもん俺にや

関係ねえんだよ！！

だがテメエは俺の後付いて来るんじゃないのかッ！！」

見せてみる！

貴様の中の『獣』を！！

這い上がれ、そこから。

踏みしめ行け、自らの足で。

「テメエが誰かに犯されていてようがそれがどうした！！？

大事なのはテメエが何をしたいくて何処を見ているかだろうが！！
」

貴様の見つけた貴様は本当の貴様ではない。

貴様の逃避により、貴様自身が作り出した偽りの貴様だ。

だったら捨て去れ！！

殻を剥ぎ取れ！！

偽り無き本物の自分を、『超鈴音』が『超鈴音』の本物の心で憧れた男に見せてやれ！！！！

「テメエの中に何がしようとも……テメエに何があるうとも……追いつけねえほど！見上げきれねえほど！！デケエ背中ってヤツを見

せてやんよオオオツツ！！！！」

刹那、辺りを漂っていたヤツの『魔力』はヤツの体に戻り、赤く、熱く、燃え上がっていく。

そして数十年ぶりに、首筋が焦がされるような感覚を覚えた。

私は無意識のうちに、持てる『魔力』のすべてを持ち出し目の前の女と私たちの間に障壁を張っていた。
スラばうも、チャチャゼロも、茶々丸も同じく。

ただまともに『氣』を扱えない隼人を除き、私たちは本能的に『防御』と言う手段を取った。

瞬間、『光の球』のようなものが障壁にぶち当たり、それを燃やし始めていたさ。

「ふんぐるい むぐるうなふ くとうぐあ ふおまるはうとん
があ・ぐあ なふるたぐん いあ！ くとうぐあ！」

はねーんだよ」……は？

「話すなら頭同士が常識だろうが、出せや」

……待て、待て、待て……ちょっと待とうか隼人。

「無理なのか？

そか……なら俺が引きずり出す」

「ちゃっ……チャチャゼロ！スラぼう！！全力防御だッ！！

茶々丸！お前は電源を落とせ！！！」

「ぴぎぎいっ！」

「ケーーーーッケケケケケケケケケ！」

「イエス、マスター」

「確か……」ふんぐるい むぐるうなふ くとうぐあ ふおまるは
うと んがぁ・ぐあ なふるたぐん いあ！ くとうぐあ！ ”……
こねーな。

” ふんぐるい むぐるうなふ くとうぐあ ふおまるはうと ん
がぁ・ぐあ なふるたぐん いあ！ くとうぐあ！”

” ふんぐるい むぐるうなふ くとうぐあ ふおまるはうと ん

があ・ぐあ　なふるたぐん　いあ！　くとうぐあ！”

……本来ならば『フォーマルハウト』が地平線上にある時に先の呪文を三度唱える事によってこの神の力を地上に召喚できるらしい。

だがここは私の『別荘』の中。

一種の『異世界』でもあり、無論地平線上にそんなものは無い。

だが恐らく『魔物使い』としてのスキルからか。

そうではないと説明が付かんからな。

隼人は因果も常識も捻じ曲げ、『クトウグア』を召喚した。

二十八匹目 みんな自分の中には何かがいる（後書き）

ご指摘ご批判、ガンガンお願いします。

心は結構強い方だと思っていますので。

二十九匹目 踏み出すための活力になるもんがあったりする（前書き）

とりあえずひと山越えました。

なんとかあと二つばかり、越えて行きたいと思います。

二十九匹目 踏み出すための活力になるもんがあったりする

前つじゴアg時srmdvぺぬあf：・絵jを栄rじゃwじえsw
 ゲrq：@Ejwジャs：Ejhウイ@オjkア；mnふえウイ尾
 h儀絵kウエちえをい@wvbmns38409t24尾jw亜；
 目rjqhfe@2quissjf@0w43uijeogjmw@
 a3pi209giwoapioeieq2aa会おうjウエイk
 w@3位kf0-4kg4@3jr532尾jふあ：lf。、vm。
 zbvwper272^329@絵wpk：ろperf@意t43^k
 g：s「lrた@そt3-い0kgs：dあs3p^5尾l4gl
 p4@khg43位hkgp@skr3409864位尾jfs、
 で：wkg4移住ぺwkrq@「3オー2位t3位krft「あ
 ぺk、@3「wtgkp汚懸3位kg「スケ「@3地@「34位k
 tgf4位ktg-29-0ルjウエ利gh羽smd：「lwq3
 4イー0地4絵@kふえ：絵wk54378p@pkえlfjs下
 wkg@w「イオ53-4位gy341@fkウErjp@：k2
 qjsw「亜じゃ@絵じゃじえ@jが@うえ5つい9034つg3
 p2くおかたとえ：「zさ「あうえあ：jふあ「ああ応じ：@wq
 つj@亜ウエう4具jklsmgts：tyウiy「qpウikr
 さmtrfp234位家路輪尾家hjrウiphjl：絵gvんわ：
 獲g不意tyh路意dねrhウij過疎ウイrウエイ尾bmz；x：
 bnsル2093kウEjkkg：3尾4位5kl；f、絵40j6
 6438g09絵rj5l；3：hjs8うdq23kpf下k「
 3509位wg3w4lrj32里歩いいwk3rふあ3@「94
 於@p家snv氏得rwbgb4絵btb32rw3位r3kt：
 32q「亜w¥2r背jf320うつtfさmghウE@5位83@
 k：輪うつf382yhfhjkさf2湯tr361vさksjjr4
 @3tgjk背r歩t0-4位gじえrg@4位3gjk：巢h0
 34j号@うつ4gwj34t@438tjkくう得rf23t87湯

ふい得h j g@4 9 0 5 8 g wじえhぐえうt 3 4位@9 『2位r
うg jウエj gふうr@2 3位尾p地3 2王g 2くおうj g t 3 2
4いt rふじやs w h y 3え2 q.ぴ3う2 q 9 0 t

隼人が口を開いた後、莫大な情報が頭の中を駆け巡っていった。
常人ならば一瞬で『狂人』か『廃人』になってしまおうであろう程の
情報が。

超鈴音が従える光球など兇戯だと明確に思わせる『巨大な炎』の塊。
ソレが目の前に現れていた。

絶えず動き、流動的に姿を変えていく。

時に人で、時に鳥で、時に獅子で、時に鬼で、時に獣で、時に魚で、
時に竜。

ソレをなんと表現すればよいのかわからない。

だが私なぞ、目の前のソレにとって路傍の石にも劣る存在であるこ
とは嫌でも思い知らされた。

押しつぶされそうになるほどの威圧感、『神』などという表現は間
違いであると確信させる禍々しさ。

頭のとっぺんから足の先まで、髪の毛の一本から血の一滴に至るま
で、全てを目の前の存在の手に握られているかのような、そんな感
覚。

『最強種』、ハイ・デイルイトウォーカー『真祖の吸血鬼』。

そんなモノの名が聞いて呆れる、人間たちの勝手に作った基準であると脳髓に塗りたくられる。

圧倒的能力差、圧倒的戦力差、圧倒的存在差。

私が出たと全盛期の力を持っていたとしても、傷一つ付けることはできないであろう程の。

不動であり絶対的な差。

それが私と目の前の邪神との間にはあった。

恐く怖い。

私はそれで埋め尽くされた。

私は目の前の存在に恐怖を抱いている。

鎮座する炎が私に僅かでも触れたならば、私はどうなってしまうのだろうか？

私は『吸血鬼』、つまりは『不老不死』であるはずだ。

されどそれは目の前の存在には何ら関係がない。

不死だろうと不死で無かろうと、人だろうと人で無かろうと、魔法使いだろうと魔法使いで無かろうと、強かろうと弱かろうと、それは障害になどなりはしない。

同じように、紙切れの如く吹き飛ばされていくだろう。

ある程度年月を重ね、それまでのトラウマを握りつぶしてから、教会の騎士団に会おうとも恐れを抱いたことはなかった。強大な力を持つ戦士や魔法使いにあった時も、ナギやラカンのような『バグキヤラ』どもにあった時も。今のように恐怖が私を埋め尽くす事などは有り得なかった。

人にあまり興味を示さない相手らしいがもしこちらに意識が向けば、機嫌を逆撫ですれば。

それだけで魂も、塵すら残さず燃やし尽くされるに違いない。思うだけで、気が気ではない。

だからわたさ……テメエがボスカ？何してくれてんだ、あアッ！？」

「って何やつとるか貴様はああっ！??」

「だーってろ、エヴァ。」

今俺はコイツと喋ってんだ」

喋る……しゃべる……シャベルだとおおっ！！？

「テメエ、鈴音の中にいんだろ？」

……知らねえだ？けど実際にたじゃねーの。

そか、興味ねえか……ま、俺はソレもどうでも構わねえさ」

傍から見れば独り言のようにも思えるが……喋って、いるのか……？

イヤイヤイヤ待て！待て！！待てえいつ！！！！

……『魔物使い』のスキルなどという言葉で片付ける気か！？

確かに触手系統の魔物など口の無い、本来言葉を解さない存在とも対話をしていたが……。

だが相手は『旧支配者』だぞ！

高々触手系の下等魔族とは比べ物にならないはずなんだぞ！

たとえそのスキルを持っていようと自分の身に余る存在と対等に立ち合う事など不可能なはずだ！！

「ん……そうだな、悪いわ。

鈴音の中に入ってるのは周りのヤツらっぱいわ。

イヤイヤ、マジ悪かった、格がちげーや」

なのになんでコイツは……隼人は目の前の邪神相手に昔のような傲慢不遜な態度がとれる！！

『クトウグア』だぞ！

『生ける炎』だぞ！！

対立する『ナイアルラトホテ ップ』の住処である『ンガイの森』を焼き払ったこともあるようなバケモノだぞ！！

今だって絶えず私の頭の中を犯すように、気を狂わさんばかりの声が、情報が流れ込んで来ているのだぞ！！

腐っても真祖の身体による影響で、私で何とか私が私を保っているような存在だ！！

だが隼人！！貴様はただの人間だろうが！！

『氣』も『魔力』もまともに扱えないような貴様が何故自分を保っている！！

何故恐怖せずに目の前の存在と対立出来る！！

私を知っているから！？

んな訳はない！

だったら今こうやって赤子のように惨めったらしく体と心を恐怖で縛られずとも構わないはずだ！！

この炎の邪神に匹敵する存在など今まで目にした事は……目にした事は……匹敵する存在……匹敵するような存在……。

「……ぴぎ？」

「貴様かあああああつ！！？」

貴様か！貴様なのか！？貴様だと言えええええええええつ！！
「！」

「ウルセーゾ御主人、喚クナヤ」

「うぐあああああああつ！！！」

……ハア、ハア、ハア……叫んだら少し落ち着いたか。

たっ、確かにスラぼうは規格外だ。

『グランドクロス』に『ベホマ』、それと『極大殲滅魔法』に匹敵するような『最下級呪文』。

コレだけみても異常で異様だ。

本当かどうかは知らんが『神』や『魔王』や『破壊神』などと呼ばれる存在と肩を並べて戦い、そんなふざけた存在よりも強いと隼人は言っていたがな。

強いは強いがさすがに信じられんし、眉唾ものだと思っていた。

「大した用じゃねえし何のこたあねえんだが……クトウグアつつたか？」

テメエ自身、テメエ本体で俺と契約してくんねえか。

……理由？

んなの俺の為、俺の意地の為だよバツキャロー。

鈴音の為なんざ薄っぺらな理由じゃねーよ」

だが……もしそうだとしたら、スラぼうの本来の力がこの邪神よりも上ならば……。

「無論対価はやる、テメエ呼び出す度にさ。

それと……そうそれ、さっきから殆ど言いつぱなしの『ないあるらとほてっぷ』。

そいつと近えやつがいたら俺と一緒に喧嘩してやるわ」

というよりも、本当にホントでスラばうはどんな存在よりも強かったとしたら。

「興奮してんねえ……それ以外興味ねえってか？」

ツマンネーヤツだわな……ってマジで！

俺に興味持ってくれたの！？」

隼人、貴様という男は……。

「ハハハッ……んじゃま、仲良くしようぜって事でよろしく」

最後に隼人がそう告げると、炎の塊は隼人の体を貫き、辺りを漂う光の球と共に姿を消した。

チリチリと熱さが辺りに残る。

ブワッと、冷汗が吹き出るのを感じたさ。

くすんだ紅の髪をかく隼人。

そしてプルプルと、腕をヤツに向けて伸ばす超鈴音に向けて足を運んだ。

……やがて先程までの澱んだ光の消えた瞳を持つ女に。

弱々しくもしつかりと大地を踏みしめていた女を。
ギョツと力強く寄りかかった隼人の服を握りしめた女へ。

その女の乱れた黒髪に、やさしく隼人は手を置いた。

「よう鈴音、俺の背中……デカかったか？」

「淫行教師ダナ」

「ぴーぎっ」

「うつせバーカ、イイんだよチキシヨウめ」

エヴァの『別荘』で二日目。

ま、んな事すんのは夏以来だな。

エヴァも外出れりやイイんだが、『呪い』とかで無理だしよ。
でだ、せつかくなら海水浴もどきだけでもって事で夏は遊びに来るんだわ。

つつつても去年からなんだが……。

花火にバーベキュー、ビーチバレーにスイカ割り。
波は微妙だがサーフィンも偶にするか？

そんな感じでさ、遊んでるわけよ。

エヴァは『カナヅチ』だから、水に入りたがらねーんだがさ。
まあ雰囲気だけで持って事で。

他は楽しんでるみてえだし、浮き輪片手に海？に入る事もあるにはあるしさ。

「珍しく黄昏ているな……月見か、変態教師？」

……テメエもかよ、エヴァ。

「クククツ、そう拗ねた顔をするな。」

私は別に間違った行動ではないと思うぞ」

「……ハア、じゃあ言ってんじゃねーよタコ」

「それよりもどうだったさ、隼人。」

アイツと別れてから……六年ぶりの女の身体は？」

「正直足りねーさ。」

って事でどうよ、俺とベッドインなんぞ」

「ハツ……寝言は寝て言うもんだ」

違えねーな。

結局あの後、離れたがらなかった鈴音を運んで何発か。

バレたらどうしょ……ってとこだが、後悔は特にしてねえよ。

とりあえずこれっきりだって約束したしさ。

それとネギやアーニヤ見ても暴れねえようにって誓わせたし。

今度はもう、大丈夫だと思うね。

何でもエヴァの話だと俺が契約した『クトウグア』ってヤツと、超が契約してた『炎の精霊』は頭と手下、親分と子分の関係にあるんだと。

しかも死をも厭わないほど、かなり忠誠の深い感じに。

……後だ、もう鈴音が暴走したって受け止めれる男になったつもりだわ。

心構えがちよっと変わったってどこかね？

俺ももう……大丈夫だ。

んな訳で鈴音には俺との約束の証として、プレゼントを一つばかりしてさ。

『中国人はお団子頭』っつーイメージがあつたかな、それ用の髪飾りを一組ばかり。

エヴァが作ってくれたんよ、俺と鈴音の髪の毛使って。

鈴音がもしさつきみてえに、つまり『炎の精霊』呼び出すような事態になつたら、俺が貰った『ミサンガ』切れるんだとよ。

仕組みは聞いたがさーっぱりわからん。

ま、聞く気もねかつたんだがよ。

一応……保険って事だな。

俺はいらねえつつつたのに、『持ってる』なんざエヴァに強い視線で言われちゃ仕方ねえさ。

「ケケケ、ンナクダラネー事ヨリ隼人、テメエ少シハ強クナッタノ力？」

「おお、んじやま『クトウグア』でも呼んだ「止めんかアホたれどもがッ!!」……ケチクセーな」

「マツタクダゼ」

「ぴぐぐぎ」

「殴って、やろつか、貴様ら……?」

ハイハイっと。

わーってるよ、心配してくれてるって事は。
これでも付き合い長えかな。

……ふう。

「……隼人」

「ああ、何さ？」

「わかっていると思うが、アイツの所には行くなよ」

「イヤ、何の事かさばー」「何年の付き合いだと思っている、誤魔化すな」……「やっぱ拙いかな？」

「最悪だな」

うはーそこまで言うかね？
サクッと来ちまったよ。

「アイツとお前は終わっているんだ。」

もう六年も前に、貴様の一方的な我が儘で」

「だかよ、脳裏に過っただけでさ、行くも何度も言わせるなよ、誤魔化すな」……」

「解れ、お前が偶にそういう顔をしていた時……不良でも無く、チームの頭でも無く、あの二人の兄貴でも無く……ただの香坂隼人だった時……何をしていたか、覚えているだろう？」

……付き合い長いってさ、こーゆーところはちょっとだよなあ。

「決まってアイツの淹れたコーヒーを飲んでいたな……大して好きでも無いくせに」

「ケケケ、ソイヤーソウダッタナ」

「びぎびぎぢ」

「……アイツは数少ない、私が認めた数少ない人間だった。

気立てのイイ、芯の強さを持ったイイ女だった。

てつきりお前と一緒になるもんだと思っていたが……私は何度でも言っぞ」

「わーってる、『お前が人生でどのような道を選ぼうと私は正しいだの間違っているだの、そのような事は言わん。

だがハッキリと言ってやる、アイツと別れた事だけは間違いだ』……だろ」

「わかっているなら構わん……だがな、わかっているならもうアイツに干渉しようとするな。

お前の妹分二人も、チームの者も、新田も……そして私も、あのシスターを諦めて、とつとつヨリを戻せと何度も言ったな？

なのにお前は、貴様は……バカだからな」

ほっとけバーロー。

「一年、二年……イヤ三年ならまだ構わん。

だがもう六年だ。

長いぞ……人である貴様らにとっての六年は、途方もなく長い」

「……会って、一杯コーヒー入れてもらって来るだけだ。

それにエヴァがそこまで言う女だぜ？

もう彼氏やら……旦那がいるにきまつてんだろ」

「私は知らん……知らんぞ、どうなつても」

大丈夫だ、コッチもな。

わーってる、女々しいって事くれえは、俺らしくねえって事は。

けどこれが最後だ。

六年ぶりの、これが最後。

あと一杯、アイツのコーヒーで俺は死ぬまでしっかり立ってられる、真っ直ぐ立ってられる。

「大丈夫だ……俺とアイツなら大丈夫だ」

「マスター、今日のお飲み物は紅茶にされますか？それとも抹茶にされますか？」

「……コーヒーを入れる」

「コーヒー……ですか？」

「ああ、アイツから暑中見舞いに貰ったヤツがあるだろう」

「いつもは一月ほど経ったら捨てると言われておりましたが……」

「捨てたのか？」

「イエ……そちらゴミとして捨てる方に纏めておりましたので、取って参ります」

隼人と超鈴音が『別荘』から出た次の日。

やはり『クトウグア』の力には耐えられなかったようで、どうも調子が悪い。

結局二日間いたはずなのだから、外では二時間経っているのが正しいはずだ。

『別荘』での一日は、外での一時間と同じ時間の流れであるからな。

だが外に出たら八時間ほど経っていた。
明らかに故障だ。

まあ壊れなかっただけ、喜ぶべきなのだろうがな。

隼人のヤツは行く気だな。

ツチ、止めると言っているというのに、再三の警告を無視しおつてからに……。

「……遅すぎるんだよ、お前は」

座った椅子、その目の前の机の上。
置かれた一通の、私宛の便箋。

「結婚式……招待状か」

クククツ、アイツも律義なモンだ。

私が呪いのせいで麻帆良から外に出れぬと知っているくせに……。

嫌味……ではないな。

私ももう、アイツとは六年会っていない。

だがそんな性格に変わっているとは思えんさ。

「隼人は、知らなかったようだな。」

アイツが妹分二人に渡さんとは考えにくいが……ならばあの二人も言っていないという事か」

結婚……結婚か。

「……『謹啓 早秋の候

皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます

このたび私達ふたりは結婚することになりました

新しい人生を皆様に見守られて出発できれば幸いです

つきましては感謝の気持ちを込めて身内と近しい友人だけのささやかな披露宴を催したいと存じます

お忙しいところ誠に恐縮ではございますがぜひご出席くださいますようお願い申し上げます

敬具『……」

場所は……『ひなた荘』か。

次の日曜日、大安吉日、時間は午前十一時。

「新郎『瀬田記康』……新婦……『浦島はるか』……」

「マスター、入りました」

「ああ」

「コーヒー……か。」

「……ニガイ」

二十九匹目 踏み出すための活力になるもんがあったりする（後書き）

隼人と『クトウグア』の契約はさっぱりと。

アレと真っ向から向かいあえたのは『魔物使い』のスキルとスラぼうの存在のマッチによるものですね。

これで少しは、隼人強化出来たかなあ………なんか違う気もしますが。

そして元カノの名前登場。

ラブひなで一番好きでした。

三十匹目 タイミング悪いヤツはどこにでもいる（前書き）

評価点が四桁に達してた…… ホントありがとうございます。
嬉しくなったので予定を繰り上げて投下。
とりあえず三日連続は何とか大丈夫かな？

三十匹目 タイミング悪いヤツはどこにでもいる

揺れる揺れる、ゆらゆら、ユラユラ。

揺らめく揺らめく、ふらふら、フラフラ。

たゆたうたゆたう、ゆさゆさ、ユサユサ。

何と無くわかる、ここは現実じゃないと。
恐らく夢、夢の中。

人も来ないであろう店の中で、ぼんやり時間がたつのを待っていたんだがな。
寝ていたのか、いつの間に。

自覚はないが疲れていたという事だ。
私も、もう歳か。
三十路一歩手前だからな。

……いよいよ本当に、結婚が近づいて。
年甲斐も無くはしゃいだ訳ではないんだが……。
プランを練り、招待状を出し、引き出物を選び。
妙に瀬田のやつはノリがよかった。
元気なモンで、付き合いきれなかったのかね？

アイツのほうか年上だというに。

夢の中、ここは夢の中。

あたたく、抜け出したい雰囲気私にくれる。

言うなれば……そうだな、好きな男に抱きしめられているような。

大きく、力強く、少しばかりタバコ臭い、そんな感覚。

結婚……結婚か。

思えば、私自身の人生を思い返せば瀬田と結婚することになるとは予想外だったさ。

てつきり私は……止めておこう。

昔を掘り返しても、どうしようもない。

ム……これが俗に言うマリッジブルーというヤツか。

世間的に、多分ちよっとズレた私までかかるとは。

知っていたつもりだが、やはり私も女ということだな。

まあ今更言ってもどうしようもなく、どうしようと思う訳ではないがな。

私はこの日曜日、瀬田と結婚する。

週明けには『浦島はるか』は消え去り、『瀬田はるか』が生まれて

いるはずだ。

変えないし、変えるつもりも予定も無い。

春が来て、夏が来て、秋が来て、冬が来て、また春が来る。

季節は移ろい、年月は流れ、時間はどんどん先に進む。

過去の思い出はただ思い出として、今は今で今にはならない。

昔を否定する気は無い。

だがもう、昔を取り戻そうと踏み出すつもりは無い。

少女は恋する乙女になった。

だがもう、恋する乙女は大人になった。

大人は現実を見るもんだ。

夢に溺れる事は、もう私には出来やしない。

結婚は嫌々でやる訳ではない。

瀬田のことはちゃんと好きだ、男として。

どうも気恥ずかしく口に出して言葉になんかできないが。

瀬田に『恋』していない。

だが『愛』してはいる。

でなければ結婚なんか出来るはずが無い。

だが……心に深く残った思い出は消えない。

過去の私が今の私を作っている。

だから……そろそろ現れる。

結婚が決まって、結婚式が近づくにつれてよく昔の夢を見る。

年月を重ねれば昔懐かしくなるとはよく言うが、例に漏れずそんな気分だ。

取り戻せず、取り戻す気も無い青春時代。

私が『浦島はるか』として一生分の『恋』をした時代。

青いタマネギと緑髪の人形を頭に乗つけた私の『青春』は、少女を連れて私の前に現れた。

「やあ、奇遇だね」

「……どちらさん？」

「酷いなあ……僕は君の事をよく知っているというのに、君は僕のことをまるで知らないみたいじゃないか」

「イヤイヤ、俺はアンタに面識ねえんだが」

「そうか……一応こうやって会ったのは初めてじゃないんだが。」

覚えてくれていないかい？」

「ハア……あゝ人違いじゃねーんで？」

「うゝん、印象が薄いつてのはやっぱりちょっとショックかな」

……なんだ、コイツ？

いきなし話かけて来たと思えば俺の事知ってるような口ぶりだしよ。

昔潰した不良とかかね。

だったら顔覚えられてたって不思議じゃねえが。

ま、そりゃねーな。

俺に向かつてくるような雰囲気たあ違うし。

んなことどーでもイイ。

とっとと仕事終わらせて、せっかくバイク飛ばして日向町までやって来たんだぜ。

ホントは明後日、土曜にしようかと思ったんだが……そしたら長居しちまいそうだし。

そんな理由で明日も却下。

コーヒー一杯飲んで帰る予定だしさ。

もう辺りだって暗い。

空いてるかどうかもわかんねえような喫茶店に行くんだ。

祈って急ぐしか俺に選択肢はねえってのに。

「多分……気のせいだわ。」

って事で俺はこれで、行くところあるかな」

ヒラヒラ後ろのメガネ君に手を振って、目的地に向かってとさ。

道は覚えてる。

迷うとかはありえねえな。

さーて、じゃあ和「『和風茶房 日向』に行く気だろう?」……
あア?

「……なんだ、テメエは……?」

振り返ってメガネ君の方を見てみりゃ、さっきまで顔に張り付いてた飄々とした笑顔は消えてやがった。

ジッと、射殺すように俺を見る。

覚悟決めたヤツが俺に殴りかかってくる時みてえに。
鋭く重く、俺を貫く。

「一応会った事はあるんだけどね、もう一度挨拶しておくよ。

僕の名前は『瀬田記康』……よろしくね、香坂隼人くん」

私は中学から高校卒業までの六年間を麻帆良学園都市で過ごしている。

そんな私はあまり褒められた生徒ではなかった。

煙草は吸う、授業はサボる、教師に反抗的な態度を取る。
言っなれば『不良生徒』という訳だな。

当時はいろいろと私にも合って。

家の事や、人間関係や、自分の人生について、年相応に悩んでいた。

周囲からの視線、沸き上がる想い。

ムカムカと胸の内に溜まり、チクチクと私を刺す塊。

そんな塊の対処方法を、私は知らなかった。

『自分はここにいるんだ』という事を示したかった。

『自分は人とは違うんだ』と思い込みたかった。

故の行動、故の言動。

そんな私はどんどんと人の輪から孤立していった。

素っ気ない態度を取り、よろしくない事をする私に進んで関わろう
とする物好きはいなかったのさ。

元はと言えば実家での居場所をなくしていた私。

そこからどうにか抜け出そうとして、だがプライドが邪魔をして素
直になれず、良好な関係ではない『西』と『東』の関係をとり持つ
という大義名分を引つ提げ麻帆良にやって来た私。

単純に居場所が欲しくて、藁をも縋るような思いで義母からの話に飛びついた私。

だがその先でも、私に居場所はなかった。

麻帆良学園から惨めったらしく逃げだして、義母の経営する『ひなた旅館』に行くという選択肢はあった。

…… あったにはあったのだが、やはりそこでも私のちっぽけなプライドが邪魔をした。

みつともなく見えて、私はそんな事出来やしなかった。

ガキだったのさ、どうしようもないほどに。

学校では腫れもの扱いされて、寮に帰っても疎ましがられるだけで、それでも私はそこから『逃げ出す』なんて事は出来なかった。

朝起きて、一人で食事を取って、屋上で煙草を吸って、偶に先生の鼻をあかして溜飲を下げて、寮に帰って、部屋に閉じこもって、音楽を聞きながら眠る。

空虚でつまらない、何ら楽しくもない時間。

流れるのを待つだけの、早く流れてくれと祈るだけの時間。

ずっと、ずっと、続いていた。

そんな時間は、唐突に終わりを続けた。

それは私が高校二年生になった時のことだった。
いつものように時間を潰す公園。

ぶかぶかと煙を吹かせる私の前に、アイツは現れた。

男子の制服はブレザーである麻帆良学園、そこでは有り得ないはず
の黒の長ラン。

平べったいカバンを手に持った目付きの悪い男子生徒。

紅い髪を気合の入ったリーゼントに纏め、二歳くらいの幼女を肩車
したアイツは私を目の前にこうぶちまけた。

『よっしゃ、テメエ俺の女になれ』

正直に言おう、意味がわからなかった。

そりゃそうだ。

いきなり現れた名前も知らない、明らかに年下の男の子。

それが在ろうことか『自分の女になれ』とのたまったんだからな。

『……寝言は寝て言うんだな、クソガキ』

『寝言じゃねーし、本気だし。』

この『香坂隼人』さんをバカにすんなや』

『ばか、ばか、すんなやー』

『んな事よりテメエ……ホイッと』

そう言って私の啜えていた煙草を取り上げた。

『オイッ!』

『吸ってんじゃねえ、煙草なんぞ。』

テメエにはいずれ俺のガキを生んでもらうつてのにさ!』

『てのに……さっ!』

自信満々に言い放つ目の前の少年が、私にはやはり意味がわからなかった。

『あゝ微妙な感じだな……ま、イイか』

『さくらこも!さくらこも!』

『バーカ、十年はえーよ』

『うゝっ』

仲良さげな目の前の少年幼女、二人の事は一応見知っていた。

この公園でいつものように遊んでいる二人。

兄妹かと思っていたが、どうやらそうではないらしいな。

いつもランドセルを片手に砂場の辺りに陣取っていたはずだ。

『中学生か』

『今日からな』

『……お前、今日は入学式じゃないのか？』

『サボった』

『ぼったくぼったく』

淀みなく言い切る少年、『香坂隼人』。

そんな態度はどうも……何と言ったらイイか。

フム、そうだな……少しだけだが、羨ましかった。

『そう、か……まあそれはイイが、煙草は返せ。』

ガキの吸うもんじゃない』

『返さねえし。』

俺らの子供が変になったら嫌だろ？』

『待て、だからなんで私がお前の子供を産む事になっている！？』

『お前、俺の女になるから。』

てかそれより名前は名前？』

中学生の男子はもつと初心なモノじゃないのか？
女子と話すのが妙に気恥かしい頃なはずだ。

それが付き合えたの、あまつさえ子供を産めたの。
しかもだ！私の名前すら知らないというのに……！！

『……もうイイ、それはやる』

『ちよつちよつ、どこ行くんだ？』

『お前には関係ないだろう』

『えゝ彼氏彼女なのにいゝ』

『はやとにー、かれしーて、なに？』

『ああ、彼氏つてのはな……アレだ、パパの進化前だな』

『しんかつー！！』

『そそ、進化』

『すごーっー！！』

頭の上の幼女と一緒になって笑うガキ。

やっぱりなんとなく、その姿は羨ましかった。

と言っても私にガキの仲間に入れてもらっような気はなく、置き去

りにするように私は歩いていった。
出来るだけ早く、その場を後に出来るように。

『……何で付いて来る』

『だってホレ、もつと喋りてえし。』

人間関係は会話から始まるんだぜ』

『だじえゝい』

『悪いが私にはガキと喋ってる時間は無いんだよ』

『ウソ付け、いつも一人で暇そうにしてるくせによ』

フツと、頭が熱くなった気がした。

何となしにそのガキは私に向けてそう言ったんだと思う。

特に考えはなく、特に想いはなく、ただ私がいつもソウだったから。

わかっていた、その時もまた。

けれどその事實は、その真実は、私にとって不快でしかない事だった。

耐えられなかった、耐えきれなかった。

いつだって私の気持ちはパンパンに膨れ上がっていた。

やるせなさ、歯がゆさと、口惜しさと。

私は今の自分が嫌いで、動こうとしない自分が嫌いで。

無論嫌いな自分を作っているのは私だという事も知っていた、わかっていた。

でもそれでも、人からそうやって指摘されるのはそれ以上に不快だった。

『あゝ あゝ あああああああつ！！！はゝやゝとにゝ いいいいいつつ！！！！』

『つつう……じゃねえ。』

大丈夫かあ桜子、痛くねえ痛くねえ、強い子だもんなあ』

気付けば私の目の前で、私より少しだけ背の低かった紅い髪の少年は、土埃に汚れて鼻から赤い血を垂らしていた。

公園中に響き渡らんばかりの幼子の鳴き声。

ギリッと握られた私の拳には、殴った鼻の感触がほんのり残る。

その事に気付いて、居た堪れなくなつて。

私が私を取り戻した時、私は寮のベッドの上にいた。

「——ッ!？」

指に煙草を挟んだまま眠ってたのか……。

時間も大して経っていないようだしな。

隼人との出会い……というか初めて言葉を交わした時の事だ。
思い返す通り、第一印象はよくない。

アイツの言葉は意味がわからなかったし、私はアイツを殴った訳だし。

……まあそんな事があったからこそ、次につながっていった訳では

あるが。

「やつほーはるか、もしかして寝てたかな？」

「瀬田……か、何しに来た」

「あはははっ、相変わらず素っ気ない態度だね。

でもそんなところも可愛いよ」

なっ！？

……ハア、コイツは臆面もなくこう言う事を言うからどうしようもない。

この癖はどうにかなくせんといかん。

結婚して、それでもこんな態度だったら手がつけれん。

発掘先の国々に恋人や妻がいるなんぞ、不快な事この上ないからな。

「……で、何の用だ」

「えっ、僕が来るのは嫌だった？」

そうじゃないんだがな……。

「冗談だよ、冗談……っと」

「ああ、悪い」

私が新しい煙草を箱から出す。

それを見て、瀬田は懷から取り出した銀色のジッポに火を灯した。

瀬田の手の中にある火に煙草の先端を近づけてやる。

私は髪が火で焦げないように垂れる横髪を手で抑えて。

ここ一、二年行われている、流れるような自然な動作だった。

「オイオイ、煙草はいけねえぜ。」

生まれてくる子供が変になったら嫌だろ？」

耳に飛び込んで来た音。

ビクツと体が、心が、魂が震えた気がする。

忘れた事のない、忘れる事のないだろう声。

低く力強く、けれどあたたかくてやさしい声。

六年前に、聞いたつきりの声。

「ウィッス、おひさ」

象徴だったリーゼントは無くなって、真紅のそれは少しくすんで、短い髪はオールバックで纏められていた。

荒々しく子供っぽかった雰囲気もグッと大人っぽくなって。

それでも昔の面影をしっかりと残し、朱い瞳はそのままに苛烈な光を宿している。

青いタマネギと緑髪の人形を頭に乗つけた私の『青春』は、未来の旦那に連れられて私の前に再び現れた。

三十匹目 タイミング悪いヤツはどこにでもいる（後書き）

恋愛話、書いてしまいました。

正直上手くいくかどうか激しく微妙ですので、鋭いご指摘ご批判よろしく願います。

尚これを書くにあたって年齢や設定などを少々変更しました。

『浦島はるか』はネギま！の原作開始時、本来ならば33歳ですが、隼人との年齢差などを加味して29歳としました。

三十一 匹目 スローリーなのはよろしくねえ（前書き）

色々ご意見、ありがとうございます。

ですがやっぱり、今後の展開的にここは入れておきたかったので、恋愛話を書いていくことと相成りました。

よろしければこれからも、お付き合いいただけると嬉しく思います。

三十一匹目 スローリーなのはよろしくねえ

……今思えば、転生してたからかね。

俺にゃ『女と仲良くするのはカツコ悪い』なんて感覚は無かった。

それよりも何でかわかんねえが、好きな相手には出来るだけ早く思いを伝えなきゃいけないって思ってた。

先手必勝、他の男と仲良くなる前に、『自分はアンタに惚れてるんだ』って事を示しきらなきゃなんねえって思ってた。

そりゃもちろん、それで振られるかもしれねえ。

がよ、振られる前から振られてるよか数十倍マシだろ？

本気で、何でこんな考えに至ったのかわからねーんだがさ。

それでもこの考えは間違っちゃいねえと思えたんだよ。

相手は決まってた、最初っから決まってた。

いつも桜子を遊んでやってる公園にいる、ベンチに腰掛けて煙草吸ってる女子高生。

ぼんやりカメラのレンズみてえな眼で辺りを見回してみりゃ、煙草を口に煙を吐きだしてハアッと溜め息。

んでまた辺りを見渡して、吐きだして、溜め息。

第一印象は『つまんねえヤツ』。

なーにが楽しいのか知らねえが、ずっとずっと、俺の知る限りそんな感じだった。

無愛想に無表情に無感動に、時間が流れていくのを必死に待ってる感じ。

そんな女の第二印象。

偶々桜子が走って行って、その女の所まで辿り着いてよ。手に持った泥ダング渡した時の事だったな。

困ったようにだがはつきりと、ソイツは笑った。

テレビの中の芸能人なんざ目じゃなかったね。

年上だがよ、んなもん俺にや関係ねえ。

不良っぽかったがさ、だったら俺も同じ立場に立ちやイんだ。

元レディースの総長だった母ちゃんに聞いて不良スタイル作ってみて。

なけなしの金でワックスと裁縫道具を買って。

親父の昔着てた、押入れの奥の方に仕舞われてた学ラン引っ張り出して、丈を合わせて。

俺は想ったんだわ。

つまんねーんだったらつまるようになしてやりやイってさ。

一瞬だけ見せた笑顔、そいつが一番近くで見たくなった。

付き合って何をするかなんて知らなかった。

けどなんとなく、付き合ったら結婚するもんだと思った訳よ。
で、結婚したら子供を産むもんだとさ。

だから俺は中学生になって、不良になったつもりで、同じ土俵に立
てたって思えて。

綺麗な口説き文句なんざ思いつかなかった。

けどこの想いだけはどうしても伝えなかった。

だから俺は思いの丈をぶちまけた訳だ。

まあ袖にされて、ぶん殴られたんだけどな。

けどよ、俺はんな事気にするようになっちゃけな男じゃないんさ。

次の日またその公園に行ったんだが、その女はいなかった。

次の日も、次の日も、次の日も、いなかったね。

そのまま待つっつー選択肢もあったんだが、やっぱり俺には出来なかった。

だから行った、制服から学校はわかってた。

リーゼント気合込めてセットして、母ちゃんが使ってた原付借りて、桜子背負って突っ込んでった……『聖ウルスラ』に。

言えば……そこがガンちゃんと初めての出会いなんだよな。確か教師一年目の、情熱溢れたガンちゃんとの。

中坊の俺が学校のあるような時間、幼女背負って原付で校内に乗り付けてくる。

んな事態をガンちゃんは見逃せなかったみたいで。

『キミ！こんな時間にいったい何をしてると思っている！！』

『俺が何をしようと俺の勝手だろうが。』

んな事よりこの学校一の美人出せ、俺の女だからな』

『いつ、いきなりやって来てキミは何をッ……！！』

『だーってろタラコ、カスに用はねえ』

『た~~~~こ~~~~』

『言っに事欠いて誰がタラコだッッ！！』

『……鏡見たことねえのか？』

「寄んな、ばっちいんじゃ」

『ばっちい、ばっちい』

『貴様アツ!!』

若いだけあってやっぱ血気盛んだった訳だ。
俺の胸倉グイッとつかみ上げてきたんだよ。

……まあ桜子連れてるの見たらわかる訳で、すぐに他の教師がやってきて引き剥がされたんだがな。

けどよ、俺はそんな時決めてたんだ。

俺が惚れた女は不良だと思ってた。

不良つつたら喧嘩で、喧嘩ならやっぱ強いヤツがカッコいいもんだとき。

俺が強けりゃ、俺が誰よりも強い不良だったら、あの女も俺の方向いてくれるんじゃないかねえかってよ。

ガキらしい単純な思考だ。

だから俺は、引き剥がした教師に桜子渡して、こっち睨み付けてくるガンちゃんのを足をおもつくその力で蹴り飛ばしてやったんだわ。

突然の痛みに崩れるガンちゃん。

高さの落ちた顔面目掛けて拳をめり込ませる。

後は大乱闘だ。

桜子抱えた教師にだけは手を出さねーよう気をつけて、殴る蹴る頭突く、殴る蹴る頭突くってひたすら繰り返してた。

運がイイのか悪いのか、親父や母ちゃん相手に喧嘩はやってた。まあいっつも負けてたんだが……だから勝手はなんとなくわかってさ。

結局『魔法先生』のガンちゃんには勝てずボコボコにされたんだが、それでもよかった。

教師に説教されて、帰って一発だけ母ちゃんに殴られて。

次の日初めて中学に行ってみりゃ、俺に向けられてんのは畏怖と敵意の視線だ。

けどさ、それでもよかったんだよ。

その日から喧嘩相手にゃ困らなかった。

俺を生意気だとか、調子付いてるとか、んな風に言う不良どもと喧嘩出来た。

毎回毎回勝てたわけじゃねえが、それでも負けた相手にゃ勝つまで報復に行った。

殴って殴られて、蹴って蹴られて、投げて投げられて。勝って負けて、負けて勝って。

勝つ度に俺はあの女に近づいてる気がして嬉しかった。

『探したぜ、姉ちゃん』

『なっ！おまつ！？』

『オイオイ逃げんなや。』

つと、タバコはイカンぜい』

口に啜えてたのをヒョイツと取り上げて、煙をスツと吸い込んでみる。

そんな時はまだ苦くて、煙たくって、どうも口に合わなかったんだが……それでもやっぱ不良はタバコは吸うもんだと思って俺も頑張った訳だよ。

『……何しに来た……』

『前も言ったる……俺の女になってくれ』

喧嘩相手と、目の前の女を探しながら麻帆良を闊歩すんのが俺の日常になってたんだが……前者はすぐに見つかっても、後者は中々見つからなくてさ。

結局会ったのは五月に入ってから、初めて会ったときから一月くらい経ってからだな。

『私にそんな理由はない』

『デメエに無くて俺にはある。』

第一関わり合ったこともねえ相手でさ、んな理由なんざ作れねえじゃん』

『そんな暇りあるだろ、いつも一人なんだし』 ツツ！-！-！

そう言ったらまた殴られた。

なぐんか殴られてばっかだよなあ……。

ま、ちつと俺の場数踏んだから、今回のでは倒れなかったんだがな。

『……俺は何でテメエが怒るのかわかんねえ』

『関係……無いだろう』

『あるね、大いにある……俺はテメエに惚れた、俺はテメエが好きだ。』

だからテメエにもっと笑って欲しい』

『知るか！そんなものお前の勝手だろう！！』

『そうだぜ、俺の勝手だ！！』

だがその何が悪い！！

俺が俺の我が儘でテメエに笑って欲しくって、テメエに泣いて欲しくないって思って何が悪い！！』

『……押し付けるな、お前の気持ちを』

『そう言うんなら押しつけねえよ。』

けどアレだ、偶に会ってくれ。

俺にだって愚痴ぐらい聞けるし、サンドバッグ代わりに殴られて

やる事くらい出来る……スツとして気持ちイイだろ、人殴んのは』

何でもよかった、何だって構わなかった。

目の前の女と少しでも繋がりが出るんなら、その過程とか理由とか、その辺はどーだってよかった。

『名前、教えてくれ』

『……………』

『名前だよ名前、ちなみに俺は『香坂隼人』な』

だからそんな時はマジに嬉しかった。

『……………』 浦島はるか『』

『ん、よっしゃ、覚えてぜ』

それから週に一度くれえは見つかって話が出来た。

桜子がいたら間取り持ってくれてさ、ちょっとだけ雰囲気は軽くなった。

だからいつだって俺は桜子を連れてった。

俺がボロボロだったらちよつとだけだが、心配した風な顔を見せてくれた。

だから俺はもつと喧嘩に励んだ。

時間はどんどん流れてった。

いつの間にやらツルむ不良友達も出来て、麻帆良本校男子中等部はシメて、煙草にだってもう慣れきっちゃった頃。

はるかに会って一年くらい経って、はるかがもう煙草を俺の前じゃ吸わなくなった頃。

俺とはるかが一緒にいるのは普通な事になってたんだわ。

六年ぶりのはるかはやっぱり美人なままだった。

大人の魅力ってヤツ？

そいつが加わって、さらに魅力的になってやがったわ。

「煙草はいけねえ、母ちゃんになるかもしれないだろ？」

ヒョイツと煙草を取り上げて、昔みてえに口に……っと思ったがストップだ。

啞えちやいけねえよなあ、やつぱ。

瀬田？ってヤツも俺の腕掴もうと手を伸ばしてるし。

「…………吸います？」

「うん、じゃあ貰おうかな」

手渡して、口に啞えて紫煙を吐きだす。

んな事してる男が、何でもはるかの旦那らしい。

結婚式をこの日曜に控えた、旦那さんらしい。

「…………コーヒー、飲むか？」

「オウ、その為に来た訳だしな。

　　つとそつだ、やるよ…………確か『キリマンジャロ』好きだったよな
　　？」

「ああ、好き『だった』…………がな、もう好きじゃないさ」

あ、そ。

せっかく買つて来たんだがなあ。

五千円くらいする、高いヤツだったのによ。

「んゝ昔の知り合いだったかな。

　　どうも、僕は邪魔そうだから奥にいるよ」

「俺はすぐに帰るんで気にしなくてもいいんですけど」

「イヤイヤ、二人仲良く……ね」

煙草で盛り上がった灰皿に、口のそれを押しつけて奥に消えてった。
その際に……。

「ちょっんむう!？」

はるかにキスすんのを忘れずに。

……別に、んな事しなくたって俺はどうもしねーよ。
ま、俺が言ったって説得力皆無だろうけどさ。

「イヤ……その、あつと……なんだ、わたし結婚するんだってな、
おめでと」……ああ、ありがと」

「教えてくれても良かったのによ。」

そだ、桜子と裕奈には連絡してつか？」

「ん、月に二度くらいは来てくれるからな」

「政利とかは？」

「送った、エヴァにもな。」

来てくれるかどうかはわからんが」

「来てくれるさ……っと、エヴァは無理だろうが。」

ちなみに俺は？」

「……少し、待て」

湯気を立てるコーヒーカップと共に、渡されたのは一つの便箋。
俺宛の、はるかの結婚式の招待状。

成程、一応作ってるが送って無かった訳ね。

……視線を感じる。

わーってるよ、わーってる。

コーヒーをちょいっと口に含んで、招待状を手にとって。
俺はそいつをビリッと引き裂いてやったんだわ。

「コレで俺は行けねえな、招待状が無いんじゃ出入り禁止だろ。」

って、破んのは縁起悪かったかね？」

「構わんさ、そんなこと気にするような性質じゃない」

「そいつはイイこった。」

あと煙草の残りも出しとけよ」

「やるよ」

「さんきゅ……マツチも、貰つとくぜ」

席の脇にある『和風茶房 日向』って書かれたマツチ箱を手に取り
懐に。

まだ何本が残ってる『マルボロ』の箱も一緒にな。

何となくだが、無言になる。

そこに昔あつた心地良い雰囲気は無くって、はるかは俺の方をジッと
と見ている。

ちつと居たたまれねえ様な、居心地の悪い空気。

瞳の中にある光。

恐れと怯えと、戸惑いと躊躇いと……ほんの少しの喜びと。

やる事は解る。

本来やる事は俺にだって解る。

六年の、長く密度の濃い付き合いだ。

昔と一緒になら、乱暴にでも抱きよせてやればよかったんだが……そ
れは俺の役目じゃねえ訳だわさ。

とつくの昔に吐き捨てて、踏みにじった俺の権利。

役目を継ぐ人は出て来てるみてえだし、それだけでもこつやって来て良かったと思えるわ。

「……隼人」

「何さ」

「後悔していないと思うならば踏み止まるな。」

足踏みしてるだけじゃ……何も始まらない、何も変わらないんだ」

「……ハッ！」

へへっ……やっぱ来てよかったわ。

「舐めんなよ、俺は『香坂隼人』さんだぜ!？」

「そつか……ならイイ」

「オウよ。」

「……んじゃま、俺もはるかに一言だけ」

まだ熱いが、一気に飲み干す。

最近熱々の飲み物やら風呂やらでも余裕になって来てるからな。契約したせいかな？

それよりも、だ。

……今日来たのは俺の我が儘。

目の前の女に迷惑かけてるだろうし、嫌な思いさせてんだろつよ。

でもそれでも、だからこそ……俺はこうやって伝えなきゃなんねーんだと思うわ。

「ま、幸せになれや」

「言われなくても……そうするさ」

扉を出てみりや真つ暗闇。

少しだけ肌寒くなりつつある時期だ。

夜になると……やっぱ冷えるな。

少しだけ身体を屈めて、サクサク歩き出す。

懐の、貰った煙草の箱の中から一本取り出して、フィルター口に啜えてみて。

上下上下、右左右左、んでの一回転……久々にやるが出来るもんだ

ねえ。

マッチ箱から一本マッチを取り出して、火を付ける。
久々の煙を肺に溜める。

少しだけ昔の懐かしい味を堪能して。

黒に浮かぶ一つの赤。

なんつーか……ロマンチック？

詩的センスが欲しいとこだぜ。

「ぴぎ……ぎ」

「どしたよ？」

「……俺ハヨ、アノ女ガ一番デメエニ合ッテルト思ウゼ」

「んなの知ってら……ずっと、ずっと前から」

口から吐き出す紫煙は虚空に消えて、誰もそれを受け止めてはくれない……ってとこかね？

三十一 匹目 スローリーなのはよろしくねえ（後書き）

恋愛話終了まであと三話くらいですかね。

シリーズ的に言えば、原作開始前で一番尺を取ってる気がする……。

三十二匹目 昔を思い出さない人間はいない（前書き）

もう怒涛の更新でとっと終わらせる事に決めました。

感想返しは区切りを付けてからにしようかと思えます。

三十二匹目 昔を思い出さない人間はいない

居場所が欲しかった。

だが自分から居場所を探そうと動く気にはなれなかった。

変わりたかった。

だが自分から変わろうと動く気にはなれなかった。

誰かに私を見て欲しかった。

だが自分から私を見てもらおうと動く気にはなれなかった。

動いても、また場所は無くなる気がして。

動いても、ちつとも変われない気がして。

動いても、結局誰も見てくれなくなる気がして。

私の生家、『浦島家』は京都では有名な旧家だ。

『表』では江戸時代より続く和菓子の名店として。

『裏』では古来より日の国に蔓延る『魔』を打ち滅ぼす『退魔』の家系として。

日本の裏世界、つまり『魔法』やら『妖怪』やらの存在するファンタジー世界に於いて名の知れた家柄。

そこの一族の現当主、長男の第一子として私は生まれた。

『浦島家』は旧家にしては珍しく『女性』が権限を持つ血筋だった。よって父に家を継ぐ権利はなく、父の妹である『浦島陽子』が祖母である当主『浦島ひなた』の跡を継ぐ運びとなるはずだった。

だがそれは、思わぬ事態により覆された。

当主候補であつた『浦島陽子』の死亡。

退魔中、一瞬の気の緩みによって起きた不幸な事故だったそうだ。

次代当主候補を喪つた『浦島家』。

彼女は結婚し子供もいたのだが、その子は女兒ではなく男児。その幼子に『浦島家』を背負う資格は無かった。

……そんな事態に現当主は息子の子供である私を養子とし、『次代当主』とするべく教育を始めた。

養子となつたのは私が8歳になった時。

当初は『分家』から『宗家』に入れた事が、何となく偉い立場に立てた気がして嬉しかった。

祖母……イヤ、義母である『浦島ひなた』のように、強い力を持ち、自由奔放に生きていけると喜んだものだった。

だが……そんな期待は三年と経たず押し折れていた。

『浦島家』には一族のみが使用する、とある武術が存在する。それが『浦島流柔術』。

当主となる者は必ず『浦島流柔術』をその身に修め、尚且つ『一族最強』で成らねばならなかった。

期待の目線はすぐに失われた。

持て囃されていた時間はすぐに終わった。

居場所はあるという間に消え去ってしまった。

その理由はたった一つ、シンプルな答えで解決する。

『私には才能が無かった』。

義母が三日で出来たという腕の動きに、二週間かかった。

義母が一週間で出来たという足捌きに、一月かかった。

義母が一月で出来たという体捌きに、半年かかった。

義母が一年で出来たという技は、いまだ完成には至らない。

努力をしなかった訳じゃない。

震える足に活を入れて、痛む傷を必死に耐えて、挫けまいと心を強く持つて。

私に義母の腕がかかり、私がふわりと宙を舞い、私の背中が悲鳴を上げるまで。

動きの一つ、力の一つ、技術の一つ、視線の一つ、心の一つ。

何一つたりとも見逃さまいと、見落とさまいと。

皮膚を裂き、筋肉を潰し、骨を折り。
それでも私は、私の為に用意されていたはずの椅子に座るべく、必死に足掻いた。

父母の元に逃げ帰るという選択肢もあった。

だがやはり、ちっばけなプライドが邪魔をして出来やしなかった。

他の事は出来た。

勉強は一度聞くだけで完璧に、『浦島流柔術』を教わるまでの肉体制りとして励んでいた『八極拳』は中々の才能らしい。

……可笑しい、おかしい、オカシイ。

当時はそんな考えがずっと頭の中を埋め尽くし、そんな考えが堂々巡りしていた。

だってそうではないか、私は『出来る子』のはずではないのか？
なんだって人より上手くやった、なんだって人より早くやった、なんだって人より褒められていた。

なのに何だ、この様は？

『次代当主候補』として迎えられ、期待を持って据えられて。
けれどまともに扱えない、修めるべきモノを、掌握すべきモノを。

学ぶ時間が違う？

そんな事は無い、誰に限らず本格的に『浦島流柔術』を学ぶのはその子が八つの誕生日を迎えてからだ。

そこに例外など存在しない、それが歴史、それが積み上げて来た年月。

義母も、義姉も、これまでの当主も、これからの当主も。

なのに出ない。

『次代当主』のはずの私が、何でも人より出来た私が……人より出来なかった。

まるで私は『出来ない子』だ。

だから……帰れなかった、父母の元に。

帰って合わす顔なんか、持ち合わせていなかった。

『宗家』に私の居場所は無かった。

それでも私は居場所を作ろうと必死だった。

それでも……私に居場所は作れなかった。

『目は口ほどにものを言う』。

ジリジリと突き刺さる、他の『分家』からの視線。

同年代や年上年下、さまざまな女が『宗家』にやって来ては尻尾を巻いて逃げかえる。

逃げ帰りたいかった、でもやっぱり逃げ帰れなかった。

そして私が11歳になった頃、私は無用の長物となった。
酷く遠い血筋、一応『浦島家』に名を連ねるとある家。
両親を喪った娘は、義母が引き取った齡3歳の幼子は、類稀なる才能を持っていた。

一年の月日が流れ、私が中学に上がる頃には、私なんぞ抜き去っていた。

私の居場所は、完全に消え去った。

どんな理由かわからないが、どんな理由でも構わなかった。
義母から持ちかけられた『麻帆良に行かないか』という話に、私はすぐさま飛び付いた。

だが麻帆良でも、居場所は出来なかった。

私の体に刷り込まれた想いが邪魔をして、私が持っていたプライドが足枷となって。

私はいつも、京都にいた頃と変わらず一人だった。

だから私は…… 本当はとても嬉しかった。

最初の言葉は意味がわからなかったが、それでも私は嬉しかった。

居場所を提供してくれた、必要としてくれた、私を見てくれた。

『惚れた』と言って、『好きだ』と言って…… 私に私がここにいる
って事を実感させてくれた。

『向こうから勝手に来た』と『私は嫌がっているがしぶしぶ』とい
う免罪符を掲げて。

五つも年下の男だが、プライドが邪魔する事も無かった。

心地よかった、やさしかった、あたたかかった。

私がそこにいてイイと思えて…… 私はホントに嬉しかったんだよ。

『女になれ』と言っても隼人は私の嫌がる事をしなかった。

ただ私を喜ばせようと、笑わせようと、楽しませようと…… 自分の
知恵を使い、友達や妹分を頼り、私にありったけの想いをぶつけて
くれた。

無茶に対して心配し、無邪気な笑顔に心癒され、無垢な想いに心揺
らされた。

『私を惚れさせてみる』なんて大口叩いていたが……。
ホントを言えば多分その時にはもう、浦島はるかは『恋』に堕ちて
いた。

香坂隼人という男に、浦島はるかという女は『惚れて』いたんだ。

だがそれを本当に理解し自覚し、心の底から認めたのはその少し後の事。

隼人が『闇の福音』と友人になって、『魔物使い』というスキルを
手に入れて、『魔法生徒』になって。

青いタマネギとケタケタ笑う人形を頭に乗っけているようになった頃。

もうすぐ夏休みになろうかという時期に、私を義母が訪ねて来た時の事だ。

『ホッホッホ、そう固くならずとも良いぞい』

『フオッフオッフオッフ、コノちゃんの言う通りじゃい』

……そんな事を言っただけで無理だろう。

行きつけの喫茶店とはいえ『認識阻害魔法』を使われ、目の前には『関東魔法協会』の長と『浦島家現当主』。

こんな状況で、普段通りになんて不可能な話だ。

『……何か……用でしょうか？』

震えている……弱々しい声。

『何か用か……じゃないぞえ。』

はるか、お主は何をしておる……？』

『……………』

『答えんのかい？ならもう少し簡単に言っただろうかえ。』

お主は自ら『西』と『東』に出来た亀裂、コレを少しでも解消させるために麻帆良に行かせてくれと言ったの』

……ッッ！？

『ワシはそんな意味を含ませて麻帆良に行ってみぬか……とは言っ
ておらん。』

ただ娘の状況を知っておって、お主自身が壊れてしまいそうじゃ
ったからこそ……持ち出した提案だったのう』

『ですっ……がっ、現に『西』と『東』は………』

『そうじゃが、『浦島家』はその境をまるで気にしておらぬ、少々特異な一族であるという事も知っておるわいの？』

仮にもお主はこの『浦島ひなた』の娘なんだぞえ……？』

……当たり前だ。

『浦島家』は元々京に本家を持つ『西』の一族。
だが『東』、その総本山に等しいここ『麻帆良学園都市』の近隣に、
『ひなた旅館』というモノを代々所有している。

そんな事、そんな大それたこと、元々そんな小さな垣根をまるで気にせぬ『浦島家』だからこそできる行動。

だからこそここにいるも『西』からの文句も、『東』からの不満も、私には降りかからず、『浦島家』にも飛び火はしない。

『浦島家』は『西』と『東』に日本が分かれた時、両者を結びつけようとした『パイプ役』だ。

『西』に付かず『東』に付かず、『中立』の立場を守り通し、『中立』として奮闘した。

今では両者の会合の場には、必ず『浦島家』の者が立ち会うほどになっっている、そんな一族。

『良かったの、大義名分があつて。』

良かったの、惨めに逃げ出す、幼い姪に敗れて逃げ出す免罪符が元々あつて』

見透かされて……いる。

『……まあそれはどちらでも構わぬ……可奈子の才は鬼のソレ、ワシとて敵わぬ存在になっていくじやろう』

……可奈子、『浦島可奈子』。

歴代最高の使い手になるであろうと期待される『浦島流柔術』の正統継承者。

そして、『次代浦島家当主』。

アイツは……苦手だ。

『はるか、重要なのはソレではない、言いたい事はソレではない。

お主は啖呵を切った……このワシに、同時に隣にいるコノちゃんに』

『ワシ、気にしとらんのに』

『黙っちよれ……ともかく言つたの、お主はお主の意志で、お主自身
の想いで……』

なのに何じゃ、この有り様は！

自由にさせてやろうと思っておったが……勉学には励まぬ！友は

おらぬ！技の研磨もしておらぬ！

学校はサボリ！！豚のように喚き散らして教師に文句だけ垂れ流し！！まともに自分からこの六年近く何一つ動いておらぬ！！

……どうじゃ、何か反論があるなら聞いてやるぞえ……？』

『あ……えう……』

『どうじゃ……どうじゃあ、どうなんじゃと……聞いているんだぞええ……！！』

『わたつ、し……はっ！！』

言い返せなかった、全部事実だった。

義母が私に麻帆良に行かないかと持ちかけた時、私に『パイプ役』になれなんて一言も言わなかった。

ただ私が、みっともなく見えた私を慰めるために口に出した言葉。なのに動けなかった、動かなかった、動こうとしなかった。

自分で言ったことなのに、心の中で抑えをつけて、私をやさしく『嘘』で包んで。

いずれこうなるという事はわかっていたはずなのに。

義母は自分自身が自由奔放に生きているからか、あまり口酸っぱく物を言わない性質だ。

だが『自分の意志で決めた物事』に対して、中途半端に終わらせることを許さない性質でもあった。

だからこそ、このように鋭い視線で、数十年もの間に海千山千の人物と対等に渡り合ってきた『浦島家当主』として、私を睨み貫く。

カラカラと喉が渇く、カタカタと体が震える、ガチガチと歯が音を立てる。

隼人と出会い、見失い消し去っていたはずの『本当の自分』。

下劣で、卑怯で、情けない、目も当てられない……『ホントウノジブン』。

少し前までは、私はこんな場面を望んでいた。

こうやって剥き出しに、私を暴かれて、見下すように自分を見つめて。

そして思いっきり殴りつけて欲しかった。

甘え、どうしようもない甘えだ。

だが今は、もうそんな、こんな状況に陥るのは……嫌だった。

……しかし、間がイイの悪いのか、そんな時に限ってアイツは図々しく現れる。

『認識阻害魔法』も無視して、いつものように天に向けてリーゼントを逆立てて。

一番昔の自分を知って欲しくなくって、一番昔の自分を知って欲しかった相手。

『なあテメエら、人の女……何泣かせてんだコルアツ！！』

『オオ、香坂君かの！どうs『フォツフォツフォツ、お主がはるか……』……ヒナちゃん、ワシ寂しいんじゃないけど……』

学園長の、麻帆良最強の魔法使いがかけた魔法を突破し現れた隼人は、ドカッと目の前、私と二人を挟むテーブルの上に足を置いた。

『狸ババア……何してくれてんだ……あアツ！？』

『母娘の会話が何か問題あるかいの？』

『あるね、大いにある、すったまげるぐれえにあるわ！！』

『下種を叱る事にかの？』

瞬間繰り広げられた目の前の光景が信じられなかった。

二人はこの国の、裏世界の重鎮、トップクラスの実力者。

そんな相手について二ヶ月前にこちらに踏み込んだ、一般人となんら変わらない少年が。

『ケーーーーッケケケケケケケ！テメエ中々ヤルジャネエカ！！』

『ぴぎっ！』

『……スラばう、チャチャゼロ連れて降りてろ』

『ぴぎぴ』

『随分と……熱烈な歓迎だぞえ』

『浦島家当主』の胸倉を掴み。

『……ホッホッホッ……ヤンチャはええが香坂君、お主自分が何をしとるかわかつとるか……のう、ホントに……？』

『関東魔法協会理事』に唾を吐きかけて。

『ハッ！知るかなもんは！！』

だがなあ……テメエは俺の女を悲しませた……テメエは俺の惚れた女を見下した！！

テメエら殴るための理由なんざ……それだけで十分だ』

『……野蛮じゃの、実に短絡的で』

『ホッホッホッ、ワシはこのような子は好きじゃよ。』

まあ……仕置きは、報復は、もちろんするがの』

義母の手が隼人に触れる。

大柄な体格の隼人と比べ、酷く小さく見える義母。

それが軽く手を捻った時、隼人は地面に転がされていた。

ズンッ！と隼人を中心に、地面が陥没し始める。
上から酷い力をかけられて、押し潰さんとするように。

『デ、メエ……何してくれっ、てんだア……？』

『『重力魔法』じゃよ、上から対象を押し潰さんとする神秘の力。』

無詠唱で威力も弱いが……知っておいて損はないじゃろ、これからお主の関わる世界に』

『何じゃコノちゃん、入ったばかりかの？』

『そじゃのヒナちゃん、ちょっと前にk『どるアッ！』……スゴイのう、抜け出すとは』

薙ぎ払った脚が学園長の髭を揺らす。

機を逃さず再び『重力魔法』。

先ほどよりさらに重く、強い力が隼人を押さえつけていた。

『立つとる……ちょっと驚愕じゃわい』

『舐め、ンな……コラ、俺を誰だと思つてんだ……あア？』

『じゃあもうちょっと強くしてみるかの』

『へっ……へはっ、へへへははははははっ……ブロックぶつけられる、方があ、バッドで殴られる方が万倍痛いぜ！！』

ギシギシと、隼人の体が悲鳴を上げる。

『……お主の、何故己を傷つけてまで、はるかのために立つ』

『あア？』

『痛い思いまでして、何故にそのような女の為に立つと聞いているんだぞえ』

義母の問いかけに隼人は咆えた。

おそらく私は一生、その時の事を忘れられないと思うよ。

『簡単だ……俺の両手はようッ、はるかの……っと、後……桜子とエヴァの涙を止めるためにあるってなア！』

俺は決めたんだよッ！！

俺は俺の妹分と！俺の親友と！！俺の惚れた女を泣かせるヤツは！！

例えそいつがなんだろうとぶん殴ってやるってなアあああああッッ！！！」

私の耳は埋め尽くされた、隼人の声に。

『はるかの事を、お主は知っておるのか』

『知らねえよ、知らねえ……だがそいつの何が悪い！そのどこが悪い！！』

はるかの過去もッ！引つ張りだしやエヴァの過去もッ！！俺にや微塵も関係ねえ！！

俺は俺の胸んなかのはち切れんばかりの想いに従っただけだぜ……そいつが悪いかアアッ！！！」

私の視界は埋め尽くされた、隼人の姿に。

『俺がこの世界で俺である限りッ！俺の心がここにある限りッッ！この誓いだけは枉げてやれるかアアアアアアアアアアッッ！！！」』

私は埋め尽くされたんだ、隼人という男に。

フツと『魔法』が消えた時、隼人はドシャツと地面に倒れ伏した。駆け寄って触れた隼人は……熱くあたたかかった。

『……はるか、ワシはもうお主に何も言わん。

じゃが一つだけ誓え……今度こそ、己の思うがままに己を高めえい。

体を磨け、心を磨け、女を磨け……その男に逃げられぬような、何があるうとも必ず帰ってこさせるような、世界一のイイ女になれ……誓えるか？』

その時、いまいち何と言ったかは覚えていない。

『イイ男に惚れられて……ワシもあと五十年若けりゃのう』

『ホッホッホッ……このような若者を見守るのもまた、年寄りの楽しみじゃよ』

『言うようになったの、コノちゃん』

だがその日から『俺の女』と言われる度に、隼人の何げない顔を見る度に……。

『カッコ良かったろ、俺』

『……バカ』

バカみたいに私の心は高鳴った。

いつも一緒にいてくれた隼人、いつも私を見てくれていた隼人、いつも私を抱きしめてくれた隼人。

……ずっとずっと、一緒だと思ってた。
いい女に、頑張ってたつもりだった。

隣を見れば、寝息を立てる一人の男。
発掘で鍛えられた腕が、私の肩を抱くように回されている。

……私は布団の中、一糸纏わぬ姿で。

勿論隣の男も、私の未来の旦那も、一糸纏わぬ姿で。

辺りは暗い。

……四時過ぎ、くらいか。

まだ眠いはずだ。

フツ……ハハハッ、私の今は昔の歌のようだな。

……その時女は、どんな気持ちなんだろうな。
今の私は、どんな気持ちなんだろうな。

私は、いい女だったんだろうか。
アイツにとって、隼人にとって、惚れて良かったと思える様な女だったんだろうか。

……イカン、ダメだ。

考えるとダメになる、考えるからダメになる。
考えちゃ……ダメだ。

煙草……煙草は……。

元々止めていたのに、隼人に振られて、それでもアイツが忘れられなくて。

アイツの二オイになってた煙草をもう一度吸い始めたんだ。

一年経って、二年経って、三年経って……四年が経つ頃にはもうそれが普通になっていた。

……止めよう、煙草も。

瀬田の事は好きだ、瀬田の事は愛してる、この結婚に後悔も……もう無い。

なあ義母さん……私はいい女になれたのかな？

「珍しいな、香坂が喫煙所にいるのは」

「ども……俺も偶には吸うんすよ」

「てつきり止めたと思っていたんだが？」

「H A H A H A」

「気まずいねえ……」。

「なあんかね、やっぱね、なんかなあ。」

「火、どぞつす」

「ああ、悪いな」

「……………」

「……………」

金曜の放課後、みんな出来るだけ早く帰るかと思ってたんだがな。
まあさか新田センセがいるとは……正直吃驚だわ。

瀬流彦でも連れて、教師陣引き連れて飲みに行ってるはずだもんよ。
いつもなら今頃もう繰り出して……まあいつも俺が付いてってる
からわかる話なだけどさ。

「結婚、するそうだな」

「…………ああ、アイツっすか。」

みたいで……アリ？招待状とか来ました？」

「イヤ、私は椎名と明石に聞いた……というより愚痴られたよ。

いきなり生徒指導室にやって来て、散々にな」

「あゝそいつは申し訳ねえっす」

アイツらなあ……ハア、何してくれてんだ。

俺んところに、俺んところには来れなかったって事が。

政利や他のヤツらんところにも行つてそうだな。

ま、それはいいんだが新田センセのところにまで行くのはねえ。

「……なあ香坂、お前はなんで浦島と別れたんだ？」

なんで……何で、か。

「聞いてもらえます、俺の話」

誰にも話した事のねえ、俺の話。

何ではるかとは別れて……まあもう一人は勝手にくっ付いてきただけだから置いといて。

何でシスターシャークティを好きになったかを。

三十二匹目 昔を思い出さない人間はいない（後書き）

次で振った理由公開。

ぶっちゃけ次が書きたいがために恋愛話を盛り込みました。

三十三匹目 自分でも意味のわからない想いはあったりする（前書き）

今回短め、隼人のはるかさんと別れた理由公開です。

三十三匹目 自分でも意味のわからない想いはあったりする

学園長と狸ババアとに突っかって、それ以来はるか俺に対してなんつーか……甘えてくれるようになった？

オズオズ手を差し伸べてくれたり、肩に手を回しても怒らなかつたり、思い切って抱きしめたりなんかしても……やさしく手を添えてくれたり。

ま、一次接触を拒まなくなつたんだよ。

スゲー嬉しかった、半端ねーほどに幸せだった。

『麻帆良大に行く』つつつてたんだが、何を思ったか『東大に行くと思う』なんて言われたりもしたな。

ぶつちゃけ麻帆良からは通うんだとちと時間かかるんで、『ひなた旅館』に住む事になるらしいんだがさ。

でも、ジッと俺を見つめながら今までにない感じで持ちかけられつと文句なんざ言えなかった。

土日は会える訳だし、暇だったら遊びに行けばいい訳だし。

んなちつぽけな事を俺は気にしねえんだよ。

何よりはるかが言いだした事だしさ……俺にや止めれねーさ。

ともかく俺は楽しかった。

中三になつて政利なんかとチーム『蜿墮亞蘭弩』組んでみたりして、新しい妹分の裕奈も出来て。

『麻帆良最強』つー看板しょって、無茶も色々やったもんよ。

……まあ高一の時にとある人に惚れられて、はるかはあしらつてたみたいだがソイツが突っかかって来て面倒な事になったりもしたもんだわ。

正直なところ何度かヤツちまったんだが……それでもそこを除けば俺ははるかに惚れ込んで、仲だつてスゲー良かったと思つてる。

『女の甲斐性』って許してくれたしさ。

『破局の危機』なんて言葉を聞いた事もねえくらいに、俺らは想い合えてたんだと思う。

けど……それは唐突に出て来たんだわ。

全く予期してなかった、そうなるなんざ思つてもみなかった。

忘れもしねえ高三の初夏、シスターシャークティは俺らの前に現れた。

溜まり場にしてた麻帆良のとある一角、エヴァの家が近くつて、買い出しに行くのも結構楽な位置にあつた廃屋。

そこでワイワイ騒いでた時、薫に連れられやってきたんだわ。

『総長！なんか女が総長に会いたいわ』って言ってるんですけど……ど

うします?』

『帰らせろ、ココは女子供の来るところじゃねえ』

『隼人にー、わたしは!?!』

『わたしはわたしは! あんちゃん!!--』

『テムエらとエヴァにはるか、それと一応アイツは別だな』

『『いいい!--』』

『ケツ、軟派ヤローが』

いつもみてえに集まって、いつもみてえに楽しんで。変わらねえけど刺激的な日常を楽しんだ。

けどそいつはたった一つの出会い、たった一人の女で変わっちゃったんだよ。

『こんにちは、少々不躰でしたが入らせていただきました』

そいつを眼にした瞬間、俺に衝撃が走った。
俺はそいつを知っている……ような気がした。

『ちよっ！テメエ勝手に入って来てんじゃねえ！』

『薫……テメエ簡単なお使いも出来ねーのか？』

『政利さん！？いやっ、あの……コレ……ちやいます、すみません
っすー！』

ずっとずっと昔から知っているような、ずっとずっと昔から見続け
て来たような。

ホントに本気で、俺は俺がわからなかった。

未だ俺は、何度何度思い返してもその時なんでそう思ったかわかん
ねえ。

でもやっぱり、今でもシスターシャークティを見る度に思うんだわ。

『俺はこの女にずっと昔から惚れこんでいた』。

『俺はこの女をずっと昔から好きだった』。

『俺はこの女をずっと昔から愛していた』。

はるかへの想いに匹敵して、押し流さんばかりの想いが、俺の全身
から溢れだした。

何でかわかんねえ、本気で何でかわかんねえ。

一目惚れなんざ甘っちょろいもんじゃねえんだよ。

もつとずつと、深く濃い部分で……俺は目の前の女を想ってた。

訳が、わからねえ。

前世の影響？なんて考えた事もあるが、俺の前世に恋人はいなかったはずだ。

どーもその辺は曖昧なんだが……でもそれでもやっぱ、俺がはるかみてえに想った女はいなかったに違いない。

俺が勝手に忘れてたり……って思ったりもしたんだが、そんなモン忘れるとは思えん。

転生課のねーちゃんに記憶イジッてもらった覚えもねーし。

んな勘ぐるような事したって、今俺を埋め尽くしている想いは間違いないじゃなかったんだよ。

だからわかんなかった、だからどうしてイイかわかんなかったんだわ。

誰かに相談しようか？なんて思ったりもした。

けど、はるかを知ってるヤツらに、俺とはるかの関係を知ってるヤツらに相談なんざ出来やしねーんさ。

だから俺は……心にモヤモヤを抱えて。

『……どしたよ、んな妙な顔しちゃってさ』

『うん……なあ、隼人』

夏休み、はるかの家になつてた『和風茶房 日向』で。

『最近、仲のいい女がいるじゃないか』

『シスターシャークテイか？』

滅多に見せない、アイツが見せた。

『あんまり……仲良くしないでくれ……私はあの女が、好きじゃない』

いつもなら可愛いだけの嫉妬が、どうしても許せなかった。

気づけば俺は淹れてもらったコーヒー地面にぶちまけて。

気づけば俺はスラばうとゼロを置き去りにして。

気づけば俺は『待ってくれ』というはるかの声を無視して。

気づけば俺は始めてはるかに対して敵意剥き出しの視線を向けて。

『悪い、一人にさせてくれ』

Z?に跨って訳もわからずアクセル吹かして、かつ飛ばしてたんだ
わ。

俺ははるかに惚れてるはずだ、俺ははるかが好きはずだ、俺ははるかを愛してるはずだ。

なのに違うって、俺の奥底のモンが噴き出し暴れる。

違わねえのに違つ、おかしいのにおかしくねえ、正しいのに正しくねえ。

俺はシスターシャークティに……イヤ、俺は■ ■ちゃんに惚れてるつてさ。

俺は■ ■ちゃんに惚れてる、俺は■ ■ちゃんが好きだ、俺は■ ■ちゃんを愛してる。

……■ ■ちゃんの一つ一つがシスターシャークティと重なつてつた。

声も、仕草も、笑い方も、腕の長さも、指の細さも、眉の長さも、目の大きさも、鼻の高さも、唇の厚さも……顔立ちも……俺に見せてくれる笑顔も。

全部が全部、知らないはずのそれが知っているような気がして。

■ ■ちゃんなんて俺の記憶の中には存在しないはずなのに、なのに……。

俺は、この世界の俺は、どこか別の世界の俺のように。

俺のど真ん中には■ ■ちゃんとすべてを重ねたシスターシャークティがいたんだよ。

だから俺は……。

『やゝたゝあ ああああああつ!!』

『ねゝえちゝゃんとけゝんかしたゝあ ああああ
あああつ!!』

泣き叫ぶ妹分二人を無視して。

『こんのつ……バカ者がアアアアアアアアアツツ!!』

ぶん殴ってくれた親友を無視して。

『……………』

訴えかけてくれる悪友どもを無視して。

『イヤ……イヤや、イヤ、イヤ、イヤ……イヤやあああああ
あああああつつ!!』

縋り付くアイツを無視して。

何かが間違ってるような気はしてた。

どっかがおかしいような感じは持ってた。

俺は俺自身、狂ってたような思いは抱いてた。

けど俺は……それでも俺は……。

『本気で好きな女ができた、別れてくれ』

『……そうか』

はるかに対してそれをぶつけちゃった。

妹分二人を連れていなくなる悪友たち。

アイツを引っ張っていなくなる親友。

二人残されて……泣きもせず、喚きもせず……振り返っていないな
ってったはるかを……俺に止めることなんて出来なかった。

『ぴぎ……ぎ』

『どしたよ?』

『……俺ハヨ、アノ女ガ一番デメエニ合ッテルト思ウゼ』

『んなの知ってら……知ってんだよ……チキシヨウ』

三十三匹目 自分でも意味のわからない想いはあったりする（後書き）

転生物を読んでいて、いつも思っていたことなんです……前世での人間関係とか、思い出とか、その辺はどうなっただんでしょうか？自分の見る限りあまりその辺には触れられていない作品が多く、なのに原作知識だけはしっかり覚えている……というのが多かった気がします。

ですので今作では、そこを覆してみようと思いました。

もちろん転生課のねーちゃんに隼人は前世での思い人の記憶の一切を消されているわけですが、それでも本気に本気で惚れこんでいたから忘れていても忘れていなかった……という感じですね。

だから瓜二つ、生まれ変わりのような姿であったシスターシャークティに惚れこんでいるような気がして、そしていつしか触れ合うたびに本当の感情に入れ替わってしまったというわけです。

隼人は『惚れた女にはトコトン惚れ抜くタイプ』であります。

それは間違いなく前世ではシスターシャークティに瓜二つの『武田美和』という女性に。

そして現世では『浦島はるか』という女性に。

故の葛藤、故の問答、故の行動。

それってどうなの？みたいな事もしている隼人ですが、それは間違いでもあり間違いじゃないんだと自分は思います。

長々と後書き申し訳ありませんでした。

これからもしければ自分の拙い作品を、読んでやってください。

加えてマイページの方でアンケートをしています。

そちらにもよろしければ、ご意見を頂けるとうれしく思います。

後、惚れた理由の一部が入りきらなかったもので、次回に持ち越します。

ちなみに個人的意見ですが……人は人に『似ているだけ』で、例えばバックグラウンドがあつたとしても惚れないと自分は思いますね。次話投稿は頑張つて本日中を予定しています。

出来れば見限るのは、そこを読んでからにしていたけるとありがたいと思います。

三十四匹目 折り合いの着けられる物事ばかりじゃない（前書き）

かなり急いで仕上げましたので粗いです。
後日少しずつ修正する予定……疲れた。

三十四匹目 折り合いの着けられる物事ばかりじゃない

独白を終えた香坂の顔。

それは『わかつているのにわからない』という、なんとも形容しがたい顔をしている。

ふふふつ、若者らしく悩んでいるという事か。
若く青い悩み。

羨ましく思えてしまうのは、私が年を取ったからか。
だがこんな若者の姿を見る事も、私が教師を続ける理由の一つ。

『悩め若人、そして自分の道を見つけよ』。

いつも抱いている想い、そう在って欲しいと願う若者の姿。

それが今、目の前にある。

ならばそんな若人に私が出来る事、年長者たる私がすべきことはただ一つ。

ほんの少しだけ、目の前の若者の背を押してやることだな。

「香坂……私がお前に言える事は一つだけだ。

人はな、香坂……そんなに簡単に、これまで好きになった人間を捨て去る事など出来やしないんだ」

ピクリと、香坂の肩が動く。

「勿論、お前がシスターシャークティを好きになった理由が嘘だとは言わん。」

心の底から、身体を燃え上がらせんばかりに浦島に抱いていた想いに匹敵するくらいのこと……そんな想いが沸き出ないとは言わない。

「だがな、だがそれでも……香坂、お前の心はいつだって一人の方を向いていたじゃないか」

やはり……懐かしい思い出だ。

「私とお前が初めて会ったのは、お前が入学式をすっぽかして生徒指導室に呼ばれた時だったな。」

あの時『何故だ』と聞いた私に、お前は躊躇う事無く言ったのを覚えているか？

……『惚れた女の所に行っていた、話せてスゲー嬉しかった』と

「忘れる訳ねえじゃないっすか……あん時のデカイゲンコツも……
『逃がすなよ』って言うてくれた事も」

「……そうか。」

それからもよく学校をサボっていた……にもかかわらず、テストでそれなりの点数を取るんだからなあ。

香坂……お前は何の為に、そんな行動に出たんだ？」

「……アイツの……はるかの為っす」

そうだった、コイツの行動は全て浦島の為だった。

不良になったのは浦島に似合う男になるため、喧嘩をするのも浦島に似合う男になるため、煙草を吸っていたのも浦島に吸わせまいとするため。

バイクに乗ってウルスラに行くのも、授業をサボって練り歩くのも、学校をサボって海や山に行くのも。

学園長や浦島の義母に盾突いたのも。

全部全部、浦島の為だった。

勿論自分の為に喧嘩をしたり、チームを組んだりはしていたがな。

浦島が笑えるように、浦島を泣かせないために。

そんな事を言いながら、香坂は浦島の気を引こうと躍起になる。

それがコイツの、香坂隼人という男の行動理念だった。

無論、浦島の被害が出ないよう、浦島の嫌な事をしないよう気を付けてだったが。

「たった一言、言葉を交わす事が出来た……そんな小さなことでも、お前は嬉しそうに私に教えてくれたな。」

お前は惚れた女の為に、そこまで出来る男だろう？そこまでする男だろう？」

「そうかも……っすね」

「ならば簡単な事だ、それがお前だ……それが香坂隼人だという事だ。

お前はまだ若い……何度だって何度だって、お前の望む限りやり直せる、別の道を選ぶんだ……。

悩め香坂、そして感じる！……本当にお前が『惚れこんでいる女』は誰かとな」

チリリと煙草が燃え、ポトリと灰が堕ちる。

香坂は煙草を灰皿に押し込み、大きく一步を踏み出した。

「新田先生、俺はまだ若いっすよね？」

「ああ、お前はまだ若い」

「じゃあ無駄したって……いいっすよね？」

「……そうだな、その責任を負う覚悟が在るならば……好きにすればいいさ」

そして香坂は、もう一步、もう一步と足を踏み出した。

……人間は、わかりきっている事が、時折わからなくなったりする。
それは自分の心に様々なモノが入ってくるから。
入ってきたモノに埋もれて、それが在る事を、本当に大切だという
事を忘れてしまうからだと思はう。

だが人間は、それを簡単に忘れる事なんて出来やしない。

心の奥底、しっかりと育った樹。

自分自身で土を見、水をやり、天高く伸びるように育ててきたモノ。

自分自身の本当の想いで育てたそれを、忘れるなんて出来やしない。

そして何時か気付く。
それが本当に大切だと、それはいつだって自分の中に在るという事
を。

それに気付いた者こそが、本当の幸せを手に入れる事が出来るので
は？と、私は思ふよ。

ん？着信音か？

「はい、新田ですが」

「あ、新田先生ですか？瀬流彦です。

実は今日飲みに行かないかって言う話なんですが……新田先生
もいかがですか？

適当に廻っていつものおでん屋で々ようかと思っているんですが

……」

「……そうだな、今日は遠慮しておくよ。

ああ、あと香坂も用事があるらしいな」

「はい、わかりました……でも、その新田先生も用事とか……ですか？」

「私か？私は……樹の水やりにな」

「はい？」

今日は久々に、お土産などを買って帰るのもイイかもしれんな。
ユグドラシルで、昔よく家族と食べた。

……ふふふつ、今日の夕飯は……なんだろうなあ。

「瀬田アツ！一体何やつとんや！！招待客はもう来とるんやぞ！！」

「キツネちゃん……か」

「キツネちゃんか……やあらへんやろうが！！」

結婚式や！お前とはるかさんの！！その新郎新婦が時間になっても現れんつちゅーのはどうゆーことやねん！！！！

てかはるかさんどこや！！？？」

「はるかかい？はるか……好きな人の所に行ったよ」

「ハアツ！？何寝ボケた事言つとんのや！！」

それはお前やろうが！アンタがはるかさんの惚れたおとこ「違うんだよ、キツネちゃん」……何がヤツ！？」

「ホントはさ……ずっと知ってたんだ、ずっとわかってたんだ。

僕ははるかに惚れたんじゃない……はるかと隼人くんの二人に惚れたんだよ」

「……ハアアツ！？」

「隼人くんが笑わせたはるかの笑顔が、隼人くんが恥ずかしがらせたはるかの赤い顔が、隼人くんが導き出したはるかの仕草が……そんなはるかが僕は好きだったんだ。」

だから僕は……『和風茶房 日向』に行つて、二人のやり取りをいつも横目で眺めてたんだよ……」

「瀬田……アンタ……」

「アハハハハ、カッコ悪いよね。」

はるかが振られたつて聞いて、僕が隼人くんの代わりになるんだつて頑張つて……でも結局僕は隼人くんにはなれなかった。

もう結婚までしようかつて思つてたのに、そんな話にまでなつたのに…… たった一回会うだけで、それだけでもう決まっちゃうんだから……。

やっぱり僕つてカッコ「カッコ悪いくない」キツネちゃん？」

「アンタは立派や、アンタは男や、それでもそこまで想つた女を行かせてやることやこう普通の男にはできん！！」

ホントに本気で、はるかさんの事を想つとつたからこそ行かせてやれたんや…… アンタはええ男や。

誰が何と言おうとも、アンタは間違いなくええ男やで？」

「キツネ……ちゃん」

「……せやけどな、どんなええ男にだって休みとつなる時があつてもエエと思つんや」

「……キツネちゃん」

「阿呆、女が男を抱きしめてやつとんや……名前で呼びい」

「うん、ありがとう……みつねちゃん」

「それでエエ、それでエエんや」

■ ■ ■

「おまつ！？何でこんなとこいんだよ！！」

「それはこっちのセリフだな。」

昔の特攻服取り出して……隼人、お前は一体どこに行くつもりだ？」

「それこそこっちのセリフだバツキャロー！！」

デメエこそウェディングドレス着てんじゃねえか！！！」

「質問に質問で返すとは……それでも教師か？……まあいい、教えてやろう、耳の穴かっぽじってよく聞け。」

私はな、隼人……結局変わったつもりでいつまでたっても変わって無かったんだ。

いつも一緒にいてくれて、いつも私を見てくれて、いつも私を抱きしめてくれた。

でもそれはいつだってお前からで、いつだってお前が私の方を向いてくれていて、いつだって私じゃなくてお前が動いていたんだよ」

「お前……イヤ、んなこたあn「あるんだよ」そうか？」

「そうだ……結局いつまで経ったって私は受け身のまま、私はずっとお前が来てくれるのを待っていたんだ……。」

傷付くのが怖くって、お前だけには傷付けられたくなくって……だからお前が『別れてくれ』って言った時も、私はお前に嫌だって言えなかったんだ。

ホントはアイツみたいに泣き叫びたかったのに、喚き散らしたかったのに……それでもそれは『いい女じゃない』って思えてな」

「イヤ！ありや俺が完璧に……悪いんじゃねえか」

「悪くない、お前は悪くないよ……隼人……悪いのはすべて私だ。」

お前が私を求めてくれて、それで私たちの関係は始まった。

だったら同じぐらい私はお前を求めて、あんな小娘に取られないようにすべきだった！！

『待つ女』になんてならず……私はお前を奪いに行けばよかった」

「イヤ……けど、よう」

「言っておくが知らんぞ、お前の気持ちなんぞ。」

私がそうしたくて、私がそう在りたくて、私がそう在り続けたいだけだからな」

「……お前……」

「名前で呼べ、私は『浦島はるか』だ」

「はるか……か」

「そうだ、それでいい。」

……ああ、あと隼人に言いたい事が在るんだが……心して聞けよ？

私はお前に惚れた、私はお前が好きだ、私はお前を愛してる、お前の傍で誰よりもお前の顔を見ていたい！！

だから……隼人、お前私の男になれ！！！！」

「ケーーーーッケケケケケケケケケケケケケケケ！！！！」

「ぴぎぴぎいいいいっ!!!!」

「……ハッ! だったら俺を惚れさせてみな!!」

「ああ、そうするよ」

「香坂先生が……ですか?」

「そうなんスよ! なんかも奥さん候補みたいな人が出て来たって桜子とゆーなのヤツが言ってますて!!」

「……結婚?」

「あら、素晴らしい事じゃありませんか。

私なぞに惚れていても、仕方ありませんからね」

「いつ!? シスターシャークティ知ってたんスカ!」

「……美空、私はシスターですよ？」

人の気持ちくらいわからずと、誰がその名を語れますか」

「はあああ成程」

「そんな事よりも美空、雑談している暇があるのなら奉仕にでも行ってきたらどうです？」

「うおおおっと！今日は用事があつたんだった！

ココネ、行くっスよ！！」

「行つて来ル」

ハア……相も変わらず慌ただしい限りですね。

もう少しシスターとしての自覚を持っていただきたいものです。

……ですがそれよりも、香坂先生が……。

折角私が掟を破つてまで『魅了の魔法』を使い、救いだして差し上げようとしたというに。

「やはり化け物の友人は、化け物と共にいる者は化け物……という事ですか」

仕方ありませんね。

心が痛みますが貴方にはやはり、このような救い方しかできないと

は……非常に悲しい限りです。

ですが安心して下さい、香坂先生。

貴方は必ずやこの私が救いだして差し上げます。

闇の中から光の中へと、永遠なる安らぎの中に。

「土は土に、灰は灰に、塵は塵に、化け物^{フリークス}は虚無へ……」。

嗚呼、貴方の安らかな旅路に神の御加護が在らん事を…… A M E

「N」

三十四匹目 折り合いの着けられる物事ばかりじゃない（後書き）

何とか恋愛編終了

魔物使いとシスター、コレは対極に位置する存在ですからね。

やっぱりいるとわかったからにはこんな形に持っていこうと思って
おりました。

正直過程で妙な感じになった気はしますが……それでもこれはコレ
だと思います。

ご批判ご指摘どんどんどうぞ。

感想返しはとりあえず一息ついてからにしようかと思っています。

三十五匹目 『ニオイ』はいつまでも身体が覚える（前書き）

携帯から投稿です……かなり疲れた。

改行とか、おかしいところがあるかも知れません。

三十五匹目 『ニオイ』はいつまでも身体が覚える

「いらっしやい……ってなんだ、エヴァか」

「クククツ、それがせっかく来てやった客に対する態度か？」

「エヴァだからな」

「バカにされてる気がせんでも無いが……相も変わらず閑古鳥が鳴いている店だ」

「イイんだよ、ウチは常連客で十分回せる。」

私一人が食って、仕入れするくらいの金が入るさ」

「そうか？」

まあ私としては、一人長々と居座つても構わない場所が増えただけで十分だが」

「ム、それは私の淹れるコーヒーが不味いみたいじゃないか」

「元々コーヒーは好きじゃないんだよ。」

それよりもはるか、紅茶を淹れる……勿論、湯の温度には気を付けてな」

「……ウチに来て、コーヒー以外を頼むのはお前くらいだよ」

「ハハハッ、茶を頼む馬鹿とチビツ子二人がいるだろうさ」

「一応ウチは『和風茶房』だからな、茶はあるんだ。

それにそう言うならば、同じクラスのお前もチビツ子だろう?」

「舐めるなよ、小娘?

積み重ねて来た、人としての幅というか……それが違い過ぎるよ、私と有象無象ではな」

「……そうだな、そうとも言えるさ」

目の前の金髪少女……私の唯一と言っても過言ではない親友は、昔とまるで変わらない姿。

それを見れば、やはり『人ではないんだな』と思ってしまいが、それは些細な事だ。

六年ぶりに再会しても、何も変わらない私への態度。

そこまで辿り着く、紆余曲折などまるで気にしていないような、そんな態度。

ありがたい限りだな。

「……何だ」

「イヤ……授業はイイのか?」

「ほう、元不良生徒の浦島はるかさんにそんな事を注意されるとは思ってもみなかったさ」

「そう言われるとツライな……ま、私はどちらでも構わないんだが」
「ならいいだろう」

ニヤリと笑う姿は年に相応、外見に不相応にて妖艶。
さすがは六百年の時を生きた吸血鬼だ。

最初に出会った時は……こんな関係になるとは思ってもみなかった
さ。

向こうは『世界最高額の賞金首』で、こっちは『日本で有名な退魔
一族の娘』。

普通に考えれば、そこに友情なんてもんは生まれようがないからな。

私が一方的に、どうも近付きがたく避けていたんだが……。

あの頃の私はやはり弱かった、肉体的にも、それ以上に精神的に。

それを結びつけたのが……隼人なんだよな。

思い返す度に思うんだが……やはりアイツは普通じゃない。

『魔物使い』のスキルからか、それとも知識が無かったからか、ア
イツは普通の人間が越えられない壁をいとも容易く越える。

普通ならば躊躇い、踏みとどまり、諦める壁を。

行動力があつた事がいいのか悪いのか……結果的に見ればいいのか。

何にせよ、こんな関係になれたんだからな。

「そう言えば……向こうは、向こうの男とはどうなったんだ？」

「瀬田か？瀬田との関係は……そだな、私は『可愛いそんな女』扱いになってるよ」

「ほう？」

私が瀬田との結婚式をすっぱかしたその日の夕方、一人『ひなた荘』に戻ったんだが……そこにはすでもう、ヤツの姿はなかったさ。隼人も一緒に行こうか、と言ってくれたんだが、それはどうもな。

なんだかんだ言ったところで隼人が私を……っと、こう言々と照れるというか、妙に気恥ずかしいんだが……。

そのだ、奪いに……私を奪って自分のモノにするために突っ込む気があったとしても！……事実、結果としてその場を壊したのは私人の我が儘で、私個人の意志だからな。

詫びを入れるにしても、時間を無駄にさせて不快な気分を与えてしまった責任は私に全てある訳だ。

なれば『一人一人に事情を説明して私自身が頭を下げる』。

それが最低限の『礼儀』であると思うよ。

許されるかどうか、そんなもんは別次元の話としてだがな。

……まあしつかり止めた私にバレないよう気張って、隼人はついて来ていたんだが……言わないのが華なのさ。

とにかく結婚式に戻ったんだが、まあ私が逃げたせいで、お流れになっっていた。

新婦がいなんだ。

成立しない『結婚式』。

そりゃ続ける意味なんてないだろうから。

そう私は思っていたんだが……違っていたんだよ。

「『中止』と決めた理由はな……あのバカ、違う女と逃げやがった」

「ほう」

「私がいなくて気付かれる前に、堂々とその女と連れだって会場に現れてな。

それで……それつきりだ」

「ククツ……クハハハハッ！！」

『実は好きな女が別にいたんだ』とでも言ってたか！？

だったらソイツはs「解ってるし分かってる……言っな、もう」
……クククツ、悪女が」

瀬田は娘の『サラ・マクダウェル』を私の甥、『浦島景太郎』に任せて姿を消した。

瀬田と一緒に逃げた女は『紺野みつね』。

『ひなた荘』が旅館から女子寮に生まれ変わった時、最初に入寮したヤツだった。

私がいつか昔みたいに隼人が扉をくぐってやって来てくれるってさ、ちっぴけな希望を胸に『和風茶房 日向』を道楽経営してた時。そこに瀬田が来てくれる度に、何故か現れるヤツだったよ。

みつねには……無茶苦茶に言われるかと思ってたんだがな。

たった一言私の携帯の留守電に『瀬田、もろーたから……もう返さんで』って残してるだけだったさ。

「まあそんな訳で、私は『結婚式当日に捨てられた女』って事になってるのさ。」

……事實はまるつきり違うつてのに、ホント……バカだよ、あの二人は」

「何だ、罵って欲しいとでも言う気か？」

「イヤ……そうなれば随分と楽だろうが……もうそんなに、私は弱くなるつもりはないよ」

「クククッ……そうか」

カチャリとカップを手に、紅茶を口に含むエヴァ。

そんな私たち二人がいる店は麻帆良にある。

恐らく麻帆良学園で教師として雇われるであろう隼人の為に、そんな隼人と私が一緒にいる時間を少しでも増やす為にさ……義母さんが気をきかせて建ててくれてたんだよ。

結局あの時私が『ひなた荘』に逃げて。
それっきり使ってなかったからな、てっきりもう取り壊されている
と思っていたんだが……。
学園長に聞くと、『残しといてくれ』って義母さんが頼んどいてく
れていたんだとき。
本当に……ありがたい限りだ。

「エーヴァー、テメエ何俺の授業までサボろうとしてくれてんだ？」
ガラリと、扉の開く音が聞こえる。
音の方向に視線を移してみれば人が一人、悠然とこちらを向いて立
っていたよ。

それはいつか待ち望んだ……頭に青いタマネギと緑髪の人形を頭に
乗つけた男だったさ。

「隼人！？おまつ、はるか！知らせたな！！」

……さあ、知らないな。
とゆーよりイイじゃないか。
それなりに楽しいんだろう？

そうじゃなければこうやって私が隼人を呼ぶかもしれない、そんな
可能性のあるここには来ないだろう？

しかし……サボりでも『学校に行っている』とある程度は認識されるんだから、呪いをかけた『ナギ・スプリングフィールド』は相当だったんだろうな。

「したり顔をするな！煩わしい！！」

「ケケケ、御主人ヲガキドモノ中ニゴ招待」

「ぴぴぴぎぎ」

「がらくた人形にタマネギがあ……ええい！隼人！！」

「ん、何さ？」

そう言う隼人は懷から煙草を取り出して、マッチを手に火を点けた。

ゆさゆさと、ふらふらと、ゆらゆらと、紫煙がその先から立ち上る。

フィルターを口に、煙を肺に吸い込んで、ゆつくりと吐き出す。

「元不良生徒の貴様がよくもそんな事を言えたもんだな！！」

してやったりと、小さな胸を逸らすエヴァ。

そんな彼女の首根っこを猫のように摘み上げた隼人は、ニヤと昔のように口元を吊り上げたさ。

「それはそれ、これはこれ。

んなもん俺がテメエを連れ帰る事に何の関係もねーんだよ」

「はははっ！」

「ぴぎーぎー！」

「ケーーーーッケケケケケケ！」

「りっ、理不尽だああっ！！！」

記憶の中より、ちよつとだけ大人になったアイツは昔と変わらない『青春』のニオイがした。

「ただいまとくらあ」

「飯ニスル？風呂ニスル？ソレトモ俺ニスル……ッテカ！？」

「ぴぎっぴぎぎ」

……無視？何故に？

いかなぜよ、ちゃんと挨拶はしねえと。

挨拶は人間関係の資本、大事にしろつつて教えたんだがなあ。

ちなみに今日は日曜日、久々にはるか後ろに乗つけてツーリングに行つて来てさ。

六年ぶりのデートつてヤツだな。

……ちとつつーかなり上機嫌よ、俺。

「あ、おかえり、隼人お兄ちゃん」

「アーニヤ、もうちょっと思いつきり来てくれたら嬉しかったんだがなあ。

てかそれよりネギは？」

「あ、うん、あのね、ネギがね」

ちらちらアーニヤの視線が移んのは……いつも俺らが寝てる部屋か。折角兄貴分が帰つて来たのに、出迎えくらいしてくれても罰はあたんねえと思っただがどうよ？

「ネギ、帰ってきたら『おかえり』だろうが」

「……………」

「無視かよオイ」

何やってんだコイツ？

てか今日は神楽坂と雪広に連れられて『図書館島』に行くつつてなかったか？

……まあなんか本読んでるみてえだし、借りて来たようだが。
だからって俺を無視してイイ道理にやならねえよなあ……取り上げ
てと。

「ほいつ、帰って来たんだが言っ事があるだろうが」

「……………ッ！」

「テメツ！？」

奪い返した上に……無視だと？
ふざけてんなあ、ちよっくらさ。

「ちよっ！ボケネギ！隼人お兄ちゃんが帰ってきてるのにアンタは
いつまでそうしてんのよ！？」

「あゝあゝ、怒んなアーニヤ。

男の子にや、こうやって何かに一生懸命になったりする時があん
の」

「ぴっぴー」

「そうそう、て事でネギ……飯ん時にやあちゃんとまともになつて
るや。

今のテメエの気持ち、なぐんとなく俺もわかった」「何がわかる
のさ」「……あア？」

「僕の気持ちの一体何がわかるのさぁッ!!」

……珍しいな、こうやって怒るのは。

てかこうやって感情を剥き出しにした事、今までほとんどなかったもんな。

はははっ、ヤベエ……ちと嬉しいかも。

場違いだってわかってるけどさ。

「何笑ってるんだよ!!」

言葉使いまで乱暴になっちまって。

いや〜コレはホント嬉しいかもしれねーや。

こうなれるってのもまた『成長』したって事だろうし、俺との距離も大分近くなっただって事だもんな。

「ボケネギ! アンタ本気でな!」 煩い! アーニヤは黙っててよ!!」

……こんのボケネギ「うい、マジでちよつと黙ってる」 ひよっ!?

「ケケケ」 ひゃひゃひゃひょおおお!!」

目の中にギラギラ、炎を滾らせて。

男の子してんねえ……よく見りゃ頬とかちと傷ついてっし。

「喧嘩したのか? イイじゃん、勝ったか?」

「なに……が、何が勝ったかだよ!! 僕のこと何も知らないくせに
! ! ! !」

「そりゃテメエ、俺はお前から何も聞いてねえし、お前は大きくて教えれくれてねえからだろうよ」

……そなんだよな、ネギの事はあんまり知らねえんだよな。
一応学園長に資料とか渡されて、両親が二人ともいないって事は知
ってんだがそれ以上はさ。

スゲー危うい感じの災害？が二人を襲ったってのは知ってるけどよ、
ソイツが何だったかとか、その辺りは聞いてねえし資料に目を通し
ていねえ。

だってなんか不公平じゃん？

相手の過去だけ知って、自分が相手に対応するとかさ。

俺は相手の過去とかあんまり気にしない性質だし。
それに仲良くなりゃ向こうから教えてくれるかね？と思ってたから
な。

現にアーニヤの事はネギよりも知ってる。

極稀に、一緒に寝たり風呂に入ったりするときに、教えてくれんだ
よな。

だから『アーニヤの両親が石化した』ってのも知ってる。

スラぼうの『いてつくはどう』を使えばさ、多分解除とか出来るん
だろうけどよ。

そん時アーニヤが『修行して、絶対二人を元に戻すんだ』って言っ
てたからな。

頼られりゃもちろん喜んで手助けするけど……無粋な真似はしねえ
さ。

俺の意見、間違ってるのかもしれない。

でもそれでも、その頑張ってるアーニヤの姿と思いは本物だし、天
真爛漫さも本物だわ。

んな訳で、俺は黙って泣きたい時や寂しくなった時に、コイツが惚れた男でも……っつーか相手の朴念仁が気付くまでの傘になつてりやいいんだと思ってるからな。

「ひよひえひえひい！ひいーひやひえんひいひいひやひやひいひよ……！」

「ケケケ、楽シクナツテキダゼ」

「……ひやひよひえひよひえひえひやひやひいひよ……！」

ま、んな事でネギの事はあんまり知らねえんだよ。

『父さんみたいになりたい』とは常々言ってるけどさ、それくらいかね。

「知らないくせに！知らないくせに！！僕の事なんて何も知らないくせに……！」

駄々っ子だねえ、マジで。

ガキらしくっていいとは思うが……近所迷惑だし。

まあでもこうやって発散させて方がいいかもしれねえな。

喧嘩で発散しきれなかった所が、俺とネギとの違いだろうさ。やっぱ俺って単純なのかね？

ともかく、抜けきれりやコイツもまともに話が出来っただろ。無理矢理に止めてやらねえでも、今はいい気がするしよ。

「お兄ちゃんなんて僕のなんてなんとも思っただけに……！」

「……………あア？」

「……………ぴぎぴぎ」

「ひよっ……………ひえひい……………」

「家族でも何でもなくせに……………くに……………他人のくせに僕に口出ししたりしないでよ！！！！」

……………。

「僕の事なんてお兄ちゃんには何の関係もないじゃないかあっ！！」

「ケケケ、オスガキ……………アウト」

「……………齒ア……………喰い縛れやクソガキ」

メキツと、小さな体が吹っ飛ばされて壁に当たる。
俺の拳はネギの、吠えてる横っ面に叩き込んでやったんさ。

「……………どうゆー了見だ……………あアッ！？」

「あ……………うあ……………い……………」

「……………どういっ了見だって聞いてんだコルアッ！！！！」

「う……………ああう……………あ……………うあああああああああああああああああああああッ！！！！」

「ネギッ！」

「追っかけんな」

「でっ、でもッ!？」

「追っかけんなっつつてんだ！」

……あのクソガキ、マジであんなこと思ってたのか？
イヤ……そうとは思えねえが……。

ッチ！メンドクセー事になりそうだなあオイ。

「アーニヤ、パジャマと着替えと明日の準備を持ってこい」

「……えっ、何で……？」

「テメエそら俺はアイツ探しに行って、そしたらここに一人になる
だろうが」

「連れて帰って来るんじゃ……」

「無理だな、多分野宿くらいする勢いだったしよ。

っつー事で桜子と裕奈の部屋か、それか神楽坂か雪広んここに泊
つてろ」

「うん……あのね、隼人お兄ちゃん、ネギね！今日……その……」

……ハハッ、心配そうな顔しちゃってさ。

「安心しろ、俺は大して怒ってねえよ……殴ったけど」

「うううつつ、そんな事言われたって安心できないわよ!」

……ふう、すっかり遅くなっちゃったわね。

ホントはもう少し早く麻帆良に来るつもりだったんだけど……。

ネギにアーニヤ、元気にしてるかしら？

ちゃんと香坂先生の言う事聞いて、お行儀よくしてくれたらいいんだけど。

確かホテルは……私が予約しておいたホテルがこっちの方に……つてあら？

アレって筈……飛んでるわ……よね。

……拙くないの!?

……。

……。

……えっ、アレって……ネギ?

三十五匹目 『ニオイ』はいつまでも身体が覚える（後書き）

PCが壊れてしまい携帯より。

恐らく次は修理されて帰って来た後の来週月曜以降になると。

もしかしたらネカフエから投稿したり、もう一度携帯から頑張ってみるかも知れませんが……。

三十六匹目 見た目とのギャップが激しい人はよくいる（前書き）

ようやく修理から帰って来た……。

その間にお気に入り二千件突破、総合評価五千突破……夢？

これからもご期待に添えられるかどうかはわかりませんが、執筆の方を頑張って行きます。

三十六匹目 見た目とのギャップが激しい人はよくいる

「つうたあつ……もうちょつと優しくしなさいよ!」

「……ハア、文句が多いですわね、貴女も。」

せつかく手当てをしてさし上げているんですから、『感謝』の意を示すのが先ではないんですの?」

うぐつ……まつ、まあそう言われればそうかもしれないけどさ……。
イイじゃない!別に!
そんなちーっぱけなこと気にするような間柄じゃないわけだし。

うんうん、細かいこと気にし過ぎてヤツよ。
だから老け顔になんてなっちゃうのよね。

「……何ですの?」

「なつ、なんでもないわよ」

めちゃくちゃに見られてるし……。

でもさ、やっぱ気にしてる訳だ、いいんちようも。

ま、中学二年生に見えなんだから仕方n「ああつとー、手が滑ってしまいましたわー」つつたあああああああああああああああああ!
!」

「大丈夫ですよ、アスナさん?」

「本気でぶん殴るわよ!アンタ!!」

焼けるみたいに殴られた頬が痛い！

消毒液染み込ませたガーゼをガリツて！！どんだけ痛いかわかってんの！？コイツ！！

「少々おふざけが過ぎましたわ」

「とつくに過ぎてるわよ！……… たく、次からちゃんとしなさいよね」

「…… アスナさんが乙女心を弄ばなければ、純真な私はこんな事しませんでしたのに…… オヨヨ」

…… うわゝ、『オヨヨ』とか口で言う人始めて見たかも。

初等部の頃からだけど泣き真似、結構うまいのよね。

『淑女の嗜み』とか言ってたけど…… それってどうなの？

まあさ、そのお蔭で昔は結構助かったりしたんだけどさ。

イタズラした時とかもコイツが一緒にいて、優等生だったコイツが泣いたフリとかしてくれたから怒られずに済んだ事だってよくあったし。

今思い返せば私って変わったと思うわ。

麻帆良に来たばかりの頃はすんごく暗かったもん。

なんて言うか…… クールな私？って言うより根暗か。

まるで正反対よねえ。

それを吹っ飛ばしたのがコイツ。

昔っからホーント喧嘩ばっかだけださ。

喧嘩なんてほとんどせずに初等部から今まで一緒にいるこのかより、
なんでか知らないけど気持ちとか、気分とか、わかったりするのよ
ね。

あの頃は……何でかわかんないけど『一人ぼっちにされた』ような
気がしててさ。

私にはそりゃ両親がいなくて、そのせいでそんな風に思っちゃっ
たりしたのかもしれないけど。

でもそれよりもっと、なんて言うか……もっともっと、大切？大事？

うううゝバカだからあんまり言葉が出てこないし、どういってイイ
かわかんないんだけど、けど！

もっともっと、大切に大事なモノ……なくしちゃった気がしてたん
だ。

そんな気分をコイツが紛らわせてくれて、単なる金持ちでム力つく
ヤツじゃないってのも気付いて、何となく気付けば一緒にいるよう
になっで。

いつの間にか明るく笑えるようになって。

でも素直に友達になるなんて出来やしなくって。

……ハア、素直になれないってのは昔からよね。

「はい、消毒も終わりましたし、絆創膏を貼ればおしまいですわ。

くれぐれも掻いたりしないように」

「わかってるって、それぐらい私でも」

「ですがおサルさんな貴女には……ねえ、一応言っておいた方がイイかと思ひまして」

「……………」

「あつ、あら？アスナさん？」

「ま、男も女も度胸あるのみ！

ウジウジ胸の中に溜めるなんて私らしくないし。

ドーンとぶちまけてこそ私の私よね！

「アスナさーん、アスナさん？アースーナー」あやかさ、ありがとうね」……構いませんわよ。

迷惑をかけられるのは別段今更始まった事ではないですし、もう貴女と友人になった時から諦めてますの」

むう、なんか気に障る言い方よね。

「何それ、いつも私がアンタに迷惑かけてるみたいじゃん」

「……人間、自覚がないのが一番怖いのを知っています？」

「どーゆー意味よ!？」

「ふふふっ、考えて見ればよろしいのではなくって」

コイツツは相変わらずうっ……!……ホント、口の減らないヤツよ。

昔も、今も。

でもやっぱりコイツの、あやかのお蔭で……。

「何よ?」

「貴女こそなんですか?」

私は私らしく、いらねんのよね。

ってそうじゃない!

そうだけどそうじゃなかった!!

「あんのクソガキ!よくも乙女の顔面に青アザ作ってくれたわ!!」

折角図書館島に連れてって、折角の休日潰してまで連れてって行ってあげたのに!!

いきなり同級生くらいのガキと喧嘩始めたかと思えば止めに入った私まで殴って来たし!!

……まあ喧嘩自体は私もよくやるしどーも言えないんだけどね。
でも！女の子殴ってそのまま逃げ帰るってどうなのよ！！

男としてダメね、ダメダメよ！

やっぱり男は背中で語るように渋くないと。

そいえばなんか最近きゅーに隼人先生渋くなったわよね。

男として深みが出て来たというか、苦みが出て来たというか。

前々から他の先生とかとは一味二味違うってのは思ってたけど……
タバコ吸い始めたからかな？

ま、何が言いたいかってつとまだまだネギはお子ちゃまって事……
じゃなくって！

話がズレたけど！要はなんでネギが喧嘩したかったのを知りたいの
よ！！

私が殴られたつてもムカつくんだけど。

殴られたのは殴られたけど……何となくその理由はわかる。

ホントは殴る気なんてなかったけどはずみでってのはわかる、経験
あるし。

だからまあそれは、一発ゲンコツ叩き込んで終わらせるとして。
何であそこまでネギが怒りだしたかが……わかんないのよね。

だから知りたい訳、私は。

もう二、三ヶ月くらいは会ってから経ってるのよ？

なのに実はネギの事はあんまり知らないしさ。

いい機会でしょ。

アイツは年下だけど、とりあえずは私の友達？みたいなのならで。なのに私は……ってかあやかもよくネギの事は知らない訳で。

アーニヤちゃんの事は知ってるから教えろってわけでも、身の上話は全部を知つとかないと友達付き合いなんて出来ないなんて言わないけど。

でもやつぱね……知りたいのよ。

だってあの時のネギってばすごい顔してたのよ！

一言『お前の父ちゃんは死んだんだってな、カッコ悪い』って言われただけなのにさ。

そりゃあ私には両親、物心ついた時からいないからよくわかんないんだけど。

でも『大好きな人』をバカにされて怒る気持ちわかるつもり。

私だって絶対ネギみたいに殴りかかってるだらうしね。

……だけどさ。

泣かせてるのに、泣いてるのに、もうネギに刃向かう気力なんてないだろうに。

それでもネギは躊躇い無くそのガキどもに殴りかかったり、蹴り飛ばしたりしてたもん。

コレって絶対おかしいわよね？

泣かせて、撃退して、それで充分じゃないの？普通はさ。

なのに追いかけて、追いかけて、殴りつけて、蹴りつけるなんて絶対どこかおかしいわよ。

何が在る訳、アイツの中に？

何がそうさせる訳、アイツの中の？

アイツの中の、ネギの中の、『お父さん』ってのはそんなに大きな存在なの？

……でもさ、ネギ。

アンタのそれって、何か悪い薬飲んだみたいよ？

辺りは暗く、冷たい風が肌を刺す。

明日は月曜日だというのに、いったい何のために香坂は俺たちをこんなところに呼び寄せた？

今日は出来るだけ早く寝て明日に備えねばならぬというに。
それはわかっているだろうに。

「えと、隼人くん、僕たちなんでこんなところに呼び出されたかわかんないんだけど？」

「あゝなんて言いますか、何と言ったらいいでしょうかというか……」

香坂にしては珍しく歯切れが悪い。
普段とは少々様子が違うか。

「……とにかく頼み事がありまして、んで力を貸して欲しいんスけど」

「頼み事、か」

「それなら別に構わないんだけどね、出来たらもつとあったかいとこが良かったし、夜じゃなくて昼が良かったなあ。

まあ今必要で、外で必要だから僕らを呼んだって言うのはわかるけどね」

『日曜の夜が……』と落ち込む式集院先生。

成程、娘と過ごせる大事なひと時だったという事か。

それでも香坂の頼みを聞く為にやって来てくれるのだから……やさしい人だな、本当に。

この人といると心があたたまるような気がする。

「香坂くん、ちなみに呼んだのって僕らだけ？」

「イヤ、あとガンちゃんだな。」

明石さんにも頼もうかと思ったんだがさ、どーも忙しいみてえで、もうすぐ午後七時を越えようかという時間帯。

日曜日のそんな時間に世界樹広場にいるのは呼びだした香坂、それと呼ばれた俺と貳集院先生に瀬流彦くらいのモノだ。

飲食店が立ち並ぶ所や、コンビニやらがある所まではもう少し校外に行かねばならんしな。

冬も本格的に近付いてきた今の時期では、部活動をこの時間まで励む者もほばいない。

そろそろ香坂に何か奢らせにでも……フム、どうやらガンドルフイ
ーニも来たようだ。

さて、とりあえずこれで呼び出した理由は聞ける……という事だが
………待て。

アイツの隣にいる、あの男は……。

190cmある香坂を越えるほどの高身長。

一見ヒヨロリとやせ細っているようにも思えるが違う。

大柄で『筋肉の鎧』を纏うコイツとは対照的に、無駄を削ぎ落とし、絞り込まれた『筋肉のスーツ』と言つべきモノがその男を覆っている。

香坂を熊か獅子か驚か、そう表現するならばこの男は狼か豹か隼。まあ名前からしてみれば逆であるが、そこは関係ないだろう。

一目で『日本人ではない』とわかるであろう特徴的な容貌。だが切れ長の眼にスツと通った鼻、薄い唇に整った顔立ち。髪は光り輝くようなプラチナブロンド、蒼く澄んだ瞳。

……確か以前新聞部が発行した『まほら新聞』。

そこで行っていた『麻帆良学園都市美男・美女ランキング』の『成人男性部門』で圧倒的戦力で一位に躍り出た男だったな。

ちなみに葛葉は『成人女性部門』で10位以内だった。さすがは葛葉だな。

……ともかくだ、麻帆良中が認める美形であるこの男は俺と同じ『魔法先生』だ。

裏世界に所属し『エリート』と称して何ら問題ない者たちが多いこの土地でも、頭一つ抜けた力を持っているほどのな。

大凡直接的に戦闘行為を行う『武闘派』の中では『高畑先生に次ぐ』とも言われるほどに強い、そんな男。

ちなみに俺や葛葉も同じように言われているが……だからこそ、この男とは『戦いたくない』と思える。

恐らくであるが俺と葛葉とこの男は『実力が極めて近い位置』にあると推測される。

だからこそ一度戦えば双方がタダでは済まない事は明白だからな。

小説や漫画のようにはいかないのさ。

ココはあくまで『現実』なんだ。

何にせよ、何故この男が？

ガンドルフィーニとは幼馴染の関係にあると聞くが……コイツは香坂を嫌う坂上先生とよく行動を共にする男だぞ？

なあ、魔法界では名の知れた賞金稼ぎ。

『粉塵の槍使い』、『ヘゼル・ダイナー』よ。

「あらん、隼人ちゃんお・ひ・さ・し・ぶ・り〜元気してた？」

「へぜちゃんかよ！？久しぶりだなあ、オイ。

てかなんでココにいのの？」

「……偶々な、私の家に遊びに来てたんだ」

「ウフフフツ、相変わらず素敵な筋肉……食べちゃいたいくらい」

「ケーーーーッケケケケケケケケケケ！」

男八度胸！何デモヤツテミルモンダゼ！！」

「やんねーよ、てかテメエは楽しんでるだけだろ？」

「ぴぎっ」

……まあ二人に限定してみれば仲はイイみたいだな。

ガンドルフィーニと同じ『聖ウルスラ』に勤務しているし、昔から香坂の頃はよく知ってる訳であるし。

「それより……聞いたわよ！はるかちゃん麻帆良に戻ってきたんだって！？」

「ハッハッハ、まあ色々あつてよ」

「そうよねえ、やつぱ隼人ちゃんにははるかちゃんが似合いよねえ」

香坂と浦島の関係等もな。

話は少々ズレるんだが。

何にせよ二人は復縁……とまで行くのはまだまだ先かもしれないが、再び共に歩むかもしれない道を辿るといのは、俺個人としては望ましいばかりだ。
シスターシャークティより、やはり浦島の方がコイツにはしっくりくる。

「あ、そいえば光ちゃんありがとっね。

この前のダイエットメニュー、もうサイコーよー!」

「そう言ってもらえると嬉しいね。

僕にはまるで効果なかったんだけどさ……理由はわかるからいいんだけど」

「た〜べ〜す〜ぎ〜ってヤツ?

もうちょつと絞らなきゃだめよん」

パチツとしなを作ってウインクして見せるヘゼル。

男だというに、妙にその姿に違和感が無いと思えてしまうのは……もう慣れてしまったからか?

まあ十年近く見ていればそれが普通になるか。

……だがやはり……。

「あのっ! ガンドルフィーニ先生、この男のh「あア! 誰がおっさんじゃゴルアッ!?!?!」ひいいっ!?!?」

「ヘゼル、とりあえず落ち着け」

「……わかってるわよガンドルフィーニ、私はそんな小さな女じゃないの。」

そいえば貴方の事は始めて見るけど……結構力ワイイワネ」

「ひiiiiiiiiiiiiっ!??」

「まあまあ、とりあえず落ち着こう瀬流彦くん」

「そーゆーこつた、イヤッだしすぐダチになれっさ」

「あ・り・が・と、だから好きよ隼人ちゃん。

ともかく自己紹介するわね……私の名前は『ヘゼル・ダイナー』、
純粹で可憐でか弱い『漢女』よ」

男が似合ってしまうのは……どうも理不尽だ。

三十六匹目 見た目とのギャップが激しい人はよくいる（後書き）

久々の更新なんで違和感が……。

とりあえず作品通してのオリキャラは『蛭墮三亞蘭弩』のメンバーを残して出し切りました。

彼？彼女？にもこれから頑張ってもらおう予定です。

三十七匹目 何でもそうだが『出す』と楽になるよな（前書き）

……年頃少女の気持ちはムズイ。

三十七匹目 何でもそうだが『出す』と楽になるよな

ネギがバカみたいに『魔法』を練習する理由、ネギがバカみたいに頑張る理由。

それはネギのお父さんに関係あんのよ。

ネギのお父さんの名前は『ナギ・スプリングフィールド』って言うて、とーーーっても強い魔法使いだったんだって。

『千の呪文の男』って呼ばれてて、13歳だっけ？14歳だっけ？まあでもそれくらいの年齢の時に『戦争』に参加して、すごい力で悪いヤツらをバツバツと薙ぎ払って行ったんだってさ！

だってメルディナ魔法学校で使ってた『魔法界の歴史』について書かれた教科書でも写真付きで出て来てたし！

今でもどんな数が増えてるファンクラブだってあるらしいし！！魔法使いの私たちがみんなが目指す『偉大なる魔法使い』そのモノだとも教えてもらったし！！

ともかくすごいすごいすごい！！魔法使いなの。

「……で、なんでアンタら二人がココにいのよ？」

「そりゃアーちゃんからネギくんが喧嘩したって聞いたからさ！」

「隼人先生ですか、桜子さん？」

「そだよー、隼人にいがネギきゅん探しに行くからアーちゃん一晩預かってーってさ。」

今日は三人で川の字にやのだ！」

でも桜子ねえにも裕奈ねえにも、もちろんアスナにもアヤカにも……こんな事は言えないのよねえ。

『魔法は秘匿されるべき』って事になってるし、もしバラしちゃったら私オコジヨになっちゃうのよ！？

それだけは絶対ダメ！

私はしっかり修行して強くなって！

……私には、その……『石化魔法を解く』とかの高度な『治癒魔法』や『解呪魔法』を使う才能は無いって言われたんだけど……。

ちっ、違うのよ！

ちゃんと簡単な『治癒魔法』は使えるのよ！

カタラギ先生から教えてもらったんだもん！！

だけどやっぱり、悪魔にかけられた『石化魔法』を吹き飛ばすくらいのモノは使えないんだって。

私は『火』と『風』系統の魔法を使うのに適した『魔力』を持ってるんだけどね。

『治癒』とか『解呪』とか、そーゆーのの専門は『光』とか『水』とかなのよ。

『魔法』には『系統』があつて、小さく分けたら『花』とか『砂』とか『影』とかいーっぱいあるんだけど大きく分けたら全部で六つ。『火』と『水』と『風』と『土』、それに『光』と『闇』ね。

最近はその元は『水』から派生した『氷』と元は『風』から派生した『雷』を加えた八つが一般的なんだけどさ。

ともかくそれぞれに長所とか短所とかがあつたりすんの。

それで私の得意な『火』も『風』もそーゆーのは得意じゃ無いんだから仕方ないの！！

……けど……私は絶対あきらめないもん！

私は得意になれなくつて、自分でお父さんやお母さんや村の人たちを元に戻せないのは悲しいし悔しいけど……強くなつてこの世界とか魔法界とかいゝんなとこ探したらそんな事が出来るすんごい魔法具とかあるかもしれない！

みんなを元に戻せる魔法を使えるすごい魔法使いに会えて協力してもらえるかもしれない！！

だから私は頑張るのよ！

『マジステル・マジ偉大なる魔法使い』になつて、元に戻ったみんなを驚かせてやるんだから！！

「アーニヤ、急に立ったりしてどーしたのよ？」

「なつ、何でも無いわよアスナ！気にしちゃダメだからなつ！」

「むー……まあそんなにや事どーでもイイのだ！」

それよりアーちゃん！ネギきゅんってお父さんの事ダイスキにやんだね〜」

「うんうん、私もお父さんの事は大好きだもん！

わかるぞーわかる！さすが私の弟分だぜい！！」

「……ファザコンよねえ、ゆーなは……」

「ちなみにゆーちゃん、隼人にいとどつちが好き？」

「どつちもさあっ！まとめてオイラの嫁になれい！！！！」

「……裕奈さん……大器ですわっ……！」

ネギにとつての『お父さん』……か。

……私はさ、ネギじゃないからネギの事ホントにぜーんぶなんてわからないけど、けどいつかはぜーんぶわかるようになっていたい……なんて絶対思わないわよ！

オッホン！

ともかくね、ネギのホントにホントの気持ちかわかんないけど、でもネギにとって、私から見たネギに……ほーーんのちょっとだけ見てたネギにとつての『お父さん』って、多分『スーパーマン』みたいなものだったと思うわ。

『ピンチになったら現れる、どこからともなく現れる』。
そーやってネギはいつも歌ってたっけ。

「……アーニヤさん、私はあまりネギさんについて知らないんですが……ネギさんのお父様は、その……」

「あ、うん……そのね、ネギのお父さんはさ、ネギがちっちゃい頃に死んじゃってるんだ」

「それは……前にアーニヤさんの御両親が寝たきりになったという『災害』での話ですの?」

「ちよつ、あやか!？」

……アスナってさ、口は悪いけど優しいわよね。

「んーん、違うの……私の両親が寝たきりになった『災害』より前に、ね」

私はネギなんかより頭がイイからネギが覚えてないだろう昔の事も覚えてるんだけどね。

多分ただだけ思い出してもネギのお父さんにもお母さんにも、会った覚えは無いのよ。

ネカネお姉ちゃんに聞いた話だったらネギが生まれてすぐくらいに死んじゃったからって聞いている。

アヤカが言ってる『災害』ってのは……私が4歳の時、私の村が『悪魔の大群』に襲われた事があって……うん。

それをね、ホントの事丸まま言えないから『災害』って事にして言ってるの。

……でもさ、ホントに『災害』みたいだった。それくらいいっぺんに、一瞬に、私たちの大事な村のみんなを奪って行った。

私は『災害』……じゃなくなつて大量の『悪魔』が私たちの村を襲った時、ウェールズの村にいらなくて。

メルディナ魔法学校でお父さんとお母さんと、それとネギに自慢してやろつて思つて魔法の訓練をしてて。

いつも一緒に村に帰るネカネお姉ちゃんより少し遅れて帰るつもりで。

だからその時村にはいなかったんだけどね。

帰つたらもう村は無かつたの。

大人の人に『危ないから入っちゃいけない』って言われて、三日経つてやっと村に帰つたらそこに私の家も、いつも遊んだ広場も、おいしいパン屋さんも無くなつてて。

瓦礫だけ……パン屋さんのあつた所に、いつも遊んだ広場に、私の家にあつて。

ちゃんと生きててくれたネギに何があつたのよ！つて聞いても『僕のせいで悪魔が来た』なんて無茶苦茶なことしか言わなかつたし。

んな訳ないでしょ！って何回言ってもズーンって沈んでばかり！

それから助けてもらって魔法学校に入学してからはズーっとズーっと寝ても覚めても『魔法』、『魔法』、『魔法の勉強』！！

私が前みたいに遊びに誘ったって……ネギは、ずっと……無理矢理外に連れ出しても本を持ちっぱなしだった。

『友達』だってまるでいなかった！！

慰めても、気にしちゃダメって言っても、ネギを笑わせようとしても……いつだってそう！『ノレンにクギ』よ！！！！

……私だって悲しいのに、私だって寂しいのに、私は泣きたいのに……。

私より年下のアイツがそんな風にしてたらなんにもできないじゃないの……！！

ホントに……ホントに、ホントに！ホントに！！ホントに！！……ホント、に……い……。

「アーニヤ……さん」

「なに、よう……」

「アンタ、泣いて」「なゝいてゝなゝんかゝなゝいわよゝっ!」
でっ、でもっ「そうにやよ、アーちゃんは泣いてなんかにやいもん
ね」桜子?

……あつたゝかゝゝてイイ……にゝおい……。

「アーちゃんはただ……これから叫ぶ練習をするだけにやのさ!」

「……へ?」

「そうそう、元気はお腹から!声もお腹から!やつはああああああ
あああああああああああああああああああつ!」

「やはあああああああああああああああああああああああ
あああつ!」

「っちよ!アスナ!いんちよ!何があつたのさ!」

「朝倉さん!?それにみなさん!?一体いきなり何なんですの!」

「それはこっちの台詞よ、あやか。」

いきなり怪我をしたアスナさんを連れ込んで私と夏美ちゃんを締
め出したかと思つたら……隼人先生に連れられてアーニヤちゃんが
お泊りにココに来るし」

「なんかあつたんかなゝ思つたら桜子にゆゝながアーニヤちゃん連
れて入つてくし」

「いきなりの叫び声が部屋から、何かあつたのかなあつて思つて」

……いっぱいの、沢山の人の声が聞こえる。
でもそれはどうでもイイの。

私は桜子ねえの胸の中で、姿は見えないんだけど裕奈ねえの声が聞こえて。

「やはああああああああああああああああああああああ
あああああつー!!」

……桜子ねえ。

「やつはああああああああああああああああああああああ
あああああつー!!」

裕奈ねえ。

「何かわかんないけど僕たちも叫ぶぞおおつー!!」

「ですうううつー!!」

「何コレ？新手的応援？」

「双子に伝染してるし……ガキだねえ、やつぱ」

「でも叫ぶのって気持ちーよねっ」

「せやせや、それは言えとるわ」

「スッキリする……のかな？」

「あゝ……もうっ！アンタらうるさいのよオオオオオッ！！」

「もう夜だという事をわきまえなさいっ！！」

「「「アスナが叫んだ！！」」

「「「いんちよが怒った！！」」

……あのね、私ね……。

「……ひっ……ひっぐ」

「私らも叫ぶぞおおっ！！」

「「「「「おおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

「！」「」「」

「スクープ欲しいっ！！」

「まつ屋で付いた脂肪がおちますようにっ！！」

「恋愛経験なくせに恋愛の相談とか受けてるんじゃないんスよっ

！！」

「おもしろい事起きろーっ！！」

「ウチに踏み出す勇气がありますようにっ！！」

「……うるせー」

「漫画賞総ナメ！パル様帝国の始まりよっ！！」

「強いヤツと闘うアルっ！！」

「んっ……特に無いでござるな」

「弾代が安くなればイイけどね」

「おじよっ、このっ……仲よーなれたらええなあ（ボソッ）」

「バカばっかです」

「隼人先生が私を押し倒してくれますように」

「牛、肉便器になればイイネ」

「なっ、なんか過激な発言！？」

「悩みがなあいつ！！」

「ネギ！一発は叩き込んであげるからねっ！！」

「加減を考えてくださいね、アスナさん」

私、泣いてもイイのかな？

三十七匹目 何でもそうだが『出す』と楽になるよな（後書き）

若干後半が無茶な気もしますが『2 - Aだし』と流してくれれば嬉しいです。

三十八匹目 『変わる』 ってのは人だけに許された特権っぽい（前書き）

皆様、あけましておめでとうございます。

今年は昨年以上に執筆に力を入れて、楽しんでいただければいいような作品にしていけたら……と思っております。

よろしければ本年も自分の拙い作品、『俺、転生したんだと』をよろしく願います。

三十八匹目 『変わる』 ってのは人だけに許された特権っぽい

麻帆良学園都市内のあるホテル。

元々一人部屋で予約していたものね、少し手狭な部屋にはベッドが一つ。

そこに私が腰かけて、その隣に数力月ぶりに顔を合わせたかわいらしい従弟がチヨコンと腰を置いているの。

でもビックリしたわ。

だって『認識阻害魔法』も何も書けず、何の対策もせず、悠々杖に乗って空を飛んでたのよ！

思わずもう夜なのに叫んじゃった私は悪くない……わよね？

バレてしまうよりも、誰か魔法使いじゃ無い人たちに見られてしまふよりも、ずっとずっとマシ。

……ちよっ、ちよっと恥ずかしかったけど……。

けふん！

とりあえずそんな感じに呼びかけてみたらすぐこっちに来てくれたわ。

『お姉ちゃん』って口に出して、ギュツと飛びかかってくれて。

私がどうしたのって聞く前に、ダメじゃないって咎めようと頑張る前に、ネギは声を張り上げてわんわん泣いちゃってた。

右のほっぺたは青紫色に腫れて、頭にタンコブも作って、よく見れば他にもすり傷もいっぱいあったわ。

『治癒魔法』で傷を治しても、声をかけて慰めても、何してもネギは泣いてばかりだった。

ホントは香坂先生に電話してみようかしら？って思っただけど…
…それにはネギが断固反対しちゃって。

結局私が予約してたビジネスホテルに連れて来たって事。

ちなみに私が麻帆良に来たのはこの大学に編入するため。

教師……をね、ちよっと目指してみようかなって思ってるの。

そう思えたのは七月のとある出来事から。

ネギとアーニヤが香坂先生と会って、勉強漬けだった私の従弟が年相応の子供らしさを見せてくれて。

私たちの故郷が悪魔たちの大群に襲われた雪の日、それ以来決して浮かべる事が無かった笑顔をネギは見せてくれた。

マギステル・マギ

『偉大なる魔法使い』になろうとする以外に自分の欲みたいなのを出さなかったネギが『香坂先生の所に行きたい』って、そんな願望を出してくれた。

普通の子供みたいにどんどん行って行ったネギを見て……なんだかわからないけどとっても胸が温かくなって。

ネギがそうなるよう外に連れ出してくれた香坂先生を見て……そんな人になりたいなって思えたの。

同じ場所に立って、同じモノを見てみたら、そんな素敵な人になれるかしら？

ネギにとって、アーニヤにとって、胸を張って自慢できるようなお姉ちゃんになれるかしら？

そう思っで、日本に来てみた。

私はメルディアナ魔法学校で『治癒』や『解呪』についての『魔法薬』の研究者見習いとして働いていたんだけどね。

自分でやりたいって思えてやってた事だったんだけど、新しく生まれた想いの方が強くって。

迷惑かしら？って思えたけど、国際電話使って相談してみた香坂先生も『イインじゃね、若いんだし』……そう言ってくれた。ネギもアーニヤも『小学校』に行っで、今までとは全く違った所で触れた事も無いようなモノに自分の意志で触れている。

だったら私も頑張っでみるのもイイかもしれない。

まだ私は20歳。

例えば自分には合わない道だったとしても、やり直す事はきつと幾らでも出来る。

だからいろんな経験をしてみたい。

教師になる為に学んで、こっちでも魔法薬の研究はしてみで、日本の伝統文化に触れてみて、友人を作っでみて。

それに……その、あ……えと、好きな人……とかも、見つけてみるのもイイかもしれない。

人として深く、人として大きく、そんな私になりたいから……それはきつと無駄にはならないはずよね。

まあ私の話はこれくらいにしておいて、今はネギの事を考えないと。

「ネギ、何があったか……話してくれる？」

「……うん」

そしてネギは話してくれた。

何でほっぺが腫れてて、何でいろんなところにすり傷があるかを。

ネギの話を聞くに、ネギは今日図書館を訪れていたそうなの。

インターネットを使って麻帆良学園都市を調べて、必要な資料を取り寄せた時にも載ってた『図書館島』ってところ。

そこにアーニヤと、ここで出来た『友達』と一緒に本を読んだいたらしいわ。

けれど同じクラスの子が知らない子を連れてやって来て、本を探してうろつろ歩いていたらネギを見つけて。

「『お前のお父さん、死んだんだってな』っていきなり言って来たんだよ！！」

僕、その子たちに何もしてないのに！

僕の事『厄病神』だって！僕がいたからお父さんが死んだって！！

だから！……だから……！」

「その子たちに手をあげたの？」

「そうだよ、僕は悪くないもん」

何となくだけど、ネギにそう言った子たちの気持ちはわかる。それはメルディアナ魔法学校でもあったような事だから。

……ネギは『英雄』であるナギさんの一人息子。

偉大な父親の跡を継げられるような、誰もがそう期待してしまうような『天賦の才』をネギは持っている。

目の前の従弟は10歳にも満たない少年。

だけどその身に秘める『魔力量』は普通の魔法使いの数十人分、魔法を使う才能も二学年の飛び級を軽々こなせる程に凄まじい。

『基本魔法』に於いては『ここ十年最高の成績』と先生方から太鼓判を押されるほど。

大学卒業が出来るくらいの知識を持ち、新しい物事は真綿が水を吸うかの如く取り込んでいく。

『一を聞いて十を知る』、そんな言葉を体現するような『天才児』。

更に魔法だけに留まらず身体能力も同年代をはるかに凌ぎ、加えて言えば容姿もひどく端麗。

そんな子が一人いて、誰一人として友人がおらず一人ポツンといったら、周りの人間はどう思うのかしら？

簡単よね、そんな事。

私だったらきつと、ネギの事をまるで知らずに、そんな年下の少年と一緒に学ぶ事になっていたら……『嫉妬』するでしょうね。

才能に、持って生まれた『凡人との壁』に。

もちろんわかってるのよ、そんなことしたって何にもならないことくらいは。

でも……だからって割り切れる人ばかりじゃない。

女の子ならまだその人に『憧れ』を抱いて、それが『好き』って気持ちになっっていくかもしれない。

けど男の子だったらそうはいかない。
更に女の人気も独り占めされちゃったら、そんな想いは悪い方向に加速するに違いないわ。

メルディアナ魔法学校でもそんな動きはあつたらしいの。
ネギが日本に行くまではそんな事まるで知らなかったけど、おじい……校長先生が教えてくれて初めて知った。

私はまさかネギが嫌われているなんて、思ってもみなかった。
でも蓋を開けてみればまるで反対。

ネギの事を好きな人が男の子の中には一人もいなかったのよ。

ネギをイジめてやろうっていう動きもあつたらしいけど……それは事前にメルディアナ魔法学校の先生方がその動きを潰してたそうなのよ。

の。

そうならば更にネギを疎ましく思うに違いないわね。

『英雄』でも何でもなくせに、ただその子供だってだけなのに、目に見えて鼻屑をされる。

メルディアナ魔法学校は全寮制で誰かと同じ部屋にならないといけない事になっているのだけど、ネギは一人部屋だったわ。

内層も他の子たちと比べれば豪勢に作られていて。

外泊するのだって届け出が必要なのに、ネギにはそれが要無くて、来たい時に来たいだけ私の住んでいた部屋に来ていたの。

……結局知らないまま、その方が良かったんだとは思っけど、ネギも私もそこでの生活を続けていたわ。

私は忙しかったし、いつもいつでもネギの事を気にかけてあげる事は出来なかったし……違うわね。

『気にかけてよう』と思ったなら、ちょっと変かかって思ったなら、いくらでも対策は取れたはず。

私も私で辛い経験をしたネギに真っ向からぶつかって行く事が出来なかった……それだけの話。

多分アーニヤは知っていて、何とかしようと頑張っている。

私の部屋に外泊届を出して止まりに来た時は、いつだって痛いくらいに強く私を掴んで寝ていた。

それはきつと、私に助けを求めているの。

小さな体の、私よりずっと年下のアーニヤは、大切なネギがそんな状況にあるのに耐えられなくて、でもネギよりもちょっとだけお姉さんだから、自分を必死に奮い立たせて。

……私はやっぱり、ダメなお姉ちゃんだったのね。

ふふふつ。

……私は……恐かったんだと思う。

その事実がネギを傷つけるかもしれないのg……じゃないわ、『私自身の手で未来の英雄を潰してしまうかもしれない事』が。

なんだかんだネギに、アーニヤに言っておきながら、結局はソレ。

私は『ネギ』じゃなくって『ネギの後ろの英雄』を、『ネギの才能』を、『ネギへの期待』を、いつだって考えていたの。

だから動けなかった、本当にネギの将来に必要な事をする為に。だから触れられなかった、本当のネギの心に。

でも……もう違う。

私はもう違うの。

八月……ネギとアーニヤが日本に行きたいって言うてくれた時に、どうかしら？って香坂先生に相談しよう……不躰だったかもしれないけど校長先生に番号を聞いて電話をした時から……私は変わろうとしているから、きっと変わったはずだから。

『イイじゃねーの、俺としちゃ大歓迎ってヤツだわ。』

てかむしろ俺の方からどうかねえとでも持ちかけようと思ってたしよ』

『そうですか……それならどれくらゝそっちが良けりやあさ、三月まで通してもかまわねえぜ』……迷惑じゃありませんか？』

『ハッ！ だつたらんなこたあ言わねえよ……にしても変わったよな、お嬢ちゃんも。』

見た限りじゃぜってーにダメだとか言いそうなイメージだったんだがさ。

ウムウム、実にイイ姉ちゃんだと思っわ』

『そんな事……ありません。』

香坂さんが二人に会って、それからずっと考えてみましたが私はそんな……そんなのじゃ』

『ふゝん……ま、どーでもイイけどさ』

『どうでもイイって二人の為にそんなのじゃ！……ダメ、じゃないだ』ダメじゃねーだろ』……えっ？』

『お嬢ちゃんはそうやって変わろうとしてんだろ、何の為とかゆーのは俺はよく知らねえからなんとも言えねえがさ』

『それは……そうかも、しれないです……が』

『イイんだ、それでよ。』

それがお嬢ちゃんやあの二人の為になるのかどうかはわかんねえが……人がこれまでの自分から変わるってのはスゲー難しい事だろ？

だったらんな事をしようとしてんだ、それで構わねえさ。

俺が言つのも何だがまだまだ若い訳だし、変わった先が違うつて思えばまた変わりやあイイだけの話だ。

いっぺん出来れば、後はいくらでも変われらあ』

『でも、それでm』ったく、賢いつてのはメンドクセーな』めつ、めんどくさい……』

『氣にくわねえなら頬でも張ってみろや、それでこれまでのテメエとはお別れだ。』

……それと、変わった変わってねえはテメエが決める事じゃねえ、ネギとアーニヤが決める事だろうが。

笑ってつか、アイツら？』

『……はい、楽しそうに』

『それならそれでイイんだよ。』

じゃあまた連絡でもしてくれや……っと、俺のメアドとか知ってつか？』

あの時叩いた頬の痛みは今でも覚えてる。
だから私は……私になりたいって思った人みたいになる為に、私は変わる。

隣に座る従弟の赤毛はやわらかくって、やさしく撫でてやると気持ちよさそうに目を細めたの。

「どこで……ナギさんの事を聞きつけて来たのかは知らないけど、ネギがそうやって怒ったのは構わないわ。」

私だって、そう言われたら怒っちゃうかもしれないもの」

「お姉ちゃん……そう！そうだね！

僕は何にも悪くないもんね！？」

「そうね、その事に関しては私は何も言わないわ。」

でも、何でネギのほっぺたはそんなに腫れてるの？

メルディアナ魔法学校で戦闘訓練とかもやってたはずでしょ、同学年の子にそんな傷つけられるとは思わないのだけど……」

「これは！その……お兄ちゃんが……」

俯き口を閉じるネギ。

視線をゆらゆら漂わせて、小さな手をキュッと握る。

「……そう、ネギは香坂先生に『自分とは何も関係ない』って言うちゃったのね。

それと止めに入ってくれた、大切な友達の事を傷つけてしまった……」

「えっ!？」

驚いた顔をして私を見るネギ。

……こんな魔法、本当はどんな事があっても使っちゃいけないはずなんだけど……あとでネギに何と言われても構わない。

私はネギの為、本当のお姉ちゃんになるため、ネギの為になる事をする。

ネギの考えが私の頭の中に入ってくる。

『読心術』、極めれば全ての人間の本性を暴き晒す事の出来る……極めて危険な精神系の『禁術』。

対策として一応はその概要を教えられるんだけど、誰か人に対して使う事は絶対にダメだって言われているそれで、ネギの中を暴き晒す。

パーンと快音が私の耳に飛び込んでくる。

お餅の様な方を叩いた手の平はとっても熱くって、熱くなる目頭を、そこからこぼれる涙を必死にこらえながら私は呆然としたネギの肩をつかんだの。

「男の子が女の子に手を上げて！お友達に手を上げて！謝りもせず
に逃げる事は正しい事なの！？」

それに貴方は……本当に香坂先生の事をそんな風に思ってるの！？

ネギにいろんなものを見せてくれて！いつだってきつと貴方の事を
気にかけて香坂先生の事を……！」

「うえ……ひつくつ！でも……でもお……」

大粒の涙をこぼすネギ。
縮こまった体をギュツと抱きしめて、私はもう一度頭をゆっくり撫
でる。

「貴方の大好きなお兄ちゃんは、そんな事をする人？」

「ちかうよう」

「貴方の大切なお友達は、そんな事をする人？」

「ちかうう」

「じゃあ二人はそんな事をしてしまったネギが謝っても、許してく
れないような人？」

「ちかうもん！」

ネギを胸の中から離して、溢れる涙を拭きとってやる。

「謝れるわよね、ちゃんと……『ごめんなさい』って言えるわね？」

「……うん」

グシャグシャの顔で笑って見せるネギ。

……大丈夫、今のネギは甘えん坊なだけのネギじゃない。
日本に来て、少しだけ男の子として成長してる。

ネギ……ネギは変わったのね。
じゃあ私ももつと素敵な人になれるわよね。
もちろんネギも、もつともつと。

人はどれだけでも大きくなれる、どんなものにも変われる。

頑張ってみましようね、ネギ。

私と貴方が見ている、『本物の背中』に追い付けるくらいに。

「じゃあ久しぶりに、一緒に寝ましようか？」

「うん！ー！」

三十八匹目 『変わる』 ってのは人だけに許された特権っぽい（後書き）

本編突入まであと五、六話くらい。

休みの内に突っ込めればいいなあと思っております。

三十九匹目 誰にだっていろんな事情がある（前書き）

ご指摘にありましたのでカッコ内の行感覚をちょっと変えてみました。

ご意見出来ればお願いいたします。

三十九匹目 誰にだっているんな事情がある

さて……と。

とりあえず予想外なヤツが一人ばかりいるが俺が声かけて集まってくれたんだからな、理由を説明しねえといかないな。

何にせよ悪い事したと思うわ。

日曜の、しかも夕食時だしさ。

家庭があるガンちゃんや光さんには特に……まだちっこい娘さんもいるし。

「あ……ともかくこんな時間に呼び出してすんません。」

実はウチにいるネギの事で、ちと問題が発生しましてね」

「えと、隼人君……それはかなり拙くないかい？」

「あ、やっぱりっすか？」

「……こつ、香坂！それは一大事だろうが！！」

何をそんなにあつけらかんと馬鹿みたいに構えている！どこに行つた！？どこに行つた！？

早く探し出して何も無かったかのようにその問題を解く「どうどう、ガンちゃんどうどう」「むごうあつ！？」

やっっぱりガンちゃん喚きだしちまったか。

まあなんだかんだ言つてここにいる『魔法先生』の中で一番『正義

の魔法使い』に近い存在だしよ。

なんつーか……正義感が強い？

真っ直ぐっつーか、真っ直ぐ過ぎるっつーか、猪っつーか、イイ意味でも悪い意味でもなかなか自分を枉げられねえっつーか。

昔俺と会ったばっかしの頃に比べりやかなりやわらかくなったんだが。

……ぶっちゃけ初対面、俺が蹴りかかったのが一番の問題のような気もするんだがその辺はよ。

けどさ、ガンちゃんが無茶なところもあったんだぜ。

まほーせーとになった時はやいやい煩しかったし、『魔物使いです』つつてスラぼう見せた時は否定的感情しか持って無かったし、エヴァとダチになってゼロを頭に乗っけ出した時はもう酷かったもんさ。

ま、今考えりやガンちゃんはガンちゃんなりに俺の事心配してくれてたんだと思うがな。

『広域指導員』も務めてたから顔合わせる回数はかなり多かったし、騒ぎ起こしてた時に止めにくるメンバーには必ず入ってたし。

まあ無理矢理飲み連れ込んでベロベロになるまで酔わせた事もあるってさ、他の生徒なんざと比べれば幾倍も『顔見知り』で『知り合い』だった訳だ。

だからこそ俺らがやってた素人同士の『喧嘩』じゃなくて、本職さん同士の『殺し合い』をする『裏の世界』に関わるのを間接的に拒んでた訳で。

『魔物使い』って『裏世界の常識』と照らし合わせれば明らかに『異常』と取れる様な、そんな存在として俺はそっちに足を踏み入れ

た訳で。

しかも『陰陽師』みてえに『下僕』として扱ってんじゃなくって『友人』とか『家族』として扱ってた俺に対して『そいつは拙い』ってのを伝えようとしてくれてた訳で。

さらに『悪の象徴』としても捉えられるエヴァと友達になってた俺に『それ、マジヤバ』って教えようとしててくれた訳で。

当時は『ウゼ』くれえにしか思わなかったが……イヤイヤ、俺は悪くねーよ。

ガンちゃんがあまりにも不器用というか素直じゃないっつーか、かなり高圧的だったのは間違いないしねえ。

ともかくそれは俺は俺の周りへの罵倒としてしか聞こえなくってさ、おもったくそ反抗してたんだがさ。

……けど間違った選択はしてねえとは思っわ。

「相変ワラズチツチエーナ」

「ぐあぐえぐあぐあ!?!」

「ダカラアツチモチツチエーンドヨ」

「ぐいぐあぐああああああ!?!」

「ぴぎぎ」

「そだな、やっぱ仲良しだな」

なんでかって？

んなもん今の俺を見りゃ丸わかりだろうがよ。

「やんっ！もうっ、ガンドルフィーニったら！

何回何十回何百回見ても貴方の頬染は可愛い」

「……………」

「縋るような眼でこっちを見るな」

「あははははっ、まあすぐに慣れるよ」

スゲーイイダチ、スゲーイイ家族、ついでにスゲーイイ同僚。
まさに理想の環境ってヤツだな。

………つと、俺にメールか？しかもネカネちゃんから？

そいえば確か、今日か明日にでも麻帆良に来るとは聞いてたが……。

こつちでの編入試験受ければ大学生だもんよ、しかも教師志望で。
上手くいけば後輩になるかもしれねえ………つてか薫と同じ学部か……。

ま、だったら大学生活も大丈夫だろうよ。

アレで面倒見も結構イイかなあ………アイツ。

ネカネちゃんはなんでもさ、向こうじゃまほーがっこー卒業して、
卒業課題でそのままガッコの研究室に配属されて頑張ってたって聞
いたんだわ。

しかもほとんど一般人だらけの場所に行った経験がねーらしくってさ。

だからドキドキなんだと、海外は初体験らしいしよ。

何にせよ楽しむことが大事……だが……！？

「ぴぴ？」

「アア、ドシタヨ隼人？」

「オウヨ！聞けよコノヤロー！！」

ネギのヤツ、見つかったんだとさ！！」

「何イ！？どこだ！どこだ！！早く可及的速やかにそこに向かわねば」とりあえず黙れ、ガンドルフイーニ」……神多羅木？」

イヤゝマジ良かった、ネカネちゃんとかいるなら安心だな。後でアーニヤにも連絡しとかねえ……っと、諸手を上げて喜ぶ場面なはずなんだがな……。

「あらん、そんな何かを隔ててなんかじゃなくって……ちゃんとした貴方の目が見たいわぁ」

急に真也さん、へぜちゃんと睨みあい始めちゃったよ。一触即発的な？不穏な空気が漂ってんだが。

「……へゼル・ダイナー、単刀直入に聞こう。

お前はこの出来事を、坂上教諭に伝えるつもりか？」

「へっ？えっ？」

「……………」

「ストレート過ぎるのは失礼っぽく聞こえたりするんだよ？」

「……まあそうかもしれんが、俺はこんな風にしか人に聞く術を知らんからな」

「それは知ってるけど、神多羅木君はちょっと気を付けた方がイイね」

「心に留めておこう」

ちと剣呑な雰囲気。

ま、仕方ないっちゃ仕方ないんがだが……俺のせいだし。

さっきも言った通りへぜちゃん自身と俺は結構仲良しで、イイ感じの交友をしていると思うわ。

道で会ったら話して、偶に飲みに行ったりして。

そんなモンが全くないのと比べれば天と地ってヤツだな。

……がよ、同時にへぜちゃんは坂上のヤロウと仲良しなんだ。
つつーか寧ろあっち寄り。

俺は坂上の事は好きじゃねえし、俺は坂上に嫌われてる。
んで顔を合わせれば小競り合いとかが起きてる訳だ。

ま、昔に比べれば俺は大人になったし、まともな態度取ってりや許容できるくらいの接し方になる事も多くなって、そんな頻度はだいぶ減ったんだがさ。

けど……どーも俺が『魔物使い』な事と『エヴァと仲良くしてる事』が気に入くわねえらしい。

そんな奴は麻帆良にはいっぱいいるんだが、その筆頭株なのが坂上って事だ。

四面楚歌みたいな感じの状況なんだが……俺だけだったらイイんだがな。

これまでだってずっと同じような状況だった訳だし。

けど今の俺はちよつと違う。

『英雄の息子』で『未来の英雄』と目されてるネギが、俺の保護下？にいるんだわ。

何度も言うようだが10にも満たねえガキに、そんな期待をかける『魔法使い』ってモンが、俺にはよくわかんねえ。

だが事実、今現在、そんな期待をかけられてるのは間違いねえ。

そんな大切な存在にもし嫌われ者の俺が粗相でもして、変なトラウマ植え付けただの、一生モノの傷を付けただの、んな事になったらもう俺は完璧に干されちまう。

なんでも『国家単位』、もとい『世界単位』のプロジェクトだと学園長からは聞いてっし。

『追放』が軽くって、運悪くなくったって『殺され』ちまうだろうよ。

ま、そんな感じで真也さんは坂上に今回の事を伝えねえ様、へげち

やんに圧力みたいなのをかけてる訳だな。
いやはや……テメエにも妙な視線やら疑いが降りかかっちゃまうって
のに……ホント、ありがてえ限りだ。

「やんないわよ、そんなみつともない事なんて。

そんな事したら隼人ちゃんに嫌われちゃうじゃないっ」

「イヤ、別に俺は気にしねーよ。

へぜちゃんのせいじゃねえし、どっちにしろ俺は反抗するし」

「あら、男前！……ま、私が言う言わない抜きにしても……和利さんはそんな事報告しないわよ。

あの人はちゃんと『教師』だし、他の猪とは一味も二味も違うから、本当にまだまだ子供のネギちゃんの為になる事だったら許容するはずだからねん」

……そいえば、俺がネギの日本での『保護者になる』って学園長に報告した時も、坂上は何も言わなかったんだよな。

寧ろ別のヤツは『断固反対』してたのを、押し黙らせたそうだし。

いまいち、アイツが良くわかんね。

むっちゃくちやに腐ったヤツならそんな事考えもしねえだろうに……。

まあ『勸善懲悪』、単純な子供向けドラマや小説、ゲームみたいにはいかないって事かね？

そろそか、アイツも『人間』だしな。

「それにね、アーニヤちゃんは私の初めての弟子よ。

あんな可愛い子が悲しむ事なんて、私……出来ないわっ！！」

「確かに単なる狂ったみたいなのは『正義信奉者』だったら、学園長が重要なポストには置かないかな。

ちゃんとした『人』で、ちゃんとした『教師』で、尚且つ冷静な判断の出来る『魔法使い』だからこそ『表』でも『裏』でも『主任』の一角を担ってる訳だし」

「……悪いな、少し言葉が過ぎた」

「イイのイイの、真也ちゃんも気にしないで。

実際に和利さんは隼人ちゃんの事もエヴァちゃんの事も、だー！
ーいつ嫌いだからねん」

「ケーーーーッケケケケケケケ！ソレハワカルゼー！」

「ぴぎぴぎ」

ふいー、何とか穏やかな雰囲気。

瀬流彦は一人置いてかれてるが……まあ段々慣れて、わかってくるだろ。

慣れてわかった時に出来ればこっちにいて欲しいなんざ思うのは、俺の我が儘かねえ。

「……まあ少々私も取り乱してしまっただが、ネギくんとアーニヤくんについては問題ないはずだ。

彼らはちょうど……」

ガンちゃん？

「彼らはちょうど……そう、あの人の死んだ娘と同年代だからな。

昔の自分と、今の香坂を重ねているはず……『教育』云々に関しては、何も口出してはこないさ」

死んだ？娘が？

んなの俺は知らねえよ！？

離婚して逃げられたんじゃないのか！？

ちよっ！んな話俺はしらん「あ、ゴメン……僕の電話だ」……光さんか……。

じゃなくって！！

「ガンちゃん！そらだ「隼人君」っへ？なんすか？」

「電話、かかって来ちゃった」

誰から……ってマジで？

「うん、多分予想通りの人から」

「アスナさん！昨日は本当に……ごめんなさい！！」

「ふん、ホントに悪いと思ってんの？」

「はい！本当にすいませんでした！！」

「そ、ならいいわ」

「……ふえっ？」

「だからもういいつつてんの。」

「アンタは年下だけど、一応私ら友達でしょ？」

「だったら謝られたらパツと許す！ズリズリ引きずるなんてみつと

もない性格、バカだからね、してないのよ」

「アスナさん……」

「ま、そこは昔から見ていて唯一この方が誇れるところですから。

先の言葉に嘘は無いですわよ」

「どーゆー意味よ」

「そのままですわ、アスナさん。

ま、とにかくネギさんと仲直りしたのですし」

「ってあやか！時間が！」

「あっ、あら……」

「このボケネギ！アンタ待ってたら遅刻しちゃうところじゃないのよ！……」

「僕のせいなの！？」

「そだよー、2・A一同やバヤバナカンジ？」

「いつそぐにゃー！！」

「「「おおー「おっと、ストップだデメエら」あ、隼人先生おはようございまーす」「」」

「オウ、おはよう。」

あーっと、とりあえず雪広」

「はい、何でしょうか」

「今日の朝のHRな、フリーが俺は出れねえんだわ。」

って事で新田先生に頼んでっからそこらへん、よろしく頼むぜ」

「っちょ！隼人先生！何で！？

しかもよりによって新田とか……ってみんなもう走り出してる！

？」

「『最速』の称号はこの桜子ちゃんが頂いたのさっ！」

「ゆーなターボ！全開！！」

「へへっ……走る事だけは、このクラスでも負ける気がしねえっスよ！」

て事でお先」

「桜子に食券五枚！」

「ミソランに食券十枚！！」

「誰が判定する？」

「では拙者がショートカットして……」

「相変わらず元気だねえ……って事でネギ」

「あつ、あのねお」 「テムエに呼び出しがかつてる」……え？」

「隼人お兄ちゃん！それってどーゆー事よ！？」

「とりあえずアーニヤ、黙ってな」

「うう……」

「呼び出したのはテムエが殴ったガキの一人と……その親だ。

保護者同伴……つまり俺と一緒に、初等部生徒指導室まで来ても
らうぜ」

三十九匹目 誰にだっていろんな事情がある（後書き）

予定では後四話で原作。
ついにです。

四十匹目 兄貴分の役目はたった一つ（前書き）

総合評価が六千越え……ホントありがとうございます！

これからもよろしければ自分の拙い作品をよろしくお願いいたします。

四十匹目 兄貴分の役目はたった一つ

麻帆良学園初等部校舎。

いつもは僕が勤務している学び舎のとある教室に、今三人の大人と二人の子供が詰めている。

向かい合った二つの机、それに呼応して置かれた二つずつの椅子。僕が座る椅子を何と言ってイイかな……端の境目？

ともかく座る大人と子供、その二組が見渡せる位置で腰を下ろす。

目の前の子供二人はもちろん僕自身知っている子たち。なんとたつて担当する生徒だもんね。

一人はクラスーのスポーツマン。

その頬はぶつくら腫れており腕には包帯、痛々しさが見て取れる。

もう一人は九月に転入してきた『英雄の息子』。

何となくバツの悪そうな顔をしながら、チラチラ隣の青年の方を見ているね。

「……貴方が保護者？随分と若い親御さんなんですのね！」

「まあまだ23つすからね」

「23歳！？それで高学年の子供を！？」

「イヤ、俺は確かにコイツの保護者なんすが親Z「これだから最近の親御さんは！若いうちに『責任』も何も考えず目先の欲望に手を伸ばす！貴方の我が儘で貴方の子供がどれだけ苦労をするのかわか

「つているのですか？」……あの……聞いてます？」

「わかりました！よくわかりました！！」

「そもそもイイですか！子供が話し合いを無視して『暴力』に手を染めたり『非行』に走る大きな原因は親にあるのですよ！！」

「親が無知で無策で無能だからこそ子供は自分の本来進むべき子供らしい道を踏み外してどうしようもない『不良』へと成り果ててしまうのです！！」

「以前私がここ麻帆良学園都市で貞淑な学生として日々学業に、運動に、仲間との触れ合いに励んでいた時にいた『蛭堕亞蘭弩』とかいうふざけた集団のように！！」

「あ、それ俺のチームっすわ」

「————ッッッ！！！」

「……あ、あはははははは。」

「隼人くんも余計なこと言わなくていいのに、妙なところで律儀というか、正直というか。」

「そこはとってもイイところで、彼の美点なんだけどねえ……ちょっとタイミングが悪いかな。」

「大人二人は目を泳がせて言葉の弾丸を受け続けているネギくんの保護者、隼人くん。」

「それとマシンガンのように撃ち続けている『柴山春樹』くんのお母さん。」

このお母さん、初等部でちょっと有名なんだよね。

ヒステリックなところが少しあるみたいで……って、教師の僕がこんな事を言っちゃマズイか。

でも彼が一年生のおかげから、一学期に必ず一回は何かしらのことで乗り込んでくるんだよ。

たぶん今話題の『モンスターペアレント』。

『何でお菓子を学校に持ち込んだんじゃないんですか！お腹を空かせたらどうするの！』とか言われた時はビックリしたなあ。

ぶっちゃければ取り上げられて、怒られるの覚悟で持ってきてるんなら何も僕は言わないよ。

でも取り上げて怒ったら……クレームの電話。

普通はしらないと思うんだけどね、怒るところがおかしいと思うんだけどね。

まあそんな電話の対応は日常茶飯事、正直毎日辟易してるよ。

だから僕は食べる量が増えるんだね。

という事で、ダイエットはまた今度でイイかな？……とか言ったらまた娘の真紀に拗ねた顔されるんだろうなあ。

でもね、春樹くんのお母さん。

「いったいどれだけの女の子を手にかけたというのですか貴方たちは！」

そしてそのうちの一人に種だけばら撒いて……おおっ、おぞましい！！

私も貴方のグループの人に痴漢をされたりナンパをされたりしたのですよー!!

つまりあの後貴方たちは……私をどこかに連れ込み、せつ、性奴隷にしようとしていたんですねー!!

犯罪者ですよ！犯罪なんですよそれはー!!」

「……あ、思い出した。」

中一か中二のバレンタインにお礼だったってチョコとセーターくれたねーちゃんだ。

イヤ、結婚して子供もできてこんな風に再会するってのも不思議な縁っすね」

「ちっ、違います！あれは私ではありませんー!!ボーダーのセーターなんて私は送っていませんー!!」

「……そうでしたっけ？」

「そうですー!!当たり前ですー!!」

なんだか話がちょっとズレてる気もするけど……ともかくね。

まだ小さい時ならば露知らず初等部高学年の、男の子にとってはそうやって親が出てきて相手に文句を言っている姿を見るのは、凄く恥ずかしくてみっともない事なんだよ。

しかも自分が自分で悪いことをしてるってわかってて、無理やり突

つかかって言ったってホントはわかってて。
それで喧嘩を挑んで負けてしまった時なんて、一対一じゃなくて一対複数で負けた時なんて。

男の子はとっても悔しくて……なんとも言えない、そんな気分になっ
っているんだ。

「ともかく！子供の責任をとるのが親でしょう！

これだけの怪我を負ったのですから貴方とその子供で責任を取っ
てください！」

「……でも子供の喧嘩ですよ？

骨折れたとかだったならこちらも悪いことをしたとは思いますが……
坊主」

「へっ？」

「擦り傷だけだしよ、喧嘩も怪我也男の勲章だよな？」

「あ……あつ、お」「何が勲章ですか！」「……お母さん」

「謝って下さい……土下座して誠意を見せて、春樹ちゃんと同じだ
けの怪我を負ってください」

「つちよ！？柴山さん、それは言い過ぎですよ」

「……なんですか、先生は明らかに社会の道から外れた外見のこの男を弁護されるおつもりなんですか？」

「イエ、そういうつもりではなくてですな」

そうだよ！とは教師として言えないからなあ。

お母さん方のネットワークは凄いいし、学校側からも出来るだけ穏便に事を進めてくれとも言われてるし。

麻帆良学園都市全域にかけられている『学園結界』、これの影響でここにいる人たちは『異常』を『異常』と捉える能力が普通の人に比べてかなり劣っているからね。

だからこそ『魔法使い』とか『オーバートテクノロジーの機械』とか巨漢を吹き飛ばす少女とか、そんなのを不思議と思わない訳だし。普通『人対機械』なんて異種格闘技やってたらトトカルチョなんてせずに警察呼ぶもんね。

正直キレたりしたら何をするかわからないんだよね、こういう人たちは。

その行動の度合いも他と比べれば『異常』なんだけど、それを『異常』なんて誰ひとり思っていないみたいだし。

沢山の前例がこれまであったからこそ、僕たち教師は出来るだけ穏便につて厳命されてる訳で。

「……いや、そちらの人の言う通りつす。

なににせよ俺が面倒見ているネギがお宅のお子さんに迷惑をかけて怪我を負わせた、これは間違いないねえ」

「おにい……ちゃん……」

「……………」

「俺は一教師で、空っぽの安い頭なんすが……これでどうか勘弁してやってください」

そうだとわかってるからこそ隼人くんはそんな行動を取る。

自分は教師だっていう自覚があつて、こっちの事情を知っているから。

躊躇い無くそんな行動を取るんだ。

春樹君のお母さんの足元で、床にひざを折り頭を下げる隼人くん。その姿を二人の少年はじっと、ギョツと拳を握りながら見ている。

「教師、人を教える身分の方がこのような……何らかの処罰はあると思つていてください」

「甘んじて、受けさせていただきますわ」

「……じゃあ春樹ちゃん、お母さんこれで帰るけど……また何かあったらすぐに言つたよ？」

先生も二度と！このような事が無い様にお願いします」

そついい残すと春樹くんのお母さんは生徒指導室を後にしたよ。

「んじゃ弐集院先生、ちょっと連絡したいところがあるので職員室までイイですか？」

頭を上げて、机の上に置いていた二人をいつもの定位置に。
そうして彼は僕にそう呼びかけたんだ。

……そうだね、保護者である隼人くんに出来る事は全部済んだって
事かな。

ちゃんと大人として『責任』を取って頭を下げて。

『裁判』とかを持ちだしてくるような親御さんもいるからね、穏便
に済んだ方だと思うよ。

『子供の喧嘩に親が出る』。

こんな言葉もあるくらいだし昔から、そんな事はよくあったんだと
思うよ。

でもね……。

「うん……じゃあ二人とも、次の授業からちゃんと受けるようにね」

子供同士、生徒同士の問題は……二人に任せてみて、放って置いて
みて。

僕たち大人がやいやい横槍を入れずにいた方が、綺麗に解決する事
の方が多いと思えてしまうよ。

子供はとっても素直で純粋。

だからこそ容易に『喧嘩』や『もめごと』に発展する、なんたって
大人と違って自分の気持ちを我慢しないからね。

でもだからこそ容易にその問題を解決し、以前より良い関係になれ
たりする。

なんたって大人と違って、意地を張らずにちゃんと謝り、それを受

け入れる事が出来るからね。

「……………」

「……………」

「……………スプリングフィールド」

「……………うん、柴山くん」

「悪かったな、俺のお母さんがあんなことお前の兄ちゃんに言っ

それと……………ホントにゴメンな！俺、父ちゃんに話したらスゲー怒られちゃって、そのせいでなんかお母さんがあんな風に文句言つとか言いだしちゃって……………」

「……………」

「なんつったらイイかわかんねーけどさ、とにかくお前のせいでお前の父ちゃんが死んだとかウソだから……………ホントゴメンな」

「うん……僕の方こそゴメンね、あんな風に叩いちゃりしちゃって」

「イイんだよ、酷い事を言ったのは俺なんだし。」

てかお前も悪いんだぜ、元はと言えばお前が雪に……」

「雪？……ああ、同じクラスの『笹川雪』さん！柴山ちゃんと仲良しの！」

「ちげーよ、偶々家が隣同士なだけなの。」

ともかく……まあ色々あんだよ」

「うん、でもとにかくありがとうね」

「……オウ……けどお前が嫌われてんのはお前のせいなんだぜ」

「えええっ！？僕嫌われてるの！？」

「男子からはな、お前いつつも女子と一緒にいるじゃねえか」

「でも、アレはアーニヤに誘われるから……」

「男子の友達、いねえだろ」

「うつ……うつん」

「だからだよ、『オカマ』とか『男女』とか呼ばれてんのも知らねえだろ」

「うううっ」

「でも安心しろ！今日からは俺が友達になってやるからな！

そしたらお前も嫌われたりもきつとしなくなるぜ」

「イイの！？」

「もちろん！よろしく頼むぜ、ネギ」

「うん！よろしくね、柴山くん！」

「違う違う、友達同士だし春樹って呼べよ」

「うん、春樹くん！」

「それよりさ、ネギ……お前の兄ちゃんってもしかして香坂先生か？
？中等部の」

「そうだよ、知ってるの？」

「当たり前だろ！父ちゃんも知ってる有名人だぜ！

スゲー強くてカッコイイ人だって言ってた！父ちゃんが初めて
喧嘩した人なんだってさ！

それでさ、負けた後一緒に海に朝日見に行ったんだって！

俺も父ちゃんに連れてってもらったんだけどさ、スゲー綺麗だっ

た!!」

「ホント!? 僕知らないや!」

「だったら一回行くべきだな、うん行くべきだ」

「僕もお兄ちゃんに頼んでみる!!」

……うう……ううう……ううううううううううああああああ
!もっ!

何かものスゴく……なんていったらイイか……ともかく変な感じ
よ!

学校でもネギに何があったとかどうだったって聞こうと思ってもな
んか喧嘩したシバヤマと一緒にいたし! 結局学校じゃ何も話せな
かつたし!!

帰って来たら何でかわかんないけど隼人お兄ちゃんがいて、今は一
緒にお風呂に入っちゃって、まだネギとは何も話せてないし!!

……うう……どうすりゃイイのよ……。

ネカネお姉ちゃんは『香坂先生に任せておいたら大丈夫よ』なんて言ってココにはいないし。

なんかホテルに泊まりながら麻帆良で暮らすところ探す予定だったんだって。

こっちの大学に通う事にするってのは聞いてたしね、日本に来るのを楽しみにしてたんだけど昨日来てたなんて知らなかったわ。

なんとなくだけど、アスナと似てるわよね……性格は全然だけど。

でね、その予定だったんだけどハルカさんの喫茶店に住む事になったんだってさ。

部屋も開いてたみたいだし、隼人お兄ちゃんが頼んだみたいね。

ってそうじゃないわ。

教室で見た感じはなんともなさそうだったけど……でもやっぱり心配じゃない！

ホラッ！その……同じ村出身だし！！

のっ、覗いてやろうかしら……。

「アーニヤ」

「隼人お兄ちゃん！？ネギはどうだ……っただ……って前隠してよ！」

「バツキヤロー、風呂入んのに前隠すヤツがいるか。

銭湯やら温泉で必死にタオルで前隠すヤツなんざ、俺は認めねえよ」

「へえ〜……ってそうじゃないわよ!」

「ケケケ、気ニスンナクソガキ」

「ぴぴぴう」

「気にするわよ!」

……うう……なんかもじかもじあのぞうさんが……。

「テメエは俺と一緒に風呂入った事あるだろう……ってか偶に入るじゃねーの」

「そつ……そう言われたらそうだけどさ……」

でもやっぱりなんか恥ずかしいじゃない。

「つーわけでテメエも入れ。」

正直別々で話すのはめんどいし、裸の付き合いは大事だろ?」

……へっ?

でも……隼人お兄ちゃんだけだったら別にいいけど……ネギいるわよね?

「ぴぐぐぎ」

「ガキガ色気ツイテンジャーネーヨ」

「ぴぴぎ」

「ちよっ！まつ！？」

「一名様ごあんなぁ〜いとくら」

「こっ、こっち見ないでよ」

「見ないよ、そんな事言われなくても」

「うう……うあっ！？今触った！触ったわね！？」

「しょうがないじゃんか、三人入ったら狭いんだし……あ」

「こっち見んなアアアアッ！！」

「ぎゃぴーっ！？」

「つたく、アーニヤのヤツも色気づいてんな。
俺が折れてタオル身体に巻かせてやってるってのによ。
そんなにやっぱ恥ずかしいもんかね？」

「クロオオル！」

「ちょっ、お湯がかかるっ！」

「ケケケケケ」

「狭いんだから泳いでんじやないわよ!!」

「ケーーーーツケケケケケケケケケケ」

「ぴぎぴいゝ」

ゼロも楽しんでんな、スラぼうもリラックスしてっし。
やっぱ風呂はイイもんだわ。

結局あの後ネギと柴山だったか？喧嘩したガキが一緒にだべりながら教室行くの見届けて中等部校舎に戻ったんだがな、すぐに学園長に呼び出されてよ。

何でもあのガキの母ちゃんが『お宅の教員が息子に悪影響を与えた』とか言ってきたみたいだわ。

まあ悪影響与えてねえとは言いい切れねえし、俺元々評判はそこまで良くねえし。

学園のメンツを保つために持って事で『二週間の自宅謹慎』が言い渡されちまった。

もちろん無給でな。

対応とかはもつと時間がかかるんじゃないかねえのかつて勝手に思ってたんだが、今日文句言われて今日の内にだからな。どうもネギが喧嘩したとかネギが家出したとか、学園長になんかはバレてたみてえだな。

で、俺が頭下げるって事も予想済みだったらしく、すぐさま処分が下せるように準備してたみたいだわ。

まあ俺の事はどっちでも構わねえんだが……問題はネギとアーニヤの事だわな。

『監督不行き届き』って事でネカネちゃんもこつち来たし、あの子に保護者が変わんのかねえ？とも思ってたんだがそれはねえーみたいだな。

一応聞きに行ったんだが、何でもあの子が断ったんだと。

『勉強に集中したい』のと『自分と一緒にだったらまだネギやアーニヤが甘えてしまうかもしれないから』だと。んな風に自分を過小評価しなくてもイイのにさ。

ともかくどーせ俺が保護者やんのも来年の三月までだしさ。そこまでは俺一人でいった方が二人の為にイイんじゃないのかって事で決まったらしいわ。

ちなみにコレも坂上が推してくれたらしいね。なんか最近、いまいちアイツがわかんねーんだよね……嫌いだけだよ。

とまあそんな話はこれくらいにしといてと。
ちよつとしただが、俺の説教タイムだな。

「なあネギ、今日お前呼び出し喰らって俺が頭下げた時……喧嘩相手の母ちゃんに殴りかかろうとしてたろ？」

「……うん」

「何で殴んかったんだ？殴っても良かったってのにさ……イラついてただろうに」

「でも……お兄ちゃんに迷惑かかるかもって思ったし……それに、簡単に人を殴るのはダメな事でしょ？」

「そだな、そーゆー事だ、それが当たり前の事で、それがお前らの今いる世界の常識だ。

ネギにアーニヤ……どんな行動でもどっかで責任が伴うって事を、頭の片隅に置いとけ」

「行動には……責任が伴う」

「殴つたら殴り返されるかもしれないねえ、怒られるかもしれないねえ、非難されるかもしれないねえ……そんな事が起きるかもしれないねえって……そうなるかもしれねえって覚えとけて事だ。

「ちなみにネギが今日殴りかかってたら多分お前、二度と『偉大なる魔法使い』を目標せなかったかもな」

「え……えええええええつ!？」

「そりゃそうよ!『人の為に働く』のが『偉大なる魔法使い』なのよ!」

それなのに『怒られてムカついたから』なんて理由で手とか出して、なれるはず無いわ!！」

……まあ揉消されるか、見て見ぬ振りされるかになりそうだが……その辺は黙っとくか。

俺の場合は『少年院』にぶち込まれたからな、ネギと同じ状況で躊躇い無く相手ぶん殴って。

イヤゝ懐かしい思い出だわ。

通算したらどれくらい入ってたんだろ？

一年くらいかね。

今じゃイイ笑い話が酒の肴だわな。

「……まあアレだ、そうなったかもしれないって事を頭に入れとけ。

別に俺はさ、同じ状況になった時に俺の言葉を思い出して踏み止まれとか、『覚悟』とか掲げて行動を取れとか言う気はねえ。

ただ……もし、んな状況にテメエらが成った時、みっともなくその『責任』から逃げるとかしねえで、しっかりソイツを受け止められるような大人になれって事だわ」

「……わかったよ、僕逃げないような大人になる」

「もちろん！そんなカツコ悪い事はしないわよ！」

……なんかいまいちわかってねえみたいだな。

どう言えばいいか……言いたい事と若干捉えてるニュアンスが違うんだが……。

「クソガキども、逃ゲルノハワリー事ダト思ッテンノカ？」

「違うの？」

「ぴぎぎ、ぴぴぎぴい、ぎぎぴ」

うんうん、それが言いたかったんだわスラぼう。

さすが俺の相棒ってヤツだな。

「……お兄ちゃん、なんて言ったかわかんないんだけど……」

マジか？

つたく、まだまだってヤツだわさ。

「スラぼうが言ったのはな、『逃げるのは悪い事じゃねえ』って意味な」

「でもさ、さっき言ってた事と違うじゃない」

「ん……なんつーか……逃げるのが全部が全部悪いって事じゃねえって訳だ。」

逃げてもし、逃げてもし、逃げ切ろうとは思わず受け止める……逃げてる間にテメエの中の気持ちを整えて、準備して、テメエ

が生み出した『責任』に真っ向からぶつかれる人間になれて事よ」

まあ俺も夜の警備の時とか逃げてっしな。

最近はしっかり立ち向かってるけどよ、んな事できたのもそれまで逃げて、テメエの中で力を蓄える事が出来たからだしさ。

立ち向かって、挫折して、二度と立ち上がれなくなるよかずっとマシだろ？

カッコ悪いのは負け続けて逃げ続けるヤツだ。

起き上がって、立ち上がって向かい合える、振り向き踏みとどまれる、そんな事の出来るヤツはカッコイイだろ？
少なくとも俺はそう思うね。

「ま！言っではみたが、んなメンドクセエ事は全部俺に任せとけや！

テメエら見てえなガキは大人に責任取らせてナンボだ！

テメエの思うがまま、テメエの好きなように好きなだけやってみろ！！

それがガキだけに許された特権だかな！！

っつーわけでネギ！アーニヤ！テメエらはどんな『魔法使い』になりたいよ！？」

「僕は……僕はみんなを笑顔に出来る様な魔法使いになりたい！」

「そか……じゃあネギ！テメエは誰かと手を繋げ！」

テメエ一人で笑顔に出来る人数は限られてる、一人とか二人とかそれくらい少なえかもしれねえ……がそいつはしかたねえ、それが当たり前だ！

手、出してみな」

「うん」

ちつちえ手だな、すつぱり覆えちまうんじゃねーか？。

こんな幼い手にデカい期待を持てるようにしようとしてんだから……
…ったくよ。

「へへへっ」

「ケケケ」

「ぴぎっ」

「テメエが笑顔にした人間と手を繋げ。」

一人と手え繋げば二人だ、そしたらもっと多くの人を笑顔に出来るら。

二人と手え繋げば三人だ、更に多くの人を笑顔に出来る。

俺みたいなかっクイイ男と手え繋げば、腐るほどの人間を笑顔に出来る。

十人と、百人と、千人と手え繋げ、万人と手え繋げ……そしたら世界中の人間を笑顔に出来るかもな」

「うん！」

「ネギ……デメエはデカイ男になれ。」

周りの噂やら誰かの評価やら、んなくだらねーものに惑わされず相手のホントの自分を引き出し受け止めれるような……んなデカイ男によ」

「うん！！」

カカカツ、イイ笑顔だ。

今の気持ちを忘れねえ、俺の言った事が本気で出来る様なデカイ男になったら……マジモンの『英雄』になれっかもな。

「私は誰も泣かせないような、そんな魔法使いになってみせるもん！」

「そか……じゃあアーニャ！デメエは心を強く持て！」

ツライ事があっても、苦しい事があっても、齒ア食いしばって誰よりも長く立って、誰よりも早く立ち上がれ！！」

「あつたり前よ！私は泣き虫じゃないもん！」

「ケケケ、ガキ」

「どっ、どこがよ！！！」

……ハッ！確かにゼロの言っ通りだな。
ガキだねえ、まだまだ。

「アーニヤ、俺は泣くななんざ一言も言ってねえぜ？」

「でも……」

「イイんだよ、泣いて。

だからテメエの涙を、テメエ自身を、いつだって正面から受け止めてくれるような……そんな親友を作れ。

涙は明日の活力にしてみろ！テメエの涙を吐きだし！呑み込み！
テメエの力にしてみろ！！

それで……その親友の涙も受け止めてやれ、真正面からな」

「うつ、うつ！」

「アーニヤ、テメエは強い女になれ。

誰かに誇れるテメエじゃねえ、テメエの誇れるテメエになれ」

「うつん！！」

イイ貌だ。

ホントこいつは将来、どんなイイ女になるんだろうねえ。

……ネギ、アーニヤ……俺はテメエらに会ってたった数ヶ月だ。
まほーつかいが必死になつて持ち上げようとする『英雄の息子』だ
の『ウエールズの悲劇の生き残り』つてのには興味ねえ。
大義とか、正義とか、んなのにも興味はねえ。

だがな、テメエらは俺の大事な弟分と妹分だ。
肩書なんざ関係ねえ……それが俺にとってのテメエらで、それが俺
にとっての全てだ。

それで俺はテメエらの兄貴分だ。
だつたらやる事はたった一つ、単純明快。

「ネギ、アーニヤ……テメエらがテメエの心に従って貫いた思いな
ら、俺はそこでどんな『責任』を生み出してたとしても、俺が全部
吹き飛ばしてやる!!」

だからよ……テメエらしく突っ走って生きていこうぜ!なあテメ
エらアツ!!」

「うん!!!!」

「もっちろんよ!!!!」

「ケーーーーッケケケケケケケケケ!!!!」

「ぴぎぴぎ〜!!!!」

テメエらが誇れる様なデカイ背中になるだけよッ！！！

四十匹目 兄貴分の役目はたった一つ（後書き）

原作まであと三話くらい。

これまでに出来た登場人物の簡易紹介を開始前に入れる予定です。

四十一匹目 『盆と正月がいつぺんに来る』というが、俺の場合は正月と誕生日

遅くなりました正月ネタ。

四十一匹目 『盆と正月がいつぺんに来る』というが、俺の場合は正月と誕生日

く毎年恒例その一、表

「5……4……3……2……1……」

「新年明けましておめでとおおうー!!」

「あーんど隼人に誕生日おめでとー!!」

「オウ、さんきゅーな。」

俺も24か……随分テメエらみたいな中学生やってた頃が懐かし
く思えちまうわ」

「年とつたって事かじゃ？」

「さア？俺はまだまだ若いつもりだし……ま、どっちでも構わねえ
よ。」

年取ったらその分だけ渋くイカしたオヤジになりゃいいだけだし
さ」

「その為には結婚しにゃいと！

はるかねえともヨリ戻せたんでしょ!？」

「イヤーまだ微妙なところだな」

「そこら辺は詳しく聞きたいとだに、ゆーちゃん」

「ムッフ、この『恋愛マスター ユーナ・デラックス』が話を聞いてあげるからドーンと言ってみな!!」

「俺の恋愛相談に乗るなんざ十年はえーよガキども。」

「せめて彼氏一回でも作って、デートしてキスくれえしてからほざけや」

「でもさ、隼人にいみたくギラギラランってイカした男の子、いやいんだもん」

「私も、ゆーなちゃんのお眼鏡にかなうようなカックイー男の子、いないんさ。」

「おとーさんとまではいなくなっても、あんちゃんくらいは越えてもらわないとね!!」

「……先はなげえなあ、クッキにピッケ」

「なあう」

「ヌアゝゴ」

「それよりはいい、誕生日プレゼント!!」

「ちなみに私がネクタイでゆーちゃんがシャツだからに」

「これまた実用的な……ともかくありがとな」

「にやははは」

「にじじじっ」

「で、その手は？」

「「お年玉頂戴！！」」

■
■
■

「毎年恒例その二、表」

「そーいえばさ、ネギきゅんたちは？」

「一足先に龍宮神社、『紅白』見て『ゆく年くる年』見切るまで我慢できねーんだからガキだよな」

「まったくだにや」

「お前らも去年までそうだったわ。」

まあネカネちゃんもいるし、薫にも行かせたし、何とかなっただろ」

「はるかねえ誘わないの？」

「面倒だつてよ……っと、そいやココに戻らず『ユグドラシル』直行だからさ、荷物あったら持つてとけ。

どーせ先に寄るつもりだし」

「大丈夫大丈夫、先に寄ってきたしね」

「ちなみに桜子、今年のお前んとこの両親は？」

「いつもどーり温泉旅行……つて知ってるじゃんさ。

私かもーちっちゃい時から年末年始は隼人にいと一緒なんだし」

「まあそっただけどよ……裕奈んとは来るんだよね？」

「もち！多分もうお酒飲んでるからねー、程々について注意しとかないとー！」

「そか……てか毎年の事だが結構多いよなあ。

麻帆良出身の人間はだいたい親兄弟も麻帆良に住んでる事が多い訳だし、まあ仕方ないっちゃ仕方無いんだが……」

「んーっと……私でしょ、隼人にいでしょ、ゆーちゃんとゆーじおじちゃんでしょ、それとはるかねえと政利兄ちゃんと薫兄ちゃん、ネギきゅんアーちゃんネカネさん……あ、新田のおっちゃん来る

の？」

「新田センセは明日顔出すつてよ」

「じゃー政おじちゃんとは明日で、ガンドルフィーニ先生のところと式集院先生のところ、神多羅木先生と……あとレイ兄ちゃんか！

それにアスナとか木乃香とか、帰省しない人も誘ったしいっぱいだにゃー。」

そだ！政利兄ちゃんとレイ兄ちゃんに薫兄ちゃん以外にもチームの人、帰って来るの？」

「ああ……つてサムツ！？雪降ってんのかよ……と、瀬流彦を忘れてやんな」

「ホワイト正月　つてヤツだね！」

「後で雪だるまでも作つてやつか……んで……そうそう、アイツらは無理だと。」

何でも三が日に仕事入ってるらしくよ、まあ警官に運送は大変だつて事だ」

「帰って来たら遊んでもらわにゃいと！」

「お年玉目当てに頑張つてお酒を注ぐのが子供の仕事なのさ！」

■ ■ ■

「毎年恒例その三、表」

「あけおめ」

「ああ、おめでとう隼人。」

「じゃあ今年も変わらずクッキとビッケを預かってればイイのかな？」

「まあな……にしても teme すらも随分年とつちまったんだわさ。」

「確か4つくらいの時じゃなかったか、桜子がコイツら拾ってきたの」

「うん、多分それくらいだよ。」

「クッキとビッケのミルク貰いに来たのが始まりで、それから隼人にいと政利兄ちゃんがここにタマるようになったんだもんね」

「私とさっちゃんが会ったのもそれくらいだけ？」

「それもクッキとビッケに触りたくって話しかけた訳だし……お前

「結構すごいヤツだにゃ」

「なあ〜」

「ナウ」

「ま、そのせいで僕は君たちがいた野蛮な道に引きずり込まれたんだがね」

「よーゆーわ『古井レイヴン』、俺が政利と煙草フカしてたらいきなり殴りかかってきたのはデメエだろうが」

「仕方ないだろう『香坂隼人』、君たちのお蔭で人が寄りつきにくくなっていたのは事実だ」

「……………」

「……………」

「懐かしいねえ」

「まっただ」

「それよりネギきゅん待ってるし早く行かないと!」

「そうそう、『人を待たせるのはサイテーだぜ』ってあんちゃん言ってたじゃんか!」

「わーったわーった」

「早く〜」

「隼人、コッチの猫二匹は任せろ」

「……変わるか？」

「勘弁願いたいね」

■ ■ ■

「毎年恒例その四、表」

「やって来ました龍宮神社!」

「確かこの辺にいるって聞いてたんだけど……あ! いた!」

「……ちょっと待て、コレは……どーゆー状況だ？」

「ネカネさん! ここの甘酒がウマイんすよ!!」

「屋台は結構出てて、甘酒出すところにもあるんすけどね、やっぱりここが一番ウマイんすよ!」

「……あつたかくつておいしいです……ありがとうございます、豪徳寺さん。」

それにネギとアーニヤの分まで……お幾らでした？」

「イインすイインす金なんて！」

『女と遊ぶ時金を出すのは男』ってのは総長も政利さんも当たり前だつて言つてましたし！！」

「そーそー、オゴつてくれるつて言つた時はその行為に甘えないと！」

「うん、お兄ちゃんもそう言つてたよ」

「……本当にありがとうございます……おやさしいんですね」

「へっ……へへへへへへ、俺！パシリは得意なんでガンガン頼んじやってください！！」

ここら辺のウマイ屋台なら全部知ってますし！屋台のオヤジとは顔見知りですし！」

「ではそのご好意に、甘えさせて頂きます」

「コレは桜子ちゃんセンサーがキュキュキュイイン　って感じだよ！！」

「ひよつとしなくつても……ヒッヒッヒ、薫兄ちゃんも隅に置けね

えぜ」

「薫にも春が来たか」

■
■
■

〈毎年恒例その五、表〉

「まずはお賽銭にや……薫兄ちゃん、お金」

「ヘイヘイ、用意してるよ」

「五円玉……いれました！」

「そんで2礼2拍手、手を合わせてお願いして、も一回1礼」

「2礼2拍手……日本文化ってヤツね」

「まあ向こうは薫に任せときゃ大丈夫だろうよ。」

「つーわけであけましておめでとつな、ネカネちゃん」

「こちらこそあけましておめでとつございます。」

「すみません、なんだかアーニヤだけじゃなく私も晴れ着を着せて
いただいて」

「その辺ははるかに礼を言つとくれや。」

「アイツが着物持つてて、着付けも出来るからこそ桜子と裕奈もそ
うだが着れる訳だし。」

「そー考えりや去年までは私服だったんだよな……アイツらの、ん
な姿も久しぶりだわ」

「初めてですが……とても貴重な経験をさせていただきました」

「そか、そいつは良かった」

「な〜にお願いしたのかにや、薰兄ちゃん？」

「べっ、別に何でもイイだろうが！」

「にやはははは……キモい！」

「そこまで言わなくつても……」

「でもネギ、リーゼントの男がほつぺた赤くはちよつと変よ」

「それよかおめでとうな、麻帆良大。」

イギリスでの実績かなんかから編入扱いになるんだっけ？」

「はい、来年度から三回生としてだそうです。」

豪徳寺さんも同じ学年みたいですし、わからないところは頼ってしまいそうです」

「イイんじゃないね、それで。」

人間助けあってナンボ、折角アイツと縁が出来たんだ、思う存分利用してやりやイイさ」

「でもそれは何と言うか……気が引けるというか」

「んじゃ礼に弁当でも作ってやればどうよ？」

「お弁当……それもイイかもしれないです」

「オウ……ま、とりあえず今は今を楽しまねーと。」

おみくじ引くみてえだし、行つてこいや」

「ではそうしますね」

「……後は頑張れよ、薫」

「見て見て！十四年連続大吉たっせーい！！」

「ゆーなちゃんは中吉かぁ」

「僕は……凶……」

「ダッさ！私は大吉！！ネギらしいわ！！」

「私も大吉ね、豪徳寺さんは？」

「……末吉っす」

「薰兄ちゃんらしいにゃ」

「あ、アスナにこのか！龍宮さんは巫女服だ！！」

「どこどこ……ホントだ！あけおめー！」

「おめでとー……元気ねえ、相変わらず」

「おめでとーやで」

「お守り、買っていないかい？」

「……何にせよ、明けましておめでとうだな」

く毎年恒例その一、裏く

「あけおm「遅いッ!!」……仕方ねえだろ、『ユグドラシル』に集まんのは毎年の事だしよ。」

エヴァだって知ってんだろぅが」

「だからと言って今はいつだ!一月二日だろうが!!しかも正午を過ぎている!!」

「しゃーねーだろ、桜子と裕奈が中々潰れなかったんだし、一日の夜に新田センセ家族連れで来るし。」

まあ来てやったんだからさ、不機嫌になんなよ」

「ええい!そーゆー問題d「マスターはお節料理もお雑煮も食べずにカップ麺で昨日お食事を済まされておりました」何言つとるかこのボケロボがアアアアッ!!」

「事実です、超がひたすらマフラーを編み続けている隣でマスターは時折ため息をつきながらぼんやりとラーメンを啜りながらテレビを眺めていまして、巻いてやる巻いてやる」オチツケ御主人」もごあつ！？」助かりました、姉さん」

「気ニスンナ、妹ヨ」

「隼人先生隼人先生、私頑張てマフラー編んだネ。

プレッ、プレレプレゼゼントトトトトトトトトトトトトトトトした
かたから頑張て編んだネいはい編んだネ」

「ん、サンキューな。

鈴音もシビレ切らして乗り込んでこなかったのは偉いわ」

「……えへっ……えへへへへへへへへへへへへへへ……」

「黒い糸が所々に紅いペイントが所々か……ったく、もうちょいデ
メエを大事にしねーとイカンぜ？」

「……それで済ませれる隼人、お前はスゴイよ。

私だったら付き返してしまいそうだというのに、躊躇い無く首に
巻いているし」

「バーローはるか、俺が可愛い舎弟から貰ったプレゼント付き返す
ような男に見えっか？」

「見えないね、さすがは私の惚れた男だよ」

「ええい！とにかくとつと中に入れ！外は寒いんだ！！」

それにさっきからしゃがんで何をしている！？」

「雪だるま作り」

「ぴぴぎー！ぴぴぎー！」

「スラぼうが好きなの、知ってんだろ？」

■ ■ ■

「毎年恒例その二、裏」

「ホウ、中々イイ酒だ」

「政利ら、あの辺全員からのプレゼントだと。」

「つーわけで一日遅れちゃったが誕生日おめでとな」

「……構わんさ、元々の誕生日なんぞ忘れてしまっている。」

だというのにお前が『つまんねー』とか言い出して、チャチャゼ口とスラぼうと纏めて勝手に決めた日だ。

そう言ってくれるだけで……私はありがたいと思っている」

「隼人、俺ニプレゼント寄越せ。

御主人モ俺ニクレクレ」

「余計なところで茶々を入れるなボケ人形がッ！空気くらい読まんか……」

「まあイイじゃないか、こうやって過ごす正月も久々だし、正月は無礼講なもんだ。

私としては六年ぶりの席で、とても嬉しく楽しいんだがね」

「……フン、それくらいわかっているさ」

「わた私ワタシが作て見たネ、中華風おせちのエビチリ。

食べて食べて欲しいと私は思ったりしたイヤでも嫌ならイイネ、私がちゃんと先生が言ってくれたらたとえゴミ端に落ちた残飯でも土の中の虫でも何でも食べて見せるカラ！……でもでも……一生懸命……してみたネ」

「んな事言わなくっても食うつつの。

……ウマイが鈴音、もうちょい鉄分減らしてくれたほうが俺好み

だわ」

「スラぼうさんも、どうぞ」

「ぴぎぎぎっ！」

「きな粉もちか……おせちが済んだら私にも出せ」

「イエス、マスター」

■
■
■

「毎年恒例その三、裏」

「んじゃリャンピン捨てで俺リーチ」

「ムッ！」

「ケケケ、俺ハ『スーソー』捨てダゼ」

「ムムッ！」

「その捨て牌ポンだな」

「ムムオツ!？」

「……マスターの順番ですが？」

「わかつている！」

……フフハハハハハハ！私もこれでリーチだ「あ、俺ロン」は
「俺モ」なつちよ「悪いな、私もだ」……」

「ぴぎぎっ!」

「さすが隼人先生ネ!!」

「俺は『リーチ断么平和ドラ1』だから満貫な」

「『リーチ三色断么ドラ1』……裏モノツテツカ、ジャア『ドラ2』
で跳満ダゼ」

「『断么対々』、ドラは……無しか。」

親勝ちの5800だね」

「……空っぱ」

■ ■ ■

「毎年恒例その四、裏」

「な」エヴァ、高々麻雀だろ？拗ねんなよ」

「……煩い」

「ソウダゼ御主人、毎年ノ事ジャーネーカ」

「黙つとらんかあああああつ！！」

「困暮は強いのに麻雀が弱いのは相変わらずか。

まあ変わらないようで安心したよ」

「はるかっ！偶々なんだぞ！ホントに偶々なんだぞ！！」

「嘘付け」

「ボケタカ？」

「病院に行きますか、マスター？」

「エヴァンジェリンは隼人先生の友人……クヒュヒュ……脳のサンブルくらいもてきてあげるヨ」

「ぴぎぎ」

「お前だけだよスラぼう、慰めてくれるのは」

「まー気にすんな。」

「それよりホレ」

「……何だコレ？ニット帽か？」

「相も変わらず妙な特技だ、その身体と顔で裁縫が得意とはな」

「バツキャロー、半分以上テメエのせいだぜ？」

「俺んところでゼロが暮らすようになった時にコイツ、ゴスロリしか持ってたんだぞ」

「御主人ノガキ趣味丸ダシダゼ」

「フン、ほっとけ」

「『まほネット』で買うのも高えしな、やむを得ずスキルアップしちまったって訳よ。」

「ちなみに俺からのプレゼントだが、スラぼうとゼロも色違いのお揃いだからよ」

「ケケケケ」

「ぴーぎぎ」

「……ありがとう」

■ ■ ■

〈毎年恒例その五、裏〉

「ホレ」

「……んだこりや？『鞭』……か」

「まあな、私からの誕生日プレゼントというヤツだ。

ありがたく使え、私への感謝を忘れずにな」

「オイオイ、御主人コレ『ドラゴン』ノ素材ツカッテルジャーネーカ」

「……イヤ待て、高いんじゃないのか、コレ？」

「ぴぎ？」

「『ドラゴン』な……まあ私は見た事ないから何とも言えんが、高位の魔法使いとはいえ単体で倒すことは不可能だろうよ。」

「まほネット」でそれ関連の『魔法具』が出てたが、庶民には逆立ちしても手が届かないだろうね」

「私の『イオ』じゃ傷も付きそうにないヨ。」

多分そーとー高位の『ドラゴン』ネ、私わかたネ」

「イヤイヤイヤイヤ！俺こんなモン貰えね×「気にするな」……さすがに高過ぎんだろぅが」

「気にするなと言っとるだろうが。」

私が昔殺して、何かの折に使えるかと保存していた『ドラゴン』の皮やら鱗やら血やら骨やら髓で私が作ったからな、原価はタダの様なもんだ。

倉庫の奥で埃被って、正直邪魔だったからな……いい機会だったよ。

ちなみにお前の場合「気」か、それを注ぎ込まん丸まったままで『鞭』としては扱えんからな、気を付けろよ」

「……………」

「受け取れ隼人、何も言わずな。」

私からの友情と……感謝の証だ」

「……オウ、ありがとよ」

「フム……では名前でもつけてやれ。」

せつかく作った身として、無銘というのはどうも許せん」

「……『ドラゴンテイル』……ってどこでどうだ？」

「……イイ名だ、ちょうど尾骨を芯にしているしな」

「良かったですね、マスター。」

一年近くの頑張りが無駄にはならないで」

「だからそーゆーのが余計だと言ったんだろうがアアアアアアアアアッ！！！！」

四十一匹目 『盆と正月がいつぺんに来る』というが、俺の場合は正月と誕生日
隼人強化フラグ。

加えて『蜿堕亞蘭弩』メンバー四人目登場。

彼は偶に出て来た『北欧料理 ユグドラシル』の息子ですね。

四十二匹目 につき なまえ・ネギ・スプリングフィールド（前書き）

ようやくここまで……長かった。

四十二匹目　につき　なまえ：ネギ・スプリングフィールド

8月23日

今日お兄ちゃんから一冊の手帳を渡された。厚くって一日一日書けるところがある。お兄ちゃんはこれに日記を書いてみるって言ってきた。僕とアーニヤはそれを受け取った。アーニヤはうれしそうだった。僕もうれしかった。昨日の前に日本に来て昨日は『YAKINI I K U』を食べた。おいしかったから今度お姉ちゃんとも一緒に食べようと思った。魔法の勉強もしないといけないけど僕がもつと日本を見てみたいと思った。いろんなところに連れて行ってくれるって言ってくれた。アーニヤは日記を書き終わってたみたいだ。まだ書けてないのって言うてきたけど僕はまだ書きたいことがあるからって言った。日本に来るのに飛行機を使った。メルディアナ魔法学校から空港までは電車だった。おじいちゃんとお姉ちゃんも一緒だった。お弁当はお姉ちゃんが作ってくれて一緒に食べておいしかった。空港ではタカミチが待っていた。飛行機はとても高く飛んでいつか魔法でそこまで飛びたいなって思った。ごはんもおいしかった。もう書けそうにないから今日はここまでにすることにするので明日もまた書こうと思う。

8月24日

句読点を使ったほうがいいみたいだ。普通に書いたら見にくいみたい。こんな、感じ、かな。まだ、まだだ、なあ、って思った。今日はお、兄ちゃんに買い、物に連れて、行っても、らった。僕、はあんまり服、を持っていなかった、スプーンも、フォークもおはしも、昨日、とその前使った、のは、使い捨て、みたいだ。便利だな、

と思って、僕はそれ、でいいって言ったら、遠慮するなつ、て言ってくれた。あと句読点が多いみたいだ。難しい。それで今日僕とアーニヤはおちゃわんとか、おはしとか、服とかいろいろ買ってもらった。これでいいのかな。今日はご飯を食べに行った。『ODEN』って食べ物で、作ってくれる人はお兄ちゃんの友達みたいだ。アーニヤは『TIKUWA』と『GANMO』がおいしいって言ってた。僕は『DAIKON』が一番だった。

8月25日

昨日アーニヤは日記を書いてなかったみたいだ。僕が書いてる時に昨日のも書いてた。でもそれよりすごかった。日本のアニメは見たことなかったけど初めて見た。お兄ちゃんが言うに特撮らしい。よくわかんないけどすごかった。最初は悪者みたいだったけどいい人みたいで人のために戦ってた。僕もこんな風にカッコよくなりたいなって思った。ご飯の買い物に行ったらお菓子売り場にそれのお菓子があつた。ベルトが入ってた。ラムネが入ってた。テレビの上に置かせてもらったら、チャチャゼロさんにとられた。そのあとスラぼうさんにかまれていたけど。これくらいの長さにしてみた。字がちっちゃくって読めなかったんだって。あと字が下手みたいだ。

9月1日

明日から麻帆良の初等部に僕とアーニヤは行くことになった。昨日のその前のその前に学園長のところに行つて、僕とアーニヤはお兄ちゃんが言つてた学校に行つてみたいって言つた。学園長は笑いながらいいよって言つてくれた。

担任になるにじゅういん先生にもあいさつに行った。

そしたらこの前一緒にご飯を食べたお兄ちゃんの友達だった。

他にご飯を食べたガンドルフィーニ先生や、魔法を教えてくださいるか
たらぎ先生もいた。

給食も楽しみだし明日はとても楽しみだ。

今日は早く寝よう。

アーニヤは日記を書いてないみたいだったから、お兄ちゃんに早く
言えって言われてた。

9月9日

初等部に行って一週間たった。

僕は国語の授業と体育の授業が好きだなって思った。

日本語のお話をいっぱい読んだり、声に読んだりして楽しいから。

それで校庭で走ったりするのも楽しいからだ。

魔法を使ったらダメだってお兄ちゃんに言われてたから僕もアーニ
ヤも、魔法で体を強化していない。

そうしたら僕より走るのが早い人もいっぱいいたけど、とっても疲
れるけど、とっても楽しかった。

アーニヤは友達がいっぱいできたみたいだ。

僕も頑張って友達を作らなきゃって思った。

今日はアーニヤ達と一緒に折り紙を折った。

9月15日

今日は初めて僕に友達ができた。

お兄ちゃんとアーニヤとスラばうさんとチャチャゼロさんと一緒に
出掛けていた時に出来たんだ。

お兄ちゃんは先生をやっているんだけど、お兄ちゃんの生徒さんなんだって。

僕よりと5歳年上で、中等部に行っているアスナさんとあやかさん。アスナさんとあやかさんは幼馴染さんで、初等部からずっと同じクラスみたいだ。

僕とアーニヤもそうだったら幼馴染さんなのかなあ。

お兄ちゃんの友達がいる喫茶店で一緒に紅茶を飲んだけど、金髪の女の子と話をしていた。

アスナさんとあやかさんのクラスメイトさんみたいだけど、声をかけたらどこかに行っちゃった。

四人でお話ししてたらお兄ちゃんが野菜をいっぱい持ってきた。友達にもあげてみたいだ。

9月17日

僕とアーニヤに新しいお姉ちゃんができた。

お兄ちゃんの妹の桜子ねえとゆうーなねえ。

ファミリーネームの名字は違うのに妹は変だなって思ってたたら、妹みたいな存在だって言ってた。

僕にとつてのアーニヤって言ったらアーニヤに叩かれた。

今日は初めて料理を作ってみた。

僕もアーニヤも大好きなカレーライス。

タマネギは目に染みたけどいつもよりずっとおいしかった。

二人とも泊って行ったからスラばうさんとチャチャゼロさんはご飯を食べてなかった。

大丈夫なのかな？

9月20日

今日で日本に来て一ヶ月。

麻帆良のいろんなところに連れて行ってくれて、ご飯を食べたり遊んだりした。

イギリスにいたころだったら全然そんなことしなかったからとっても楽しくって、みんなみんなとっても楽しかった。

だからアーニヤとお礼にクッキーを焼いた。

あやかさんがお菓子を作るのは得意だったから、教えてもらいながら作った。

最初は焦げたりしてたけど、頑張ってみたらおいしくって甘いクッキーになってよかった。

学校のまだあるうちにお兄ちゃんに渡しに行ったから、お兄ちゃんと新田先生にちよつとだけ怒られちゃったけど、でも喜んでくれてよかった。

それと魔法の訓練に行くときにちよつと変な人を見たけど、大丈夫なのかな？

でもその人はすごい魔法を使ってた。

僕も強くならなきゃって思った。

9月26日

今日はなんだかお兄ちゃんが変な感じだった。

いつもよりちよつと夜遅くに帰ってきてた。

怒ってはなかったけど、なんだかよくわからないけど変だった。

スラぼうさんとチャチャゼロさんも変な感じだった。

大丈夫って僕とアーニヤが聞いたけど大丈夫って言ってたけど、大丈夫そうじゃなかった。

ご飯は初めてカップラーメンだった。

おいしかったけどなんだかさみしかった。

早く元気になって欲しいと思った。

9月29日

お兄ちゃんが帰ってきた。

金曜日からどこかに行つてたから、会えてうれしかった。
どこか行つちゃつてた時は弐集院先生のお家に泊まらせてもらつていた。

お兄ちゃんの料理もおいしいけど、それよりもつとおいしかった。
見たら変な感じも消えてて、いつもみたいなお兄ちゃんでもよかった。
僕たちを見たらギューって抱きしめてくれた。
ちよつと痛かつたけどあつたかつた。

そのあとガンドルフィーに先生とかたら木先生と新田先生がやつてきて一緒にお酒を飲んでいた。

お兄ちゃんの友達もあとからやつてきて、とっても楽しそうだった。

10月12日

今日はお兄ちゃんの友達がやっている喫茶店に行つてきた。

お兄ちゃんが麻帆良で学生さんをやつてた頃からの知合いなんだつて。

色々あつて麻帆良じゃないとこにいたみたいなんだけど、ちよつと前にこつちに帰つてきたみたいだ。

僕はコーヒーはあまり好きじゃないからお兄ちゃんと同じお茶を頼んだ。

アーニヤが紅茶はないのつて聞いてたらあるみたいだった。

でも常連さんのものしかなかったみたいで、今度から僕とアーニヤの紅茶もつておいてくれるみたいだ。

明日はアスナさんとあやかさんと一緒に図書館島に本を読みに行く予定。

麻帆良は魔法使いの町だって聞いた事あるし、魔導書もあるかも。ちよつと楽しみだなあと思った。

10月13日

(この日の部分は大きく塗りつぶされている)

10月14日

昨日初めて男の子の友達が出来た。

僕は、僕は…… 大きな人になろうって思った。

お兄ちゃんみたいになって、色んな人と手を繋げるようになりたいって。

お姉ちゃんやアーニヤやアスナさんやあやかさんや柴山くん、それにお兄ちゃん。

僕が友達を叩いたから、お兄ちゃんはすごく謝ってた。

父さんの事はとっても大好きだけど、僕はお兄ちゃんの事も大好きだから。

父みたいになりたいけど僕はお兄ちゃんみたいにもなりたい。

改めて、僕は僕の意志で、僕は『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』になりたいって思ったんだ。

10月28日

山にキャンプ、海に釣り、遊園地、バーベキュー。

星を見に行つて、朝日を見に行つて、夕日を見に行つて。

お兄ちゃんが僕のせいで学校を休む事になっちゃっていた。

でもお兄ちゃんは今もう全然怒らなくて、代わりに僕とアーニヤをい
ろんなところに連れて行つてくれた。

僕は初めて学校をサボってしまった。

でもいゝんなところでいゝんなものを見せてくれた。

お兄ちゃんのバイクにも乗った。

柴山くんが教えてくれたところにも行つた。

サボつたのは悪い事だけど、僕はとっても楽しかった。

11月10日

今日はお姉ちゃんも一緒に出かけた。

お兄ちゃんの案内で麻帆良の裏山に登つたんだ。

ウェールズに住んでいた頃に生えていた木とは全然違つてた。

でも綺麗に葉っぱが赤やオレンジ色に変わつてた。

紅葉つて、聞いた事はあつたし日本でも見た事はあつたけど、辺り
一面埋めつくされるくらいは初めてだった。

今日のお弁当はお姉ちゃんが作ってくれた。

アーニヤもおにぎりを作つたみたいだ。

グシャグシャだったからすぐわかつたけど、言つたら怒られた。

もみじの葉を拾つて帰るつてお兄ちゃんに言つたら、しおりを作つ
てくれるつて。

僕は本をよく読むからとっても楽しみだ。

11月22日

今日のはるかさんのお店にお泊り。

久しぶりにお姉ちゃんと一緒に寝るつもりだ。

いつもはお兄ちゃんと一緒。

偶にアーニヤも一緒に寝るんだけど、その時は僕が近づいたら怒るんだ。

でもいつも僕と一緒に寝てるのに、それはちょっとおかしいなあって思う。

はるかさんもお泊りするみたい。

アーニヤがお兄ちゃんのところって聞いてたけど違ったみたい。

今日は猫二匹が泊りに来るんだって。

クッキとビツケかな？

12月4日

ふわふわ今日は雪が降ってきた。

雪を見るとウェールズであつた事をどうしても思い出しちゃう。

悪魔の襲撃。

じつと思いついていたら春樹くんが雪をぶつけられた。

昔の事は悲しくって辛いけど、今僕に出来た友達を悲しませたらダメだよな。

仲のいい友達と遊ぶ時は笑顔でつてお兄ちゃんも言つてたから。

雪合戦をしていたら春樹くんが、アーニヤたち女の子が作つてた雪だるまを壊しちゃつた。

春樹くんと僕が雪だるまになった。

12月8日

今日は坂上先生と魔法の訓練。

『光』の魔法は強い威力だから、注意して使わないといけないって教えてくれた。

最近「魔法の矢」に使う魔力が減ってる気がする。

魔法に使われるのではなく魔法を使えって坂上先生は教えてくれたけど、僕はそんな風になれてるのかな？

あとアーニヤに色々教えてくれているヘゼル先生にもあった。

アーニヤはすごくイイ先生で、師匠なんて呼んでるけど、僕はちょっと苦手だ。

でもそうやって嫌うのはダメだと思う。

でも男の人なのに女の人みたいで、やっぱりちょっと苦手だ。

12月24日

今日はクリスマスイブ。

大きなチキンを買ってくれて、お兄ちゃんの友達とか武集院先生とかいっぱい集まってパーティをした。

ケーキもあって、桜子ねえとゆうなねえが取り分けてくれた。

苺が二つのってたけど、アーニヤにとられた。

チョコは僕より小さな子たちで分けてた。

ちよつとさみしかった。

ケーキを食べたらすぐにみんなで布団に入った。

僕が昨日洗濯した靴下を枕もとに置いて早く寝ないと。

明日サンタさん、僕に何をくれるかなあ。

1月1日

今日から新しい年。

龍宮神社で初詣をした。

はるかさんに着物を着せてもらった。

初めてだったけど、カッコイイって言うてくれたから嬉しかった。

お姉ちゃんとアーニヤもきていた。

アーニヤに可愛いつて言ったらちよつと顔が赤くなつてた。
夜更かししたからかなあ。

それと今日はお兄ちゃんの誕生日だった。

僕は絵を描いてプレゼントしたらとっても嬉しそうだった。

喜んでもらえて、僕もとっても嬉しかった。

おせちもおいしかった。

1月9日

一ヶ月後くらいから僕はココで先生をしないといけない。

だってそれが僕が『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』になるための試験だもんね。
僕が先生をする……全然想像つかないや。

お兄ちゃんみたいに、式集院先生みたいになるって事だもんね。
僕に出来るのかな？

僕は先生になったら大人みたいになるのかな。

でもそうしたらお兄ちゃんが僕に言ってくれた事が無しになっちゃう気がする。

大人だったら子供じゃないもんね。

そうしたら僕は責任を取るようにならなきゃいけないのかな。

春樹くんは初等部で、会う事も出来なくなるのかな。

アーニヤはロンドンで占い師をしなきゃいけないし、もう会えなくなるのかな。

1月15日

今日僕と一緒にお兄ちゃんと寝ようと思ったら、アーニヤに追い出された。

そうしたらお姉ちゃんがやって来て、今日は泊りに来なさいって言われた。

アーニヤに何かあったのかなって僕がお姉ちゃんに聞いたら、お姉ちゃんは内緒事があるんだって言ってた。

悪い事かなって聞いたら、そうじゃないって言ってくれた。

お姉ちゃんはアーニヤはアーニヤの足で歩く道を見つけたって教えてくれた。

でも足を踏み出すのが怖いんだって。

でも大丈夫だって言って、お姉ちゃんは笑ってた。

ネギもよって、その後言われた。

1月29日

アーニヤは最近友達といろんなところに遊びに行ってる。

アーニヤは友達が多いみたいで、メルディアナの友達ともメール交換しているみたいだ。

ちょっと羨ましい。

僕はロンドンに行くからって聞いてみた。

そうしたらやめたんだって、日本で学生するって教えてくれた。

でも試験がって言った。

そうしたら私の目標は『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』になる事じゃないから

って言ったんだ。

でも、魔法使いが目指すべきものののに、何でアーニヤはそんな事言っただろう。

2月3日

今日は節分。

豆を投げて鬼を追いだす行事なんだって。

鬼は東洋の悪魔、豆ってすごいなあって思った。

その後自分の年の数だけ豆を食べるんだって。

僕は9個、お兄ちゃんは24個。

僕みたいな子供が先生をやるのはおかしいよねってお兄ちゃんに聞いてみた。

そうしたら知らないって言われちゃった。

僕のやりたいようにすればいいって、お兄ちゃんは僕に言ったんだ。

僕は、だから僕は……好きな事をする事にしたんだ。

「お兄ちゃん……あのね、僕……」

「カカカツ、安心しな。」

ま、このお兄ちゃんにドーンと任せとけや」

「うーっし、テメエらおはよう」

「「「おはようございまーす!」「」「」

「相変わらず元気でイイこつて。

つと、早速急な話だが今日からこのクラスに編入してくるヤツが
いつから、二人ばかり紹介するわ。

みんな知ってるたあ思うが……ま、仲良くしてやってくれや」

「今日からこのクラスで世話になるアンナ・ユーリエウナ・ココロ
ウアよ!アーニヤって呼んでよね!」

「あ、あの、ネギ・スプリングフィールドです、よろしく願います!」

四十二匹目 につき なまえ：ネギ・スプリングフィールド（後書き）

次話より原作の時系列突入です。

ようやくネギまらしく書いていけるかなあというところですね。

後これは少々我が儘ですが、この作品を書き始める以前、自分が構想していた妄想を少々垂れ流してから、物語本編を進めていく予定です。

題して『もし香坂隼人が転生する世界がくだったら』。

まあこちらは手早く終わらせて、これまでの簡易登場人物紹介の後、原作に突入するかと思われます。

最後になりましたがこれからも、よろしければ自分の拙い作品『俺、転生したんだと』をよろしくお願いいたします。

IFストーリー もし転生先が『真・恋姫†無双』の世界だったら（前書き）

IFシリーズ二つ目。

IFストーリー　もし転生先が『真・恋姫†無双』の世界だったら

転生したんだな、俺って。

そう気付いたのは生まれてかなり経ってからだった。

小学校、中学校、そこを卒業して私立の学園。

親父と母ちゃんに薦められて入学した『聖フランチェスカ学園』での事だ。

何でも二人の知り合いがいるんだと。

つと、話がズレたか。

ともかく俺自身『転生』した人間だって気付いたのは入学して少し経ってから。

偶々俺が住んでた寮の掲示板、そこにガッコの歴史資料館で『三国志特集』をやってるって書いてあつてよ。

『三国志』とかはやっぱ男のロマンだからな。

気になって行ってみて、その帰り道に同じクラスの北郷だったか？そいつと白髪のがキが取っ組み合いしてんのを見ちゃった。

段々激しくなつてく二人の争い。

介入でもしてやっかね？と思つたところだったわ。

気付けば……だだっ広い荒野のど真ん中にいたんだよ。

そこで俺は、俺が『転生した』って事に気付いたんだわさ。

その世界の、最初の住人との出会いは唐突で。

俺が勤しんでた喧嘩なんざドブ川に吐き捨てた唾みてえに、ちっぽけでへボツちいもんだと思い知らされた。

『喧嘩』じゃねえ『殺し合い』。

『プライド』と『プライド』を護り合う為に戦うんじゃ無く、『明日』と『今』を生きるために戦う。

俺が住んでた平和な日本とはかけ離れた、『死』に満ちた世界だったぜ。

なんたってガキが人殺しをしなきゃいけない世界なんだからよ。

「……うぐが……ぐるっ……ががっ」

「ハハッ……スゲーな、オイ。」

全部コレ、嬢ちゃんが殺したのか？」

「がああああああああつー!!」

「問答無用かよ!？」

だがさ、テメエなんざクソガキに殺されてやるくれえ俺は弱くねえんだよー!!」

『子殺し』は当たり前、『親殺し』も当たり前。
食いぶちが無けりや、どーせ苦しんでくわかってりや、そんな容易な道を選ぶ人間が多いってのはわかる。

がな、俺にや理解出来ねえ。

『死ぬ』のは当たり前だ。

だが…… テメエよりずっと年下のガキを！女を！見捨てられるほど俺はドライじゃねえ…… それだけだ。

『自殺』つてのも、要は責任逃れに過ぎねえしな。

それに俺自身も、よ。

我ながらメンドクセえとは思っ。

けど構わねえじゃねえか。

これは俺の我が儘で、俺がやりたいから勝手にやってるだけなんだからさ。

「『れん』つつったか…… テメエ、俺に付いて来ねえか？」

「……？」

「そこで死んでる大人はテメエの親か兄弟か、はたまたテメエを殺しに来たヤツなのかは知らねえ。

けど今ここにそいつらはいなくって、テメエは一人ぼっちだろ？

だからさ……こんなまるで俺が知らねえところに来てさ、俺も一人だからよ」

「……………」

「飯の調達くらい頑張っとしてやつから、俺と一緒にいてくれねえか？」

『転生した』って事に気付いて、何か俺が変わるかって言ったら大したことは何も無かった。

強いて言えば……ちと俺が知らねえはずの知識が入ったくらいか。

つつても『異世界』っぽいココに来て、生き抜くために必要な物は
大して無かったんだがな。

人が人を当たり前に殺す、『戦乱』の世の中だぜ？

どうやら前世も不良やってた普通の日本人だったみてえだし、まるで意味がねえってヤツだわ。

……まあそのお蔭かどうかは知らんが人を『殺す』ことに、パンピ―どもよりはスムーズに慣れていったんじゃねーの？

俺は聖人君子みてえな論理、振りかざすつもりはねえ。

かと言って俺は極悪非道な、義理人情のねえ屑になろうとも思わねえ。

俺は俺と、隣のガキが無事なら……それで充分だわ。

「『れん』……『れん』か……。」

なんかココ、古代中国っぽい感じとかあるよな。

『項羽』とか『劉邦』とかいたらしいし、『洛陽』なんて都とかモロにだわ。

だったら『三国志』の時代か？具体的な年月は……でもなんか違う気したんだよなあ」

「……？」

「ともかく『真名』って風習がある訳だし、テメエのそれも多分『真名』だろ。」

だったら漢字とかあった方がイイと思うんだが……どうよ？」

「……はやとがきめるなら、れんはそれでいい」

「呼び捨ては止めろっちゅーに。

『れん』……『蓮』とか？『廉』、『鍊』……まあ女の子だし『恋』だろ」

「……ん」

俺の来てた服とか持ってたもんとか、そこら辺はとっとと売って金にした。

持ってたって盗賊どもが寄って来るだけだしよ。

生きるために必要な物とか何も持って無かったしな、そっちの方が現実的だわ。

安い、懐いてくれた老馬一匹に食料を少々。

後は『燠製とか作れっかな？』と思って燠す為の道具をいくつか、それですっからかんだ。

初めに立ち寄った町では憲兵ともめたりなんかもしたからな、とつとどこか安住の地を探すのがいいかねと思ってよ。

それと『武器』なんかも買ってみた。

『剣』やら『槍』やらにしようかと思ったんだがな、折れたり錆び

ちまいそつでさ。

結局『鉄塊』みてえな『鎚』を一つ。
それと……古ぼけた『戟』を一つ。

「買わねえ」

「……かう」

「買わねーの」

「かう」

「……あのよ恋、テメエは確かにツエーのかもしれない。

でもな……俺はテメエに戦って欲しくねえ。

だったらんなもん買つ必要ねえだろうが」

「でも恋、ひところすのとくい」

「だとしてもな、こんな時代に何綺麗事言っただって……誰かが
言うかもしれないがな。

それでもうにも満たねえメスガキのテメエに、んな事させたくね
えんだわ」

「……なんで？」

「俺がテメエより大人で、男で、俺がそうしてえからだ。

『項羽』も『劉邦』も女だった世界、男より女の方が強くなれんのかもしれねえ。

けどな、俺は古い考えがある人間だからよ……俺が俺だけで済むならテメエの手を汚して欲しくねーんだ」

「で、も」「もう『人殺した事ある』とかは、言っんじゃねーぞ」
……恋もはやとのちから、おてつだい、したい」

「そか……でも今はダメだ。

テメエが誰にも負けねえくらい、誰に会ったって絶対に負けねえくらい、心も体も強い女になれ。」

そしたら、それでもうちよつとお前がでつかくなったら……」

「ん……恋、つよくなる」

「頑張ってみな……つとそうだ」

「?」

「ついでに俺がテメエに名前をやるよ。

恋……今日からテメエの名前は『呂布奉先』だ」

「りよふ、ほうせん」

「そうだ……強くなれや、本家本元がたとえこの時代にいたとしても、真正面から叩き潰せるくれえさ。」

そうになったら、sonだけ強くなれたらson時は、俺の背中でも守ってやってくれよ」

人と人との出会いつてもんは、本気で偶然に偶然が重なって起こるもんだと思うね。
偶然に偶然、それこそ砂場の中から塩の一粒を探し当てれるくれえに。

だが時間を出会ったヤツらと重ねて、積み重ねていつて。
そうやってテメエと、目の前のヤツらとの間にある見えねえ大事なモンを、ドンドン濃くしていく。
そいつがやがて、『絆』なんて綺麗な言葉に変わってくんだろうよ。

血と汗と涙。

言葉通りにいかず薄汚れて汚ねえ様なモンで出来た俺と恋の『絆』、俺とアイツらの『絆』。

だが俺にとっちゃ何物にも代えがたい……大事な宝物だぜ。

「……貴様……何しに来た？」

私がこれから暴れるのに、貴様のような男は邪魔だ」

「気にすんな気にすんな」

「……死ぬか、この賊と共に」

「勘弁してくれや。」

俺はこの屑ども、殺しに来たんだしよ。

テメエみてえなエロい身体のねーちゃんと殺し合いなんざしたくねえっての」

「フン……聞きなれん言葉を」

「まあまあ、いいじやろうが。」

この男はワシらに相對するつもりはなさそうじゃし、ここは一つ共同戦線でも張ってはどうかじゃ？」

「いい提案だぜ、実にいい提案だわ。」

「つーわけでよろしく、ねーちゃん」

「……………」

「無視か、あア？……無視かコルアツ！？」

「……………たいれん大蓮……………」

「……邪魔をすれば殺してやろう、デカブツ」

「上等だ……叩き潰されねえよう氣イ付けとけや売女アッ!」

「やれやれじゃのう」

俺の名前は香坂隼人だ。

前世もそうで、今世もそうで、前世も今世も変わらねえ俺の親父と母ちゃんに貰った大事な名前。

例えどんな空の下だろうが俺の名前は香坂隼人、コレは変わりねえ。こんな『パラレル三国志』の世界でも、やっぱり俺は変わらねえ。俺は俺らしく、俺を貫く。

だからこの名前は大事なモノとして、俺の中に仕舞っておく。俺が心の底から尊敬できる親父と母ちゃんから貰った最初の贈り物をよ。

捨てるわけじゃねえさ。

『真名』っつー形でちゃんと残す。

けどそう言っても……俺は怒られちまうのかねえ。

だがな親父、だがな母ちゃん。

俺は俺がこの世界で見つけた大事なヤツらの為に、俺は新しい名前を貰って新しい名を名乗る。

『仲間は大事にしなきゃいけねえ』って、いつも言ってたもんな。

だから俺は新しい名を名乗る。

俺なんかを養子にしてくれた人の為に、俺に出来た『仲間』の為に。

っーわけで聞いてくれ、俺の新しい名前を。

俺の名前は……よ。

「『程普徳謀』……随分大層な名を貰ったな」

「ほっとけバーロー。」

俺の大事なおやつさんとおふくろさんが考えてくれた名前だ。

バカにするっつーんだったら……テメエでも許さねえぜ？」

「冗談だ」

「テメエの冗談はわかんねっつーの。」

もちつと腕を磨くんだな、文台」

「……ああ」

「んん……んうっ」

「カカカ……煩かったか、恋？」

「……くう」

「寝ちまつて、可愛いもんだわ。

つとそいやあテメエの娘らは？」

「祭に預けた」

「オイオイ、母親だろうが」

「大丈夫だ、呼ばれたらすぐに行く。

それに雪蓮はもう八つ……私がいなくともな」

「……まあ……ならいいけどよ」

「……なあ、隼人」

「んだ、文d「二人きりだ……大蓮と呼べ」……へいよ、大蓮」

「私がお前たちと会って……もう三年ほどか」

「だな……で、ようやく明日テメエがいつも夢見てた旗上げの日つてヤツだ。

イヤ、やつぱは男の子らしく、燃えちまうねえ。

明日の号令とか考えてつか？それともその場のノリで言うとか？

ま、どっちにせよ盛り上がるように頑張ってくら「隼人」……抱きつくなんて」

「……………」

「テメエは旦那がいる身だろ？」

見られても拙いし、俺はお前は好みじゃねーよ」

「わかって……いるぞ」

「……そか」

「……………」

「……………」

「なあ隼人、私は正しかったのか？」

「……………」

「私の家は小さく、幾ら世を憂いても、幾ら世を嘆いても……拳兵するだけの金が無かった。

だから私は……呉景と一緒に、初めてを捧げて……拳兵出来るだけになり、私は今ここにいます。

……だが隼人、私は……私は……今は、今じゃなく、あの時じゃなく……何でもう少し早く私に、会ってくれなかった？

あの時の私は間違っ「間違つてねえよ」……隼人」

「第一に俺、お前の事好みじゃねーし……それによ、一緒になつてなかつたらあの時テメエはあそこにいなかったかもしれないじゃねーか。」

だったら間違いなんざ思つて欲しくねえな」

「……………」

「ま、安心しろや文台。」

例えテメエが腐るほど間違つてたとしても、俺はテメエに仕える武将として地獄の底、地獄の釜まで一緒について行ってやつからさ」

この世界に来てもう十年。

俺ももうすぐ三十とは……月日が流れんのは早いもんだ。

文台は『呉』つつー国を立ち上げて、イイ国主として頑張つてら。

俺と同じく昔から文台に仕えてる祭は大将軍つて立場で頑張つてら。

文台の上の娘の伯符も、そのダチの公瑾もまた同じように次世代担
う身として頑張ってる。

あ？俺？

俺も一応將軍職で、部隊も持つてるが……ま、他のヤツらに比べり
やへばいわ。

出世とか興味ねえし、政治とかいまいちわかんねえし。
毎日武術の訓練を恋としながらダラダラ過ごしてら。

ま、先陣は俺らのモンだけだよ。

「ねえ貴方、なあって未来の知識を使わないのかしら」

「なんで……ね」

「貴方が持つてる知識を使えば、どんな簡単な知識でも、この国は
ずっと発展するわよ。」

「なのになんで……使わないのかしら？」

「そりゃ……アレだ、不必要だからだ」

「不必要？」

「そ……この時代にやこの時代に適した文化があって、この時代に
適した政治のやり方がある訳だろ？」

「だったらそれでいいじゃねえか。」

「どっか一つの国だけ裏技使って強くなるなんざ、兵の質が物を変

えて高まるなんざ、それでやり合う相手に勝てるなんざ……みつともねえだけだろ？」

「……そうねえ……やっぱり面白いわねえ、貴方」

「そう言われつと照れるわ」

「でもそうだとしたら貴方の仕える人は……死ぬのよ」

「死なねえよ、俺が死なせねえ。」

それに例え……死んだとしてもアイツはアイツのガキどもの、呉のヤツらの、俺の中で生きてるに違いねえさ。

死んだヤツらの想いを無駄にしなけりや、明日に続く想いとして残せば……人は死なねえんだよ」

「……それが貴方の、この世界で出した答え？」

「別に、んな大層なもんじゃねーんだが……まあイヤ。」

それよりよ、踊ってくれね」

「……はい？」

「それよりテメエはしがなない踊り子なんだろ？」

酒呑んでる途中だったしよ、前みたいに頼むわ……貂蟬」

「貴方……ご主人様……私の事……」

「あゝ……言つとくが俺はデメエの事は知らねえよ。

けどよ、そだな……デメエ俺んどここねえ？

何となくだがな、そうなつて欲しいつてとこかね」

「……ぶ

ぶ？」

「ぶるあああああああああああああああつっ！
！！」

俺がこの世界に来て十年ちよい。
ま、ホント色々あつたわ。

恋が俺の部隊に入つて戦場に出る事になったり、貂蟬が部隊に入つて戦場に出る事になったり、それと陳宮も俺の部隊に入つたか。
なんつーか……ま、イイか。
なつちまつたもんはしょうがねえしよ、どうとでもなるだろ。

しかしさ、やっぱ俺のいるこの世界は『パラレル』だと身に染みたわ。

普通の歴史だと呂蒙も陸遜も、それに甘寧もだな。
今の時代には呉の重鎮なんざ立場にいねはずだしよ。

「隼人様」

「様付けとかはいらねえって言ってるがな、思春」

「いえ、隼人様。」

孫呉建国より十数年……誰よりも最前線で戦い続けた貴方様は私が誰よりも尊敬する武人。

本来ならば私が真名を許して頂けることすらおこがましいのですから」

「あ、そ。」

んで、用事でもあつたんじゃねえの？

なんだ、文台が酔っぱらったか？伯符が寝台から抜け出したか？

後者は最悪だぜ、せっかく俺が助けに行ってやったのによ」

「いえ……劉表が再び我が国に攻めて来るとの報が」

「まったく、強欲なヤロウだな。」

で、文台が出陣するとしても言ってるだろ？」

「その、そうではなく……」

「……本気か？」

「……ハッ！」

歴史はやっぱり変わらねえのか。

俺のようなちっぽけな存在じゃまるで爪も牙も、そのデカイものに逆らう事は出来ねえのか。

「はや……と……」

「オイオイ情けねえ声出してんじゃねーぞ。

テメエは俺が惚れた女だろ？」

「……ああ……娘たちと、国を頼む」

「任せとけや。」

だからゆつくり寝て、向こうで祭と一緒に行くまで待つてろ」

「そつ……するさ……我的可？的人」

……んな訳あつてたまるかつ！

たった一回！たった一つ！俺はその手から取りこぼしただけじゃねえか！！

大蓮は死んでねえ！

アイツは俺の中で一つになって生き続ける！！

挫ける？躊躇う？踏み止まる？

俺が？この程普様が？隼人様が？

んなことは有り得ねえんだよ！！

大蓮と祭との誓いは俺の胸の中で真つ赤になって燃えてやがる！！
江東の民が、俺ら慕ってくれる次の世代のヤツらが、笑える国を作るって誓いはよオ！！

だから見てろ、天の上から俺を。

お前の惚れた男は誰よりもデカイ男だって事を！！この世界に刻みこんでやんよオオオオオオツ！！！！

立ち止まる暇なんざありやしねえ。

そうなつてりや勿論、考える余裕も然りだ。

ただ俺はありつたけの想いを胸に、滾る灼熱のような思いを胸に。戦いの、その中に身を投じる。

それが呉の為、それが俺らが目指した夢の為、俺が出来る最高の手だ。

「……どう言う意味よ」

「そのままの意味なのじゃ。」

お主らの国は大変なんじゃろ？

じゃったら妾がお主らをちゃんと保護してやるのじゃ」

「だからって……だからって！！」

「人質に誰かを取るのは当たり前じゃろう？」

もしお主らのが裏切って、変な事をせぬ為にもの」

「破格の条件だと思いますよお。」

袁術様が要求しているのは貴方がた当主の血筋の誰でも無く、身分もそんなに大した事ない將軍なんですからあ」

「そうなのじゃ！だから程普を妾に寄越すのじゃ！！」

「でも彼が孫呉という国でとても大きな存在だとわかって引き抜こうとしてるんですから……さすが袁術様、人に出来ないことをやってのけるう、そこに痺れる憧れるう」

「わははははは！もっと褒めるのじゃ！！」

「イイぜ」

「隼人！？」

「ウム、なら客将として保護してやるのじゃ。」

程普は妾の為に一生懸命働くのじゃぞ」

情が入っちまうって事は、よくある。

俺がその辺は日本人だからかね？

美点だとは思うんだが……甘いつて事でもある訳だ。

どんな場所でも必ずある。

テメエが刃向かえねえ様な力の壁が、腐った闇が。

だが俺は、んなくだらねえモノにやあやっぱ負けてやれねえ。

イイ年になつても、そいつを変えるつもりはねえよ。

俺の限界超えても、絶対にだ！

「音々音の負けで鬼なのじゃ！」

「……逃げる」

「ぬおおおおっ！待って下され恋殿！美羽殿おおっ！！」

「……傀儡政権……ありがちな話しねん。

美羽ちゃんはまだ小さいし、両親ともに死んでたらねえ」

「私は美羽様が笑顔のままでいられるように、散々言つ我が儘を叶えて差し上げてきました。

でも、そのせいで美羽様の評判は最悪です。

悪政も、重税も、全て美羽様の我が儘のせい……。

私は……私が間違っていたのでしょうか？」

「知るか、んな事はよ」

「ですg」だがな、一つだけ言えるわ」……」

「俺はわからねえ事だらけだが、一つだけわかる。

七乃…… テメエは間違つてねえ、だから信じた道を貫け。

そしたらテメエが伯符たちの敵だろうが、憎むべき存在だろうが
関係ねえ……俺が握ったテメエと美羽お嬢の手は絶対に離さねえよ」

背負うモンが大きく多くなると、男は強くなる。
まあ潰れちまうヤツもいるかもしれねえが、俺だって潰れるかもし
れねえが、俺はそう思う。

潰れたら立ち上がればイイだけだ、もういつペン前を向けばイイだ
けだ。

そんな……簡単な話だ。

「隼人、妾たちは連合に参加せんで良いのか？」

「そう思っぜ、俺は。」

美羽お嬢だって、戦争行くよりこっちでのんびりやってる方がイイだろ」

「じゃが妾の名前を世に知らしめねばならんではないか」

「でもしたらお前の国のヤツらが腹減ったってさ、なっちまうんだぜ」

「……むう、お腹空くのは大変じゃし、どーでもイイ事もないのじや。」

そんな事言ったらまた怒られるのじゃあぁっ！」

「俺に怒られるから、金をいっぱい使う事をやらねえのか」

「違うのじゃ、お腹空いたら大変じゃからやらぬのじゃ」

「そだな、だったらイイんじゃねえの？」

「ウム！」

それより妾はまた『ほつとけーき』が食べたいのじゃー！」

「んじゃ恋ら呼んで、みんなで食つか」

希望に溢れた世界。

ガキどもが笑ってられる世界。

最初は恋と俺だけ守もればイイって思ってた。
それがだんだん大きく、広くなっちゃまって……さ。

俺の両手が広がる範囲は狭いけどよ、それでも守り抜かにやいけねえ。

なんたつて、俺の中の血がそう俺に滾って来てるんだからよ。
例え相對するのが、俺の古巣だろうとよ。

「退いて隼人にい！そいつら殺せない！！」

「お断りだな、雪蓮。」

美羽お嬢と七乃の首がなくなつたつてよ、どーせコツチの負けだろ。

だつたら許してやれよ、デカイ心で」

「そうだとっても、たとえ私たちの勝ちだつてわかっていても！ケジメは付けなきゃいけないのよ！！」

「じゃあテメエなりのやり方で付けてみる！ケジメってヤツをよオッ！

がなあ雪蓮……俺は死んでも……コイツらは殺させねエッッ！！

！
」

夢の前には障害が付き物。

んで、その夢その意志受け継いで後から続くものガキどもの為に、俺みてえな古株は道にならなきゃいけないえ。

何でもイイんだ。

どんな形でもイイんだ。

誰が作ったってイイんだ。

ただ、誰も泣かねえ世界を作って欲しい。

俺がこの世界にはじめて来て、俺が大蓮と祭と一緒に誓って、心の底から思ったのはそれだけだ。

んな世界、ホントは作れねえのかもしれない。

でもそこへ続く扉の。

真実の鍵を、テメエら新しい代で見つけて欲しい。

雪蓮の代か、蓮華の代か、それとも『天の遣い』なんてもんになっちまってる俺の元同級生とガキどもの間に出来たガキの世代か、そ

のさらにガキどもの世代か。

「隼人にいいいつ!!??」

「ワシの友の墓の前で……ワシの友を……貴様らアツ！生きて帰れるなどと思うでないぞオオオツツ!!」

「お迎えか……随分はえーじゃねえの」

何回間違っても、絶対に立ち上がり。

両の足で大地を踏みしめ、立ち直らなきゃいけない。

んな背中を、俺はみせる事が出来たのかね？

あきらめちゃいけないって、前を向こうってよ……。

俺はガキどもに教える事が出来たのかね？

「恋……ホントにテメエは強くなった……テメエは、俺の……誇りだ……」。

嬉しいぜ、大事な俺の……一人娘」

「…………おとーさん」

俺は死ぬ間際まで、俺であり続けてえ。

テメエの大切なモノ守りたいっつーテメエの想いを胸に、テメエの想いを力いっぱい抱きしめてさ。

最後の華、最後の炎、散り切り、消え切るまで。

テメエの目の前に広がる、大蓮と同じ匂いのする『王』の前に、立ちふさがってやんよ。

「無茶だ？無謀だ？んなもん関係ねエツ！！」

テメエの胸で燃えてる真っ赤な孫呉の！真っ赤な俺の誓い！！

それを頼りに歩いてきた…………それを頼りに突き抜けてきた！！

曹操様よう…………テメエにそんな俺の魂…………喰らいイイイイ切れるかアアアアアアアアアアアツツ！！！！」

IFストーリー　もし転生先が『真・恋姫†無双』の世界だったら（後書き）

ちよつと長かった……。

という訳で一つ目は『真・恋姫』。

しつかり最後は散ってしまった訳ですが……まあコレはこれで。

あと二つばかり投下して、本編の方を原作に突入させる予定です。

IFストーリー もし転生先が『ペルソナ3』の世界だったら（前書き）

IFシリーズ二つ目。

IFストーリー　もし転生先が『ペルソナ3』の世界だったら

俺が幼い時、毎夜毎夜妙な夢を見ていた時期がある。

夢の中は必ず同じエレベーターの中みてえな部屋で、夢の中は必ず同じ鼻のなげえチビのジジイと、青い服のねえちゃんがいて、俺は毎日毎日その日あった出来事をそいつらに話してた。

何でそんな夢を見てたのかは大人になった今もまるでわからん。つーか最近ホントに見てたのかも、いまいちよく思い出せねえ。

まあ『見てた』のは恐らくマジだわ。

だとしねえとな……ま、説明つかねえもんがあるし。

この世界は意外に『不思議』ってヤツに満ちてっしょ。

ともかく天国の親父に母ちゃん、今日もあんならの息子は元気に生きてますわ。

時は、待たない。

すべてを等しく、終わりへと運んでゆく。

限りある未来の輝きを、守らんとする者よ。

1年間――

その与えられた時を往くがいい。

己が心の信ずるまま、

緩やかなる日々にも、揺るぎなく進むのだ――

季節は春、出会いと別れの時期。

あらゆる物事は先へと進み続け、限りある物語が紡がれていく。

大きくそれが動き出すのは一人の少年の登場。

とある町のとある学園のとある寮、そこに彼が訪れた事で、時計は大きく周り出す。

グルグル、グルグル、決して戻る事無くグルグルと。

「……誰っ!？」

この時間に……どうして……まさか……ッ!？」

「落ち着け、彼は『転入生』だ。」

ここへの入寮が急に決まってね。」

まあいずれ正式に男子寮へ割り当てされるだろう。」

「……イイんですか？」

「さあ？」

ともかく彼女の名は『岳羽ゆかり』、君と同じ二年生だよ『有里湊』くん。」

「……岳羽です。」

「よろしく。」

「あ、よろしく。」

『夢』と『現実』の境目は一体どこにあるのだろう。

例えばそれは明確に『夢』だとわかっていて、なのに自分の手に一つの『鍵』が握られていた時。

それは一体『夢』なのだろうか、はたまた『現実』なのだろうか。

境界は気付かぬうちに変わる。

自分の奥底、そのどこかで何かがほんの少し揺れ動いただけで。

それは気付かぬうちに手の届かぬほどに変わる。

自分の奥底、そのどこかで何かがほんの少し揺れ動いただけで。

「ようこそ、『ベルベツトルーム』へ。」

私の名前は『イゴール』、そしてこちらの者の名前は『エリザベス』という」

「『エリザベス』です」

「お客人がこの『ベルベツトルーム』を訪れたのは実に八年ぶり……」。

「ご感想などはいかがかな？」

「……別に」

「……私の存知あげております同年代の男子学生とはいささか雰囲気の違いが違っておられる様子。」

年月が流れ、外界の方々も少々変わってきたという事でございましょうか？」

「俺以外にも、客人が？」

「はい、自分が何者かわからず、その答えを追い求める者が集まるのがこの『ベルベートルーム』。」

尤も私は……新たに『与えられた自分』というモノは知ってしまったのですがね」

「私も、我が主と同様でございます。」

ですがそれが本当に私の追い求めている『自分』であるのか、私自身そう在りたいと願う『自分』であるのか……。

その答えを知る事が、私の『目標』……いえ、『夢』でございます」

『日常』は劇的に『変化』する。

いや、そもそもその『変化』を知らなかっただけに過ぎない。知ってしまった時、それは『変化』ではなく変わる事無い『日常』である事を知る。

知ってしまった人間は、その時どんな選択をするのだろうか。
逃げるか、それとも立ち向かうか。

全てはそれ次第、それだけで全てが決まる。

「嘘……外を登って来たのッ!？」

「アレは……?」

「ココを登って来た『シャドウ』よ……『召喚』……私にだって、
できるんだから」

「……………」

「……ッ、ハアッ、ハアッ、ハッ、ハッ……えっ?」

少年は『銃』を手に、引き金を引く。

己の頭に銃口をかざし、躊躇う事無く引き金を引く。

彼の脳裏に響く声。

―我は汝、汝は我―

現れる『幽玄の奏者』、一柱の『愚者』。

そして『牙』を剥き出しに、『シヤドウ』を喰らう『ナニカ』。

その時彼は一体何を思っていたのだろう。

その時彼に一体何が起こったのだろうか。

『影時間』に『適性』を持つ少年は、一体何を抱えているというのだろうか。

「……嘘……えっ……?」

「ぐう……ぎああっ!?!」

「ちよっ、えっ、イヤッ……来ないで!?!」

「あああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああっ!?!?!」

「……やんちゃはイイがよ、女相手に暴力はいけねえなあ」

『物語』は少々本来あるべき『物語』とは異なっていた。
尤もそれを異なっていると認識できる存在は、この世界のどこにも存在しないのであるが。

変えたのはたった一人の青年の介入。

少年によつて突き動かされてゆく物語は青年によつて大きくその流れを変える。

それが良い方向か、悪い方向か、そのような事は誰も知らない。

なぜならそれはそこでそうあるべき『物語』の形なのだから。

「雑魚は黙つて消えてな……つとワリーな、大丈夫だったか？」

「……誰、だ」

「誰たあいきなり年上相手に言う言葉じゃねえだろうが。」

「つたく最近のガキは……」

「あの……先生？」

「オオ、岳羽か。」

「ま、ともかく無事で良かったぜ」

「先生？」

「オウよ、まあ最近よくいるクールキャラの代わりに俺が先に自己紹介してやつからありがたく思えや。」

俺の名前は『香坂隼人』、『月光館学園』で『生物教員』を務める……『ペルソナ使い』兼『シャドウ使い』だ」

『ペルソナ』、それは『仮面』。

『ペルソナ』、それは『もう一人の自分自身』。

『ペルソナ』、それは様々な外側の困難に立ち向かっていく為の『仮面の鎧』。

『心』を御する力。

それは人と人との間に生まれる『絆』によって満ちゆき高みへと登る力。

『オルフェウス』をその身に宿した少年は、いま大きな一步を踏み出した。

「再びお目にかかりましたな。

どうやら貴方は『力』を覚醒したショックで意識を失われたのです」

「……………」

「『ペルソナ能力』、それが貴方の覚醒した力。

人と人、関わり合い生まれる『絆』を大切にしますよう、ご注意ください
されるとよろしいでしょう」

「……心に留めておく」

「さて、貴方のいらっしゃる現実では、多少の時間が流れたようです。
す。

これ以上のお引き留めは出来ません。

今度お目にかかる時には、貴方は自らここを訪れる事になるでしょう」

「……その時はよろしく頼む」

「では……その時まで」

「……………」

「そうそう、忘れるところでした。

貴方の傍に、この『ベルベットルーム』の以前の住人がおられます。
す。

彼は……特異で不思議な『運命』に身を置く者。

よろしければどうぞ、私たちはいつでも見守っているとご伝達お願いいたします」

『特別な力』、『他者とは違う力』。

少年の『力』は数字のゼロのようなもの……空っぽに過ぎないが、無限の可能性も宿る。

青年の『力』は本来存在しないもの……大いなる意志により導かれたかのような、特異点を宿す。

少年は一人で複数の『ペルソナ』を使い分ける。

青年は一人で一つと一つの『ペルソナ』を使い分け、相対するべき存在である『シャドウ』を従える。

少年のそれは時にひどく捉え辛い事もある。

青年のそれは時にひどく己を曖昧にさせる事もある。

これはそんな『力』持ってしまった『少年』と『青年』の物語。

「へえ……有里も複数の『ペルソナ』、使えんのか」

「……まあ、そうです」

「そかそか、ちなみに俺は二つらしいね。」

いつもつかつてゐるヤツと『■■■■』……俺自身みつけられ
んが。

まあイゴールのおっさん……ってか昔夢に出て来た鼻のなげえお
っさんの言葉だからよ、ホントかどうかなんてまるつきしわかんね
えんだがさ。

『シャドウ』に好かれる意味も、従えられる意味も……ま、悪
い気しねえから構わねえんがよ」

「……イゴールを、知っているのか……んですか？」

「その口ぶりじゃテメエも知ってるっぽいが……元気、してたか？」

「アイツともどもよ」

風のような声が私の耳に飛び込んでまいりました。

貴方から零れおちる光の粒が私へと降り注いでまいりました。薄暗い場所にいた私を、そんな私をまどろみの中へと連れ出してくれた貴方から。

……初めて私が貴方に出会った時、貴方の夢の中で我が主の『ベルベートルーム』を訪れてくださった時。

そのときのことを幾星霜時が流れたとしても、私は忘れません。貴方が私にくださった優しい微笑を、貴方が垣間見せた悲しさに満ちた瞳も。

私は決して……忘れません。

「これは……早くも見事な一品との出会いが……！」

これが『噴水』……命の源たる水を弄ぶ罪深きアート……。

その魔性ゆえに、硬貨を投げ入れた者の願いを叶えてしまうものまであるとか……」

「んじゃ投げ入れてみつか？」

「これは五円玉？」

「そ、『ご縁がありますように』ってさ。

まあ俺らがこうやって何年ぶりだ？ともかく会えたのは俺が有里と会えて、あいつがテメエらと縁があつたからだろ。

だからよ……まあ……久しぶりに会えて、俺はうれしいぜ」

「私もそうなのでしょうか？」

私は長らく貴方に頂いた言葉の意味を探してまいりました。

そして貴方に再び会えたとき……そうですね、『夢』がほんの少しだけ叶った気がいたします。

なればこの気持ちは……うれしい……ということでしょうか？」

「……頭いいヤツはメンドクセーな、ホント」

「??？」

信じたからって、必ずしも報われる訳じゃない……。

だから今まで、何度も信じる事を諦めようって思った。

でも結局ここまで信じ続けて、それでようやく……良かったなって思えたの。

私のお父さんは、私が思ってた通りのお父さんだったから。

そうやって信じ続けることを、願い続けることを、辛くつても立ち向かうことを、教えてくれたのは君だったよね。

君が勇気をくれたから、だから私は行くことが出来る。

大スキな……君のおかげで。

「あ、湊……君。」

……私はもう、大丈夫……湊君がいてくれるから……湊君にも、私がいるんだから忘れないですよ？」

「……わかつてる」

「もっ、もう、あんまり見ないでよ……こんな顔、見られたら、また、噂になっちゃうでしょ」

「……………」

「……でも、素直になっってみるのも……先生が言ってたみたいに……悪くないの、かな？」

嫉妬して、特別なものを何も持っていない俺は情けなく嫉妬してた。デカクなれたって、もう今までの自分と違うんだって、『ペルソナ』を手に入れて変わったんだって、変わるんだって。

でも変われなくて、情けなく地面に倒れ付して、みっともなく大事な『仲間』を売るような真似をしちまった。

だが……もう俺は違うんだ。

本気で惚れた女が出来て、本気で守りたいって想える女が出来て、俺は本当に変わらなきゃいけないんだ。

『人は変わろうと想った日から変わることが出来る』、そう先生は

教えてくれた。

俺は俺だ、伊織順平は特別でもなんでもねえただの伊織順平だ。

だがそれがどうした？

俺は俺で、ちつばけな伊織順平だからこそ……俺はチドリを守るッ
！！

……なあ先生、俺は夢を託されるくらいの男になれたのかな？

俺がもっとデカイ男に目覚めたら、あんたみたいな男に俺はなれて、俺はもう一度あんたに会えるのかな？

そんな時は言うよ、俺とチドリで紡いだ記憶を。
胸に秘めて、二人で育てた想いをさ。

「一番怖いのはね、執着する事……一緒にいたいって、もっと順平と一緒にいたいって……そんなことを想って心が痛くなる……」

「イイじゃねえかそれでも……それでもイイじゃねえかッ！

痛いんだったら俺が和らげてやる！一緒にいてその痛みをもっともつとでっかい楽しさで埋め尽くしてやる！！

だから……だからあ……俺なんか命与えて死んでんじゃねえよ
おおっ！！！！」

「これからずっと一緒にいるから、順平の中で一緒にいるから、私はいつでも」

「チドリ……チドリ！チドリッ！！」

「大好きだ」「んな結末、俺はみとめねえよ」……えっ？」

「隼人……先生……」

「吼えたな、順平……俺はうれしいぜ。

 「テメエみたいなヤツのためだったら……俺は俺が惜しくねえ……
こっちがあっちか！どっちかの俺が消えたってよオッ！！」

 儂く、おぼろげに、たゆたう大切なものだった。

 俺にとって大切な世界は、俺の手に力がなかったから守れなかった。

 だから俺はいつだって力を求めて、ずっとずっと誰よりも強くなる
 うと足掻いて。

 けど……美紀……俺は休んでもイイのか？

 なあシンジ、俺は休んでイイのか？

 ただ力だけを求めて、ボロボロになった俺の翼を休めて、ゆっくり
 と眠ってもイイのか？

 そうか……ああ、だが安心しろ。

 休んだら今度は誰よりも高く、空高く飛んでやる。

 お前が誇れる、自慢できるような兄貴になってやる。

お前が誇れる、自慢できるような親友になってやる。

大きな背中に……あの人よりも大きな背中に……俺はなってみせろさ。

「なんでだ……なんでアンタはあの時アキを助けようとしなかったッ!!」

「見送るのが心意気だからだ。

男がテメエの道信じて、テメエのために生きて、散った時に残した想い。

そいつを無碍にしちゃいけねえ、そいつを汚しちゃいけねえ……助けるなんざ中途半端な真似するほうが……男ってモンにはみつともねえんだ」

「人一人の命が失われてもかッ!!?」

「そうだ……逝くのも、見送るのも、受け入れ受け止め背負うことも……それが『漢の生き様』ってヤツなんだよ」

父が幾月と相打ちになり、生きる意味を失っていた私を救ってくれたのは君と彼女だったな。

どうしてくれる?

そのせいで君に似た背格好の人間がいたら思わず目で追ってしまう。
そのせいで君に似た声の人間がいたら思わずその音を追ってしまう。
わかっていさ、私の大切な君と私の親友である彼女の仲は。
だとしても……二人並んで立つ姿を見れば、空を仰ぎ見ても思わず
涙がこぼれそうになってしまう。

私は弱くなった、張り詰めていた糸が切れて。

『弱いことは悪いことではない』と先生は教えてくれた。
そのおかげで私は確かに君と彼女への想いを認識できた。

明日も、明後日も、いつの日までも。

私は君と彼女に会えると信じて、迷う思いを振り切り朝を迎える。
そして、君と彼女に出会い、私はまた今日を歩いていける

降り注ぐ冷たく暗い雨も君たち二人に会えば晴れてしまうのだから
…… 本当に…… 君たちは。

「君はどうだ、この事態を予測した事があつたか……？」

この歳にして、生死に関して、こんな難題を課せられるとはな…

……」

「考えた事はある」

「本当か……君は本当に不思議なやつだな……」

「……………」

「なあ有里……頼むから、彼女を残して消えるなんて真似はしない

「でくれよ」

「何でそう思うっ?」

「なんとなくだ。」

だが……それだけは、止してやってくれ。

彼女も、君の仲間も……私も……それは嫌だからな」

アンタは俺を掛け値なしに認めてくれたな。

一般人を『ペルソナ』の暴走で殺ししまったときもとやかく言わず、俺の判断に任せてくれた。

制御剤を手に再びアンタの下に来たときも、好きにしろって言うてくれた。

だからこそ俺が『責任』果たして逝く時も、誰にも邪魔できねえようにお膳立てまでしてくれた。

……忘れねえよ、アンタと駆けた夜は。

『ペルソナ』なんざ無しで、アンタと殴りあったことも。

だからよ、だからこそ許せねえ。

せつかく俺がアンタに誇れるくらいに勝ち逃げしたのに、アンタはそんな俺からも勝ち逃げしちまった。

殴らせろ、もう一度。

アタのその顔……やさしい顔を、もう一度殴らせろ。

アタと対等な漢になるからよ……待ってるや、アニキ。

「……シンジ……なんでお前が？」

「あの筋肉ダルマが……上等なことやってくれるじゃねえか」

「死んだんじゃ……なかったのか」

「記憶が戻ったのか、アキ……ああ、死んだよ、間違いなくな。

……オイ！テメエは事情を知ってんだろ！」

「……ああ」

「話せ、そいつを聞き終わったら俺は行くぜ」

「行くってどこにだ！？」

「ああ？んなもんアホを殴りに行く決まってるだろうが」

眩く、輝く、大切なひと時。
それを私にくれたのは貴方だったね。

……消え去ってしまうなんて思ってもみなかった。
もう二度と取り戻せないかけがえのない時だなんて、思ってもみなかった。

立ち向かう相手が、私たちの積み重ねた日々の先に待っていたものが、絶対に敵う事のない相手だって……そんなこと思ってもみなかった。

でも、それでも貴方と紡いだ『絆』は本物だから。

貴方が暮れたひと時は、私の大切な宝物だから。

過ぎ去った時だけじゃなくて、現れ在る時だけじゃなくて、未だ来ぬ時でも私は『絆』を紡いでいきたい。

隣に立つのは無理だなんてわかっているけど、せめて……貴方が見える場所です。

「恐怖とは、人間が危険から生き延びる為に身に付けた感情だと、前に隼人先生が教えてくれました。」

でも怖いからと言って逃げ出したのでは、生きる道はないとも……私もそう思います。

前を見て、怖さと向き合って、その時その場所に生きる道ができるんだと……。

でも……もう無理かもしれないってわかっている……有里くんは立ち向かえますか？」

「……さあ」

「さあって……でもそれじゃあ……」

「その状況になってみないとわからない。」

「けど動くよ」

「なんで……ですか？」

「そうしたいだろうから、そんな時くらい……我が儘でも構わないと思う」

やさしく見守ってくれた、いつだって。

僕のせいで大切な仲間が死んだ時も、大きな手で触れてくれた。

憎んで、大人としてあろうって思った僕が作った壁は、いつも無意味だった。

簡単にそれを崩して、簡単にそれを砕いて、僕をいつも子供でいさせてくれた。

出て欲しくないって言ってくれた。

それでも僕が意地を張ったら、いつも貴方は僕の傍で、一緒に前へと踏み出してくれた。

僕は……貴方の言っていたような男の子になれたのかな？

「テメエを庇ってアイツは死んだ。

だがな、それを悔やむな、自分のせいだなんて絶対に思っな」

「でもっ……でも僕のせいで……！」

「イイんだよ、男が笑って逝ったんだ。

喜んだとしても、悲しんじゃいけねえ。

それでももし、テメエが悲しいんだったら強くなれ。

アンタのおかげで強くなれたって、アンタの志を受け継いでデカイ男になれたって……それがイカした男に送る最高の返礼だぜ」

機械である私にも関係ないという事を教えてくれたのは貴方でありました。

『絆』を紡ぐ事も、誰かを想う事も、誰かを愛する事も。

プログラムなどではありません。

貴方が私の傍にいて、私が貴方の髪に触れて、貴方が眠りに落ちるまで。

私の胸に宿った想いは決して作られたモノではない……それを教えて下さったのは貴方でありました。

そんな貴方は再び剣を手に取り、前へと踏み出そうとしているであります。

なら私もその傍に。

義務ではなく、私自身の意志で。

好きな男の人の傍に女の人が行こうとするのは普通であると隼人先生も教えてくださったのであります!!

だから力になりたいのであります!!

「……アイギス」

「私も行くであります」

「……だが」

「それでも行くであります!

湊さんにとって隼人先生は大切な人、私にとっても、みんなにとっても大切に強い『絆』を感じる相手であります。

例え私たちは弱かったとしても、私たちは行きたいのであります」

「俺の我が儘に、付いて来てくれるか?」

「もちろんであります!」

泣いていた、笑っていた、怒っていた、貴方の顔を俺は覚えている。自分と同じように特異な俺に、貴方はいつも正面からぶつかってくれた。

同情する訳でも、ましてや同族を見つけて喜んでる訳でも無い。ただ貴方はそうしたかったから、そう俺にしてくれるといつも言っていた。

忘れないよ、必ず。

貴方の言葉も、貴方の姿も、貴方の心も、何一つたりとも。

貴方は俺を助けて、カッコよく死んでしまった。
結局アイギスに告げられるまで……俺は、俺たちは貴方の存在を忘れていた。

『逃れる事の出来ない運命』を、世界と引き換えに貴方は自分を捨てて、永劫の闘いの中に身を投じたらしい。

始まりより続き終わりを紡ぐ、永劫の時の中に。

『ニユクス』を送り込んで来た『ニヤルラトホテプ』との睦言を。

「絶対の運命？ 知らねえ…… 知らねえなあ、んなもんはよウツ！！

形あるモノは崩れ、命あるモノは皆いずれ死ぬ…… だがそいつは今日じゃねえ！

今日は笑って帰ってバカ騒ぎする日だろうが！

俺らの目の黒いウチは！んな事させやしねえんだよオオオオオオオ
オッ……！

『少年』と『青年』の物語は終わった。

黒き月の下起ち上がった、その身に『13番目のシャドウを宿した少年』と『シャドウを従える青年』の物語は終わったんだ。

奇跡は果たされ影時間も何もかもが消え去った。

そして……エピソードが始まった。

だがダメだよ、それじゃ。

どうでもなんか、よくもない。

俺は……決してあきらめない。

「よっ、湊」

「……何で、ココに……」

「バーロー、俺を誰だと思ってやがる。」

テメエみたいなガキが行けるこのみょうちくりんな場所に、俺が行けれねえ理由なんざどこにもありやしねえだろ？

それよりさ……俺らはアレをこれから潰す訳だろ？」

「そう……ですね……」

「だったらテメエ邪魔」

「……えっ？」

「やれる人間が二人いて、そいつが俺とテメエだってんだったら俺

がやる。

それが俺が……俺の本物の『ペルソナ』宿して生まれた理由だ。

死ぬなんざ言わねえ、だがここは俺がやるから後で死ね。

テメエが惚れた女とガキこさえて、テメエの生きた道を誇って死ね。

そんな時は……ま、俺と同じくらいカッコ良く死ねよ?」

相對するはこの世に死をもたらしただけの存在。
刃向かうは『シャドウ』を従える存在。

「……ああ、成程……俺って『転生』してた訳ね。

ま、今となっちゃどーでもイイが……そだな、……俺もテメエと一緒に過ごしてみたかったなあ」

『私は我が主と同じく、私自身を探して『じゃあさ、俺の奥さんにならね?』……奥さん……でございますか?』

『そうそう、そしたらねーちゃん俺の奥さんっつーのになれて、おっさんは俺の義父になれんじゃねえか』

『奥さん……私が……命を産み命を育む者……私が……この私が……

……』

『あげれるもんは何もねえ……っと、きな粉もちがあっただぜ。

今日のおやつに残りで悪いがウェディングきな粉もちだな。

それと……はい』

『……栞でしょうか』

『まあ俺が見つけて、母ちゃんが作ってくれた四つ葉のクローバーのヤツだけどさ……あげるわ。

『婚約指輪じゃねーが……コレでままごとだけど結婚して、ねーちゃんはやんちゃんと自分を持てたじゃん』

『……………』

『あゝガキ臭かったか？中学生にもなつてやる事じゃな』『イエ、とても嬉しく……感じております』……そか』

『貴方から頂いたこの私自身、それが本当の私自身かどうかはわかりませんが……一つの私を見せていただきました。

これからは私自身その私についてどうありたいか、考えさせていただきます……つきましては』

『しおりか？』

『私の気持ちでございます』

胸にかけられた『白金細工のしおり』を握り、『青年』は大いなる名を呼んだ。

『シャドウ』が、『ニユクス』の一部であるそれらが恐れ、慄き、頭を垂れた、そのモノの名を。

「焼き尽くしてやるよ、くだらねえ『運命』なんてもんと一緒に。

行くぜ相棒、本当の俺自身だけの『ペルソナ』……『クトグウア』

！！

ガキどもの未来切り開く為に……全部全部、灰にしてやんよオオオオオオオツ！！！！」

『死』を焼き尽くし『生ける炎』となった『青年』は『這い寄る混沌』との戦いに挑む。

終わる事のない、決して終わらない、永劫の戦の中に……身を投じた。

いつだって。
いつだって。
いつだって。

貴方は、私の隣で笑ってくださいました。

『ベルベツトルーム』の住人である者が心待ちにするのは『客人』……その訪れだけが、外界との接点であり、私どもに『意義』を与える……。

貴方に触れる事で……私は、いつもそれを得ていたのでございます。

貴方と会えた日々は『充実していた』。

初めて会った頃貴方とお話出来た事も、再び相見える事が出来た事も、貴方と共に同じ時を感じた事も、貴方自身を感じた事も。

私は貴方と共にいて、私の本分を忘れてしまう……それほどまでに素晴らしき日々でした。

ですので……貴方が永劫の中に身を委ねる事を知って、私はそれに耐え切れる事ができません。

貴方にとってこれ以上私が触れ合うのは不利益、故に私は身を引いた。

しかしこれは私が望み、願った形ではありません。

……これは私の我が儘でございます。

その旨を我が主に伝えたところ、私は二度と『ベルベッドルーム』に戻る事が出来ないそうです。

ですが構わないのです。

『ベルベッドルーム』は自分を求めるモノが集う場所……私はもう、見つけました。

「私、エリザベスは隼人様と共に幸せと喜びを分かち合い、悲しみや苦しみを共に乗り越え、二人が死を分かつまで、例え何が私の前に立ちはだかったとしても……永劫の時を共に歩むことを誓います。

……隼人様、貴方と『絆』を紡いだ方々も、貴方を思い出し、貴方を助けようと進んでおります。

ですので私、妻として、誰よりも早く貴方の元へと辿り着き、眼前の『エレボス』と申すお方にはご退場いただき、貴方を……必ず取り戻してみせます」

IFストーリー　もし転生先が『ペルソナ3』の世界だったら（後書き）

二次創作としてはちよつとマイナーなペルソナ3。

結構昔にやったので記憶を掘り返し、調べながらのモノになったのでちよつと無理がある気が……。

IFストーリー 人物設定（前書き）

とりあえず手早く作ったIF編人物設定。

『真・恋姫』ですが、『ペルソナ3』なんかも流れと共に載せる予定です。

2月10日、『ペルソナ3』の『香坂隼人』を載せてみました。
ちょっと無茶なところがあるかもしれないですが、よろしければどうぞ。

IFストーリー 人物設定

（真・恋姫編）

【程普徳謀】

『江東の虎 孫文台』に拳兵時から彼女に従い、『黄蓋』らとともに孫呉の基盤を作り上げた『孫呉の宿将』。

建国後も、生涯通して積極的に戦場を駆け、多くの武功を立てたという。

だが出世は好まず、金銭にも無頓着、政治の場にもあまりかわろうとしなかったため、身分はあまり高くなかった。

『孫文台』が討ち死にした際、『孫呉』は分裂しており、立場の危うくなった『孫伯符』陣営の人質という形で『袁術』の下に付く事となる。

この時多くの兵卒が『孫呉』を離れたとされているが、『程普』の部隊はひとりたりとも欠ける事は無かったとされる。

彼が人質になった為『孫家』の者は誰ひとりとして身柄を拘束される事なく、結果として後の『孫呉復興』に大きく繋がった。

また彼が『袁術』の元に来てから、暴君と謳われていた彼女の政治は目に見えて良くなったという。

『反董卓連合』の後、『玉璽』と引き換えに『袁術』より『孫伯符』は独立。

『流星と共に天を引き裂き現れた』とされる『天の御遣い』を『軍師』として迎え入れ、怒涛の快進撃により着々と領地を広げっていた。

尚その際も古巣である『孫呉』に『程普』は帰る事なく『袁術』の

元に居続けた。

ココで何故『程普』は古巣に帰らなかったのか？と、歴史家たちの間ではよく議論されている。

現在最有力なのは『孫伯符からの指示で袁術の動向を見張っていた』という説。

実際この後『袁術』は『孫伯符』により討たれ、『程普』は古巣に戻っているのため信憑性は極めて高い。

他にも『袁術に情が湧いた』という説、『袁術配下の領民に慕われていたため』という説など諸説は様々。

だが総じてそれは『程普』がいかに民衆から慕われていたかを示している、と言っても過言ではないと思われる。

『孫伯符』の下に戻った時、同じく『孫文台』の拳兵時からともに歩んだ『黄蓋』と夫婦の契りを結んでいる。

が、その結婚生活は長くは続かず、一年にも満たぬ内に『程普』の討ち死にという形で終わりを告げる。

建業に攻め込んで来た『曹魏』の密偵によつて放たれた毒矢を受け、揺らぐ身体を押し、大きく陣取る『曹孟徳』の陣営に単騎突入、『魏武の大剣 夏侯元讓』により首を刎ねられ討ち死に。

その後彼の首と死体は丁重に『孫呉』に返され、『曹魏』は軍を引いたとされる。

『程普』の葬儀は彼の身分では考えられぬほど盛大に行われ、三日三晩『孫呉』の大地は悲しみの雨で埋め尽くされたという。

また嘘か誠か定かではないが、その葬儀には『曹孟徳』や『劉玄徳』も参加したとされている。

『程普徳謀』を語る上で大前提として置いておかねばならぬ事がある。

それは彼自身『酷く武に長けた』武将ではなく、また『酷く智に長けた』人物でも無いという事だ。

無論一軍を預かるだけの文武は兼ね備えていたとはいえ、それに勝る優秀な人材は『孫呉』にはまだ多数いたし、三国を探せばさらに多いだろう。

だが『三国志』に於いて、彼は非常に人気のある武将だ。

それは何故か？

その理由は彼に多くの影響を受けた武将が三国問わず、存在するからだ。

筆頭としてあげられるのが名は違えど『程普』の義理の娘とされる『呂布奉先』。

『三国無双』、『天下無双』、『万夫不当』、『人中の呂布』等彼女の強さを指し示す異名は数知れない。

出世も何もかも思うがままであった彼女であるが略奪や無駄な殺しはせず、『程普』と同じように出世も行わず、彼の後釜としての職に付き生涯を終えている。

驕る事無く、民草に施しを行い、大食いであったようだがそれ以外は質素に生きる。

彼女の死後、その家には一欠片の金銀や財宝が無かったというのだから驚きである。

そのように彼の生き様に感銘を受けて、己を見返しより高みへと至った武人が多数、国を問わず居る。

次世代を担う人材を死後も限りなく育て上げた。

これこそが『程普』が人気である理由の一つであろう。

< 詳細紹介 >

身長：190cm

体重：約110kg

誕生日：1月1日

年齢：32歳（原作開始時）

享年：35歳

血液型：AB型

真名：香坂隼人

武器：鬼鉄

配偶者：黄蓋

子供：義娘が一人

恋姫風ステータス：統4武3智2政2魅5

直属部下：呂布奉先、陳宮、貂蟬

くペルソナ3編く

【香坂隼人】

2008年4月より『港区』の『月光館学園高等学校』にて生物教員を務める青年。

目付きが鋭く強面で、大柄な男。

使用武器は鞭かハンマー、もしくは素手。

主人公である『有里湊』らより幾分も早く『ペルソナ使い』として覚醒しており、『特別課外活動部』の結成当時から『副顧問』を務めているもう一人の主人公。

『有里湊』ら一行を導き、見守る存在であり、彼らの自立した自己の確立を促す『大人』。

ちなみに『月光館学園』のOB。

10年前に『有里湊』が港区に住んでいた頃、当時桐条が秘密裏に行っていたシャドウ研究所の爆発事故で両親を亡くした彼と出会っている。

両親はその事故以降は県外にて生活を始めるが、彼自身は『月光館学園』の『巖戸台分寮』にて生活を始める。

これは『シャドウ研究』の暗部に関わっていた『幾月修司』が何らかの手を回したためだと思われる。

14歳の時に『港区』で起きた爆発事故の際、『大型シャドウ』である『デス』を垣間見た事により『前世』の記憶の一部がフラッシュバックする。

だが完全ではなかった為に記憶の混濁が起こり、『自分が何者かわからない』、『自分が二人いる』等の精神的障害が発生。

これにより夢の中でのみ『ベルベートルム』との行き来が可能になり『ペルソナ使い』として覚醒、以降『幾月修司』の監視を受けるようになる。

『ベルベートルムのエレベーターガール エリザベス』とは『自分を探している』という彼女に共感を覚え『なら俺の奥さんにならね?』と言った間柄。

その際『イゴール』は彼女の父親役だったらしい。

16歳の時唐突に『ベルベートルーム』との行き来が不可能になるが『有里湊』と出会い再び『ベルベートルーム』と行き来が可能となった。

この辺りの理由は不明。

『ペルソナ3』の世界観においては基本的に1人1体しか有せないはずの『ペルソナ』を二体所持しているらしいが、恐らく転生したためだと思われる。

本来の『ペルソナ』は『インド神話で悪霊を従えたとされる魔王マール』。

男性陣には畏敬の念を持つて見られるが、女性陣からの目は冷やかな『炎』と『物理』に特化した『ペルソナ』。

もう一つ『転生』した影響で手に入れた『ペルソナ』は『生ける炎クトグウア』。

『集合的無意識』に住まうとされる『這い寄る混沌 ニアルラトホテプ』と相対する存在とされており、同じく『集合的無意識』に住まう『ファイルモン』の姿の一つであると考えられる。

『シャドウ』を従える『シャドウ使い』としての能力を持っているのは恐らくこの為で、『ニアルラトホテプ』の部下とも言い表せれる『ニユクス』の精神の一部から派生した『シャドウ』は本能的に逆らう事の危うさを察知し、隷属していたのではと思われる。

『チドリ』が凶弾に倒れた『伊織順平』を救うため命を注ぎ込み力尽きかけた際、『香坂隼人』の体から出た『生きているような炎』が彼女を包み込み『人口ペルソナ』と『ペルソナ制御剤』を燃やし尽くし、その命を留めさせた。

これは恐らく『クトグウア』の力の一端が漏れ出たためだと思われる

る。

1月31日の最終決戦では『転生者である』と認識し『クトグウア』の『ペルソナ』を完全に覚醒し同化する。

『有里湊』の代わりに『ニユクス』を滅ぼし、『集合的無意識』に住まう『ニヤルラトホテプ』と永遠の闘いを繰り広げる事となる。

なお『ニユクス』が滅んだ事により『影時間』と『香坂隼人』に関する記憶は『アイギス』を除く『特別課外活動部』のメンバーより消え、死んだはずの『荒垣真次郎』も生き返り『普通に学校生活を送っていた』と記憶が書きかえられる。

これは人間の精神の元型である『普遍的無意識』のうち、前向きな精神―『ポジティブマインド』が人格化した『フイレモン』と『香坂隼人』が完全に同化した事による影響だと考えられる。

後の卒業式の日、『有里湊』らは『香坂隼人』と共に過ごした一年を思い出し、彼を永遠の闘いの中から解放するため『ニヤルラトホテプ』に戦いを挑む事になる。

女性関係としては『エリザベス』とデートをしたりと特別な間柄だった模様。

また『鳥海いさ子』とも結構深い間柄だったようで、一時期彼の顔が青アザで埋め尽くされた事があるようだ。

登場人物紹介（前書き）

結構時間がかかりました本編の登場人物紹介。

登場人物紹介

〈恐らく主要人物〉

【香坂隼人】

本作の主人公である『魔物使い』。

転生者でもあり現在麻帆良学園都市女子中等部2 - Aの副担任を務めている。

担当科目は理科。

『広域指導員』としても働いており『麻帆良の竜』の異名とともに、不良生徒からは畏敬の念を持って接しられている。

『魔法先生』としても働いているがその実力は鼻くそレベル。

『気』を少し前から覚えだし、『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』より、『才能がある』と認められた『鞭』や『ハンマー』を使えばそこそこではあるが、本人が素手喧嘩好きなのでまだまだ弱い。

最近とある『邪神』と契約した為戦闘力の向上が予測される。

生まれも育ちも麻帆良で中等部、高等部時代は教師陣からも一目置かれるほどの生粋の不良。

結成した暴走族の総長を務めていた当時から、長らく交友を続けている友人や妹分が複数いる。

昔の恋人である『浦島はるか』とヨリを戻したつばいがまだ微妙なところ。

最近新しい舎弟に弟分と妹分が増えたつばく、止めた煙草を吸い始めた。

【スラぼう】

本作主人公の相棒の一人にして国民的RPGである『DQシリーズ』に登場する代表的魔物。

主人である『香坂隼人』の肩の上が定位置で、いつも彼に寄り添い日々暮らしている。

本作最強キャラ。

あらゆるステータスがカンスト状態であり、尚且つすべての呪文や状態異常に耐性を持つという最強っぷり。
放つ一撃は月に大きな爪痕を残すほど。

好物は『魔物の肉』にきな粉、隼人が調理した料理全般だそうだ。
ちなみに雑食で、嫌いな物は無いらしい。

【チャチャゼロ】

本作主人公の相棒の一人にして魔法史に名を残す『悪の魔法使いエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』に仕える第一の従者の『キリング・ドール殺戮人形』……であるが『魔物の肉』の効果により受肉し、今では確立した『個』として存在。

現在は『キングレオ』として『香坂隼人』と『スラぼう』と共に日々暮らしている。

ちなみに彼女の定位置は彼の頭の上で、自分の頭の上に『スラぼう』を乗せる事もある。

血を見る事と刃物收拾、肉を喰い酒を呑む事が趣味らしい。

彼女の『御主人』の趣味からか、以前はゴスロリ風の服しか持っていなかった。

が、今では『特攻服』やら『ライダー服』やら『スーツ』やら、その他諸々いろいろな服を持っており、専用の小さな箆笥や鏡台まで持っている。

それら服の調達先は主に『まほネット』、物が無ければ夜な夜な筋肉質の強面男が針と糸と布を目の前に格闘しているそうだ。

【エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル】

ダーク・エヴァンジェリ
『闇の福音』、ドールマスター
『人形遣い』等さまざまな異名にて魔法史に燦然とその名を残す『悪の魔法使い』の代名詞。
魔法界ではなまはげ扱いされているそうだ。

その正体は齡10の時に古の呪法により『ハイ・デイトライトウォーカー真祖の吸血鬼』と化した少女。

日光に十字架、真水も克服しているがニンニクが嫌いで泳ぐ事が出来ないカナツチ。

サウザンド・マスター
現在は『千の呪文の男』により麻帆良学園都市に封印され、十五年もの長きにわたり中学生として生活を続けている。
が、何故だかは不明であるが、まんざらでも無い雰囲気希に垣間見せている。

『魔力』等さまざまな力を封じられているとはいえ、一端の『裏世界の住人』には手を出す事も出来ない存在感と実力を誇っているようだ。

【浦島はるか】

古来より日本の退魔に携わる『浦島』の家の名を連ねる女性。
本作主人公である『香坂隼人』の元カノであり、なんか最近よりを

戻したつばい。

今現在は麻帆良学園都市のとある一角にて『和風茶房 日向』を営んでいる。

住居兼職場のそこに、先日同居人が増えた。

『八極拳』の達人で射撃も得意な『天才肌』。

だが『浦島』の家に代々伝わる武術、『浦島流柔術』を扱う才能は無かつたらしく『技』の一つもまだ完璧にこなす事が出来ない。その事に一時期主重荷や負い目を感じ、荒んでいた事もあった。

数ヶ月前まで愛煙家であったが、とある出来事からパタリとその様子を確保出来なくなっているそうだ。

【超鈴音】

『麻帆良の最強頭脳』と呼ばれる中国人。

ありとあらゆる分野に手を伸ばし、他の追随を許さぬ『天才少女』で勉強・料理・スポーツ何でもござれの無敵超人。

だが殊更『拳法』に於いては『北派小林拳』を使う彼女と対等以上に戦える、同年代の少女がいるらしい。

だがそんな物は全てまやかし。

本当の彼女は未来から来た未来人であり、盲信的に『香坂隼人』を崇拜する『狂人』。

人としての『倫理』や『道德』の前にまず彼が存在し、本気で世界は彼中心に廻っていると考え何ら疑問を抱かないという、少々危険な思考回路をしているらしい。

現在ではその身に留まりきらず漏れ出しそうだった狂気を受け止め、受け入れてくれた彼にとある存在との『契約』も相まって、魂の底

からその背中についていく事を誓っているそうだ。
なお彼の傍にいれば彼女の狂気も緩和される様子。
ちなみに非処女。

【ネギ・スプリングフィールド】

『英雄 ナギ・スプリングフィールド』の息子にして『魔法世界メガロメセンブリア元老院』の人々が将来を期待する少年。
『光』と『雷』、『風』の魔法と相性が良く、それがまた父親と似ているため本人も周りも嬉しいようだ。

お伽話のように聞かされた父親が大好きで、そんな父親のような存在になりたいがため『偉大なる魔法使い』を目指している。
だが麻帆良学園都市初等部で学び、多くの『彼を英雄の息子』として見ない人々と出会い、少々考えが変わって来ているようだ。

今の目標は『みんなを笑顔に出来る魔法使いになる事』。

その為『友達百人計画』を掲げて頑張っている。

ちなみに今ネギが胸を張って『友達』と言える人間は……十人足らず……男は一人……頑張れ、ネギくん。

【アンナ・ユーリエウナ・ココロウア】

『ウェールズの悲劇』の生き残りにして『魔法世界メガロメセンブリア元老院』から妙な期待をかけられている少女。

『炎』と『風』の魔法と相性がいい天才少女。

但しその天才っぷりもネギには劣るが十分天才……天才多い漫画ですよね。

石化してしまった両親と故郷の村の人々を元に戻す為『偉大なる魔法使い』

法使い』を目指す。

だが自分には治せるだけの高位の『治癒魔法』を扱う才能がないと知ると、それを扱えるような仲間を見つけたたり、治せるようなすごい魔法具を見つける為に強くなろうと努力している。

今の目標は『誰も泣かせない魔法使いになる事』。

ちなみにメルディアナ時代から仲良しで文通している友達もいる。初等部では学年問わず、交友関係はかなり広いようだ。

〈麻帆良学園女子中等部2 - A生徒〉

【椎名桜子】

本作主人公である『香坂隼人』の妹分の一人。

生後数ヶ月くらいの時期から面倒を見てもらっている為、彼は彼女にとって『兄貴分』でありつつ『父親』のような存在でもあったりする。

ノー天気そうに見えるが家事全般が得意で、普段はお弁当を学校に持ってきている。

好みの男のタイプは『イカした人』。

ただ彼女は幼少の頃よりだいぶネジの外れた男連中と触れあっている為、その壁は酷く高いと思われる。

『香坂隼人』が総長を務めたチーム『蜿墮亞蘭弩』に幼稚園児の頃から名を連ねており、いつも彼らの傍に居たため同年代の女子と比べて度胸が半端無い。

『クッキ』と『ビッケ』という老猫を飼っている。

【明石裕奈】

本作主人公である『香坂隼人』の妹分の一人。
幼稚園児の時、『椎名桜子』が飼っている猫二匹に興味を持った事が始まり。

以降『香坂隼人』らを『兄』と慕うようになっていく。

自他共に認める『ファザコン』で、『父親の事が大好き』と惜しげもなく公言する。

好きな男のタイプは『おとーさん』、妥協して『あんちゃん』。

バスケットボール部のエースで運動能力は高い。
だが部活自体があまり強くないので、大会での成績は芳しくない。

『香坂隼人』が総長を務めたチーム『蛭墮亞蘭弩』に幼馴染の『椎名桜子』と合わせて幼稚園児の頃から名を連ねている。

【神楽坂明日菜】

凄まじい運動能力を誇るオッドアイなツインテール少女。
反面ちよつと頭が弱い様子。

子供嫌いで渋いオジサマがタイプらしい。
最近年下の友人が出来ており、弟や妹のような存在として可愛がっている。

奨学金を受けて学校に通う勤労少女でもあり、毎朝新聞配達のパイトに精を出す。

『雪広あやか』とは初等部からの腐れ縁。

口悪く罵る事もあるようだが、なんだかんだいって一番気があう様子。

【雪広あやか】

世界的企業である『雪広財閥』の当主の次女、つまりかなりのお嬢様。

初等部の頃から常に『学級委員長』を務めている為、あだ名は『いいんちよう』や『いいんちよ』等々。

その為か無口な『ザジ・レイニーデイ』と会話ができ、普通なら見えないはずの『相坂さよ』の姿もたまに確認することが可能。

頭も良く運動神経も良く、『超鈴音』には及ばないものの十分な『完璧超人』。

『華道』、『茶道』、『馬術』、『柔術』等々も学んでおり、『雪広家』に名を連ねる者として己を高めようと日々努力しているようだ。

『神楽坂明日菜』とは初等部からの腐れ縁。

口悪く罵る事もあるようだが、なんだかんだいって一番気があう様子。

【龍宮真名】

世界中の紛争地域を渡り歩いて来たらしい褐色長身少女。

『裏世界』では有名な『殺し屋』らしいが『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』を目指す魔法使いの従者だった彼女が殺しをしてイイのか？とも思ったりする。

多分パートナーが死んだ後頑張ったんだろうな……と考察中。

『魔族』とのハーフで、力を解放した姿を『香坂隼人』に見せている。

『夜の警備』では麻帆良学園都市に雇われる形の『傭兵』として、侵入者撃退を行っている。

主に組むパートナーは『桜咲刹那』、もしくは『香坂隼人』一行。

【桜咲刹那】

京都出身のサイドポニー少女。

平安の世より綿々と受け継がれている退魔剣術『京都神鳴流』の使い手。

『関西呪術教会』の長から貰った白木造りの柄に入った大太刀『夕凧』を獲物としている。

『烏族』と呼ばれる『異形』とのハーフで、本来黒いはずの翼が白い変異種。

『夜の警備』では麻帆良学園都市所属の『魔法生徒』の形として、侵入者撃退を行っている。

主に組むパートナーは『龍宮真名』、もしくは『香坂隼人』一行。

【那波千鶴】

クラス一のばいーん少女。

見た目も雰囲気もとても中学二年生とは思えない、ホント思えない。

とある事柄より『香坂隼人』に惚れており猛烈アピールをしているが、いつも軽々あしらわれている様子。

が、ガンガン魅力が高まっているらしく、告白もバンバンされているが、全部ズバズバ切っている。

彼女にはこれからも頑張って欲しいものである。

【古菲】

昨年度麻帆良学園都市で行われた武術大会の優勝者。
中学二年生にして『技術を極限まで極めた』とか『一般人最強レベル』とか言われる少女。

中国からの留学生で『超鈴音』の親友。

最近ちよつと彼女がオカシイ事に気付いたが、それでもドンと受け入れる深い懷を持ったスゴイヤツ。

【長瀬楓】

忍んでいない忍者な糸目長身少女。

クラスではすっかりいじられ役が定着してしまったちよつとアホの子。

妹分を二人抱えており、同年代の少女たちよりいくらか大人びている。

だがちよつとアホの子。

【絡操茶々丸】

『葉加瀬聡美』によって作られた機械少女。

全身に武装を備えた『エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル』の従者。

最近は人と触れ合う事も多く、大分人間じみて来ている。
だがまだ『心の気づかい』辺りはよくわかっていないようだ。

ちなみに性交の為の機能は付いていないらしい。

【ザジ・レイニーデイ】

『人間界』とは違う次元に存在する『魔界』より来た『魔族』の少女。

結構深い階層に実家があるっぽく、イイとこのお嬢さんらしい。

年齢もホントはもっといつてるそうで、姉がいるそうだ。

無口な為会話できる人間が少ないが、とてもユーモアあふれている様子。

現在完璧に話せるのは『香坂隼人』、『スラぼう』、『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』、『雪広あやか』、『新田彰彦』の五人。

次いで『チャチャゼロ』と『相坂さよ』は何となく、『春日美空』と『朝倉和美』と『長谷川千雨』と『村上夏美』と『那波千鶴』はちよつとだけ話せるらしい。

【相坂さよ】

60年くらい前に死んだ自縛霊。

暗いところが苦手な幽霊というのも中々乙だと思う。

隠蔽性が極めて高らしく、完全に彼女を捉える事が出来るのは『香坂隼人』、『スラぼう』、『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』、『チャチャゼロ』、『ザジ・レイニーデイ』、『近衛近右衛門』のみ。

何故かは不明だが『雪広あやか』が偶にその姿捉え、声を聞いて会話をしているらしい。

クラス委員長スゲーって感じである。

【春日美空、朝倉和美、長谷川千雨、村上夏美】

前からボケ担当、煽り担当、強ツツコミ担当、弱ツツコミ担当。

2 - Aのお調子者二人に引きずり込まれた少女たちによって出来たグループ。

ここに『雪広あやか』と『那波千鶴』、『ザジ・レイニーデイ』と『相坂さよ』が加わって一緒にいる事が多い……若干名見えないが、なにげに『春日美空』は『一匹目』から登場している。

【佐々木まき絵、和泉亜子、大河内アキラ】

ここに『明石裕奈』を加える事で成り立つ運動部四人組。

総じて身体能力が高く、皆が皆運動部のエースクラス……一人マネージャーだが。

『椎名桜子』と『明石裕奈』が幼馴染同士の為、チア三人組とは仲がイイ。

【柿崎美砂、釘宮円】

ここに『椎名桜子』を加える事で成り立つチア三人組。

彼氏持ちの『柿崎美砂』をグループに要しており、ファッションやらトレンドやら、そんなモノにクラス一敏感なグループ。

2 - A内の流行発信を行っている。

『明石裕奈』と『椎名桜子』が幼馴染同士の為、運動部四人組とは仲がイイ。

【近衛木乃香、宮崎のどか、綾瀬夕映、早乙女ハルナ】

所謂図書館組み。

『図書館探検部』という部活に皆が所属しており、ここに『神楽坂明日菜』を加える事でグループが成り立つ。

原作ではメインはっている方々だが今は不遇。

原作突入からの頑張りに期待。

【鳴滝風香、鳴滝史伽】

小学生と見まごう背丈の双子姉妹。

風香が軽いツインテール、史伽が軽いお団子頭。

寮が同室の『長瀬楓』を『かえで姉』と呼び慕っている。

【四葉五月、葉加瀬聡美】

前者が料理人、後者がマッドサイエンティスト。

麻帆良学園都市でも有名な屋台、『超包子』に雇われ働いている。

ちなみに『四葉五月』は味の総監督なんかもやってたりするスゲイ人。

『葉加瀬聡美』はレーザー出せるロボットなんか作れちゃうスゲイ人。

二人とも麻帆良学園都市に通う人間の『異常スペック』を体现する様なキャラであるが、あまり二次創作では見かけない。

出してみるのも面白いかも？なんて思ったりしてる二人。

くその他生徒く

【ネカネ・スプリングフィールド】

『英雄の息子 ネギ・スプリングフィールド』の従姉にあたる少女とある事柄より自分ちゃんとお姉ちゃん出来てない気がする……と

感じ取る。

メルディアナ魔法学校にて研究員見習いとして働いていた。それまではウェールズの山奥とメルディアナ魔法学校を往復する生活を続けており、街に出た事がなかったらしい。

現在は麻帆良学園都市内の『和風茶房 日向』に下宿させて貰っており、来年度より麻帆良大学教育学部に編入する事となった。

今の目標は『人を導ける教師になる事』。

シヨッピングや恋なんかもしてみたいなあ……なんて思ったりしている20歳。

【豪徳寺薫】

元『蜿墮亞蘭弩』メンバーである学ランリーゼント。

麻帆良大学の二年生で教育学部に通っている。

一般人であるが『氣』を扱う事が出来る。

が、『香坂隼人』らチームのメンバーには一回も喧嘩で勝てた事がない。

最近好きな人が出来た。

【柴山春樹】

『ネギ・スプリングフィールド』をいじめていた麻帆良学園初等部の高学年。

ちよつとヒステリックな母親とちよつとダメな幼馴染を持っている為面倒見が良い。

『ネギ・スプリングフィールド』の初めての同年代男友達。

【笹川雪】

『柴山春樹』の幼馴染の少女。

『アンナ・ココロウア』の日本で最初に出来た友人。

（教師 + α）

【近衛近右衛門】

『麻帆良学園理事長』兼『関東魔法協会理事』を務める『偉大なる魔法使い』。
ル・マキ

『旧世界の賢者』と謳われる大魔法使いで、『雷』系統の魔法が得意。

『次世代の英雄を育てなければならない』という『魔法使い』としての立場と、『まっすぐとした子供たちを育てねばならない』という『教育者』としての立場、双方のトップとして苦悩している。

『香坂隼人』に対してかなりイイ印象を持っている模様。

【高畑・T・タカミチ】

元『アラルフラ紅き翼』の一人で、元2・Aの担任教師。
魔法が使えない特殊体質であるが、とある体術を高レベルで習得している為かなり強い。

世界各国の紛争地域で魔法関連のいざこざを解決しているため出張が多く、それが『香坂隼人』の副担任昇格という流れに繋がった。

ある少女の護衛を任意でやっている。

【新田彰彦】

麻帆良学園都市女子中等部二学年A Hクラス主任である現代国語の教師。

広域指導員を務め『鬼の新田』と呼ばれる厳しい先生で、生徒たちからは疎ましがられている。

が、卒業生からの人気は高いようだ。

『香坂隼人』が教師を目指した原因の一つ。

奥さんと、来年中学に上がる娘が一人いる。

【ハルト・ガンドルフィーニ】

『魔法界』の都市である『メガロメセンブリア』出身の『魔法使い』。

麻帆良聖ウルスラ女子高等学校1-C担任で英語教員、広域指導員も務める。

いい意味でも悪い意味でも自分を枉げられないタイプ。

以前は『香坂隼人』を毛嫌いしていたが、今は仲良しなようだ。

『チャチャゼロ』とは犬猿の仲。

【令子・ガンドルフィーニ】

『ハルト・ガンドルフィーニ』の奥さん。

元ヤンで元は彼の担当生徒。

魔法を知らない一般人。

【亜矢・ガンドルフィーニ】

『ハルト・ガンドルフィーニ』の一人娘。
魔法を知らない幼稚園児。

【式集院光】

麻帆良学園本校初等部4-D担任の『魔法先生』。
『魔法使い』でありながら『敵を倒す』という事を行わないちよつとした異端児。
代わりに『電子精霊』等の『サポート魔法』に特化している。

元はストレスからの過食で今のようなぽっちゃり体型に。
今では立派な食道楽。
料理を作るのも食べるのも大好き。

【式集院夏輝】

『式集院光』の奥さん。
『魔法を知っている』一般人。

【式集院真紀】

『式集院光』の娘。
『幻術魔法』が得意な幼稚園児。

【神多羅木真也】

麻帆良学園男子高等部2 - B担任の数学教員。

広域指導員も務める『魔法先生』で、元『本国魔法騎士団』で団長を務めていた。

『風刃』との異名を取る実力者であり、麻帆良学園都市の『魔法先生』ではトップクラスの武闘派。

サングラスを外さない為、見た目はかなり怖い。

『葛葉刀子』に恋慕の情を抱いている。

【明石裕二】

麻帆良大学で教授を務める若々しい中年。

『魔法先生』であり、その中でも部隊を率いる『隊長』のような立ち場。

『明石裕奈』とは父娘関係。
数年前に妻を亡くしている。

【瀬流彦秀介】

麻帆良学園都市女子中等部で数学教員を務める『魔法先生』。
『香坂隼人』とは麻帆良大学の同級生。

地味、でもこれ以降活躍の場が増えるはず。
でも地味。

何かに特化したタイプの『魔法先生』らしい。

【坂上・S・和利】

麻帆良学園都市女子中等部二年Ⅰ〇組主任。

『魔法先生』であり、その中でも部隊を率いる『隊長』のような立ち場。

『香坂隼人』が学生だった頃、手痛い襲撃を受けた経験を持つ為、彼の事を毛嫌いしている。

『正義』に括る節がみられ、『ネギ・スプリングフィールド』を『英雄』にしようと画策している模様。

だがその反面、教師として『まっすぐした大人になって欲しい』とも思っているようだ。

妻と娘を亡くしている様子。

【ヘゼル・ダイナー】

『魔法界』の都市である『メガロメセンブリア』出身の『魔法使い』。

麻帆良聖ウルスラ女子高等学校1・B担任で英語教員、広域指導員も務める。

『魔法界』では名の知れた冒険者であり、『粉塵の槍使い』という異名を持つ凄腕『魔法戦士』。

百人いれば老若男女、百人確実に振り替える様な超絶イケメン。但しオカマ。

2m近い身長に、絞り込まれた筋肉を持つ美丈夫。但しオカマ。

『ハルト・ガンドルフィーニ』の幼馴染。

『坂上・S・和利』に付き従うようなそぶりを見せるが、『香坂隼

人』とは友人同士。

【シャークティ・ヴェンド】

麻帆良学園都市内にある教会のシスター。

『超鈴音』とは違う意味で『狂って』いる『狂信者』。

『香坂隼人』が数か月前まで本気で惚れていた相手。

【葛葉刀子】

麻帆良学園男子高等部2-F担任の古典教員。

『京都神鳴流』と呼ばれる『退魔剣術』を納めた『魔法先生』で、麻帆良学園都市でも屈指の武闘派。

元々は京都出身で『関西呪術教会』に籍を置いていたが結婚と同時に『関東魔法協会』に籍を変える。

だが離婚している、そろそろ三十路、マジ彼氏欲しい。

京都に同じ年の幼馴染が一人いる、ただし同性。

【源しずな】

『近衛近右衛門』の秘書も務める英語教員。

『魔法を知っている』一般人。

バスト1m近い超巨乳。

くその他人物く

【高木政利】

元『蜿墮亞蘭弩』メンバー。

麻帆良学園都市で知る人ぞ知る、屋台のおでん屋の息子。

現在は父親の下、暖簾分けを目指し修行中

五年以上付き合っている彼女がいるが、今だ童貞。

【古井レイヴェン】

元『蜿墮亞蘭弩』メンバーであるハーフ。

『北欧料理 ユグドラシル』の店長の息子で、現在は跡を継ぐべく修行中。

【リリー】

図書館島とある扉の守護をしている『ドラゴン』。

『ワイバーン』と呼ばれる種類のメスで、『香坂隼人』とは友人同士。

【浦島ひなた】

『浦島家当主』、奔放で恋人探しの為世界を回っている。

【瀬田記康】

元『浦島はるか』の婚約者。
イイ漢。

【紺野みつね】

元『ひなた荘』の住人。
イイ女。

登場人物紹介（後書き）

この後『ペルソナ3』での『IF』の設定を載せた後、いよいよ原作突入する運びとなるかと思われます。

よろしければこれからも自分の拙い作品、『俺、転生したんだと』にお付き合いいただけると嬉しく思います。

四十三匹目 酒の席で夢を語るのが男って生き物（前書き）

第一章開幕。

大幅改定しました。

四十三匹目 酒の席で夢を語るのが男って生き物

「俺はさあ……俺は嬉しい！」

ネギとアーニヤのヤツがさ、ガキなりに考えて学校行きたいって言ってくれちゃってよ、まぎすてる・まぎだか何だか知らねーけどそれになるために用意された道ぶっ千切ってもよ、ガキとしていきたいって思ってくれてたんだぜ！？」

「あゝあゝ、わかったわかった……嬉しかった訳だな、ホントに」

「そーなんだよはるか！」

……なんかさ、ホントにイイ方向に成長したのかどうかはわかんねえけど、それでもこう……俺が教師らしく？アイツらが日本に来た時のアイツらよりでっかいヤツらになれたっーか、なんっーか……」

「支離滅裂ダナ」

「……うつせーバカ、……とにかく俺は嬉しいんだよー！」

「ぴぎぴぎぎっー！」

「そうかスラぼう！テメエも嬉しいかー！」

ケタケタと、ガキみたいな笑顔を浮かべて青いタマネギ……もとい青くひんやり冷たいタマネギのような魔物『スラぼう』に頬を擦り寄せる大柄の男。

酒臭い息を口から吐き出して、三白眼の強面も、朱色の瞳も、だらしなく緩んでいる。

「ガキ二匹ハドーデモイイガ酒ガウマイ！『ツマミ』ガ足ンネーゼ」

「はいはい、今持つてくよ」

チンと、レンジから合図だ。

膨らんだアルミホイルを皿の上に、開ければしんなりと甘そうなキヤベツに薄くスライスされた肉。フム、食欲をそそるニオイだね。

「アッハッハッハッハ！！」

「ケーーーーッケケケケケケケ！！」

「ぴぎぎーぎっ！！」

……相も変わらずデカイ声だ。
酒も入っているせいだとは思いが……まあ、今日くらいは構わないか。

男の隣でスラぼうが笑う。

男の隣で人形が笑う。

人形だというのに、頬に筋肉があるかのように目尻を下げて口元を吊り上げて笑う翠髪。

魔物になってしまった『チャチャゼロ』……楽しそだね、ホント。

一応私の住居も兼用している『和風茶房 日向』はその名の通り喫茶店のようなモノだ。

今はもう明日まであと少しという時間。

本来ならこんな時間まで開いてる訳もないし、酒だって出したりはしないんだが、今日は特別というヤツ。

ここにホームステイ……イヤ、違うな。

同居というのも何か違う気がするが、間借りというのが正しいのか？

何でも構わないが一緒に暮らしている留学生『ネカネ・スプリングフィールド』は今日はいない。

弟分の『ネギ・スプリングフィールド』と妹分の『アンナ・ココロウア』と一緒に泊り中。

その男の家だな。

……一応勘違いしてはいけないから言うておくが、別にそのアホとネカネがどうこうなってる訳じゃない。

ネギとアーニヤが日本に来た時からの保護者であるそのアホの家に住んでる、それだけだ。

それにしても……フム……どうする気なんだろうな。

確か『麻帆良学園』は基本的に全寮制だったと記憶している。

そこら辺りは考えているのか？

特にネギの方を。

「おおつ、美味しそうだね！」

「そう言うってもらえると嬉しい限り」

「俺も貰おう」

手に盛った皿を下ろして……私も座るか。

箸を伸ばす『貳集院光』先生に『神多羅木真也』先生。

「明石教授も取ります?」

「ん、じゃあ貰おうかな」

酒を入れる『明石裕二』教授に皿片手の『瀬流彦秀介』。
それと……。

「オオツ!もう一度飲むぞオツ!」

トイレから出て来た『ハルト・ガンドルフィーニ』。

酒に弱いくせに頑張るモノだね。

相手はうわばみだっているのにさ。

「おうさガンちゃん!」

ともかくその言葉に、崩れた顔を更に崩して男は笑う。

昔より少しくすんだ紅い髪の毛の、朱い瞳の強面巨漢は声を張り上げ笑う。

「んじゃ改めまして……ネギにアーニヤの二人がでっかくなれる為に!」

「二人が人として真っ直ぐ成長できるように!」

「力ありきの魔法使いにはならないように、かな」

「折れぬ心を持てるように」

「……下らない妄言を吐く大人に利用されないように」

「えと……とつ、とにかく子供らしく学校を楽しめるように！」

「教師として！大人として！気合入れていきましょうやアツ……！
ンパアアイツツ……！」

誓いを胸に、男は笑う。

想いを一つに、男たちは笑う。

思わず口元が緩んでしまうな。

……フム、幸せとは単にこのような場を持てる事かもしれん。

なあ『香坂隼人』……そう考えるならば、お前は相当な幸せ者だぞ？

「……そうか、ネカネは無事そっちの大学には編入出来たか」

「成績では申し分なかったしの、後は適当にじゃ。」

しかしそんな優等生がお主の孫で、ナギの姪っ子とは思えんのう」

「大きなお世話じゃ、アホたれ。」

ワシは抜くところは抜いて、決める所は決める……そんなナイスガイじゃったろうに。

バカ息子とは一緒にして欲しくないわ」

「ホッホッホ……よくゆーわ、ワシが幾度お主の家庭教師代わりに勉強を教えていたを思うとる」

「それを言うなら体術訓練は幾度となく、ワシが近右衛門に付き合っただと思っとるか。」

五分五分……イヤ、7：3でワシの方が頑張っておるぞ」

「まあ結局ワシのスタイルはお主やナギとは違って正統派『魔法使い』スタイルじゃから、ぶっちゃけ無意味じゃったとも言えるわい」

「……嫌味か？」

「さあ、の」

「……………」

「ともかく幾重にも幾重にも、『認識阻害魔法』に『隠蔽魔法』をかけてする念話じゃないわい。」

とつとと本題に入るぞ、『メルディアナ魔法校長兼欧州魔法協合理事 マギ・スプリングフィールド』よ……にしても、『EU』が出来てから大層な肩書になったと、改めて思うのう」

「かつちよええじゃろ、『麻帆良学園理事長兼関東魔法協会理事 近衛近右衛門』」

「お主は微妙じゃがの」

「カツ！年寄りの僻みは怖いのう」

いつものような掛け合い、いつものような軽口。そして始まるいつもとはちよいと違った年寄りの話じゃ。

にしても……相も変らぬめんどくさいヤツめ。

何十年も前のことをちよいとわしが面白可笑しゅう言っただけというぬ、ギャグがわからんとはまだまだじゃい。

そうやってユーモアセンスがいまいちじゃから、ああなったというのがわからんのかの？

まあ、それはひとまず置いておくかの。

「フム……マギ、我が盟友よ……大丈夫なのかの？」

ネカネちゃんとは本国に対しての『人質』のようなもんじゃろ。

ネギくんへの『楔』として、いつでも自由に扱えるような『人質』のような存在としてメルディアナ魔法に『軟禁』しておったというに」

「大丈夫じゃ、……大丈夫にしてみせるわい。」

アレはワシの孫、かわいい孫娘……『道具』のような扱いになぞ、もうあの子が二本の足で自ら歩くと決めた時に二度とさせぬと……そう心に決めたわ」

フム、なるほど……の。

こやつもきちんと向き合おうと決めたということか。

……『英雄』というものは、めんどくさいもんじゃ。

そこで呼ばれたとして、そう持ち上げられたとして、そう名乗ったとして、そう謳われたとして。

後々、遙か後世までにその遺恨は残ってしまう。

『英雄』と対極の位置にあるとされる『悪党』もしかりじゃの。

良い評判にせよ悪い評判にせよ、大きな名を背負うは、有名となるということとはそういう事。

その者で血筋を留め切り、身分を捨て去り、その身を霧のように隠すというなればまた話は少々違ってくる。

じゃがそうはいかぬが世の常、人の常。

人には大なり小なり『欲』がある。

欲を御しきり、全てを捨てて新天地に向かうなどという事は、余程の器では出来ぬわ。

で、何の話じゃったか……。

そうそう、『英雄』と呼ばれた者の遺恨についてじゃったの。

彼を彼女を、その位置に据えた時、誰しもが『英雄』に憧れ、『英雄』を敬い、『英雄』を己らの長とし頭を垂れる。

それほどまでに現れた『英雄』の人々に与える影響は大きなもの。

じゃが起った一つの大衆の意にそぐわぬ行動で、そうではなかったとしても時が経てば、その認識は大きく変わってしまうもんじゃ。

『英雄』は日が昇り、日が沈み、再び日が昇った時には『国家転覆を企む最悪の逆族』として、国中に知れ渡る事もある。

悲しきかな、それが当たり前。

よほど求心力があるものじゃないと……イヤ、例えそうだとしても『英雄』を羨み憎むものが出てきてしまう。

そしてその乱れた世を立て直すため、新たな『英雄』を引っ張り出してくる。

堂々巡り、じゃがそうやって紡いできたのが人の歴史というモノ。間違っていると言えば、異常と言われれば……確かにそうじゃのうと改めて思っわい。

大衆は『英雄』にとって最強の『矛』であり『盾』。
されど最悪の『毒』にもなりうる存在じゃ。

大衆は愚かである。

されど『大衆』なくして『英雄』の誕生はありえぬ。

じゃからこそ一部では『千の屍を積み上げた男』と呼ばれるナギを、前時代の『英雄』が残した認識を吹き飛ばす為に、ネギくんを『英雄』に仕立て上げようという動きがある。

ナギの息子の彼ならば、ナギを称賛する者からの受けは良い。

その上『父の過ちを息子が正す』と、非難する者の認識をひっくり返す最高の舞台も整っておる。

更に彼が正しく『英雄』として後世に名を残せば、ナギを『英雄』とした者達のメンツも保つというもんじゃわい。

そしてじゃからこそ、『英雄』となったネギくんを都合のイイようコントロールする為にネカネちゃんを使おうという動きもある事は確かじゃ。

そうならぬ為に、マギは彼女を膝元から外に出さぬようにしておった訳だの。

結果的に『軟禁』する事になっておったがの。
まあこつち来させとるようじゃし……もし毛筋ほどの傷をヤツらが付けようものなら……のう……。

「例えこの老骨、卑しきハゲタカどもにしゃぶり尽くされたとしても、これだけは枉げられぬ。」

それが『マギ・スプリングフィールド』、我が身に戴いた『偉大
スデル・マギ
なる魔法使い』の称号をドブ川に捨てる事となつたとしても……
先代メガロメセンブリア元老院長』には申し訳ない気持ちがあるが
……これだけは違わぬと、の」

「『先代』か……妙な魅力のある、好々爺じゃった。」

いつの間にか惹きつけられていたというか、彼がおつたからこそ
ワシらもこうやって真つ当な男として立て、今のような地位に付く
事が出来たんじゃろうな」

……人は『英雄』になりたいと、叫ぶ。

そしてワシも、マギも、ナギもそうで……恐らくネギくんも、そう
呼ばれる存在となるんじゃないやろう。

少し脇道に逸れるがの、ワシはナギが『偉大なる魔法使い』の称号
マギスデル・マギ
を受けておるのは、少しおかしいと疑問を抱く事があるんじゃない。
無論、声を大にそのような事は言えぬがの。

元来『偉大なる魔法使い』の称号は魔法使いや非魔法使いに問わず、
マギスデル・マギ
極めて社会の為に役立ち、社会の為に貢献した人物に与えられるべ
き称号じゃ。

言うなれば……そうだの、『ノーベル賞』のようなもん。

まあ『魔法使い』と付いておるから非魔法使いには与えられぬがの。

『生存率を上げるための効果的な治癒魔法を開発した』だの、『対象を傷つけず無力化する魔法を開発した』だの役立つ魔法の開発は、『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』の称号を戴くに相応しい。とくに後者は有名じゃ。

『エクサルマニイオー武装解除』は誰しも魔法使いなら覚えておる呪文じゃが、かなり高度で強力じゃぞ。

まともに叩き込めば無条件にあらゆる武装を弾け飛ばす。

……正直なところの、これを極めて後は『魔法の射手』でも覚えとりゃ、無敵な気もするんじゃないが……まあ今の話には関係ないわい。

ほんに複雑怪奇な術式を簡易化し、実践レベルで対応できるまで昇華した素晴らしき魔法。

まさしく無傷で対象を捕縛するためには必須と言ってよい。

……えっちいじゃしの……ホッホッ。

ゴホン！

ともかくこのような魔法を開発するか、実戦で使用可能にするか、もしくは謳うように『多くの弱き者の心身を救う』。

これを行える者こそ、そう呼ばれるべき者のはず。

ナギは確かに『英雄』じゃ。

戦局をひっくり返し、多くの人々を救い、国々をまとめ上げ、諸悪の根源を叩き潰した。

じゃがヤツは『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』ではないと、そう思う。名のつてはならぬと、血の海に沈んだだけのヤツは、『力』だけで

全てを解決したナギはそう宣言してはならぬと、ワシはそう思う。

「ふむ……まったくもって違い無いの。」

あの頃はワシとお主とお主の義兄、それにヒナちゃんとワシのワイフで暴れまわったもんじゃ。

ただの厄介者でしかなかったワシらを……懐かしい、本当に懐かしい限りじゃ」

ワシもマギも、人を殺した事はある。

十や百では無いかもしれぬ。

それを違うつもりはない。

ワシもマギも、『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』と呼ばれておる。

じゃがそう呼ばれたのは齡が四十や五十になってからじゃ。

若者の未来を作る魔法使いの先達として、悪しき慣習を切り開く開拓者として。

魔法使い社会に貢献し、それが大衆に認められたからこそ、そう宣言しておる。

されど今の時代の魔法使いたちは『英雄』と『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』を混同しておる。

多くの悪を倒し、多くの悪魔を還し、誰よりも強くなった者こそが『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』であると、そう考えておる。

そしてその称号を授ける魔法使いの最高権力者が集う『メガロメセンプルリア元老院』もまた、そのような者たちに偉大なるその名を授けておる。

それは間違いじゃと、彼らはどこかで気付いておる。

じゃが『強い』と言う事は、酷く大衆の目を集める事に適しておる。

それは本来の意味合いと違うとは、良識ある指導者は気付いておる。じゃがその認識を人々に植え付けさせた『ナギ・スプリングフィールド』の影響は、彼らの予想を逸脱するほどに強大じゃった。

「……それを捨てる覚悟を持って……かの？」

「そうじゃ……未来に続く正しき意志を残すため、若者の道となるべく……老兵は死して参ろう」

「ホッホッホ、いつちよ前に言うのう」

「当たり前じゃい！」

この男つぷりがあつたからこそ『美の神』^{ビナス}と謳われたワイフをオトせたんじゃない、それは歴史が証明しとる」

「今は疎遠じゃろ？」

「それは言わんでええっ！！」

捨てる事に、称号を捨てる事に未練はない。

『英雄』を作るという事、『英雄』を育てるという事。

ワシかてネギくんを、その時大衆が求めていたとはいえ武一辺倒であつたナギのような『英雄』とすると言ふなれば、彼らの意見には真っ向から反対しよう。

麻帆良に誘ふ事も……もしかしたらその意見を他の者が聞く前に、

握り潰しておったやもしれぬ。

じゃが元老院の中には『彼の称号を正しき者に授ける為に』という名目で、彼を『英雄』にしようと考えてる者もいることは確か。

……というより、その者がナギの母親なんじゃがの。

ワシらの盟友である彼女がそのように働き掛けようとしておる為、ワシらに協力を求めて来ておる為、ワシはネギくんを麻帆良の地に招き入れた。

「……なればカッコよく華を咲かせてみようかの、ワシかて男の子じゃし」

「フツ……そんな齡じゃ無かるうに……それよりも、のう」

「皆まで言わんで良いぞ、さっきも言ったがカッコつけたいお年頃なんじゃ。」

「……それに、例えすべてを知ったとしても彼も彼女もきっと大丈夫じゃ」

修行の事も少々本来とは違って、彼は『教師』ではなく『生徒』として麻帆良に来る事となった。

まあネギくんたつての希望があつし、ワシ個人の私的な考えがあつたのもあつたしの。

『飛び級の試験的運用』とでも言っておけば世論からも何とか逃れれるじゃろ。

幸いアーニヤちゃんも申し出てくれたし、口は悪いがちょうど良かった。

『一つのクラス』に纏める事も、後は口八丁で理路整然と並びたて

れば何とかなるかの……多分。

この時期に、事前に彼からの申し出で根回しはしておったはいえ、このような時期にネギくんとアーニヤちゃんの修業先と内容を変更する事は異例中の異例。

ま、ココは『英雄の息子』という肩書きが役に立ったわい。

アーニヤちゃんの方は先方は喜々としておったし、ネギくんはそもそも『教師』と言う事が重要じゃないからの。

ナギが歩んだ道を歩き、されど道を取り入れつつも違って正しき道を作る。

これが彼に期待する者が抱く思想。

勿論、『^{マギステル・マギ}偉大なる魔法使い』は今の認識で構わぬなどという輩も居るが、兼ね備えることに異論はないようじゃ。

……まあ詰まるところがすべて……。

「随分と彼を買つとるようだの」

「マギ、お主も日本に来てみい。」

ワシの言わんとしとる事、しっかりわかるわい」

「まあワシらが一步踏み出せたのは彼のおかげじゃし、ワシかて大して気持ちは変わらん」

マギの言う通り、『香坂隼人』と言う男のおかげなんじゃがの。

彼の働きで、ネギくんは『父の背中だけを追う人生』から外れる事が出来た。

少し違った視点で、前よりも広い視野で、物事を見る事が出来た。

人として成長し、ある程度の常識を心に抱き、自分の意志で持つて『教師』より『生徒』になりたいと望む事が出来た。

これは大きいぞ。

見上げれば立ち眩みがするほどに……の。

ネギくんはワシのところに来た時『誰とでも手を繋ぎ、つないだ仲間と一緒に一人でも多くの人を笑顔にしたい』と、そんな魔法使いになりたいと、言っておった。

それは正に『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』の正しき姿ではないのかの？

ネギくんは、アーニヤちゃんは二月より2・Aに所属する事となる。これが彼らにとって、本当に正しき道となるべく、ワシらは尽力せねばならぬ。

粉骨碎身、『近衛近右衛門』と名のる一人の魔法使いがこの世界に残せる最後の大事な事として……フム。

……イヤ、大丈夫かの。

「ホッホッホッ……にしても、ワシにお主にひなちゃん……こんな老兵に氣に入られてもって、彼は一体どうなるんじゃないの？」

「フム……一国の王にでもなるんじゃないのかい？」

「……ホホッ！ならワシはいずれ隠居させてもらえるよう、今から仲ようしとくわい」

彼がおるなら、きっと道を違わぬはず。

ワシに出来る事はその環境を整えてやることだけだの。

さあ、久々に、いそがしゅうなるのう。

さてはてこれより始まりまするは遙か未来の果ての日に、『魔王』と呼ばれた青年の物語。

古今無双の力を秘めた、『異世界の魔物』を付き従えた真つ直ぐな青年の物語。

剣刃支配す『獣の王』と杯交わし、世界を駆けつけた意地っ張りな青年の物語。

氷を統べ闇を纏った、『幼い魔』を受け入れた心の強い青年の物語。

時を越えた『狂人』の、世界を創ったカッコつきたい青年の物語。

己を枉げずに貫き通した、『誇り高い女』の胸で泣いた涙脆い青年の物語。

[illegible]

『英雄』と『勇者』を育て上げた、背中の大きな青年の物語。

語り継がれる『青年』の、語り継がれる魔王の物語。

物語の始まりは、とある都市のとある家。

そこに住む一人の少女を『■■■■』が訪ねた事から。

物語は、そこから始まる。

「……ホウ、これはこれは……雁首そろえて一体この私に何の御用だ？なあ、坂上教諭」

四十三匹目 酒の席で夢を語るのが男って生き物（後書き）

遂に原作突入。

気合を入れてこれからもこの作品を執筆していきたいと思っております。

四十四匹目 大人になれば面倒事が増えるばかり（前書き）

総合評価七千超え！

皆様本当にありがとうございました。

四十四匹目 大人になれば面倒事が増えるばかり

【一月某日】

一月中旬の今日は、結構重要な日だ。

何が重要かって、そりゃネギとアーニヤの事なんだわ。

まほーがっこーの卒業試験とやらで、アイツら二人は独自に出された課題がある訳だ。

んでその課題をクリアしたら、なんか『まぎすてる・まぎ』とかゆースゲー称号貰えんだと。

アレ？違ったか？

貰う為の候補に引つかかるかもっつー話だったか？

一応裏世界……魔法とかが蔓延するファンタジー世界に足を踏み入れてるけどよ、その辺の事情はさっぱり。

俺自身、あんま興味がねえってのが一番なんだと思うがな。

だってよ、ガンちゃんに聞いてみりゃ『人々を救う高尚な仕事』だと教えてくれたわ。

けどさ、目指してるあいつら二人やらにゃ悪いけど俺にゃちと、理解出来ねえ。

イヤイヤ、ボランティアとかするのが嫌いだとか、弱いヤツは救わずイジめるもんだとは言わねえよ？

麻帆良で清掃活動とかあるときには、桜子と裕奈に誘われていった事もあるし。

テメエより弱いとわかってるヤツらに、こっちから喧嘩吹っ掛けん

のはカッコ良くねえしさ。

でもよう、なんて言ったらイイかねえ……うん、性に合わねえってのが正しい。

背中がムズかゆくなっちまう。

……ま、俺はそんな感じなんだが、だからってネギやアーニヤが目指す事に対しては何も言わねえよ。

やりてえならやりやあい、なりてえならなりやあい。

ガキ二匹が目指すもんを俺は否定しねえし、出来るもんなら助けてやりてえって思う。

て、事で話は戻るわけよ。

今日は大事な日なんだがさ……この一カ月後によ、ネギは『教師』として麻帆良に赴任する事になってんだわ。

何度聞き返しても、何度この決定の用紙を見てもわけわかめなんだが。

とにかく決定は決定なんだそうだ。

まほーつかいはまほーつかいなりに、考えがあってこんな事態に陥ってんだろぅが……イヤ、決まった事をグダグダ言っても仕方ねえ。

ともかくんな事態でさ、一か月前の今日くらいからホントならアイツは『教師』としての仕事を始める為の準備をしなきゃならねーんだ。

アーニヤはアーニヤで、ロンドンでどうやって『占い師』やってくのかわかんねえが住むとこ決めたり、店出すとこ決めたり、その辺りの準備をしなきゃなんねえ。

なんだが……さ。

どーも初等部通わせて、『魔法』つてもんから少し離れているんなもんを見て、友達作って。

そのお蔭でそうやって自分らがやる事に、疑問を抱いてるらしくつてよ。

自分は『教師』として働かなきゃなんねえ、自分は『占い師』として働かなきゃなんねえ。

責任を負うべき『大人』として、『子供』なんだが『大人』として世間の波に入って行かなきゃいかん。

出来た友達は『子供』として遊ぶつてのに自分だけ。

無論働くからにや『ガキだから』なんて甘えは、正当な対価を貰うようになる訳だし許されん。

つーか俺が許さねえ。

俺もやってるから言える訳だからネギの話になるんだが……ガキどもにとっちゃかなり大事な『中学生』という時期。

思春期真つただ中に与えちまった妙な影響は、後々大人になって死ぬまでそいつの中に残るらしいね。

だから妥協は許さねえ。

『一生懸命やりました』だけで通用するのは大学生までなのかね？ 少なくとも社会じゃんな綺麗事、簡単に通ると思っちゃいかんわな。

だからこそネギが『教師』になるんだつたら、俺は『大人』として扱うつもりだ。

……俺も大概新参者なんだがよ。

ま、だからこそ『やりたくないかも』てな感じの想いが、アイツらの中に生れて来てる訳。

俺個人としちゃ嬉しい。

ガキはガキらしくいれるんならいいと思うし。

アイツらの気持ちは今揺れてる。

テメエがどっちの立場に立ってこれから過ごしていこうかってさ。

……けどさ、とりあえずネギもアーニヤも『そーゆー予定』として考えられてる。

となればやっぱり準備に入んなきゃなんねえ。

さすがに今悩んでる『ガキ』のアイツら二人に『準備しろ』なんざ酷な事は……よ。

て事で保護者な俺にそのツケが来てる訳だ。

『教師』と『占い師』になるか、『生徒』になるかはまだ知らん。

つー事で俺は両方の準備をしなきゃならん訳だ。

……ハア。

はるかにコーヒーでも貰って、今日も頑張ってみますかね。
この前貰ったキリマンジャロの豆はもう無くなったしさ。

【一月某日】

とりあえずアーニヤの進退は決まった。

曰く『ロンドンで占い師はしない、麻帆良で生徒をする』んだと。

なんでも『まぎすてる・まぎ』になれなくなのは悲しいが、自分のやりたい事はなくなっても出来るから。

だったらここでへぜちゃんに修行？とかさせて貰ってるみたいだが、それでもっと強くなって、やりたい事をやれるようになりたいんだと。

後は、せっかく出来た友達と離れるのが嫌なんだと。

ウム、実にガキっぽいところもあってイイ意見だと思うね。

しっかりアーニヤなりにだが考えてるみたいだしさ。

……多分性格的に後悔して投げ出すなんて事態にはならんと思うが、もしそうなったらフォローはするつもりだしよ。

と、思つて学園長に諸々を伝えた次の日、呼び出されたんだがさ。なんでも『アーニヤの修行内容が麻帆良で生徒をすること』に変わったんだと。

……何コレ？意味わからん。

が、渡りに船だ。

陰望やら渦巻くなんかがあるのかも知れんが、俺にや関係ねえさ。

妹分になんかあったら助ける。

考えるまでもねえしさ、俺って人間はそんなもんだ。

それよかとりあえずアイツが持ってた『夢』みたいなもんを捨てな
くても良くなった方が重要ってヤツ。

とにかくアーニヤは『生徒』っつゝ方針で準備を進めねえと……。
まずはホームステイ先に予定されてた家に断りの電話を入れて、ん
で……そだ、最初は住むとこだな。

麻帆良は基本全寮制。

初等部なら自宅から通うって事も出来るんだがね。

何故だかアイツの入るところは女子中等部……しかも俺の担当クラ
ス。

ますますなんかあんじゃないの？と思うんだが……気にしねえ。

アーニヤの頭がイイのは確かだしよ、とりあえず納得は出来んが理
解は出来る。

なんでも『飛び級制度導入の試験的運用』らしいが、日本は飛び級
……ん？だから試験的運用なのか？

……うん、考えねえ様にしよう。

それよか『生徒』になった事実の方が重要って事で、頭ん中もう一
回切り替えよ。

女子中等部寮に入る事になる訳だが……部屋は……そいえば春日が入寮したいつつつてたな。
アイツは『シスター』って事で特例的に教会に住んでたはずなんだよ。

……教会……か……イヤ。

ま、そんな感じだったんだが急に何かあったのかね？

……アイツの事だから辛くなったとかも有り得そうなんだが……イイか。

なんでも一緒に教会に住んでたココネと一緒に入寮らしいが、この辺はアイツが保護者みたいなものだからかね？

確かアイツの部屋が空いてた三人部屋だったはず……うん、そだな。

うっし、アイツの部屋に入れ込むか。

後は教科書類だが……新年度まであと少しだしよ、四月になりやる程度教科書も一新するし、ちよつとの間くらい『麻帆良学園』とでもデカデカ判子の押してあるヤツでも構わんだろ。

来年度に持ち越すヤツは……てかどれもそうだが今から注文して間に合うのかね？

まあ無理だったらガンちゃん経由でグッドマンにでも頼むか。

あゝああ、やる事多いわ。

酒飲みてえ……と、電話電話。

「……春日か？香坂だが悪いな、飯時に。」

ちよつとさ、頼みたい事があつてよ……」

【二月某日】

……遅えよ。

んな事ネギに愚痴る訳にもいかんが……遅いわ、イヤイヤ割とマジで。

だってよ、ネギ着任まで後五日だぜ？
どんだけ悩むんだってーの！

……ハア、まあイイ。

これで選んだのが『教師』とかだったら流石にイラッとするが、アイツが選んだのは『生徒』。

色々あったがその選択肢だったらね、俺の私的意見も入るがイラつきはしねえよ……うん、しねえ。

別に三週間の頑張りがゴミクズになる事に、俺は何の感慨も抱いてねえよ。

間違いないね、さすが俺。

それよりさ、やっぱり陰謀めいたものを感じるね。

イヤ、ネギみたいなガキが『教師として働くかも』っつー事態になった時点で、それは考えてたんだがさ。

『教師じゃなくて生徒として麻帆良で過ごしたいです』ってネギが言った次の日、また俺は学園長に呼び出されてみれば『ネギの修行内容が麻帆良で生徒をする事になった』……だとさ。

なんかさ、やっぱあるんだろうよ。

ネギは『英雄の息子』で、アーニヤは『ウェールズの悲劇』の生き残り。

そこがどーやら魔法使いさんらにとって、重要らしいね。

下らねえな。

みみっちいこと気にしちゃってさ。

『英雄の息子』？『ウェールズの悲劇の生き残り』？だから何？
それがネギをアーニヤを『英雄』に仕立て上げてえ理由になる訳？

バカな俺には、そんな崇高な考えは理解出来ねえさ。

ケツ！下らねーぜ。

で……そか、ネギの準備をしなきゃならんのんだな。

教科書の取り寄せはどうやら間に合うようなんでも何とかなる。

今年度は二人とも判子押したヤツだな。

てかアーニヤの頼んだ時、ネギの分も一緒に頼んどいてよかったわ。

念の為って事で、発注なんかで向こうも大変らしいから一月いっぱいにしてってくれて言われてたかな。

今日は二月入ってもう十日過ぎ。

ホントネギが『生徒』になってくれてよかった。

領収書で落ちるかどうかわかんなかったし、下手すりゃポケットマ

ネーになるとこだったわ。

教科書代なんざバカになんねえからな。
軽く一万二万いくし。

どっちにしる保護者の俺が買わなきゃいけないじゃねえかって？
それは大丈夫なんだよ。

俺んとこ住んで、初等部に通ってた時からそうなんだがイギリスに
いるアイツらの祖父ちゃんから、アーニヤの方は若干違うんだが、
まあそこから金が振り込まれてた。
ホント何この額？みたいな金額がさ、指定されたあいつらの口座に
振り込まれてた。

だって月百万だぜ？しかも一人一人に。
ふざけてら、どんなジジ馬鹿だよ。

結局その口座からはほとんど金は引き落とさず、俺が稼いだ額で
アイツら二人の飯とか服とかは面倒みたんだがさ。
そこから引き落としたのは月一万ずつと……後は日本に最初に来た
時、必要な日用雑貨買うのに使ったくらいか。
アイツらの口座の残高見るとな……なんてか……まあイイんだけど
よ。

そんな口座から教科書やら学校用品の金は引き落とすつもりな訳。
通わねえんだったら、俺が出すつもりだったからよ。
無駄な金にならずにマジで良かった。

ちなみにアイツらには月千円の小遣いを渡してる。
菓子にジュースは俺が買ってるし、漫画は一人二作品に限って単行

本を買ってやってるな。

ゲームは本体は俺が持つてるからよ、ソフトは手伝いをさせてってヤツだわ。

もしくは政利なんざから借りてくるのが多いかね。

夜の警備でそれなりに金が入るからこそ出来る事だよなあ、しかし。俺がガキの頃は初等部通じて五百円だったからな。

中等部入ってから千円だったか？

どーしても欲しいもんはお年玉溜めるか、それでも無理なら新聞配達やらのバイトして金溜めてたね。

と、考えりや最近のガキはリッチだよな。

二人の友達の春樹は月一万貰ってるらしいね。

……ハハッ、笑うしかねーよ。

初等部の近くに俺も昔っから世話になった駄菓子屋あるし、俺の感覚的にや五百円でも余裕だったんだがよ。

時代の変化ってヤツ？

なんだかなあ……って感じだわ。

でもな……春樹の事さっき言ったけどさ。

二人には月千円しか小遣い渡してねえんだよ。

けど二週間に一回くらいのペースかね？

お茶っ葉とか置いてる所にみょーに高そうな紅茶の葉が入ったもんが新しくなって置いてあんだよ。

ネギと俺の部屋の一角にや古臭そうで、高そうな銃とか剣とか杖と

か試験管とかが置いてあるし、だんだん増えてるし。

千円の小遣いを渡しても、その減り方は二人を比べてみれば相当違う。

アーニヤは月の半分くらいで空っぽになるタイプ。

残りは家からお菓子とか持っていて、学校で取り上げられるような、そんな感じだな。

ネギは七割くらいを使って、三割くらいは残すタイプ。

計画的にやりくりしてさ、帰りがけの駄菓子屋を毎日楽しみにしてる感じかね。

だから最初はその三割で、『まほネット』からなんか買ってたのかね？って思ってた。

でも違った。

まるで金額の桁数が違うんだもんよ。

じゃあどうやって取り寄せてたかって？

引き落としてた、クレジットみたいなヤツで、アイツの祖父ちゃん名義で。

……アーニヤは絶対にそんな事はしないんだがな、なんてかネギは狡いっつーか……セコイところがあるよな。

俺はまほーつかいじゃねえし、正直どう対応していいかわからねえんだよなあ……。

【二月某日】

ようやく決まった、ネギの住むところ。

何故かわからんが、建前的には『飛び級の試験的運用は二人まとめた方が管理しやすいから』だそうだが、アイツも俺の担当する女子中等部2-Aに所属する事になったんだわ。

……男の夢だよな、女の園に一人だけとか。

ネギはその辺はまるで何も思ってたねえみたいだが、ガキって事だな、まだまださ。

この前はせーっかく俺がエロ本やったつてのに受け取らねえし。春樹はしっかり受け取ってくれたつてのに。

ネギは絶対にむつつりスケベになるな、間違いないねえ。なんつったつて政利と反応が同じだもんよ。

ま、イイか。

ネギの住むところだが結局女子中等部の寮になった。

曰く『同様の例があるから、彼にとって保護者のような相手が近くにいたのが好ましい』だそうだ。

これを見ると、春日とココネの件をネギの為に利用出来る様認可した感じだよな。

何がやりてえのか……俺のクラスに、アイツと絡ませたい人間がいるのか……まあそこら辺りが予想出来るそこかね。

それがダメなら俺が女子寮の管理人室に住めばいいって案もあったんだが。

そうなればネギもアーニヤも俺んとこな訳だろ？
だったら『寮に住ませる』っつー意味が無くなるからな。

ヘンな深読みしなくてもいいなら、桜子と裕奈もいるし、神楽坂に雪広もいる。

俺としちゃ安心だが……やっぱそれだけじゃ済まねえか。

……ガンちゃんやらに、なんかあったら協力してもらえよう頼んどかねえとなあ。

「ケケケ、今日八酒呑ムンダロ？」

「まゝな。

ようやく全部終わったし、テスト作りがあるがその辺はな」

ガキ二人は来週から中部に通うって事で、今日は雪の家に泊りに行ってる。

言っちゃ悪いが面倒も見ねえでいいし、明日は学校も休みだし、正直かなりラッキーだ。

「びぎぎ、びぎぎぎ」

「そだな、バレンタインで家庭科があつたのは企みめいたもんを感じるが……でも肴にやできんわ」

「全員カラ貰エルトハ淫行教師ハ違ウゼ！」

「ウツセー、付き合いみてえなもんだろ？」

鈴音の件も要はさ……バレなきやイイしょ」

「ケーーーーッケケケケケケケケケケ！」

「ぴぐい、ぴぎぎぐいいっ！」

アレ以来んな事は何もねえよ。

まあそれ普通だし、それでイイと思うからイイんだが。

今日の戦果は担当クラスのヤツらにアーニヤ。

付き合いで源先生に二宮先生、それと……多分はるか。

ぶつきらばうだったのか、いい年こいて照れ臭かったのか。朝起きたらポストの中に入ってたからな。

恐らくだがカカオ率高い、クソ苦いヤツ。

「まあ楽しみに……あア？」

「電気付イテンジャーネーカ」

「びぐい」

はるかかね？だったら……なあ。

「安心シナ、人形二ナツテタルカラヨ！」

「いらねーよ、んな氣遣い」

「ぴぐうい」

……そこはツツコンでくれなかったら、ありがたかったかねえ。

「ケーーーーッケケケケケケケケケ！」

「バツキヤロウ！俺だって男なんだから仕方ねええだろうが！！」

「ケーーーーッケケケケケケケケケ！」

こっ、コイツは……。

でもマジで誰だ？

ガンちゃん光さんの辺りは有り得なさそうなんだがね。

「ただいまつとくらあ」

「おかえり！隼人にい！」

「今日は特製カレーだぜ！」

……何でコイツら？

スラばうとゼロとの晩酌はお預けかよ……なあ。

のんびり寝るはずだったんだがよう。

「おやすみからおはようまで、全部私たちに任せといてね！」

「ご飯はもちろん！あんちゃんがやって欲しいなら背中だって流しちゃうし、一緒に寝ちゃったりもしてあげちゃうにゃ」

……ああ、成程。

俺はんな風に疲れて見えてたのか。

だったら……そだな。

「……じゃ、頼めつか？」

「変態！」

「ロリコンだあつ！」

四十四匹目 大人になれば面倒事が増えるばかり（後書き）

オリキャラを全部出し切ったと思っていたら後少々残っていました。ですが大きく本編に関わって来るのは全部出したと思います、恐らくですが。

いずれ出て来たとき、あたたかいまなざしで見ていただけると幸いです。

四十五匹目 幼い男の子から『お姉ちゃん』って呼ばれたい願望は誰でもある

原作突入！やっところさ□□まで……。

四十五匹目 幼い男の子から『お姉ちゃん』って呼ばれたい願望は誰でもあるよ

多分だけど今、バカみたいにポカーンって口開いてると思う。
目も多分ぼえーって感じだし。

委員長に見られたら絶対『女の子がなんて顔してますの』って言われるわね。

……まあそんな委員長も、私の隣で同じような顔してるんだけどさ。

とりあえず……状況を整理しないと。

えと、確かさっき私と委員長は買い出しに行ってたのよ。

今日からネギとアーニヤがウチのクラスに入る事になったから、その歓迎会ってヤツ。

つたく、何でこんなガキが同じクラスにつ！ってのは思ったりしたんだけどね。

ム力つく事に、コイツら私なんかより頭がスongoくイイみたいでさ。
麻帆良も飛び級ってヤツを導入するか考え中らしくって、そのテスト生としてネギとアーニヤが選ばれたんだって。

その事が一昨日隼人先生から伝えられて、今日二人がクラスメイトになって。

そう！歓迎会やるからその買い出しに行ってたのよ！

委員長は『貴女に任せたら何を買って来るか……』なあって言っちゃってさ。

結局二人で行く事になったの。

えーっと……それから……近くのコンビニに行ったでしょ。

ジュースを何本か買って、お菓子も買って。

教室使う許可は貰ってたみたい。

ま、ウチのクラスはお祭り好きだし、ネギもアーニヤも一応みんなと顔見知りだし。

歓迎会やるってのはわかりきってたからね。

昨日とかは飾り付けの準備とかもしてた。

ホントなんてゆーか、楽しいんだけどさ……ねえ。

そんで委員長と話しながら教室に戻ってて。

『ネギさんのお風呂には毎日私が』なんて言う犯罪者予備軍に呆れて。

……てかお風呂ってどうすんの？

まあ１０歳のガキだし、私らは気になんないんだけど……ホラ、アーニヤとココネちゃん……だっけ？

あの子らは同い年くらいだし、さすがにマズいでしょ。

その辺は適当に考えとかないとね。

っと、それで……そう、女子中等部の敷地に戻って。

なんか本屋ちゃんが本いっぱい持ってて危ないなあとか、階段の下にネギいるじゃんとか思ってたら。

「ネギ、正直に話さないよ?」

「ああうつ……あつ、あの」

風がフワツて吹いて、気付いたら本屋ちゃんが階段から落っこちかけてて。

ネギがいつも背負ってる杖をパツて握ったら……落っこちてたはずの本屋ちゃんが空中停止して。

そこにネギがばーって駆けこんで。

……うん、わかってる。

正直自分でもいまいち何言ってるのかわかんないし。

けどさつき委員長の髪の毛引っ張ってみたら痛そうだったし、引っ張られたら痛かったし。

『夢』……なんかじゃないのよね。

だからネギの首根っこ掴んで人のあんまりいなそうな公園にやって来て、でもまだ隣のあやかと一緒にいまいち自体が飲み込めなくて。

こうやって問いただしてる訳。

「アンタさ……なんか変だと思ってたけど、ホントは……」

「えっ、あっ、イヤ……」

「超能力者だったのn「おバカ」って何すんのよ!？」

「それはこっちの台詞ですわ!

どこの世界に杖を持って何か不思議な力を働かせる人がいます!？」

どう考えても『魔法使い』でしょう!」

へっ?

…… ああっ!

「アンタ『魔法使い』でしょ!」

「取り繕った感が半端無いですわね」

うっさいわねえ、コイツは。

細かいってのよ。

でも納得できたわ、コイツが女子中等部に来た訳。

「そーゆー事ね」

「へっ?」

10歳のガキがここに来たのは……! !

「私たちみたいな若い女の子を実験台にする気ね！マンガがなんかで呼んだ事あるわ！」

「えっ……えええええっ！？違います違います違いますよおっ！」

「……よく見ればむっつりそうな顔してるわよねえ……？」

「わっ、私の身体がネギさんに弄ばれてっ……！？」

隣のが鼻息荒い？
聞こえないわね。

「と・も・か・く！アンタまだ何もやって無いでしょうね？」

「聞いて下さいよアスナさん！僕そんなじゃなくて……！」

「安心なさい、ネギ。」

「ちゃあんと隼人先生のところ行って、怒って貰うから」

「違うんですうううううっ……！」

「犯罪者はみんなそう言うのよ」

それにしてもこんなのが女子寮に住んで、ホント大丈夫なのかしら？
まあそこら辺も踏まえてきっちり報告しないとね！

「他の人にバレ……ちゃ……記憶を……でも……」

「ハア？何言ってるのよ」

「私の身体をネギさんの指がゆつくりと這って行って、ねぶるように、弄るように、焦らしながら私の柔肌を侵食して行って、『気持ちですか、あやかさん？』なんて事を言いながら」「はいドーン！」
めげろっ！？」

あゝなんて言うか、コイツの方が心配かも？
ショタコンはショタコンだけど、その辺はわきまえてると思ってただけだねえ。

「あの！」

「急に大きな声出してどうしちゃったのよ？」

なゝんか決意に満ちた様な眼してるけど、そんなんで私は騙されませんからねゝっと。

「僕について来て下さい！お兄ちゃんのところに行くんです！」

「……さっきからそう言ってるじゃない」

「さあ、行きますよ！」

……まあ、エロい魔法使って事はないわね。
これまで見て来てそんな風じゃなかったし、大丈夫でしょ……多分。

「……ま、いんじゃない？」

「えええっ！？でもでも秘密にしなきゃいけないって僕、聞いているし！」

「俺まほーつかいじゃねえし、そんなこたあよく知らねえし、ぶっちゃけどーでもイイし」

「けども」だがま、妙な事をする前に俺に言ってくれてよかったわ」
「……うん」

今の時刻は放課後。

いつもなら誰かしら屋上には人がいて、お話に花を咲かせているはずなのですが……今は人っ子一人見当たりませんわ。

今日からクラスメイトになったネギさんに連れられて、隼人先生を職員室から連れ出して、やって来たこの場所。

恐らくですが先ほどネギさんが起こした摩訶不思議な現象。

話を聞くに『魔法』の様ですが、それについて何かしらあるのですし
よう。

『飛び級制度の試験的運用』。

そう隼人先生から聞いて、成程日本でも有名な学園都市であるココ

が選ばれた、と勝手に納得しておりましたが。
法律的にそもそも日本では『飛び級』というものを認めておりませんものね。

だからこそその『試験的運用』だと思いましたが、それならばアーニヤさんはともかくとも悲しいですがネギさんは、男子中等部に行くはずですわね。

そこを無視して、私個人としては嬉しいばかりですが、女子中等部に編入させるという手筈を取った。
なればそれは……学園長先生でしょうか？

あの方の執務室がココ、女子中等部にあるからネギさんは……。

オホホホホ！先程は取り乱してしまいましたが、この私にかかればこの程度の謎は簡単に解けてしまうのですわ！

しかし……『魔法』……厚顔無恥な、物語の中のお話ですわね。
普通に考えれば、ネギさんをただの子供として見るなら、可愛い子供の言う事としてとれるのですが。

どうも先ほどの光景を見てしまいますと、そう言い切るのは難しいですわ。

宮崎さんが手に持った本と共に階段から落下して、地面に本来なら叩きつけられるはずの彼女を、杖を突き出す事によって『空中停止』させた。

やはり『魔法』……なのでしょうね。

「あのさ、隼人先生……いまいち私は今の状況が飲み込めないんだけど？」

「おう、ワリーな。」

何から説明したらイイか……そだな、まア簡単に言つとだな……」

そう言うつと隼人先生は懷から煙草を取り出して、火を付けました。視線の先は……世界樹を見えていますわね。

私とアスナさんと、そしてネギさんを脇にある椅子に座らせると、億劫そうに口を開きましたわ。

「とりあえず質問なんだがさ、今の屋上……コイツを見てどう思う？」

「えっ……えと……別に普通の屋上じゃないんですか？」

「おバカ、人が一人も見当たらないのはおかしいでしょう」

「確かに！いつもなら誰かいたりする！」

「そだな、それが普通だ。」

だが今はいねえ、誰もここにいねえ……というよりもだな、入つて来れねえようになってんだ」

「……どうやって？」

「『魔法』でだ。」

『人払い』とか言うやつらしいが、俺には詳しくはわかんねーんだが、ともかく『人がその場所になんとなく行こうと思わなくなる』、そんな感じの『魔法』らしいね」

「そんなのがあるの!？」

……アスナさんは純粋に驚いているようですが、私は……恐ろしいですね。

私は『雪広財閥』という日本でも有数の会社の当主の次女として生を受けました。

まあそれを別に自慢する訳でもありませんが、そのように『商業に携わる者』の娘としては、今の現象を簡単に引き起こす事の出来る『魔法』が恐ろしいですね。

悪用すれば子供の手を捻るように『その会社を倒産に追い込む事が出来る』。

都内の一等地に、人が集まる商店街に、例えばどこよりも好条件の場所に、どこよりも高品質な商品を並べる店を開いたとしても、人が来ないんですわよ？

これは『魔法』に限ったお話ではありませんが、使い方を考えればあらゆるモノは『凶器』になります。

暖を取り食材を調理する為の『火』も、全てを燃やし灰にする『火』も、そもそも同じ『火』ですわ。

……予想でしかありませんが、『魔法』は物理現象や化学現象で説明される今の世の中を無理矢理に捻じ曲げてしまふ働きがあるのでしょう。

それは目に見えるモノだけではなく、感情という目に見えないモノにまで作用する。

やはりどうも……。

ですがだからこそ、『魔法』という者は秘匿されていたのでしょうか。

もし今の世の中に『魔法』が出て来て、どうなるのかというのはわかりません。

ですが大きく何らかの作用を、肉体的にも精神的にも与えるであろうとは予測できますわ。

戦争や喧嘩にも、恐らく『魔法』というモノが。

イメージ的には漠然と、傷を癒したり、姿を変えたり、空を飛んだり……後は火や水や土や風を出して敵を攻撃したり。

その程度しか思いつきませんが、それでも多くの人が人為的な落雷に遭って絶命してしまうような、そんな姿が思い浮かびますわ。

ネギさんが……恐らくアーニヤさんも、剣林弾雨の中に身を置いておられるのか、それともこれから身を置く事になるのか……。

もしそうなれば……私は……。

「で、まあそんな風に『魔法』があるんだが、誰しもがんなもん知らねえ様に『人にバレちゃいけない』つつー暗黙の了解があんだわ。

だからさ、聞きたい事があれば俺が答えれる範囲なら答えるか
「大丈夫ですわ、少なくとも私とアスナさんは誰かに言うなんて事、
しませんわ」……そか」

「つちよ！あやか！いきなりアンタな」「じゃあアスナさんはバラ
すというのですか？」……イヤ、そりゃあ……」

チラと、アスナさんが向いたのはネギさんの方。

上目遣いで訴えかけるような視線……ああ！可愛らしいですわ！！

「言わないわよ、別にさ」

「ホントですか！？」

「まゝね、言っただとーせ誰も信じてくれないだろうし」

……フツ、相変わらずぶっきらぼつですわね。

まあいいですわ。

それよりも……。

「では隼人先生、お聞きしたい事があるのですがよろしいですか？」

「まあ俺に答えれる範囲ならな」

「それでは隼人先生は『魔法』というモノを知っておられるよう
ですが、『魔法使い』ですか？」

「んにゃ、俺は違いよ」

「そつかく、よかった。」

なんかもしそうだったら私の中の『魔法使い』像が壊れそうだったし。

隼人先生はRPGで言ったら『戦士』とか『武道家』だもんね」

「確かに、言えてら」

……成程、『魔法使い』以外にも『魔法』に携わる方々がいらつしやるようですわね。

アスナさんの言っていた『RPG』というモノが最も端的に表しているような気がしますわ。

隼人先生は否定されませんでしたし。

「じゃあさ、『チャクラ』とか『気』と『念』とか『コスモ』とか『霊力』とかは使えるって事!？」

「ちよつとだけならな」

『魔法』のある世界……私たちの今いる世界を『表世界』としたら『裏世界』があるという事。

そしてそこには剣を帯びた方が、拳を鍛え上げた方が、弓矢をつがえる方が、銃を構える方が。

……『RPG』……でしたらそこには……。

「使えるって事は先生は『武道家』ね!」

「イヤ、俺は……『魔物使い』だぜ」

そんな隼人先生の言葉と共に、微かに肩辺りの空間が揺らいた気がしましたわ。

気付けばそこには青いタマネギのような体に、大きな丸い目と笑っているかのようなU字型の口。

私が今まで見た事のないような、普通では有り得ない『ナニカ』がいました。

「コイツは『スライム』っつー種族の『魔物』でさ、名前はスラばうってんだ。

まあ俺の長年の相棒の、まあ三人いるんだがその内の一人ってやつだな」

「ぴぎぎっ」

「……うわゝ、何かますますゲームか漫画の世界みたいね」

「スラばうさんは可愛い感じですから」

「ケケケ、ソーユーコッタ」

「うわっ！喋った!？」

「んで、コイツがチャチャゼロな。

コイツも俺の相棒の一人かね」

「ケケケ、毎晩犯サレテツカラナ」

「「……へっ!?!」」

「冗談だ、マジにとんな」

そしていつも頭の上に載せていた人形が、口を開いてケタケタと。

やはり『魔物』。

『魔法』というモノがあるならば、存在するのでは?と当たりを付けておりましたが……。

『魔物』……『剣と魔法のファンタジー』……。

「隼人先生、麻帆良学園都市は『魔法使いによって造られた都市』ですわね?」

「……まあな、そう聞してる」

「ケケケ、コノ『ガキ』……ケケケ」

「びぎびび」

「そしてネギさん」

「はっ、はい!」

「貴方はここに『魔法使い』にとっての、貴方に課せられた何らかの試練をこなす為に来られましたわね?」

「え……あ……はい。」

僕は……僕は僕のやる事があって、修行の事があってここに来ました」

「あやか？」

ホホホ、大丈夫ですわよアスナさん。
そう心配そうな顔をしなくても。

私の事は、腐れ縁の貴女はよく知っているでしょう？

「でしたらそのお手伝いを私と、アスナさんにさせていただけませんか？」

「っちょ！何で私まで!？」

「アラ？アスナさんはこんなにも小さなネギさんのお手伝いをしようという、そんな想いは湧きませんか？」

「……イヤ、それは……そうかもしれないけど……」

……フフッ。

「ネギさん……幼い男の子を想うお姉さんとして、クラスメイトとして、委員長として……そして友人として、貴方の修行……お手伝いさせていただけませんか？」

四十五匹目 幼い男の子から『お姉ちゃん』って呼ばれたい願望は誰でもある

ぶっちゃけ委員長が原作でココまでネギハーレムに入らなかったのは吃驚。

という訳でどうせなら最初っから叩き込んでやろうと思いました。

四十六匹目 幼い女の子から『お姉ちゃん』って呼ばれたい願望は誰にでもあ

まずはネギ、次はアーニャ。

四十六匹目 幼い女の子から『お姉ちゃん』って呼ばれたい願望は誰にでもあ

「信じらない！」

「あゝ……とりあえず声がデケエぞ」

「そうだけどもだって！」

だって『魔法は秘匿されるモノ』なのよ！

なのにあのボケネギがいきなりアスナとアヤカにバラしちゃって…

…！

ネギにその事聞いて、怒鳴りつけてやろうと思ってただけど……
隼人お兄ちゃんに教室から連れ出されちゃって。

……私が悪かったんだけどね、それは。

けど何考えてんのよアイツは！

昔っからホントに考え無しなんだから！

オコジヨになったらどーすんの！！

……もしネギがオコジヨになったら……どうしよう……。

あ、だけど2-Aはアスナもアヤカもそうだし、桜子ねえに裕奈ねえもそうだけど美人の人ばっかなのよね。

ネギ一人男の子で、まあネギみたいなダメダメなヤツ誰も相手にしないと思うけど、ネギがそっちにフラフラって行っちゃったら……。

そう考えたら、オコジヨにして、私の使い魔にしちゃったら、ネギは変なところには行かないわよね。

ま、まあ小さい頃から知ってるし、面倒くらい見てあげるし。

特にネギに特別な感情なんてのがあるわけじゃないけど、それくらいならね。

それにオコジヨのネギは……あ、可愛いかも。

ちがつ、違ふのよ！

別にネギの事をどう思ってる訳でも何でもないわ！！

でも……でも……そう！あんな綺麗なお姉さんばかりのところにネギを放り込んだらネギがますますダメになっちゃいそうだし！！それにあんな人たちにネギみたいなダメでボケボケなヤツを相手にさせるなんて申し訳ないわ！！

うん、それね、それなの。

一つ年上のお姉さんとして、弟分の手綱はしっかり握つとかないからね。

隼人お兄ちゃんも、桜子ねえと裕奈ねえにはそんな風だし。

「……ま、安心しとけ。」

もしネギがオコジヨになっちまいそうだったら俺が全力で庇つてやつから。

それとなアーニヤ……神楽坂に雪広がよ、ネギに不利になる事をべらべらしゃべるようなヤツか？」

「……そんな事ないけど……」

「だったらドーンと構えてろ。」

テメエがグググジしてたら、ネギのヤツも心配すつたる？」

「ぴぎっ」

「ガキ八聞キ分ケガイイノガ一番ダゼ」

「うっさいわよチャチャゼロ」

「ともかく、ネギに偉そうに言っただ訳だし、テメエはテメエでバラさねえようにしてな」

「……うん」

「……おっきい手よね。」

私の頭がすっぽり入っちゃうんだもん。

でも……なんか……うん、大丈夫よね？

隼人お兄ちゃんがこうやって撫でてくれた時は、ネギがふてちゃった時もそうだし、私が悪いことしちゃった時もそうだけど。何とかしてくてる。

ホントに大丈夫にしてくれた。

だからホントに大丈夫だっと思える。

……ネギまでいなくなつて、私とネカネお姉ちゃんだけになるなんて事ないわよね？

「それよりホレ行け、今日はテメエらの歓迎会だろ？」

主役がいなくつてどーすんだっての」

「隼人お兄ちゃんは？」

「俺か？俺はちよっくらケジメ付けてくっから……ったく、泣きそ
うな顔すんなって。」

ネギもアーニヤもここに居て、ここに居れるし、どっちも勝手に
いなくなったりなんざしねえからさ」

「……うん」

「じゃな」

「糞シテ寝口ヨ」

「ぴぎーぎっ」

……行っちゃった。

あっちって……学園長の方だっけ？

謝りに行くのかなあ。

いつも私も、ネギも、迷惑ばかりかけちゃって。

隼人お兄ちゃん迷惑かけるのが仕事だと言ってたけど、でもい
つまでも迷惑ばかりになっちゃダメよね。

いつになるかは分かんないけどさ、そうやって隼人お兄ちゃんの力
になれるようになりたい。

勿論、ネギと一緒に。

そのためにも、修行頑張らないと！
とりあえずネギは一発殴るけどね。

「魔法の修行！頑張るわよオオツ！！」

……スゴイ事、聞いちゃった。

『魔法の修行』。

『魔法』……成程、まだまだアーニヤも子供だから。

隼人先生がなんだか怒りそうだったアーニヤを教室から連れ出していた。

委員長はいろいろ事情があるんでしょうって、外に出るのを止めた。

私はちょっとお花摘みに出たんだけどね。

『魔法』か。

ネギくんの事で揉めてたみたいだから、ネギくんもそうって事かな。可愛いなあ。

学園長の方にも行くって言ってたっけ？。

……ああ、そう言えばネギくんのお祖父ちゃんと学園長は知り合いだって言ってたな。

だったら伝えてればそうなのかも。

だったら近衛もかな？

……いや、神楽坂と委員長はそうっぽいけど、そこは違うのか。バレたって言うってたし、こっそりやってた訳だ。

……うん、決めた。

「アーニヤ、教室戻ろう」

「あ、アキラ」

私とアーニヤは結構仲良し。

アーニヤの姉貴分とは、特に裕奈とはよく遊んだりするし。桜子とも仲良しだし。

そんな訳で隼人先生のところに住んでた時から、お泊りとか、一緒にお風呂とか、そんな経験もある。

……あと、バレたらちよつと拙い気もするけど隼人先生のところにお泊りに行った事も。

男の人の部屋、初めて入ったけどあんまり物が無かったな。

部屋も片付いてたし。

裕奈曰く『私たちがいないとグシャグシャ』だって。

でも『ネギちゃんとアーニヤが来てから綺麗になった』って。

ちよつとだけ二人とも、寂しそうだったな。

まあこの前、二人が寮に住むようになって、その後泊りに行って帰って来たらすごいご機嫌だったけど。

『やっぱり私たちがいないとねえ』……だつて。
頭にタンコブ作って、笑つてた。

二人の姉貴分に叩かれたつて言つてたっけ？

話がちよつとずれちゃったか。

うん、本題に入ろう。

「アーニヤ、アーニヤは『魔法使い』なんだよね？」

「ぶふおあつ!？」

……マンガみたいに、口から唾噴く人始めてみたかも。
ちよつと悪いことしちゃったかな？

「……アーニヤ？」

「ちつ、ちちちちちちち違つわよ！私が魔法使いなわけないじゃない!!」

ほほほほほホントよ！ホントにホントにホント何だから!!」

……可愛い。

「っちょ！アキラ！何で抱きしめてんのよ」

「あ、ゴメン」

小動物みたいだった。

リスとかみたいな。

アーニヤリス……可愛い。

「アキラあ」

力抜けてきてる。

やっぱり可愛い……うん、可愛い。

「でも調子に乗り過ぎた、ゴメン」

「あ、うん、イヤ……イイんだけどね。」

桜子ねえとか裕奈ねえとかにもやられてるし」

やっぱり可愛いなあ。

「そつ、それより……ちょっとアキラ来て！」

教室の近くまで来てたのに。

逆走。

ここつてさつき隼人先生と話してたところだね。

「あの……アキラはさ、『魔法使い』……なの？」

それとも隼人お兄ちゃんみたいに『気』を使う人？」

やっぱり隼人先生も付き合ってるんだ。

うん、それはそうか、面倒見イイもんね。

私たちもお世話になってるし、人気もあるし。

夏と冬にある『まほら新聞』の『担任にしたい教師ランキング』で『TOP5』に、今年度両方入ってたのは覚えてる。

それでお祝いパーティーもしたっけ。

でも『気』か。

クーみたいな感じかな？

うーん……『魔法使い』だけじゃなくって『戦士』とかも考えてるんだ、よね？

最近の子はすごいなあ。

私たちも子供の頃はこうだったのかな？

『ごっこ遊び』はしたけど、『魔法少女』だけだった気がする。

「私は『魔法使い』だよ、一応」

「一応？」

「うん、ちょっとへっぽこだから」

『魔法使い』か『戦士』かで聞かれたら、やっぱり『魔法使い』がイイかな。

私も女の子だし、そっちの方が憧れる。
大きいんだけど。

でもやっぱり、女の子だし。

小さい子も可愛いけど、男の人だったら自分より大きい人の方が……。

ウチのクラスには私より大きい人もいるから、背の順で一番後ろとかにはなくなっただけ。

……そう言えば隼人先生は龍宮さんよりおっきいんだよね。
確か190cmだったっけ？

体重も100kg以上あるって言ってたし、太ってる訳じゃなくて、筋肉質なのかな？
全体的に大きいって感じ。

それで、へっぽこっていうのはこんな遊びをする時は何時も付ける設定。

なんて言うか、昔から私はしっかりしてるみたいで、人に頼るより頼られる方が多かった。

だから『へっぽこ』って設定にしてたら、誰かに頼れるかなって思っ
て。

「アキラも『見習い』？」

「うん、そんなところかな」

「そっかぁ……」

……まあそこ以外は、そこでも偶に頼られっぱなしだったんだけど
ね。

「じゃっ、じゃあ、私もアキラの課題がある時は協力するから、私
の時は協力してくれない？」

同じような立場の人、『魔法使い』でも少しは知ってるけど、け
ど私と同じ『見習い』は初めてだし……その「

「……うん、私でよければ」

……可愛いなあ、やっぱり。

私もアーニヤくらいの時はこんなに純粹だったのかな？

この前将来の職業について考える時間があって、私は獣医とかにしてみたいなって思ったけど。

那波みたいに保母さんとか、小学校の先生もイイなあ。

最近は大変だつて聞くけど、でもやっぱり……可愛いし。今度ちよつと、相談に行つてみてもイイかも。

「うん！だつたら一緒に頑張るわよ！」

ちなみに私は『炎』の魔法が得意なの！アキラは？」

『炎』か……イメージにある。

ちよつと苛烈なところもあるし、でもあつたかいし。アーニヤに似合つてる。

「私は……『水』……かな？」

水泳部だし、水は好き。

泳ぐのも好きだし、海の生き物なんかも。

『炎』以外に、あるとしたら『水』とか『土』とか『風』とか『光』とか『闇』とかだよな？

だつたらやっぱり『水』だ。

「……ホント？」

「うん」

「そっか……アキラは優しいし、もしかしてだけど『治癒魔法』を覚えようとしてる？」

「そうかな。攻撃するより誰かを治す方が、私にあってると思うから」

「アキラ……ホントにホントで、私に協力してくれる？」

……真剣だ。

私もそうだった。

子供の頃は、遊びの一つ一つが真剣だった。

「勿論、アーニヤは友達だから」

「……うんっ！」

だから私も真剣に、アーニヤの相手をしよう。

何時かアーニヤは飽きるのかもしれないけど、でもせめてその時までは。

私だけになっても、アーニヤと一緒に居てあげよう。

「あ、でも他の人たちに『魔法使い』なんて言うのも、さっきみたいに聞くのもダメなのよ？」

「うん、気を付けるね」

二人つきりじゃないけど、秘密が出来たのは嬉しいしね。

四十六匹目 幼い女の子から『お姉ちゃん』って呼ばれたい願望は誰にでもあ

とりあえずこんな感じ。

ネギのみパートナーありは理不尽かと思ひまして。

四十七匹目 父の気持ちと義兄の気持ち（前書き）

久々なので上手く纏まりきらない……。

四十七匹目 父の気持ちと義兄の気持ち

「……学園長、僕は聞いてませんよ」

「ウム、わかっておる。」

故に今から調査……をしておる最中じゃ。

のう、高畑くん……君はそうなるかもしれぬという予想はしておったはず。

お主の握る拳がワシに届いた時、それが自身とあの子にどのような影響を与えるか、わからぬほど子供では無いじゃろう?」

きちりと、僕とは比べ物にならないほどの濃密な魔力が学園長から漂う。

ナギのように莫大なモノではなく、ほの暗い闇の果てから這い出てくるような、底無しに深い魔力。
それがねつとりと、学園長室を覆っているね。

「……ケケケ」

苛立っている。

ここ十年は無いほどに、気分が高揚している。
無論、悪い意味でだがね。

だから、後から考えればとても情けない事なんだが。

僕は学園長に向けて発していた鋭い視線。

『鬼気』とでも言うべきそれを、僕に今彼女が陥ってしまった現状

を覚えてくれた香坂くんは、正確に言えばその頭の上に居るチャチャゼロに向けていたんだ。

「……なんなんだい、君はっ……！」

「イヤイヤ、ナンデモネーゼ？」

「ツッ！」

子供の様な癪癢だ。

思い通りにならなかったからこそ。

そうなるだろうと、学園長が言ったように予期はしていたんだけど、それでも出来れば起こって欲しくなかった事柄。

それが目の前に突き付けられて。

思うよりも早く僕の腕は香坂くんの襟元を捻上げていた。

「ケケケ、隼人ノ首、締マツテンジャネエカ」

「誰のせいだ誰の」

「びぎぎっ」

我に還って力を緩める。

惨めだ。

年下の彼に、僕の下らない思慕を。

塗りつけて、押しつけて、叩きつけて。

僕は……僕が……僕のせいで、起こってしまった事なのに。

「……高畑先生、先生も案外ガキクサイっつーか、子供っぽいところもあるんすね。」

なんか安心しました。

あまりにいつもは完璧すぎて、ちょいと取りつきづらいところがあったんすよ」

「イヤ、僕は……」

「フオツフオツフオツ、その通りなんじゃ。」

彼には護ってやりたい子がおつての、その子の為に道を切り開いてきたと言つても過言ではないほどに、その子を大事にしておる」

「俺にとつての桜子と裕奈みてえなもんすか？」

そりゃ仕方ねーっすわ！

あ、もちろん他のヤツらの事も大事っすよ」

からからと大きな声で笑う二人。

僕とは違う、小さな僕とは。

ホントに大事なのは、自分の気持ちを発散する事じゃない。

でも僕は、こうでもしないと前に進む事が出来ないから。
でも僕は、必ず前に進むから。

彼女に……アスナくんに僕は僕の今を話す事が出来ない。

彼女の歩んできた道のりも、彼女が歩まされてきた道のりも。
僕は彼女に話す事が出来ない。

僕では彼女を受け止めてやれないから。
僕なんかでは彼女を受け止めきれないから。

けれど必ず、僕はアスナちゃんと向き合おう。

師匠が彼女に伝えたかった事を、僕が必ず彼女に伝えよう。
彼女の力になる為に、僕は必ず。

師匠の意志ではなくて、僕自身の意志に則り。

『アスナ・ウエスプレーナ・テオタナシア・エンテオフュシア』で
はなく、『神楽坂明日菜』として。

彼女が強くなつて、彼女を真正面から受けきってくれるまで彼らが
成長したその時は――。

「しっ、失礼しまゝす」

「あん？瀬流彦じゃん」

「ウム、待っておったぞ。」

「どうじゃったかの、調査してみて」

「はい、特定は出来ませんでした但恐らく学園長が、その、予想し
た通り『魔法』の痕跡が見受けられました。」

『魔力残留』の痕跡を消す為の魔法を使った後に起きる独特の、周囲の魔力の僅かな乱れが確認できました」

「御苦労じゃった。」

『隠蔽魔法』の痕跡を見抜くのは、少なくともこの学園ではお主かエヴァくらいにしかできんからの。

……しかし『隠蔽魔法』まで用いるとは……旧き時代の魔法を受け継ぐ者がいると言う事が」

「自分が師に教わった話なんですけ……じゃなくって、なんですが、廃れ失われた魔法だと聞きます」

「その通りじゃ、酷く複雑で繊細な魔力コントロールを必要とする故に、もう扱える者はおらんと思うておったが……いよいよキナ臭くなつて来たのう」

「……何言つてつかわかるか？」

「ケケケ、隼人ナンザト八達ウカラナ」

「んだよ、それ」

「ぴぎぎっ」

「何にせよ、そろそろが潮時じゃ。」

香坂先生……お主のクラスの事、聞いてもらえるかの？」

「……当たり前っすよ。」

それでも一応、アイツらの副担任なんで」

——もう一度誓うよ、アスナ。

僕は君の力になると。

だから聞かせて欲しい。

君の心が決めた、君自身の言葉を。

……アホらし。

学園長からの話を聞いた俺の感想。

アホらし。

アホらしくって、アホらし過ぎて、下らなさ過ぎるわ。
何さ、ネギの為に作ったクラスって？

何なの、ネギの為に中学生を、高々14のガキを集めるって。

アレか、戦争中のどつかの国みてえな感じか？

とりあえず軍隊行けバカヤローみてえな感じか？

潜在能力高いんだからお国のために尽くせよコノヤローみてえな感じか？

意味が……わからねえ。

ネギは『英雄の息子』、そいつは知ってる。

ネギは『未来の英雄』として期待されてる、そいつも知ってる。

……成程、深く考えなおしてみりゃわかるってか？

そんなネギを担任に据え置くとして、そのクラスの編成が自由に出来るんなら……なあ。

俺は、生徒よか年下のガキを担任にする事で、アイツらに悪影響が出るもんだと思ってた。

だからこそ、そいつを止めようと躍起になった。

……だがねえ、どうやら俺の行動はたいした意味が無かったみたいだわな。

もしネギをどうしても、担任にした言ってんなら、俺みてえな一教師の意見は握り潰せるはずだ。

なんたつてこの麻帆良学園都市は、魔法使いたちに寄る魔法使いたちの為の都市なんだろ？

俺と、新田先生と、幾らかの教師が騒いだところで、そいつを消すのは自由自在だ。

ハハッ、俺は道化じゃねーの。

散々喚き散らしといて、結局適当に整えた体裁に騙されてた訳だ。ネギを学生にでもすれば、俺らが言う問題は全部なくなっちまうもんだよ。

ちゃんとした目的はしつかり握り込んで、捻じ込んで。

……そもそも『ネギを教師に』って行動すらブラフだったのかもしれねえな。

教師として採用するはずだった少年を、少し学年が上のクラスに入って貰う事にしました。

んな事言われりゃ、誰だってあちらさんの譲歩にありがたく思っ受けて入れちまう。

少なくとも、俺みてえに単純なヤローはさ。

気にいらねえ。

気にいらねえぜ、まったくよう。

ガキどもを、まるでネギを引き立て強くするための『道具』にした様な。

んな腐った扱いだ。

ネギは微塵も悪くねえ。

ましてネギを産んだ『英雄』とやらも、米粒一つの大きさとて悪くねえさ。

「……なア、んな扱いにテメエは何も思わなかったのか……明石さんよウ……」

学園長の言葉を聞いて、俺はそれを実行した学園長にキレたりはしなかった。

それ以上に、その前に、一人の男の姿が頭に浮かんだからな。

『魔法先生』である明石裕二。

まとめ役なんかもやってる、班長とか隊長的な立場の男。

俺のクラスに居る、俺の妹分でもある、明石裕奈の実の父親。

麻帆良大学にあるテメエの研究室で、煙草をぷかぷか吸ってたそいつのところに乗り込んだ。

……御丁寧になんざ、いかなかったけどよ。

「最初に言っとく。

俺は今、間違いなく、頭ん中が真っ赤だ。

殴るかもしれねえ、躊躇い無く、だから殴り返す準備でも整えといてくれてかまわねえ」

「……わかったよ」

「アンタは……ネギの事情と俺のクラスの意味、知ってたのか……？」

「ああ」

「ネギがもし魔法を俺のクラスの誰かにバレたりしたら、知ったヤツが……ネギに降りかかんだろうなあ、戦が、その道具になるか

もしれねえつてのも、知ってたのか？」

「少なくとも、君より早くには気付いていた」

「……裕奈がそれに……関わるかもしれねえつてのもか？」

「知っていたよ」

殴り付けて、明石さんの身体が吹っ飛ぶ。

パンパンに敷き詰められた本棚にあたって、中から本が……本が……散乱し、てええっ！

「なんだ！何様だテメエは！！」

テメエのガキが！ただの日本の14の女が！戦争で人殺しまくって『英雄』となった野郎の息子の道具になるかもしれねえんだぞ！！

なんでんなに冷めてんだ！身体張って止めるのが父親の役目なんじゃねえのか！？

例えネギを殺してでも！娘が真つ当な道歩けるようにすんのが親の役目だろうがアツ！！」

つううッ！？

腹に拳、叩き込みやがったな糞がアツ！！

「じゃあ君にッ……君に僕の気持ちかわかるのか！！」

妻は！夕子は死んだ！より良い魔法の世を作る為に！！

少しでも魔法によって悲しむ者が減るように！だったら彼女の死は何になるんだ！！」

明石さんの拳が光る。

ギリリと歯を噛みしめる音が聞こえる。

俺を射殺さんばかりに視線が刺さる。

『明石夕子』。

裕奈の母親で、明石さんの奥さん。

俺もガキの頃の裕奈からよく、母親としてのだが、聞かされてた。

なんでも凄腕の戦士だったらしく、初等部で教師をやってて、休みの度に『任務』とやらに出てたそうだな。

元は真也さんの部下だったらしいな。

若くして隊長になった真也さんの、年上の部下。

姐御肌で隊のまとめ役だったって聞いた事あるわ。

「夕子はメガロメセンブリアでッ！少しでも……少しでも魔法世界を良く……しようってッ！」

彼女は戦った！戦って、戦って、戦って死んだんだ！！」

任務中の死。

そう俺は聞いた。

まほーせいととやらになって、二年くらい経った頃だ。

「聞いたよ……君たちより早く、『戦争の英雄』の息子が来ると。

そして悟った、娘の居るクラスの異常性に。

誰もかれもが才能の塊だ、天才というヤツか、各分野に特化したような少女たちばかりだ」

鬼と戦った、魔物と戦った、人間の戦士と戦った。

斬られて、殴られて、時には貫かれて、死ぬような思いもした。

だがあん時の俺にとっては、そいつは喧嘩の延長線上で、本気で死ぬ死なねえなんて問題とはちよいと違うと思ってた。

「そこに娘が……僕と夕子の娘がいた、娘がいたんだ！

教師として来ると言うことには反対した、間違っているからね。

だけど僕は……夕子と同じ道を辿り、終点に至るかもしれないけど……僕は嬉しかったんだ！」

でも死んだ、呆気なく。

いつもみてえに、ちよつと出張に言つてた先で、死んだ。

そう言つて裕奈はいつも俺の前で泣いてた。

「夕子の意志を裕奈が継いでくれるかもしれない！

本当に世界を変えられるかもしれない『英雄』の息子の従者として！裕奈は突き進めるかもしれない！！

だから僕ら「黙れ」夕子の死に意味が出てくるん「歯ア喰いしばれ糞つたれがアアアアアッ！！」「グゴッアッ！？」

俺の拳が、もう一度、明石さんの右頬に叩き込まれた。

「テメエが弱くて！テメエが止められなくって！テメエのせいで陥

った娘の現状だッ！！

テメエに惚れてくれた女の想いを！言い訳に使ってんじゃねえぞ
コルアッ！！！」

情けねえぜ、今のアンタは、本気でよう。

「どこ……へ、行くんだい？」

「……エヴァのところだ。」

強くなる、俺は、ムシケラみてえな俺だが、それでも俺は強くな
ってやんよ。

ネギを捨てんのも、桜子や裕奈を捨てんのも、クラスのガキども
捨てんのも俺には出来やしねえ」

「……………」

「殴り合いの道を、人殺しの道を、いずれアイツラが歩むのかどう
かは知らねえ。

だが例えどうだったとしても、どんな道を歩くとしても、せめて
アイツらがまともに一人で……イヤ、ダチと支え合って立てるまで
は、俺は……………」

俺が、どれだけあいつらの為に強くなれるのかは知らねえ。

……恐らく未来の俺が、鈴音にあそこまで想われる男になってるの
かも、まったくわからねえ。

だが俺に可能性がたとえ微塵も無かったとしても……譲れねえ、譲
つちやならねえ男の吟味があんだよ。

「俺は留まらねえ、現状に文句なんざもつ言わねえ。

……明石さん、旦那として、父親として……男として、どうすべ
きかもう一度考えるべきだと、俺は思っぜ」

四十八匹目 揉め事があってこそ人は纏まっっていくもんだ（前書き）

時間はちよつと飛んで。

四十八匹目 揉め事があってこそ人は纏まっていくもんだ

「ういゝ、あゝ、テメエら、今日はテストも近いし、ネギとアーニヤがこのクラスに入って初めての授業だ。」

「つーことで簡単なテストみてえなもんをするからな、それなりに気合入れてけよ」

「はいはい隼人にいしつつもゝん！」

「もう実験にゃんかはしないの？」

「イヤ、テスト一週間前くれえになったら、いつも通り自習と模擬テストをするが、それまでは実験する予定だな。」

「ともかく今日は簡易テスト、開始十五分くらい経ったら相談してもかまわねえから解答欄埋めてくよゝに」

「……はい！」「」

「……ぶはっ、疲れた。」

「昨日さ、あんな啖呵切っちゃったのはイイが、いざ修行？となるとつれえなあ。」

「んな事まるで、鞭の練習以外はした事ねえからさ。」

「喧嘩は実践が訓練だったし、喧嘩の為に筋トレなんざした事無かつたし。」

「裏の警備とかも行ったりするんだがさ、最近出張ってくる妖怪やはほとんどが顔見知りだからなあ。」

マジに、昔みてえにやり合うつてのは……無くなってっし。

て事で昨日は疲れた。

エヴァン家行つて、別荘借りて、そこで延々スラぼうチャチャゼロ相手に模擬戦だ。

スラぼうは速えし、堅えし、重えし、強えし。

チャチャゼロはそいつに加えて躊躇いがねえし。

手加減すんなって言うちまったからな、俺はボロ雑巾だぜ。
今更のんびりなんざ、カツコワリーしなあ。

『ベホマ』のお蔭で怪我はねえが……疲れた。

ま、それなりに頑張ってみんとさ。

こーゆーのは続けてナンボだろ？

そいやエヴァのヤツ、別荘を貸すだけ貸しといて首突っ込んでこなかつたんだわ。

まあ修行云々には昔っからあんま無関心だったからな。

「ネギさん、大丈夫でしたか？」

「はい、僕もイギリスに居た頃に似た様な事はやりましたし、多分大丈夫かなと思います！」

「さすがですわ」

しかしネギも早速仲良くやってんな。

まあ雪広にはバレたつてのもあるんだろうが……。

しかし、神楽坂と雪広にバラしたんだよな、あの二人に。

アイツら同士は喧嘩する事も良くあるが、互いが互いの事を一番わかってるみてえだし。

引つ張ってくれる神楽坂に、背中を押してくれる雪広。

『ネギの成長』って面を考えるとすりゃ、これ以上はないコンビだと俺は思っわ。

けどやっぱ……うん。

なんだかんだ言ってガキだからな。

運動神経はいいし、喧嘩も強いんだろうが、それでもさ。

出来るもんならネギもアーニヤも、血生臭くねえ道を歩いて欲しいもんだわな。

つと、ちなみにネギの席とアーニヤの席も決まった。

雪広の後ろがネギ、桜子の後ろがアーニヤだな。

それに合わせてその列にヤツらの席を一つ下げてる感じだな
転校したてで一番前は嫌だろうし、それなりに無難な二番目だ。

ま、本人たちはあんまり考えてないっぽいかな。

「ねえセツナ、最後に『授業に関する要望』ってあるじゃない。

私、隼人お兄ちゃんの授業がどんなのか知らないんだけど、どーすればいいと思う？」

「わっ、私ですか？」

私は……そうですね、パソコンというモノがまだいまいち苦手で

すので、手書きレポートの割合を半分半分からもう少し、増やして欲しいかも「えええっ！？アーちゃん桜咲さんと仲良しなの！？」
椎名さん！？」

「へ？うん、けっこーね。

隼人お兄ちゃんが、えと……レポート出してるじゃない？

その相談とかにセツナがよく来てて、それで話すようになって仲良くなったの」

「ずっとこいぞうアーちゃん！

桜咲さんは龍宮さんと長瀬さんとしか話したとこみた事ないのに……アーちゃん、恐ろしい娘！！」

「うるせえ」

「にくっ！？」

ゴンと桜子の頭に一発。

相談すんのは構わんつつたがさ、喋れとは言った覚えはねえよ。

アーニヤのヤツも結構仲良しは作ってるみてえだ。

メルディアナ魔法学校でのアーニヤの評価を掻いた資料を見たけどさ、ネギの幾倍も社交的だったらいいね。

初等部でもアーニヤはかなり友達いたみたいだしさ、この辺は生まれ持ってみたいなところもあるわな。

まあ『同性』ってのもデカいんだろうがさ。

見た感じだと、とりあえず桜子と裕奈。

そこから佐々木、和泉、柿崎、釘宮。

大河内とはここ数日かなり喋ってるみたいだな。

神楽坂に雪広もだな。

後は近衛に早乙女に宮崎に綾瀬、朝倉に春日に長谷川に那波に村上。それと魔法関連で桜咲と龍宮。

正直あからさまに避けてる風なエヴァと鈴音以外とは結構親しげだな。

この二人は……まあ、仕方ねえっちゃ仕方ねえさ。

ちなみに桜咲と龍宮が魔法関係者つてのを知ってるのはアーニヤの方だけ。

ネギは知らねえ様子だな。

てかネギのヤツは自分とアーニヤとネカネちゃんと、俺と高畑先生と学園長と真也さんとへげちゃんと坂上しかここには魔法使いがいないって思ってるっぽい。

イヤ、居ないっつーか目に入ってない……つてのが正しいのかね。

ここ半年、期間としちゃ短えのかもしれないがネギの事が少しわかってきた。

とりあえずアイツは思いこんだら一直線で、かなり石頭で頑固者だ。

周りに目を向けるって事を、目的以外であまり見出しそうとしねえんだよな。

……ガキらしくねえよなあ、ホント。

もっと好奇心旺盛な生き物だと思っただがな、ガキなんてよ。ま、そんな感じで気付いてないらしいわな。

アーニヤは逆に他に誰かいるの？って聞かれてさ。

そんな時思い浮かんだのが桜咲と龍宮でな。

同年代の、魔法関係での知り合いもいた方がイイかねとバラした、俺が。

それ以来それなりに話すみてえだな。

付け加えんなら、アーニヤはガンちゃんとか光さんとか明石さんとか瀬流彦とか。

あの辺が『魔法先生』だったのも知ってる。

やっぱ、性格の違いなのかねえ。

ネギにはもうちと、視野を広げて欲しいんだがなあ。

ネギの年齢で凝り固まっちゃったら、どーしようもねえぞ。

……なんにせよ、だ。

出来る内に出来る事をして欲しいわな、俺としちゃ。

んな訳で、俺もいつちょ頑張りますか。

『実録！女子中学生対女子高校生！仁義無き戦い！！』。

……んむ、インパクトが弱いかな。

折角ウルスラのお姉さん方が絡んで来たのにさ。

ネタには出来ないね。

ネギくんとアーニヤちゃんがウチのクラスに来て五日くらい。

頭は二人ともイイみたいだし、中々仲良くやってるよねえ。

ま、ネギくんの方は保護者付きだけどさ。

女の子の方が早く大人になるってのはよく言う話。

しかたないっちゃ仕方なんかもしれんさ。

私としちゃ、一層クラスがにぎやかになって楽しい限りなんだけどね。

千雨的にはメンドーらしいわ。

輪をかけて煩くなったてさ。

まー冷めちゃって、どうなのよそれ？

「……また面倒事がよ、オイ。

ただでさえウチのクラスは変人ばかりだぞ？

なのにあのガキどもが来てからは……私の普通を返せ……」

「ままま、諦めなつて千雨。

ウチのクラスで穏便に事を収めるってこと自体、不可能なんだからさ。」

「だがよ、和美、私はたいした事を望んでる訳じゃねえんだ。

ただ今日は体育で、ただ今日は屋上でバレーで、それを普通に出来ればいいだけだ、わかるか？

なのに、何が原因だか知らねえが……ウチのお祭り娘どもが……隼人先生の妹分だか何だとかどーでもいいが、勘弁してくれよ」

あゝ、桜子に裕奈ね。

正面切って相手方挑発してるみたいだし。

ま、先に突っ込んでったのはアスナといんちよだったみたいだけどさ。

なんか昼休みに揉めたみたいだね。

発端は向こうが絡んで来たんだっけ？

運動部四人組が中庭で遊んでたらさ。

で、そこで裕奈がやり返しちゃって。

近くに居たネギくんとアーニヤちゃんが駆けつけて。

そしたらネギくんが猫可愛がりされて。

さらに保護者二人が出張って来て。

あわや乱闘ってとこで高畑先生が来たんだっけか？

んで今に至る、と。

……念の為に保険はかけとこっか。

「ニシシ、面白くなって来たっすねえ」

「……美空、私はお前のその神経がわからねえよ」

「要はどんな状況でも楽しんだもん勝ちって事だよって。

見てるだけで楽しいじゃん？

千雨ももうちつと、クレバーに生きるべきっすね」

「相変わらずシスターの言葉じゃねえな、お前は」

「まあまあ」

美空も寮生活し始めてからタガが外れたよね。
やっぱ教会での生活は抑圧されてたって事か。

……「言えばなぐんで教会暮らしを止めたのか、聞いてないんだよねえ。」

スクープにはならないだろうけどさ、友達として聞いておこうかね？

「高校生のお姉様方、ここは中等部校舎の屋上ですわよ。」

お年を御召しになって目も頭も悪くなってしまったんですの？」

「第一そこに居るネギは、一応ウチのクラスメイトなの。」

アンタらが勝手に触って、連れてってイイ理由なんでどこにもないのよ！――」

「それとね、私の友達怪我しちゃったのにや」。

……「私のおんちゃん仕込みの右拳が、火い噴いちゃうよう……？」

「桜子ちゃんも頑張っちゃうのさ！」

「とつととネギを返しなさいよ！！」

「こんな可愛い子の一人占めはするいわよ。」

そっちの子はあげるから、私たちはこの子を貰って行ってもいいじゃない」

矢面に出てるのは五人。

ネギくんをウルスラの方々に取り込まれちゃって、怒ってる三人と。後はちよつとした怪我をまき絵と和泉が負わされたみたいでさ、そこ関係で裕奈、加えて桜子。

アーニヤちゃんもそんな気配が感じられるけどさ。ともかくこの四人って、いい意味でも悪い意味でも男らしいんだよねえ。

ホラ、女子の喧嘩って結構陰湿じゃん？

言葉攻めとか、間接的な嫌がらせとか。

正面切って向かい合って中々ないのが普通だと思うんよ。

でもこの四人は違う。

アスナといんちょは生来の気の強さからだろうね。

普通喧嘩なんて、殴り合ってはしないよ。

後の二人は完璧隼人先生の影響だ。

隼人先生が酷い不良生徒だったのは有名な話。

で、その喧嘩の現場に何度も二人が立ち会ってるってのも聞いたことがある。

だからかね？

大きな不和は殴り合って解決、みたいなところがあるっぽい。
あと友達傷付けられたらとりあえず殴つとけみたいなこともだわ。
それで性質が悪いのは、二人って結構強いんだよねえ。

ちょうど一年くらい前かな？

一回二人が大喧嘩したんよ。

原因は正直覚えてない。

そんだけ些細なだって事だろうさね。

「ダメです皆さん！どんな争い事でも暴力だけは！！」

「……ネギきゅん、そうじゃにやいんさ。

力じゃないと解決できないモノと、喧嘩した後にだけ生まれるモノも世の中にはあるんだよ」

……ぶつちやけ引いた、二人の喧嘩に。

いつもそんな事してたアスナといんちよの雰囲気なんかとは違った。
最初は二人もまったく動けてなかった、呆然としてた。

最初に動いたのは長瀬と古菲。
遅れてアスナといんちよ。

だってさ、普通女の子が昨日までスングク仲良かった相手の顔面を
躊躇い無く殴る？

殴られた方は椅子を掲げて、殴った相手に叩きつける？

しないっしょ、普通。

男の子でもないよね、普通。
流血沙汰だよ？ありえないっしょ。

「ヘイヘイ、ガキがいつちよ前に粹がってんじゃねーっての」

「へむにつ！？」

だからま、イツちゃってそうな感じに裕奈と桜子になったら隼人先生に連絡って暗黙の了解みたいなものがあるんさ。
私以外にも連絡してたっばいね。

「ウツシ、とりあえずメンドーだから学校ではやめろ。

喧嘩したいんならガツコの外に出てやれや」

……喧嘩すること自体は止めない訳ね。
まあらしいっちゃ、らしいけどさ。

「でも隼人先生！」

「わーってるわーってる、状況はさっき長瀬から電話で聞いた。

テメエら……ってガンちゃんこのヤツらじゃん」

「へ？香坂先生？」

「よっす高宮、元気してつか？」

アレ？知り合い？

……ガンちゃんってのはガンドルフィーニ先生の事だよね、広域指導員の。

堅物のあの人と、奔放な感じの隼人先生が仲良しってのは不思議な話だよね。

「……よーわからんが何でテメエらここに居んの？」

中等部校舎だよな、ココ。

ともかく高宮説明」

「私たちは自習で、レクリエーションでバレーをやる事になったんですがコートが足りずこちらの校舎に」

「雪広、状況説明」

「私たちは見ていただければわかるように体育ですわ。」

どうやらダブルブッキングのようですが……ちなみに隼人先生、こちらの方々とはどういう関係で？」

お、いんちょナイス！

ネタになるような間柄だったらいいんだけどね。

「コイツら？ああ、それは俺が教育実習で担当する事になったクラスのメンツって事だな。」

後はまあ、仲のいい同僚のクラスって事でさ……っと、あ、すいませんが香坂です。

実は屋上のコートの事なんすが……はい、はい、……ああ、担当のミスですか。

じゃあガンドルフィーニ先生が来られたら、交流も兼ねてって事で適当にしますわ、はい、了解です……って訳だ」

教育実習か。

ありがちな話だよね。

「……アラ？英子さん？これはどういう状況でしょうか？」

「高音？」

……状況から察するに後続組か。

てか高宮先輩だっけ？ガンドルフィーニ先生来るのがわかってたんなら、どー言い逃れするつもりだったんだろ？

ま、本気じゃ無かったってとこか。

ちよつと調子乗ってる的な私たちをからかいに来たってとこか。前のは意図的に、今回は偶然からの悪ノリかね？

「香坂、何故にお前がここに居る？」

「体育の二宮先生が急用らしいんで代替わりってヤツ。

ちなみにダブルブッキングらしいね、授業組む担当のミスで。

やっぱり校舎間を隔ててってのは伝わりにくいんかねってとこだわ」

「成程、校舎の広さの割にコート数は少ないからな、そういう事もあるか。」

前例は多いな、担当は何をやっている」

「まま、イイじゃねーの。」

それよかこっちは授業でそっちはレクリエーションらしいが……
今更やめるってのはイヤだろ」

優先順位的につてヤツか。

授業の私たちが最優先で、レクリエーションの先輩方は引くのが普通だもんね。

といつても、ま。

「あんちゃん！私たちはこのおねーさんたちにバカにされたんさ！

だから……勝負だ！ボッコボコにしてやんよー！！」

「舐められっぱなしは気に食わないのよー！！」

「……フフ、イイ度胸ですー！！」

こんな感じなのがウチのクラスか。

「ねね、千雨。」

まあ揉め事も沢山起きるけど、でもやっぱ美空の言った通り楽しんだ方がお得っしょ。

だってこんな濃いクラス、まず巡り会えないよ?」

四十八匹目 揉め事があってこそ人は纏まっていくもんだ（後書き）

ホレ薬イベントは起きません。

加えて原作設定より改変。

『黒百合』メンバーはウルスラの2・Dみたいですが、高音を加えてガンちゃんのクラスの1・Cに編入させました。

四十九匹目 子供の気持ちを素直に認めて応援出来るヤツが立派な大人（前書き

テスト編、突入。

四十九匹目 子供の気持ちを素直に認めて応援出来るヤツが立派な大人

中学生であるウチのクラスのヤツらにとって、何だかんだ言って勉強は大事だ。

勉強以外……例えば友達作りとか、気の合うヤツらとはつちやけてみるとか、生涯付き合い続けれる相手を見つけるってのも大事なかな。

俺としちゃ寧ろ、後者の方が大事だと思うわ。

勉強なんざ、ホントにやりてえ事が出来れば、やらざるをえねえ状況になれば誰だってやるもんだ。

だからそんな時までは、自分の心とか交友関係とかを育てた方がイイ。くっついて、ぶつかって、離れて、またくっついて。

人と人との距離感を測れるようになる方がよっぽど大事だわな。

個人的な意見としちゃ、頭でつかちよかそっちの方が世間的にも好まれると思うんだがさ。

だってのに、世間はイイ大学に行けとの一点張りな部分もある。

よーわからんて思うのは俺だけじゃねえよな？

……と、話がズレたか。

結局まあ、勉強も出来るに越したことはねえ。

勉強が出来れば選択肢が広がるからな。

勉強が出来れば一から十まで、やろうと思えば好きな事が出来る。だがさ、勉強が出来なかったら一から三くらいまでしか出来やしねえ。

今ウチのクラスが陥ってんのも、そんな選択を迫られた時の話だ。

「……………」

シーンとしてら。

聞こえてくんのはカリカリ、ペンを走らす音だけ。

マジでここは喧騒だらけの2 - Aなのかってのを疑いたくなるくらいだわ。

「……………あゝテメエら、んな風に静かにならねえでもk「隼人先生、ウルサイんですけど」おっ、オウ、ワリーな」

神楽坂がんな事言うとは……………なんつーか、ねえ。

イヤ、教師としちゃあ嬉しいばっかなんだぜ？

このクラスのヤツらは真面目にこれまでテスト前に勉強なんざした事なかった。

だってのに、テスト一週間前の今から『授業でテスト勉強をさせてくれませんか？』なんて要望通してるくれえだ。

ホント、吃驚だわ。

しかし……………流石に……………ココまで静かだと……………背中が痒くなるわ。

かと言って邪魔する訳にもいかねえからな。

若干、ツライわ。

……………おっ、チャイムか。

「ウツシ、授業は終了だ。

次は新田先生の国語の授業だからな、怒らせねえ様に気を付ける

「や」

「……………」

無視ですか、さいですか。

……ハア。

目的知ってるだけに、怒るに怒れねえわ。
俺もなんか、イイ感じの協力案でも考えてやるかねえ

「ケケケ、気色ワリーナ」

「あそこまでになるとなあ……普段が普段だかな」

「ぴぴ……ぴぎぎっ」

「まゝな、ホント誇らしいわ」

「クセークセー！青クセエゼ！」

「ぴぎっ、ぐぐぎぴ」

スラぼうの言うとおりだな。

青臭いからこそ青春の証……イイねえ、若人やってんねえ。

今日のはるかところで酒でも……イヤ。

ちよっくら手でも、やっぱり貸してみますか。
となればまずは、先生方に頼みに行くさね。

……つと、その前にタバコタバコ。

「香坂、お前もか？」

「ウツス、職員室じゃ吸えないもんで」

新田先生に……隣に居んのは瀬流彦か。
なんかやったのかねえ、アイツ。
煙草呑みじゃねえはずなんだがさ。

「瀬流彦、お前何かやったんか？」

「ははは……授業の時にちよつとボ力を、ね」

成程ねえ。

結構このヤツらは突っ込んでくるからな。

初めてのミスか？

そうだったら瀬流彦は優秀でマジメだし、わからんでもねえな。
大学時代はノートやらテストやらでホント、お世話になりました。

だが代わりにいろんなとこ連れてってやったんだぜ！

海に山にバイクのケツに乗っけて。

『ギブアンドテイク』ってヤツになってるはずだ……多分、きっと。

「瀬流彦先生」

「はっ、はい！」

……ビビり過ぎじゃね？

まあ新田先生は生徒だけじゃなくて、間違った事をしてたら教師が相手でも怒鳴るからな。

わからんでもねえがさ。

けど反面相談に来る生徒も教師も多い。

つまりは、そーゆー事だろ？

「物事を行っていた時に何かミスを犯す……これは無論、喜べるべきことではない。」

だが失敗を犯した事のない人間など、それこそほんの一握りの人間でしかないのもまた事実だ。

ミスを犯す事と間違う事は似て非なる事だ。

ミスを犯し、そのミスを自分のせいではなく周りにあった状況や周りの人のせいにしてそれを顧みなければ、君はまたミスを犯すだろう……だがそれではいけないんだ。

瀬流彦先生、君は自分のミスに始まり、結局騒がしくなったクラスを収めることができず授業が一つ潰れてしまった事を、騒いだ生徒のせいだと、どこかで考えはしなかったかね？」

「……はい、考え……ていたと思います」

「私はね、瀬流彦くん……何も生徒たちが何も悪くないとは言わないさ。」

だが彼女たちはまだ子供なんだ。

思春期真っただ中の、騒ぎたい盛りの、大人に対して対等になりたいと思う、ただの大きな子供なんだ。

そして私たちは教師だ。

そんな彼女らに何か一つでも誇れるべきものを持たせるために尽力する……ミスをした者を放ったままにせず、ミスをミスで止め、彼女らを間違った道へ進ませない為に、抗うべき……な」

ぬおっ？こっち向いた？

「そこに居る香坂は、昔は誰もが知る不良生徒というヤツだった。

人を殴り、公共物を破壊し、社会のルールを破る、世間的に言えば間違った事をしていた人間だ」

……照れる。

「だが香坂もまた、ただの子供だったんだ。

普通の大人よりもガタイが良く、強かったのかもしれない。

だがそれでもただの子供で、不良以前にただの生徒だったんだ。

……誤った事をミスとせず間違いと断ずることは非常に簡単だ。

しかし我々教師は自分の行いを間違いと認めたとしても、生徒の事を間違いと決めつけてはいはいけないんだよ」

「……新田先生」

「瀬流彦先生……君は若い、私なんかよりもずっと、ずつとに。

だから今日君はミスを犯した、間違いなどではない、すぐに直す事の出来るミスをだ。

振り返り、向き合い、原因を見つけてみる。

そして生徒の誤った行いをミスとして、認めてやりなさい。

そうすればきつと、君は優秀だからな、私や香坂よりもずつとずっと素敵な教師になれるさ」

「……酷くねーっすか？」

「香坂、部分相応という言葉を知っているか？」

……ヒデエや。

しかし瀬流彦のヤツ、俯いてっが大丈夫かね？

色々物事を深刻に考えるタイプだかな。

もーちと軽くってもかまわねえと俺は思っんだが……どうよ？

……呑むか？

うん、それがいいか。

あ、イヤ、だがアイツらの事もあんのか……。

「新田先生！僕ちよっと思つてきます！」

「……フム、それを君が正しいと思うなら、そうすべきだ」

「はい！」

……行っちゃった。

んゝ後で電話でもしてみつかね？

「……香坂、お前はお前で何か私に用事でもあったのではないのか？」

「ああ、そうでした。」

実は、っすね……」

根回し完了っくら。

とりあえずこれで、アイツらの授業担当してる教師陣には話を通せれたか。

しかし運も良かったわな。

テストまであと五日くれえだけどき、ノルマとしてやるべきところ

は全部済んでるみてえだしさ。

後は全部を全部、自習やら簡易テストやらにして貰っても構わんみたいだし。

イヤゝホントよかったわ。

「ぴぎつぐ」

「だな、みんな驚いてたわ」

「アノ2 - Aガ『テスト勉強』ト力……頭ガ汚染サレタンジャーノ力？」

「まあ、そう言いてえ気持ちわからんでもねーがさ」

そーなんだよな。

テストのための勉強なんざ、殆どのヤツらが絶対にしなかったアイツらがねえ。

麻帆良学園は入学さえすれば後は完璧なエスカレーター式。

よっぽど素行が悪いとか、よっぽどの学力が足りないとかならん限りは確実に大学まで進学できんだよな。

だからウチのクラスのヤツらは勉強しなかった。

まあそれでも普通は、普段勉強してなかったとしても、テスト前くらいは勉強するもんだがさ。

それでも遊びたいってヤツで、勉強しなかったんだわ。

だが今回は違う。

ほぼクラス一丸となって、勉強に励んでら。

ウム、非常にイイこった。

理由は簡単、ネギとアーニヤによって、だな。

アイツらは、全部知っちゃってまだ納得しきれねえ部分があるが、とりあえず魔法関連で来てるって事になってる。

ま、二人に罪はねえ訳だし、俺は俺のやりてえ様にやるだけなんだから。

んでだが、名目上は『飛び級の試験的運用』の為の生徒って訳だ。そんな二人が最底辺の辺りしか学力のねえウチのクラスに今居るのは、『魔法』って言葉を全て抜いちゃえば、単に俺がいるから。

保護者でもある俺が、まだ幼いアイツらを年上だらけのところに行かせる為の、言うなれば緩衝材的存在となるべきって事でウチのクラスに所属してるって寸法よ。

……そう言われて、俺は納得しちゃったんだよな。

もーちと理的に、冷静になって考えねえといけねえって事が。普通は保護者が担任ってのもおかしいもんな。単細胞な俺が憎いわ。

まあイイヤ。

今更どーなるもんでもねえし。

まほーつかいさんがたにや、ネギとアーニヤをウチのクラスから外すって事は頭にねえのかもしれん。

だが普通の教師もこの学園には居る訳で、そいつらへの言い訳みたいなもんが一応必要な訳だ。

それが『飛び級』って話。

最後のテストでも優秀な二人を在席させるだけの学力がウチのクラスに無いってのが証明された場合。

二人の所属クラスは上位五クラスの中から自動的に選択されて、来年度からはそこで学ぶって事になるんだと。

……まあ、これも話を知らなかったら、なあって話なんだが。ウチのクラスを良く知ってるわって話だな。

少なくともウチのクラスに、一回クラスメイトになったヤツを簡単に見捨てる様な屑はいねえ。

そこはスゲー誇るべきとこなんだろうが……氣にくわねえ。

そうやってイイところを、なんか利用されてるようで、やっぱり俺は氣にくわねえ。

どーせ学力が足りなかったとしても、『凄まじい意欲を見せた』とかのお題目で二人のクラスを変える氣なんざねえんだろ？

だってのに……茶番だ。

クソみてえな茶番だ。

アイツらの行動を予想して、やりてえ様にやらせてやりてえつてのによっ！

なによりも素直に、アイツらの想いを応援して、喜んでやりてえつてのに……ようー！！

「あああああああつー！！氣にくわねえー！！」

「ケケケ、刻ミ合ッテ『ストレス』発散デモスツカ？」

「オウツー！よろしく頼むー！！」

「ぴぎぎぎっ！！」

まあイー！

俺は俺のやりてえ様にやる！

そのやりてえ事がまほーつかいの理想とぶつかっちまって……俺には関係ねえんだよ！

俺は俺の心に従う！

ホント……それだけだわな。

五十匹目 昨今の主人公スキルに鈍感が入ってるのは普通

「……か」

はわー。

「……どか」

はわわー。

「のどか」

はわわわわー。

「のどかあっ!」

「はわわわわーっ!?!」

「いきなりうるさいですよ、ハルナ」

「んな風に冷めてる場合じゃないでしょうが!」

今日はチャアンス!なのよ」

「勉強が第一ですけどね」

はうう……。

えっ、えっとーこんにちはー、宮崎のどかですー。

今日は期末テスト前の金曜日の放課後。

今私たちのクラスのみんな……あ、エヴァンジェリンさんと絡繰さんはいないんだった。

そのー、その二人以外は図書館島に居ます。

しかもしかも！『幻の地底図書室』というやつです！

私はお友達の夕映と、ハルナと、このかと一緒に『図書館探検部』って言う部活に入ってます。

大学の先輩から聞いた事のある、そんな場所に行けてホントに幸せです。

あったかくって、本もいっぱいあって。

……えへへへっ、一生ここに居てもイイかも。

「でもさ、ホントラッキーよね。

最初ネギくとアーニヤちゃんが別クラスに行くって事を聞いた時、のどかの顔はそりゃヒドイもんだっただけどさ」

あっ、あわわわわわっ。

そうでした！

そんな事より今日は勉強に来たんだった！

ネギくとアーニヤちゃんが……ネギくとせっかく一緒のクラスで、ずっと勉強していけると思っていたのに。

はううっ！今度のテストでクラス平均点が学年五番以内に入らないとネギくんは違うクラスに……！

ダメッ！そんなのダメなのよのどか！

ネギくんにせっかく会えて、あの日ネギくんに助けてもらって……

えへへへっ。

「ですが、せっかく『幻の地底図書室』に来れたのですから、沢山本を読みたいと言っのが人情ですね」

「アンタさあ、のどかの気持ちは知ってるんだから、手助けしようとは思わないの？」

「それはもちろんです。」

ですのでは非、ネギさんをこのクラスに残留させる事を決定付けたから、再び訪れようと思っているのですよ」

……ネギくん、カツコ良かったなあ。

えへへへっ。

全部を全部は覚えてないけどー、私が階段から落ちそうになったところを抱き止めてくれたの。

王子様みたいだったなんて……きゃーきゃー！！

「綾瀬！早乙女！宮崎！ウッセーぞコラァッ！！」

はむにゅっ！？

……う、うう……怒られちゃった……。

「たははっ、すいませーん」

「申し訳ないのです」

「じっ、ごめんなさーい」

「ったくよ、ここに来てんのはなーんとか許可を貰ってだからな、それを覚えとけや。」

面倒事起こすと二度とこんな真似できなくなっちまうってのは、さつきも言っただろ?」

そっ、そうでしたー。

今私たちは『幻の地底図書室』にいます。

ここで日曜日の昼過ぎまで、『勉強合宿』をすることになったんです。

最初に提案したのは椎名さんです。

それで皆さんが賛成して、いざ合宿をしようって事になったんですけど……。

寮の多目的室みたいな、めばしいところは全部抑えられてたんです。

そこで昨日の朝、隼人先生に相談してみたら、ここに連れてきてくれたんです。

「ウッシ、んじゃ改めて指示すつからな。」

まあつつても、俺はテメエらに何もしてやらねえ……お前らだけに特別授業とか行っちゃうと不公平になっちゃうし、第一テメエらの理科の点数は学年でもトップクラスだからな。

教えることは何もねえって話だ。

予定組むのも、模擬テストとして貰ったモノ以外に使用すんのも、その辺は適当にテメエら自身で考えてやれや」

……うつつ、頑張らないと！

「食い物や飲み物はデメエらで持ってきたもんで全部なんとかしろ。

晩飯も朝飯も昼飯も、料理出来るヤツらが率先して、出来ねえヤツらも協力して作って食うように。

俺は今日も明日も、夜八時から朝の八時までここに居るが、それ以外は学校で仕事すつから。

風呂はねえがそこら辺で水浴びでもして、身嗜みゼロなんて真似にもならねえ様子を配つとけ……明日の夜に来た時クセエって思われんのは嫌だろ？」

「……はい！」「」

「でだ、これが最後だが……好きにしろ、俺は口を挟まねえ。

勉強すんのもしねえのも、本を読むのも読まねえのも、遊ぶのも遊ばねえのも、全部デメエらの自由にしろ……以上！！

んじゃ俺は上に戻るが……そだ、超！雪広！デメエらちよつと来い」

自由にかあ。

……うん。

でもでも、やっぱり私はネギくんともっと一緒に居たい。

来年ある修学旅行もー、麻帆良祭もー、ネギくんと一緒に過ごした

いなあ。

お話だって、すごくした事あるわけじゃないし。
もっともっとお話したいし。

うん、頑張ろう！

「っと、テメエらを忘れるところだったわ。

近衛！お前もちよつと来い」

「何なん、隼人センス？」

隼人先生？

相変わらずおつきーな！。

何の用事かな？

「テメエらに一応伝えとくが、今日来たルートでもう一回ここに来るってのは不可能だから」

「なっ！何ですか！？」

「あんな綾瀬、俺らは教師だけが使用可能な鍵を使って、ここまで来たわけだろ？」

『図書館探検部』のテメエらが七難八苦を乗り越えてここまで辿り着いた訳じゃねえ。

教えられた道を進んで与えられた空間で本を読む……それじゃあ『図書館探検部』の名が廃るんじゃないの？」

「……確かに、広い図書館を進んで自分の目当てである本を見つけ
て読む……という行為はとても素晴らしいものなのです。」

苦勞して見つけた本だからこそ、より一層その世界に入り込む事
が出来るのです」

「あはははっ、確かにせやなあ」

「綾瀬、この空間はお前が苦勞を乗り越えて到達するに足る場所だ
ったか？」

「……まだタイトルを見る限りですが、非常にそうですと言いたい
です」

「だったら見つけろ、テメエの足で、テメエの目で、突き進んでこ
こに辿り着け。」

自分のやりてえもんを見つけて動くのに……ロマンを追い求めん
のに男も女も関係ねえさ」

ロマンかあ。

……実はネギくんは本当に王子様とか……えへへへっ。

「ちなみに俺はテメエだけのルートを見つけて、大学になる前はこ
こで勉強したもんよ。」

ま、俺に負けねえようテメエも頑張んな」

「撫でるな、です」

行っちゃった。

最近は『草食系男子』なんて言葉があるけど、隼人先生には似合わないよー。

『男の人』って感じだもん。

「さて皆さん！隼人先生は行ってしまいましたが私たちはネギさんの為、アーニヤさんの為、頑張りますわよー！！」

よ……よしー！

頑張るぞー！

「あ、宮崎さん、隣の席ですね。

よろしくお願いします！」

はわわわわわわわーっ！！！？

「あんの女誑しがあっ！」

「アーニヤ、とりあえず落ち着こつ」

「おほつ、嫉妬全開だねえ」

「違つわよミソラ!!」

「そこ! 煩すぎですわよ!!」

ひっひっひ、縮こまつてる縮こまつてる。

まーたローテンションのココネとは違つた可愛さがあるっスよねえ。

「……放つときやイイものを」

「まあまあ千雨、美空も可愛いばっかなんでしょ」

イギリスの方から留学生が来る、なあんて話を聞いて。
蓋を空けてみりやガキが二人っすからね。

しかもアレっしょ、『ネギ・スプリングフィールド』。
『スプリングフィールド』つつつたら……ねえ。

まあネギくん自体は可愛いんだけどさ。
なーんかでつかいもんに巻き込まれちまいそうだし。
仲良くすんのはそこそこにしといて、テキトーにしとくのが一番っ
スよ。

恐いもんには近付き過ぎねーのが一番。
くわばらくわばら。

つつつても、その坊主の幼馴染の女の子とは同室なんだから……ぶ
っちゃけ危ないっちゃ危ないんスよね。

くうっ！！

何であの時私は「〇〇」苑の食べ放題なんかで手を打っちゃったんだ！

無欲で純情で純朴な清廉潔白である私が憎い！！

しかもタカるんならもっと大人数にしとけばよかった！

私とココネとアーニヤと、それと和美と千雨っしょ？

五、六万は散財させてやったと思うけど……相手は隼人センサーっスし、もつとイツときゃいかった。

せめてブランドもののバッグとかさあ。

「……およ？どしたココネ？」

「ココ、わかんない」

「あゝ漢字……まあこんなのは適当にパパッと埋めときゃ」

「あんね美空、それはダメっしょ。」

『しゅつか』か……とりあえずどんな意味か考えてみるべきだね。

『しゅつか』てのは例えば、ココネが育てた物を荷物として、買ってくれる人に出すってことでしょ？」

「ん、カズミありがとウ」

「イヤゝ、拙い説明で悪いけどねえ」

んゝありがてえや。

頭がイイ友達がいるってのは、色々楽っスわな。

「ちなみに和美、ココは？」

「自分でやんなって」

ヒデエ。

……にしても寮に住む事になるってのはちよいと予想外だったわ。
あんだけ厳しかったシスターシャークティがいきなし『寮に住みな
さい』だもんねえ。

ま、私としちゃ和美や千雨なんかともっと遊べるよーになる訳だ
し、イイこと尽くめなんだけどさあ。
なーんか怪しくね？

年明けだったけどなんかあつたつけ……。
隼人センサーの復縁……とか？

イヤイヤ、そりゃねーっスわ。
完璧一方通行だったみたいだし。
んむ、そりゃねーや。

……ま、いつか。
どっちにしたって週四くらいで教会にや顔出さねーといけねえ訳だ
し。

日曜とか朝っぱらから行かなきゃなんねーし。

どっちが楽かって聞かれりゃ、逆にメンドーになったんかもしれん

わな。

「あり、桜咲進んでる?」

「あ、いえ、あの……朝倉さん……」

「あゝココね、ココは……」

「……あ、アキラ、そこ違うわよ」

「長谷川、年下に教えられた」

「コツチ見んな」

「チサメのそこも違うわね」

しかし桜咲さんがこーゆーイベントに参加するのとか。

参加したとしても龍宮さんとか長瀬とかとしか話さなかったのに……アーニヤは豪胆だわな。

私?私は魔法関係者だけど『きょーとしんめーりゅー』とか言うおつかない剣術使ってる桜咲さんとは全然。

基本わたしゃ連絡係ですから。

まあ桜咲さんも龍宮さんも隼人センサーと一緒に夜の見周りとかしてる時もあるからさ。

必然的に会ったり、多少は話したりするんすけどね……仲良しではねーや。

単純にとっつきづらい雰囲気があったわ。

『私に近付いて来ないでオーラ』っつーかさ。

今見りやぜーんぜんそんな事ないんだけどねー。

てかさつきから近衛の視線がスゲー。

ウワー見られてる？見られてる私？

桜咲さんですね、わかります。

隼人センサーと話してるとこに居合わせちまった事があるっスからね。

幼馴染なんだっけ？

ま、その辺の人間関係のごたごたはテキトーに処理して下さいってとこで。

私はのーんびり蚊帳の外から見てるからねえ。

さてはてまあ一応、同室の友達兼妹分の為に頑張りますか。

結果から言えばウチのクラスは第三位の順位で期末テストを終えた。ま、誰にも文句言われる事なく与えられた試練をクリアしたってとこかね。

ネギとアーニヤは『クラスの学力』にカウントされねえからな。
物理的に、ちよいとテストを受けるのが不可能な相坂を除いた30
人の平均点は見事なもんだったわ。

ちなみにテストの度に、密かに相坂には受けさせてんだがいつも九
割以上だわ。

『教科書を一字一句間違えずに読めます』何てレベルに覚えてるか
らな。

元々、頭の回転も悪くねえみたいだしさ。

今回のテスト、ウチのクラスの平均は79・2点。

みんな……イヤ、一人を除いてか、頑張ったって事だわ。
いつもは六十点台だし。

……しかな。

エヴァのヤツは何考えてんだ？

五教科全部白紙で出しやがった。

イヤさ、まあ十五年もこんな真似タルいんだろうとは思うがさ。
だが一回前のテストはそれなりに受けてたぜ？

悩み事でもあんのか、ちよいと……話してみつかね。

「フム、ではこれより来年度から二学年A Hグループとして頑張
ってもらおう新しい先生を紹介しようと思う」

つと、職員会議だった。

丁度一昨年か、俺もこーやって紹介されたんだよな。
去年は瀬流彦だったか。

勤務先の移動とか、新任教師の赴任とか、退任教師を送ったりとか。春は出会いと別れの季節とはよー言ったもんだ。ま、そんな感じで今年も来る訳だ。

さてはて、どんなヤツが新田先生の……グループ……につ！？

「来年度から私たちのグループとともに生徒を教える事になる、
青山鶴子」 くんだ」

「来年度よりお世話になります、青山鶴子言います。

担当教科は体育……どうぞよろしゅうお頼み申しあげます」

「ぶほはっ！？鶴子！？」

「隼人はん、お久しぶりどす！」

五十匹目 昨今の主人公スキルに鈍感が入ってるのは普通（後書き）

隼人の元カノのもう一人、青山鶴子嬢の登場でございます。

ぶっちゃけこの人もスゲー出なかった。

刹那強化フラグも立ちますしね。

五十一 匹目 女の情は山より高くて海より深い（前書き）

地震に遭った皆さんがご無事な事を祈りつつ。

五十一匹目 女の情は山より高くて海より深い

諸外国には存在しない独特の技法で精錬され、『折れず、曲がらず、良く斬れる』という三要素を持った『刀』という刃物を用いて幾百と……イヤ、廃れ消え去ったモノを考えると幾千幾万か。

『刀』や『槍』、『拳』に『脚』。

その他諸々を用いた多くの古来よりこの国に存在していた『裏世界』の『武術流派』の『頂点』に立つとされる『流派』。

平安の世より千年続く『国家存続』に基づく『魔性駆逐』。

数百年の間日本という国の対外的盟主であった『帝』が座した『京』という都。

京の都に本拠地を置き、古くより、日本に蔓延る『魔』を剣で封じ込める為の正式な『最高戦力』の一角。

発祥は……確か平安後期だと聞いたことがあるな。

『陰陽寮』の術師とともに、退魔用に発展していった武士団だったか？

京を護り魔を討つために組織された掛け値なしの力を持つ戦闘集団。それこそが『京の深山に秘して伝わる神鳴る剣』、『京都神鳴流』だ。

……この国で、まあ『裏世界』に関わる人間ならば一度は聞く名前だろうさ。

身の丈近い『野太刀』を操り、剣術の他にも抜刀術、手裏剣術、徒手武術等々『武芸百般』とはこの事か。

『神鳴流は武器を選ばず』とはよく言われる話。

野太刀が無ければ飛礫に木の枝まで利用する、形だけでは無い、文

句無しの実戦派だ。

一般的な使い手でも『向かい来る弾丸を切り裂く』と言えばレベルの高さがわかるだろう？

『神鳴流に飛び道具は効かない』というのもまた有名な話さ。

「ああん隼人はくん、会いたかった。

六年ぶり……六年ぶりの隼人はんやわあ」

「あゝあゝわーった、わーった。

とりあえず落ち着け、落ち着け」

そして今……まあどう見てもそうとは思えんが……。

隼人に抱きついている黒髪の女が『京都神鳴流師範 青山鶴子』。

曰く『剣の申し子』、曰く『剣鬼』、曰く『人越剣神』、曰く『白い死神』、曰く『何あの人！眼えコワッ！魔法斬られちゃうんですけど！てか眼えコワッ！！』。

……最後はよくわからんが、それほどまでに異名を付けられる剣士だな。

実力は……ふざけている、の一言だ。

私の知る鶴子は六年前の姿だが。

当時の鶴子と、鶴子側に躊躇いが無い本気の鶴子に、殺す気で来られたら。

恐らく私は一分と保たず血塗れだろうな。

私は……『浦島流柔術』に関して言えば才能が無かった。

だが『氣』も、血筋だろうな、人より多いしそれなりの実力は持ち合わせているつもりだ。

少なくとも有象無象に負ける気はしないさ。

だからこいつは『ケタ違い』……というヤツなんだよ。

『才能の塊』と言うべきか？

まあそれに驕っていたならば、そこまで強くなれはしないだろう。

その芽を開花させるだけの、途方も無い努力に裏付けられた実力。

『歴代の京都神鳴流継承者でも一、二を争う剣腕』と、謳われるだけはあると言う事だ。

「失礼するぞい。」

フム、やはり鶴子ちゃん本人かの……久しぶりじゃ」

「ホホホ、近衛の翁もお久しゅう」

「ウム、ますます綺麗になったのう」

「そうでっしやる？恋は女を綺麗にしはりますから」

「フオッフオッフオッフ……での、早速で悪いんじゃが帰ってくれんかの？

鶴子ちゃんには悪いんじゃが、『不採用』という運びで頼めぬか？」

「イヤどす」

「……やはりかの？」

「あたりまえや。」

ま、隼人はんを京都に連れてつてもエエゆうんならまた話しは違
うて来るトコなんそやけども……」

「俺？俺は無理だぞ。」

「こつちでやる事あるしな」

「ぴっ！」

「ケーーーーッケケケケケケケ！フラレテヤガルゼー！」

「……そんな訳そやし、ウチも勿論無理やな。」

「第一ウチは正式に採用されて、ココに来とるんそやし」

「まあそうなんじゃが……まさかお主が『一般教師枠』で麻帆良に
来るとは夢にも思つとらんかったからのう。」

「数が多過ぎるからとはいえ『探知用魔法』にかまけて、魔法先生
方を配置せぬ……という事はイカンという訳か」

「新田先生は是非に、言うてくれました」

「……これは聞いた話だな。」

麻帆良学園には生徒の入学、教員の採用双方の枠として二つの窓口

がある。

一つは『裏世界に携わる者』、一つは『裏世界に携わらぬ者』。

前者は教員や高校、大学からの編入に限る話だが『入試』の科目に『実戦』が加えられるそうだ。

ある程度の実力を把握し、また面接の時間も長く取って思想も見られるらしいな。

後者は普通の試験のみ。

まあ規定以上の『魔力』や『気』や『不自然な流れ』に反応する魔法は使っているらしいが……。

しかし今回それをくぐり抜けたのは『生ける伝説』とまでされている鶴子。

本人からすれば、造作も無い事だったのかもしれないさ。

セキュリティも完ぺきとは言い難い訳だ。

まあコイツが本気になればどんなセキュリティも意味を成しそうに無いとも思えるがな。

「六年どす」

……………。

「ウチの最終学歴は中卒やった。」

剣の方に人より秀でとりましたから、勉強も嫌いやったし、迷わず戦場に身を置く事を決めました。

宗家の長女やったしな」

……鶴子が生まれた『青山』という家は、京都神鳴流の元締めの立場にある。
総本山というヤツか、『正統後継者』というモノを代々と輩出する家柄だ。

そんな家の宗家の長女故に『家を継ぐ』という意味も含めて、戦場に出なければいけなかった。

『まだまだ力はあるのだ』と周囲に伝える意味も含めてな。

「せやけど……ウチは少々強過ぎたみたいやな。

盛りたててくれる人もおるんやけど、どこかこう……な、違うモンを見る様な眼でウチは扱われてきた。

さかしまになんや、『神』や『仏』みたいに扱う輩もいるし……
そないな風に扱われて、嬉しい人がいると思うか？」

「そーなんか？女をそんな風に扱うたあ腐ってんな」

「……むふふ……結果ウチはグレてもうて、なまじっか持った力
で好き放題しとったんそやけども」

「しな垂れかかんたの」

「そうそやけども隼人はんは違うた。

ウチを一人のウチとして、まあ知らなかったゆーのもあるのかも
しれへんけど、ホントのウチも見えとったはずやのに……。

ウチをただのウチとして、ただの一人の女として、青山鶴子とし

て扱ってくれたんや。

なーんも関係無しに、なーんも打算無しに、ただ自分がそうしたいからってなあ」

「ケケケ」

「ぴぎっぎ」

……ただの自分、ただの一人……か。

「……成程、の。」

ならば二人の繋がりも、イヤ鶴子ちゃんの想いかの、納得いくもんじゃが……しかしお主には婚約者がおったじやろう？

そしてまた鶴子ちゃん自身の立場も……じゃからこそ六年前に麻帆良の地を去ったんじゃなかったのかの？

大人になって、自分の立場を理解したか」「関係あらしまへん」

……ホウ」

「ウチは……ウチはこの六年、必死に自分の為に使ったんや。」

高卒認定取る為に勉強して、魔法もなんも関係ない私立の小さい大学に入って、四年間足りまへん頭をウチになって一生懸命に回して、やっと取れた教師の資格なんや。

ウチはフラれた……でもほんでも、一回知ってしもた隼人はんのあったかさ以上のもんやこう、探したかてどこにもありまへんでし

た。

そやし『教師になる』って言うた隼人はんと同じ立場に立とうと、必ず隣に立てるウチになってあのシスターよりも……そのはるかはんよりも魅力的だってわからせてやろうと……努力しました。

連れ戻そうってなら好きにしたらエエわ。

けど……関東やろうが、関西やろうが、『旧世界の賢者』やろうがなんやろうが……ウチの道、阻むなら斬りほかす……ただそれだけや」

……私は……私の六年は、何……なんだ。

コイツは……青山鶴子という……女は……。

なのにつ、私……は。

「……俺は、そんな風に想われる男じゃねえぞ？」

「関係あらしまへん。

ウチがただ隼人はんと一緒におりとうて、ウチが世界の誰より隼人はんの事が好きそやし、そうしたいだけや。

ウチの気持ちまで、隼人はんの都合で変えられる筋合いやこうどこにもないどすえ？」

「……鶴子ちゃん、お主は関西呪術協会の最高戦力じゃぞ？」

お主を連れ戻そうと、誑かしたであろうこっちの人間を叩き潰そうと、攻勢はますます激しくなるじやろうて」

「ウチが持つてきた責任くらいは、ウチが全部負うわ。」

こつちい来て、帰れゆるて迫る有象無象はすべてこの手で斬りほかしたる。

ウチを体のイイ『兵器』か何やと勘違いしてる阿保どもにはな」

メキリと、鶴子を中心に空気が震える。

……相も変わらない、バカみたいな『気』だな。

私には……キツイ。

チャチャゼロは酷く楽しそうだが。

「で、どないします、近衛の翁？」

その気があるなら、ウチは全力で抵抗しますえ……本気で本気の、やけどね……？」

「……『覚悟』はあるのかの？」

「そないなモノはドブに捨てて、犬に食わせたらエエ。」

ウチはただやりたいからやる……『覚悟』なんてモノは関係無しに、それだけやわ。

それよか……はるかはん」

ビクツと、心臓が跳び跳ねた気がしたよ。

鶴子の眼には炎が燃えていて……それはとても熱く燃えていて。反面凍てつくように冷たかった。

「なしてアンタが……ココにおるんや？」

「……私は」

「隼人はんから一番に想われとったからに、なんも抗おうとせず、ただ言葉を受け入れて。」

『ひなた荘』の管理人をしとったみたいではおまへん。

アンタはちゃう男と好き合つとつたみたいではおまへんの。

軽々傍を離れて、軽々乗り換えて、軽々股を開いて、パコパコ男を受け入れて、今はいかいな顔して隼人はんのねぎにおる？なんもせいなんだアンタが？」

……ッッ！

「……結婚するはずやったそやね、素子はんから聞いたわ。」

で、ここに居るって事はその男からもまた乗り換えたん？何があって？何をして？」

「あつ、会った……んだ、会いに、隼人が来てくれて……」

「会った？……ハッ！会いに来てくれた？」

アンタぶざけるのも大概にしいよー！」

「違うだろうが鶴子！俺が何もかも悪いんじゃないか！！」

はや……と。

「隼人はんは悪くない。」

ウチはただ隼人はんが好きで、その隼人はんから想われつつたはるかはんが……昔とはちゃう、見るに堪えへんクソみたいな女になつとつた事が、気に食わないだけなんそやしさ」

「だからなんでお前はそうやってっ！」

隼人の言葉に鶴子は笑った。

深く、強く、艶やかに。

昔よりもずっと……魅力的に。

「女の情は山よりたこおして海より深いんや。」

そないなに想ってくれるんやったら、ウチを惚れさせた責任を取らなきゃって事な」

鶴子が私を射抜く。

肩に手が置かれる。

バチリと、神鳴りが身体を貫いた気がした。

「はるかはん……ウチは、今のアンタを絶対に認めへん。」

そやし隼人はんはもろて、玉のような赤ん坊生んで、幸せな家庭

を築きますさかいに……アンタは適当にどこぞで畜生でも孕んどけ
ば？」

五十一匹目 女の情は山より高く海より深い（後書き）

鶴子さんは独身という事にしております。

年齢の方ははるかさんと同じ29歳で。

しかし……若干の昼ドラ臭が……。

斬られた、斬られた、斬られた、斬られた。

地面に叩きつけられ、口の中を鉄の味が満たす。
砂利が擦じ入り、頭の中を不快な感覚が満たす。
全身に痛みが走り、身体中を酷い倦怠感が満たす。

師の履いた草履が私の頭を踏みつけた。

「鶴子！やり過ぎよ！」

「……何や刀子、随分と優しゅうなつたもんやな。

神鳴る剣は命がけで覚えるもんやろ？」

こないなもん、本山やつたら日常茶飯事やったではおまへんの」

「それは……でも、鍛錬だけに全てを注げる昔と今じゃ刹那の状況が違うのよ……！」

「わかつとるわ、そないな事……ウチかて教師になる訳やし」

「ぐうツ！？」

ミシリと、力が更に籠り入る。

「そやけどね刹那、アンタ安心したやろ？」

刀子の言葉で、ウチと過ごすこの時間から抜け出せるゆゑに

「がああああアッ!!?」

「剣が、軽くなったと思ったけどそのはずな。

少なくともウチが稽古を付けてあげとった頃のアнтаは、そないな風や無かった。

どんな状況でも、強うなろうと必死にもがいて、足掻いとった…

…」

……師の草履が私の頭から退いた。

身体に力が入らず、冷たい地面が私を冷やす。

気は湧き上がらず、後ろへと飛んだ剣を取りに行く力すら生まれ出ない。

「そう言や刀子、この辺で美味しいご飯を食べれるトコとかあらへんか？」

隼人はんと逢い引きしたいんどす」

「っちょ!……、それは、香坂くんに聞けばイイじゃない」

師は剣を腰に納める。

「それもそうどすなあ」

「……ふう……そうしなさい」

刀子さんと連れだって、師は段々と私から離れる。

「あ、せや刹那。

にしても……軽くなったものやなあ、お嬢様への想いは」

リンと、鈴の音が聞こえた。

「っあ」

離れる師。

身体は動かない。

離れる師。

身体は、動かない。

離れる師。

身体は……動かない。

熱い……目頭が……熱い。

情けなくて、情けなく、て……情けのうて……。

ウチは……ウチ……はっ……。

「……うええっ」

このちゃん……このちゃん……このちゃん、このちゃん、このちゃん、この……ちゃん。

「うえっ……うっう……うえ……」

「アキラはさ、魔法の練習ってどんなことしてる？」

「私？私は……イメージトレーニングとか」

「確かにイメージは大事だもんね。」

「私もやってみよっか」

麻帆良の今は春休み。

テストも何とかクリアして、来年からも隼人お兄ちゃんのクラスね。
って事で春休みは遊ぶわよおおっ！！

今日は午前中へゼル先生との修行。

『槍に才能あるわね』なーんて言われちゃってさ、今はその練習してるの。

結構スゴイらしいわよ？

何にせよ！そうやって強くなつて、アキラは水の魔法使いだからね。一緒に頑張つて、大きくなったら世界を旅して、みんなの石化を治してあげないと！

でも、遊びもしっかりするわよ！

遊ぶのも修行の内って言つてたし！

心を広くするんだってさ。

ネギも遊んでるのかしらね。

確か今日はアヤカの家に行くって言つてたけどさ。

ま、保護者のアスナとアヤカに任せとけば大丈夫でしょ！

「今日は裕奈ねえとマキエとアコと買い物なのよね」

「うん、原宿の方へ行ってみようって」

「W a o ! ハラジユク！」

知ってる知ってる！

なんか服屋さんとかいっぱいあるところ！！

よおっし！じゃあ行くわ……よってアレ？

アレって……セツナ？

ボロボロじゃないの！！

「セツナー！」

「…………アー、ニヤさん？」

うわー！近くで見るとますますボロボロ！

青アザ出来てるし、色々膨らんでるし…………目だって充血して赤いし…………。

「…………何があつたのよ？」

「別に、何でもありません」

ちよっ！立てそんな怪我じゃないわよ！

「あつ、桜咲…………大丈夫、じゃないよね？」

「大河内さんですか…………いえ、私は心配してもらつほどでは」

「そんな言い方ないじゃん」放つといて下さい！…………セツナ？」

「あつ、その…………ホントに、放っておいて下さい…………」

…………行っちゃった。

…………。

…………。

「何よアレは！！私とアキラが心配してあげたのに！！」

「アーニヤ、とりあえず落ち着こつ。

桜咲にも何か事情があったのかもs「知らないわよ！そんなの！」
しっ、知らないって」

「私とセツナは友達なのよ！友達の心配して何が悪いのよ！！」

そう、友達なのよ。

そりゃあさ、アキラとかみたいにとっかに遊びに行ったことはないけどさ。

でも会ったら話すし、この前の合宿だったら隣同士の布団で寝たし、ご飯も一緒に食べたし。

友達じゃないの！

「……そっか」

「そう、だから友達が寂しそうにしてたら助けてあげるのよ。

隼人お兄ちゃんも、いつつもそう言ってるわ」

セツナからどう思われてるなんて知らないわ。

でも私はセツナを助けたいって思うもん。

だって……泣いてたのよ？

私じゃ力になんないかもしれないし、私じゃ何にも出来ないかもしれないけど。

でもじーっと待ってるなんて私には無理。

だったら動くわ。

例え嫌われたってイイもん。

それよりセツナが一人でああやっている方がイヤよ！

「だからね、アキラ……って電話？」

「あ、ゆーな？うん、私。

実は今日ね……あ、そうなの、久しぶりに会った人が……うん、うん、わかった。

じゃあまた違う日にね……まき絵と亜子には私から連絡しとくから」

アキラ……。

「先に行つといて。

アーニヤの友達なら、私の友達だし、後から追いかけるからさ」

「……うん！」

よっし！セツナ！待ってなさいよおっ！！

私が剣を手を取った時の話。

剣を取る、目的が初めに出来た。
その後に、理由が出来た。

私は、生れのせいで『忌み子』として集落での嫌われ者だった。

私の持っている最初の記憶の中に、父と母はいなかった。

良くしてくれたのは父方の祖母だけだった。

母方の祖父母には会った事が無い。

そして……父方の祖父には『最も嫌われていた』と、私は感じる。

祖母は『怨むな』とよく言ってくれていた。

集落の長である祖父には、色々と思うところがあるのだと、そういう
つも言っていた。

だがそれでも、顔を合わせれば怒鳴られ、顔を合わせれば蔑んだ視線を投げかけられ。

いざ構ってくれるという時は、憤りを発散するかのように、幼い私に木刀を持たせて、『稽古だ』と称して木刀で私を痛めつけた。

私はそんな祖父が大嫌いだった。

剣を手取る目的が出来たのは、齡が三つか四つになった頃だった。
集落が、多くの異形どもに襲われたのだ。

私の住んでいた集落は、京の山の奥の奥地に遭った。

人が滅多に入らぬような、奥の奥にポツンと。

術式を組んで、人の眼につく事の出来ないように。

襲撃の理由は知らない。

大凡、近くの山を良く人が通っていたから、それを喰らう為に居を構えようとしたのではないかと思う。

様々な、異形が一齐に集落に襲いかかった。

鬼や狐等々日本に古来から蔓延る妖怪と言われるモノや、多分悪魔に近い存在も居たような記憶がある。

まあ幼い頃の記憶で、混濁が起こっているという事も考えられるが。

祖母は刀を構え、私を必死に守ってくれた。

疾風のように、教えてくれた昔の武勇伝のようにには翔ける事は出来てはいなかったが、それでも玄人の業で次々と迫りくる者どもを斬り捨てていた。

そして祖母は死んだ。

一瞬だった。

巨大な鉄の塊が、祖母をまるでアルミ缶のように、ぺしゃんこにした。

頭が真っ白になった。

次に意識を取り戻した時、辺りはこの世のものとは思えぬ地獄絵図だった。

リンと、鈴の音が聞こえた。

人の形をした鬼が、そこには居た。

身の丈ほどの野太刀を構え、朱い袴を穿いた、黒髪の女性がいた。剣を持った右腕を振るえば、幾体もの異形が文字通り千切れ飛んだ。何も持たない左腕を振るえば、祖母を潰した鬼が鉄の塊ごと真つ二つに裂けた。

私の隣には、血濡れの祖父が満身創痍で倒れ伏していた。いつもの傲慢不遜な態度はどこにもなく、虫の息だった。

私の心に黒い感情が巻き起こった。

イイ様だと、イイ気味だと、思った。

そして目の前の剣に、鬼に憧れた。

いつか自分自身で、同じような様に祖父を遭わせてやろうと思った。

剣を持つ目的が出来た。

剣を持つ理由が出来たのは、五つになろうかという頃の話だ。

師に連れられて、私は『関西呪術教会』と言う日本に代々伝わる術

を操る人々の元締めへと足を運んだ。

私を、その所属として正式に迎え入れる手続きをするためだ。人間の、元締めだ。

師に稽古を付けてもらっている時、私は何時もボロ雑巾だった。

師に頼み込み、連れられ行った神鳴る剣の道場で受けるのは集落と変わらぬ視線だった。

それでも師は私を私として扱ってくれた。

祖母のように、私を扱ってくれた。

師の妹である師範代も、同じだった。

師の父と母も、そうだった。

だから私は潰れる事なく剣を磨いた。

理由はわからないが、祖母のように受け入れてくれる人がいて、私は潰れたりしなかった。

祖母の墓前に誓った目的も、忘れることはなかった。

寝食を忘れて剣に励んだ。

そして、師と師範代に連れられて、私は『関西呪術教会』を訪れた。

『少し強くなったから』と言葉を掛けられて、『連れていくだけの価値がある』と言われて。

私は、幸せだった。

そして、剣を取る理由が出来た。

『関西呪術教会』の本部で、その長に出会い、私は一人の少女を紹介

介された。

『近衛木乃香』という、少女だ。

初めての……友達だった。

身分は違った。

片や卑しき身分の私、片ややんごとなき身分の彼女。

それでも彼女の父であった長は、私が友と彼女を呼ぶ事を許してくれた。

生まれて初めて、友達と遊んだ。

鞠をして、独楽をして、御弾きをして、面子をして、歌留多をして、羽子板をして。

私は……幸せだった。

護りたいと思った。

友達だから。

どんな事があっても、必ず護りたいと思った。

私の剣で、彼女を……このちゃんを。

その頃だったか、師の身体から憑き物のようなモノが取れたのは。

師は私を道場へと引き取ってくれた。

師は私に剣を教えてくれた。

だが師はいつも、私を私として見てはくれているのだが、物事全てを硝子を通して見る様な眼をしていた。

それが、無くなった。

関東の方へ嫁いだ、幼馴染に会いに行った時の話だ。

それ以降、足繁く関東へと通っていた。

能面のような顔ではなく、その頃初めて師は私や師の家族に対して柔和に笑った。

厳しさは、その度合いを増した。

だが師はそれ以上に優しくなった。

私は本当に、幸せだった。

師と稽古し、友と遊んだ。

師と風呂に入り、友と風呂に入った。

師と同じ布団で寝て、友と同じ布団で寝た。

が、それもすぐに崩れた。

友が出来て、半年かもう少し経った頃の話だ。

このちゃんを護ろうと誓った。

剣を取る理由が出来た。

なのにそれは容易に崩れた。

川に溺れたこのちゃんを、私は助ける事が出来なかった。

このちゃんは、気にしないでイイと言ってくれた。
師もまた、気に病まなくてイイと言ってくれた。

だが、私は私が許せなかった。

誓ったはずなのに、早々にそれを破った私が許せなかった。

弱かったからなら、単純に力が足りない方からなのならば私はそこま
で気に病む事は無かったかもしれない。

しかしそれでも私が何より私を許せなかったのは……私自身に『助
ける力があつたのに、それを使う事を恐れて、それを知られる事を
恐れて、助ける事が出来たこのちゃんを見殺しにしてしまった』。
そんな私自身の弱さだ。

私はこのちゃんから離れた。

醜い私を見て欲しくなくて、私は逃げた。

京都でも、麻帆良に来てからも。

そんな私から、師もいなくなった。

師範代も、関東へと行った。

目的を思い出し、理由を思い出し、私は必死に剣を振るった。

振るった……つもりだった。

だがすべてが無くなった私は、昔の様に剣を振るう事は出来なかつ
た。

六年ぶりに会った師に誤魔化しは通用しなかった。

私は……弱い。

どうしようもないほどに。

私は弱い。

五十二匹目 目的とか理由とかが人を突き動かす（後書き）

鶴子は鬼教官。

刹那は感情を内に溜めるタイプ。

五十三匹目 聞かん坊な子供も距離を置いてみれば結構可愛い

私が最初に鶴子ねえに会ったのは……いつだっけ？

えとー……多分隼人にいが高校生になったくらいだっけか？

桜子ちゃんの灰色の脳細胞燃えてるのにいいいつ……灰になった。

じゃなくって、多分それくらい。

刀子先生の幼馴染さんにやんだよね。

ほいでほいで、刀子先生が結婚して麻帆良に来たのを訪ねたのが最初だっけ？

「何でもいいけど久しぶりーっ！」

「おお、相変わらずのやわらかさ……いい仕事してるぜい」

「ホホホ、二人ともあまえたやねえ」

んーいい匂い。

鶴子ねえは、はるかねえみたいにや隼人にいの彼女さん。
ちなみに鶴子ねえは二号さん！

女の子の敵だに、隼人にいは。

「そーいえば何しに鶴子ねえは麻帆良に来たの？」

「言つてなかったか？」

来年からね……麻帆良で教師になるんや」

……おおっ……おおおおおおおおっ！！

「ホントに！」

「ホントや」

「さっちゃん！何か最近私らキテるよっ！」

うんうん！

隼人にい関連で、にゃんか変な事になってた事がガンガン解決されてる！

鶴子ねえも帰ってきたし、はるかねえもいるし……！

「フツ、コレは私らも気合入れるっきゃないぜ」

「にはー、確かにっ！」

うん……とりあえずどうしよつか？

この前特攻服着たらちっちゃくなってたんだよにー。

買いに行つてー、入れ墨シールも買おっかな？

鍵付きバイクも探しとかにゃいと！

いざって時は盗んだバイクで走りだすのさ！！

……でもでも、元と言えばゼー……えんぶ！隼人にいが悪いんだもんね。

何であんなシスターさん好きににやったのかなあ？

何か……うん、私は好きじゃないもん。

こんな事言ったら怒られるかもしれないけど……うん。

違うよ？

別にはるかねえと鶴子ねえがどっかに行っちゃったーって事になったからじゃない。

ただ……でも……にゃんか……嫌い。

桜子ちゃんの心は海のように広いはずなのに……まだまだじえない。

「……そう言や桜子、裕奈。」

アンタらははるかはんのことなんも思わなかったん？」

はるかねえの事？

ん……む……にゃんが？

「アンタ二人置いてって、ウチみたいに隼人はんを何とか止めようともせんと、すぐどっかに行ってもうたのに」

「思わなかった！あんちゃんには噛み付いたけどにゃん」

「理由……おせてもろてエエ？」

「だってはるかねえ、和利にいとかに連れてってもらって遊びに行っても、すーんごく寂しそだったんだよ！

彼氏さん出来た時もそうだったし」

「そか」

「幸せそうだったけど、楽しくなさそうだったし！」

一緒に居た時みたいに笑ってなかったし！」

うんうん。

まったくもってそのとおりなのさ！

「それにね、はるかねえと鶴子ねえはタイプが全然違うんにゃもん」

「タイプ、かいな？」

「あゝさっちゃん、私もそれわかる。」

はるかねえはあんちゃんの後ろを歩く感じだもんね。

勿論首根っこ掴める辺りの！」

「鶴子ねえは隼人にいの左隣。」

……だから、そんな鶴子ねえは止めに行けたけど、はるかねえは止めに行け無かったんじやにゃいのかなあ」

掴めるくらいだったから、一歩踏み出しちゃった隼人にいにはるかねえは手が届かなかったんだよ。

でも鶴子ねえは手が届いた。

それだけじゃないのかな？

……アレ？でも何で左隣？

右隣でも……アレ？なんか変だ。
んゝむ……わかんないや。

「鶴子ねえはあんちゃんの事が嫌いになったの？」

「そら地球がひっくり返っても無いわ」

「じゃあはるかねえの事が嫌いになった……とか？」

「どうやろっねえ……」。

でも、ただウチがそこまで惚れこんでる隼人はんの一番で、ウチが二番でもエエって認めとった頃のはるかはんやないから。

やったらウチが一人占めたかてエエではおまへん、って話やわ」

なぬっ！？

「だったら私がもゝらう！」

隼人にいなら結婚してあげてもイイのだ！」

「フハハハハハ！靴下を履いてないゆーなちゃんはおとーさんとあんちゃんの二人を囲うのだよ！」

「……ホホホ、アンタらは強いんやねえ」

「もち！だって隼人にい大好きだし！」

「ふふふ……嫌いなんて言ったら私の右拳で肅清してやるぜ」

「……あの子にもアンタらみたいなの……イヤ、ほっといたウチの言える言葉ではおまへん、か。」

「ほんでももし……そうなったらあの子は……」

「……にゃんの話だろ？」

「京都の知り合いとか？」

「あの子って言うから子供なのかなあ？」

「ま、大丈夫やろ。」

「なんたつてあの子はウチの……せやな。」

「桜子、裕奈、これからおぶでも飲んで、隼人はん誘ってご飯でも行かへんか？」

「ご飯！」

「行く行く！どこ行くの！？」

「そやね……旦那の財布で行けるとこ、やろか？」

「ウチはエエ奥はんそやしね」

「んじゃ政利兄ちゃんのおでん屋行こー！ー！」

「だいこんきんちゃく、ちくわにがんも。」

「こんにゃくはんぺん、すじに焼酎だー！」

「セツナッ!!」

この声……アーニヤさんか。
私のところに何をしに？

「何があつたの？話してよ！私でも力になれるかもしれないから！」

……何を、言っているんだ？
私の力になる？

……嗚呼、そうか。
子供特有の『困っているなら助けてあげなさい』というヤツですか。
隼人先生直々の教育は、どうやら真っ直ぐな子供を育てたようで。

眩しい……私には、直視できない。

「聞いているの？セツナってば！」

聞いてますよ、聞いてます。
聞く耳は持ちませんが。

……何を考えてるんだ、私は。

アーニヤさんは純粹に私を心配してくれているのに。

……そうだな、桜咲刹那。

お前のような薄汚い存在が、真正面から向かい合える存在ではないからな。

「話してよ！ねえってば！」

じゃあ逆に聞きますが、私が話してどうなると言っんですか？

心配でもするんですか？

同情でもするんですか？

輕蔑でもするんですか？

どうもならないですよ。

どうせ知ったところで、アーニヤさんの気持ちが沈んでしまうだけ。

見せてしまっではいけないですからね。

なんたって『英雄の息子』の『夫人候補筆頭』ですもんね。

龍宮から聞いた話で、全部が全部本当かどうかは知りませんが。

折角まっすぐ育ったのに、ここで歪んでしまっではダメでしょう？

「セツナ！セツナ！！」

ダメですよアーニヤさん、私なんかの為に時間を割いてしまっでは。

……最初は貴女のような光り輝く存在に話しかけてもらえて戸惑いました。

でも嬉しかった。

私でも、貴女と仲良くなれたら、このちゃんにも向かい合えるような気がして。

……でもダメです、ダメなんですよアーニヤさん。

今日、師と向かい合って改めて思いしらされました。

私が所詮貴女に近付いても、近付けば近づくほど強さを増す貴女の光で、私の汚れが一層目立つ。

最悪の場合、貴女の光が陰るかもしれない。

私はダメです。

私の様に弱くて、卑屈で、薄汚れた醜い存在では。

貴女に近づく資格が無い。

近付いたって、誰も喜ばないんです。

嗚呼、だったらなんで……私は……あの時……。

「何で……放つといってくれないんですか……？」

「決まってるじゃない！私はセツナの友達だからよ！」

とも……だち？

「そうよ！だから心ば……違う」へっ？」

「私は少なくとも！貴女を友達だと思ったことはない！！！」

そうだ……そうなんだ。

これでイイ、これでイイんだ。

私とアーニヤさんが友達な訳が無い。

そもそも私がこのちゃんと……イヤ、お嬢様と友達なんて言う枠組みに入ってしまった事が間違いなんだ。

私が……私のような『忌み子』が、『混じりモノ』の私が。人間なんて純粹で綺麗な存在に近付くの間違いだったんだ。

剣に理由なんて持たなければ良かった。

ただ目的だけを持って、祖父を殺して自害すればよかったんだ。私のような……私のような、存在がいるから……。

「……セツナ、こっち向きなさいよ」

「申し訳ないですが、向いたところで何も……」

「何もならないっての？ だったらイイじゃない、こっち向きなさいよ」

「……何でs「アーニヤ・フレイムナックルウッ……」めぺろっ！？」

……へっ？

何が？ 殴られた？

私が？ アーニヤさんに？

「あああああもう！ めんどくさいわねアンタも……」

私が友達って言ったらアンタは私の友達なのよ！わかる！？」

……りつ、理不尽じゃありませんか？

「ネギもめんどくさいけどアンタもそーとーね！

アイツは『友達ってどうやったら友達なのかなあ』とか、『話したら友達なの？』とか、『友達なら一緒に帰るべきなのかな？』とか……バカじゃないの！！

アンタは何！何で友達じゃないって言えるの！私がガキだから！？」

「そつ、そんな事は！

ですが私とアーニヤさんではつり合いg「つり合いってなんなのよ！私はそんなこと考えた事なんてないわよ！」ですが！！」

私はその事でどれだけ悩んで、どれだけ……なのに……。

「よく聞きなさいよ、イイ言葉を教えてあげるわ！

友達はねえ、自分が友達だと思う限りずっと友達で、誰でも友達なのよ！！」

「それは……詭弁です！

私のような存在が、貴女のような人と友達になってはいけないです！！」

「こつ、コレだけ言っても……ネギ並みの頑固者……だつたら！」

何を……取りだした？

棒……イヤ、アレは槍か？

魔力をそこはかとなく感じる……という事は『魔力媒体』！？

「カントゥス・ベレークス フォルティス・ラティウス・リリス・リリオス シム・イブセ・バルス 契約執行
戦いの歌』”！！」

『魔力』と『術式』による『身体強化』！？

アーニヤさんの年齢で使えるような魔法じゃないですよ！？

「最終手段よ……題して『喧嘩して仲直りしたら友達大作戦』！！

行くわよ！セツナ！！」

つちよ！

ツツ！！

想像以上に速い！

それに刺突の一つ一つが鋭い！

「おんどりやあつ！！」

拙い！

無力化を！

怪我をさせる事なくツ！？

このちゃんの時のように怪我を……苦しめては……。
ダメだ！そんな事だけは絶対に！

でもこれ以上私の剣が弱くなったら……。

「そこおとぐべるぴっ!？」

しまっ!手加減が!!

きりもみ回転しながら飛んでいくアーニヤさん。

地面に……地面にぶつか……。

「……ねえセツナ、これが私を友達じゃないなんて言った理由？」

「……はい、私は、白い翼を持つ……異形と人間の混じりモノなんです……だから」「あそ、そんだけ?」「……へ?まあ、はい、あの……はい」

「それよりさセツナ、私って……ホラ、まだまだ弱かったじゃない?

でもそれじゃダメなの。

今よりずーっと強くなって、世界中を旅して、悪魔に石にされち

やった村の人たちを助けなきゃいけないの。

だからセツナ、私の友達になりなさい」

「あのつ、よく意味が……それに私はこん」羽が生えてるだけでしょ？隼人お兄ちゃんなんて股に毛が生えたおつきい蛇がいるわよ」それは！そのつ！」

「私はとにかくそんなくんだらないこと気にしないわ。

セツナは友達、私が決めたから、セツナがイヤでもセツナの事は友達だから」

「……なんですかつ、それは……っ……」

「恐いんなら、悲しいなら、寂しいなら泣けばいいからさ。

私がぎゅってしてあげるから、そんな風に一人でいないで。

セツナがたとえ大丈夫って言っても、私がイヤで、私が苦しいから」

「ふふふっ……我が儘ですね、アーニヤさんは」

「うん、そうなの、我が儘なの。

だから租の我が儘、セツナにぶつけるから一緒にいなさいよ。

一人じゃ大変でしょ？

セツナの友達の、コノカと一緒にさ」

アーニヤさんの言葉は陳腐で、愚直。
卑屈な私には、向きあえないほどに。

でもそれでも、それはやっぱり光り輝いていて。
どこかで私も近付きたいって思っていた。

羽を、穢れた存在を、一笑に弾きとばしてくれた。

……単純だと、自分でも思う。

どうしようもないほどに。

たったそれだけでお、私はこんなにも……。

「……はい、私なんかでよければ」

……あつたかいんです。

本当に、本当に。

五十三匹目 聞かん坊な子供も距離を置いてみれば結構可愛い（後書き）

ウチのアーニャはこんな感じ、ウチの刹那はこんな感じ。

若干簡単に仲直りしてしまいましたか…… まあ引つ張り過ぎててもア
しなので。

五十四匹目 百人いれば百人の幸福と不幸がある（前書き）

第一章最終話！

五十四匹目 百人いれば百人の幸福と不幸がある

少し前、僕はアスナさんに連れられてあやかさんの実家に遊びに行きました。

僕は……僕は心の中のどこかで、僕は世界一幸せな男の子で世界一不幸な男の子だと思っていました。

僕のお父さんは『英雄』で、みんながみんなすごいって言うようにすごいお父さんです。

でも、僕が我が儘を言ったせいで、僕の住んでいた村は悪魔によって襲われました。

僕はお父さんが大好きです。

でも、僕はそんなお父さんに一度しか会ったことはありません。

……本当は夢かもしれないけど、本当にお父さんだったのかもわかりません。

そんな僕は不幸で、ダメな人間だと思ってました。

お兄ちゃんに会って、アスナさんに会って、あやかさんに会って。

でも僕は本当はそんな資格なんてないんじゃないかって、みんなを不幸にするような我が儘を言う僕はすごくダメな人間なんだって、どこかで思っていました。

そんな僕は、とてもとても不幸せだって。

僕だけがいつも不幸なんだって、思っていました。

けど、それは全然違うんだって僕は麻帆良に来て知りました。

お兄ちゃんは、昔不良さんをしていたせいで、同僚の先生から辛く当たられているそうです。

授業を担当しているクラスのテストの平均点を上げて、広域指導員として悪い事をする人たちを注意しても、副担任として僕たちのクラスをまとめて。

正当な評価を下してくれる先生は、とっても少ないんだそうです。

生徒さんからは好かれているみたいです。

でも先生たちからは雑用を押しつけられたり、嫌味を言われたり。毎日毎日気分良く仕事を出来ていない。

そんな感じなんだって、それでも一生懸命働いているんだって、神多羅木先生が教えてくれました。

『魔物使い』というクラスもそう。

僕たち魔法使いが倒すべき『魔物』を従えているお兄ちゃんは、麻帆良には魔法使いが何人もいるそうですが、そんな魔法使いからは嫌われ者みたいです。

……僕も、最初そう聞いた時にえっ？って思いました。

けど、スラぼうさんもチャチャゼロさんも、全然悪い人じゃなくてすごくいい人たちなんです。

でも、お兄ちゃんは嫌われてるみたいです。

アーニヤもそう。

初等部に通ってた時、アーニヤがお兄ちゃんの胸で泣いてたのを見た事があります。

下駄箱に、石とか砂とかがいっぱい入ってたって、式集院先生から聞きました。

アーニヤを嫌いな人がいて、辛く当たってた事もあるって聞きました。

お姉ちゃんもそう。

麻帆良に来るまで、ウェールズの村とメルディアナ魔法学校以外に行ったことが無いって言ってました。

外には沢山の人がいて物があるのに、何も知らなかったって。本とネット以外に外を知る術が無かったって、言ってました。

アスナさんもそう。

アスナさんには小さい頃の記憶がないそうです。

アスナさんはお父さんもお母さんもないそうです。

だからアスナさんは学園長からお金を借りて学校に行って、今返す為に必死にバイトをしています。

あやかさんもそう。

あやかさんは生まれてくるはずだった弟さんを、生まれてくるはずだった日に亡くしたそうです。

『お姉さん』になるはずだったのに、弟さんと一緒に遊ぼうって決めていたのに。

そう願っていたのに、信じていたのに、叶えられなかったそうです。

このかさんもそう。

このかさんは仲良しだった友達に、今は無視をされているそうです。
のどかさんもそう。

のどかさんは小学校の時に男の子にいじめられて、のどかさんのお父さんとお祖父ちゃん、それと僕とお兄ちゃんと新田先生以外の男の人と上手に話しが出来ないそうです。

夕映さんもそう。

大好きだったお祖父ちゃんを失って、のどかさんたちが現れるまで世界の全てが色を無くしていたそうです。

ハルナさんもそう。

麻帆良に来るまでは、いつも元気なハルナさんを鬱陶しがって、まるで空気のように扱われていたそうです。

裕奈ねえもそう。

大切なお母さんを亡くして、でもお父さんは仕事で忙しくて、大好きな二人がいなくなつて、ポツンと一人だったそうです。

桜子ねえも、そう。

桜子ねえの両親は麻帆良に居るのに、二人とも桜子ねえと会ってくれないそうです。

桜子ねえが小さい時から両親は喧嘩ばかりして、近くに住んでいたお兄ちゃんがいつも面倒を見ていて。

桜子ねえの面倒をお兄ちゃんが見るようになって、顔を合わせる時間が減ったら二人は喧嘩しなくなつて。

今では桜子ねえの生活費と学費は全部、お兄ちゃんが持たされている通帳の口座に振り込まれているそうです。

僕だけじゃない。

みんな、みんな、みんな、みんな。

それぞれが辛い事を感じて、嫌な事を思っ、毎日生活しているんです。

それでも今は楽しいから、自分を好きだと言ってくれる友達がいるから。

学校に行っ、授業を受けて、ご飯を食べて、部活をして、遊んで、お風呂に入っ。

誰もがいろんなものを抱えている。

それでも折り合いをつけて、毎日を過ごしている。

僕は、知らなかった。

明日は始業式。

明日から、僕は三年生になって、タカミチとお兄ちゃんのクラスで学校に通う。

今日は春休み最後の日。

一生懸命に今を楽しむ日。

それぞれの春休み最終日、その1

「セーント！」

「ふわあつ、アスナさん歌うまいんですね」

「まあそれなりですわ、ネギさん」

「……あつ！わかった！委員長しつとだー！」

「ふう、そんな短絡的な考えに至るとは……」

「まあまあ委員長、そないな風に怒らへんでも」

「そうそう、まき絵はいつもこんな感じじゃん」

「ハルナー、それは酷いと思うなー」

「……せやけど、こうやって本屋とハルナと一緒にカラオケ行くのは初めてかもしれんな」

「ま、和泉とまき絵はゆーなとかと遊ぶことが多いもんね。

私ら文化部で、あんまり一緒に遊ぶーって事はないからさ」

「アスナアスナっー！私も一緒に歌わせてー！

ほらほらネギくんも！」

「ええっ！？僕もですか？」

「じゃ次のサビで入りなさいよ！」

「まき絵さん、どうして貴女はそうやって人に無理矢理物事を押し付けるんですか？」

「ええー、だって沢山で歌った方が楽しいと思って……」

「イイですかまき絵さん、ネギさんはカラオケは初めてなのですよ？

でしたらいきなりアスナさんの様な音痴ザー「誰が音痴ザルよっ！」付き合わせるのではなく、ネギさんの知っている曲にすべきではないのですか？」

「でっ、でもお……」

「……けどさ、他のクラスだったらグループだったので色々分かれちゃうじゃん？」

でもウチのクラスって、グループはグループであるけど、そのグループ同士が仲イイよね」

「確かになあ、他のクラスやったら何かある度に騒ぐぞー……なんて風にはならへんしな」

「うつ、うつ……私はそんなに明るくないけど、でもそんな私ともみんな仲良くしてくれそうですしー」

「本屋ちゃん、そないな風にゆーのはよーないで」

「……えへへっ、うん、ごめんね」

「次よ次、バーニングハート！だからね」

「はっ、はい！頑張ってみます！」

「人の気持ちを考えないなんて……貴女は失格ですわ！」

「しっ、失格……？」

「ええ失格です、佐々木まき絵として失格ですわー！」

「ガーーーーン！！」

「……仲イイねー、委員長とまき絵ちゃんも」

「まあアホな子ほどかわいって言うしさ。

ちなみにさ和泉、今日ゆーなどが大河内は？」

「二人？ゆーなは桜子とどっか行くゆーてたな。

アキラはアレや、妹がかわゆーて仕方ないみたいや」

「ああ、成程」

「ほらほら来るわよネギ！」

「ばーにんぐはーと」

「……天才少年も歌は下手なのね」

「ま、いつか。」

ネギ！次は一緒に行くわよ！」

「はい！」

■
■
■

くそれぞれの春休み最終日 その2く

「なっ、何ですかこの格好はアツ！？」

「W a o！似合ってるわよセツナ」

「フリーな桜咲、ホームページの更新に付き合わせちまってよ」

「イイじゃん、結構楽しいっしょ？コスプレもさ」

「でっ、ですがこの猫耳スクール水着というのは……やっぱり！」

「アーッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッ！」

「……ううっ……」

「美空、笑うのよくないね」

「……oh」

「星になし、ミソラ」

「イイのイイの！私なんて何がイイのか知らないけど初等部の体操服よー！」

「ですがあっ」

「私はバニーだし、気にしちゃダメだ桜咲」

「そーゆーところにも需要はあんだよ」

「……何かそれ、危くない？」

「和美、それは言わねえ約束だ。」

第一コスプレは自分らが楽しむもんだぜ？

画面の向こうで豚どもが何してようが、私が好きだからやってる訳だしな」

「大人だねえ、千雨。」

ま、気付いてるのは私とアンタくらいだし……ね」

「そ、それでいいんだよ」

「ココネは赤ずきんね!」

「似合う?」

「もち!」

「……しっ、死ぬかと思った。」

でも私がミニスカシスターなのは鉄板スね。

見るよこのアクセス数を!私こそが神!崇める私をツ!」

「テメエ、私のホームページだって事を忘れてねえか?」

「私がギャルソン、千雨が王道メイド服か。」

んじゃ写真撮るから並んで並んで」

「……あの、アーニヤさん、私の隣空いてないですか?」

「うん……いいわよ!入って来て!」

「…………えっ？」

■
■
■

それぞれの春休み最終日 その3

「結局隼人先生とあんまり親しくなれなかったわね」

「うん…………ちづ姉の何がダメなんだろ？」

「…………やっぱりもう、押し倒すしかないわね。」

夏美ちゃん、リボンを買いに行くわよ」

「なっ、何に使うの？」

「私の体に巻いて、私をプレッ捕まる！隼人先生捕まるから！」
「あらあら」

「…………でも、待つしかないんじゃないのかなあ。」

ちづ姉が高校生になったら、まだ相手にしてくれるかも！

隼人先生、生徒と結婚したっていう新田先生とも、ガンドルフィ
―二先生とも仲良しだし―

「それじゃ遅いかもしれないでしょ、夏美ちゃん。

『ひなた』には行ったけど、イイ人だったわよ……ちょっと陰
つてたけどね」

「行ったんだ……流石ちづ姉……」

「今は大丈夫でしょうけど、これからどうなるか……」

「まつ、まあ私はちづ姉を応援するから！」

「何をですか？」

「あ、ゆえ吉、やほー……一人？」

「ええ、まあ。

図書館島の、『幻の地底図書室』を探しているのですが……中々
上手くいかないものです」

「やっぱり本気で探してるんだ」

「勿論です。

必ず見つけてあそこで私は……その為にも、次は古菲さんと楓さ

んに応援を頼むつもりです」

「……そう、夕映ちゃんもロマンを追い求めているのね」

「ええ、ロマンを」

「お互い頑張りましょうね」

「はいです……ん？お互い？」

「気にしないでいいと思うよ、ゆえ吉」

「そうですか、ではそうしておきますです」

■
■
■

くそれぞれの夏休み最終日 その4く

「クッキーとビスケット、相変わらず可愛かったね」

「うん」

「私の方にわしゃわしゃーって来て、んで膝の上にズーンだもんね。

さすが我儘放題だにゃ」

「うん」

「でもさでもさ、あんちゃんがいたら絶対私らのところ呼んでも来ないんだよね。

ずーっとあんちゃんの近くだもんさ」

「うん」

「……おじさんとおばさん、月曜日の朝なのにいなかったね」

「うん」

「もう何年もだけど、鍵かかっている誰もいない家に入るって変な感じだよね」

「うん」

「……そいえばさっちゃん覚えてる？」

昔あんちゃん、さっちゃんの家を近くの工事現場から持ってきたハンマーで壊しにかかったんだよね」

「うん」

「それでそれで工事現場のおじさんたちとあんちゃんたちが大喧嘩

して、警察が来て、今度はおじさんたちと一緒に警察の人たちと喧嘩したんだよね」

「うん」

「家が壊れたら、おじさんとおばさんくるだろうって言って」

「うん」

「あんちゃん、少年院に入っちゃったんだよね」

「うん」

「あの時が最後だっけ、顔合わせたの」

「……うん」

「よっし！じゃあ今日はあんちゃんとこ行こう！

あんちゃんとこ行って……明日学校だけどさ、一緒に寝よっか？」

「……うんっ」

■
■
■

それぞれの春休み最終日　その5

「ネカネさん！明日から大学つすけど準備何かは出来てますか？」

「はい、でもありがとうございます豪徳寺さん。」

私なんかの為に手間を取らせてしまって……」

「いえいえ！全然！寧ろどんどん言っちゃってください！」

「……ふふふつ、ありがとうございます」

「へへっ」

「……余所でやれ、コーヒーが甘くなる」

「はるかさん、今日は砂糖を入れたんですか？」

「……イヤ、何だ……大変だな、お前も」

「……ウッス」

「……」

「はるかさん、はるかさんは何か悩みごとですか？」

「ん、どうしてそう思う？」

「その……少し、雰囲気がいつもと違う様な気がしまして」

「便秘っすか？母ちゃんもそれでよく苦しんでるんすよ！

イイ薬があるんで俺もってkぶるごるっ！？」

「薫、女が欲しければとりあえず『デリカシー』という言葉の辞書で引き直せ」

「うつ……ウッス……」

「豪徳寺さんが悪いです！」

「……まあ何だ、ネカネ」

「はい」

「私も女、色々と思うところがあるんだよ」

「私でよければ相談に乗りますけど……」

「……フッ、そんなものはキスの一つでもして言っただな」

「あうっ」

■ ■ ■

それぞれの春休み最終日 その6

「だからぬわんで私に男が出来ないのよ!!」

「ウチが知る訳ないやろ。」

多分そやけども、アンタの敷居が高いんではおまへん？」

「高くないわよ！高けりゃこんな短いスカートなんてはかないわよ！」

「ほなそれがはしたないって、アンタと同年代の男は思っんではおまへんの。」

生徒には人気みたいやし……引っかけりゃエエんやない？」

「……生徒……放課後の教室……イイけど有望株がないわねえ」

「……そう言うところが、敷居が高くないってゆー話や」

「ああ、どこかに高身長で高学歴でイケメンで私の言う事何でも聞いてくれて、料理も出来て優しく、記念日の度にデートに連れて行ってくれてプレゼントを買ってくれて、あっちも凄い男の人いないかなあ」

「阿呆やろ、アンタ」

「うるさい！夢見たっていいじゃない！今年が最後の二十代なのよ！」

「やけど、隼人はんは渡さへんで」

「……どこがイイのよ、パツと見ヤクズ……じゃあないわね、うん、カッコイイわ」

「せやろ？」

「……うう……譲歩する……譲歩するから男が欲しいイイイイツ！」

「ほな神多羅木はんとかどうやろ？」

「ああ無い無い、アレはただの同僚。」

それに私みたいなバツ一、あっちからお払い箱でしょ？」

「……先は長いわ」

「おとこ……一人寝はもういやあ……ちなみに香坂くん、あつちの方はどうなの？」

「去勢したるか雌犬」

■ ■ ■

それぞれの春休み最終日 その7

「神多羅木……僕はっ、僕はっ！」

「……俺は、お前が悪いとは言わんさ」

「だがっ！」

「香坂は若い、若いからこそ真っ直ぐで熱い。

しかしお前の気持ちは、俺はわからんでも無い」

「だがっ、僕は裕奈……を……！」

「男は素直じゃない……大人になって親になれば、妻を亡くしていればなおさらだろうさ」

「……神多羅木……」

「……だが、男はいつまでたっても子供だ」

人サン？」

■ ■ ■

それぞれの春休み最終日 その9

「よう、エヴァ」

「……こんな夜更けに何の用だ？」

「イヤ……なんだ、悪いな。」

桜子と裕奈が泊りに来てさ、一緒に寝よってせがまれちゃってよ

「流石は淫行教師だな」

「ウルセーバカ」

「スラばつとチャチャゼロが身代わりか」

「まあな、つつても早く帰らねえとバレそうであレだがよ」

「……そんな危険まで犯して、私に何の用だ？」

「イヤ、何の用ってか……アレだ」

「何だ？」

「俺は、お前の事を長い付き合いだと思ってる」

「……ああ、そうだな」

「気の置けねえ友人として、仲良くやって来たと思ってる」

「……そうだな、お前はいい友だよ」

「だからさ……勝手に消えるなよ」

「何を言う、私は学園都市に縛られているんだ。」

逃げようと思っても、逃げる事など出来やしないさ」

「そうじゃねえよ」

「だつたらなんだ？」

「俺の……大事なヤツであるエヴァ自身を消すなって話だ」

「……意味がわからんが」

「ま、困ったことがあったら俺を頼れって事だわ！

「テムエの為ならたとえ火の中水の中だぜ？」

「そうか、ありがとう」

「おつ、オウ……何か調子狂うな」

「それより帰った方が良いんじゃないのか。」

「明日は早いんだろ？」

「……じゃな、明日遅れんなよ」

「ああ、おやすみ隼人先生」

「おやすみ、エヴァ」

「頼れ……か。

もしお前に全て話せて、泣きつけたらどれだけ楽だろうな……私は。

知ったら軽蔑するだろうか？

イヤ、そんな事はないだろうさ、そんな男じゃない。

ただ……私自身が……お前に向き合えなくなりそうだよ。

……なあ隼人、お前の眼に私はどう映っているんだ？

ただの友か？それとも……」

五十四匹目 百人いれば百人の幸福と不幸がある（後書き）

ついに次話より第二章『エヴァ編』突入です。

正直、デカイイベントだと思うんですが以外に流されたりする事も多いここはテンプレ通りのモノが多い気がします。

ですがぶっちゃけ自分はここが書きたかった。

ここを思うがままに書いてみたかった！

その為の布石は、微々たるものかもしれませんが打ちました。

次の更新は、少し遅くなるかもしれませんが一層気合を入れて執筆していきたいと思っております。

よろしければこれからもこの拙い作品に、お付き合いいただければ嬉しく思います。

五十五匹目 人生には『取捨選択』が付いて回る（前書き）

第二章開幕！

正直支離滅裂かもしれませんが、よろしければお付き合いください。

五十五匹目 人生には『取捨選択』が付いて回る

「さて、みんな改めて言う様な事ではないかもしれないが……このクラスの担任を引き続いてさせてもらう事になった『高畑・T・タカミチ』だ。

……と言っても前年と同じく出張なんかが多くて、いつも君たちと一緒に居られる訳ではないんだけどね。

何にせよよろしく頼むよ」

「『はい！』『』」

「そして彼も前年と同じく、僕のフォローをして貰う事になる『香坂隼人』先生だ。

君たちと触れ合う時間は、恐らく僕以上に多いモノになるから仲良くするように」

「テメエら……夜露死苦ウ！」

「『夜露死苦ウ！』『』」

「……ま、そんな心配はいらないみたいだね」

相変わらず元気なヤツらだわ。

クラスも変わらず担任も副担任も変わらず、迎えました新年度。まだまだガキなコイツらが、中学生生活の最高学年になるたあ……感

慨深いわ。

ま、何だかんだ言って俺も今年で教師三年目。
来年になってコイツらが卒業する時は、初めて生徒を見送るってな
形になる訳だしさ。

……うん、なんかこう……クルもんがあるねえ。

「じゃあこれから例年通り身体測定をするから、所定の場所に向かうように。」

身体測定カードを令、亜子くんが保健室から取って来てくれているからそれが終わる前に体操服に着替えておくように。

このクラスは身長と体重を計るのが最初だから、体育館向かって右の扉から入るんだよ」

「テメエらのんびりしてつと昼過ぎても帰れねえからな、パパッと済ませろよ。」

んじゃネギ、お前は教室の外で着替えて合流な」

一応ネギは男だからな。

ま、寮は女子寮だし、あーんま意味ねえ気がするが……まあ一応な。

て事で俺らは退室。

引率は保健委員って事になってつし、和泉が戻って来るのを待ったら職員室に戻るかね。

「お兄ちゃん、僕の背って伸びてるかな？」

イギリスに居た時はアーニヤの方がおっきかったんだけどね、でも何か今回は勝てそうな気がするんだ！」

「そだな。」

いっぱい飯食って、いっぱい運動したから大丈夫だろ」

身長の中で幼馴染と張り合う……か。

随分ガキっぽいじゃねえの、ネギよ。

ホント、昔のテメエを今のテメエが見たらびつくりするぜ？

ガチガチな昔とは違って……のびやかになったじゃねーの。

なんてかね、こう……兄貴分としてスゲー嬉しいわ。

だからこそ、絶対に守ってやりてえ。

ネギは『英雄の息子』。

『転生者』つっても、ただの魔物使いな俺とは比べ物になんねーほどの才能とかを持ってんのかもしれん。

実際問題、真也さんとの修行風景見た事あるがよ。

ガチでぶつかり合って俺勝てんの？つてな感じのまほーを使ってるからな。

もうすでに俺よかネギの方がつえーのかもしれねえ。

……でもよ。

「？どうしたの、お兄ちゃん？」

「ん、ちよつくらネギも遅しくなつたなあと思つてよ」

「……えへへっ、僕も頑張つてるもん」

笑つてるじゃねえか、ネギはこつやつて。

ホント十歳のガキらしく。

褒められた事を嬉しそうに、ちよつと照れくさそうに、でも自分のこれまでを誇つて。

そんなネギの、弟分の顔見ちまつたらよ。

意地があんだろ？

カツコ付けてえって……兄貴分にはさ。

ネギとアーニヤが麻帆良に来て、もう半年以上だ。

そろそろ、なんかデカいアクションがあつてもおかしくねえ。

いっちょ気合を入れなおさねえとな。

「先生ーっ！隼人先生！高畑先生！大変や！！」

つと、和泉か？

保健委員つて事で、始業式終わったそのまま保健室直行だったんだよな。

何かあつたみてえだが……随分と慌てた風じゃねえの。

「あゝ落ち着け、とりあえず何があつたか説明」

「はっはっ……ふう……うん。」

あんな隼人先生、まき絵がな」

「保健室で寝てたってか？」

「うん、そう……ってなんで知つとんのや!？」

「朝ね、保険医の先生から連絡があつたんだよ。」

『桜通りで倒れていた佐々木まき絵さんを保健室で寝かせてます』
「ってね」

一応担任と副担任ですから。

こんな感じの連絡はすぐ来るって話だ。

てか昨日の部活の後、行方知れずになってたんだから捜索隊が出る
つての。

朝になつたら見つかったからよかったんだがよ。

ま、昔とは違って麻帆良の治安はイイからな。

不良がタムろってるとか、デカい喧嘩が起きてるとか、そんなのは
ねえし。

あつたとしても麻帆良のだったら不良連中には顔が聞くからな、な
んとかなるさ。

この辺は昔取った杵柄ってヤツだわ。

後は……『魔法関係』。

その辺も、基本的にや大丈夫なんだがさ。

なんでもまほーつかいどもには『普通の人を巻き込むべからず』っ

てな風習が昔からあるんだと。
だったらウチのクラス連中を……やっぱ下らねえや。

で、だ……ああ、まほーつかいの話だったか。

基本は関わらせまいとするからな、侵入者撃退とかしてる場合は誰かしらが周囲を警戒してんだよ。

んで、パンピーが来たら危険じゃねえところ……まあ寮とかだな。
そこに誘導するって寸法よ。

佐々木の場合は前者。

少なくとも、俺や高畑先生やガンちゃんらにやそんな報告は入ってこなかった。

新田先生も普通に出張ってたし、単純に門限過ぎて帰ってこなかったって話だ。

勿論、外出届を出さねえでな。

「せやったんか……」

「恐らく部活後に溜まった疲労で、つい寝ちゃったんじゃないかなって話だよ」

「はい、保険の先生もそないな風にゆーとったから間違いないと思います」

「……まき絵さん、大丈夫でしょうか……」

んだ、随分と心配そうじゃねえの。

ちっちゃえ手、ギュッと握っちまってさ。

が……ダチを大事にするってお前の態度、俺は嬉しいぜ。

「ネギ、見舞いにも行くか？」

「へっ？イイの？」

「まあ俺はネギが着替えたの見届けたし、職員室に戻るつもりだったからな。」

待ってもイイんだが……」

『……アレ？アーニヤってなんでそんなに胸が真っ赤なの？』

『なっ、何でもないわよ』

『何でもない事ないにやゝ、病気とかだったら一大事じゃん！』

『イヤイヤ、それは無いわよ』

『シッシッシ……そうっすよねえ……なんたって昨日掃＼』ミソラ
アアッ！』 m9（ハハ）プギャー！』

『ボコすッ！』

『暴れてるんじゃないやありませんの！！』

「……まだまだかかりそうだしな」

「あはははっ……元気だねえ、みんな」

「……屋上に呼び出して、何の用だい隼人先生？」

「あんな、わかってんのに惚けてんじゃねえよ。」

血……俺のじゃ足りねえのか？週一は必ず吸ってんじゃねえか」

バレている……か。

まあ規格外のスラバウト、長年私の魔力を長年その身に受けて来たチャチャゼロが隼人の傍にはいるんだ。
バレない方が、どうかしてるさ。

「ケケケ、若サガ羨マシクナッタノ力？」

「……だからお前は私をなんだと思っているんだ」

「ロリババア」

「よし、そこに直れ」

一度、コイツは解体して脳みそを弄った方がイイのかもしれない。
今は少々微妙かもしれないが、昔は私が御主人であったというのに。

にしても、だ。

「……………」

「どうした、押し黙って？」

「イヤ……………」

眉をひん曲げて、強面とはいえっかくの精悍な顔が台無しだぞ？

「なあ、エヴァ」

「なんだ、隼人」

「俺の血に飽きちまったって事か？」

「まあな……毎度毎度同じものを吸っていれば、誰だって飽きは来るさ」

「……………そうか」

「安心しろ、お前のも飲んで欲しいなら飲んでやるさ……………淫行教師殿」

「バー口、んな事じゃなくってよ……………」

……………恐らく、お前は次の言葉で私を止めにかかるんだろうな。

「やめね？そーゆーのはさ」

何の為でも無い、ただ自分が気に食わないからと。
思い返せば……お前はいつもそうだった。

「血が飲みてえってんなら、俺が輸血パックでもどっから貰って来てやる」

私は、望んでこの身を変質させたわけではないとはいえ、『吸血鬼だ。』

人間がはびこる世界に、ポツンとある異端。

本当は、こんなとこに居る私が悪いのかもしれん……『バケモノ』である、私が。

「生きのイイもんが飲みてえってんなら、はるかでも鶴子でも政利でも薰でも、俺が頼んでやる」

だがそんな私を、お前は受け入れてくれたな。

私を私として、ただ自分がそうしたいからと言って。

私がこれまで歩んできた道のりを、すべてお前に話しても……変わらぬ態度で、接してくれた。

「だからさ……頼れや、俺を」

友達だと言って。

「何があんのかは知らねえ……けどエヴァは俺のダチだ……何があらうと、俺はエヴァの味方だからよ」

お前は、私の為に。

隼人……私はお前に会えて本当に幸せだった。
だからこそ、私はお前にお前でいてほしい。

お前を、私は失いたくない。

「そうか……だったら隼人……私に、構うな」

「……は？」

「安心しろ、この一件が終わったら……変わらぬ態度でお前に接してやるさ。」

私が私らしくお前と向き合うから、この一件に関して……何があっても、私に構うな」

『変わらぬ態度で』、か。

詭弁だな……そうやって接する姿の私など、想像もつかないよ。
私が、お前の大切な弟分と妹分に行おうとする事を想像しては……
な。

私は私の分を通して、これまで生き抜いてきた。

私の……『悪の信念』なんて、綺麗事なのかもしれないが、私が私らしく立っていられるように。

私の心に、一本大きな想いを通して。

私はどう足掻こうとも、『バケモノ』だ。

光の下に召され、地獄の業火で焼き尽くされるその瞬間まで私は『

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』以外の何者にもなれはしない。

私を私たらしめるのは、私が私であると思っていること以外にはありえない。

私が私、故に私は私で在れるのだと……そう、想う。

だが、これから私はそれを崩す。

子供を襲い、女を襲い……私は想いを大きく枉げる。

私の大切な物の為に、私がそれを失ったとしても、変わらぬそれがあつて欲しいから。

……でも、そんな事をしたら、私が私じゃなくなる様な気がするのさ。

自分自身が情けなくて、自分が自分らしくいられそうになくて。

私は……お前と正面から向かい合えそうにない。

私は私であると、お前に誇れる、私に誇れる私であると言えるような気がしない。

そうなれば、私は私ではなく、私の名を名乗るただの人形だ。

『バケモノ』の身体に『空っぽ』の心を押しこんだ。

だが……そうだとしても……たとえそうだったとしても。

「ぴ……ぎ」

「……ケケケ」

「エ……ヴァ……テメエ……泣い、て」

お前にはお前らしく立っていて欲しい……ずっと、ずっと……これから先、私がお前の傍に立てなくなったとしても。

フ……ム、『涙』とは……。

何年ぶりだ、泣くなどとは。

それに私の為ではなく、誰かの為になど……六百年前、家族を失つて以来ではないのか。

お前と会えて……もう十年と少しが経つか。

私の生きた六百年の人生の中では、微々たる時間……だが、何よりも、何よりも長い時間だった。

だがそれも、もう終わりだ。

私はやらねばならないことが出来た。

「……待てや」

……随分と、錆び付いた扉だな。

お前と会った時は、まだまだ新しかったというに、長い年月が……流れていたという事か。

成程、クククッ……不良少年が、教師になる訳か。

「待てや」

屋上、か。

思えば私の生活で、最も長くいた場所がここかもしれん。

退屈な授業を抜け出して、広い空をぼんやりと眺めて。

時折立ち上がり、周囲を見渡して、お前の姿を見つけようとして時折目をつむり、耳を澄まして、お前の音を捉えようとして。

「オイッ！エヴァー！」

排気音が耳に聞こえて来た時、正直私は……胸が高鳴ると言うヤツだった。

狭苦しく、隔絶された鳥籠からお前は連れ出してくれた。

触れてくれて、触れさせてくれて、お前のぬくもりを私にくれて。

「意味がわかんねえぞ……待てつつてんだろっが」

……嬉しかった。

私は本当に、嬉しかったんだ。

受け入れてくれて、私を私として、お前のお蔭で、お前らのお蔭で……。

笑えた。

『バケモノ』になって初めて。

本当の意味で、心の底から。

「俺は！エヴァがこれから何を起こそうとしてるのか知らねえ！だ
がんなもんどーだって構わねえ！！」

こつち向け、手え伸ばせ……『構うな』なんざ、寂しい事……言
ってんじゃねえよ」

……変わらん、お前は昔から。
だがそう言う問題ではない。

これは私の、生き様の問題だ……六百年、枉げて来なかった、誇り
の……問題なんだよ。

「……エヴァ」

隼人、なあ隼人。

多分私の行動は間違っているんだろう。

何度も、何度も、何度も想い続けても、間違いだと、私は私で自覚
できる。

お前の言うであろう、そうすべきであろう行動も、思い付いている。

「エヴァ」

……でもな、隼人。

私はお前と繋がりを持てて、嬉しかった。

『さあ食え！魔物使い香坂隼人さんがお前を引き連れてやんよ！！』

私はお前が心から必要としてくれて、嬉しかった。

「!!!」

「幸せだったぞ、
α γ ? π η
μ ο υ 」。

五十五匹目 人生には『取捨選択』が付いて回る（後書き）

……やりたい放題やっちゃいましたが、後悔はないです。
とにかく執筆頑張っていきます。

五十六匹目 納得できない道を選ぶことが人生の大半（前書き）

戦闘描写は難しい。

五十六匹目 納得できない道を選ぶことが人生の大半

試験管が宙を舞い、『氷の矢』が何もない空間から現れる。

迎撃するような『風の矢』がネギの手から現れて、『氷の矢』と衝突して。

耳に響く、轟音が。

突き抜けるように、私の頭の中に飛び込んでくる。

「エヴァンジェリンさん！どうしてー！！」

「この世には、いい魔法使いと悪い魔法使いがいると言う事だ。

それよりいいのか……そんなに悠長に話などして……？」

黒いマントで身体を覆った金髪の少女。

同じクラスの『エヴァンジェリン』……長いからエヴァでいいわね。そいつは……滑るように、夜の『桜通り』を飛んでる。

『魔法媒体』も何も持たなくて、事もなげに。

鋭い爪を光らせて、尖った犬歯を剥き出しにするみたいに笑って。

エヴァは、急にネギに向かって、ネギの目の前まで接近して。

ネギが捕まえようと思って手を伸ばしたら、ふわってネギの体が浮いて。

鈍い、音がして……ネギは、地面に倒れてた。

「ネギイツ！」

アスナが叫ぶ。

眼をおつきく開いて、ネギの下に駆け付けようと。

「行かせません」

でもそれを、『チャチャマル』が止める。

「退きなさいよっ！」

「申し訳ありませんが……」

アスナがチャチャマルを、殴りつけてネギの方に行こうとする。

でも、それを曲げた腕で受け止める。

そのままアスナのお腹を、蹴り飛ばした。

「かふっ！？」

「……通す訳には……」

「クラスメイトにその暴拳、許すわけには参りません！！」

伸ばしたままだったチャチャマルの脚を、アヤカが掴む。

地面を這うように、走るアヤカの脚。

チャチャマルの軸足を狩り取ろうと、進ませたそれは、途中で止ま
つて……。

「ガッ！？」

「行きません」

踵から、グワツて急激に持ち上がった脚が、アヤカの肩口を蹴り飛ばした。

そして、チャチャマルの肘がアヤカのわき腹にめり込んだの。

「マスターの、命令ですので」

地面を、ごろごろ転がって。

アスナとアヤカは痛そうにお腹と、わき腹を抑える。

「……アハハツ……これでも私って、結構強いと思ってたんだけどね」

「貴女はともかくとも、私までもイイようにとは……情けない、限りですわね」

「いえ、お二人とも私の想像以上です」

「バカにされてんのよね、コレって」

「そう言う……意味では」

フラフラって、立つ二人をチャチャマルは機械みたいな、何にも無い眼で見てる。

じっと、何も映してない、人形の眼で。

声も……平坦ね。

夜の桜通り。

月と星と、道の脇にある街燈だけが照らす世界。

そこで私は、ぼんやりと目の前の光景を見てる。

ネギが今日の朝、『まき絵さんに変な魔力が付いてる』……なんて言い出すから。

『魔法使いが悪い事をしたのかも』とか言い出して。

アスナとアヤカはそんなネギの言葉を聞いて、無茶しちやいけないからって付いていった。

私も、どーせ弱虫無き虫のネギが喚いたら鬱陶しいからね。

協力くらいはしてあげよっかなーって、夜になって、ご飯食べて、寮を抜け出してた三人をこっそり追いかけたの。

『魔法戦闘』は、メルディアナでも麻帆良でも、訓練としてやったことはある。

でもそれは、あくまで訓練。

こっちに来て、ヘゼル先生とかと訓練もしたけど、やっぱり訓練は訓練。

「ラス・テル マ・スキル マギステル」！

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

「ウンデキム・スピリトゥス・ルーキスコエウンデース 光の精霊11柱 集い来たりて」へむにゆっ!？」

「ぼーや、少々指南してやろう。」

対魔法使い戦闘における鉄則は、とりあえず口を開かせない事だ」

何もないところで急にネギが転んだ。

地面に叩きつけられて、そこから何とか起き上がってバツて飛びのいて。

背中に亀裂の入った服のままで、ネギは詠唱しようとしてたのに、それを潰して。

「セブテンデキム・スピリトゥス・ルーキスラス・テル m」コエウンデース 氷の精霊17頭 集い来たりて イニミクム・敵を切り裂け コンキダント魔法の射手 サギタ・マギカ連弾 セリエス氷の17矢」グラキアーリス「ふえええええっ!？」

「後は、速さだよ……ぼーや」

十七の、『氷の矢』がネギの下に迫って……突き刺さった。
『魔法障壁』を、ネギは張ってるはず……だけど。

バツクリ、ネギの腕が切れて……血が、ダクダク出た。

「あああ……あああううあっ!！」

「ネギイイツ!……どけて……言っでんしょうがああっ!！」

捻挫は、した事ある。

腕が切れちゃったことも、訓練の中である。
でも……私……。

「……煩わしいぞ、ガキが」

「こはっ!？」

「ネギさん!!」

「……驚嘆に値する、パワーです……神楽坂さん」

「あああああああああああああつ!!」

切れた腕を蹴り飛ばして、ネギは痛そうに涙をこぼしてる。

ネギの赤い血が、どんどん辺りに染みわたって、小さな……水たまりができて。

……知らない。

知らないわよ、何なのよアレ。

何でこんな殺し合いになるのよ!

私は強くなりたいって思ったわよ!

でもこんな事……こんな事になるなんて……考えもしなかった!!

死んじゃう……ネギが死んじゃう……ダメ……助け……ないと……。

エヴァから、エヴァから……エヴァンジェリン……から……『エヴ

アン……ジェリン』……？

……え？

嘘？だって、ネギのお父さんが……だって、倒したんじゃ……。

ダーク・エヴァンジェル
『闇の福音』……賞金首……本物の、大悪党……『悪の魔法使い』……。

違う！違うわ！！

そんなはずない！そんなはずないの！！

だから、でも、助けな、きや。

「がふっ！？」

ネギを。

「ギャツツ！？」

アスナを。

「こっ……はっ……！」

アヤカを。

……けど、本物だったらドウスルノ？

逃げなきゃ。

逃げなきゃ。

……私、一人でも。

日付が変わるまであと数時間。

空を塗りつぶした夜の下で、私は昨日と同じように女子生徒を襲っていた。

麻帆良学園女子中等部2 - Aの、私のクラスメイトを。

アイツの、教え子を。

理由は簡単だ。

『誘い出す為』。

私をこの地に縛り付けた『英雄』、その遺児を。

バカみたいな巨大な魔力頼みの力尽くの術式で、私はこの地を離れ

ることが出来なくなった。

『封印破壊』の魔法でも、私が集めていた魔法具でも、それを打ち崩すことは出来なかった。

『私は憎んでいる』。

『更生させようと、寛大な処置を行った英雄を逆恨みしている』。

『その英雄の息子が運よく同じ土地を踏むことになった為、その少年の血を吸おうとしている』。

『血を少年が枯れ果てるまで吸い、同質の魔力で英雄のかけた封印魔法を破壊しようとしている』。

……そう言う、設定だ。

案の定……少年らしく、『正義の魔法使い』らしく、残して置いた魔力を嗅ぎつけ『英雄の息子』は私の目の前に現れた。

『何故、クラスメイトを襲う様な事をするんですか？』と。

その『英雄の息子』は今、従者候補か？

ウチのクラスの委員長とバカ筆頭を引き連れやってきた。

尤も身体を魔法と、私の従者である『絡操茶々丸』によって痛めつけられ、心を圧倒的戦力差を目の前にした絶望感で叩き伏せられ。三人並んで地面にへばり付いているが。

……程いい時間か。

そろそろ『魔法』には関わっていない広域指導員の誰かが、この辺

りを通るはずだ。

昨日の夜は『不審者』が現れ、『生徒に危害を加えたかもしれない』からな。

こちらを睨みつける女、『神楽坂明日菜』を一瞥し、マントに魔力を込める。

そう射殺さんばかりのモノを投げつけずとも良いだろう？

随分と……貴様は過保護だな。

「……待つて……ください……」

腕を切り裂かれ血を流しながらも、その加害者に言葉を投げかけるとは。

度胸がある。

もっと、見た目通りの小動物の様な男だと思っていたが。

……嗚呼そうか、お前はアイツの……。

「……エヴァンジェリンさん……貴女はそんな人じゃっ、ないはずです」

「クククッ、どうしてそう言える？」

私のナニを、貴様が知っている？

そこに居る二人から耳打ちでもされたのか？『彼女はすごくいい人です』と？」

有り得ないさ。

「有り得ないんだよ、そんな事。

これまで私はその二人と、関わった事などほとんどない……その二人に限らず、な。

委員長の業務が何かで私と話した事でも伝えられたか？

猫を被っていたらどうする？

『悪い魔法使い』だと自ら認める私が、貴様ら如きに本音を見せて話すとても？

貴様の想いで、そこから生み出した枠組みで、私を縛り決めつけるな。

世の中には貴様の想像もつかない様な事をし、反吐が出る様な事を考える存在もいると言う事だ」

……下らん。

「いいではないか、貴様らは『正義』で、私は『悪』だ。

いたいけな少年少女を痛めつけ、血を吸おうとした私は『バケモノ』だ。

それでいいだろう？何か不満でもあると言うのか？」

「でもっ、そんな……僕にはっ……！」

「ああ成程、その程度の怪我を負わされたからと言って、ぼーやは

人を『悪』と断ずることが出来ないという事か。

クククツ、大した『偽善者』だな……イヤ、『正義漢』とでも言おうか。

ではこれならどうだ？私は麻帆良に居るのはだな、ぼーや……貴様の親父殿に封印されたからだ」

「……えっ？」

驚いた顔をしている。

乗り出さんばかりに身を乗り出して、私を見つめている。

……貴様も歪だな、『英雄の息子』よ。

「私の名前は『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』……
ダーク・エヴァンジェル
闇の福音』と言った方が解りやすいか？

六百万ドルの賞金を掛けられた、『悪の魔法使い』の代名詞だ。

人を殺し、人を殺し、人を殺し、人を殺し、人を殺し尽くした、
な。

男も、女も、子供も、老人も、赤子もすべてすべて凍らせ砕き切り裂き殴り潰し絞め枯らしてやったさ。

そんな私を『イイ人』……クククツ！戯言だ！妄言だ！クソみたいな言葉だ！！

恐怖で頭でも狂ったか？ハーツハツハツハツハ！それまた一興！！

「ぼーや！それで私を笑わせることができたなら、眷属にでもして一生玩具として飼ってやってm」……随分と、饒舌ですわね」……何が、言いたい……雪広あやか……？」

茶々丸との戦闘で痛めつけられ、私に睨みつけられて腰が引けて。それでも尚、向かうように口を開くとは。

……心の強い女だ、隣の女と併せてな。

「私はただっ、私の……意見を言っただけですが？」

「そうか、なら貴様はその程度の器という事だ。

目の前の存在の本質も見抜けぬ、矮小な人物という事だよ。

精々己の小ささを知」「あやかさんの、言うとおりです」……貴様もか、ぼーや……」

「だってエヴァンジェリンさんは……お兄ちゃんと、楽しそうにお話してたじゃないですか」

……なに？

「大丈夫ですエヴァンジェリンさん！どんなことがあつたって僕が何とかしてみせます！」

……コイツは、何を……言っている？

「エヴァさんは……悪い事をしたのだって、吸血鬼なのかもしれないけど、自分がやりたくてやったかはわからないですし、僕はそれでもいい人だと思います……！」

『へえ、スゲエな』

……何を……何を……何を……何を……何を……何を……何を……。

「……まれ……」

「その程度、僕は気にしたりなんかしません！」

『てか吸血鬼なんだろう？だったらホレ』

何を、知っている？

貴様如きが、私の何を知っている？

何故貴様が、そんな事を言える？

「……………黙れ……………」

「クラスメイトなんですから！僕とエヴァンジェリンさんは……………きつと友達です！」

『食ったら俺の仲間になるんだわ！』

何のせいで、私はアイツの前に顔を出せなくなっている？
貴様さえ来なければ、私は平和だったというのに。
何も起こりはしなかったというのに。

私が、私が、何故……………このような……………事になった……………と……………。

「黙れ」

誰のつ……………誰のせいで、私は……………。

「大切なのは昔じゃなくて今です！だから……………全部任せて僕の背中に付いて来て下さい！」

『さあ食え！魔物使い香坂隼人さんがお前を引き連れてやんよ！！』

ぼーやは口を開く。

奪われる事になった。

『因果応報』、『自業自得』、それだけの話。

だがやはり、誰もが我が儘だ。

己の身に降りかかれば、それを『理不尽』だと声を上げる。

やっぱり、私は……誰とも同じように、奪われると言う結果に至った事が許せなくて……。

懷に忍ばせていた『魔法薬』。

それを全て媒介にし、私は声高らかに叫んだ。

『私は悪くない』と、『お前のせいだ』と、駄々っ子のように。

吹きすさぶ『闇の吹雪』は、目の前の空間を抉り喰らうように突き進む。

幼い少年と、それを庇う少女二人に牙を突き立てんと。

理性の戻った私の瞼の裏。

濡れた視界の奥、熱い脳裏の中。

そこに最初に現れたのは、真紅の髪と朱い瞳の、不格好に笑う強面

の大男だった。

五十六匹目 納得できない道を選ぶことが人生の大半（後書き）

……戦闘描写あ……。

五十七匹目 立場によって『正しいモノ』は違う(前書き)

力続く限り連投。

五十七匹目 立場によって『正しいモノ』は違う

最初は、ただ煩わしかった。

人の気持ちを考えず、げらげら笑うその顔が癢に障った。

次に、無茶なヤツだと感じた。

女の為に不良になり、女の為に喧嘩に明け暮れ、その方向性は間違えているのかもしれないが、想いは目を見張るモノだと想った。

親しくなり、変わったヤツだと想った。

一人でいて、一人でいて、ずっと一人の私に、好んで関わろうとしてくるのは頭がおかしいと眼に映った。

段々と、アイツを心待ちにしている自分がいる事に気付いた。

私の隣、汚い屋上で大の字で大口を空けて眠るその顔は、情けなくも……無性に、嬉しかった。

魔物を連れてきたアイツから、私は身を隠そうと必死になった。

知られてしまったら、知っていたら、『バケモノ』だと言われるような気がして、私はアイツに会いたくなかった。

時が経ち、私は酷く怖かった。

すべてを知っても態度を変えないアイツも、もう少し経てば私のす

べてを忘れ去ってしまう事に気付いて、私はただ……恐かった。

私は、嬉しかった。

変わらなかった。

時が経っても、アイツは全く変わらなかった。

高等部に進学しても、魔法に関わっても、女と別れても、大学に進学しても、教師になっても、あの二人を弟分と妹分にしても、ヨリを戻しても、何があっても。

私はアイツがいて、ただ……嬉しかったんだ。

護ろうと、手を伸ばす。

「動くな、茶々丸」

持ち上げようとした腕は、動きを止める。
私の主人、マスターの命令により。

拳大の意志が、マスターの額に当たる。

赤い血が、私には流れていない赤い血が、タラリと落ちる。

「…………『バケモノ』が」

「貴様つ、ネギ少年が重傷を負っていたらどうするつもりだったのだ！！」

「これだから『異形』はっ！！」

マスターの御住居、ログハウスの前に多くの人が立っています。皆が皆、『魔力』や『気』を用いた『超常的力』を身につけた方々。『裏世界』に関わっている人々です。

私には、『感情』なるモノがプログラミングされておりません。ただ『データ』に含まれているそれとして、今目の前の方々の感情を表すとすれば。

恐らく『何か汚物を見る様な』、『蔑んだ』視線。

そう、言っのがよろしいのでしょうか。

「…………フン」

「何が、おかしい」

「……………」

「何かおかしいと聞いているんだ！！」

『気』を用いた、『十手使い』だったでしょうか？

代々『悪を取り締まる稼業』に就いている警備員の方が、マスターの襟元をぐいと掴みあげました。

マスターの身体は、『吸血鬼』になった10歳の時と変わらぬ小さなまま。

対する『十手使い』の方は瘦躯ではありますが背は高く、マスターの身体は宙に軽々浮いております。

『血走った様な』眼で、マスターを睨んでいます。

「……自分の立場を、わかっているのか？」

「……ククク……『未来の英雄候補』に取り入り、下手に出てばーやの残りカスを拾おうと這い蹲る貴様らが、私に何w「黙れ『バケモノ』が！」「……凶星を突かれた程度で猛るな、童」

鋼で出来た十手が、マスターの頭を砕かんと振り下ろされました。

『気』を纏わされ、岩さえ易々砕くそれは。

「何をすr「アンタねえ……調子のもてんじゃないわよ」……ぐっ」

ガチンと、鼻先で動きを止めています。
間に挟まれた、一本の『槍』によって。

につこりと、笑い深く『麻帆良学園随一の武闘派魔法教師』は『十手使い』の顔を覗き込みます。

黄金律のように整った顔がグニヤリと歪み。

その顔は……何と表現したら良いのでしょうか？

心臓部の動力機関の辺りが、『冷却水を無理矢理流し込まれた時のようにひんやりと冷えているような』、そんな状態に陥っています。

警戒音が『聴覚パーツ』に響きます。

前方に展開されている視界は赤く染まり、『caution』の文

字が大きく表示されています。

『戦闘力に酷い開きがある』と、『最低足止め秒数が15秒を下回る』と。

『現在のマスターを逃がれさせることのできる確率……5・9%』と。

ヘゼル教諭は、クイと腕を持ち上げます。

それだけで有らん限りに力を込めていた『十手使い』の敵意は軽々持ち上げられて。

鋭い切っ先が、喉の皮をなぞっていました。

「エヴァちゃんのゆーとーり。

私たちが、彼を『英雄』にしようと画策してる訳じゃない？

ホントの事言われたからって、いちいち反応しなあい……お姉さん、怒っちゃうわよ？」

ヘゼル教諭は男性です。

『ニューハーフ』というヤツです。

では、仕切り直させていただきます。

煙が、上がります。

『嗅覚センサー』に、『焦げた二オイ有り』との報告が飛び込んできます。

『十手使い』の首元は、『燃える煙草の先端を押しつけた布製品のように』黒く、小さく焦げ付いていました。

「ひが」喚くんじやないわよ……私、自分の立場をわきまえていない人間って大っきらいなの……」かつ……ぎつ、が……っ……」

「ふむう、すまないねえへゼルくん……私たちの行っていることは確かに褒められたことではないからねえ。」

だがあ！時が経てば誰もが言うだろう！彼の息子を『正しき英雄』にする為に！敢えて汚名を被り、泥水を啜った、『真の英雄』たちがいる事をねえ！！

我々は礎となろう！『英雄』の為の道にい！！

我々にしかあ……『正しき意志と力』を持った我々にしか出来ない事だあ！！」

意志は轟音となり、張り巡らされた『音声遮断魔法』を『突き崩すかの如く』膨れ上がります。

皆が皆、拳を握り、『爛々と燃えるような』瞳で空を見上げて。

「……………」

「その為にも、君の協力が必要なんだよ……MS・マクダウェル」

「随分とした、御高説だな」

「理解できないかあ？それはそうだとも、我々の高尚な想いが、君如きに理解できて貰えるなどとは思っていないからねえ。」

選ばれた存在だけえ……真に世界を憂う者にしか、この想いは理解できないさあ」

クツクツと、坂上教諭は笑います。

年に伴い出て来た頬の皺を、更に深くして。

推察するに、ポマードで横にがちりと固めた、少し後退した髪を撫でながら。

「だが安心したまえ……君もその道になることが出来るのだからあ、なあ……」。

彼の踏み台となり、さすがというべきか早速出来ていた従者との絆を深めさせる、それが君の役目だよあ。

心配せずとも良い……死なくても、構わないさあ。

一生この地に縛り付けられ、代々と未来有る若者が『英雄』になる為の足掛かりになりたまえよあ」

「……………」

「おお怖い、反抗的な目だねえ。

構わないよ、抗ってくれてもあ。

ただ……人が、人を殺すのに、直接的に強い力なんて必要ないんだよあ。

君は、あの青い魔物と元従者に何か期待をしているのかもしれないがあ……その存在は、四六時中どんな状況下に於いても彼を護り

きれるのかなあ？」

更に笑み深く、坂上教諭はマスターの傍へと進んでいきます。笑い顔は……『瘴気漂う』というべきか、大凡普通の人が見れば『不快感が体中を駆け廻るような』。そんな印象を、恐らく抱かせるものであると思われます。

「例え彼らが私たちを紙切れのように屠ることのできる存在だったとしても、私たちには関係ない。

第一その主人は……ふくくくくつ、『少々『気』を扱える不良教師』だ……あの二人を引き剥がせばどうとでもなるのさあ。

遠距離から、ライフルが何かで狙撃すると言うのもイイねえ。

彼の住居の扉が何かに、爆弾でもしかけてみようかあ。

それとも手っ取り早く、職員室の机にするかい……爆破範囲の広いヤツを？

無難に、人質でも取ろうか……親しい人間の多いというのは、本当に羨ましい限りだよお！」

「……どこまでも……貴様は……」

「当たり前だろう？」

私たち人間は、君のような『バケモノ』とは違って非力なのさあ。戦力を削ぎ、陰に紛れて、気付かれない様な遠方より、出来るだ

け痕跡を残さず……行動を、達成するう。

基本だろう、M s・マクダウエル……力の強いとわかっている相手と事を構える時に、真正面からぶつかるなどとは……自殺願望のあるバカのやる事なのさあ。

私の考えは、間違っているかなあ……大魔法使い殿う……？」

「『大魔法使い』等と、呼ぶな……。

間違つてはいないさ、坂上教諭……貴様はどこまでも正しく、どこまでも人らしく……どこまでも、下種だ」

「褒め言葉として受け取るがねえ？」

「……褒めて、いるさ」

「嬉しい限りだよ……そうやって神から与えられた『知識』と『知能』を駆使して、人は闇を切り裂き、君たち『バケモノ』と駆逐してきたのだからあ。

先人たちはそうやって、『地球』という星に覇を唱える存在までに上り詰めたのだからねえ。

……ではそこまで解っているならばM s・マクダウエル、あんな事をしてはいけないよあ……つい、私の口が、指が、軽くなつてしまっからあ」

「……解って、いるぞ」

「聡明で何よりだよお。」

さて、ではそろそろ御暇でしょうか……このような時間まで女子生徒の自宅近辺に居ると言うのは、ふくくくくくつ、教師としてあるまじき行為だからねえ」

そう言うと、坂上教諭は『裏世界の住人』たちを引き連れて踵を返しました。

最後にもう一度だけ、『汚水のような』笑顔をマスターに投げかけて。

「念の為に言っておくが相談なんて、誰かに頼るなんて、しない方がイイよお……ねえ、MS・マクダウエル？」

……あの時、マスターは『闇^{ニウイス・テンベスター・オブスクランス}の吹雪』と呼ばれる魔法をネギさんたちに放ちました。

しかし現実問題、理由は解りませんが、思考回路で何度も何度もシミュレーションをしても『あり得ない』との結果に至りました。

『ネギさんにも、神楽坂さんにも、雪広さんにも、外相が無くまるでそこだけ魔法が四散したかのように、彼らの伏せっていたところは無事でした』。

データベースを検索し、ヒットした対象は僅かに一つ。

これが本当に真実なら、ネギさんは確実に『英雄』となるでしょう。そして……彼女も、また。

ログハウスの中、マスターの寝室の前。
扉を隔てて私は立ちます。

声押し殺す、マスターの声。

『完全魔法無効化能力』。

『黄昏の姫御子』に従えた『英雄』に、マスターは、食物にされる
のでしょうか。

わかりません。

私は、わかりません。

私は、マスターの従者。

そうなる為に、生まれた存在。

私は何のために、どのように、私は、行動すれば……良いのでしょうか。

わかりません。

私は。

ただこの……『動力部が締め付けられるような感覚』は……好ましく、ありません。

「……隼人……」

口から零れる、私の気持ち。

「隼……人」

瞳から零れる、私の気持ち。

「……はやとお」

小さな手で、ベッドのシーツを握りしめて。

「……くそっ……！」

現れたのは、負け犬の恨み。

「わたし……はっ……わたし……」

強さは虚構で、想いは捻じ曲げられ。

「……うえ……っ……」

自分の罪と弱さを、刻みつけられていた。

五十七匹目 立場によって『正しいモノ』は違う（後書き）

ひたすら連投……しかし、残段数残り……。――

五十八匹目 心配してても意外に大丈夫な事もしばしば（前書き）

新しい展開を想いついてしまっ
て急いで書き上げたのでかなり荒い
……。

五十八匹目 心配してても意外に大丈夫な事もしばしば

私の席の斜め前。

今日のアーニヤは落ち込んでる。

隣のネギくんも少し。

でも彼は神楽坂と委員長に授業が始まる瞬間まで一緒に話してた。何だか、こう……彼を励ますように？
イヤ、ちよつと違うか。

なにはともあれ彼は二人に任せておけば大丈夫っぽい。
問題はアーニヤ。

ネギくんが話しかけても、反応がまるで薄い。
絶対に何かあった。

最初は喧嘩？と思ったんだけど、それとは少し。
ネギくんとは逆隣の、桜咲も心配してるみたいだ。

……そう言えば、桜咲と話したのはアーニヤが来てからだ。
人を避けてるみたいだったし。
無理に仲良くなるうとは思わなかったから。

近衛と幼馴染らしい。

この春休み、二人を引き合わせて知った事なんだけど。
終始桜咲は縮こまってたけど、嬉しそうだったね。

それはともかく置いておこう。

今はアーニヤ。

あの子があんな風に、落ち込んでいるって言うのはどうもらしくない。

妙な感じで、クラス内の空気も重い……かな。

裕奈と桜子、和美に美空が話しかけても反応は薄かったし。

……うん、少し心配だ。

ただ何かに悩んでいるなら、私はそれでいいと思う。

色々悩んで、悶えて、自分で真剣に考える事はすごく重要だから。でも、何か黒いモノがアーニヤの中に生れてて、それを一人で抱え込もうとしてるなら……どうかと私は思う。

力になれるなら、なれなくても傍に居るくらいは、してあげたいって思う。

……どうしようか？

プールに誘ってみようか。

水に浮いてれば、色々とスツキリ出来る。

それとも美味しい物を食べに行く？

食べたなら幸せな気分になれる。

心が満たされたら、色々見えてくるかもしれない。

もしくは……って村上？

紙？送られてきたのか。

……成程、私だけじゃなくてみんなそんな気分か。

アーニヤとネギくんを誘って、『二人を元気づける会』を開くみたいだ。

私も、勿論参加。

アーニヤは可愛い。

アーニヤを見てると、私も元気な気分になれる。
出来るなら、いつも笑ってるなんて事は無理だと思うけど。
らしい姿を早く、見せて欲しいと思う。

その為に、お姉さんらしくちょっと頑張ってみよう。

ネギに会って数ヶ月。

私は少し前、『魔法』ってものを知ったの。

『魔法使い』なんて、お話の中だけの存在だと思ってたんだけどね。
。

実際いるんだし、ホント……良くわかんない。

ま、私にとっては知らない事が世界にはいっぱいあるんだーって感じかな？

あやかに言ったら『バカで羨ましいです』だってさ。
バカで悪かったわね。

ウジウジなんか考えんのは苦手なのよ。

考えたってわかんないんだったらそうなんだで済ませる。
んで、私は私の出来る事をする、それだけ。

そっちの方が私は好きだし、楽だし、私らしいと思うもん。

眼鏡でもかけて、ガリガリ勉強だーなんて絶対イヤ。

とにかく、私はそんな感じ。

だから昨日も、『何か悪い事が起きてるかもしれない』って言うネ
ギに付き合っ^てて寮を抜け出して。

夜中の桜通りで……私は、『魔法の戦い』ってものを初めて経験し
た。

喧嘩はさ、やったことあるわ。

隣にいるあやかとだけ。

殴って、蹴って、投げて、殴られて、蹴られて、投げられて。

……ん、まあ女子中学生のやるもんじゃないわよね。

でも、私はバカだけど運動は得意だし、力は結構あるつもりだし、
それなりに強いって思ってたのよね。

『雪広流柔術』だっけ？

『武道』習ってるあやかと、まともに喧嘩できる訳だしさ。

でも、昨日は二人掛りだったんだけど、ボコボコにされた。

制服で今は隠れてるけど、お腹の辺りはちょっと青くなってたし。
打撲ってヤツかしらね。

手も足も、でなかった。

二人で、クラスメイト一人相手に。

ネギは同級生の男。

ネギは10歳の弟分。

年下の、ガキンチョな友達。

私って粗野で乱暴なところもあるのかもしれないけどさ、結構優しいつもりなの。

だから友達が喧嘩売られて、黙ってられるような私じゃない。

『魔法薬』で私の打撲も、あやかの擦り傷も、ネギの切り傷も、治っちゃったんだけど。

でも、ガキ相手にあんなことしてきたのが、単純に許せない。

最後、『エヴァちゃんが泣いてた』ってネギは言ってたけどそんな関係ない。

私は物事全部を見渡せるくらいに大人じゃない。

自分の仲良しを傷付けられて、私たちのせいでエヴァちゃんは怒ったのかもしれないけど、だからって私たちが悪くてエヴァちゃんが悪くないなんて言えない。

だから、私はネギの肩を持つ。

ネギはガキでバカだから『エヴァンジェリンさんも、何か悩んでいる事があるんです』なんて言ってた。

これから何でエヴァちゃんがそんな事をしたのか聞くんだけど、それでも私は……じゃなくて、私とあやはネギの味方になる。

もし今度、昨日と同じみたいにエヴァちゃんが喧嘩を売って来たら、

私は絶対エヴァちゃんを殴る。

エヴァちゃんが『悪い魔法使い』だからじゃなくて、私がム力つくから。

友達傷つけられて、一方的な意見押し付けてんのかも知らないけど、差し出したネギの手を叩き落としたのが気に食わないから。

屋上。

今日授業に一つも出てなかったし、いるとしたらココ。

あやかが偶に呼び戻しに行くんだってさ。

目の前、長い金髪を揺らしながら、お人形さんみたいに整った顔のエヴァちゃんがいる。

金網にもたれかかって、外を見ていた顔をこっちに向けて。エヴァちゃんはゆっくり、だるそうに口を開いたの。

「……何の用だ？」

「何の用だって……アンタ！昨日何したか覚えてんの……！」

「ん？……ああ、そう言えば猿三匹ばかりと遊んでやったか」

コイツ、つう……！

「お待ちなさい、アスナさん」

捻上げてやろうって、踏み込もうとしたところをあやかに止められて。

あやかはジッと、エヴァちゃんと睨みあう。

「貴女の事情は、私には関係ありません。

クラス委員長として、貴女の事も加味して考えなければならぬのでしようが……それでも、幼い子に手を上げると言う事は、断じて許される事ではありませんもの。

徒党を組み、ネギさんに貴女がこれ以上危険を及ぼそうとすると言うならば……」

「私たちが許さない……か。

下らん、好きにしろ」

ギシッて金網に体重をかけて、ぴよんって飛んでこっちに向かって歩きだしてくる。

「神楽坂明日菜、雪広あやか、貴様らは正しい。

集団の中、揉め事が起きて立場的に弱い者を、親しい者を護ろうとするのは真つ当な姿だ。

貴様ら二人にとってそれは私では無くあのガキ、ならばそのように護ればイイ。

客観的に見たとしても、『悪』は間違いなく私なのだからな」

……なんか、ムカつく。

『悪』、『悪』って、そりゃエヴァちゃんの事はムカつくけど。でもなんか……変な感じで、イラつくわね。

「そんな貴様らに助言をやろう。」

私は満月の晩でしか、昨日の様な『魔力』を扱う存在になる事は出来ない。

アイツの親父に封印されて、力を根こそぎ奪い取られているからな。

故に、私があのかきを襲うとしたら次の満月の晩……それまでに、私のしよつ引こうとするか、倒す算段を立てるか……ガキを捧げる準備でもしていることだ」

エヴァちゃんは、ゆっくり歩いていく。

私とあやかの間を通り抜けるみたいに。

「忠告しておこう。」

あのかきに加担したそのまま、『私を救う』などと下らん考えを抱かない事だ。

貴様ら如きが背負える程度の軽い人生を、私は歩んでいないんだよ」

「ハン！んな下んない事しないわよ！

ガキに手え上げたアンタが間違ってるって！私らが必ず教え込んでやるわ！」

クルってこっち向いて、エヴァちゃんはニヤリって口元を吊り上げ

た。

私がこれからやろうとしてる事は間違ってるのかも知らない。
でもエヴァちゃんも絶対間違ってるもん。
んで、私がム力つくから。

「ぶっ飛ばすッ！」

「……クククッ、やってm「なーにがやってみるだバーロー」……」

「喧嘩の算段か、テメエら？」

「そうです！」

「そうですって、アスナさん」

だってホントの事じゃん！

『魔法』の事を隼人先生は知ってる訳だし！だって嘘ついたって
仕方ないし！

……アレ？でもなんで隼人先生ここに居んの？

「喧嘩か……うん、テメエら、大いにやっつけ」

「……教師として、その意見はどうかと思いますが」

「イイんだよ、雪広。」

ガキの頃にやって、加減やらなんやら覚えとかねえと大人になっ
て危ねえしな」

相変わらずの、無茶苦茶な意見よね。

まあどっちにしたってエヴァちゃんはブツ飛ばすから問題無し！！

「つてか隼人先生は何しに屋上？」

「ああ、俺は……」

そう言ったら、隼人先生はエヴァちゃんの方をじっと見つめた。

視線から身体を背けるみたいに、エヴァちゃんは、屋上の扉の前に立つ隼人先生の隣を抜けようと、足を進めたの。

「エヴァ、俺は昨日考えたんだよ、色々な。

んで構うなっつーんだったら、大体事情はわかったが、俺はテーマに構まわねえ。

ただ一つだけよ……言いたい事があんだわ」

相変わらず仲よさげだけど……なんかあったのかしらね？

ネギに襲いかかった事を知ったとか？

まあ隼人先生怒りそうだもんね。

「……………」

語りかける隼人先生を、無視してエヴァちゃんは脇を抜けようとする。

抜けようと一歩踏み出して……エヴァちゃんが、きりもみ回転しながらぶっ飛んだ。

……アレ？

「ケーーーーッケケケケケケケケケケケ！！」

「ぴっぴぴっぴぴっぴぎー！！」

殴った？

振り抜いてるし、拳。

アレ？ヤバくない？

「きさつ、ま隼も「エヴァ……一つ言っとしてやんよ！」何様だ貴様は！！」

ギリリって、石でも鉄でも穴があきそうな目で見るエヴァちゃんに、隼人先生は堂々言い放った。

隼人先生は、他の先生とはちょっと違う。

ネギが『お兄ちゃん、お兄ちゃん』って慕う、『カッコいいんです』って言う気持ちもわからなくないかも。

あと、『私を救うな』って言った意味も。

エヴァちゃんはエヴァちゃんて悩んでる事を、ネギでも私でもあやかでも無くって、助けて欲しい人がいたんだ。

「見縊ってんじゃねえよエヴァアツ！！」

何を悩んで構うななんざ言ってるのかしらねえが俺にやあ関係ねえ！！

テメエのこれまで全部丸まま俺の背中に乗っかれや！！」

エヴァちゃんの好きな人が、さ。

「俺はデメエに心配されるほど……弱っちくねえんだよ!!」

五十八匹目 心配してても意外に大丈夫な事もしばしば（後書き）

また少し経って見直して、修正もしたりなんかしてみます。

五十九匹目 知ってる相手だからこそ粗が目につく（前書き）

ただ書いてみたい展開に持っていく為に書いている現状。
しかし中々上手く文章にならない。

五十九匹目 知ってる相手だからこそ粗が目につく

……ヤベー。

一時のテンションにかまけてぶん殴っちまった。

俺、教師。

エヴァ、担当生徒。

……ヤベーぞオイ。

ヤバイヤバイヤバいつてコラ、コイツはマジヤバイ。

思い返してもヤベー。

根が単純短気つてのはよろしくねーな、H A H A H A H A ……
どーしよ。

イヤ、殴ったこと自体は後悔してねえ。

構うなだのなんだのかんだの、バカらしい事をエヴァが言いだすからだ。

第一んなちな言葉で、この俺が構わなくなると本気で思ったのかね？

これで教師クビになったとしても……アイツらの事は気がかりだが新田先生にでも頼むか？

イヤ、新田先生だったら絶対に『自分のケツは自分で拭け』っつーか。

学園長んとこ、土下座しに行くかねえ。

……ま、な。

大体わかった、何でエヴァがそんな風に俺に言ったかは。

神楽坂と雪広がエヴァに喧嘩を吹っかけようとしてる訳だ。

で、今日朝見かけたネギは気分的に沈んでた。

ってことは……そーゆーこつたる。

エヴァは、テメエより弱い奴を好んで襲うような女じゃねえ。

まあ確かにネギの親父さんに、麻帆良学園に封印されたのかもしれないけどさ。

それでもそいつをネギの責任として、『親の責任は貴様が取れ』……
…なーんて言う様な小さい器じゃねえし。

封印ぶっ壊すなら真正面から行くだろ。

そもそも、今はそんな気無かったみたいだな。

つーことは『エヴァは誰かにネギを襲うように指示された』訳だ。
だからこそエヴァは『構うな』なんざ言っただろうよ。

アイツの生きて来た六百年、俺は全部知るわけじゃねえ。

知りてえとも思わねえし。

例えアイツがどんな事情で人を殺したとしても、どんな事情で加害者の立場に立ったとしても。

例えアイツがどんな事情で人に襲われたとしても、どんな事情で被害者の立場に立ったとしても。

俺にや関係ねえ。

んなもん全部路傍の石コロだ。

人の身体と人生を汚したとしても、人に身体と人生を汚されたとしても。

そいつら全部野良犬だ。

俺にとつちや、微塵の感慨も抱かせねえ。

間違つてんのかもしんねーよ、俺の意見。

でも俺はそんなエヴァを知らねえ。

知らねえんだつたら、んなもんで悩んだって仕方ねーだろ？

俺にとつてのエヴァは、出会つて来てから今までのエヴァが俺の中のエヴァだ。

それ以上にも、それ以下にもなりえねえんだわ。

だつたら……。

「エヴァ…… テメエ何様だコラア…… お前の眼に映つた俺は、んなに弱かつたのか？」

「……………」

「まあ確かに、喧嘩してる時も『常勝無敗』なんて風にはいかなかったさ。

喧嘩すりや勝つて、負けて、負けて、勝つて、勝つて…… 勝率六割七割くらいか？

骨へし折られて、頭かち割られて、腕ぶつた斬られて、スラぼうがいなけりや確実に死んでただろうよ…… んな無茶はやって来た」

「……………」

「『魔法生徒』になって、『裏世界』つてもんに触れだしゃそれ以上だ。

喧嘩しても負けて、負けて、負けて、勝って……勝率は一割二割とかか？

所詮俺の喧嘩は素人の喧嘩で、本気で本気に『人殺す』ために、『異形殺す』ために訓練に励んできた奴らにや、負けまくり。

異形どもにも負けまくって、スラばうとチャチャゼロがいなけりや今頃冷たい地面の下だわ」

「雑魚ダカラナ」

ウッセー、バカ。

「だがな……だとしても、俺は負けるつもりはねえ。

ダチ投げ出して、クソみてえにデカイもんの前から逃げ出したりはしねえ」

エヴァが『人から命令されて』動いてるんだろぅが、その理由は多分俺なんだろぅさ。
俺はヨエーからな。

『構うな』なんて言ったのも、そんな自分の姿を見せなくなかったんじゃないかねのかね？

自分が誰かに動かされてる。

それがたまらなく情けなくて、たまらなく嫌だったんじゃないのか？

無論『負けるつもりはねえ』って言った俺の気持ちに偽りはねえ。
一度吐いた唾を飲み込むつもりなんざ、さらさらだ。
だとしても、俺はどうしようもなく弱い。

「も一度言っぜ、エヴァ。」

負けたとしても、俺は負けねえ……胸ん中におっ立てたこの気持ちだけは、絶対に枉げねえ」

でもさ、気持ちは別の問題だ。
弱いからって、俺は譲るつもりはねえ。

「だから頼れや、全部任せて俺をよおおおっと！？んじゃコルアッ！？」

吊りあげられてる！？

俺浮いてる！？

何じゃコレ！何じゃコラ！？

って締まる締まる締まってる！？

何か喰い込んでんぞおッ！！

「ケーーーーッケケケケケケケケケ！筋肉達磨ガ『ボンレスハム』
ダゼー！！」

「ぴぎ、ぴびぎぎ」

「魔法？魔法なのコレ！？」

「私が知る訳ないですわ！それでも魔法は初心者ですのー！」

切れてるし！斬れちゃってるし！！
血が出てるんだがコレ！

「それでも、譲れないモノがあるんだよ」

「へっ？ああ……知らね」

「……お前は、相変わらず人の気持ちを考えない男だな」

「当たり前だろ、俺はいつだって俺のやりたいようにやって来た。

俺がそうしたいからそうするだけだしよ、別にテメエの都合なんざ関係ねーし」

「そうか……ならば、大丈夫だ……きつとな」

……ハア？

「安心しろ、それも本当に今だけだ。

昨日は少々、嘘を吐いた」

何言ってるんの、コイツ。

イヤ、嘘は言ってるっぽくないがさ。
何言ってるの？

「本当に何にも気圧される事なく、お前と誰もかもと……向き合えるから」

「あゝ……風邪でも引いたか？ちよいとおかしいぞ、昨日より更に今日のテメエは」

てつきり、俺はそんな風でだからエヴァは……だと思ってたんだが……何だ？何か……あつたのか、コイツは？
昨日の今日で……何か……。

「だから今だけ待っていてくれ……隼人」

……行っちゃった。

マジで、アイツどうしちゃったんだ？

「……隼人先生、あのさ」

「エヴァとの関係だろ。」

まあ腐れ縁つつーか、仲良しってどこか？」

てつきり俺は、アイツがアイツらしくいる為のなんか。

そいつを他人からの影響でへし折っちゃうから、だから『構うな』なんざいったんかと思ってた。

が、今日は……どうもそう言うアレじゃなさそうだな。

さて……と、どうすつか。

色々キナ臭くなって来たが……まあ考えんのは性にあわねえ。それにガキの頃、喧嘩するのはイイこった。

「それよか神楽坂、雪広、ちよいと頼みがあるんだがイイか？」

「へっ？何よ」

「うん、大した事じゃねえさ。」

ちよっくらエヴァの野郎をボコして、泣かせて来てくれや」

「……はい？」

「本気で言ってますの、隼人先生？」

雪広、その目線は俺は悲しい。

んな風な頭のおかしい人を見るように見なくってもさ。

「本気も本気、どっちにしたってテメェらとエヴァの間に起きた不和はさ、荒療治で治すしかねえと思うし。」

第一……今のアイツ、ウゼエだろ」

「ケケケ、確力ニ『キモイ』シナ」

「ぴぴぎ、ぴっぴぴ」

「教師の言葉じゃありませんわね」

「教師の前に、俺だって一人の人間なんだわ。」

ウザいもんはウザいし、キモイもんはキモイ……知ってるやつだ
けにな、眼に付く」

正直、何があつたのか知らんが今のエヴァは見れたもんじゃねえ。

「ゼロ、テメエはネギと神楽坂と雪広に付いてエヴァの戦い方教えてやんな。」

向こうの方が経験値やら実力やは異様に上な訳だし、攻略本があつたつてかまわねえだろ？」

「ケケケ、ソイツハオモシレーゼ。」

御主人ニ『たちけてー』ッテ叫バセテヤツカ。

オイ、サル」

「誰がサルよ！」

「テメエノ頭ニ乗ッテ協力シテヤンダ、アリガタク思ヤガレ」

「隼人先生」

「んだ雪広？」

ゼロはツエーぞ、俺なんかよかずつと。

それに長年エヴァの傍に居たからな、誰よりもアイツの戦い方は知つてゐるさ」

「そうではなく……本気で、私たちにエヴァさんを……？」

真っ直ぐな瞳だねえ。

そか…… テメエは委員長で、何だかんだ言って誰より大人だもんな。

「はっ、隼人先生!？」

んむ、手入れのされてる綺麗な金髪。

桜子も裕奈もそうで、はるかも鶴子もゼロもそうだが女の髪はやわらかくって気持ちいいもんだな。

「さっきも言っただが枉げられねえ気持ちが互いに合って、ぶつかっちまった時はどうしても『拳』じゃねえと解決できねえ事もある。

男女に関わらずそんな事はあつて、『殴り合いの喧嘩はよくねえ』なんて誰もが言うがな、俺はそうは思わねえ。

そうやって思いつきし全身でテメエらの気持ちをぶつけあうってのは大事な事だ。

大人になりや体面やら立場やらを気にして、そんな風になれねえしさ。

ガキの頃に手加減して、折れて自分を枉げるなんて事を覚えちまったらいかねえよ。

だからさ……聞くぜ、神楽坂、雪広……お前らの胸に持つてるその気持ちは、例え殴られたって枉げられねえモノか？」

「あつたり前よ！ガキに手えあげるヤツを許せる訳ないでしょ！」

「……私も、クラスメイトに危害を与える方は許してはおけません」

「そか」

「そして……必ず、私がそうしたいですから、皆の手を握り合わせさせてみせますわ」

「ハハハッ！それでこそだ！

安心してぶつかってこいよ！例え何が起こったとしても、全部責任は俺が取ってやる！

だかららしく！テメエらの気持ちを貫いて来い！！」

「ぴーっぴいぎぎ！」

「勝ッタラ俺二酒ヲ捧ゲロヨ」

さあて、表面上の不和はこれで何とかなるかね。
後はネギの隣で沈んでたアーニヤと……俺の大事なヤツを、あんな風にしちまったヤツらについてか。

俺がエヴァにとっての人質……上等じゃねえか。
だったら俺らしく、行ってやんよ。

不謹慎かもしれねえが……久々に楽しくなって来たじゃねエか……
なア？

俺っちの名前は『アルベール・カモミール』。
『^{ケット・シー}猫の妖精』に並ぶ由緒正しき『オコジヨ妖精』。
この麻帆良学園に昔俺っちを助けてくれた男がいるんでやって来たのさ。

俺っちは流れの妖精。

ちよいとへまして下着ド……ゲフンゲフン！
任務を失敗しちまって、都合よく……じゃなくて、俺っちの心の底から慕いあげた『兄貴』のところを頼ったのさ。

やって来たはイイが、ちよいと兄貴はピンチな様子。
喧嘩に負けちまったんだとよ。

コイツはチャンス……もとい俺っちの役目だ！
兄貴に『仮契約』つつー魔法使いと従者の契約をして貰って戦力増強！

兄貴はその戦った相手に勝てるし、俺っちには五万オコジヨドルが流れ込むし、俺の居場所もできるし……一石三鳥って言う寸法よ。

風呂場でもみくちやにされてた兄貴を見つけて、隣の煩い女から逃げ出して。

オコジヨ妖精の特技、『相手の好意を計る』ってもんで兄貴にぞっ

こんの女を発見！

本を持ってやがった『宮崎のどか』って言う嬢ちゃんだ。

呼び出しに成功して、『仮契約の魔法陣』も準備して。

兄貴はちよいとヒヨツちまってたがいざ契約！ってところで兄貴の姉さんが現れた！

俺っちが下着泥の常習犯つつー濡れ衣をかぶせて兄貴から引き剥がそうとしやがった。

俺っちは必死に弁明を計った。

下着を盗んでたのは事実さ、認める。

俺っちは男だからな。

だがそいつには言い訳……じゃなくて高尚な理由があるんだよ。

俺っちは病弱な妹がいて、そいつが保湿効果の高い人肌を温める女性物の下着で暖を取らせてやった。

そしたらいつの間にか罪に……。

なのに誰もそれを信じやしねえ！

兄貴の姉さんも、その友達の男も、兄貴自身も。

俺が悪いつつてオコジヨ刑務所に引き渡すってんだ！

折角脱獄……じゃねえ。

無実の罪から逃れようと野山を駆けて、兄貴を頼ってここまでやってきたつてのに。

俺っちの『マジステル・マジ偉大なる魔法使い候補生』に取り入って逃れきる……じやなつくつて。

未来の『マジステル・マジ偉大なる魔法使い』を支援しようと必死になってんのに！

あわや無実の俺っちが法の狗に引き渡されるって時、あの人が現れたんだ。

最初見た時から、あの人はちよいと違うつて思ったね。

女二人、麻帆良学園の生徒を引き連れて現れた大男だ。

少しくすんだ真紅の短い髪をオールバックに纏めて、朱色の瞳は鷹のような眼差しで俺っちの方を見てた。

強面で腕も脚も太く、筋肉の鎧が体中を包んでるみたいだった。

そして何より俺っちの目を引いたのは、頭の上に乗った人形みたいなヤツと、肩の上に乗った青い魔物だ。

一目見てわかった、俺っちは死ぬ。

格が違う、次元が違う、何もかもが違う。

オコジョ妖精の俺っちが持つてる『人の感情を計る』って能力。そんなモンを持つてるからか、ぼんやりとその存在の本質もわかってしまう。

全身の感覚が、相手が持つてるモノを一身に受け感じちまうのさ。

翠の髪の人形に持ったイメージは『獣』と『王』だ。

鋭い爪と、鋭い牙と、多くの鋭い刃。

そいつがギラギラと、滾って光ってやがった。

青の魔物に持ったイメージは……『深淵』だ。

深過ぎて、重過ぎて、大き過ぎて。

目の前に居るだけで全身が委縮してどうにかなっちまいそうだった。

その二つを見た後、もう一度あの人を見た。

あの人は人だが人じゃねえ。

『生きてるみてえに動く炎』が全身を包んでるような、体の外を内

を犯そうとしているような、そんな感じだ。

死ぬと思った。

手を差し伸べられて、俺っちは灰になると思った。

あの人は……俺っちの話を全て聞いた後に、こう言ってくれた。

『普通のヤツに、堅気に手えだすのはよろしくねえな』。

本気で死んだと思った。

だがあの人は……。

『けどそうやってさ、テメエが生きたために必死に足掻けるヤツは素敵だと思うぜ。』

もし、テメエが良けりゃあだが……過去の腐った自分を全部捨てて、ネギのヤツの力になっちゃくれねえか？』。

俺っちに、好き放題生きてた俺っちにそう言ってくれたんだ。

兄貴に義理はある、兄貴の事は嫌いじゃねえ。

俺っちはこれまでクズだった、優しい兄貴を利用しようとするような。

兄貴は綺麗すぎる。

綺麗なのは美点だが、そんなモンだけじゃ渡って行けるほど『裏世界』は甘くねえ。

俺っちは、ホントに生まれ変わって、そんな兄貴の力になりてえ。

だってあの人が、翠の人形と青の魔物を従えたあの炎が、俺たちの為に頭を下げてくれたんだぜ？

だから見ててくれ兄貴。

必ず俺たちは、兄貴の為に生きて。

それがあの人に……俺たちを真つ当な道を歩かせようとしてくれた『大将』と、そんな俺を受け入れてくれた兄貴への恩返しだ！！

「見てて下せえ兄貴！大将！不肖『アルベール・カモミール』！必ずいつちよ前の『漢』になって見せやすぜ！！」

五十九匹目 知ってる相手だからこそ粗が目につく（後書き）

カモ、参上の巻。

六十匹目 月がとっても綺麗ですね（前書き）

更新はぼちぼち。

速かったり、遅かったり。

六十匹目 月がとっても綺麗ですね

喫茶店。

コーヒーの臭いが漂う店内。

私の目の前に女がいる。

「なあはるかはん……アンタ、ホンマに何なん？」

艶めかしい黒髪を腰まで伸ばした、美しい女だ。

「ウチがこっちに来て、アンタの目の前に現れて」

鶴子との付き合いは、もう十五年以上に及ぶ。

初めて会ったのは私が『浦島宗家』に呼ばれ、そこで『浦島流柔術』を学ぼうと足掻いていた頃の事だ。

「ほして隼人はんと仲良くしてるトコを見せて、本気でアンタの前から奪って行くって言って」

『京都神鳴流』が先陣となり、行われた『退魔』の実戦。

私が私の義母に連れられて行ったそこで、私は鶴子に初めて出会った。

「嘘だと思ってるん？」

ウチがそないなことを本気とするわけではおまへんって

私と同じくらいの年の頃。

『青山本家』の、鶴子の肉親以外が何か奇異を見つめるような視線の先に、コイツは居た。

私と同じ、10にようやく手が届いたくらいの少女は、荒れ狂う嵐を小さな体に押し込めたかのような得も言わぬ圧力というヤツを、体中から滾らせていた。

ただそこに立つだけで、手に持った野太刀よりも鋭く尖っているように。

「それともウチが、隼人はんが、そないな事になっても自分を受け入れてくれるって勘違いしてるん？」

私は恐かった。

義母が、鶴子が、他の面々が還す『異形』たちよりも。

私と同じ年の頃の鶴子が蟻を潰すように、雑草を抜き去るように、それを葬っていくのが。

目の前の何よりも『バケモノ』のように見えた。

その日は始終震えて、帰宅してくるまった布団の中でも決してそれは止まなかった。

「ホホホホ……本気でそう思ってるんやったらアンタの頭、沸いてとるわ」

私はその頃ちようど、『自分には才能が無い』と気付かされた頃だった。

『気付かされた』というよりも『自分で認め始めていた』というのが正しいのか。

かと言って、それでも私は心の底からそれを認めて逃げ出す事は出来なかった。

ちっぽけなプライドが、それまで他の何もかもをそつなくこなした自分のプライドが、それを許さなかった。

だから私は『実戦がある』と知れば積極的に自分も付いていこうとした。

その場ならば私も『浦島流柔術』を自分のモノとして体得できるかもしれないという……建前を掲げて。

そして『浦島流柔術』がたとえまともに扱えなかったとしても、『自分は役に立つ存在』だと、『いらぬ子なんかじゃない』と。

そう、吠える様に、私は我武者羅になった。

薄汚れた犬がいくら吠えても、気高い狼のように吼える事は出来ないと知ってはいたんだがな。

「……それでもウチは、アンタの事は友達で、アンタになら隼人はんの一番を受け渡してもエエって思っとった」

話しは少し変わるが、当時の私は幼かった。

10になった頃の少女が『実戦』の場に出ると言う事は、普通に考えれば有り得ない話だ。

手間暇をかけて、時間を捧げて、金をばら撒いて。

次世代の戦力を育てると言う事には、どんな分野においてもそうであるが多大な労力がかかる。

何もないゼロの状態から、一線で戦える立場まで引き上げなければならぬのだから、それは当たり前的事だ。

だからこそ幼い少女が『実戦』の場に居ると言う事は、それだけで

異様な事なのだ。

ましてや私たちがいたのは『裏世界』の『戦場』。
たった一つの迷いが、選択ミスが、躊躇いが『死』へと直結する場
所。

他の事柄のように『取り返し』が微塵も付かない……そんな、こ
ろだ。

そしてその場に私と同じような年の頃の少女がいたら、勿論のよう
に目立つ。

鶴子もまたそう。

頭の凝り固まった老害は他流派や他家に自分たちの思想を刷り込み
切れていない時、出来るだけ子供を他の子供や人間と触れ合わせよう
としない。

が、どこにでも老婆心を働かせる、お節介な人々もいる。

『子供は子供と一緒に居ないと』なんて言う、な。

「二番とか、愛人とか、お妾はんとか、ほんでもウチは構へんって
思っつつた」

よく、その場に引き合わされたのは私を含めて四人だ。

私と、鶴子と、鶴子の幼馴染で今は麻帆良で教員をやっている『葛
葉刀子』と、そして陰陽師の少女だ。

初めはただ、ただ怖かった。

鶴子を知っていて、鶴子を見てしまって、皆が皆鶴子のように人間の
皮を被った『バケモノ』なのではないかと。

そう思い……イヤ、違うな。

『怖い』と自分の中で一つ想いの盾を作って、『バケモノだから』と想いの剣を作って。

避けようと、距離を置こうと、自分とは違うのだと、自分で自分に教え込んでいた。

『自分が才能が無いのはバケモノじゃないから』と、自分が劣っている事の原因付けをして。

『仕方ない』とどこかで納得させて、『そんなバケモノと付き合ってやれる』と鶴子らを見下し自分で自分を虚構の台に乗せて。

能面のようなだった三人の顔が僅かに緩み始めても、キリキリ痛む胸に蓋をして。

鶴子は私を『友達』だと言ってくれる。

だが私はそんなじゃない。

そんな……綺麗なモノじゃ、私は……汚い女なんだ。

「だって、だって……だって、アンタの隣に居た隼人はんが一番輝いてて、一番カッコよくって……そこにウチも入りたいって思ったんそやし」

鶴子が……鶴子が、隼人に会ったのは本当に偶然というヤツだ。

正直なところを言えば、私は会わせたくなかった。

数年ぶりに会ったコイツは、昔よりもずっとずっと綺麗に成長していた。

変わらず目は鉛のように冷めていて、私を見かけて声をかけてきてくれた顔も固いものだったが。

仕草も、雰囲気も、大人になり洗礼され、同性の私が見ても息を飲むくらいのモノだった。

だから私は会わせたくなかった。

隼人は私の事を『好きだ』と言ってくれる。

何もなかった、空っぽだった、当時の私をだ。

「けど、今のアンタは違い過ぎるんや。

本気で、心の底から想う……今のアンタには絶対に渡せへん……昔はウチが動いたらアンタも不器用なつてに動いとつたつて言うのに、まるでなんもせん、しようともせん」

『怖かった』。

初めて鶴子に会った時の、何倍も、何倍も。

私はどうしようもないくらいに、二人を引き合わせると言う事が怖かった。

引き合わせてしまつて、徐々に親しくなっていく二人が、それを見るのが怖かった。

自分が、私自身がようやく見つけた居場所。

それを『バケモノ』に根こそぎ奪われてしまいそうで……。

二人が出会つて、隼人の……アイツのあたたかい想いに触れて。

春になれば氷が溶ける様に、鶴子の固まった心は見る見るうちに溶けだした。

強張った顔は姿を消し、同時に洗礼された冷たい大人の美しさも消

えて。

かわりに朗らかな、あたたかな子供のような笑顔が鶴子の顔に浮かんで、浮かんで、浮かび続けた。

必死だった。

みつともなくても、ただただ必死だった。

ホントは嬉しくてたまらなくて、でもどこか気恥かしい気持ちがあつて避けていたキス。

隼人は少し嫌がるそぶりの私に、『あと少しだけ待ってくれ』という私に、決してそれ以上踏み込んでこようとしなかった。

それ以上も、そう。

他のチームのヤツらからは、隼人が頑張つて自分で発散していると聞いていたが。

私のちつぽけな我が儘に、アイツは付き合ってくれていた。

私は、卑怯だ。

遠くなつて、隼人の隣に鶴子がいつの間にか立っていきそうで。怖くてたまらなくて、私は隼人にすべてを捧げた。

「歳を取ったから、大人になったからなんて言い訳にせいよ……それやったら結婚式の当日に、それをすっぽかすなんてありえへんでしょう?」

隼人の事は好きだった。

本気で、心の底から惚れこんでいた。

今も、昔も……こう言えば、瀬田のことを蔑ろにしているようだが、でもだからこそ、あんな真似をこの歳になつてしてしまった訳だから

らな。

……私は、あの頃の私はとにかく必死だった。
どうにか隼人を繋ぎとめておこうと……私は、縋りついた。
『身体』なんて、そんな手段で。

思い返せば思い返すだけ……ハハツ、何が『イイ女』だ。

コレのどこが、こんな女の……こんな私に何で……コイツも……あのチームのヤツらも……隼人も……何でっ……。

「……今、何や不穏な空気が麻帆良を覆ってるってのは気付いてるわどすやる」

……知っているよ。

『英雄の息子』だろう？

私は……私が、『浦島』の人間として……やるべき事は……わかって、いるつもりだ。

「隼人はん、ウチに何やあったら協力してくれって頼んで来たんや。アンタにも頼もうとしたりたみたいそやけども断つていたわ……やるべき事があるから」ってゆーてな。

この一連の騒動が終わった時に、アンタが今のアンタのまんまやったら……ウチは……」

嗚呼、見るなよそんな目で。

逃げるなつて事かい？

それはそうか、一番簡単に楽な道を塞いでくれたんだから。

わかってるが、私は……私は……。

「月は……綺麗やったけど、今でも何よりも綺麗そやけども……それが一つになるつてのは悲しいわね」

はるかはんはウチの事を、昔『バケモノ』として見とった。
他の子供から見られる視線とそら同じで、いつだってそないなモノに晒されとったんそやし、その違なんぼいはウチもわかる。

ほんでも、ウチは嬉しかった。

他のヤツらがそないな視線を投げかけて、遠巻きに蔑んだモノだけをウチに押し込むのに。

はるかはんは……ウチの傍に来てくれた。

体面上だけでも、表面だけでも、内面でウチを下に見ていても、酷くウチを恐がっていても。

ウチと普通に接しようとしてくれた。

唇は震えて、心拍数は上がって。

ほんでも普通に接しようと、はるかはんは自分を奮い立たせとった。

ウチの為ではおまへん。

自分の為に、はるかはんがはるかはん自身の為に。

ちびつとでも自分を大きく見せようと。

ウチは嬉しかった

そやし嬉しかったんや。

刀子はんは、知り合いになった陰陽師の女の子は、当時のウチには劣つとったけど、そこらの有象無象をはるかに凌駕する力を持つとった。

まあ刀子はんは『十で神童 十五で才子 二十過ぎれば只の人』って。

今では強いは強いんそやけども『天才』とか『鬼才』とか言われる領域には踏み込めておらん。

陰陽師の女の子は、それとはちよい違ったみたいそやけどもな。

ウチは嬉しかった。

『普通』のはるかはんが、『バケモノ』のウチと接してくれる。

それがたまれへんほどに、嬉しかったんや。

ウチも普通になれるかもしれへんって、そう思えて。

そやし何があっても、誰がどんな事を言おうとも、ウチははるかはんの力になってたって、友達でありたいって想った。

はるかはんは嫌がるのかもしれへんけど、ウチの一方的な想いかもしれなくても、ほんでも……ほんでも……。

そうそやしこそ、今のはるかはんは見ていられへん。

『浦島はるか』を『浦島はるか』たらしめとったプライドは埃被つて、何時だつてあつた純粋な気持ちは薄汚れとる。

歳を取つて、そうなつたつて言われればそれまでなのかもしれへんけれど……。

ちびつとでもイイから、そないなはるかはんを残していて欲しい。

…… ホホッ、ウチつてホントに我が儘どすやろえ。

ウチは、はるかはんにほんまに感謝しとる。

はるかはんはに会えてなかつたら。

ほんで……隼人はんと会わせてくれなかつたら、ウチは今頃自殺しとつたかもしれへん。

少なくともまともな人間として、生活を送れていなかったと思う。

そやし、こらウチの我が儘。

ウチは隼人はんを愛してる。

けどそれと同じくらいに、はるかはんの事も愛してる。

二人が並んだそこに、ウチは入っていききたい。

そこに、ウチは立ちたい。

隼人はんと、はるかはんの、傍に。

「なあはるかはん、戻つて来てや。

きつと誰より、誰よりも……それを望んでるのはアンタ自身なん

「やから」

六十一匹目 自分の立場の『常識』は自分が別の立場にならないと一般的に当
少し更新。
もってきたい展開まではまだ遠いなあ。

六十一匹目 自分の立場の『常識』は自分が別の立場にならないと一般的に当

「エヴァよ」

「何だ、ジジイ」

「何故瞳に淀んだ光を宿す？」

「フン、ただ私を十五年もこの土地に縛り付けた忌々しき呪い……それを発した者の縁者に会えたんだ。

気分が多少悪くなったとしても、ありえる普通な出来事ではないのか？」

クツクツと目の前の少女……イヤ、力を封じられた『大魔法使い』は空気を囃むかのように嗤う。

彼女からすれば遥かに矮小なワシの無知さを嘲るように。

『なぜにそのような簡単なことがわからんのだ』とでも言いたげに。

ティーカップに小さな手を掛け、湯気立つ紅茶を口に含む。

優雅に、体から力を抜いた緩やかな自然体で。

じゃが絶えず剣山のように尖った威圧を吐き出すタカミチくんから意識を逸らさぬように。

「……しかしタカミチ」

再びエヴァが口を開く。

暗い瘴気を……過去、ここに来る前に持っていた彼女のそれで言葉を包んだ。

「今の私に易々と接近させるとは……堕ちたな」

「っ……」

威圧はさらに鋭くなり、立ち昇るような怒気が彼の拳に集まっていた。
く。

「……エヴァ」

「からかったただ、ユーモアを解せぬ人間は得てして大成せんぞ」

ニヤリ、口元を吊り上げて彼女は嗤う。

彼の威圧を柳のようにゆらゆら流して、エヴァはカップを置き背もたれに体を預けた。

学園長室の革張りのそれがわずかに沈み込む。

「タカミチよ」

「……………」

「毎度毎度お姫様のために、粉骨砕身働く勤勉な兵士は穴だらけだな。」

蛇のように風漬しに芽を摘んでいる意味がないではないか」

ソファァーが弾けた。

見えない弾丸の嵐が革を貫き骨子を潰す。

塵屑となった破片が飛び舞い、ぱらぱら床へと敷き詰められた。

変わらず彼女のことになると短絡じやのう、タカミチくん。
それは欠陥じや。

じやが同時に彼自身の起爆剤のようなものでもある。
彼女を想うからこそ……彼はここまで強くなれた。

タカミチくんはどこまでも凡人で、どこまでも凡庸な才能の欠片もない男じやからの。

……イヤ、一つだけ才能があつたか。
じやからこそ『強さ』じや。

「お主もからかうでない」

「クククッ」

ふわり、ワシの目の前の執務机を踏むエヴァはタカミチくんを見つめる。

……解らぬ。

エヴァは人をからかうことはする。

しかし、踏み込んでいい領域と踏み込んではいけない領域の差分は付く女じや。

明らかに、明日菜くんを傷つける行為。

そしてそれを茶化す行為。

双方ともに彼の逆鱗じや、エヴァが知らぬはずがない。

重く黒い声がする。

恨み、辛み、妬み、憎しみ。

そのどれとも同じでどれとも違う、『負』の声じや。

「エヴァ、これは『忠告』じゃない……『警告』だ」

『高畑・Ｔ・タカミチ』という男は一般的に『英雄』と評価を受けておる。

かの集団にその身を置き、唯一自由に動ける生き残りとして世界中の紛争地帯を練り歩き、鍛えた体で『悪』を討ち潰す。報奨金から必要経費を抜いた金額以外はすべて『寄付』に回し、その上広い心を持った人格者。

まさに『模範的英雄』……というのが世間の評価。

じゃがワシはそうとは思わん。

彼はどちらかと言えば『悪』寄りの人間じゃ。

己の為に、己の為に、ただただ己の願いの為に。それが彼のあり方、それが彼の歩んできた道。

只一つ彼には願いがあり。

それを叶える為に……たとえすべてを捨て去ることになったとしても愚直に歩み続けておる。

彼は彼の我が儘の為に『慈善』を行う。

いずれ、もし何らかの可能性の元に彼女が『裏世界』に踏み込んだとき。

汚れ、揶揄される『黄昏の姫御子』の名を打ち消そうと。

そして僅かでも、彼女に傷を付けよう者がいるならば……。

「触れてみる、存在ごと塵にしてやる」

文字通り『消す』。

何処からか嗅ぎ付けて来た者が肉塊になることは、麻帆良に着てからも何度かあった。

処刑人のように、彼は淡々とそれを行うわい。

彼女への想いは大き過ぎ、かといって彼は彼女に彼自身として触れる事が出来ない。

タカミチ君を縛るのは師の言葉か、彼女の言葉か、それとも……。

「クハハハハッ……人間、あまり強い言葉を使うな……弱く見えるぞ」

挑発するかのよう、三度エヴァは嗤う。

凍て付く威圧が彼女の周りを冷やしておる。

が、のう……あまりお主ら調子に乗ってはいかんぞい？

「……ジジイも参加するか？

中等部の一角が消し飛ぶぞ」

「せぬよ、ワシは。

じゃがお主らが本気で争う気ならば別の機会を設けよう……この老人の言葉に免じて、ここは矛を納めてくれぬか」

「フン、何が『くれぬか』だ。

滾るように『魔力』を漂わせた人間の言葉ではないな」

まあワシ、学園長者じゃし。
喧嘩は止めねばいかんしのう。

「タカミチ……ゴミ虫がよく、そこまで私に喚けるようになった」
「……………」

「故に私からの『忠告』だ。

私の行つことに口を挟むな、手を出すな……そうすれば……………」

ニカと笑い、エヴァはこちらに視線を遣す。
そして先ほどとは一転……フム……おかしい光が、宿っておるの。

これは……『狂信』……か？

エヴァは手を伸ばし、開いたその先は急速に熱を失い。

「貴様らの望む世界をくれてやる」

握ると同時に氷の結晶が学園長室に舞った。

エヴァは部屋を出て、男が二人立ちすくんでおる。
まあワシは座つとるが。

言葉のあやというヤツじゃい。

「……何処へ行くんじゃ？」

「鍛錬場に」

麻帆良学園にはさまざまな『裏の武芸者』や『魔法使い』たちがおる。

そんな彼らが今身に納めている技術を、さらに昇華するための施設は当然のように完備されておる。

……そう考えると、ここは本当に『優秀な裏世界の人間を輩出する為』にあるようなものじやの。

ここは、この土地は。

『学校』という社会が凝縮された学園都市であり、尚且つ他の場所とは異なる独自の技術を発展させている『麻帆良』という土地は。

本当にこのままで良いのじやろうか。

何故此处に、『日本の術者たちにとって重要な拠点』であったこの土地を『魔法使い』は奪い、学園都市を建設した？

この世界に此处を合わせて僅か十二箇所、魔法世界に一箇所存在する『聖地』の此处を。

押し並べてそれは……ワシが今、ネギ君に行っていることをするためではないのか？

思えば『聖地』のすべてが宗教上の重要な土地か、もしくは此処のように発展した都市となっておる。

人が集まれば、それだけ『過ち』の頻度も高くなる。

すべてそれは『才能のある優秀な人間を引き込むため』ではないのか？

イヤ、イヤ、イヤ、考えすぎかの？
それ以外にも理由はある。

人が集まれば場の空気が変わる。

多くの人間が集まれば一般の者たちがいつも身体から零しておる、
人体には問題のない微量の『魔力』が集まる。

何かに一心不乱になっておればその密度が上がる。

そして『聖地』は、その『象徴』はそれをかき集めて更なる輝きを
……。

……待つんじゃない……ワシは今ナニヲカンガエテオッタ？

何じゃ、コレは？

前者も、後者もまるで『裏世界の住人が表世界の住人を利用する』
効率の良いシステムではないのか？

ワシは、ワシは……今、思考するまでそのようなことなど考えもし
なかった。

考えようとも思わなんだ。

『当たり前』じゃと、どこかで思っておったのか？

……耄碌したのか、それとも年月を経てこそ考えることが出来たの
か。

それとも……香坂先生や新田先生に中てられたか。

考えることは、問題は尽きぬの。

只でさえ今、この土地を不穏な空気が覆っているというに。

発端はエヴァの攻勢。

それにより『正義』を名乗る者たちの不満が募り、湧き上がっている。

しかし……理由も無しにそれを彼女が行うとは思えん。

第一にネギ君を襲うなら、彼が来た当日から今の今までに『半年』もの期間があった。

じゃがしなかった。

欠片ほどの動きも見せなかった。

動き出したのは此処一月、二月か。

ワシが前面に出て彼女を擁護するか、若しくは彼女を断罪するか。極論を言えばこの二択に尽きるじやろうの。

さて果て、すべてを加味してワシはどのような手段をとるべきか。

……まあ誰かに希望を寄せて、すべての責任を負う代わりに傍観の姿勢を貫くというのも一手かも知れんがのう。

俺っちの兄貴はスゲエ。
そう思う。

こっちに来て、兄貴の『相棒』になつて。

ダーク・エヴァンジェル

『闇の福音』なんて化け物と事を構えてることもそうだがよ。
っつーかマジ逃げてー……ってとこだな、以前の俺っちなら。

けど逃げねえ。

俺っちを信頼してくれて、受け入れてくれた兄貴と大将のために。
男一匹、気合入れてみねーとな。

しかしぶっちゃけたところ、兄貴が勝てる理由がみあたらねえ。

唯一の勝機はバカみたいな兄貴の『魔力』と、アスナ姐さんの『魔法を打ち消しちまう』っていう『不確定要素』。

まあこんなもんあつたからって百戦錬磨の化け物に勝てる理由何ざにやなりそうにねえしな。

手っ取りばえーのは逃げること。

若しくは兄貴の血液が目的ならよ、『週にどれ位か血液差し上げるから許してください』って詫び入れに行くことだな。

この二つが最良の手段で、本来なら兄貴が取るべき道なんだろうさ。

けど兄貴は『無理だ』って言い切った。

『クラスメイトが泣いてて、それをクラスで唯一の男の自分が放つて置くことなんて出来ない』ってよ。

……へへッ、男だよな、兄貴は。

ガチで殴り合つたつて、蹂躪されるのが目に見えてるつてのに。

あえてその道を選びたいんだとよ、兄貴は。

正面から堂々と、『口喧嘩して、場合によっては素手喧嘩して仲直

りしたい』って。

だから兄貴は必死に修行してる。

何日か修行して、んなもんじゃ付け焼刃にもならねえかも知れねえけど、果たし状渡して堂々と。

そう、兄貴が望んでんならそれを援護するのが舎弟である俺っちの役目……なんだがよ。

俺っちは、兄貴の『使い魔』になって早々主人を失うなんて羽目は真っ平ゴメンだぜ。

少しでも兄貴を有利な立場に持っていけるようにするため。

俺っちは一つ、提案をしようとしたんだ。

そこで……俺っちは思ったんだよ。

『兄貴は恵まれてる』って。

生まれ持った『立場』に、『魔力』に、『才能』に。

そして何より……『人間』に。

俺っちの提案は至極単純。

ダーク・エヴァンジェル
『闇の福音』の従者を誘き寄せて事前に潰すこと。

戦力が一つ減ったからって化け物の強さは変わるわけじゃねえ。

けど、『二』が『一』になるってのは数の上で、大きく違う。

二人に割かなきゃならねえ戦力を、一人に集中できる。

これはかなりデケエと思う。

その上『魔法使いの従者』は『魔法使い』が『魔法』を詠唱するた

めの時間稼ぎ役。

簡単に言やあ『壁』だ。

そこが失われるって事は、詠唱を中断できるかも知れねえし。
一つでつかい壁の無い状態で相對せるってことだろ？

それにアスナ姐さんが加わる。

『魔法使い』ってのは、基本的に自分の身を守る盾は『従者』と『魔法障壁』の二つだ。

『従者』がいなけりや、こいつはまだ仮説でしかねえがアスナ姐さんの攻撃で『魔法障壁』を破壊できるかも知れねえ。

上げればメリットばかり。

こいつが成功すれば格段に兄貴の勝率は上がる。

…… つつてもコンマ数億分の一が数百分の一になるくらいかもしれねえんだけどよ。

だとしても、やらねえ手はねえ。

そうやって俺っちが提案しようとしたところで……あやか姐さんが、俺っちを呼んだんだよ。

あやか姐さんは古い教会の前で、ジリと前を見つめている。

ふりふりしたスカートとかじゃねえ、バシツと身体にフィットした服に身を包んで。

手に一本、『レイピア』を携えて。

さっきまで足元に寄っていた猫を逃がした『絡操茶々丸』を射抜くように見てる。

あやか姐さんは……あやか姐さんは、兄貴とアスナ姐さんにこんな『卑怯で汚い真似をさせたくない』って言ったんだ。

あやか姐さんも恐らく、俺っちと同じ考えに至った。

その取るべき手段に気づいて……甘いかも知れねえけど、それを二人にさせたくねえって思ったんだ。

……バカじゃねえか。

ちきしょう……兄貴の為に、アスナ姐さんの為に、あえて泥を被るうとするなんてよ。

やってやる、やってやるぜ俺っちは。

オコジョで、戦闘能力なんて皆無の俺っちに出来んのは相手の注意を逸らすことくれえだ。

でもだからってよ、俺っちがやらねえ理由にはならねえじゃねえか。

「雪広さん……」

「茶々丸さん……少々私とお相手願えますか？」

「やってやんぜロボっ娘があっ！俺っちをかわいいだけだと思ってたら怪我するぜえ！！」

六十一匹目 自分の立場の『常識』は自分が別の立場にならないと一般的に当てる力モをかつこよくしたかった、それだけ。

六十二匹目 自分の『意思』を持って動けるのは幸せで、大切な事（前書き）

……みなさん、そんなにカモくん嫌いですかー？
と、ちよいと余りの反応の無さにシヨックを受けてしまった作者です。

まあですが、ウチのカモくんはこんな感じですので。
彼の悪評を取り払って見せる！と、妙な方向で若干意気込んでいる作者でありました。

六十二匹目 自分の『意思』を持って動けるのは幸せで、大切な事

鋼の身体にデータの心。

触れれば人のやわらかさ。

芯は冷たく、堅く、重い。

造物主によって造られた私。

外れるべからず。

敷かれたレールの上。

其処だけが私の世界。

分岐も、停止も、加速も、減速も、暴走すら。

在るのは私の主人の意思のみ。

根幹を走る私の存在意義。

只護る為、只護る為、只護る為。

あらゆる苦難から、起こり得る総ての事柄から。

強く、強大で、冷たい。

脆く、儚く、あたたかい。

たった一つの『命令』。

生まれた時、私に刻まれた『使命』。

果たす事が、私の価値。

従う事が、私の意義。

果たせなければ、姉のように鉄屑へとなる。

従えなければ、姉のように無になる。

私はその為に動いている。

エネルギーを補給され、私は動いている。

私は護る為。

私は……私は……私は……。

『命令』の為、私は……。

私は……私は……私は……護りたい。

私は、私の主人を護りたい。

私を褒めてくれる主人を。

私を叱ってくれる主人を。

私を家族と言ってくれる主人を。

私を大切な人に紹介してくれる主人を。

私を……『絡操茶々丸』として扱ってくれる主人を。

主人は泣いているから。

それでも主人は歩きだしたから。

正誤の判断はつかなくとも、善悪の判断はつかなくとも。

護りたい、私は。

主人が歩き出したその背中を。

例えそれがどんな結果になろうとも。

私は護りたい。

『バグ』かもしれない、生まれたそれに従って。

私は護りたい。

きつとそれが、私の『意思』だから。

剣は折れ、身体は倒れ込み。

目の前に居る大切な二人は、荒々しく息を吐いていた。

「あやか！カモ！」

急にいなくなった二人を探し当てたその場所。

アスナさんが駆け寄るそこに僕は踏み出せなくて。

呆然と、二人を胸に抱いて泣きそうな顔をするアスナさんを見つめていた。

無表情に、茶々丸さんが僕らの方を向く。

身体は僅かに埃で薄汚れて、少し乱れた制服に金色の長い髪がへばりついていた。

あやかさんが呟く。

息も絶え絶えに、あやかさんが口を開く。

赤く腫らした頬のまま、潰れた眼で僕を探しながら。

「すい………ませんっ、ネギさん………私は、私たちじゃ………勝てませんでしたわ」

掠れた声が、耳に届く。

小さな、小さな、小さな声が。
僕の耳を、ずっしり鳴らす。

「……兄貴……俺っちじゃ……駄目でした……」

自慢にしていた白い毛並みを、グシャグシャにしたカモくんが。
僕に、僕に。

……なんで……なんで、僕の為……に……。

あやかさんは友達。

日本に来て、初めてできた友達。

アスナさんと一緒に出来た、僕の大切な人。

カモくんは友達。

イギリスで唯一いた、僕の友達。

初めて出来た、同性の友達。

僕は……そんな二人をひどい目に合わせた。

僕は……大切な友達を傷付けた。

僕の、我が儘で。

僕の、身勝手な行動で。

僕が、悪い事をしたから。

ボクガヤクビヨウガミダカラ。

「あやか！ねえ！しっかりしなさいよ！

そんな……そんなあっ！ズタボロなんて似合わないのよ！

いつもみたいにふんぞり返ってればいいじゃない！！」

「……見慣れた、ム力つくだけつの、悪態も……なんだから、今日は可愛らし、いですわ」

「あやかあ！」

アスナさんが、ギュッと二人を抱きしめる。

僕の頭はふらふらと、僕の身体を離れてく。

どうしてイイかわからなくて、どうしたらイイかわからなくて。

……僕は……僕っ……僕……お兄ちゃん……。

お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん。

お兄ちゃんだったら！お兄ちゃんだったらきつと助けてくれる！
いっつも、きつと僕たちがピンチになったら……お父さんみたいに、
お兄ちゃんも……きつと……助けてくれる……。

「……おにいちゃん」

熱い……目が熱いよう……。

僕、僕、どうしてイイかわからないんだもん……。

カタカタ震える僕の手。

熱く、熱く、重たくなってくる僕の眼。

その目の前で、二人を抱きしめているアスナさんがギツと絡操さんを睨む。

「アンタが……アンタが……アンタがああああっ!」

拳を握って、アスナさんが走りだそうとする。

止めなきや。

ボロボロ涙を零しながら、アスナさんが走ろうとする。

止めなきや。

前に絡操さんに殴られて蹴られて、それをきつと覚えてるはずなのに。

止めなきや。

きつと大切な友達を傷つけられた事が許せなくって。

止めなきや いけない。

止めなきや いけない。

止めなきや いけない。

もう……僕の、大切な人に傷ついて欲しくないから。

エヴァさんを止めようって、喧嘩してやろうって。

そんなこと思ってたのも全部、全部、頭の中から抜け落ちて。

気付いたら僕は叫んだ。

「お兄ちゃん！……ひっ……たすけてよう……」

男らしく、吐いた言葉を投げ捨てて。
みつともなく、弱虫な僕は。

「……やだよう……」

嫌だ。

「けが……してほしくないよう」

痛い思いして欲しくない。

「……ひっ……うえ……」

口を空けて、大きな声で。

昼に飲んだお茶を、全部はき出してしまいそんな量の涙が零れてる。

「……ネギ……」

そうやって、僕は泣く。

泣いて、泣いて、泣いて。

まるで泣いたら、全部許してもらえないんじゃないかって思ってるみたいに。

「ネギさん」

目の前に人がいる。

声を掛けられて、それが絡繰さんだって気付いた時に。

パーンって、大きな音が僕の耳に飛び込んで来た。

……え？

叩……かれた？

なん、d「ネギさん、貴方は何を泣いているのですか？」

「……う……」

冷たい手が、僕の肩に置かれる。

「泣いてはいけません、ネギさん……この場面で、誰が泣こうと、貴方はそんな情けない意味で泣いてはけません」

真っ直ぐな、真っ白の眼。

何も映してなくて……でも、大切なモノを移してるみたいな眼が僕の視線と交わる。

「貴女を慕う方が、貴方の為を想って必死に抗った。

例えばそれが、抗う事に失敗したとしても、貴方はそれを情けなく否定してはいけません」

「……何で、ですか……僕は、だって僕は！」

「貴方が泣いては、二人が抗った意味全てが失われてしまうからです。」

大切な存在の為に、抗った人の行動を、それを受けた貴方が無に
してはいけません。

二人は……二人の心にある『意思』に従って、私を蹴散らそうと
したのでから」

絡操さんは、そう言うとき軽くお辞儀をしました。

「私にも、大切な方がいます。」

その方の為に、私は存在しています」

僕の眼を、見つめている。

その間に影が入ったと思ったら、僕はアスナさんの胸にかき抱かれ
ていて。

「ネギに……ネギに手えだしてみなさいよ！ぶっ壊してあげるわ！
」

震える声で、震える拳を作って、アスナさんはそう叫んでました。

僕と、アスナさんを交互にみやって。

あやかさんと力モくんに視線を移して。

もう一度、絡操さんはお辞儀をしました。

「貴方を想ってくれた二人の為に、貴方には貴方にしか出来ないすべき事があると、私は思います」

そう言うと、絡操さんは歩いていきます。

視線の先に居るエヴァンジェリンさんのところに。

妖しい眼が、僕を貫いてた。

僕は……僕は弱い。

僕は、情けないっ！

絡操さんに言われてやっと、僕は……。

二人とも、僕の為に。

僕なんかの、我が儘の為に。

そのせいで怪我をして、そのせいで嫌な思いをして。
なのに僕の為って、僕を助けてくれた。

僕は、怖い。

僕はもうこれ以上大切な人を傷つけられる方が怖い。

でも……僕は弱くって、僕はどうしようもないくらいに弱いから。
だから……だから、僕は。

アレから寮に帰って、僕はずっとずっとそんな風に考えてた。
正座して考える僕の前に、魔法薬とお姉ちゃんの『治癒魔法』で怪
我を治しつつあるあやかさんとカモくん。
それとアスナさんがいる。

お姉ちゃんは『どうしたの?』って、聞いて来なかった。
怪我を治して、それで僕を一回抱きしめてくれたらそれ以上何もし
なかった。

『男の子には男の子の事情があるって、聞いたから』って。

「あやかさん、アスナさん……お願いします」

「はい」

「……何よ?」

「僕と……僕と『仮契約』してください!」

『仮契約』。

『魔法使い』とその『従者』が交わす『魔法の契約』。

『魔力ライン』を二人の間に『契約』を媒介として通す事で、従者
の人は『魔力』の力を借りる事が出来る様になる。

『アーティファクト』っていう『魔法具』も手に入って。

エヴァンジェリンさんも言ってたけど、僕が『魔法』を詠唱して打つ時間も稼げるようになるかもしれない。

僕の、今の僕からすれば喉から手が出るくらいに交わしたいモノ。

……けど、これをしてしまったらホントに二人を『魔法』に巻きこんでしまう。

本来なら『魔法は秘匿されるべきモノ』なのに……違う、そうじゃない。

僕の大切な人を、二度も酷い怪我をさせているのに。

なのにまたこれ以上、巻き込んでしまってもいいって事が……僕は……。

「僕は……僕が、おかしなことを言っているのは自分でもわかりません。」

僕はアスナさんにも、あやかさんにも怪我なんてして欲しくない

……でも……でも！

僕は！僕には夢があって！みんなが仲良くなれて、みんなを笑顔に出来る魔法使いになりたいかって……僕は、そんな僕になりたいかって……。

それなのに、僕は弱くて、それなのに僕はクラスメイトだって笑顔にさせてあげる事が出来なくて……！

僕は、僕が出来るようになった笑顔をみんなに浮かべて欲しくって、そうなって欲しくって、みんなと手を繋ぎたくって、なのに僕は……僕は、弱くって、泣き虫で、自分一人だけじゃ……。

だから！僕は、僕で、僕の……僕自身が！……僕は……厄病がm
「はいストップ」……アスナさん」

「カモ、準備できてるんでしょ？」

「ウツス、勿論っす」

準備？

準備って何んむう！？

「……ハア、初めてがガキとか……まあノーカンね」

「あっ……アスナ」では私も」んむむっ！？」

「……ふう……ネギさん、一つだけ言いたい事があります。

私は少なくとも、貴方の事を大切な方だと思っておりますわ。

だからこそ、どうかして貴方の可愛らしい我が儘を叶えてあげ
たいと思えたんですもの」

「……えっ……あの……けど……」

「うつさい！イイ、ネギ？私らがそれでイイって言ったらそれでイ
イの。」

私はエヴァちゃんがムカつく、だから殴る。

あやかはアンタの手伝いがしたい、だから殴る。

アンタはエヴァちゃんを笑顔にしたい、だから殴る……そんだけの話でしょ？

協力したげる、アンタいちおう年下のガキで、私の……ホラ、友達だし」

あやかさん……アスナさん……僕……僕……！！

「兄貴、年上とはいえ女にここまで言われた男がやることあ一つですぜ。」

俺っちなんかがどこまで役に立つかは分かんねーっすけど、それでも俺っちは兄貴の為なら気合入れてきますわ。

んじゃいつちょ！大魔法使いにひと泡吹かせてやりましょうや！
」

【神楽坂明日菜】

「称号」 傷付いた戦姫くキズツイタセンキ>

「番号」 8

「色調」 赤

「方位」 東

「徳性」 勇気

「星辰性」火星

「アーティファクト」ハマノツルギ

【雪広あやか】

「称号」 気高く貴く生きる者<ケダカクトウトクイキルモノ>

「番号」 29

「色調」 金

「方位」 中央

「徳性」 正義

「星辰性」金星

「アーティファクト」貴族の誇り

六十二匹目 自分の『意思』を持って動けるのは幸せで、大切な事（後書き）

最後のは『仮契約カード』的な。

幾つか集まったら、専用の記事を作る予定です。

無論、『アーティファクト』の解説も加えて。

……眠ってた厨二心が騒ぎます。

しかしだいが原作から離れて来た……楓イベントも破壊したし……
ま、大丈夫っすよね？

六十三匹目 過去はいつまでも今を犯す（前書き）

最近ポケモンをはじめました。

ちゃんとクリアしたのはゴールドが最後だった自分としては、ストーリーの深さや質の良さに驚愕している次第です。

そして一通りクリアして、友人とバトル！……カバが硬え。誰もカバを抜けない！。

ということで現在メタモン集めて選別中。
リザードンをメインに入れて、一目惚れしたアブソルとルカリオ入れて頑張ろうかなと思う作者でした。

しかし廃人化しそうで怖い。

炎統一パもつくりたいなあ……って小説とまるで関係がない……。

六十三匹目 過去はいつまでも今を犯す

「……それは、不可能な話だ」

メガネを押し上げて、ガンドルフィー二先生はつぶやく。
変えようのない事実だと、突きつけるように。

そこに立つ誰も、否定の意思を示さず。

ただ一人、否定するのは話を持ってきた香坂くんだけ。

「……なんでだ」

「聞かずとも、理解しているだろう。」

貴様の友人であるらしい『悪の魔法使い』、彼女がなにやら追い詰められた状況に立たされているようだ。

だが、その何が私に関係があると言う？」

授業が終わって、香坂くんに呼び出されやってきた学園のとある一角。

彼は僕たちに『エヴァンジェリンを助けるための手助けをして欲しい』と頼んできた。

長らく友人を続けてきた彼女の様子が、どうもいつもとは違うよう
で。

その原因を探るため、僕たちに協力して欲しいと、そう持ちかけてきた。

まあ僕と式集院先生の力はサポートに特化してるからね、情報収集

にはもってこいだ。

その上明石教授は『指揮官的』立場にいつもいる。円滑に物事を進めていくために、いてもええ心強いこと間違いないだ。

ガンドルフィーニ先生の力も使い勝手がイイし、もしものときは神多羅木先生という訳かな。

けど、それを否定した。

『有り得ないこと』として。

「エヴァは、俺らの生徒だぞ」

「だが、彼女は『悪の魔法使い』だ」

「麻帆良に居たときに……アイツは何も悪さしてねえだろうが！」

「だとしても、歩んできた道は薄汚れた『悪』だ。

人を殺し、略奪を行い、欺き、生きてきた、褒められるべきではない、日の当たるとは言えない道。

一度刻まれたそれは消して拭えず、事実今とてまた『悪と称されることを繰り返すかもしれない』という疑念を体现するように行動している彼女を、何故私が救わねばならない？」

過去の汚点。

真っ白な中にある、一点の黒。

まるで違っからこそ、逆に目立つ。

過去は今を苦しめる。

現代の社会では、それが当たり前だ。

たとえば進学において、たとえば就職において、たとえば結婚において。

あらゆる分野でそれは効いてくる。

人を殺したことがある人間を、人を傷つけたことがある人間を、人を貶めたことのある人間を。

誰が好んで入学させ、採用し、人生のパートナーとして選ぶというんだい？

彼女が認められないのも、『裏世界の住人』の多くから恐れ忌み嫌われているのも。

大きすぎる、汚点があるから。

さらに言えば今、彼女はか弱く、ただ少しばかり授業に不真面目な少女に見えてしまうから。

今と、犯してきた過去のギャップ。

その差があまりにも隔てられていて、僕らは疑ってかかる。

『今は上手に演技をしている』。

『何かあれば牙をむく』。

『虎視眈々と自分たちを殺す策を練っている』。

『この地に縛りつけた自分たちを恨んでいる』。

だから端から決め付けてかかる。

『彼女は悪だから』。

ガンドルフィーニ先生の対応は、正しくはないのかもしれないけれ

ど間違っではない。

誰だって、香坂くんみたいに『過去を気にせず今を見る』事なんて出来やしない。

でもそんな香坂くんの考えもまた、正しいとも間違ってるともいえない。

過ちを犯すかもしれない相手に、対策を取らずに放って置いて。

いざ過ちを犯したときに『彼女はそんなことするような人物ではない』と喚いて、誰が取り合うんだろうという話だから。

「ネギくんがピンチに陥っているならば、私は彼を救うべく動こう。

神楽坂くんも、雪広くんもそれに然りだ……だが、彼女は違う」

「……昔、悪いことしたからか……？」

「そうだ、それは香坂……貴様自身がその身を持って体感していることだろう。

香坂、貴様がやるというなら私は止めない……だが私を、私たちを巻き込むな。

自分だけで解決しろ……私にも、私自身がやらなきゃいけないことがあるんでな、今日はこれで失礼するよ」

そう言うと、ガンドルフィーニ先生は去っていく。

「ん……僕は彼までキツイことを言おうとは思わないけど……でも、僕は僕で守らなきゃいけないものがあるからね」

式集院先生も、明石先生も。

「……すまない」

神多羅木先生はも、また。

「仲間内の問題だろう、他人に頼るな」

唇を噛んで、香坂くんは立ち尽くす。

僕は……僕は出来るなら……！

「香さく「悪い、俺が間違ってたわ」……香坂くん……」

「俺が、俺自身がやらなきゃなんねえことだった。

出来るのも、やるのも、所詮俺自身だった。

……ちと様子が違いすぎてさ、気弱になってたみたいな」

そう言うと香坂くんは懷からタバコを取り出して火をつけた。

煙が上がり、気持ちすべてを吐き捨てるみたいに大きく息を吐いた。

白くゆらゆら、それは消えた。

「俺は俺らしく、やってみるわ」

「政利、酒くれ」

「へいへい…… ったく、テメエはイイご身分だな」

ウッセーバカ。

俺だつてね、先生頑張ってるんですよーっと。

授業も終わって、仕事も終わって、調べ物に疲れた俺が帰りがけに一杯引つ掛けるくれえ、いーじゃねえの。

ちよいと…… 無茶言っちゃったし仕方ねえ事だったのかも知れねえが……。

イヤ、止めだな。

今更どーこーうじうじ言ったって如何しようもねえ。

鶴子だけでも協力してくれんだ、十分すぎるじゃねえか。

「ま、ウチの稼ぎになってくれるんだつたらどーだってイイがよ」

「だろ？ だったら寄越せ、俺ダイコンとスジな」

「『ガンモ』喰ワセロ」

「ぴぎ、ぴぴ」

政利の屋台。

まあいつもみてえに別の客がいるならともかくさ。
今日はもう遅え。

十二時回ってるしよ、スラばつとゼロが出てきても問題ねえって話だ。

もし来たら来たで隠せばイイだろ。
堂々としてたってよ、別段何もいわれねー気もするが。

……にしても、だ。

わっかんねーなあ、エヴァの言葉も行動も。

『騒動』、その首謀者はわかる。
っーか大体予想できる。

坂上だろ、どーせよ。

あれでアイツ、まほーせんせーどもからは人気だし。
ぶっちゃけ能力も高いみたいだし。

第一弱くなってるらしいが、腐ってもなまはげ扱いされてて今まで
避けられ続けて来たエヴァを相手にしてんだ。

他に、んな度胸のあるヤツ、俺は知らねえさ。

前に真也さんが言ってたが、麻帆良にや『英雄願望』が強い人間が
多いんだと。

なまじっか優秀で、中途半端に才能があつて、そこそこに強いんだ
と。

だから『エヴァを倒せる』、『その手助けができる』って極上の餌
に飛びついてんだろっが。

『超一流』なんて風な、高畑先生的な？

正面切って強いとわかってる相手にぶつかれるような、んなヤツらはいないらしいがさ。

『日本の聖地』ってことになってる、『世界樹』のあるここで『警備』やらを行えるって事実。

それだけでスゲーことなんだとよ。

だから坂上の先導に乗っかつちまったのかね。

俺にはよくわからんが……半端に強いヤツにはそれなりの悩みがあるって事が。

……まあ、そりゃそうだな。

たまたま俺の周りにやらずば抜けたヤツらが多いってだけでよ、自分を貫いてるヤツが多いってだけでよ。

普通に、普通に、普通な感じに『裏世界』に関わってたなら『聖地の護りに付ける』のは半端ないくらいの名誉なんだろう……想像でしかねえがさ。

ハハッ、思えばホント俺の周りってばレベルたけーな。

スラばうは言うまでもねえ、チャチャゼロも然りだ。

近くで何年も見ててさ、遊ぶみてえにかるーく相手を撫でるだけで、何年も何十年も必死こいて『鍛錬』だの何だのかんだのしたおつちやんやおばちゃんが、じーさんやばーさんが、地べた這い蹲ってんだもんな。

エヴァもそう。

有り得ねーよ、何だよ『六百万ドル』ってさ。

他の賞金首の相場が数万ドルとか、数十万ドルとか、高くって百万二百万だぜ？

しかもアイツがその金額かけられたのって百年以上前の話だろ？
……物価がちげーよ、くそつたりやー。

鶴子もそう。

千年以上続く伝統ある剣術流派の中で『史上最高の剣腕』だろ。

何それ、怖い……って感じか。

何百人？何千人？何万人？その辺どれくれーの人がその流派使ってるのかは知らんがさ。

それでも『砂漠の塩粒』みてーなかんじだろうさ。

はるかもそう。

アイツは才能ねー、才能ねーだの喚いてたけどさ、アイツが負ける姿何ぞ十数年で一度も見えたことねえっての。

『浦島流柔術』にや才能なくとも『八極拳』？

アレは半端ねーんだと。

……十分じゃん。

あのほっせえ身体からぶっ放される肘なんかよ、俺の身体が宙に浮くくれえの威力があんだぞ。

さらに特筆すべきは俺のクラスのガキども。

ネギは『真綿が水を吸う』なんて言葉どころじゃねえ。

巨大なポンプで水を吸い上げるみてえに、ガンガン真也さんとかから教えられたことを吸い取ってんだとよ。

アーニヤの『槍を扱うこと』に関して言えば、ネギ以上の天稟。さらに『炎の魔力』との相性が『数万人に一人』レベルで高いらしいわ。

桜咲は鶴子が言うに『才能のある人間が二十歳そこそこで取る』っ

て言われる流派の『仮免』。

その後三十くらいで『免許皆伝』になって、才能あるヤツが何年か何十年か経って『師範代』、さらに半端ねえのがよぼよぼになる年頃で『師範』ってな風に歩むらしいがね。

麻帆良に来たときに、既に『免許皆伝』されてたんだってよ。

龍宮は、俺がいまさらどうこう言える問題じゃねえんだが……まあ、アイツもアイツなりにいろいろあったんだろ。

『裏世界で名の轟くほどの殺し屋』だとよ、アイツ。
マンガみてえな経歴だわな。

長瀬はもスゲーらしいが……どっちでもイイか。

なんと……まあ……なんつーかなあ。

『未来あるガキども』、そいつに期待するっつー気持ちはわからんでもねえが。

でもさ……でもよ、やっぱり俺はどーも気に入わねえ。

アイツらがアイツら自身の意思で、そうやって歩こうとしてるんなら文句はねえんだけど。

俺は、今アイツらがせめて俺の生徒でいる間だけは、んなもんに自分のすべてを捧げてほしくねえと、俺は思う。

俺なんかが手を伸ばして届く位置にいるんなら、俺はアイツらの力になってやりてえと思う。

……俺が『裏世界』に入って、最初のころは周りの同年代のヤツらの意味がわからなかった。

俺みてえに遊び半分で、『強い相手に自分の力を試してみてえ』な

んで、頭がちとおかしい理由でその場に立ってんじゃないくて。

本気で、心の底から何かを成そうと、どうしてもそれとして自分は相手を殲滅しようとしてた。

負けてんのに、傷だらけになってんのに、時には死ぬようなヤツもいるってのに。

それでもガクガク震えながら抗ってた。

後でなんとなくわかったんだが。

要はアレ、医者の子が医者になるようなもん。

そうしようと親が教育施して、期待にこたえようと、そうなってやろうとガキが足掻く。

なあんとモニテリ思考なヤツらばっかだったんだわな。

どーりで、俺みてえなのとあんま話が弾まねえわけだわ。

参考書やら辞書やら置いて、ガリガリノート書いてる横で俺が遊んでるようなもんだからよ。

俺が弱つちい理由がわかった感じだな。

無駄に気合と度胸と根性と耐久力だけは増した気がするがな。

「あゝああ、やってらんねーっての」

「大変そうだな、『裏世界』は『裏世界』で」

政利は『魔法』やら『異形』やらの存在は知ってる。
が、それだけの一般人。

光さんの奥さんの、夏輝さんと同じ様な立場かね。

「ケケケ、耳聡イナ」

「『認識阻害魔法』だったか？エヴァの呪いぶち破った俺らに、軽々しいそれは効かねえってのは知ってんだろっが。」

たまに来るやつらが意気揚々とダベってるわ……人のダチ貶める、殺してやりたくなるような発言だがな」

「ぴっぴ」

「確かに、よー我慢できたなテメエ」

「……テメエのせいだろうが、隼人」

俺？何故？

「キモい顔ひねってんじゃねえ。」

「テメエが、俺らの総長様が『裏世界の問題は全部俺に任せろ』ってんだろっが」

「マジで？んなこと言っただけ？」

「……律儀に守ってた、俺は何なんだよ」

「冗談だ、冗談、忘れてるわきゃねえだろうが」

「そっか」

『裏世界の問題』……ま、はるかエヴァの話なんだがよ。
俺らにとって、『裏世界』ってのはその程度の印象だった。
ツエー人じゃねえヤツがいて、仲良くやってるヤツらがたまに
る場所。

俺が一番そうゆーのに近い位置にいたし、そもそも二人とも俺が引
つ張ってきて一緒にいたヤツらだしな。
んな、ガキの口約束……だが……俺の大事なヤツらの問題だ。

「政利、大人になるってのは面倒な話だな。」

ガキの頃はやりたい用にやって、縛るもん何もなく自由だったの
にさ……『ルール』とか『責任』とか、いろいろ背負って生きてか
なきゃなんねえ」

「誰だってそんなもんだ……俺らがちと外れてただけで、普通のヤ
ツらはガキのころから教え込まれてたんじゃねえの」

「そだな……犯せば、外れれば、放り出されちまうもんな……」

ホント、大人ってのは面倒。

自分が立って、その上にいろいろ乗っかって。

「でも、それでも譲れねえもんがあるよなア……誰にだってよう」

「ケケケ」

「ぴぎぎーっぎ」

「隼人」

「んだ、政利」

「疲れたら呼べ、嫌な客にはお帰り願いたいからな」

……ハハッ……へへへっ……。

「ヤダ」

「はああああっ!?!」

「最近さあ、テメエの彼女から『ようやく一つになれたんです』ってメールがガンガン来るんだよ」

「んなつ!?!」

「せっかく卒業できたんだし、テメエはあの娘守りながらここで気張ってる。」

「それでも俺は『麻帆良最強』だからな……っーことで、七夏ちゃんによろしくロリコン大臣」

「アイツ今大学生だろうがああああああっ!俺はロリコンじゃねえええええ!」

六十三匹目 過去はいつまでも今を犯す（後書き）

政利くんの彼女さんは、航空部部長の『七夏・イアハート』。

二人が付き合い始めたのは、少なくとも彼女が好きだ！と纏わりつき始めたのは、政利くんがそれなりに照れて対応し始めたのは彼が15歳のとき。

隼人と政利は同じ年。

隼人は現在24歳。

彼女は現在大学三年sうわ、何をすくあwせdrftgyふじこl
p:;@。

六十四匹目 『勇氣』を持って歩いていこう（前書き）

書きたかったところその一！

六十四匹目 『勇氣』を持って歩いていこう

「アーニヤ、テメエはここで何をやってんだ……あ？」

ここは麻帆良の森の中。

学園の裏にある、広い広い森の入口。

敷地内に森があるんだから、改めて麻帆良は本当に大きいって実感できる。

「なん……でもないわよ！」

「何でもねーんだったら、俺がこうやって休みの日に呼び出されるわきゃねえだろうが。」

女子中等部に通ってる飛び級少女が、デカイ声でとある女性に怒鳴りながら歩いてるってよ、そこら中から連絡が入ってんだわ」

……私とアーニヤだ。

アーニヤの事がいっぱいいいっぱいで、周りの事とか見えてなかったけど……ちょっと恥ずかしい。

変な目で見られてたって事だよね？

でも最近のアーニヤはやっぱり変。

いつものような明るさが無くて、何だか暗い雰囲気。

なんだか少しネギくん……って違う！

それはネギくんが暗いというわけじゃなくて！どっちかと言えば年不相応に落ち着いてるところがあるって話で！私はアーニヤみたいな子の方が好きだってああもっ！

取り乱した……情けない。

……とにかく、いつものアーニヤとは違う。

何か悩みごとがあるのだろうかとは理解出来る。

だから力になりたいと思っただが……アーニヤはストレートだ。自分の感情を、思いっきり今にぶつけてくる。

だから怒鳴られた。

『私の気持ちの何がわかるの』って。

私はわからない。

だから知りたいと思って、例え知れなくても叫んでストレスを発散して欲しいと思って。

私はアーニヤに纏わりついてた。

でもいつも、アーニヤは沈んでいる。

私はそんなアーニヤがとってもらいにくなくて、私はそんなアーニヤがみたくなかったから。

アーニヤは服をしっかりと掴んで、隼人先生をキツと見つめる。

二人の視線が交わって、一度私の方を向いて、隼人先生は大きく息を吐いた。

「ネギは問題にぶち当たって足掻いてるってのに、大河内に八当たりになんかしちまってよ。」

かつこわりーとは、情けねえとは思わねえのか？」

「でも……でも！ネギが変な事になってるのは『伝説の大悪党』なのよ！ネギのお父さんがようやく封印した相手なのよ！！」

問題？ネギくんはやはり何か問題にぶつかっていたのか？

でもここ数日は、ネギくんが急に男らしくなったってもっぱらの話。朝倉のガセ情報だと、神楽坂と委員長が筆……うん、これは違う、絶対違う。

ゴホン！それと『伝説の大悪党』って……何？
犯罪者がいるって事？

それに、その犯罪者にネギくんが関わってるって事？

……え？え……と、冗談……だよな？

「で、それがどうした」

「どうしたって……どうもこうもないじゃない！-」

「つえーからか？ぶち当たる相手が？」

「見ちまったからか？ネギかノされる姿を」

「……そうよ、その何が悪いのよ！勝てる訳ないじゃん」ネギは立ち向かおうと気張ってんのにか？「ツッ！？」

……うん、とりあえず整理しよう。

ネギくんは何かすごい相手ともめてるみたいだ。

そのもめ事を解決しようと必死になってるから、ネギくんはなにやら男の子らしくなったってみんなからの評価。

でも実は、一度もめ事を悪い方向に傾いたって事かな？

その現場をアーニヤも見えてしまって、アーニヤはネギ苦を助ける事

が出来ずに……逃げてしまった。

ネギくんは二人に支えられて、今はその相手に立ち向かおうとしてる。

けど……アーニヤは未だに立ち直れず、立ち上がれず。

そんな自分が齒がゆくで、そんな自分が情けなくて。

だから人に当たって、どうにかして自分を保とうとしてるってことか。

アーニヤは、アーニヤは強い人なんだな。

逃げて、かわして、目を逸らして、仕方ないって言うことだって出来るのに。

そう言えないから、ホントは心の底でそうなりたくないって思ってるから、だから張った気持ちを通ち切ることが出来ない。

流されてしまえば楽なのに、それが出来ない人なんだ。

「……アーニヤ、テメエはいつもネギに言ってるな。

泣き虫、ボケネギ、臆病者……別にそれはかまわねえ、殆どどんな相手にも悪口なんてもんは普通出てくる。

だがな……そうやってネギに散々吠え散らかしてたテメエが、テメエよりずっとにデカイヤツに会ったからって、バカにした相手ほったらかして逃げるのはどーゆー見だ？」

「でもっ……でも私は！……相手は……私なんかよりずっと強い、のに」

「……アーニヤ、テメエは『勇氣』ってものをなんだと思う」

「ゆう、き……?」

「そうだ、『勇氣』だ。」

パンピーのヤツらが恐怖して、不安がって、躊躇って、恥ずかしかって、枉げちまう行動。

そんなテメエの中からわき出てくる『負』の感情を振り潰して、テメエの意思を貫く事……『誰も泣かせねえ魔法使いになる』って夢、自分で放棄すんのか?」

「……けど……でもお!」

「……前も言ったな、泣くのは悪い事じゃねえ……泣け、泣け、わんわん泣いて、涙こぼして、その涙で地面濡らして踏み固めろや。」

吠え散らかして、ネギをバカにしたんなら最後までバカにし通せ。バカにした相手が立ち向かってるモンから逃げてんじゃねえ。

齒ア喰いしばって、立ってみせろ……そやって拳握りしめるほどに悔しいんなら、抗ってみせろ」

「……うううっ……けど……」

「アーニヤ、『けど』とか『でも』とか、んな下らねえ言葉使ってんじゃねえ。」

前にも言ったが、テメエが生み出した責任くれえ俺が全部吹き飛

ばしてやる。

「だったら従え、身体ぶち抜く心に……従って、テメエのやりてえ様に動いてみせろ……アーニヤ、テメエはどうしたい？」

近付いて、アーニヤの髪をやさしく撫でる。

私の理解の外の事が、どうやら起きてるみたいだ。

……『魔法使い』……遊びじゃ、ないんだ。

「私は……わたしは、ネギをいじめたアイツが許せないわよ……っ！」

「そか、だったら簡単だ。

今までテメエは逃げて来た、ネギが立ち向かってきたもんから。

「だから振り返れ……振り返って、真正面から見つめて、テメエの勇ましい心に従い進めや」

「……うん」

「……この世には、『勇者』って呼ばれるヤツらがいる。

「テメエみてえに強い心持って、バカデカイ相手に抗おうとするヤツらの事だ。」

『勇者』は勇気あるモノ、『勇氣』ってのは打算ねえモノ。

「アーニヤの心で燃えてるもんは、誰かにどうにかなって欲しくて、

自分に何か甘い汁が欲しくて貰おうとしてるような軽いもんか？」

「ちかうわよ」

「そうだな、テメエ自身が心からそうありたいって願うから、そうした言つて誓えるから貰ける想いだ。」

その想いは潰しちゃいけない……例え自分を逃がしたとしても、テメエの心の想いだけはゼツターにだ」

『勇氣』か。

私にも、あるのかな。

誰だって、逃げたい事はある。

どんなモノにだって立ち向かうなんて無理な話だ。

……それでも、立ち向かわなくちゃいけなくなった時。

立ち向かえるのが『勇者』なのかな。

「そして立ち向かうならば相手がどんなに強かろうが引つ込めちゃいけない……！」

それが本当の、本物の『勇氣』ってヤツだ。

なれよ、『勇者』に……なれるさテメエなら、なあ……アーニヤ」

「……なれるの、わたし……？」

「なれる……ネギにはなれねえ……が、アーニヤにはなれんだ。」

アーニヤ、喧嘩に必要なのは『気合』だ。

テメエにやそれがある……奥歯噛みしめて、腹に力入れて、カッ飛ばしてこいや」

「わたくしでも、できるもの」

「考えるまでもねえさ、テメエはこの俺の……誇るべき妹分だぜ？」

隼人先生がいなくなった後。

アーニヤが軽く指を振れば、その先に一つ火が灯った。

「……アーニヤ、それって」

「うん、『魔法』……アキラは、本当は魔法使いじゃないのよね」

「……うん、そうだ。」

てつきり私は……」

「イイの、それが普通だもんね。」

ちよつと舞い上がってたみたいだからさ」

涙に濡れて、ちよつと腫れた眼をアーニヤは擦って笑顔を浮かべる。
ちよつと前の、春休みまでのアーニヤで。

それよりももうちよつと逞しくなった風な……女の子に使うべきじゃないか？

ともかくそんな風に、小さなアーニヤの身体が少しだけ大きく見えた。

「……アーニヤ、アキラ、私これからちよつと気合入れてくるの」
……うん」

「だからさ……帰って来て、泣いちゃってたら、抱きしめてくれる？」

「うん、必ず……一緒に居る」

私は魔法使いじゃない。

私は魔法を知らない。

私はこれからアーニヤがどうするのかわからない。

それでも私はアーニヤの事を友達だと思ってるから。

抱きしめてあげよう、小さな身体を。

受け止めてあげよう、熱い涙を。

私はアーニヤの力になりたいから。

小さくて、熱くて、実は泣き虫なアーニヤ。

彼女は私の大切な人だから。

六十四匹目 『勇氣』を持って歩いていこう（後書き）

まぞっほ師匠の名言より。

もう初めて見たときの衝撃と言ったら……ポップがカッコよくなれたのはアンタのお蔭だ！
もう師匠大好きっす！

六十五匹目 『理想』と『現実』（前書き）

ようやくここまで……駆け足だから荒いなあ。

六十五匹目 『理想』と『現実』

手の内に、一枚の封書がある。

宛てはぼーやから。

『果たし状』と銘打たれて、私の前に居座っている。

ぼーやはあれほど打ちのめされたのに、まだ私には向かう気概があるらしい。

成程、ナギの息子らしく豪儀な男だ。

小利口に固まった優等生で、初めて見た時はまるで違う相手だと思っていたが……血は争えんな。

指定された日は……ククツ、『学園停電』の日。

年に二度ある、麻帆良全体のメンテナンスが行われる日。

私の魔力が戻り……『計画』が、実行に移される日か。

……失敗……出来ない。

私の役目は、ぼーやを引き付け引き出すこと。

それが私の役目。

嗚呼、私は弱いな。

狂いながらも己を保ち、生き続けてきた六百年。

張りつめた糸は、たった一人の男によって容易く切られてしまった。

堕ちる私を受け入れてくれて。

矢面に立つことになっても私の傍にいてくれて。

そこはあたたか過ぎた。

そこは心地よ過ぎた。

私は弱くなった。

自分の何よりも、大切な者ができてしまった。

失うのが、怖かった。

だから私は坂上の口車に乗った。

あの男の煽動により、次々の流され集まる齒車の一つに、私はなっていた。

たとえどんなことになるうとも、あの男にだけは死んでほしくなかった。

軽蔑されるのが、恐かった。

私の我が儘な我欲で、子供のような気持ちの暴走で、あの男の大切な者を傷つけるという事実。

ただの一言否定されるだけで、私はバラバラになってしまいそうだった。

だから私は坂上の口車に乗った。

『理想の世界』など、あり得はしない。

『理想』など、『完全』など、人が成せる所業ではない。

隼人はアレで、どこまでも『現実』に生きている男だ。

『理想』など都合のいいものには逃げ込まない、強い意志と心をもった人間だ。

過ちを、『理想』への逃走経路とはしない。

硬く冷たいそれを『意志』という名の業火で燃やし、堅く強い『鋼』にする。

生み出した『鋼』をバネとして、よりよい『現実』に生きようと這い回る。

だが無理だ。

どうやら私は、本来弱い人間だったらしい。

たった一か所やすらげる場所を見つけただけで、もうそこなしでは生きていけないほどに。

強く生きようと、己らしく生きていこうと抗った。

十の誕生日、『人』から『吸血鬼』へと変貌を遂げた日から。

『バケモノ』になりたてだった私を救ってくれた『魔法使い』に、『強く生きる』と教えられて。

私は『悪の魔法使い』。

私は『誇り高き悪』。

私は『ダーク・エヴァンジェル闇の福音』。

強く生きようと己を鼓舞して、強く生きようと己の足で踏みこんで。反面包み隠してきた己の弱さも大きく大きく育ってきていたらしい。

見た。

見せられた。

見せつけられてしまった。

『可能性の一つ』だと、坂上は言っていた。

だがそれでも……そこには隼人がいて、なんら変わらぬ隼人がいて、

その隣に私が居られた。

逃れられなかった。

私の『欲望』から、私の『理想』から。

私にとってその世界は、どうしようもないくらいに愛し過ぎるものだったから。

縋りたい、それに。

それだけが私の望み。

私は弱い……酷く、酷く、私は弱い。

「マクダウエル、サボリとは感心せんぞ」

「……悪いか、新田先生？」

「まあ私も教師だからな、注意せざるを得んだろっ」

「……フン」

風が吹き抜ける女子中等部の屋上。

フェンス近くにごろり寝転がったマクダウエルは、首すらこちらに
向けず生返事だ。

金系の髪がべったり地面に寝そべっている。

フム、『髪は女の命』なのではないのか？

せっかつ綺麗だというに、傷んでしまつてはもったいない限りだ。

「悩み事か？」

「何故そう思う」

「これでも教師歴云十年だからな、生徒の機敏くらいわかるさ」

現在授業中。

ちょうど今は香坂の理科の時間だな。

……春というのに、まだ微かに風は冷たいか。

桜は咲けど、そのあたりはどうとも、な。

マクダウエルの脇に腰を下ろし、辺りを見渡してみる。

いつもの風景、何十年と見てきた風景だ。

校庭では生徒たちが運動に励み、中庭にいるあれは美術か何かか？
教室の中では机に向かってしているものが大半だが……黒板を向いてい
るか、というのは別の話だな。

「それは……御立派なこつて。

聖職者だよ、間違いなく貴様は」

「そうか、ありがとう」

「……………」

口を塞ぐマクダウエル。

興味がなさそうに校門の方を見つめているが……。

「……フム、マクダウエルはイメージチェンジでもしたのか？」

「……………」

「もしそうならやめるべきだな、今のお前は酷く……ちっぽけだ」

「何だと!？」

激昂したような目付きで、私を睨みつける。

どうやら気付いてなかったのではなく……認めたくなかったというところか。

「ん、気付いていなかったのか？それはますます哀れだな」

「貴様……言っに事欠いて何様のつもりだ!!」

「事実を述べただけだ」

「キサマアツ！」

「小さく固まってしまっているな、マクダウエル。」

少なくとも私が初めに見た……十五年前のお前はもっと、強く大

きな女だったぞ」

詰め寄り、私の胸倉を掴んでいたマクダウエルは大きく目を見開く。信じられないとも言わんばかりに……それはそうか、私とてその存在を未だに信じられないのだからな。

「……何？」

「最初の……三年は、お前は学校というモノを楽しんでいたな。

初めてだったんだろう、誰かと近くに寄り添い、生活し、同じものを学ぶという事は？」

当時はまだ少し珍しかった『留学生』という名目のお前に、尖った雰囲気で避けられていたところもあったお前に、手をのばしてくれた友人が出来た。

一つ一つを楽しそうに……こう言つとどうなのかはわからんが、私にとっては少女のように笑っているお前が見えた。

何でもない、どこにでもいる普通の女学生のように、お前は今を楽しんでいた」

「きさ……ま……」

「次の三年の始まりはとても辛そうだった。

出来た友達と一緒にウルスラに行こうと相談をしていたというのに、お前は卒業できず、友達から忘れられて、夢遊病者のように虚ろだった」

当時のマクダウェルは酷いという風ではなかった。
笑顔は破り捨てられ、虚無感が顔を埋め尽くしていた。

今よりも酷く、一部の『教師』から避けられていた。

嘆き、己の今と己の過去を嘆き、人形のように空っぽになりかけていた。

初めて出来た友。

しかしそのすべてが幻想で、親しくしていた者から『貴女は誰』と言葉を突き立てられ。

「……だが、そこにあの男が現れた」

「……ま、さか……」

「楽しそうだったな、嬉しそうだったな、お前は。」

忘れられたはずの自分を覚えていてくれた相手がいて、その相手は自分を恐れる事など無く向き合ってくれて。

いつもこうやって屋上に昇り、あの男が来るのをこうやって待っていたな。

だが同時に酷く辛そうで、恐ろしそうだった……今回は偶々で、中等部を卒業してしまえばあの男も自分を忘れて、また一人になってしまふのではないかと」

「……………」

「だがあの男は忘れなかった……それどころかツルんでいた連中まで、お前を忘れず、お前に変わらぬ態度で接してくれた。

あの男は無茶をした、いつもいつも生傷が絶えない男だったからな。

問題を起こして、好き合っていた女と別れ、大学に入学し、教師になり……そんな男をお前は友として、時には母のように、時には恋人のように、お前はあの男を見守っていた」

「……あゝ……」

力が抜けたように、ぺたんと座りこんだマクダウエル。

初めの三年が経った時、私は周りに違和感を覚えた。
マクダウエルが『卒業していない』という事実。
そして誰一人として、そのことに違和感を抱かないことに。

「なあマクダウエル、お前は長い間あの男を見て来たのだろうか？

だったらそのお前が、あの男を見縊ってはいかんさ。

『魔法』なんてモノ、私はよく知らんし、大きな口は叩けない……だが、あの男はそんなモノに挫けるような器か？

そしてあの男はお前のような友を犠牲にしてまで、情けなく立つとする男か？」

「……クククッ……ああそうさ、ちがう……違うよ、新田先生……アレは、あの男は……そんなタマじゃない。

知ればいつだって拳を握り、たとえ自分がどうなろうとも、たとえ相手がどれだけ強大だろうと、立ち向かうような馬鹿だよ。

……それが、どれだけ周りを心配させているのかも知らずにな」

「だったら、お前はお前らしく前を向いて立ち上がれ。

お前はそんな小さく、弱く、脆い女ではない……大きく、強く、しなやかな女だ。

惚れた男に、愛した男に、らしくしてもらおうと自分が自分らしくいるのは、イイ女の最低条件だぞ？」

「……お節介め」

「お前は生徒で私は教師だ、お節介を焼くのは当たり前だろう？」

加えて言うなら私の妻は、お前に出来た最初の友人……妻の友人を助けるのも、当たり前前の話だ」

「……フン」

「そしてお前は気付いている、『完全』など、『理想』などどこにも存在しない。

今現在の現実の中、茨だらけのその道でしか誰しもが生きていく事など出来はしない。

『完全』や『理想』は、逃げの為に使う言葉に過ぎない」

「わかってるよ、それでも括りたいのが『心』というモノだ。

誰だって気づ付きたくなく、出来るモノならとそれに手を伸ばす……私はそれに手を伸ばし縋り付こうとしていた」

……やはりか。

あの男め、久々に飲みに誘ってきかと思えば……。

私と、坂上は大学時代の同期というヤツだ。

アイツは昔から『理想』を、『完全』を求める傾向があつたが……あの男の妻が、娘が死んでから更にそれは加速したな。不幸な事件だつた。

どうしようもなく、もし間が悪ければ私に降りかかっても何らおかしくないような、そんな事件。

私は、私ではあの男をもう変えることができない。

知っているとはいえ、どうやら立っている立場がまるで違うらしいからな。

香坂に頼むのは筋違いだったのかもしれないが……それでも、アレは笑ってくれた。

「ひとつ、香坂から言葉をもらってきているのだが」

「いらんよ、新田先生。

長い付き合いだ……アイツの言わんとしていることくらいわかるさ」

「そうか……ならばもう、お前は大丈夫だな」

「当たり前だ、私を誰だと思っている？我が名は『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』、史上最強の魔法使いだ」

「……ふふつ、そうか」

「ああ、行つて来るよ……私らしくな」

「そうしろ……あとそうだ、もう私の家にお前の卒業証書を置く場所は無いだ」

「来年の春は、ちゃんと貰い受けるさ」

「その時は話してやろう、酒を酌み交わしながら。」

私が過ごした教師生活で、最悪の問題児の話をな」

4月15日、午後八時少し前。
麻帆良学園、某所。

木々生い茂る森の中に、二人の男が向き合つように立っており。

「サンキュ、スラぼう、ゼロ。」

「ここはちと俺が行くからよ、殺さねえよう侵入者撃退でもしててくれや」

「ぴぎぎっ……ぴぴ」

「大丈夫大丈夫、俺ってばっえーし」

「ケケケ、何処ノ雑魚ノ妄想ダ？」

「ウツセー、とつとと行け」

一人は青い魔物と緑の人形を駆けさせた青年。
くすんだ紅い髪の大柄な男、『香坂隼人』。

「よくここが……ああ、さっきのに見つけてもらったのかあ。」

来るとは予想していたが、一人になる度胸がよくあったものだよう
う」

一人は黒髪を横になでるように固めた中年。
白髪が交じり始めた小柄な男、『坂上・S・和利』。

「ソイツは……俺が狙われてる、エヴァの人質なのにつて話か？」

ニヤと笑う香坂くん。

二人の間に電子音が響く。

携帯を開き、耳に当てたのは香坂くんじゃった。

『先生、麻酔弾で狙ってるヤツらを昏倒させたんだが……これでイイのかな？』

「オウ、十分だ。」

ワリーな、生徒のテメエにこんな真似させちまってさ」

『イヤイヤ、年に二度ある大きな稼ぎどころだからね、渡りに船だよ。』

じゃあ私は次の依頼に行くから、先生は先生で頑張ってくれたまえ』

ワシが今居るのは学園長室。

この場から『千里眼』に近い『探知魔法』で学園全体の様子を見ておる。

どうやら龍宮くんが、香坂くんを狙っておった者どもを、ということじゃな。

「残念だな、坂上……俺、人質じゃなくなっちまったわ」

「予想の範囲内というヤツだよ、君い……『計画』は動き出したからねえ。」

私がここで君を昏倒させれば万事解決だよ、流れ始めたそれは君ごとき小さな石では止められないのさあ」

麻帆良を覆う不穏な空気。

元凶はやはり坂上先生……フム、見事な指揮能力じゃ。
そしてどうやらこれは酷く根深い問題のようだの。

ワシは坂上先生にあたりをつけて、彼の動きを制限しようと画策してみた。

が、魔法界本国一部の上層の圧力により、なかなか上手くいかんかった。

どうやらそこ繋がっているようじゃの、彼は。

結局ワシに出来たのは人員配置に意見することくらい。

無駄を省き、『麻帆良を守る』という名目のもと、『遊撃人員』を減らせた程度じゃの。

「ネギを英雄に仕立て上げんのが、そんなに大事なのか？」

「まるで見当違いだねえ……彼の役目は餌。」

『神楽坂明日菜』を……イヤ、『黄昏の姫御子 アスナ・ウエス
ペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア』を高畑先生の傍から
引き剥がす事お。

彼女が『理想の世界』を作る為の鍵なんだよお！！」

『理想の世界』……アスナくんの事情……まさかつ、この男！！

「鍵と言っても、彼女もまた犠牲にはなる訳ではない……誰もが『
理想の世界』に溶け込む事が出来るのだからあ。

彼も、彼女もお……そして、Ms・マクダウエルもまたあ……だ
からこそMs・マクダウエルも協力してくれたあ。

『君と一緒に居られる世界に自分を預けれるなら』、そう言つて彼女は協力してくれたよお……羨ましい限りだね×「バツキャロー、下らねえこと言つてんじゃねえよ」……ほう？」

「一つ勘違いしてるからな、教えといてやるが……俺はテメエの戯言に興味なんざねえんだ。

俺がテメエに言いたい事はシンプルだ……坂上……よくも人のダチ泣かせてくれたなア……よくもウチのクラスのヤツらを勝手な事情で争わせてくれたなア……そしてえッ！」

右手に持った鎚を肩にかけて。
左手で作った拳に『氣』を纏わせて。

「頭ア血が昇つてる俺の前で！俺の生徒を奪つてくなんざホザいてくれやがったなああッ！！」

坂上先生の周りに『魔力』が集まる。

時は午後八時。

麻帆良の明かりは消え、長い長い四時間が始まった。

「我らが盟主は優しいお方……殺しはしない……だが我らが宿願を戯言と否定したその罪を償え。

コスモエンテレケイア
『完全なる世界』名の下、『理想の世界』へと誘つてやるうううっ！――」

「かかつて来いやあああああああああああああッっ

「！！！！」

『獣』は大きく咆え、『魔法使い』を真っ直ぐ彼の拳は突きつけた。

六十五匹目 『理想』と『現実』（後書き）

という訳で、実は坂上教諭はエージェント。

これ以降は戦闘描写ばかりですし、もうちょっとねり込みながら執筆していると思う作者でした。

六十六匹目 勇者の挑戦（前書き）

戦闘開始。

少々短いですが、やっぱりこの切り方が一番かと思いました。

六十六匹目 勇者の挑戦

……二十時だ。

ほう……フム、全盛期とはいかんが私の『魔力』だ。

成程、十五年押さえ込まれていて奥底でくすぶっている訳か。

本当の全力といくにはもう少々、時間がかかるようだな。

さて、これからどうする。

決定事項は『ぼーやとの決闘』。

封印されていた私にすらこの十五年、誰一人として立ち向かうとはしなかった。

過去の所業を耳にし、私の事を蔑むがそれはすべて心の中で、私の陰での話。

面と向かって、露骨に嫌な態度をするのは坂上か、あのオカマか、隼人の友人の堅物くらいだ。

なのにあのぼーやは、ただ単純に世間知らずなだけかもしれんが、それでも私に向かつて来ようとしている。

敬意を……純然たる敬意を示そう。

強大な敵に、遥かに強い私を相手に、一度圧倒的力の差を見せ付けられたというに、それでも立ち向かうことを決めた『度胸』に。

故に、邪魔はさせん。

私と、ぼーやたちの大切なパーティーだ。

『神楽坂明日菜』を捉えることも、引き剥がすことも。

何らかの可能性からタカミチがここまで来るような事態になった場

合に私が足止めをするということも。
すべてが私に与えられた『指示』だ。

首謀者の坂上を除き、あのオカマは微妙なところだが、多くのものがこれは『英雄育成の一環』だと考えている。
したがって私が過度な被害をばーやたちに与えようとした場合、それを警告する者たちが周りに控えている。

まずは、その排除といこうか。

私は『人形師』、踊れよ哀れな道化ども。

『魔力』を指先に集め、細い『糸』を作り上げる。
延ばす先は周りの森の中。
絡み、縛り、操り、吊るしてやろう。

タンとステップを踏む。

私の意のまま糸は進み、『真祖』の怪力で引き付ける。

一つ、二つ……十と少し。

これだけで私を止められると、思っていたのか？

……隼人が居たからか。
舐められた、モノだな。

イヤ、私がアイツを見くびっていたのが悪い。

餌とは、『理想』とは、ここまで心を鈍らせるとは……情けない限りだ。

「貴様あ！何をしている！」

喚くな、ニンゲン。

……嗚呼、貴様のことは覚えているぞ。

私を吊り上げてくれたニンゲンか……あの時とは逆の立場だな。

「聞いているのか！バケモノが！とつとこの拘束を解け！！」

「うん？イヤだ」

「なっ……貴様！あのデカブツがどうなっても構わん」「ああ、好きにしろ」……なにい！？」

「弾丸で撃ち抜く？爆弾で破裂させる？関係ない人間を巻き込む？……クハハッ……好きにしろ」

「……本性を現したかバケモノめ！自分に近い人間すらすぐに見捨てて糧とする！所詮貴様らはそんな薄情な生物だ！！」

バケモノ！今ここで貴様は唯一まもだった心を失い『悪』に染まりきった！！

だが俺はそうはいかん！拘束を解けバケモノ！人間の……仲間を想い友を救う人間の情というものを見せ付けてくれるわっ！！」

……滑稽だ。

こんなモノに私は……こんなモノと同じ盤の上に、私は立っていたのか？

失笑しか浮かばん。

ここまで、私は堕ちていたとは……許せ、隼人。

グギリ、首を鳴らす。

久々の……戦闘というヤツだ。

どうやら今日はメインの前に前菜まであるらしい。

汚い手で触れるのも悪い……小奇麗にしていこうか。

「見せてみる、ニンゲン」

伸ばした手で手招きを。

十手を構えたニンゲンよ、その情の深さを私に示せ。

「貴様の言うニンゲンの素晴らしさ、バケモノの私に教えてはくれないか？」

「イイだろう、教えてやる！その身に刻め！『正義』とは何か！『悪』とは何か！そして今この場に於いて『英雄』となる我ら最初の武勇伝として未来永劫伝えらる『鈍い』れぶるりっああっ！？」

妙な口上を聞くつもりはない。

十手を手に私を指差す男の胸に、拳を一つ押し入れる。

何のことはない、少々『魔力』を通わせたかろーい一撃だ。

男は地面を転がり、転がり、立つ木にぶつかり動きを止めた。

ニンゲンよ。

私に『情』がないというならば、そう思うならば、そう決め付けていればイイ。

貴様にとって、所詮私は蛆虫のような存在なのだろう？

ニンゲンに、蛆虫の心が理解できるはずもないのだから。

だが一つだけ覚えておけ。

蛆虫だろうが、貴様らにとって見下すべきモノなのかもしれない蛆虫だろうが……心は、ある。

そんな蛆虫に手を差し伸べてくれるヤツだけに、私は理解してもらえればイイさ。

「銃弾？爆弾？誰かを巻き込む？……下らん、それがどうした？

アレはそんな物で挫ける男ではない……血だらけになって、ボロボロになって、周りのヤツらに心配をかけて、それでも笑ってすべてを背負う……そんな男なんだよ。

十年以上アイツを見てきて、そんな簡単なことを忘れていた私の言葉ではないが……と、何だ、もうリタイアか？気合いが足りんな」

では、他も潰して前菜へと……フム。

「余計な事かとは思いましたが、増援を呼ばれてもどうかと……」

「イヤ、構わんさ」

茶々丸が気絶させたか。

……妙にここ数日、『自分で動こう』としているが……まあ、イイことだ。

ただの人形と触れ合うより、心地よい。

さて、荒いかも知れんが手は綺麗にした。

「見ているのだろう、小娘……この前は逃げたな、私との力の差を感じて。」

そして今もまた、ヒシヒシと感じているのだろうか？

恐怖は罪ではない、逃走もまた罪ではない……貴様は、どうする……？」

森の中で、何かの動く気配がする。

定石としては陽動、攪乱、目晦ましの後に一撃当てて離脱というところだろうか……。

「あああああああああつー!!」

相対するのは私。

力が失われていて、封印がとかれた今もまだ弱体化している私。

とはいえ有象無象ごとき、片手間で縊り殺せるような私……『闇のヴァンシエル福音』。

「アーニャ！フレイム・バスター・キイイイイーッックー!!」

定石をすべて握りつぶし、吼える声で己を高めて。

真正面、一直線、私に向かって飛び出した。

燃える炎は渦を巻き、私の障壁に叩きつけられた。

宙で一転、地面に降り立ち私を見つめる小娘。
荒い息が肩を揺らす。

「おんどりやあつー！」

猛る拳が大地を喰らう。

走る衝撃で震える身体を支配する。

……嗚呼、素敵だなあ小娘。

小さな体で燦っていた意志は燃え広がり、無限の未来へと踏み出していく……そんな予感を私にくれる。

先の薄汚いニンゲンとは違う。

過去に何度も、貴様のような眼をした者を見てきたよ。

「怖い、逃げたい……だからって私は怖くない！逃げない！！

もう私は怖がった！もう私は逃げた！だからもうそんなことしない！！」

教会の為に身を奉げた者の眼？

『正義』の為に『悪』を討つ者の眼？

己の欲望の為に力を振るう者の眼？

違う、違う、どれも違う！

力など関係ない。

強かろうが、弱かろうが、そんなものは問題ではない。

私はこの眼が怖かった。

年齢も、性別も、種族もそこには意味をなさない。

私はこの眼が怖かった。

噴き出す、力を。

想像を遥かに超える、強大な力を。

「アンタ！私の大切な友達を……バカで、ボケで、ダメダメな私の好きな人を！よくもイジメてくれたわねええええええっつー！」

『大切な者を想い抗う者の眼』が。

私は怖くて、怖くて……どうしようもないくらいに美しいそれに、羨望した。

……なあ、隼人。

お前は私の為にこんな眼を……そうだな、いつだって、してくれてたよ。

小娘は首のペンダントを引きちぎり、『魔力』を込める。

ズルリ、手元から延びた一本の槍。

身の丈を越える、『術式』の刻まれた『魔力媒体』兼用の武器。

「茶々丸、手を出すなよ……この者はたった一人で私に挑もうとしている……その姿を、穢してはいけない」

「イエス、マスター」

一歩下がる茶々丸。

私のログハウスから、学園に向けて歩いた先にある少し開けた場所。そこに私と小娘は二人、立っている。

「何故もがき、苦しみ私に抗う？流れを受け入れ、逃げ、生き延びるのが賢いとは思わんか？」

「それでも……そうかもしれないけど、譲れないもんが私にはあるのよー!!」

「くははははっ……そうか……小娘、名は？」

「アーニャ……アンナ・ユーリエウナ・ココロウア！」

「……日本人は桜を愛でる、私も諸手を挙げて同意しよう……散り際が潔く、儚いが故に何よりも美しい。」

さあ、私の腕の中、貴様もそのさまを見せてくれ」

六十六匹目 勇者の挑戦（後書き）

エヴァとアーニヤかつこいの回にしたかった。
本家のカリスマには、やっぱり及ばないなあ。

加えて前回の感想返し、帰宅してからにと思います。
感想をくれた方々、本当にありがとうございました。

六十七匹目 娘の道は娘が決める（前書き）

前半若干カオス。

なかなかうまくいかないあ。

六十七匹目 娘の道は娘が決める

「にやはっ……いきなり噛みついて来るってのは感心しないにゃ」

「……あははっ……あはっ、あははははっ」

反響して声が聞こえる。

すっぽんぽーんのまき絵がゆーちゃんに飛びかかって、腕を振るう。

ってはやっ!?

喧嘩の経験あったのかなあ……にゃんて言ってみたりして……。違うよに、そんな風じゃないもんね。

「うほっ!ちよっ、ちみっ!」

手を伸ばして、飛びかかって。

脚で薙いで、体勢を崩そうとして。

噛まれちゃったら……。

「えへへへっ」

「ふふふふっ」

「ははははっ」

亜子に円、美砂みたいににやるんだよね。

……うん!かつてない修羅場だ!

隼人にいの喧嘩見てた時も、こんな風に友達が変になる！……にやんてのはなかったもん。
うゝむ……ピンチだじえい。

今は学園停電中。

こんな時間に『お風呂はいろー』ってまき絵が言ってきたと思ったらこんにや感じに。

真つくら闇なのによく見える……スゴイなあ。

「うほおおっ！ピンチピンチピンチだよーなちゃんは！！」

「がんばれー」

「それだけ！？ヒドッ！！」

停電になった途端に、まき絵がきゅーに亜子に噛み付いたのさ。
催眠術？魔法？にやんにせよ……どしよつか？

んむゝ、第六感がギンギンだよ。

もしかしてにやんかいんぼーみたいのに絡まれてる？

「……これって……でもそうしたら……」

私たちと同じように噛まれなかったアキラは、にやんか心配事があるみたいだし……。

これはちよつと……おもしろくにやってきたかも！

隼人にいも、なんか絡まれてる気がするし！！

……桜子ちゃんは平和を愛する美少女なのに……隼人にいがいけ

ないんだもん。

私をさ、ちっさいときからさ、ずっと喧嘩に連れて行っちゃってさ。だ〜んだん見てるのも……楽しくなって来ちゃったじゃん。

「……アキラくん」

「ふえっ……なっ、何かな？」

そんな私ってさ。

喧嘩だー、祭りだーって多分なってる今がとっても楽しく感じちゃう私ってさ。

「行つてイイよ、アキラには行くところがあるんでしょ？」

「ここは私とゆーちゃんて止めちゃうからさ」

オカシイのかな？

「えっ……でも……」

「だいじょうぶうい！私を誰だと思つてんの？」

……でもさ、それでもイイによさ。

隼人にいと同じとこに立ってる。

お父さんにもお母さんにも、いらな子だった私をギュッてしてくれた隼人にいと。

そんな隼人にいの事……私、大好きだもん。

「おかしくなっちゃった友達止めるのは友達の役目。」

アキラには今行くところがあるのなら、そこに行かせるのも友達役目。

麻帆良最強チーム『蛇墮亞蘭弩』！総長香坂隼人の妹分は、ダチのピンチを助けるイカした女なのさ！！」

「……うん、ありがとう」

アキラは脱衣所に向かって走って。ちや〜んと着替えてかないとね、捕まっちゃったらダメだし！

……はいじゃま、アキラにあんなこと言っちゃったもんね。私も頑張っちゃうよーっ！

アキラを追うように走る美砂。その顔面に向けて、思いっきり足を当てに行く。

って防がれた！？
ん〜む……自信あったのにい。

「さっちゃん、アキラは？」

「行くところあるんだってー」

こっちに来たゆーちゃんと背中合わせに。
私は笑う四人を見る。

「……んふふっ、これは私たちが御膳立てな感じかな？」

「そうそう、だから私たちは私たちでやる事ババビンッ！って片付けちゃお」

これから友達四人と喧嘩するのに……やっぱりワクワクが止まらないよ！

隼人にいの教育が悪いんだに、間違いにやいや。

「どーやって？」

「殴って、蹴って、気絶させて、縛って、その後話を聞くのはどう？」

「おう……あんちゃん風味ですな」

もし、それで失敗したら謝ればイイもんね。

隼人にはずーっとそうやって来てたし！……だからずーっと謝ってばっかだけど。

「間違ってたらゴメン！痛かったらゴメン！だから私は全力で四人をお風呂場から出さない！」

隼人にい直伝の『桜子インパクト』を受けるによさー！」

「『ゆーなインパクト』も火を吹くぜい！ー！」

隼人にい直伝。

自分の持つてる全力全開で、最高の力でぶん殴ったり蹴ったりする事！

これぞ『桜子インパクト』!!

『蛭墮亞蘭弩』の名前を汚さない為にも……勝ちにいつちゃうぜ!!

暗がりの中、音が聞こえる。
草木をかき分け進む足音。

目視し、確認できる人数は……三人。
一人は手に弓を、一人は手に符を、一人は無手。
三十を越えた辺りの男性三人が、麻帆良の闇を進んでいる。

声が聞こえた。

一人が言う。

先頭を進んでいた無手の男だ。

「……この先か？」

訝しげに、辺りを警戒しつつ彼は小さく呟いた。

「間違いない……この先が『仕組まれたクラス』の者たちが住んで

いるらしい寮だ」

……答えたのは弓を持った男。
懐から……紙の様なモノだね。
取り出して、確認している。

溜め息を吐き、符を持った男が言う。

「哀れだな……魔法使いどもの示威のために、全国から集められた
人材だろう？」

『サウザンド・マスター
千の呪文』の息子だか何だか知らんが、その慰み者兼武器に
なる少女たち……これは俺たちが救うしかないな」

「ははっ、よく言う……どうせ俺たちだって掻っ攫って関西か、も
しくは向こうの世界か、戦場か、はたまた関東かに売る為に忍び込
んだんだろうが」

「そう悪い風に言っな、俺たちだって生活がかかっている。

この前アイツの腹にガキがいる事がわかってなあ……金がいるだ
ろ？」

「おっ、それはめでたい……お前もパパになる訳だし、これは頑張
るしかないぞ」

「俺も祝儀を包むか」

照れくさそうに笑う弓を持つ男。
それを囁し立てる二人。

……彼らは『奴隷商人』……か。

『魔法界』。

そこには『旧世界』と呼ばれる僕たちがいるところとはまるで違う『法律』があり、『常識』がある。

僕たちが今住む日本で考えるならば、まるで恐らく理解の果てであろうモノ。

その代表例が『ニヤンドマ条約』、通称『死の首輪法』。

『奴隷』につけられている首輪から来た俗称だね。

『魔法界』に於いて、『奴隷売買』は罪では無く、寧ろ正式な『商売』として成り立っている。

『法律』が『奴隷制度』を認めているんだ。

この法律を作ったのは『魔法界』にある『ウエペルタイア王国』の女王。

『災厄の女王』と謳われる『アリカ・アナルキア・エンテオフュシア』という女性だ。

しかし勘違いをしてはいけない事がいくつかある。

一つ目は『奴隷制度は彼女がその法律を作る前から存在していた』という事。

二つ目は『彼女は自国の民衆を護る為にその法律を発した』という事だ。

恐らく彼女が生まれる遙か昔から、『奴隷』という文化は綿々と受け継がれていた。

人間が『亜人』と呼ばれる存在を、逆に『亜人』が人間を、そう扱っていたのだ。

『亜人』とは人間が『魔法世界』に行く前からそこで生活していた『人の外見を持つ人ではないモノ』の事で、簡単に言えば『向こうの世界の先住民族』。

今でこそ双方が双方に『人権』を持ち扱っているが、一昔前まで彼らは人間に取ってモノ同然だった。

理由は簡単だ。

『自分と違うから』。

それだけ人は人を殺せ、人は人を道具に出来る。

『亜人』は人間の道具だった。

彼らは『魔法界』の南側を中心に住んでおり、北に居た人間とはいっても対立していた。

殺されるから殺して、殺したから殺される。

そんな負の連鎖を何千年と前から繰り返していた。

しかし、その事情も一千年ほど前に少し変わる。

南に一つ国が生まれた事により、『魔法界』に住むほぼすべての『亜人』はその国の民となった。

国の名を『ヘラス帝国』という。

……と、話がズレたけど、とにかく『奴隷』は昔から伝統的に存在していた。

そして『災厄の女王』が『死の首輪法』を可決させたのも、単に自国の民衆を救う為。

彼女が女王として君臨していた国は、現在滅亡している。

20年前に起きた戦争が原因で、『ウエペルタティア王国』は姿を消した。

その時大量の難民が発生した。

国が一つ潰れたのだ。

そこに所属していた人間はすべて帰るところの無い難民として扱われる。

大量に発生した難民を、無償で受け入れる国などありはしない。

その『ありはしない』を無理矢理『あり得る』にする為、『奴隷』という道具の形で彼女は民衆を他国に捻じ込んだのだ。

『奴隷』という盤上だけど、民衆を殺さないようにするために下した英断だと僕は思うよ。

『死の首輪法』。

ぶっそんな俗称をつけられてはいいるけど、それでも無条件に民衆を貶めるような真似にしないためにも必要だったと感じる。

もちろん『奴隷』として『逃亡・脱走した時に爆発して奴隷本人を殺す機能』が付属している。

でもまた同じように『奴隷が非人道的な扱いを受けないように監視する機能』も付属している。

非難されることも多い彼女だけど、王族として、一国の長として、

果たすべき行動を行った立派な人間だと僕は思う。

『奴隷』になったとしても、それでも自国の民衆に生きてほしいという願いが痛いほどに伝わってくるからね。

『災厄の女王』は公式には20年前に起きた『ベルム・スキスマイクム大分烈戦争』の終結

から2ヶ月後。

『メガロメセンブリア元老院』……要するに『北にいる人間たちの最高幹部』ってところかな？

彼らによって『父王殺害』や『オスティア周辺の状況報告の虚偽改竄』などの罪により逮捕されている。

その後『ケルベラス無限監獄』という、『魔法界』でも指折りの犯罪者が投獄される刑務所に叩き込まれた。
2年間投獄された後、『ケルベラス峡谷』に於いて死刑に処せられ死亡したとされている。

彼女が作った『死の首輪法』によってそれで以降。

北では『亜人』以外である人間も、奴隷として扱われるような風潮が現れ始めた。

ここで面白いのは、それでも南の『亜人』たちは『亜人』を『奴隷』にしないって所なんだけど……これを話すと更に話がズレてしまうからね。

簡単に言えば、『亜人』は『ヘラス帝国』が出来てから一千年。

人間とは比べ物にならないほどの、『自分は亜人である』という誇りを持って彼らは生きているというところかな。

話を、戻そう。

『奴隷』を扱うことは、非常に効率が良い。

『奴隷ビジネス』はとても儲かる。

タダで働く『労働力』を手に入れることが出来るわけだからね、作業コストは格段に低下する。

更に『裏世界』に生きる僕たちからすれば、『強力な手駒』を手に入れることも出来る。

『裏世界』で必要な技術における才能を持つ子供を『奴隷』として所有していれば、それは恐ろしく有能な武器となる。

『奴隷』が大々的に認めらるようになってから、反対に認められていない『非合法的な奴隷』も多数出現している。
具体的に違いを言えば、『人権の有無』。

命に危険を及ぼす場所に無理矢理行かせるとか、真つ当な『死の首輪法』によって扱われる『奴隷』には、一部の『奴隷剣士』と呼ばれる人たちを除いて不可能な行動なんだ。

『それは非人道的である』って首輪に組み込まれた『魔法』によって判断されるわけだね。

でも、『はい、そうですね』と納得するほど人間の欲望は小さく薄くない。

『死の首輪法』が出来る前、『奴隷』はモノだった。

モノは武器として、投入されることは当たり前だった。

しかし『死の首輪法』が出来てから、『奴隷』として認められた存在はモノではなくなった。

過去にモノだった存在も、『奴隷』ではあるがモノではなくなった。
指をくわえて見ているほどに、人間すべてはやさしくない。

裏ルートが出来上がった。

『非合法的な奴隷』を高額で売買する人間や組織が現れた。

高畑先生が出張に向かった先で破壊しているのも、こんな組織が多かったりする。

『奴隷商人』は『魔法界』に於いて正式なビジネスだ。だがそれは双方の納得によって生まれるビジネスだ。決して……誘拐という形で行ってイイものではない。

麻帆良には潜在的に優秀な人材が多い。

何らかの分野において稀有な才能を示す存在は、世界中でもこのこと同じような『聖地』に集まっていると僕は感じ取れる。

『聖地』に満ちる『魔力』が、そんな存在を引き寄せているのではないだろうかと考察する。

故に、侵入者が後を絶えない。

その多くが『非合法的な奴隷』を扱う『奴隷商人』だ。

僕は……僕は裕奈に強くなつて欲しかった。

夕子のように、彼女の意味を継いで羽ばたいて欲しかった。

広い心を持ったしなやかな女性になつて欲しかった。

『麻帆良学園女子中等部2-A』。

この異常性は、才能の豊富さは、他と比べて一線を隔している。そこに僕と夕子の子供がいて、僕はうれしかった。

『英雄の息子』のために集められたクラスだとは知っていた。
いずれ血を見る戦場に、踏み込むかもしれないということも知っていた。

それでもうれしかった。

……夕子がいなくなつて、僕一人で彼女を育てて。
裕奈をそんな才能のある子供に育てることが出来たと、僕は狂喜していた。

でも……違う……違うんだ……。

裕奈は、望んだのか？戦うことを？
裕奈を、僕は本当に彼女の心を心配していたのか？
親として、僕は彼女を護ろうとしていたのか？

裕奈は成長した。

天真爛漫で、強い心を持った少女に。
そんな彼女をすべて僕が育てた？

……驕り高ぶった狂人の妄言だ。

僕は裕奈をレールに乗せようとしていただけだ。

『英雄の息子』に身を捧げて、僕の欲望を満たすために突き進ませるような道に。

『夕子の死』、『夕子の想い』という免罪符を掲げて。

裕奈は成長した。

それは多くの人間と触れ合い、沢山の物事を自分で判断したからだ。

裕奈は裕奈だ。

夕子でもない、僕でもない。

ただ一人の僕たちの自慢の娘だ。

裕奈の人生は、裕奈以外が決めることがあつてはならない。
それをサポートするのが、親の役目だ。

人として道を外れたときは引き戻し、僕の手を握り進むときは笑いかけて……いずれ一人で、仲間や友達と進むときは見守り助ける。

それが、親としてあるべき僕の姿だ。

『精霊』を召喚する。

『土の中位精霊』を十体。

直接的な戦闘は苦手だ。

どうやら『指揮官』としての方が、僕は有能らしい。

三人の『奴隷商人』が僕を見る。

「……警備の人間か……面倒な」

「警備の人間？……イヤ、僕は違うよ」

箒手に、僕は力を込める。

「僕は、娘に危ない真似をさせようとしてた……頭のおかしいただ

の
バ
カ
だ
」

アンケートにご協力ください

自分の拙い作品、『俺、転生したんだと』を読んでもらっている皆様、いつもありがとうございます。
作者のメドローアと申します。

実は読者様の貴重なご意見により、前々から思っていた違和感を再認識されました。

これはどうなのだろう？と自分自身考えて、やはりおかしいかもしれない、と思いましたのでこの場に書かせていただく次第となりました。

その内容は、『主人公の隼人の性格と行ってきた一部の言動がおかしい』という事です。

具体的に言えば『過去の恋愛』についてです。

やはりどうも、そう簡単に『浦島はるか』を切った事が彼とは合い過ぎていない。

そう感じてしまいました。

ですのでこの作品、大幅改定をしたいと考えております。

改定内容は『浦島はるかという登場人物の退場』。

彼女に舞台から退いてもらい、『二十九匹目の後半』から話を変えて書いていきたいと思っています。

彼女は自分的にもかなり好きなキャラで、それゆえに話に組み込んだのですが……そのせいでどうも可笑しな形になってしまいました。

自分的にはそちらで行きたいと思っていますのですが、よろしければ

皆様のご意見を聞きたいと思っております。

なお、改定の場合は『改定版』と銘打ち新しく投稿したいと思っています。

こちらの『旧版』はとりあえず完結という形にして残しておく予定です。

読者様方、どうかご助言をよろしくお願いいたします。

【追記】

シャークティの伏線回収については、エヴァ編の中で行っていく予定です。

六十八匹目 それでも僕は父親でありたい（前書き）

長らく放置して申し訳ありませんでした。

はるかさん云々に関しては、このままということで進めさせていただきます。

そして怒涛で、エヴァ編終了まで終わらせる予定です。

その時に隼人のやったことや、はるかさん、シャークティについて厳しく意見をお願いします。

拙いですが、よろしければご意見お願いします。

六十八匹目 それでも僕は父親でありたい

まるでそれは燃えたぎる炎のように。

一発の矢となつて、アーニヤさんはマスターへと向かつて行きました。

魔力で身体を強化して、ただただ愚直に、真正面から。

「ッアア!!」

「クハハッ、甘いなあ……」

一歩、足を後ろに下げて身体を交わす。

それだけでアーニヤさんの突撃をマスターはいなします。

「うりゃあっ!」

それでもアーニヤさんは諦めません。

地面を蹴り、無理矢理に速度を殺し、また逆方向へと飛び込む。

マスターへと向かい、槍の先端から生じる炎がアーニヤさんを包み。

「だから甘いと……」

火の玉のようになったアーニヤさん。

その発現元となっている槍、それを支える腕を、躊躇うことなくマスターは掴み上げ。

真祖の掌底が、微かに膨らみつつある胸を突きあげる様に射抜きました。

「言つて、いるだろう……？」

天に向けて放られたゴムボールのように、アーニャさんは空へと向かつて突き上がります。

くの字に折れ曲がった体のまま、それでも手に持った槍を離さぬように。

赤い雨が少しだけ降り注ぎ、マスターの金髪を、白い肌を濡らしめます。

そつと頬に手を当てて、紅い舌でチロと舐めとりました。

「強き意志ある者の血……それは何時だろうとも、極上の味がする」

微かに見えるマスターの手の平は、ずるりと皮がむけており。

そして時が巻き戻るように、いつもと変わらない肌へと戻りました。

月だけが顔をのぞかせ、薄い金色が敷れていた空。

金は微かに赤に浸蝕され、マスターの身体を照らします。

「さあ、もつともつとこの宴を楽しもうじゃないか」

「エヴァンジェリイイイイイイイン……！」

足の裏から炎を噴出し、アーニャさんは再びマスターの下へと突撃を始めました。

空間に孔が開く。

切っ先に触れた精霊は、力を失い土塊と消えた。

拳が叩き付けられる。

硬化されたはずの腕は、子供が作った土団子のように崩れ去る。

消え去る先から新たな人型を生み出し、精霊をねじ込み稼働させる。

僕の扱う『土人形』。

その主だった戦法は『破壊させて、捕らえること』。

直接的に戦えるほど強力な『土人形』を作り出すだけの魔力は僕にない。

そもそも僕は『援護型』の魔法使いだ。

相手の行動を制限し、その隙を組んだチームの誰かが突く、というのが僕のスタイル。

一人で戦うのは、苦手だ。

麻帆良の濃密な『魔力』を宿して生まれた『土人形』は、泥の剣と泥の盾を手に向かう。

「っち！メンドクセエ！」

殴りつけた拳士の男。

崩れ去る土塊を力のまま纏わせ行動を制限させるっ！

「あああっ！煩わしいんだよ！」

「落ちろっ！」

相手をさせていた二体の『土人形』を、自壊させ体に付着させる。
これで地面と同化させれば抵抗されることはおそらくな「『木気来々』」拙っ！

「『きのえきたりてほうがせん つちくらいすすむうで つちあばきくさらすあし めぶき めぶき めぶき』」

男から投げられた『符』は拳士に絡み付いていた土に取り込まれ、ひとつ小さな芽を出した。

『言霊』が風を生み、含有していた『魔力』によって肥沃だった土は、見る見る枯れていく。

「……よくも、舐めた真似してくれたな」

「『きのときたりてしんちようせん つちたがやしくだすくび ちしめてこわすは のびよ のびよ のびよ 木剋土』」

拳士の体に、もう土はなかった。

僕の間では刹那の瞬間に、拳士の拳は僕の腹を貫いていた。

『魔力』で強化していても、その行為を嘲笑する痛みが僕を襲う。
胃液がせり上がる。

「くそヤジがア……調子こいてんじゃねえぞ！あア！！」

鉄塊のように重く硬い拳が顔面を襲う。

メガネのレンズが割れ、頬と口内を繋げる。

「人の商売邪魔してんじゃねえ！」

鼻が折れる。

激痛と鈍痛が織り交ぜられ、顔中を熱く溶かす。

硬いブーツが顎を削る。

肉が、抉れた。

「その辺りにしておけ。麻帆良に張り巡らされた『学園結界』が消え、魔法使いの監視が失われたとはいえ騒ぎになれば人が来る。向こうもそれを承知しているだろうからな」

「……わかってる」

弓使いの言葉に、拳士は舌打ちした。

「じゃーな、ジジイ」

唾が僕の顔に落ちる。

……ハハッ、バカにされてるなあ……。

でもね、そんなことより……どこに行くのさ？

「……面倒だな、時間稼ぎか？」

地面から伸びた『土の腕』が三人の足を握り留める。

「『——木剋土』……これでいいだろう」

地面に沈み初めていた『奴隷商人』は、足に付いた土を払う。
喉元に足先が突き刺さった。

「死ねよ」

手に持った箒も吹き飛ぶ。

鉄の味が口を満たして、呼吸がしづらいよ……これは。

髪が掴み上げられて、僕の顔を弓使いが見る。

涼しい顔だ。

幾度も幾度もこんな誘拐を繰り返してきたんだろうね。

「貴様は何だ？これから俺たちが狙うヤツつら身内か何かか？」

「……父親だ」

「ほう、なるほど……それは随分と薄情な父親だな」

僕の言葉に弓使いは冷たく笑う。

……薄情だって？……知っているよ、そんなこと。

「魔法使いの考えは、それに組する者たちの考えは理解できない。両親に知らせもせず、才能があるからという理由だけで道具として扱おうとする。俺の家業である『奴隷売買』も褒められたものではないが……貴様らもまた同列に『一般人』を扱っているのに気づいているのか？」

「……………」

「貴様のように知っていて、認可しているのは俺から言わせればクズだがまだ幸せだ。知っているんだ、許可しているんだ……知らないうちに人殺しを家業にし、人を殴ることを仕事にし、それを親が知ったとき、どんな反応を返す？」

耳に、痛いね。

「もし知られておらず、任務の最中に死にでもしたら……『不慮の事故がありました』とでも言って金を積み丸め込むのだろう？ それとも何か、『記憶の改竄』でも行うのか？ 俺たちとお前たち、何が違う？ 善人面する貴様らのほうが、俺は外道だと思うがな」

裕奈のいるクラス。

その一部の少女の身内は、自分の娘が『英雄の息子』に関わることになるかもしれないと知っている。

僕のように『裏世界の関係者』を身内に持つ者や……表世界にいないがらにして、『裏世界』の存在を認知している人間だ。

だがそれはあくまで一部。

知らずに、ただ『日本で有名な私立学園だから』という理由で麻帆良に通わせている親御さん方がほとんど。

弓使いの男が言うように、下手をすればイザコザに巻き込まれて『

死ぬ』かもしれないのに。

『魔法は秘匿されるべきものだから』。

蜜だけ吸い、養分など与えはしていない。

それが現状だ。

「そして、知らないならともかく知っている貴様は最底辺のクズだ。人間、知らない人間ならば、親しくない人間ならば俺のように『商品』として扱う事が出来る。たとえどんな運命をこの先辿ろうと、俺には微塵の関係もないからな。あるのは取引の際に受け渡される金だけだ」

……『クズ』……知ってるよ、それも。

「俺は『奴隷商人』だ。だがもし俺の身内を『奴隷』として扱おうとするヤツがいたら俺はそいつを殺す……それが普通の人間だ。なのに貴様は、自分の娘を危険に差し出そうとしている……『英雄のための奴隷』としようとしている……これをクズと言わずして、何をクズと言っ？」

「わかってる……知っている……僕は、クズだ……僕の欲望を、僕の理想を満たそうと、娘を使っただけ……」

「……ならそこで寝てい」それでも……！」「ん？」

「僕は裕奈の父親だ……君たちとの交際なんて、僕は認めないよ？」

今でこそ、僕は人付き合いをそれなりに。
友人と呼ばれるような相手と語り合い、酒を飲むことができる人間
になっている。

が、一昔前の僕はまるでそんなものには無縁だった。

一人で、いつも、ただ黙々と。

周囲でじゃれあう人間を内心馬鹿にし、勉学に励まず遊びにかまけ
る人間を見下し、色恋を姦しく騒ぐ人間を軽蔑していた。

TVが切欠だったか、本が切欠だったか。

没頭した『考古学』という分野。

世界のすべてはそれに劣り、それを学び新たな歴史を開拓しよう
としている自分は世界で最も偉大な人間の一人だと信じて疑わな
かった。

僕は『考古学者になろう』という想いを、それを知ったときから常
々胸に秘めていた。

学生時代、大学に入って夕子に出会うまで知り合いがいた覚えは小
学生の時分を除いてない。

必要ないと思っていた。

なぜに自分がそんな低脳な相手と付き合わねばならないのだと思っ
ていた。

学力だけは無駄に高かった。

初めて、そんな僕が彼女に出会ったのは大学に入って二年目の夏のこと。

『魔法界』にある様々な遺跡をこの目で見てみたい！という唐突な思い付きからだ。

僕の両親は『魔法使い』ではない。

父方の祖母が、所謂『イタコ』というヤツで。

ただ『そんな世界がある』という認識だけ漠然と持っていた感じだ。

祖母は高名な『イタコ』の弟子だったらしく、そちらの方の情勢には聡かった。

彼女自身は優秀な術者ではなかったようだが、同門の姉弟子や妹弟子には名の知れ渡った術者もいた。

『魔法界』と呼ばれるまったく新しい世界を知り、僕の胸は更に高鳴った。

『見てみたい』という思いに全身が駆られた。

そして僕は祖母の伝手を辿り、『魔法界』に足を踏み入れることになった。

「邪魔だっつってんだろぅが！」

「……………」

当時、二十年と少し前。

『魔法界』の治安はひどく悪かった。

ちょうど戦争が行われていた時期だったんだ。
今思えば当然のことだけだね。

そんな御時勢に、『勝手に戦争してろ』なんて自分が戦場にいるのにまるで関係ない風に振舞って。

僕は『魔法界』にある史跡をひたすら歩きわっていた。

幸せだった。

心が震えた。

この感動を知らずに戦争に励む『魔法界』の住人を下等種だと侮蔑した。

……とはいえ、そんな我が儘放題な態度を取っていれば神経が尖っている戦時中だ。

どうしても目に付く。

捕縛された、不法侵入だという名目で。

正直に言えば意味がわからなかった。

『ここには重要な遺産があるから、それを奪いに来る敵国のスパイかもしれないから』と。

僕を捕らえた女性はやさしく諭してくれたんだけどね。

やっぱり意味がわからなかった。

『太古のロマンを感じないとは意味がわからない』、『どうして僕がわざわざここまで来たのに見学の邪魔をする』って、逆ギレしちゃってね。

そこまで僕は自己中心的で、人の都合も考えられないような人間になっていったんだ。

家族以外の相手と触れ合うことが限りなく少ない。

だから人間的に揉まれておらず、人の気持ちもわからず、人の距離もわからず、どこまでが許容範囲でどこからが許容範囲外なのか。人間が成長していくにつれて自然に学ぶその知識を、僕はすべて捨て去っていたんだ。

結果、殴られた。

『ふざけんなクソガキ』と罵り殴られた。

「……ううつ、あ……あうつ」

「しつけえんだよ！」

今思えばそれも当たり前。

でも当時の僕はそれがわからなかった。

自分のやりたいことが一番で、他人の都合なんて二の次だったんだから。

その女性こそが僕の妻になってくれた人。

当時魔法界で、とある国のとある部隊に入っていた、裕奈の母親。

だから、僕は……。

「それでも、それでもっ！僕には全てをかなぐり捨てても護るべき娘がいる！それに気付いた！ここだけは何があっても通さない！！」

「テメエ……しつk「退いてろ」ツちょ！リーダー！」

「娘は、我が子はかわいいな」

「ああ、僕の宝物だよ」

「……イイ眼だ。護ろうとする、子を護ろうとする親の眼だ。だがまた俺も……」

「わかるよ、君もまた親の眼だ。大事な子供を飢えさせまいとする、親の眼だよ」

「そうか……ならば死ぬ。俺と、コイツらの家族の為に」

「だから通さない。僕の大事な娘と、その日常の為に」

六十九匹目 『英雄』と『悪魔』（前書き）

ご意見いろいろ感謝します。

隼人とその周りの関係についてはこの章で改訂していきます。

それでもまだ違和感が、あると言われる方はご意見お願いいたします。

六十九匹目 『英雄』と『悪魔』

「小娘え！ 逃げてばかりでは何も出来んぞ！」

「うつさい！」

森の中。

木々の間を這うように駆け抜けるアーニヤさんを、僅かに宙空に浮くマスターは逃すことなく追いたてています。

付かず、離れず。

そして時折……。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック
エラントース セブテンデキム・スピリット・マギカ 氷の精霊 17頭 集
イニクム・コンキタント サギタ・マギカ 魔法の射手
敵を切り裂け
魔法の射手
連弾 氷の17矢」

『魔法の射手』を、遊ぶように放ちながら。

それは、ネコがネズミを追いついてるように私には映りました。
以前マスターが、はらはらしながら、お腹を抱えて笑いながら見ていた、某ネコとネズミの追いかっこのように。

殺す気は、微塵もないように見受けられます。

戦闘不能に追い込む気もまた、無いように見受けられます。

思考するに、それは恐らく単純に。

「——ッ！」

「どうした、その程度か小娘え！」

逃げつつも、逃げながらも。

一度たりとも弱い意思。

そんなモノを、アーニヤさんが感じさせなかったからかと思われま
す。

……イエ、私自身はそれを、感じ取れていないかと思うのですが。

ですが、どこか、言うなれば……例えばこれまでのマスターや香坂
先生、他の方々の姿を見て。

そのように見えるという、その可能性が高いという、ただそれだけ
の、話なのですが。

……そんな私の思考回路が、何となく、物悲しく思う思考が出てい
ることは事実です。

追うマスター。

逃げるアーニヤさん。

やがて私を含め、森を抜け。

眼前には麻帆良大橋が見受けられつつありました。

ぞろり、ぞろりと、目の前にあるログハウスの周辺に人間が群がっていた。

ダークエヴァンジェル
『闇の福音』の住居。

麻帆良で『正義』を名乗る者たちからすれば、『悪の権化』とも言える存在の、麻帆良の汚点とも言える存在の根城。

数分前、この主人は俺の弟子でもある少女を伴ない飛び去った。
あの少女、アーニヤには意思があった。

『英雄の息子』、ネギ少年にもそれはあったが、彼のそれは……漠然とした憧れから来るものだった。

だから、俺は個人的にアーニヤの方が好ましく思える。

自分の確固とした、現実を見た目的を持っている。

少年は少年らしく、夢に生きている。

少女は女として、現実を生きている。

俺は後者が好み……まあそれだけの話だ。

だから、あの『ダークエヴァンジェル闇の福音』に、遊ばれているとはいえ正面から向かって行ける。

それが、嬉しいな。

……俺にも、子供がいればあの年頃なのだろうか？

親の心か、師としての心なのか……どちらにせよ、今日は秘蔵の酒を飲まねばならんな。

ともかく、エヴァンジェリンのログハウスは今もぬけの殻。
一様に武器を持った人間は、醜悪に顔を歪めた。

「で、お前らは何をしている？」

「何を、とは心外ですね神多羅木先生。僕たちはこれから正義を実行するのですよ」

……一言、イイだろうか？

コイツらは、歳を重ね社会人となって、麻帆良の警備にあたっているコイツらは……阿保なのか？

「正義、か？」

「ええ。彼の者の根城を破壊し、我ら正義の魔法使いに刃向かう愚かさを教えてやるのですよ！」

居るのは、俺を除いて十数人ほど。

その誰もが口を開いた阿保に同調し、やる気満々で……武器を握っている。

「失笑しか浮かばん」

「……はい？」

「どいつもこいつも、封印された少女一人に抗う勇氣なく、あの娘のように真正面から闘う度胸もなく……空になった住居を襲い、破壊する。情けないと思わないのか、貴様らは……？」

「ななつ、なななな何を！ 神多羅木先生は僕たちの正義を否定するのですか！？」

……見れば、集まっているのはそれなりに頭のイイ連中ばかりか。

頭でつかち……そうやって自分の思想を間違っているとも思わず、前に出ることもせず後ろから非難を浴びせる愚かさを……俺は嫌悪する。

「あれは悪なのですよ！　そして僕たちは正義を志す魔法使い！　未来の英雄の為に尽力しようとする僕たちが、愚かなはずが無いのです……！」

「……『英雄』……ナギ・スプリングフィールドの様に？」

「そうですね。貴方は王国の部隊長をしていたエルウィート、と聞いています。なら彼らの活躍を間近で見たはずでしょう？」

……『英雄』、アレが『英雄』か？

人を殺し、拠点を破壊し、圧倒的力ですべてを破壊し尽くしたアレが？

「バカを言え、アレらはただの『悪魔』だろうが」

『人を一人殺せば人殺しであるが、数千人殺せば英雄である』か？
確かポーテューズの言葉だったと思うが、誠に言い得て妙だと思う。

戦争の『英雄』など、所詮ただの人殺しだ。
それを『英雄』と称すのは、人の世の常だが、俺はそうあるべきではないと思うさ。

『英雄』はその後の世界を立ち直らせた人間。
破壊する人間ではなく、再生する人間が、本当の意味で『英雄』と呼ばれるべきだ。

「何をっ……彼らは『悪の組織』を破壊し、世界に平和をもたらした英雄ではないですか！」

『悪の組織』……クハッ……『悪の組織』！

「戦争を知らない若造が、戦場を知らない若造があッ！！結果だけで戦争を語るなアアッ！！」

「ひっ……」

『悪の組織』。

本当に物語のように、それだけですべてが解決すればどれだけ良かったことか。

イヤ……例え物語の中でも、人が死に、人が死に、人が死んでいるんだ。

なのに今の人間は、結果しか追求しようとしない。

そこで生まれた兵器を、魔法を、英雄と称されるバカどもを！知ったかぶって御高説を交えるだけ。

戦争は曲解して、勝利者が善、敗北者が悪となる。

との過程は踏みつぶされ、政治的意思がそこに働き、下らない認識を人々に植え付ける。

見ればわかるだろう、今の魔法界を。

『^{アラルブラ}紅き翼』の人間には、誰にもファンクラブなどというモノが出来て。

広告塔となり、正しき戦争だったという印象を与えて、犯され、こんな人間どもが出来る。

コイツらが全て悪い、などとは言わない。

悪いのはむしろ、経験者である俺たちの方だ。

事実を、どちらにも傾くことなく伝えられなかった、俺たちの方だ。

「わかりました、貴方は嫉妬しているんですね！」

「……は？」

「見ましたよ！ 調べましたよ！ 部隊長などと言っておきながら、貴方がどこかの国の部隊に所属していたなどということは一度もあり得なかったではないですか！ 彼らに貴方は嫉妬してそのようなことを口走っているんですね！！」

……御苦労な事だ、本当に。

コイツらにまともな事を伝えたとして、阿保だから無駄かもしれんな。

「そして、さんざん調べた結果貴方の名前は載っていましたよ。ただの清掃員としてね！」

急に、見下したかのような目で俺を見る。

相手の立場によって態度を変えるタイプか。

それもまた、生き方だ……否定はしない、それが普通だ。
変えられたこちらとしては、非常に不愉快であるが。

「清掃員……それは事実だ」

「やはり……貴方は醜く愚かに嫉妬s「なにぶん公に出来ないものでな、俺たちの存在は」……へ？」

「”デイク・デイル・ディリック・ヴォルホール 駆け抜ける牙
翔け抜ける爪 主に従いしその心で 鋭き生き様を見せつけん
天風の刃」」

目視できるほどに、具現化された風の刃。

それが俺の両の指へと集まってくる。

普段は詠唱を省略し、簡略化し、目視不可能な風の刃として撃ち出すんだが……今日は特別だ。

「なっ、何……を」

とは、言ってみたモノの、これは中級の魔法。
使える者は多々いる。

「判断しろ」

「え？」

「俺が清掃員か、どうかを、お前ら自身で」

魔法を手の中に留め、留めて、自らの魔力で芯を作る。

芯に、発現させた魔法を纏わせ、纏わせ、魔力で更にコーティングし、物質化と言えるほどに具現化。

魔法を、自らの魔力を、微細にコントロールするからこそ出来る『魔法の武器化』。

そして現れる、風の鎌。

身の丈より更に大きな柄に、湾曲した薄緑の大きな刃。

俺の、戦争時代から付き合ってくれている得物だ。

「どうだ、命を刈り取る形をしているだろう？」

「え、あつ……」

「俺は清掃員だ。裏切り、その可能性、情報漏洩、その可能性、外部からの接触、その可能性。その要素を持った者すべてを刈り取る……それが俺の昔の仕事。粛清係って、ヤツか」

戦争が激化するにつれて、人の心は移り、移ろう。

少しでも、何かおかしな姿を見せた存在をすべて狩り、狩り、狩り尽くす。

その原因は、総じて『英雄』の働きだ。

俺が居たのは、人間亜人に関わりなく暮らしていたとある王国。中立を貫き、南に付き、そして滅ばされた歴史ある旧き王国。その思想に俺は共感し、その王の誇り高き生き様に俺は心酔し、俺はその国に仕えた。

だが戦争は、その高貴なる思想を破壊する。

南が不利になるに従い、北に付くべきだと人は言う。

不和が生まれる、人と亜人の間に。

共に国を護るべきと、手を取り合っていた両者の間に。

破壊したのは『英雄』だ。

友を殺し、民を殺し、すべてを殺す原因になったのは『英雄』と、俺の弱さだ。

『この国を残せばまた再び、手を取り合え笑える日が来る』。そう自分の弱さに理由を付けて。

今、双方は戦争の後に歩みよっている。

だが、俺の愛した国はもうない、王ももういない。

俺は『英雄』が嫌いだ。

現実的に、少しづつ歩みよって築いた王国を滅ぼす原因になった。
消え去り、責任を取ることすら放棄した『英雄』という名の『悪魔』
が。

……少し、感傷的になってしまったな。

「ああああ貴方はそれで僕たちを殺す気ですか!？」

「イヤ、そんなつもりはない、な。……ただ」

「ただ？」

「広域指導員の一人として、生徒の所有物を破壊しようとする愚か
者は肅清せねばならない。……なあ、俺は間違っているか？」

七十匹目 獣の王は麻帆良を駆ける（前書き）

後半チャチャゼロですんで、ちよいと読みにくいかもです。

七十匹目 獣の王は麻帆良を駆ける

麻帆良学園都市の端。

そこに位置する麻帆良大橋の上で。

トラップ式の『捕縛結界』に囚われ、身動きが取れないマスター。

それはアーニヤさんが再び槍へと魔力を込める前に。

私が『捕縛結界』を解除するためのプログラムを発する前に。

黄と緑の暴風が、マスターを貫きました。

「……なんで、アンタがッ……居るのよお」

橋の向こうから、こちらに向かってくるのは三人。

神楽坂さん、ネギさん、そして雪広さん。

「答えなさいよ！ ネギッ！」

「それはこっちの台詞だよ、アーニヤ。アーニヤこそなんで、たった一人でエヴァンジェリンさんに向かって行ってるのさ」

「それは！ それは…… イイでしょ、私の勝手よ！」

「だったら僕らも、ここに居るのは僕らの勝手だ」

「まったく、一人で抱え込もうとしてるんじゃないわよ！」

「アーニヤさん、エヴァさんはとても強いと聞きます。でしたら私たちも、少しお手伝い出せていただけないでしょうか？」

「ううっ……バカッ！」

袖口で眼を拭い、アーニヤさんにはかと笑います。
それにつられて、三人もまた。

煙が晴れ、一様に鋭い眼光でこちらを見つめ。
そこに囚われていたはずのマスターはいませんでした。

「クハッ……中々にそそる歓迎だったぞ、ぼーや」

ふわりと、私の隣に舞い降りたマスター。
傷は一つもその肌には見えず、金色の眼光は爛々と輝いておりまし
た。

ネギさんが、恐らく放ったであろう『雷の暴風』。
それは比類しても、他の術者が放つであろうそれに比べてはるかに
高密度な魔力を搭載し。
ただの、魔法使いならば一撃で戦闘不能まで追い込まれるほどの威
力を秘めていたように見受けられました。

ですがそれを、小虫を払うかのように弾いたマスター。
これが、マスターの『全力』であるか。
私自身それを見た事がありませんので、姉さん方の話から推測し、
予測を付けるしかありませんが……。

「やっぱり効いてねえか……。兄貴、姐さん方、こりゃ本気で禪絞
めてかからねえと、ですぜ」

「わかってるわよ、そんな事は」

「ではまずは、私が」

そう言うが無防備に、雪広さんは一人こちらに向けて歩いてきました。

「茶々丸さん、もう一度私と御相手を願えますか？」

手に付けていた白い手袋。
それを私の足元に投げました。

「……マスター」

「好きにしる。アレは貴様が一度叩き伏せたからこそ、ここまで強く跳ね返って来た娘だ」

「Yes、マスター」

白い手袋。

それは決闘の証。

一対一、私と雪広さんが。

彼女は護るべき人の為、私に勝負を挑みました。
そして負け、そして今再び。

……ですが私もまた、私の護るべき人の為に。

マスターが何を成そうとしているのか、何の為にアーニャさんやネ

ギさんの戦いを受けようとしているのか。

私は本質からは理解できていません。

そんな私を、私は……歯痒く、機械の身としては傲慢かもしれませんが、私は思います。

貴方の為に再びこの意思を受ければ、私は少しでもその想いがわかるのでしょうか？

「御請けいたします」

白い手袋、それを手に取り私は雪広さんを向い見ます。

「ありがとうございます。日時はこれから、決闘方法と場所は私が決めて、でよろしいでしょうか？」

「？ はい、構いませんが……」

瞬間、空間が歪み。

気付けば私は、石造りのコロシウムの中にいました。

客席とでも言える場所には、多くの人々が詰めています。

異様な熱気を発し、私へは罵詈雑言を、雪広さんには背を押す歓声を。

「魔法とは、本当に不思議なものですわね」

手に、鋭い銀のレイピアを持った雪広さんは、そう呟きました。

「武器は用意いたしましたよう」

刹那、地面に突き立つ様々な武器。

時代に縛られず、石器から重火器まで、人の用いた武器がそこには現れていました。

「御好きな物を」

「……私は、コレで構いません」

両の手首から、30cmの刃を出して。
私は雪広さんに向かって構えます。

「……お逃げになろうとは？」

「イエ、ここで貴方に勝つことが、何か重要な意味を持つと私は考えますので」

私がそう告げると、雪広さんは少し驚いた顔をして。
その後、凜とした佇まいのもと、響くような声を放ちました。

「その誇り、尊敬いたします。……では、参らせていただきますわ」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

イーチ、ニー、サーン、シー、ゴー……ツマンネ。

隼人二頼マレタ麻帆良ノ警備。

霜降り肉ノ魔力ガ俺ヲ突キ動カシテ、今コーヤツテ雑魚ノ掃除ヲシ
テンダガ……。

欲求不満ダゼ。

殴ツテ、骨折ツテ、内臓潰シテ、皮膚斬リ裂イテ。

ナノ二殺シチャイケネエト力……拷問力？

今ジャ魔物二ナツテルガヨ、俺八元々『殺人人形』ダゼ。

殺シガ生キ甲斐デ、俺ガ生マレテキタ意味。

ナノ二ソノ俺二人殺シサセテクレネート力……ケチ力？

ケツ、ツマンネ。

スラばうノヤツハ『頑張ろう』ミテーナコトイツテタガ……。

……ッテカあいつ、みでいあむれあ二出来ンノ力？

あいつハアレデ『だいたんふてき』ナ性格ダゾ。

ダーン！ トヨ、ヤリスギテ殺シテンジャネーノ力？

ケケケ、ソー考エルト強過ギルツテノモ考エモノダナ。

戦ウノハチヨイト強イ相手トヤンノガ一番楽シイシヨ。

……ア。

テカあいつガ殺シヲシテクレリヤ、俺ガヤツテモ怒ラレネーンジャ
ネエノ？

ケーッケケケケケケ！ ヤベエ！ 俺天才カモシレネーゼ！

「バケモノが！」

ツト、潰シタト思ツタンダガヨ。

ケケケ、中々二たふジャネーカ！

ちやちやぜろチャンハ嬉シイゼイ！！

「ツテオウ！ 動イテタラ血ガ出チマウダローガ！ 座ツテ寝テロ
！！」

「人形如きに、それを行つた本人に心p「ソレ寝口」ごぶりっ！？」

危ネー、モウチトデ殺シチマウトコダツタゼ。

ダガヨ……ケケツ、隼人モ肝ツ玉チツチエーモンダ。

殺セバいいジャネエカ。

邪魔ナノハ全部、全部、全部マトメテ。

相手ノ都合？

ンナモン俺ガ知ルカ。

殺サレル方ガ、弱イノガ悪インダヨ。

戦争モソウダ。

ドイツモコイツモ理由ナンザモノデ理論武装シテルガ。

テメエノおなにー叩キツケテルダケダロウガヨ。

アレガ欲シイ、コレガ欲シイ。

アレガうぜえ、コレガうぜえ。

ダカラ殺ス。

ンダケダロ？

理想？ 夢？ 正義？ 悪？ クダラネー、糞ツマンネー。

俺ガ御主人ノ傍ニイタノハ『ソウ』ダカラダ。
情ガ沸クダノナンドノハネエ。

俺ハ人形ダゼ？

刻ムノト、ソノ道具集メンノト、全部ノ根源ニナッテル『殺シテエ』
ツテ願望シカネエ、タダノ人形ダゼ？

隼人ノ傍ニイルノハ俺ガ『ソウシテエ』カラダ。

魔物ニじよぶちえんじシテ、モットモット想ウヨウニナッタガ。

ナンデカ知ラネーガ、理由ヲ阿保ガ付ケルナラあいつガ『魔物使イ』
ダカラナンジャネーノ？

マ、ンナ理由モツマンネー。

俺ガ隼人ントコニイテーカライルダケ。

デ、ソレハ最近『殺シテエ』ツテ願望ヨリでかクナッテルツテ、ソ
ンダケノ話。

ケーーーーッケケケケケケケケ！

ちやちやぜろチャンハ一途ナ乙女ダカラナ！！

……嫌ワレタクネーンダヨ。

ツマンネーガ、ソレデモ別ニあいつノ言ッテルコト、間違イジャネ
エト思ウシ。

イーチ、ニー、サーン、シー、ゴー。

ワラワラト、マダ潰レキツテナカッタノカヨ。

「死ね！ バケモノ！！」

『魔法ノ射手』二銃二刀。

ソレ以外ニモイッパイ、イッパイ。

サテ、ドースツカ……。

ソダ、焼コウ。

全身ノ半分クライ焼イトケバ、動ケネエダロ。
死ナネエダローシヨ……多分。

「ケケケ、がきドモ……ワカッテネーゼ」

「死ねといつとるんだろぅが！！」

「ばけもの、ツテノハナ」

カヲ込メル。

魔力ヲ込メル。

「コーユーノヲ言ウンダヨ」

めきり。

変ナ音ガ俺ノ背中カラ！！

「ジャーン、ちゃちゃぜろチャンノ二対目ト三対目ノ腕エ」。いか
スダロ？」

隼人ハ『きんぐれお』ッテ言ッテタカ。

あいつ二貫ッタ俺ノ身体……ケケケケケケケケケ！！

「てめえラ、みでいあむれあ二焼イテヤルゼ！」へぎらっん！」

ケー……ッケケケケケケケケケ！！

焼イテヤッタゼイ！！

サテサテ、次ノモ次ノモ綺麗二焼イテ。

トットト帰ッテ一緒二肉喰イテエゼ。

ケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ！！！！

七十一匹目 女の身勝手（前書き）

たぶん鬱ですが、はるかさんとシャークティ編です。
自分はこう持つてきました。

ここから彼らの人間関係を改訂していきます。

ご判断ください。

厳しいご意見をお願いいたします。

七十一匹目 女的身勝手

麻帆良学園にある、とある教会。

その中へ、私は大きな木の門を開けて入っていく。

「やあシスター、今は大丈夫かな」

「はい。教会はいついかなる時でも、迷える子羊たちに門を開いて
おりますよ」

月明かりが、薄くステンドグラスから射し入って照らす中。

黒い修道服に身を包んだ、銀髪褐色肌のシスターは私に向けてそう
言った。

「なにぶんこういうのは初めてなものでね。勝手がわからないだが
……私はどうすればイイかな？」

「そうですね……私と貴女以外、誰も今ここにはいませんようです
し、どうぞ一番前の席に」

誰もいない、か。

そついうとシスターは壇上の上から私をこまねく。

一番前の、木造の長椅子に私は腰をかけて、まあ……笑っておくか。

「本日はどのようなご用件で当教会に？」

「けじめを付けるため、かな。私の今と、過去に。センチメンタル
に昔を思い出すのは、そろそろ疲れる歳でね」

「そうですね……では。告白しなさい、貴女の罪を。許しましょう、貴女の罪を。神の名の下に、平等なる祝福を与えるために。貴女の心の声を、私に、神に、聞かせてください」

そう言って、シスターは、シスターシャークティは私に向けて笑いかけた。

……気持ち悪い顔で。

「私は隼人が好きだ。そして隼人も私が好きだ。私とあいつが出会ったその日から、たとえ一瞬たりともその想いを違えることなく」

嗚呼、そうか。

「まあ少し折り合いが悪くなって、私たち二人が二人だけで勝手に喧嘩して、ちよつと離れた時期もあるがな。変わらない、変わっていなかったよ。あいつの気持ちも、毛筋ほども」

単純に私は、この女を見下しに着たかっただけか。

過去の腐った自分を今の自分で塗りつぶすために、その発端となった女を踏み潰すために。

まだ、隼人に接近しようとしていた、この女を嘲り笑うために。

「……なるほど、浦島はるかさん。貴女はその傲慢さを恥じて、ここを訪ねられたのですね」

「傲慢？ ハハッ……悪い冗談だ。事実だろ、全部、全部」

奪われ、その姿を見るしかできなかった醜い私を。

それよりさらにこの女を下に見て、黒い膿を出し消し去るために。

「失礼ですが、それは香坂先生のことを言っているので間違いありませんね？」

「ああ、そうだよ。私の男だ」

「やはり傲慢を恥じて。イエ、その悪魔がそこまで貴女の中を貪り暴れているとは……」

醜いな、私は。

女はすべて、色恋になるところまで醜くなるのだろうか？
なにぶん経験があまり多くないからな、わからん。

と、はいえこんな女もいるんだろう。

私がそうで、小説やらドラマやらでもこうやって……嫉妬に狂う、女もいるのだから。

だがそれも私。

飲み下し、糧とし、歩かねばならんな……引っ張られるだけでなく、着いて来させるくらいに。

「シスター、貴女は重大な勘違いをしている。私に言わせれば貴女のほうが傲慢だね」

「……どういう、意味でしょうか？」

「例えるなら……そうだな。恋人同士が歩いている前に、一匹の蛙が横切った。少し珍しい色の、小さな蛙だ。それを見て隼人はかわいいいと言い、手を出した。それを捕らえて愛でていた……それだけの話だ」

だが、そうだな。

「まあ勝手に手を引いて、嫉妬してどこかに行ってしまったのは私が弱かったせいだ。蛙如き、ただ私が嫌いだっただからという理由で毒があるかもしれないと理由を付けて、許容できなかった狭い心が悪かった。んなものに手を出して、喜ぶ隼人を男の甲斐性だと許容できなかった私が悪かった」

今の状況を言うなれば……。

「嗚呼、懺悔しよう。私は蛙ごときだという立場をわきまえず、狂喜乱舞していた哀れな蛙をどうしても、どうやっても……嘲笑ってしまう。愛されていたと、好かれていたと勘違いした蛙を、冷静になれず毒を發してほくそ笑んでいた蛙を……」

女の身勝手、だな。

「非常に可哀想に想うのだよ、シスターシャークティ」

シスターは無表情に、蠟人形のような笑みで私を見つめる。

湧き上がるね、黒い欲望が。

ざまあみろ、つてのが一番近いか？

少しそれとも違う気もするが…… まあいい。

「あの人は……」

「うん？ なんだいシスター」

「あの人は私の前に立つと、顔を真っ赤にしていました」

「よほどシスターが臭かったんだろうさ。外国人の体臭は、日本人に比べてキツいと聞くからね」

「私の目を見て話せないほどに、恥ずかしそうにいつも目が泳いでいました」

「余程シスターのことが嫌いだったんだろう。人付き合いの勉強をしたほうがいいんじゃないのかい？」

「事あるごとに、私に気持ちだと、プレゼントをくれました」

「餌を与えるのは飼い主の役目だろう？ まあ鳩にパンくずを与える感覚だったんだろうが」

自分の感情を、欲望を気に食わない相手に叩きつける。
気分がよい。

…… まあ傍から見れば、私はクズ女なんだろうが…… 同じくらいク

ズには、それが相応しいだろ？

「ひとつ、言っておくぞシスター」

「はい、何でしょうか？」

「正面からあの男を奪いに来たのなら、私はお前を何とも思わない。奪えばいい、奪えるものなら。鶴子がそうで、恐らくエヴァもそうなるのだからな」

冷静になり、心を沈めて。

わかることだ、そこに至ろうと私は足掻き続け、足掻き続け。そこに至ることは出来なかったが、それまで身体に染み付けた、刻み込んだ証は私の中に生きているのだから。

「だがシスター、お前はそうじゃないだろ？」

『浦島』は中立、『浦島』はパイプ。

西と東を繋げるために、しがらみを緩めるために、公式公正な場を提供するために。

そこで最も必要となるのは……腐った陰謀の排除だ。

『魔法』を、『陰陽術』を使ってどちらかに有利な状況をもたらす。

『浦島』の名に掛けて、止めねばならない。

それが誇り。

『浦島』の、中立たる我等一族の。

落ちぶれたとしても、私自身の誇りだ。

「『チャーム魅了の魔法』。目から発する従来のそれではなく、己が自然の

状態で放出する『魔力』の中に天然で含まれる微細なそれ。スラばうやチャチャゼロ、エヴァに鶴子……歴戦の猛者が気づかないはずだ。知らなければ、そんな訓練をしていなければ、ただの『魔力』に過ぎなく感じられるのだからな」

月明かりが照らす。

魅惑的に、蠱惑的に、欲情を刺激するように。

『シスター』という称号すらおこがましく、深く、深く。

清く在るべきその服がさらに背徳的に目に映り、女の私ですら……身体の芯が熱くなるほどに。

「聖職者の、清い『魔力』がお前を包んでいるが……私は騙されんよ」

女は嬉々とした、欲望に塗れた笑みを私に向けた。

「シスター、貴様は人じゃないな？」

ある高名な神父。

そして彼が捕らえた高位の『淫魔』。

その間に生まれ落ちたのが私。

父は尊敬されるべき男だった。

人に施しを与え、自らは何も得ず、人々の笑顔が何よりも幸せ。そんな、優しく強い男だった。

私もそんな父が好きだった。

今の私があるのも、父の影響だと思う。

母は父が滅するはずの、そう依頼された『淫魔』だった。美しく気品あり、優しい母は私の憧れだった。

母は魔界の、とある城に仕える女中だったらしい。

母はその美貌から、城主に手を出された。

生来『淫魔』は、そういう行為を旨として生きる種族だ。拒むことなく、受け入れ、城主を喜ばせ……そして母は城を追われた。

城主が、自分の妻を蔑ろに母との行為に耽ったからだ。

魔族は欲望に寛容だ。

だからそれでも、やはり女は女で、限度がある。

嫉妬に狂った女に拷問され、あらゆるものを吸い尽くされ、剥奪され。

死に呈の身体で、城主の手引きによって人間界に逃れてきたのが母だった。

母は生きるための男の精を求めた。

幾人と、幾十人と、幾百人と男を枯らし、母はそれなりの力を取り戻した。

そんな時に派手に動きすぎた母を駆逐するためにやってきたのが、父だった。

父はいつも言っていた。

『母さんには一目惚れだった』と。

滅さなければならぬ、だが自分の心がそれを良しとしない。

だから父は……母を魔界に還そうと、そう決めたのだ。

一日と欠かす事無く、父は母の元を訪れ続けた。

春の日も、夏の日も、秋の日も、冬の日も。

母の心を知るために、母を殺さないですむように。

母から受ける、普通の男なら一瞬で傀儡となるほどの凶悪な『魅了^{チャーム}魔法』から逃れ続けて。

母はいつも言っていた。

『父さんほどに、優しく大きな人はいない』と。

真摯に接してくれる、自分を滅ぼしに来たはずの神父が。

今まで誰からも受けたことのない、やわらかであたたかい気持ちで母を包んで。

気づけば父はその場を離れ。

気づけば母は身から立ち昇る『魅了^{チャーム}魔法』を断ち。

二人、小さな片田舎で、赤子として生まれた私に向けて笑いかけていた。

御伽噺なら、これで終わる。

物語なら、これでハッピーエンド。

神父の清い気持ちに淫魔は心打たれ、悪事を働く事無く末永く幸せに暮らしました。

そう……なるはずだった。

忘れもしない、私が六つになるうかという頃。

父の跡を継ぎ、シスターとなり人々の役に立とうと決めた時。

その決心は、思わぬ形で叶えられた。

友と遊び、夕刻になり。

家に帰れば父が死んでいた、母が死んでいた。

十字架を手に持った、幾人かの神父によって、父は、母は、殺されていた。

名の知れた、高名な神父が淫魔に誑かされたという彼らの真実。教会の威信としてそんな事態を許すことが出来なかった。

故に探し、故に見つけ、故に殺した。

そして私は……その場で犯された。

父の首が、母の首が転がる家で、私は犯された。

淫魔との『半魔^{ハーフ}』な私は、父の清い『魔力』と一緒に母の魔性の『魔力』も受け継いでいた。

何の因果か知らないが、私の身から立ち昇る『魔力』には、ただ普

通に発言させているはずの『魔力』には。
母に勝るとも劣らぬ『魅了チャームの魔法』が絡み込んでいた。

父は、母は、いつもそのコントロールを怠らないようにといていた。

自分の身を守るため、何よりも自分が心から想う大切な人にだけ自分を与えられるように、と。

私は言いつけを守り、いつもいつもコントロールの訓練を行っていた。

子供の頃は、私が上手に出来ていた、というよりも絶対的な『魔力容量』がそこまで多くなかった。

だから私は何もトラブルを犯す事無く、友を作り遊べていた。

だが、父と母の遺体を見て、感情が爆発し……凄まじい『魔力』の奔流が家の中を覆い尽くした。

父のことも、母のことも、恨んだことは一度もない。

この身に宿る『魅了の魔力』も、母との繋がりを感じられて、少し誇らしい。

ただ、私があのとときの自分を許せなかったのは。

父の血と母の内腑の上に組み伏せられながら、途中から、六の子供であつた私が、悦んでいたことだ。

嫌だった、嫌だった、嫌だった……はずなのに……私は……。

その後、私は神父たちに連れられて神職者を養成するための施設に入れられた。

そこでの私は、男女、子供大人老人に関わりなく、いわゆる『公衆便女』というやつだった。

二次性徴に入り、『魔力』が完全にコントロールできるようになるまで、ずっと絶える事無く。

哀れだ、という老練の神父が獣に変わる。

私たちはあなたのことを差別しない、という同年代の女が獣に変わる。

そして行為の後、必ずヤツらは私に言う。

『お前はバケモノじゃないか』、『聖なる気でお前を浄化してやった』。

人間は、どいつもこいつも一皮向けば欲望に生きる獣だ。

『魔力』がコントロールできるようになった記念に、私への情欲を使って養成学校の人間を殺し合わせた。

人間なんて、そんなものだ。

……それでも、私は人間を嫌いになれなかった。

父がいて、母がいて、父の生き様を見て、母の微笑みかける顔を見て。

私は人間が、嫌いになりきれず、神職者の道を歩むのを止めようとも思えなかった。

止めれば本当に、私はダメに……なってしまうそうで。

麻帆良に来るまで、変わらなかった。

私の為にと、少し『魔力』を開放すれば男は傀儡のように動いた。そして何時でも、獣のように飢え切った目で私を見つめて……。

神職者として生きるため、神職者から精を受けなければならないというのも事実だった。

父よりも母の力のほうが強かったせいかな、私は魔の気配のほうが色濃い。

それを消し去るために、私は。

麻帆良に来て、それは変わらないと思っていた。

けど……でも……あの人は違った。

五年以上、近くで私の『魔力』を浴び続けて。時に開放し、それを正面から浴びて。

それでも獣のようになることは一度もなかった。

大切に、大切に。

まるで大事な宝物を扱うように。

あの人は、私を、普通の女の子のように、扱ってくれた。

あたたかく、やわらかく、私を包んでくれた。

母のように、父のように。

だから救いましょう、香坂先生。

貴方を魔の蠢く闇の中から、私とともに人々の笑顔を守るため。

貴方を誑かす悪魔から、貴方を救いましょう。

「土は土に、灰は灰に、塵は塵に、化け物^{フリークス}は虚無へ……。嗚呼、貴女の安らかな旅路に神の御加護が在らん事を……。AMEN」

目の前の女を、吸血鬼の少女を、おこがましい名の剣を扱う女を。

貴方に近づく女を全部、全部、コロシテ。

七十二匹目 神の名の下に（前書き）

イメージはもろにあの人。

七十二匹目 神の名の下に

教会の柱の影から現れる、男に女。

神父に、教師に、学生に……主婦にサラリーマンもか？

成程、思った以上にこの『魅了の魔力』というヤツは強力なようだ。シスターの身体から噴き出すだけで、身体の芯を惹かれるような感覚がある。

エヴァなら、鶴子なら、打ち消すほどの莫大な『魔力』や『気』でこれを払うんだろう。

隼人は本来効きにくいのか、スラぼうのせいで耐性が出来たのか、それとも何かアイツが心から想うところがあってこれに抗っていたのか。

……まあ隼人だから、で構わないな。

集う、精気の無い亡者のような人々を従えて。

シスターは王か、神にでもなったかのように私に告げる。

「浦島はるかさん、貴女の罪を許しましょう。身を任せ、心を委ね、神の名の下に平等に、獣に堕ちてください」

清廉な、笑みがシスターに浮かぶ。

淫魔などとは誰一人たりとも思わせない、聖職者の『魔力』を着込んで。

「さあ、楽になってください。貴女の救いが、貴女を救うことが、私の喜び」

それでも隠しきれない、爛れた笑みを上書きして。

「身に巢食う悪魔を、私が被って差し上げましょう」

惹かれる、惹かれる、惹かれる。

シスターが一步、また一步と私に近付くにつれて。

ただそれだけで、抗いようもないほどの欲望が、私の中から鎌首をもたげる。

私にエヴァや鶴子のような、莫大な『魔力』や『気』はない。かと言って、放つという私が隼人のようにこれに耐えることが出来るとは思えない。

……ま、抗うだけが、正面からぶつかるとのはあまり私の性に合わないんでね。

猪な、無鉄砲なアイツらとは違って……私はもっとスマートに行こうか。

『浦島』は中立、『浦島』はパイプ。

だからこそ、『浦島』を従えて自らの立場を有利に運ぼうと考える者も当然出てくる。

故に、『浦島』の当主は誰よりも強くなければならない。

『浦島』に名を連ねる者は、強くあらねばならない。

そして、こんな心を操作するような技能は、嘲笑ってやらねばならない。

たとえそれがどんなに強力でも、どんなに深くとも、必ず。

『浦島』の根源は『水』。

穿ち、咬み切るといふよりも、流し、絡め取るように。

『魔力』の流れに自分を乗せ、後ろへと流し……同化し、同調する。
漂う『魅了の魔力』をいなすように。

「私は同性愛者じゃないのさ、シスター」

私はシャークティへと向う。

開戦の狼煙は、シスターから。
操られていた男が一人、二人。

一般人の身体能力を越えた動きで、飛び上がり、並べたある長椅子
を二つ、三つ、軽々と越えて。
彼らは私へと向かって来た。

操られている彼らに罪はない。
せめて出来るだけ早く、速やかに、痛みの残らないように潰してや
ろう。

と、普通の人間なら思うだろうさ。
だが、操られ、木偶人形になっている彼らに対してそれは悪手だ。

故に、迅速に、全力で叩き壊す。
どうせ痛みは操られて感じないんだ。
スラばうもいる、後で治せばいいだろ。

……傲慢だとは、思うよ。

けれど、例えそう思われたとしても、私は私の成すべきことをするためにここに来た。

決めた。

私はそう決めたんだ。

だからぶらさない、ゆらがさない、動かさない、この気持ちは。

飛びかかって来た男。

本能のままに、『魔力』や『気』を感じることはできないが……。脳のリミッターが外れているのか？ 酷く速い速度で私に向かって飛び込んで来た。

ま、現実世界だとすれば、の話であるが。

『気』を身体に纏わせ、上体をぶらすことなく男に向かう。相手の全身に合わせ、自分の踵を脛に押し込み、踏み折るように発到する。

中国拳法で言うところの『斧刃脚』。

めきと、男の骨がへし折れ、その場に倒れ伏した。

すかさず、男の顔面を踏みつける。

やわらかい感触が一瞬過ぎ硬い骨が足裏に伝わり、顔面からみちりと赤い血が流れ。

一度か二度と震えた後、男は動かなくなった。

後ろから迫る男。

向き直し、眼で威嚇し、再び懐へと飛び込む。

脚先から擦じるように、その螺旋を腰へ、肩へ。

運び運んで、肘から発到する。

『氣』を纏わせ、鋼鉄に比類する硬度となった私の肘は。

アバラをへし折り、内臓へと到達し、男の身体を吹き飛ばした。

『裡門頂肘』、『八極拳』を代表する肘打ちだね。

「容赦、ありませんね」

「そのぶん痛みや苦しみを長くするだけだ。手早く、どう足掻いても戦闘不能な状態に陥らせる。人を操作するタイプの相手と事を構えるためのコツだ」

二人を軽く転がした私相手に、シスターは操っていた他の人間を下がらせた。

ぷちと、糸の切れた人形のように倒れ伏す人々。

シスターはフードを脱ぎ捨て、煌めくプラチナブロンドの髪を揺らして、一つ一つ足を進める。

「ん、大きなおねーさん。人形遊びは終わりがいい？」

「はい。貴女にはどうやら、数でかかってもこの程度では無駄なようですので」

「それはいい。それなりの歳の女がお人形遊び……吹き出さないように懸命だったよ」

……エヴァには聞かせれんな、さっきの言葉は。

甘い匂いすら錯覚させるシスターの『魔力』は彼女の周りを渦巻く。

洩れ出す甘露。

それを飲み込み、呑み込み、熔ける様な吐息を、シスターは漏らした。

「正しき神の怒り 不義をもて真理を阻む人 諸々の不敬と不義と嘆き 対いて天より顕わる」

懐から取り出した、一つ、二つ、四つ、七つ。

七の十字架が、踊るようにシスターの周りを浮き、私へと標的を定めた。

「……これは中々に、凶悪だ」

「AMEN」

赤紫の、葡萄酒のような光弾だった。

蠅のように私の周りを飛び回り、放つそれは……避けきれつ、るかっ！？

全身を駆動し、爆発するように『気』を発し。

檻のように私を囲むそれを避け、避け、避ける。

長椅子が砕け散り、床が端切れ飛び。

それでも絶えることなく上から、下から、右から、左から、前から、後ろから、斜めから。

葡萄大のそれが、降り注ぎ続ける。

ハッ、リアルガンダ。か？

『ファンネル』とは、オールレンジ攻撃とは恐れ入る。

……だがつー！

「まだこの程度じゃ私を捉えきれん」捉える必要など何処にもありません。誘導するのが、目的なのですから」ちいっ！」

鼻と鼻が触れ合うほどに近く、シスターの腐った笑顔が私の目の前にあった。

蒼い瞳。

何も映さず、何も残さず、暗く深く光を沈みこめるような瞳が私の顔を喰らうように見つめて。

「エ、エ、エイ、イメン、ツツー……！」

憎しみをぶつける様なしゃがれた声が、私の耳に響いた。

七つの内の二つを手を持ち、十字を柄に見立てた様に赤紫の刃が伸びた。

『断罪の剣』、とは少し違うな。

アレは液体を期待へと無理矢理相転移させ、その時に発生させる熱と『魔力』で対象を斬り裂く『魔法』だ。

シスターのこれは、純粹な『魔力』と、何か先ほどの詠唱、そこから分岐したモノに見受けられるよ。

「AMEN！」

『魔力』と、魔族……というより『半魔^{ハーフ}』か、これは。

生まれ持った身体能力をフルに活用して、烈風のような斬撃が私に降り注ぐ。

「っ、拙いかッ！」

手に纏わせた『気』。

それを手首から覆い、さながら『爪』のように固定化する。

「Aaaimen!!」

手に持った刃だけでなく、五つの銃口から狙う赤紫の弾丸も弾き、かわし、また弾く。

だが足りん、手数が！

A
a
a
a
a
a
a
a
a
i
i
i
i
i
i
i
:
:
:
:

シスターは一拍を置き。

赤紫は更にどす暗く輝き。

吹き出るように『魔力』が、足へと集まって行った。

[illegible]

その一瞬を、逃せない。

懐に手を差し込み、忍ばせていた「SIG SAUER P230」
に手をかけ、引き金を引いた。

エプロンの下に忍ばせていたからな。

一　張羅に穴が空いてしまったよ。

腹へと退魔の術式が込められた弾丸が突き入り。

それでもまだ進み来ようとするシスターに、続けざまに八発。軽く細い彼女の身体は、血に濡れつつ教会の床へと倒れ伏した。

……ふう……どうするか。

ウム、私は今日ここに過去を清算しに来たはずなんだがな。
殺して、というのは後味が悪い。

狙ったのは各関節。

肝臓を掠めるように一発入れたが……まあ大丈夫だろう。

ああ、イカンな。

ヒートアップして、思わず、気に食わないとはいえ、目の前の女を
ここまでしてしまうとは。

……アイツには聞かせれないよ。

とりあえず、学園長にでも連絡して治療術者w「A a i……」なっ
！？

「エゝエエィゝイメンゝツツ！！！」

赤紫の、六つの剣弾だった。

一つは愛銃を貫き、五つは私へと害意を示した。

辛うじての反応。

それは本当に、『本能的に』というのが正しかった。

肩を斬り、脇を抉り、太腿を切り。
後ろの壁に突き刺さった十字架は、くいと手を動かしたシスターに

従うよう舞い戻った。

『魔力』がまた、シスターから噴き出した。
黒い修道服。

『魔法』の技術によって編まれ、強度を持った修道服は甲高い悲鳴を上げ。

背中から生えた蝙蝠のような一對の翼はそれを犯して、私の前に姿を現した。

周りを舞うのは六つの十字架。

蝙蝠のような翼が、大きく開かれた。

「あと六回殺せてことか？」

「私は神罰の代行者！ 悪と善をその身に宿し、正しき道を導く使徒なり！！ 主に許しを請い、主の許しを与える者なり！！！」

「ハッ、なんてクソゲーだ」

「では、改めて……死んでくださいね」

七十三 浦島の水（前書き）

はるかさんとシャークティ編、これにて終了。
後の違和感は、隼人の場面で改訂していきます。

厳しいご指摘願いたします。

七十三 匹目 浦島の水

「どうして……貴女はそうやってあの人と私の間に立ち、塞がり、邪魔をするのですか？」

損傷は激しい。

脚は斬られ、腕は貫かれ、腹は挟まれ。

体中に纏わせた『気』を棒のように、ギブスのようにしなければまともに立つことも出来ない。

……ハッ、そんな事をしたとしても、足は小鹿のようにプルプル震えているんだが。

「傷付けることが私の望みではないのです。救うことこそが、私の望み」

顔は、護りきつた。

髪もだ。

アイツに傷だらけの顔では会えないし……私の黒髪を、好きだと言ってくれた。

「貴女の為……そう、貴女の為に悪鬼蠢く俗世から、切り離して差し上げます」

四つの剣弾が、私を殺さんと進行する。

流し……流し……流し……私は斬られ、再び倒れる。

手を地面に付く。

「足掻いて何になるというのです」

脚に力を込める。

「抗い何になるというのです」

持ち上げ、崩れる身体。

「受け入れなさい、罪を。請いなさい、許しを」

私の血に濡れて、ほんのりあたたかい石畳の床に、顔が叩きつけられる。

「貴女の後顧の憂い、あの人のことはすべて私に、それだけは、御断りだねえ」……ッ」

動かないな、身体。

頑張ってるんだが……動かない。

「さっきも言っただろう。シスターが正面から来れば、私は構わないと」

だが動かなくちゃならない。

起たなくては、ならない。

「その結果私を殺し、その結果奪い……後でどうなるなんて知らないが、それでもイイならそれでもイイさ」

譲れない、想いがある。

ここで例え潰れ、二度とアイツの顔を見られなかったとしても。

エヴァが居る、鶴子が居る。

「ただしシスター、テメエはダメだ」

アイツがどんな想いで、私を捨てたのかは知らない。

アイツがどんな想いで、アイツ自身が口から吐いた言葉を覆したのかは知らない。

「アレは馬鹿で、阿保で、愚直で、不器用なんだよ」

正面から来て、奪い取ったならば、私にも鶴子にも魅力が無かったと諦めよう。

だが、コイツはそうじゃない。

コイツはそうじゃないだろうが。

「相談も無しに、一方的に、自分の気が変わったからって……そう言って、背負いこむような男なんだ」

自分で言うのはおかしな話かもしれないが、アイツは私に何時だって真っ直ぐな想いをくれた。

初めて会った時から、季節を越えて、年月を経て、それでも弛むことなく、絶えることなく。

「それを貴様は踏みにじった」

だから、私は起たなければならない。

「アイツの気持ちえを、お前は無理矢理に汚した」

だから、私は前を向かねばならない。

「だからシャークティ・ヴェンド……」

掌に『氣』を。

混ぜるように、回すように、螺旋を描いて、円へ、球へ。

『浦島』で学び、結局身に納められず。

麻帆良に来て、何年も過ぎて、ようやく完成した『浦島流柔術 龍牙』。

アイツと一緒に過ごした日々が、私にくれた私の証。

「お前の我が儘に付き合って、おねーさんが遊んでやるよ」

強がつて、いこうじゃないか。

なあ、隼人。

右の掌に『龍牙』を留めて。

俯くシスターを、毛筋ほどの動きすら見逃さ無いよう注視し。身体に力を込め、私は身構える。

「なにが……いけないのよ」

それは怨嗟の声だった。

「何が！ 私の何がいけないのよ！」

シスターとしても、『半魔^{ハーフ}』としてもなく、思慕と嫉妬に狂う女の声だった。

「求めて何が悪いというのですか！ 穢れたこの身を受け入れてくれるかもしれない彼を！ 支配しようとして何が悪いのですか！」

『穢れた』、か。

大方予想は付く。

『魅了の魔力』、『淫魔との間に生まれた子』。

人と、魔族や魔物の間にある確執は大きい。

魔法使いや陰陽師が召喚したモノたちを、慰み者にするというのもよく聞く話だ。

無論、両者に合意など無く……という場合がほとんどのだろうが。

「……一目見て想いました……彼は違う、彼は別格だ。こんな魂の底から惹かれるような感覚を私は知らない。父のようにあたたかで母のようにやわらかな、彼から感じる、彼から貰ったこんな想いを、私は知らない……。立ちたい！ 在りたい！ 傍に居たい！ 傍に居たいのよ……！」

『神職者』の道を、何故この女が選んだのかはわからない。

教会に限らず、関西の陰陽寮も、魔法を扱う人間の機関も、古くから残り続くモノには古くからの腐った仕来りや観念、慣習が未だに残っている、それを正しいと思う人間が居る。

現代社会に比べて、そこは倫理や道徳が欠如した掟が、未だ跋扈している。

そこにシスターのような者が行く。

結果は、火を見るまでもなく明らかであろうに。

「でも私はこれしか知らない！ この胸に巻き起こり暴れ狂う感情に答える術はこれしか知らない！！ 淫魔の血を引く私にはこれしかできない！！ 人のように恋物語を描くなんて……押さえつけられ教え込まれても！ それでも本性を変えることはできない！！ 私はこれしか出来ないのよ！！」

『これしか知らない』……ハッ！ ガキが。

ガリガリと、妖しく尖った爪で顔をかきむしり、シスターは叫んだ。

「男が欲しい！ 男が欲しい！ 男が欲しい！！ 男が欲しい！！
男が欲しい！！！！ 男の精が！ たくましい胸板が！ 欠けた私を埋めてくれる相手が私は欲しい何でも構わない！ それをあの人に埋めて貰いたい！ 支配して、征服してもらいたい！！」

四つの十字架を、右に二つ、左に二つ。

手に取り、赤紫の刃を発して、シスターは喉が切り裂かれんばかりに叫んだ。

「貴女はいつも隣！ 光の中で、自らに憂う事など無く！ あの人の隣にいた！ そしていなくなつたはずなのにまた、何もせずに貴女はまたあの人の隣にいる！！」

『憂うことなく』、『何もせずに』。

知らない女が、随分とした言いがかりを……。

「私はっ、私は……情婦でも、玩具でも、ちり紙と同じような扱いだとしても構わない……傍に居たい！ 傍に居たい！ 傍に居たいのよ！ それの……その何が悪いのよおおおおおっ！！」

女は、蝙蝠のような翼をはためかせ、真っ直ぐ私へと突貫してきた。

……そうか。

救いを求めていたのは、私だけではなかったのか。

『求める』など……自ら動こうとも出来なかった……私も、お前も、傲慢だな。

お前は私だ。

嫉妬に狂い、そうなっていたかもしれない私の姿だ。

過去が鎖となつて、アイツに正面から甘える事も、飛び込む事も出
来ず。

そこに行きたいという願望だけが人一倍強い、お前も私だ。

今なら義母さんが言っていた意味がわかる気がする。

『浦島は中立。善も悪も超越し、すべてを飲み込み受け入れる浄化
の水』。

器の小さい私には、そんなこと出来ない。
だがコイツは私だ。

コイツ相手なら……私は……。

「エ、エ、エ、イ……」

「……あつ」

「そうだな……子どもとして生まれた時は、母上とでも呼んでくれ」

「！　っ……はい、母上」

光の粒になったシスターは、私の中へと吸い込まれていった。

急に、身体をひどい倦怠感が襲う。

緊張の糸が切れたからか、それとも人一人の魂を背負いこんだからか。

どっちにしても……これは……っ！？

教会の扉が開いた。

コツコツと、靴音を立てて歩いて来る。

こっちに向かって、私へと真っ直ぐに。

目の前で止まる。

女物……だな。

「無様ですね、おばさん」

！？　これは……これは。

「次期ご当主様が、どういうご用件だ……可奈子」

「どう言つて用件とは、心外ですね。今日は麻帆良の学園結界が外れる日。中立たる浦島が、この場にいないはずではないですか」

「それもそうだ。……で、何の用だ？」

「イエ、ただ無様なおばさんを笑いに来ただけで。プギャーwww」

こつ、コイツは……！

「と、言うのは冗談で。浦島の者から死者が出てしまつては、たとえ追われた敗北者だとしても、私と家の名が廃りますので」

「そう、か」

「治療術者を呼んでいます。とつと怪我を治して、ロートルはきやぴきやぴはしゃがず、隠居して畳の目の数でも数えていてください」

「……あ、あ……そうさせて、もらつよ」

やっぱり、コイツは……かわいくないな。

……氣絶しましたか。

この惨状を見るに……『龍牙』の『形質変換』を行ったというところでしょう。

『形質変換』で最も難易度の低い『水』の、最も難易度の高い『浄化』を。

『善も悪も超越し、すべてを浄化する浦島の水』。

本来なら、その身に走る『魔力』や『気』の経路を完全に消滅させるはずなのですが……。

どうやらその上の段階、問答無用に身体ごと消滅させる『浄化』を行ったようです。

更には、相手の想いや魂を受け入れるモノまで。

私はお兄様以外では、そんな事絶対にしたくありませんが……変わってますね、この年増は。

……どうやら治療術者さんの前に、変なお客が来られたようです。ね。おばさんは……まあ床に放置の方向で。

外、森の中。

十か、二十か……いえ、もっと。

百近くの魔物や妖怪と、幾人かの術者ですね。

「女子？　このようなところで何用だ！？」

「初めまして、浦島家次期当主の浦島可奈子と申します」

「ツツ!？」

「そのご様子ですと西の方。無論、協定の方もご存じのようで」

協定。

『浦島の提供する公式、公正な場以外での両者の私闘を禁じる』。

……まあ、協定違反ですね。

「『浦島の鬼才』どの！ 貴女もわかるはず！ 魔法使いなどという異国の蛮人に、聖地たる麻帆良を、世界樹を、イイようにされてはいけないのです！！ この国に生まれた貴女なら、この国に昔から根強く関わる貴女たちならばわかるハ、ああ、御高説は終わりですか」浦島どのっ！」

「浦島は中立。故にどちらにも手を貸し、どちらにも手を貸しません。この場合は貴方たちに非があります……御理解はしているようで、幸いです」

両の手から『龍牙』を放ち、宙に浮かす。

それぞれ『木』へ、『火』へ、『土』へ、『金』へ、『水』へ、『形質変換』させて。

百と八つの龍の牙が、私の周りをふわふわと浮く。

「殺しはしません。ただ西に帰った時、それ相応の罰があることを覚悟して下さい」

……やはり、おばさんは引退組です。

こんなことも、軽々と出来ないのですから、そうあってよかったと思いますね。

けど……。

『うん、お前は新入りか？』

『……………』

『無口なヤツだ。まあいい、私は浦島はるか。稽古は大変だけど、一緒に頑張ろうな』

今日の貴女は昔のようで、少しカッコ良かったですよ……ねえさん。

七十二匹目 浦島の水（後書き）

戦闘……ちよつと都合主義だったか？

七十四匹目 卑怯者の誇り (前書き)

大体中盤くらいのはずです。

七十四匹目 卑怯者の誇り

あやかの姐さんがロボっ娘を一对一に引きずり込んで。

……まあちよいと当初の予定とは違うんだが。

ってかだいぶ違って計画の第一優先プランが崩れたんだが……失敗した時の第二プランだ。

兄貴の、『英雄』である親父さん譲りの超魔力。

アーニヤの嬢ちゃんの、『大魔法使い エヴァンジェリン』が多用してた『氷』と相性のイイ『火の魔法』。

そして……鬼札たるアスナの姐さんの、『魔力完全無効化能力』。

正直なところ、あやかの姐さん込みの第一プランが成功してたら、結構な勝率はあったと俺ったちは思ってた。

例え第二プランに、アスナの姐さんを前線に置いて兄貴と、多分いるであろう、結果いた嬢ちゃんが『障壁』の消えたエヴァンジェリンにしこたま叩きに行くってプランに移行しても、俺ったちは何とかなると思ってたんだよ。

『障壁』は、魔法使いの戦闘にとって非常に大事なファクター。

防御の全てをそれに依存してるつつつても過言じゃねえ程に、それほどまでに重要視されるシロモノ。

まあ吸血鬼で、強靱な肉体を持つてんのもかもしれねえが、それでも俺っちが分析して調べて感じ、エヴァンジェリンは『魔法使いタイプ』の戦闘スタイルだ。

大量の人形を操り、超高火力な魔法で敵を殲滅する。

これが文献で調べに調べ、第一の従者に教えてもらったエヴァンジェリンの戦闘スタイル。

だったら何とかなる。

人形を持ちだしてる気配もねえ。

従者もいなくなった。

この前兄貴の拘束に使ってたのも、恐らく『魔力の糸』。

だったら何とかなる。

勝てなくったって、アスナの姐さんは盾みたいな扱いになるけどよ、ひと泡吹かせることが出来るって。

……そう、俺っちたちは勘違いしてたんだ。

「どうした、ガキども。私の魔法だ。無効化してみる……できるんだろう？」

「こんのおおっ!!」

兄貴との、仮契約のパスを通じて肉体強化されたアスナの姐さんの拳が、目の前に立塞がった氷の壁に叩きつけられる。

拳の形が壁に残り、氷は砕け散って、それでも壁は悠然と目の前に立塞がっていた。

「ガキども。貴様らがこれから深く、深く、この世界に関わるのかどうかは知らない。だがまあ……魔力も戻り、徐々に身体にかかったタガが外れ、今日は気分がイイ。最高に『ハイ!』ってヤツだ」

「アスナあ！ 退いて！！」

「だから人生の先輩として、少しでも講義をしてやろう。この『闇^ダク・エヴァンジェルの福音』から教えを請うんだ……ありがたく思え」

「ふんつつ……どりやりやりやりやあああつ！！」

炎を纏った槍が、削岩機みてえに、溶かしながら壁を崩してゆく。

『放出系の魔法』が効かねえって思った後のエヴァンジェリンの行動は速かった。

少しだけ長い詠唱。

その時は兄貴の魔法が、嬢ちゃんの槍が、アスナの姐さんの拳が、確実にエヴァンジェリンを追い詰めてたはずで。

俺たちたち有利に勝負が動いてたはずだった。

けど放たれた『魔法』。

俺たちたちを囲むように現れた、箱みてえな氷の壁。

閉じ込められて、アスナの姐さんの一発でぶっ壊せると思ってたんだ。

「『放出系の魔法』……それは要するに、魔法使いがその技術を以て発現させた『魔力』が姿を変えたものだ。基本攻撃魔法たる『魔法の射手』も、中級、上級の攻撃魔法も、『眠りの霧』などの補助魔法も、『障壁』もな」

けど壊れなかった。

殴つても、蹴つても、そいつは消えなかった。

「故に『魔力』を無効化する能力者には、吸収する能力者には、それは効かん。所詮、仰々しく『具現化』だのなんだの言おうが、『魔力』には違いないからだ。……まあ時とともに、徐々に留め続けた『魔力』は『物質化』していくんだが、そんな時間は今はない」

ひよいと、箱の外にいるエヴァンジェリンが指を立てる。

それだけで中にスーパーボールくらいの氷の球が出来て、指を傾けると、ひでえ速度でアスナの姐さんに向かって……消えた。

『魔力完全無効化能力』が働いたのか？

「だったらどうすればいいと思う？ 簡単な話だ……『魔力で作りだしたモノ以外』を使えばいい」

そう言うのと、再びエヴァンジェリンは指を立てる。

「『火の魔法』、その熱で何かを燃やし、生まれた炎を使えばいい。空気中の水分を集め、凍らせてやればいい。『魔力』は過程の手助けだ。生まれた氷は……『魔力』ではない、『物質』だ」

「があ……っ!？」

「アスナアツツ!!」

「ま、実戦で使える程度の氷まで『魔力』で手助けしているからな。鋼鉄以上だと思えよ」

スーパーボールくらいの氷の球が出来て、指を傾けると、ひでえ速度でアスナの姐さんに向かって……アスナの姐さんの身体は氷の壁

に叩きつけられた。

「欠点は自分の支配下を離れているため、どうやってコイツを自在に扱うか？　というところだ。私の場合『魔力の糸』だが、小娘に触れさせないくらい造作もない。ためになったか、ガキども？」

勝ち誇った笑みを浮かべるエヴァンジェリン。

嬢ちゃんとアスナの姐さんは、氷の壁を叩き続ける。

「”ラス・テル　マ・ステル　マギステル　来たれ雷精　風の精
ウェニアント・スピリト・スリアーレス・フルグリエンテース
カム・フルグラテイオーニフレット・テンベスタース・アウストリーナ
雷を纏いて　吹きすさべ南洋の風”」

そこに……兄貴の声が響いた。

「それは悪手だぞ、ぼーや。確かにそれなら、父親譲りの膨大な魔力を持つお前なら、氷の壁を破壊できるかもしれない。が、跳ね返る余波まで、飛び散る氷の断片まで、お前が消しきれるとは思わん」

兄貴の精一杯、いつちゃん強い魔法『雷の暴風』。

そいつを兄貴は右手に留めて、回すように、混ぜるように、『魔力の芯』中心に、螺旋を描いて……固定する。

「……ほう」

「ネギ、それって……カタラギ先生の……」

「”『ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンス雷の暴風』”」

ソイツは神多羅木の旦那が使う『魔法の武器化』。
あの人が使う様なモノと違って、鮮麗なんてされてねえ、酷く荒々

しいシロモノ。

でも……へへっ、兄貴。

やっぱ兄貴は、兄貴はスゲーよ。

「スゴイ……の、かな？ 私には分かんないけど……ドリル？」

「アスナさん、知ってますか？ ハンマーと、斧と、ドリルは男のロマンなんですよ」

「……あの男、私の買いかぶりでやはりクズかもしれないな。イヤ、だがまあ途中からはそんな事言ってた気もするが……」

「お兄ちゃんからそう聞いた時、僕はドリルがカッコイイって思ってたんです。一回転すれば、その分だけ前に進む」

黄と緑のドリルは、兄貴の右手を覆うように廻り。

先端が触れ、氷の壁を削り取った。

「二回転すれば、その分だけ。回れば回るだけ、止まらず、留まらず、前に、前に、ドリルは前に進む」

かき氷みてえに、氷の粉が宙を舞う。

絶えずに、止まらずに、兄貴は前に進む。

「『僅かな勇気が本当の魔法』、一步踏み出すこと……それが、大切なんです。『みんなを笑顔にする魔法使い』になるために、一人でも多くの人と手を繋げるために、僕はドリルのような男になるんです……！」

「ハッ！ 青臭く……ガキらしい、真っ直ぐな発想だ。だが氷の壁は削ったところから修復するぞ……いささか出力不そつ！？ なんだ！？」

「はああああああ…… ああああああつつつ！！！」

ぶっ壊し、ちまったあ……。

……イける……これならイけるぜ兄貴！！

「いきます！ アスナさん！ アーニヤ！」

「ボケネギのくせに命令してんじゃないわよ！！」

「ニヒヒ、ちょっとカツコ良かったわよ……ネギ」

身体に魔力を纏わせて。

肉体強化して、兄貴は、嬢ちゃんは、アスナの姐さんは、エヴァンジェリンに向かい進む。

「介入かつ！？ 煩わしい！ ……っ、コレは……ハハッ……成程」

一瞬弱まっていたが、更に噴き上がるように発せられる、冷氣すら感じさせる膨大なエヴァンジェリンの『魔力』。

金玉が縮みあがっちゃうが……兄貴らが行くつつってのに、俺たちだってビビってられっか！！

「中々に、物分かりのいい友人を持ったなあ……隼人おツ！！」

麻帆良学園のメンテナンスの為の大停電は、二十時から二十四時までの四時間。

今は二十二時に近い頃。

こんな時間に停電が復旧したら、おかしいことになるよね、間違いない。

メンテナンスつてのが名目で、一応それは本当の目的な訳だし。

これから半年間、ここに通う学生が、勤務する職員が、快適に業務や生活を送るために必要な時間だ。

いくらネギくんが不利だからって、復旧させようとしちゃダメだね。

それに……僕自身、戦いは嫌いだ。

血を見るのも、そんな行為を僕がするのも、僕は嫌いだ。

だからこそ僕はサポートにまわる……ちよつと卑怯かもしれないけどね。

でもだからこそ、彼らがこれから前に進むために、誰かが何かを変えらるために。

必要な喧嘩を汚すなんて事、僕のすべてにかけて……絶対にさせないよ。

「貳集院先生！ 何か大量に文字が出てきたんですが！？」

「了解。すぐに行くよ」

さて、じゃあ『電子精霊』を介入さす「貳集院先生！ 僕の方も！」

「僕のところもです！」

「自分のところも！」

……え〜っと……。

「瀬流彦先生、君は一応数学教員だよね？」

「はい……一応は、ですけど」

「コマンド、だいぶ簡単などこからだけど……mvとかcpとかlsとか知ってる？」

「？」

「PC、使うよね」

「ネットとか、メールとか、ワードとかくらいですけど……」

……人選ミスったね、コレは。
数学教員だしある程度使えると思って、『分身』が彼は使えるからかなり有能な助手になってくれると思ったんだけど……。

拙い……拙いね。

一般職員の人たちは、『電子精霊』からの介入を必死に防御している。

お金だってかかってるんだ、手間暇だって下準備としてかかってるんだ。

無駄になんて、できる訳ないだろう？

正直、戦力差は圧倒的だ。

僕はこの学園では誰にも負けない自信があるけど、それでも一人で全部何とかするなんてうぬぼれじゃない。

物量は脅威だ。

片やこの時代の、麻帆良だからもうちょっと先かもしれないけど、最新プログラム。

片や2003年式最新の『電子精霊』……詰んでるよ、コレ。

最初から、僕は事態を収め切れとは思ってない。

ただ決着がつくまで、彼女の大きな枷にならないまでに『魔力』を留めることができれば。

そう思っ、僕はここに来た。

ただ、『生徒が成長するため』、『その機会を潰さないため』。

だから！ 最後の最後まで！ 僕の積み重ねてきた日々を無意味なモノにしない為に！

「式集院先生！ 何かすごい勢いで文字が上書きされていつてるんですが……！」

っ！？ コレ、は……誰が……。

イヤ、そんなこと考えてる暇じゃない！

この流れに乗る……！ 学園結界を、電力供給を、再びカットする……！

誰だか知らないけど、助かったよ。

「ぶち」

クヒュヒュ……。

「ぶちぶち」

クヒュヒュヒュヒュ……。。

「ぶちぶちぶちぶち」

クヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュ……。。

「命じてくれタ」

「指示してくれタ」

「私にお願いしてくれタ」

「だからやるヨ」

「私は何でモ」

「ねえねえねえ隼人さん」

「貴方は知テル？」

「女の子は愛の為になんだて出来るんだヨ」

「大好きな人の為になんだて出来るんだヨ」

「身体をはち切れんばかりに襲うこの痛みモ」

「脳みそをゴミのように腐らせていくこの悲しみモ」

「貴方を私は愛しテ」

「愛しテ」

「愛しテ」

「愛しテ」

「いるから全部喜びに変わるんだヨ」

「女の子の愛は何よりも強いカラ」

「貴方は闘ウ」

「貴方に張り付く蛭の為ニ」

「貴方の神聖なる血を吸う薄汚い蛭の為ニ」

「貴方は闘ウ」

「嗚呼」

「出来るモノなら今すぐにそれを踏みつぶしてしまいたい」

「でも私はやるヨ」

「貴方がそう言っていたカラ」

「だから褒めテ」

「褒めてね私ヲ」

「貴方の為なら私はいつでも」

「貴方の為なら私は何でも」

「矮小な私が願うのはおかしな話なのかもしれないケド」

「私はやるヨ」

「この身を犯す悲しみを抑えつけテ」

「貴方への愛デ」

七十四匹目 卑怯者の誇り (後書き)

今回はちよつと手法を変えて。
こんな彼女もいかかでしょう？

七十五匹目 偉大なる魔法使いの条件（前書き）

この話出ててくる偉大なる魔法使いの条件は、完璧超私的な見解です。

原作とはなーんのかんけも、無い事もないかもしれませんが、殆んどない気がします。

ご意見よろしければお願いします。

七十五匹目 偉大なる魔法使いの条件

「小娘、アンナ・ユーリエウナ・ココロウア……お前は何故、私に挑む？」

「逃げた私が気に食わなくて！ それと……！」

そう言う小娘は、赤毛の少年。

私をこの地に縛り付けた男の面影を残す少年をちらと見、先より更に強く、槍を握る手に力を込めた。

「何でもいいでしょうがア！」

三つの紅い軌跡。

小娘の手元から、穿つように。

パツと開く花のように、それは私を決りくる。

『障壁』でその速度を緩めても、その進行を阻んでも、真っ直ぐ愚直に、ただ私の下へ。

「我が偽りのクラスメイト、神楽坂明日菜……お前は何故、私に挑む？」

「友達が苦しんでるからっ、よ！ 年下で、ちょっと世間知らずで無鉄砲な！」

弾けるように、私の『障壁』が消え去り。
紅い意志が、炎を纏って私へと突き進む。

「……クラスメイトなんだし、エヴァンジェリンさんとも友達になりたいしさ」

「私はそんなこと思わんぞ、特にお前には」

「ちよつ！ それ酷くなああああああああいー！」

小娘の槍を回るようにいなし、その力のまま裏拳を叩きこむ。クラスメイトの腕をつかみ、私の力のままに投げ飛ばす。

目の前で、オコジョが光った。

「オコジョフラアアアツシュッ！！」

「小動物、アルベール・カモミール……貴様は何故、私に挑む？」

「男の仁義の為だあつ！」

殴り飛ばし、その後ろから螺旋が迫る。

圧縮された高密度の『魔法』が、私へと迫る。

「ぼーや、ネギ・スプリングフィールド……お前は何故、私に挑む？」

「……僕は……」

両の手で、それを受け止める。

肉が削られそうになる高速回転。

軽々しい肉体強化では、散らされてしまうな。

「父親の為か？ 私が貴様の父親のことを知っているから。……構わないぞ、ぼーや。私に勝てたらあの男のことw「違います、それは」……なら何故、私に挑む？」

小さな身体に大きな意志。

あの男を彷彿とさせるような瞳で、ぼーやは呟いた。

「父さんのこと、僕は確かに……とても、気になります。でも……今、僕の目の前にいるのはエヴァンジェリンさんじゃないですか！ 泣きたそうだったのは、貴女じゃないですか！」

螺旋は回転を増し、更に強く、強く、前に進む。

「だから、僕は貴女と手を繋ぎたい。僕に何ができるのか分からないですけど……でも僕は、……僕は何かをしたい！」

夢に憧れるだけの少年ではなく。

「僕は貴女と友達になりたい！」

『理想』に溺れる人ではなく。

「だから僕は、貴女を倒します」

自らの足で茨を歩く、愚者のように。

……隼人、改めて想うよ。
お前はスゴイな。

ここに来た時、ただの雛だったこのぼーやを。
たった半年で、翼を生やし己の意志で飛んでいけるような男にした
のだから。

私は甘えていたんだな。

お前が近くに居過ぎて、その心地よさに思考を放棄して。

私は立たなければならなかったんだな。

お前に負けないように、お前と競り合えるように。

お前を、強くしてやれるように。

……スマナイ。

私が再び飛ぶために、衰えきつた翼を広げるために。

強くしてやる。

お前たちがこれからどんな困難に出会ったとしても、それでも立ち
向かえるように。

どんな存在よりも強く、どんな存在よりも冷たく、どんな存在より
も邪悪に。

私は貴様らに向かい合おう。

だから……ここは潰されてくれ、若者たちよ。

『魔力』を更に身体に込める。

ぼーやの意志を、螺旋を無理矢理に握りつぶす。

膨大な『魔力』に任せて組み上げたぼーやの『障壁』。

それを私の拳で、貫く。

骨のへし折れた感覚が、私の肌に届いた。

「兄貴いつ!？」

転がる、転がる、転がるぼーや。

駆け寄る小娘と神楽坂。

「アンタアアツ!！」

猛る神楽坂。

その言葉を見殺し、『魔力の糸』を一本伸ばした。

「あつ……!」

「感心しないなあ、大河内。覗きはイカンぞ」

「アキラアアアツツ!！」

麻帆良大橋の脇。

隠れてこちらを見ていた大河内を縛り上げ、私の前で逆さに吊るす。こぱり、裂けるように口を開く。

「小娘っ！　ぼーやの両手両足の骨をへし折れ！　そうすればこの女は助けてやろう！！」

「マク……ダウエル？」

「そんなことできる訳ないでしょうが！！」

「ではこの女がどうなっても構わないな……？」

「あつ、アンタねえ……っ！　何も関係ない大河内さんを巻き込むなんて最低よ！！」

最低……クハハハッ、最低！　最低！

「私は悪の魔法使い！　私が言つてやろう……この場に於いて貴様らが『正義』で、私が『悪』だ！　だがそれがどうした？　私の歩む道が、歩んできた道が『悪』だとしても、私はこれからも背負い歩み続ける私の道に後悔や未練など……何もない！！」

振り子のように、大河内を揺らす。

「ぼーやたち……貴様らの道と、私の道は相反する……コレは変えようのない事実。最も貴様らが暗黒冥府に堕ちるというなら話は違ってくるが……そのような気はないようだな。クククッ……ならば認めさせてみせよ！　貴様らの道をこの私に！！　貴様らが信念通すために、我が道捻じ枉げてみせる！！！！」

「スーパーオコジョフラアアアアシュツツ!!」

強い光が、私の視界を遮る。

そして……。

「エヴァンジェリイイイイイイイン!!」

燃えあがる様な『魔力』で身体を満たした『勇者』の槍が。

「爆炎槍オオオツ!!」

私の『障壁』に触れ。

「ハハハツ……イイ『気合』だ、アーニヤ」

爆炎が私を包み込んだ。

「爆炎槍?」

「寒気がしたぞへゼルッ！」

「気のせいじゃなあのッ」

自らに『魔力供給』し、肉体強化し飛びのく。
瞬間地面は轟音とともに爆ぜ、燃えあがった。

私の幼馴染、ヘゼル・ダイナーの基本技にして奥義『爆炎槍』。
槍の先端に『風』を集め酸素の密度を上げ、高密度の『炎』で着火する。

貫き、爆ぜ、すべてを粉塵へと帰す。
故に、付いた二つ名が『粉塵の槍遣い』。

幼馴染ながら……その才能の違いには絶望すら感じる。

「ねえ、ハルト……どうして貴方は邪魔をするの？」

邪魔……か。

「それはどんな意味で言っているんだ、ヘゼル」

「勿論、『英雄の息子』の為につてことでよ。あんなにエヴァちゃん、頑張ってるんだもん。潰れたりしたら……ダメでしょ？」

確かに、この男は本国から『AA』の評価を受けている。

例えば闘気を剥き出しに、あの女を威嚇すれば彼女の動きは格段に鈍るだろう。

常に、この男に気を張らねばならない。

その上ネギくんたちを殺さないように、気を配らねばならない。

……知っているさ。

『闇の福音』ダイク・エヴァンジェルが女子供を殺さないということくらいは。

『悪』の象徴だった。

滅ぼすべき対象だった。

だからもし、自分の目の前に現れた時に對抗できるように、調べ尽くした。

魔法使いたちによって情報操作された文献も、されていない純粹に事実を伝える文献も。

思えばその頃から、小さな引っかかりのようなものを感じていたのかもしれないな。

「なあへゼル……『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』とは何だと思う？」

『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』。

私たち、魔法使いが目指すべきとされる存在。
それは一体……何なんだろうな？

高畑先生は、本国からその証を受けることが出来ない。

強く、世のため人の為に働いているというのに、彼は決して受けることが出来ない。

『魔法が使えないから』。

『アラルブラ紅き翼』の様な魔法使いが『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』という世論が浸透しているから。

私も、そうだった。

彼らこそが、と思っていた。

そしてその考えでは私にも、その資格はほばない。

『攻撃魔法』の才能が、殆んどないんだ。

そうでなければ、銃など使ったりせんよ。

『CCQ』に時間をかけ、それを錬磨などせんよ。

強く大きな魔法を、ネギくんが使った『雷の暴風』のようなカッコいい魔法を、使つために心血を注ぐさ。

あるのは違う魔法の才能。

『悪』を倒すのが、強いのが、尊敬されるべき魔法使いだとされている今、私にそんな可能性はない。

新しく利便性の高い魔法の開発で、その称号を。

国家間の不和を解決し、その称号を。

そんなモノも、私には無縁だ。

まあだからこそ、私は色々と思うところが出来た。

弱いから、考えるしかなかった。

考えて、工夫して、努力して、私は足掻くしかなかった。

だから考えたんだ。

『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』について、深く、深く。

麻帆良にきて、あの男にあって、私は色々と考えたのさ。

「優秀な魔法使い……違う！ 誰よりも強い魔法使い……違う！ 悪を打つ正義の魔法使い……違う！！ それは強い意志と貫き通した信念の下！ 魔法を使つたかのように人の悲しみを打ち砕き、己を貫き、明日へと続く道を創り固める存在のことだ！！」

魔法を使えるかどうかなどは問題ではない。

人ではないことなど関係ない。

腕っ節の強さなど無論、何も関係ない。

躓き汚れ泣き絶望し倒れ伏しても……立ち上がり突き進む生き様、それを示す者。

心の底から誰かを想い、自分の全てを捧げててもその者の為に闘う。そんな思いが誰かに伝わり、伝わり、伝播し、伝播し。

多くの人々と手を繋ぎ笑顔にする。

悲しみの底から引つ張り上げる。

見返りを求めず、ただ自分がしたいから。

そんな我が儘で、そんな信念を突き通せる存在こそが……『マギス偉大なテル・マギ魔法使い』と呼ばれる存在じゃないのか？

「覚えているか、ヘゼル？ ダーク・エヴァンジェル私が私の始動キーを決めた時、お前以外の周りの人間は『闇の福音』の手先だと罵ったな。子供の、なまはげとして聞かされていた無恥な者たちの、下らない戯言だ。だがそれは当時の私にとっては、酷く、寂しかった……辛かった」

「そうねえ。真面目で、堅物で、それまでとーっても優秀だった貴方をバカにするには長とイイ口実だったんでしょうね」

くつくつと、懐かしそうにヘゼルは笑う。

つられて思わず笑みが浮かぶ。

今この場が、何度目かわからない、『攻撃魔法』を教わってから一度も勝てた事のないヘゼルとの戦いの場だということを。

決して負けられない戦いの場だということを、忘れてしまいそうだ。

「そうなのかな……だがな、私は確信したよ……この地に来て。私はこの詠唱を誇りに思っていてイイと！ あの女は！ 私の友が信頼するあの女は！ 善も悪をも超越した尊敬するに値する魔法使いであると――！」

だがやはり、忘れてはいけない。
譲ってはいけない、この場だけは。

この……『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』の名を戴く、始動キーにかけても。

「行くぞへゼル！ これが私の全力だ！！」 エヴァ・エヴァル・エウアン・エヴァ・エヴァンジェル 神より与えられし原書の宣告
天上の光の下に 皆等しく言葉を授けん 『始まりの福音』！
――！」

私がここ麻帆良で『魔法先生』として勤めることのできるようになったのは、『封印術』のためだ。
それには一角の才能を示すことが出来た。

放たれた魔法を抑え込む『封印術』。

『放出魔法』自体を放てないように、精霊の動きを制限する『封印術』。

行動条件を限定する『封印術』。

そしてこの魔法は……私の『魔力』すべてを以て発現する。
一定範囲内に存在する相手の精神力の一部を封印し、『魔力』や『気』を煉られなくする大魔法だ。

「あの女が、未来ある若者を……本当の意味で『マギステル・マギ偉大なる魔法使い』になれるかもしれない若者に試練を与えているのだ！！ あの女の

為でも、あの男の為でも無い！ 私は少年少女の為に！ ここは誰だろうと……お前だろうと通さない！！」

頭に浮かぶのは緑髪、気に食わない人形の姿。

「純粹に鍛えた肉体と、技術だけ……昔に戻ったみたいよ、ハルト。戦績は五分五分だったかしら？」

「昔のままだと思うなよ、ヘゼル。言っておくが……あの悪友より……私のナイフは鋭いッ！！」

七十六匹目 物事には『優先順位』つてもんがある(前書き)

何話ぶり？ わかりませんが主人公登場。
いつものように鬱注意。

七十六匹目 物事には『優先順位』つてもんがある

「見ているのでしょうか、学園長う……？」

香坂くんと坂上先生の会合。

大きく振りかぶった右拳。

それを坂上先生が『障壁』で受け、距離を取り、そこで彼はワシに向けて口を開いた。

「少し私の話を聞いてはくれませんかねえ」

「あ？ テメエ頭沸いてんのか？ どこにも学園長なんざいねえd

「おるよ、香坂くん。学園長室から見とるんじゃ」……まほースゲ

「」

ふてくされた様な顔で、香坂くんは呟く。

そして思いつき……。

「まあテメエの話なんざ聞かねえんだがなッ！！」

地面を蹴り上げた。

砂粒が舞い、坂上先生の顔に向けて放たれた。

「おるあっ！！」

「器が小さいねえ。まあ君なんか、放っておいても私の障害にはならないのだから構わないんだがぁ」

ガァンと、音が聞こえる。

坂上先生の顔数？前、何か見えない壁に突き当たるように、香坂くんの拳はそこで止まっていた。

「……ねえ、そうだろう？」

「じるあつー！」

「ふくくくくつ……何故にこんな単細胞を信頼したんだろうねえ。君の周りに居た魔物もお……彼の闇の魔法使いもお」

「どるあつー！」

蹴り、殴り、頭突き。

すべてが阻まれて、香坂くんは一息ついた。

大きく息を吸い、大きく息を吐き。

右拳を、強く握りしめた。

「まあいいさあ。一応聞いていてくれればねえ。……君も、学園長も、そして私もまた教師という職にあるう……長らくそんな職に付いているとね、色々と見えてくるんだよあ」

ニチャリと笑い、坂上先生は話し始めた。

「『学校』というモノは『社会』の縮図だあ……ましてや麻帆良学園は『未来を育む人材作り』という大きな目標を掲げた魔法使いたちによって造られた巨大学園都市。生まれも環境も、他のどの学校に比べて大きいのだからその分だけ多種多様う……わかるだろう？君も教師ならねえ……沢山のモノを抱えた生徒がいるんだあ」

例えば人が一人いれば考え方は一つ。

じゃが人が二人いれば考え方は二つ、人が十人、百人、千人、万人いれば……考え方もそれだけある。

『学校が社会の縮図』と呼ばれるのは、そんな多種多様な考え方の親から生まれ。

その親が与える環境や、教育を受けて、成長し様々な思考を持つようになった子供たちが一堂に会しているからじゃ。

故に、恐らく『どこよりも特殊な環境』と言っても過言ではないとワシは思う。

公務員の子がある。

教員の子がある。

会社の社長の子がある。

会社に勤める者の子がある。

工場で働く者の子がある。

警察官の子がある。

犯罪者の子がある。

無職の子がある。

両親健在の子がある。

片親の子がある。

両親のいない子がある。

麻帆良は誰に対しても差別をせぬ。

ただの一人も、たとえどのような環境の生まれだろうと。

彼らの未来が輝くモノとなるように、ここで学んだモノを活かせるように。

故に、できるだけ多くの機会を与えようと努力をしておる。

本来ならば交わる事もない道に居る親、そこから生まれた子が手に

手を取り合うこともあるように。

それは良いことだと、ワシは思っておる。

じゃが物事には必ず裏がある。

表があれば必ず裏が、メリットがあれば必ずデメリットがあるのじや。

そしてその差は、同じような立場の人間ばかり集めた学校とは比べ物にならないほどに大きい。

これもまた事実じゃ。

「女に……子供？」

坂上先生が手を合わせる。

するとそこに、曼荼羅な魔法陣が現れた。

ずるりと、人型が這い出てきた。

栗色の髪的女性と、黒い髪の少女……じゃが、これは……。

「妻と、娘だ……君のような、不良生徒に殺された」

「……はあっ！？」

「若い頃の話だ……私と、新田先生はクラスメイトで、妻もそこに居たあ……やさしい、女だったあ……。栗色の髪が愛らしく、笑顔の可愛い……彼女に、私は恋をし、愛を育み……大学生の時に子供が出来てえ……。結婚したあ……。幸せだったあ……。本当に、幸せだったあ」

愛おしそうに、坂上先生は二人の髪を撫でる。

そしてその行動に答えるように、二人はくすぐったそうに笑みを浮

かべた。

「が、崩された！！ 教師になり少し経ちい……自分でも誰かを救えると自信がが微かに芽生えた頃だあ！！ 向き合ったと思ったのに卒業式の日と同僚と酒を飲み帰った自宅にあったのは絶望だあ！！ 青アザで埋め尽くされてえ！ 口から血を流しい……誰ともわからないほどに顔を壊され動かなくなっていた妻と娘がいたんだよ
お！！！」

……信じられぬ。

生きているかのように……二人は立っておる。

痛ましい事件、ワシも葬儀には参列したからの。

イヤ、それ以上に胸に宿る義憤で忘れることなど出来んよ。

坂上先生が教師となり、五年も経たぬ頃じゃった。

当時の彼は『熱血』と言えるような教師。

どのような境遇の生徒とも分け隔てなく接し、まっとうな大人としてようと奔走しておった。

昔はまだ『体罰』というものが全面的に許容されておった。

故に彼は正面からぶつかり、拳を使いながら生徒たち欠けていたところを埋めるために必死になっておった。

……しかし、どうも彼には『完璧』を求める気質があったらしい。少しだけ我が強く、外れることが許せぬ故に、徹底的に彼は生徒たちに教え込んだ。

『大人とはかくあるべきだ』と。

だからこそ、彼は恨まれた。

そして彼は不良生徒に負けぬくらいに強かったから、その矛先は家族へと向けられた。

「……悲しみとともに最初に思い浮かんだのはあ……やったであろう少年たちの顔とお……それでも彼らは悪くないという矛盾した想いだあ！！！！ 彼らの素性は、歩んできた道のりは知っていたあ……親から暴力を受けて家から逃げ出し！ それでも親の愛を求めて家にしがみ付き！ 必死に掴んでいたその手を人を喰い物としか思わない下種に掴みとられた彼らを断じきる事など私には出来なかつたんだあ！！！！」

当時犯行に及んだ少年たちは、『外道』といつても過言ではないような行いを平気で生業とするグループと関わりをもつておつた。

それを知つた坂上先生は……懇願した、警察の面々に、麻帆良の保護者たちに。

『それでも彼らは悪くない』と、被害者である彼は狂つたような意見述べておつた。

「夢だと、現では無い幻想だとお……私は想い、彼らが少年院に入つてから夢遊病者のように私はいたあ……そこに、『完全なる世界』コスモエンテレケイアがあ……現れたんだよあ。彼らは世界を完全にしようとお……誰もが苦しまない幸せの世界を作ろうと私に言ってくれたあ。こうやって妻と娘と動き話す事が出来るようにしてくれたあ……」

彼は教師じゃつた。

どこまでも教師じゃつた。

子供のためならばと、生徒のためならばと、卒業したとしても自分の生徒を見捨てることのできない教師じゃつた。

彼らの将来が崩れぬように坂上先生は足掻いた。

結果彼らは少年院に入り、じゃがまともに就職し、今では県外で幸せに家庭を築いているらしいの。

「誰もが君のように強い人間ばかりではない！ 立派な教師という存在に出会える訳ではないんだあ！！ 君と同じ立場の不良で、心が弱かったならばどうなる？ 人を傷つけて、その責任も追えず逃げだし、追って来た警察を逆恨みし、少年院に叩きこまれ！……そして、出たとしても立ち直れず……墮落の道を歩む……」

じゃからこそ、そのような事態が発生し。

悲しみを閉じ込めた、暗い瞳をした坂上先生を、ワシはこの地から引き剥がすことが出来なんだ。

完璧を求める程度が減り、昔に比べ過ちを許容できるようになり。成長したと、辛い過去を乗り越えることが出来たのじやと、ワシは勝手に夢想しておった。

……それはワシの願望じゃったのかもしれん。

そうであって欲しいと、きっとそうはずだと、ワシは思ったかったのかもしれん。

しかし……何がそこまで彼らを駆り立てたのかは知らぬが……その行動の後、残ったのは絶望だけじゃった様子。

「わかるだろう……君も教師を名乗るならあ……皆を救おうという気持ちで、私の気持ちが君にもわかるだろう……？」

そう、問いかける坂上先生。

坂上先生の意見は、わからんでも無いことは確かじゃ。

『コスモエンテレケイア
完全なる世界』。

過去の大戦で、彼らを『悪』と断ずることが出来たのは、その構成員が私腹を肥やすためだけに働いておったからじゃ。

親玉がどうなのかはわからん。

彼らの言う『理想の世界』が、誰も苦しむことのない世界ならば、それはとても素晴らしいものなのかもしれぬ。

未来を育む人材を望むワシら教師からすれば、教師たろつとする者ならば。

誰もが強く、強く生きられる、夢を叶えることが出来る……それを望むのは、おかしいことではないのかもしれないかもしれぬ。

……じゃが、そうじゃのう……言うなれば。

「はあ？ お前バカじゃねーの」

なんか気に食わんわい。

「なに……っ！」

「テメエの妻を、娘を犯した男が悪くねエだあ？ 庇うだア？ ハッ！ ありえねえっつーの」

まったくじゃの、ホホッ。

「俺だったら殴るね、顔の原型なくなるまで。殴って、殴って、殴って殴って殴って……殺しちまうかもな、そりゃ。泣き寝入り？ 刑務所入って死んだってまっぴらゴメンだわ」

「教師だろっつ……君はあ！」

「で、それが何か？ それ以前に俺は男なんだよ。生徒は確かに大切だ……だがなあ、そうやって無駄な情出して何になんだ？ そいつらにそれが腐るほどに間違ってるって教えてやるのが大事だろうが。なによりも、大事なヤツ傷つけたクソども殴る方が先だろうが」

『氣』が、香坂くんの右拳に集まる。

「物事には優先順位つてもんがあるだろ。第一に家族や大事なダチ、第二に生徒、第三に自分……そこを履き違えんなや。そこをブレさせるなら、結婚なんざすんじゃないよ」

巨体が揺れる。

彼より二周り以上も小さな坂上先生に向けて、大きな拳が放たれた。ガツンと、『障壁』に突き当たる。

「私に彼らを断じろというのかあ……！」

「テメエがつくった屋根の下に集まったヤツらに手えだされた……殴りに行くのは頭の役目だろうよ」

ぎちぎちと、拳は進む。

「犠牲者だあ……彼ら子供は何時だつて、腐った大人の犠牲者だあっ！ 彼らを救おうと『理想』を求めて何が悪いっ……！」

「悪くねえよ……悪くねえが、坂上よう……」

筋肉が更に駆動する。

「テメエ自身が広げた手の大きさを見誤ってんじゃないよ。他人の

力借りて、夢語る暇があんならあつ……！！」

丸太のように太い腕が、大きく、強く、揺るぎない信念を以て。

「テメエ自身の力で付いてきたヤツらが誇れるような男になれやあ
ああつ！！」

拳は『障壁』を貫いた。

小柄な身体が吹き飛び、香坂くんは大きく息を吐いた。

駆け寄る坂上先生の妻と娘。

坂上先生はそんな二人の頭を軽く撫でて、現れた曼陀羅の魔法陣の
中に二人は消えていった。

「それでも私は、私の『理想』を、これまで重ねてきた日々を諦め
ることなど出来ないっ！ 君のように野蛮な考えなど理解したくも
ないっ！！」

「あつそ、別に理解してもらおうとも思わねーさ。何だかんだガキ
どもに御高説垂れてはみるが、俺の本質は我が儘で、責任なんざ最
近考え出したが基本的にやりたいように生きてるからよ」

……正直じゃのう、香坂くんは。

彼の考えには、そうやっていつも裏表なく意見を述べるから、好感が持てる。

しかし坂上先生の言葉もまた、否定はできん。ワシもまた、『理想』を求め、少しでも魔法界を良くしようとしたがために地位を求めた訳じゃし。

彼ほど生徒の為にはなれそうにはないが、の。

「クズめがあつ！」

「好きに言えよ……俺の人生、俺は俺に正直に生きる。やらねえ後悔よりやった後悔。単細胞だ、短絡的だと言えばいい……だがよ、そんな生き方で俺は人生、辛い事やら嫌な事やら腐るほどあるが……楽しいぜ？」

坂上先生の身に『魔力』が集まる。

「やはり私は君が嫌いだよ……クズだあ！ 君はあの時と変わらず、人々の未来を、現状を見ることのできないクズだよお！！」

呼応するように、香坂くんはニヤリと笑った。

「そか……じゃあ『喧嘩』……しようぜ。テメエの枉げられねえものと、俺の枉げられねえもん……正面から潰しあったら、一体どっちが硬いかってなアアツ！！」

香坂くんは天に向けて右拳を突き上げた。ソワリと、悪寒が全身を蝕んだ。

……イカン……イカン……何かは分からぬが……コレはイカン！！

『魔力』を集める。

ありったけで、彼らの戦いの行く末を見られるだけの『魔力』を残して、彼ら二人と麻帆良の空間を断絶するっ！！

「ふんぐるい むぐるうなふ くとぅぐあ ふおまるはうとん
があ・ぐあ なふるたぐん いあ！ くとぅぐあ！」

”ふんぐるい むぐるうなふ くとぅぐあ ふおまるはうとん
があ・ぐあ なふるたぐん いあ！ くとぅぐあ！”

”ふんぐるい むぐるうなふ くとぅぐあ ふおまるはうとん
があ・ぐあ なふるたぐん いあ！ くとぅぐあ！”

予想……以上じゃ。

天高くから、巨大な炎が香坂くんの右腕目掛けて降り注ぐ。

彼の肘から先は、生きるようにうなるほのお緒おおおお御おお
oooo尾ooooおおOOoooおおぐあ；jふえおpjf；
か1へお@うjwが；1rへjn；hdvw；垂rkhg1kdh；
lsd g f r k s j f；ウE b j；h s k d h；w n v l s m x c。
g j れる j k ん げ r h；タ g k ら b n；垂 k f v n k d 場；f h v
子居垂hが；じゃ j t j；k f d じゃ s 例おgは；lkん；会え t
h；j f 絵う垂 j k j g k l；上 r l；j がウエ裏 g n r；イ r h
がwろい連れ p@ウ i f l d m k l h s 家 t l j が裏 g ジエル@ j
b k f d かをう m l f g v；x z m；h r@v r 喝っ！！

頭が、割れそうじゃい！

まさか……『旧支配者』と契約を果たしておるとは……。

『魔物使い』……恐ろしい、スキルじゃ。

『千里眼』と『順風耳』で隔絶した空間から多少のリンクを通して
おつて、アレほどまで。
となれば……坂上先生はっ!?

「やは莉い……君はあ……『理想の世界』のT Aめ似は不要ナキケ
んな男だA a あっ!」

なんと……そこまでの信念……イヤ、狂気だの。
妻を、娘を失い、心を壊さぬためにそこに信奉したか……。

哀れ。

じゃがなんと……その想いの強大な事か。

「坂上イイイイイっ!」

「香坂ああああああああっ!」

坂上先生から放たれる白光と、香坂くんから放たれる朱光は、双方
微塵も譲ることなく。
正面から、ぶつかり合った。

七十七匹目 漢女とタマネギとエレベーターガールと（前書き）

注意

この展開は、超絶ご都合主義です。

一応伏線？ のようなものを張ってたは張ってたんですが……それでも驚愕のご都合主義です。

それでもイイという方だけ続きをどうぞ。

ホント、広い心を持っていただけるとありがたいです。

七十七匹目 漢女とタマネギとエレベーターガールと

麻帆良学園の敷地内。

ここに、とある一匹の魔物がいた。

グミ状の、タマネギのような青い身体。

大きな目と笑っているかのようなU字型の口。

それはとある世界の代表的RPGで登場する魔物で、この世界には本来ならば存在しないはずの魔物であった。

「ぴきー！」

「……なんだ、コイツは？」

麻帆良学園の敷地内に侵入した一人の術者は首をかしげた。

青い魔物は『スライム』と、呼ばれる存在だった。

『スラぼっ』と名付けられた魔物と同種の魔物は、この世界にいなかった。

ただ一匹で、この世界に存在していた。

魔物の主人である『香坂隼人』という人間に付き従うために、魔物はこの世界に存在していた。

「ぴきーっ」

「魔物……だよな。見た事ないから新種？　かわいいかも、しれない」

スラぼうは、それを悲しいとは思わない。
寧ろスラぼうは、心のそこからそれが嬉しかった。

自分を育ててくれた主人に従える。
脆弱な自分を、大きな愛情を以て力になれるまでに強くしてくれた主人に従える。

「ぴぎー！　ぴぎぎーっ！」

「やわらかっ！　むう……気持ちい、癖になりそう」

スラぼうはこの世界で主人が赤子として生まれたと同時に、この世界に現れた。

スラぼう自身どうやってこの世に現れたのかはよくわからない。
だが、目の前の赤子が自分をとて大切にしてくれた事……それは感じていた。

思いだせば、金髪の雌にあつた気がするとスラぼうは思う。
その時何かがあつて、気が付けば主人の傍にいたとスラぼうは思う。

「ぴぎーぎぎっ！」

「お前はどこから来たんだ？　名前とか……ある？」

そんなスラぼうは今、その大好きな主人からの指示を受けてこの場所に居た。

『殺さないように、麻帆良への侵入者を退治してくれ』。

そんな指示を、スラぼうは受けていた。

スラぼうは主人の為に頑張った。

麻帆良を駆けて、すでに百を超える侵入者を薙ぎ倒し続けた。

それでもスラぼうはまだまだ元気に、大好きな主人の命令を遂行しようとする場所に居た。

「……ぴぎ」

「って、わかるわけねえか。弱そうだし、喋れないみたいだし」

『スライム』という種族は、『最弱』の名を冠する魔物であった。その世界に存在するどの魔物よりも脆弱であった。

だがスラぼうは違った。

主人の力によって育て上げられ、『最強』の名を冠する存在となっていた。

神だろうが、魔王だろうが、この世界のどんな存在のどんな攻撃にも耐えられるだけの『HP』と『みのまもり』と『耐性』を持っていた。

同時に神だろうが、魔王だろうが、どんな存在だろうと殲滅できる『MP』と『ちから』と『かしこさ』と『すばやさ』を持っていた。

スラぼうはこの世界に存在するどんなモノよりも、圧倒的に強かった。

「魔物くん、俺って今回が初仕事なんだ。外に退魔に出るのも初めてで……使えねーって班長からは置いてかれちゃったんだ」

だからこそ、スラぼうは悩んでいた。

麻帆良に侵入する者は、それなりの力を持っている場合がほとんどだった。

だが今日の前に居る男は……予想外なまでに……弱かった。

「才能ないんだけどさ、無理言っつて連れて来て貰ったんだ。師匠……父ちゃんは病気で出れないし、金が無いから父ちゃんのこと治せないし……金がいるんだ」

スラばうは小さな頭で考えてみた。

だがどう考えても、何度考えても、スラばうには目の前の存在が千切れ飛んでしまう姿しか思い浮かばなかった。それほどまでに、目の前の存在は弱かった。

スラばうは戦闘に関連するすべてに於いて、この世界の最高峰を一つ飛び越したくらいの力を持っている。

だがあくまでもベースは『最弱』の魔物。

人間や、高位の魔物のように高い知性を持つてはいなかった。知識を利用し、発展し、思考する力をスラばうは持っていなかったのだ。

「ま、お前は見逃してやるから、殺されないように気を付けろよ」

スラばうは悩んだ。

主人の命令を守るために、目の前の存在を通す訳にはいかない。主人の命令を守るために、目の前の存在を殺す訳にはいかない。

スラばうは悩んだ。

大好きな主人のために、心のそこから強く、強く。

スラぼうは悩んだ。

『世界最強』の存在が、自分自身を支えるその全てを以て。

スラぼうは悩んだのだ。

結果、スラぼうの想いは空を越え、天を越え。

隔絶され、閉鎖されたはずの『仮想地球』の壁すら通り抜け、金髪の女性の下へと辿り着いた。

目の前の存在について言及する前に言っておくッ！

私は今『怪現象』ってモノをほんのちよっぴりだが体験した。

い……いや……体験したというよりは全く理解を超えていたのだけ
ど……。

あ……ありのまま、今起こった事を話すわ！

『私は書類仕事を一通り終えたと思ったらいつの間にか、目の前に
青いタマネギみたいな存在がいた』。

な……何を言っているのかわからねーと思うが私も何をされたのかわからなかった……。

頭がどうにかなりそうだった……。

催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてないわ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったの……。

「ぴぎー」

「……うん、ちょっと待ってくれる。君は確か……覚えてるわ、香坂隼人くんに私が叶えてあげた存在だったはずですね？」

「ぴぎぎっ」

「へっ？ ……御主人様と一緒にで礼儀正しいわね。イイの、君の御主人様は稀に見るイイ人だったし……仕事だけどちょっとだけ、後悔してるくらいだから」

「……ぴぎ？」

「何でもないわ。で、閉鎖されたはずの仮想地球から、転生課まで何の御用かしら？」

「ぴぎぎっ、ぴーぴぎぴ、ぴぎーぴぎーっ！」

「そっか……強過ぎるってのも、考えモノってことかしら？ 『D Qシリーズ』のボスって、世界を創っちゃう神様だっているんだものね。『ザオリク』は世界のバランスが崩れちゃうからアナタの技の中から消したし……その代わりに派生前の技を使えるようにしてあげただけ……あんまり意味なかったみたい」

「ぴーぎっ、ぴぎぎぎっー!!」

「……ダメなの、それは。はじめに干渉すること……それだけしか私たちは転生者に何かを上げてはいけないの。そんな決まりだから……だから私はアナタの力になれない。喋れるように、人間や知能の高い魔物みたいにしてあげればいいんだけど……それはダメなの」

「……ぴぎぎぎぎぎっー!!」

「ダメなの……わかってちょうだい。アナタがここに来るのだって本当はダメな事なんだから。彼には、私自身本当はダメな事をしてしまったし……本当に、これ以上はダメな」"メギドラオン"でございます」……お客さんが二人も……確か貴女は」

「香坂隼人の妻で、香坂エリザベスと申します。以後お見知りおきを……」

「ぴぎ?」

「そちらの……「ぴぎぎ」スラぼう様と申されましたか。感謝いたします。アナタのお蔭で私はこの場に訪れる事が出来ました」

「少し前から干渉していたのは貴女でしたか……『ペルソナ3』の『力の象徴』。成程、ここに至れるかもしれない可能性はあったということですね」

「貴女が、旦那様をあのような運命に……?」

「……はい。何となく貴女が何を言おうとしているかはわかる気がします。……ですが、そうなったとすれば彼自身の意志と……大いなる導きによるものだと思います。……私が関係ないとは、言いきれませんが」

「そうでございますか……では、『くたばりやがれ』でございます」

「貴女の攻撃は、一切私には届きませんよ？」

「それでもやらなければならない時があると、私は旦那様から教わりました」

「そーゆーこと。でも短絡的な行動はダメ？ ご主人様のためにここまで来た貴女ならわかるでしょう？ でも……外史の外に更にそれを管理するモノがあつたなんて、ちよつと驚きよねえ」

「『真・恋姫＋無双』からも……『管理者』ですね。……私はそこまで、彼のことを好意的に感じていた訳ですか……なんとも皮肉な話です」

「御忠告、感謝いたします……「貂蝉よん」貂蝉様。つい頭に血が……昔の私ならば、考えられない失態でございます」

「イイのイイの、気にしないで。それより……」

「ぴぎ？」

「かわいいわねえ、アナタ」

「『力の象徴』、『管理者』。双方がただ彼の身を想い……その道を開いたのは前世から想い続ける、ただのデータだったはずの『最

強』。……私がいけないのですね。好意的に感じてしまった、これ
までとは違った彼を……だから閉じたはずの無い『仮想地球』が閉
じて、溜まっていた『淀み』を吐きだしてしまった。そんな『IF』
の世界を生み出してしまった……」

「びぎぎ、ぴーぎぎっ」

「……そうですね。『力の象徴 エリザベス』、『管理者 貂蟬』、
貴方たちの世界の物語は既に終わりました。それを今覆すことは、
独自に動き出した今はもう不可能です」

「……………」

「……やっぱり、そうなのねん」

「ですが、今まだ動き続けている本来の物語。そこはまだ独自に動
き出していません。そこに介入することならば……スラぼうの力を
借りれば、寄り代にすれば可能です。スラぼうは、そのことを了承
してくれました。コレを行えば二度と元の場所に戻ることはできま
せんが……貴方たちはどうしますか？」

「それで、私が旦那様の力になれるならば」

「もう死に続けるあの人を見るのは嫌だから……どこだって、行っ
ちやうわよーん」

「そうですね……ではスラぼう、消し去った『ザオリク』の代わり、
一つ空いた枠へアナタに『呪文』を差し上げます。どうかこの力で、
彼の未来が明るく照らされんことを祈ります。『呪文』の名前は……
…『エボルシヤス』」

後日、麻帆良学園に現れた新たな脅威。

『蒼き天災』を初めて目撃した一人の術者は語っている。

嘘か誠かは定かではないが突如として、目の前に居た青い魔物が青い服を着た銀髪の美しい女性に変わったのだそうだ。
そして彼女は鈴の音のような声で告げた。

「はじめまして。統合以前はエレベーターガールを勤めさせていた
だいておりました私、『エリザベス』と申します」

そう言つて、女性はパンパンに詰まった財布を二つ、術者に渡した
らしい。

一つは五百円、一つは五円でぎっしりだった。

「お金にお困りとお聞きました。これを差し上げますので、どうか
ご無理をせず、父上を大切にしてください」

最後にそう言い残すと、女性は音も立てずに術者の前から消え去った。

次の瞬間、目の前で巨大な土柱と木柱が立ち上った。

ぐんぐん空へと伸びあがり、その脇にゴミのように人が付随して。

それが術者の前で、幾本も、幾十本も出来あがったそうだと。

これは余談であるが、貰ったお金で術者の父は回復に向かい。

術者自身は荒事ではなく、まじないなどで生計を立てているらしい。

後の世に大きくその名を残す『蒼き天災』。

それが初めてこの世に出た瞬間だった。

七十七匹目 漢女とタマネギとエレベーターガールと（後書き）

基本はスラぼう。

二人になることは……まあ偶に。

魔物のまま、鳴き声だけって言うのも中々に使いづらいもので……。二人のですが思考とか、偶に入れた方がイイですかね？

七十八匹目 我が身、我が力、我が心、ただ貴方の為に

白刃が空間を切り裂き、異形のモノが首と身体を二つに分け軀を晒した。

「何故そちらで剣を振るう！ 青山のおっ！！」

猛るように言葉を撃つ老人。

彼のことは知っている、西でも有名な術者だ。

歴史ある術者の家系『天ヶ崎』、その一員だったかな。

「西に生まれ、青山で育ち、護国魔性駆逐の神鳴る剣をその身に修めた貴様が……何故京の地を離れここに居を置く！？」

山伏みたいな服装に身を包んで、錫杖を手に。

修験道をその身に修めた老人は3m……イヤ、それ以上かな？

狐、狗、狸の形をした獣を従えて、しゃがれた声で言い放った。

真剣な物言い。

反論を許さない、重い言葉。

それに彼女、青山鶴子はあっけらかんと返事を返した。

「惚れた男のためどす」

「誑かされたかあっ！！」

シャン、と錫杖が鳴る。

老人の、枯枝の様な身体からは想像がつかない速度。

彼女の目の前に突如、瞬間移動したかのように現れた老人の右脚は、ただの一撃で地面に大きな亀裂を走らせた。

身体を回すようにかわし、回転を力に変換して青山先生は老人を斬り付けた。

「ハッ！　ウチを道具のように扱おうとするからや。それに後悔しいね」

「小娘がアッ！　強き力をその身に得て生まれた貴様はそれが当然だと何故わからんかあッ！」

「古臭い考え……そやし嫌になったってわかれへんのかしら」

野太刀と錫杖が交叉する。

青山先生を叩き潰さんとするそれを、彼女はいなし斬り返し。更にその刃を老人は横から弾き突く。

「超一流同士の闘い……恐ろしいね」

剣撃が止まらない。

錫撃が止まらない。

絶えず流れるように形を変えて、触れ合う度に木々を大きく揺らす衝撃波を発しながら。

二人の闘いは更に白熱する。

「高畑先生ッ！」

教え子の声。

目の前に迫る、濡れた赤い舌。

上下に刃を持った断頭台が僕を前後に分断しようと牙を？く。

後ろに『瞬動』。

距離を開き、拳の衝撃を妖狸の眉間目掛けて叩き込んだ。

「止ま、らないねえ……丈夫だ」

僅かに速度を落とし、再び加速し迫る。

焦げた茶色の毛並みが僕の眼前で唸りを上げた。

肩口から僕に体当たりしてきた妖狸。

両腕を交差させて、『気』をめいっぱい集めそれを防御する。

「じゃあこれならどうか？」

もう一度、後ろへの『瞬動』。

突撃に合わせ、放物線を描いて大きく距離を取る。

「左腕に『魔力』、右腕に『気』……合成」

『感卦法』と呼ばれる技能がある。

『気』と『魔力』。

元来水と油みたいに、交わらないはずの二つの超常的力。

二つの間には明確な壁みたいなのがあるんだけど、それを取り払うことでその二つを溶かし合う。

結果、爆発的な力を得ることが出来るんだよね。

「刹那くん、伏せたまえ」

「あつ、はい！」

上から下に、叩きこむように放つ。

師匠から受け継いだ『居合拳』、エヴァの下でようやく完成させることが出来た『感卦法』。

その二つが合わさり生まれる爆撃のような衝撃。

『豪殺・居合拳』。

彼女を守るために手にした、僕の力だ。

刹那くんと事を構えていた妖狗を。

僕に迫っていた妖狸と、何故か微塵も動く気配を見せない妖狐ごと叩き潰す。

ポケットに拳を入れ、鞘がわりに加速させて放つ。

一と、十と、百と、絶えることなく。

それでも彼らは潰れ切らず、四足で身体を支えて爛々と輝く血に飢えた眼光で僕を貫いていた。

「先生ッ、私が！」

野太刀を握り、彼らを消滅させんと息巻く刹那くん。

『氣』を纏い、飛び出そうとしたその時、空に大きく黒の嵐が突き上がった。

あの方向……麻帆良大橋か……。

事前にあの辺りにアーニャくんが『設置式魔法陣』を仕掛けているのが目撃されていたはず。

と、なれば……。

……少し前、エヴァに会った時。

僕はつい頭に血が昇って、彼女に危害を加えようとするエヴァに攻撃を仕掛けてしまった。

だけど、彼女は誇り高い。

まだ裏世界の扉に手を掛けたばかりのビギナーを、女子供を、殺そうとするとは考えられない。

僕が、過保護過ぎたのだろう。

だから僕は、過敏に反応した。

彼女は、自らの意志で小さな魔法使いの友人と一緒に手を取り、歩き始めている。

磁石のように、彼女はこの世界に引き寄せられた。

ようやく掴んだはずの、師匠の死や多くの奮闘が道となり、その身を包んだ日常。

……でも、運命が、それを乗り越えようとする彼女自身の意志が、それを許さない。

傀儡だった姫は純粋な学生となり、友の為に戦える戦士となった。

今の彼女の姿を見せたら……貴方たちはきっと、笑ってくれますよね？

真っ直ぐ、強く、育ってくれたって。

……だけど僕は彼女の傍には立てない。
そこで彼女を護れない……だから……。

「アーニャ……さん……」

「行きたまえ、刹那くん」

「えっ、あ……ですが！」

「友達が心配なんだろう？ 力になりたいと思っただろう？」

戸惑う様な表情を見せる刹那くん。

彼女が麻帆良に来たのは大切な友人を、護るため。

そして目の前に居るのは、そんな彼女を狙う悪鬼が跋扈する西の人間。

「……イエ、私はあの方を護らねばなりませんので」

だから刹那くんは否定する。

だけどね……それじゃ困るんだ、僕が。

君が彼女を想っているのは知っている。

だけどね、それじゃ僕が困るんだ。

これから先、あの子が先に進んでいくために。

君がたった一人の人を想い、たった一人の人を護る様な人間になってもらっでは困るんだ。

彼女の為にも……君自身の為にも。

「ここには僕がいる。ここには君の師匠でもある青山先生がいる。

僕がこう言うのはどうかかわからないけど、現麻帆良最強戦力がいるんだ」

「……ですがっ」

「大丈夫だ、これでも僕は結構強いつもりだし。……君の大切な人にとっても大事な友人だろう、彼女は？ 君たちを再び結びつけてくれた、君の大切な人だろう？」

嵐の発生源。

そこを鋭く、弱々しく刹那くんは見つめる。

「行きたまえ」

「……ッ」

「行けえッ!!」

「はっ、はい!!」

抑えつけられている獣の脇を抜け、刹那くんは走り抜けた。

……うん、それでイイ。

君はそれでイイんだ。

未来がある。

天井の見えない広大な未来が君たちにはある。

薄汚れていない、飛んで行ける綺麗な翼が君たちにはある。

その翼がどうか、彼女の力にならんことを。

『神鳴の汚点』が抜けたか。

カツ！ 下らん！！

何が『神鳴の汚点』か！

アレは烏族との混じり者とはいえ、他の同年代の子どもより幾倍も才能を示しておろうが。

さすが我が盟友の孫娘、ということじゃ。

生まれなど関係ない、必要なのは実力のみ。

外法だ、正道だも関係ない。

必要なのは『日の本』の力になるかどうか、その礎となるかどうか。『日の本』に生まれ、この地で研磨され続けた業をその身に修めるならば。

それが当然の帰結であらうて。

彼の混じりはまだ良いわ。

『西の姫御子』を護るためのここに来ておる。

是、構わぬ。

アレは交渉の場で、一切の場で、『西』の発言権を高めるための布石。

だと言うのに『西』に蔓延る蟲どもは、『西洋魔法使い』を駆逐するためにアレを使うなどと吠えおる。

時代の流れも見えておらぬ阿保。

百を超える年月を生きる、この儂ですら理解出来ることを理解できぬ硬い頭の人間。

下らぬ……なんたる下劣か。

戦争を終え、さかのぼれば鎖国を終えた頃から。

『明治』という時代が始まり、外の文明がこの国に入り、それを受け入れた。

反抗した人種もあるが、それは完膚なきまでに叩き潰されて今の通り。

西洋の文化は、裏表問わずこの国に浸透してある。

だと言うに、旧い阿保どもは『西洋』を、それに付随する『東』の人間を滅さんとする。

二十年ほど前に起きた魔法界の大戦で、多くの有能な術者を失った事も基因してある。

魔法使いが起こした戦争で、術者を失った。

身内を儼も失ったが、孫を、孫の嫁を失ったが、それはそこにこのこ出掛けて行った貴様らのせいである？

武勲を上げるために出かけ、この地で生まれた業を以て闘い、名誉の死を遂げた。

それを『西洋魔法使い』の為だと唸り、『復讐だ』と刃を掲げる。

……フン、阿保どもはヤツらの死を穢す気か？

我が曾孫もそうじゃ……アレ復讐に取りつかれてある。

最近は何やら不穏な動きをしておる様じゃしのう。

……話が逸れたか。

ともかく必要なのは、この国を護るということ、この国で生まれた業を護るということ。

そして……『日本の本』の術者が、この地に於いては『西洋魔法使い』の上に立つこと……それだけじゃ。

『西』、『東』。

儂に言わせればその分け方は間違つておる。

『日の本』か、『それ以外』か……そう分けるべきじゃ。

どちらにもこの地で生まれ出で、現代まで連綿と続く業がある。

その者たちがこの国を護り続けた。

一度負けたとはいえ、再び力を取り戻しつつある。

『西洋』の助けなくともこの地を護れるだけの力を取り戻しつつある。

ならば歴史ある『日の本』の者たちが、この国の裏世界に於いて何よりも強き発言権を持っていなければならぬだろうて。

そしてその折に柱となる『御三家』は、あるべき場所におらんとならぬだろうて。

彼の天子を護りし『近衛』は彼の移動に伴い東へと居を移した。
是、そうあるべきじゃ。

善悪に依らず中庸に位置し裁く『浦島』は京と東に居を持つ。
是、そうあるべきじゃ。

そして……多くの英霊たちの眠る天子のが長く居を置いた京の地。
そこを護るべきは、英霊たちを率い、どの者より勇猛果敢にこの地を護り続けた『青山』。
そつ……あるべきじゃ。

「『神鳴最強』。日の本一の剣士である貴様が、青山直系に生まれる貴様が、京の地からこちらに居を移すなどあってはならぬと……それはわかるであらう？」

「ホホホ、流石『天ヶ崎の鬼爺』様。『魔法使いに従うのか』……
なんて下らんことは言いまへんのね」

「無論。下らぬ阿保の戯言を儼に求める気か？」

「……ホホホ、せやね。鬼爺様とウチの家族とはるかはんと、あの子と。ちよいだけみんなと違ったもんねえ」

しやらんと、『神鳴最強』は刃を儼へと突き向ける。

「やからこそ、わかつて欲しいんや。全部、全部、ありのまんまそのまんま受け入れてくれた人がある。その人の力になってたいの、ウチは」

「ならば連れて来い、京の地に」

「でけへんからココにおる」

「異端と扱われ、火の粉が構わず降り掛かったとしてもか？ そこまでして成し貫く想いか？」

「ウチの身に生まれた何より強い想いや。そやし」

傍に、張り付くようにして狗狸を押し留めておる男。
この地で第二位の力を持つ『高畑・Ｔ・タカミチ』。
彼の女を監視するために、張り付いておるのである。

「妹も、旦那を連れ京に戻るのだろう？」

「そやね。やからこそ、あの子が帰るんそやし、父様もおるしウチがこつちに来ててもイイでっしゃろ？ あの子の剣はウチと変わらんくらいに鋭いで」

「剣腕。それだけが……少なくともこの儂が貴様に括る問題ではないと、貴様は知っている」

「……知つとるよ、それは。やからこそ……鬼爺様には解つて欲しいんどす」

バチリと、空間に神が鳴る。
儂に従っているはずの妖狐が、頭を垂れる。

神鳴る剣、『京都神鳴流』。
この発祥は平安の世に遡る。

京の地の『信太の森』に、一匹の狐がいた。
白い毛並みを持つそれは、強い霊力を持っていた。

そんな狐の噂を聞きつけた男が一人いた。
妻が病に倒れ、彼の狐の生き肝を喰わせれば妻が治るかもしれないと思つた一人の男が、その狐の住んでいた山に罠を仕掛けた。

罠に囚われてしまった狐。
その狐を一人の男が助けた。
しかしその際に、狐を殺しに来た男と戦い助けた男は怪我をしてしまふ。

そんな男の下へ、一人の女が訪ねてきた。

男を快方するために訪れていた女。

二人の間にはやがて愛が生まれ、一人の男子を成した。

しかし、女は子が五つになった時に姿を消してしまう。

自分の正体が狐だということが知られ、そして男がとある陰陽師に殺されてしまったからだ。

子は成長し、父を殺した男を殺し、国一番の陰陽師へと成長した。

その後、父を生き返らせ、父とともに再び信太の森を訪れた。

そして、女は再び二人の前に姿を現した。

その時、男と女の間には一人の女子が生まれた。

『清明』という兄の名をもじり、『神鳴』と名付けられた。

『神鳴』は成長し、『安倍』という苗字を変えた。

一度死んだ父を想い死を願わす『青』を、父と母の出会った場所である『山』を。

『青山』という苗字を女子は冠した。

「嗚呼亜亜津！！」

敵つ霊が、彼女の周りを巡る。

『神鳴』は、母からの力をそのままに受け継いだ。

それは天から降りて来た狐の、『天狐』の聖なる雷。

長き白刃にそれを宿し、兄の力と成るべく。

護国における魔性駆逐の為にて刃を振るった。

神鳴る剣は『神鳴』の剣。

偉大なる陰陽師『安倍清明』と偉大なる剣士『青山神鳴』を産んだ
天狐『葛の葉』の雷を受け継いだ剣。

それをこの娘は誰よりも、誰よりも体現しておる。

「久々の解放……力、やっぱり落ちとるわ。九本やったのに今は四本やし」

空間を神が鳴る。

四つの狐の尾が生え、粒子を巻くように白光する。

「『先祖返り』……始祖『青山神鳴』の力をその身に宿す剣士。護国の象徴、復興の象徴」

だからこそ崇拜され、だからこそ忌まれ。
暗く冷たくこの娘は育った。

「カッコイイって言うてくれた。綺麗だなんて言うてくれた。やわらかいなんて言うてくれた。あったかいなんて言うてくれた」

身体を強く、抱きしめるようにして呟く。

「どんなに暴れても、どんなに力を見せても。ただあの人はそう言うてくれた」

この娘の顔付きが変わったのは知っている。
老人はただ未来を育てるために。

特別に生まれてしまったこの娘を気にかけていないはずがない。

「うれしかった。やわらかかった。あつたかった」

儂では力になれなかった。

曾孫も、娘の家族も、力にはなれなかった。

「笑えたんや。怒れたんや。泣けたんや。あの人がおったから、ウチはウチになれたんや」

力になったのは男。

「やからウチはここに来た。あの人が離れん限り離れへん」

何も知らない、ただ少し裏世界に関わった。

『浦島』と『近衛』に喧嘩を売った胆力のある男。

「そやし……ね」

しやらんと、錫杖を鳴らす。

「『日の本』の為に儂は生きてきた」

「ウチはあの人々の為に生きていく」

「言葉は不要。示せ」

そう言うと娘は……儂がいままでみたどんな笑みよりも、あたたかにやわらかに、ただ一人の男を想い笑った。

光が視界を蹂躪する。

周囲を埋め尽くさんばかりの雷が降り注いだ。

七十八匹目 我が身、我が力、我が心、ただ貴方の為に（後書き）

『京都神鳴流』のルーツは独自解釈。

そして景太郎くんは素子ちゃんと。

メインヒロインさんより彼女とのカップリングの方が好きだから。

七十九匹目 人生みんなデメエの我が儘で生きてる（前書き）

隼人と、その周りの人間関係改訂の為の話。

出来てる……かなあ？

ご指摘ご意見、よろしければお願いいたします。

七十九匹目 人生みんなデメエの我が儘で生きてる

「人は……人は皆が前を向きい！ 立ち上がりい！ 真つ当な道を歩もうと努力できるわけじゃない！！」

光る弾丸が、光の射手が、幾十も香坂くんに向けて延びる。破壊属性を宿したそれ。

「おどどどどどどらあっ！」

炎の腕で『魔法の射手』を叩き潰し、香坂くんは坂上先生へと駆ける。

「不良ではない普通の生徒でも、いくら時代が流れたとしても……誰もが何かを抱えて生きているう……そしてその抱えているモノに立ち向かえる人間は僅かだあ！ 立ち向えられなければ他の生徒かあ！ 学校かあ！ 時代かあ！ 社会かあ！ それに潰され自分を殺しい！己を偽り生き続けなければならない！」

突き出す拳。

その直線状に猛る炎の道。

顕した光の盾で炎を阻み、回転させ散らし。

投擲武器のように投げ飛ばした。

香坂くんの身の丈を超す光の六角形。

右手を開き受け止めて、その衝撃が彼の全身に響く。

地面を削る様に後退していく香坂くんに、坂上先生は白き雷鳴を轟かせた。

「『逃げた』というレッテルは心の中に大きく張られたそれはあ！……一生付き纏い……人を、苦しめるう……。抗おうとして自分に圧迫され続けて爆竹のように弾けてしまいかもしれない！！結果、一生残る傷跡を残して歩く事も立つ事も出来なくなってしまう……人は、誰もが君のように強くない！！」

「そんなガキに手を貸すのが教師の役目だろうがアツ！」

痺れる身体を押して、香坂くんは『火の息』を吐きだした。前方、彼の視界を風潰しに火が走る。

「そうともお！ 私自身も救われえ！ 新田と同じ恩師に……救われ、私は教師を目指したあ……私も必ずそうなるとお……そんな教師になつて生徒を救おうとお！」

光る矢が、火を払う。

坂上先生の拳から一直線に伸びる、高密度の『魔法の射手』。

炎の拳で迎撃する香坂くん。

その『殴る』という動作後の技後硬直に合わせ、追撃の光の矢が彼の顔を抉った。

血潮が辺りに巻き散らされる。

「だがあ……だが無理なんだよお！ 目の前の生徒を救おうとしてもお！ 皆が皆正面からぶつかり合ってくれるわけじゃない！！道を正してくれるわけじゃない！！クソのような世界の中でえ……不幸に塗れて人は生きなければならぬ！！」

だが彼は止まらない。

額から後頭部へ、頭蓋が丸出しに皮膚が抉れ。

熱い己の血が眼を、耳を犯すのに。

針の筵に立たされたような痛みが彼を襲うのに、香坂くんは止まらない。

「それが人間だろうが！　それが生き物だろうが！　その中で本能からか、感情からか、生まれる幸せを心に抱いて生きていくんだろうが！！」

「だとしてもおおっ！！」

練られ、具現化する光の槍。

先端は二つの槍が螺旋を描くように絡み合い、形成されたそれを掲げ、ギチリと全身を『魔力』で肉体強化し力を溜める。

「戦争の無い国に生まれるだけで奇跡だあ！　五体満足で生まれるだけで奇跡だあ！　学校に通える年まで育つだけで奇跡だあ！　学校に通える金があるだけで奇跡だあ！！　だと言っのに……そんな恵まれた環境に居ると言っのに私は真っ直ぐ人が立てるようにする為に！　人に正義を！　幸せと持ってもらおうと教師になったというのに！　それでも私が救えるのは三年間でたった百にも満たない生徒だあ！！」

光る槍は解放され、香坂くん目掛けて邁進する。

「奇跡に奇跡が重なり起きた千載一遇の出来事だったとしてもあ！　子供全体に比べれば微々たる数！！　私の手では僅かしか救えない！！」

ぐん、グン、と風を切り、音を置き去りにするよう僅かな距離で加

速して。

「例えその場で救えたと思つていたとしても！ 時が経てば不幸の海に沈むかもしれないんだあ！！ そんな彼らを救おうと『理想』を求めて何が悪いかあつ！」

『亜光速』と表現できる迅さで香坂くんに死の宣告を与えた。

「ハッ！ 舐めてんじゃねえぞ糞ガキが！ テメエは夢見る乙女がコルアツ！！」

光る槍、その先端と炎の拳が火花を上げる。

香坂くんの右腕、肘から指先を形成する炎の腕が、一層その勢い苛烈に燃え上がった。

「『現実』を受け入れ、『現実』に足掻き抗い立ち向かう！ それが大人になるってことだろうが！ それを教えんのが教師の役目だろうが！！ その為の機会と力を与えるのが大人の役目だろうが！！」

拮抗する槍と拳。

光と炎、白と朱。

「テメエの言つてゐる事はテメエの我が儘だ！ 『理想』の中で誰もが幸せになんざ言つて、テメエの都合のイイようにテメエの『理想』で塗り固めた未来を押しつけてるだけだろうがアアアツ！！」

徐々に、朱光が白光を塗り潰す。

少しずつ、だが確実に、炎は光を押し込んでいく。

「ガキが大人になる機会を失わせてる！ 神サマ気分の馬鹿の妄言だろうがアツ！」

拳は槍を握り壊す。

光の粒子が散り、炎が空間を支配する。

「教師であるテメエが何でわかんねんだよオツ！！」

「教師だからこそ！ 救おうと『理想』を求めるのだよオツ！ 『現実』では子供を救いきれないからあ！ 妄言と罵られようと子供たちを大人にする機会を与えたいと思うんだよオツ！！」

その炎を再び支配するように、光の剣が空間を照らす。

煌めく、白き刃。

巨人の武具のように尋常ならざる大きさをしたそれは、香坂くんへ躊躇いなく振り下ろされた。

砂塵が上がり、煙が晴れ、そこによると立つ香坂くん。

右腕は炎を消し、代わりに肘から先が存在しなくなっていた。

血は流れておらず、ただ最初からなかったかのように、彼の右腕の一部は失われておった。

「君の為でもあるう…… コレは君の為でもあるんだあ」

荒い息を整え、坂上先生は口を開く。

「『完全なる世界』が成れば、ここに縛られた彼女も救われる……
……京から君を頼りにやって来た女も、君の生徒たちも、君の弟分や
妹分もあ。そしてえ……君が想う二人の女性もだあ」

坂上先生以上に息を乱していた香坂くん。

それは彼の言葉でピクリと、動きを止めた。

「苦しむ事もなく、哀しむ事もなく、ただ幸せに生きることが出来る……君自身もそうだあ」

「俺、自身ねえ……」

「そうだあ……君もまた浦島くんを想い、その心苦しさと体中を苛まれながらシスターシャークティを想うことも無くなるう。誰もが『理想』のように、過ごして行けるんだあ」

はるかくと……シスターの話か。

ワシは、何故彼が彼女を振りシスターシャークティを想うようになったのか、まるで見当もつかぬ。

何かただならぬ事情があったであろう、ということは推測できる。

『近衛』と、『浦島』と。

日本を代表する『御三家』の内二つに啖呵を切って、喧嘩を売って。周囲の者が見て呆れるほどにはるかくに惚れこんでおったはずじゃ。

じゃが、彼は鞍変えをした。

若気の至りか？　とも思ったが、それはどうやら鶴子くんに出した様子じゃしの。

そつやって手を出した鶴子くんまで拒絶しておるんじゃ。

どうもそれもまた違うようじゃの。

「『理想』……『理想』か」

「そうだよお……君もあるんだ、訪れるんだ、思い描く『理想』の世界があ」

「ハハハッ、そうかよ。じゃあ叶えてくれんのか？」

そう言つて彼は力なく笑つた。

「はるか、シスターシャークティと、エヴァと、鶴子と、鈴音に蛇蝎の如く嫌われて、糞みてえに扱われる未来を俺に超越せよ。この前言つた、『惚れさせてみる』なんて馬鹿な言葉、消し去つてくれよ。それが俺の『理想』だ」

「……はあ？ 何を、君はあ……」

……フム。

しかし鈴音？ 超くん？ どーゆー事じゃ？
淫行？ イヤイヤまさかのう……のう？

「要はさ、俺が馬鹿だつたんだよ。一人、たった一人想い続ければよかったのに、俺の下半身が暴れん棒だからか、そんな軽い低俗な理由からじゃねーのかもしれないが……俺はそう出来なかった」

そう言つて香坂くんは、カリカリと頭を掻く。

「はるかと同じくらい愛しい想いが、溢れだしたんだよ。何でか知らねえ、どうしてかわからねえ、でも初めて見たはずのシスターシ

ヤークティを何があるうと、どんなことがあるうと護ってやらなきゃなんねえって！……俺の心の奥で、俺自身が叫んでんだよ」

ギョツと、熱い胸板を彼は握る。

少し焦げ付いたそこが、トクトクと震えているように見えた。

「だからさあ、振ったんだよ俺は！糞みてえな男らしく、ゴミみてえにはるかとか鶴子を棄てて、盛った犬みてえにシスターシャークティにアプローチを掛けたんだよ！！そうすりゃみんな、俺のこに見限ってくれると思った……俺みたいなの見限って、クズに引かなかったって忘れて、万倍イイ男と一緒になってくれるってよお」

残った左拳。

それを握り締めて、彼は自分の太もを強く打った。

「けどダメだった！エヴァはそれでも俺から離れず居てくれて、鶴子はそれでも俺のこと想い続けてくれて、シスターシャークティはそれでも俺を受け入れてくれて……はるかはそれでも、俺との想い出かき抱いてくれてたんだよ……っ」

懷に手を入れて、香坂くんは取り出した煙草を一本口に加えた。

銘柄は確か……『マールボロ』、じゃったかの？

「俺は馬鹿だから、そんな間違いばかりだ。俺は、結局現状に甘えてエヴァと一緒に居て、大学行き始めたって素子から聞いても鶴子を止めに行けなくて、シスターシャークティが恥ずかしそうしてるのを見るのが幸せに思えちまって……はるかが結婚するって聞いて、失うのが、誰かのモンになっちまうのが惜しくなって……アイツのところに行っちまうような……そんなクズだ」

左手で器用に火を付けて、煙を大きく吸い込む。

「ガキの頃は粹がって、俺は自由だなんて馬鹿やって、他人に迷惑かけて、何人の人生狂わせたかわかんねえ。桜子も、裕奈も、政利や薫なんかも、俺が担当するようになったのクラスのヤツらも……ネギも、アーニヤも、何人の人生に影響与えちまったのかわからねえ」

紫煙がゆらゆらと、彼の口から零れては堕ちる。

「俺は……『理想』になんて逃げちゃいけねえんだよ。人一倍にクズで、間違ったことしかして来てねえ俺は、誰よりも『現実』で闘わなきゃなんねえんだよ。これから先、俺が歩む人生で、それも正しいのか間違っているのかわかんねえけど……少しでも、人生で俺と関わっちまった運の悪いヤツらを、俺なりに、俺の過ち正していかねえといけねえんだよ。そこで間違えたら、また間違えただけ、俺自身の手で、俺の全てを使って力になってやらねえといけねえんだよ」

「……君の人生を狂わせたシスターシャークティは『半魔』^{ハーフ}だあ」

「知ってるよ。それに狂わされてなんかいねえ……俺が狂わしたんだ」

「淫魔とのだあ……『魅了』^{チャーム}で君を誑かしたあ」

「んなもん関係ねえ。俺が抱いたこの想いは、ちゃんな魔法なんてもんで生まれた薄っぺらなもんじゃねえんだよ。何よりも重い、命掛けて護ってやりたいと想える……そんな想いだ」

ぼくと、口から出た火が煙草を灰にする。

「だからこそ、俺は『理想』なんて言葉使っヤツが気に入らねえ。そうやって『現実』を、そこで生まれた責任を軽々しく捨てるようなヤツが……気に入らねえんだよ。背負って生きていくのが人間だろうが、抗って生きていくのが人間だろうが、間違っ解決して間違いなから生きていくのが人間だろうが」

肘から先を失った右腕を、再び天に掲げる。
無いはずの拳が、強く握られているように見えた。

「そんでもってダチの！ ガキの！ 女のそれもまとめて面倒見るのが男って生き物だろうがアアアツ！！！」

バチリと火花が散る。
熱気がチリチリと坂上先生の肌を焼く。

「クズな俺のクソみてえな人生！ 馬鹿な俺は周りなんて見ねえからなあ！ 俺が俺の人生で果たさなきゃいけないこと果たすために……俺の女をまとめて幸せにするために！ テメエの『理想』は俺がぶっ潰すッ！！」

右肩から先、再び現れた炎の腕を振りかざし、香坂くんは坂上先生へと向かい駆けた。

七十九匹目 人生みんなデメエの我が儘で生きてる（後書き）

後一話、エヴァ編終わりまで伸びたかもですね。

八十匹目 キモイくらいの幸せっぷりはその中の本人は気付かず、周りに指摘さ

ネギ・アーニャパーティVSエヴァ 戦終了。

八十匹目 キモイくらいの幸せっぷりはその中の本人は気付かず、周りに指摘さ

巨大な氷塊が、マクダウエルが掲げる手の上に現れる。
丸くて、大きくて、冷たくて、きつとすごく重くて痛い。

「マレウス・アクイローニス
『氷神の戦鎚』」

『魔法』という存在。

『魔法』としか考えられない、科学とは思えない現象が私の目の前で繰り広げられてる。

炎が現れて。

氷が現れて。

光が現れて。

風が現れて。

「からだっ……動かない、かなあ……私が前にっ」

それを消し去って、殴っちゃえば地面を叩き割る神楽坂がいて。

「俺っちがあっ！ ちっちゃえ力でも俺っちがあっ！」

喋り牙をむくオコジヨがいて。

「動けっ！ 動け動け動け動けエエッ！！」

大切な人の為に闘おうとするネギくんがいて。

「……安心して、アキラ……絶対、私が守るから」

何も出来ない私の前で。

「あああつ……あああああああゝあゝっっ！！」

力強く槍を手に握りしめて。

「潰れろ」

炎噴き出す槍の先端で大きな、大きな氷塊を受け止めて。

「ごんのゝおゝおおゝおっ！！」

押し込められながら、膝を崩しながら、それでも負けまいと踏ん張って。

……アーニヤ。

私は何で、アーニヤがこうやって頑張ってるのか分からない。

知ってると思って、それでも全く私はアーニヤのことを知らなかったから。

だから知りたい。

私はアーニヤのことを。

魔法の事もあわせて、全部まとめて。

私はアーニヤの力になりたいから。

アーニヤのことを抱きしめてあげたいから。

私を守るって言うてくれた、大切な人の為に。

「アキツ、ラ……何やってんのよオツ！」

冷たい……重い。

潰されそうだ、ただ触れてるだけなのに。

コレが『魔法』……アーニヤたちのいる世界……でもっ。

「スマナイ。でもコレで私も力に、なれるかなって」

「バ……力あつ」

槍は戦鎚に踏み潰され。

真っ直ぐ向かっていたはずの先端はズラされ。

『潰された』って、走馬灯が頭に浮かんで。

そう確信した時……黒い髪が私とアーニヤの前に広がった。

「”神鳴流奥義 『斬岩剣』” ツッ!」

氷塊を真っ二つに叩き斬り。

「セツ……ナあ」

「はい、不肖『桜咲刹那』……我が親愛なる友の為に、大切なもう一人の主君の為に馳せ参じさせて頂きました」

桜咲はそう言って笑ったんだ。

「まさか貴様が来るとはな、桜咲刹那」

「はい、私の大切な人の為。どうかエヴァンジェリンさん、寛大な心で矛を収めてはいただけないでしょうか？」

「無理だな」

「そう……ですか。では……退いて参れ……私は主が剣刃、退いて参れ……私は友が……白翼！」

そう言くと、白き一對の翼が大きく刹那の背中から現れた。嫌悪していたはずの、混じりモノの証。人とは違う、異形のカタチ。

「綺麗ね、その翼。木乃香もきつと……そう、言っわよ」

「神楽坂さん……はい、ありがとうございます」

嗚呼、そうか刹那。

貴様も受け入れてもらえたんだな。

何もかも、すべてまとめて……隣で笑う、一人の少女に。

「『アンナ・ユーリエウナ・ココロウア』が友、『京都神鳴流
桜咲刹那』……推して参るっ！！！」

私と同じで……幸せそうだな、桜咲刹那。
だからこそ、ここでしたっけ叩き伏せておかねばならん。

私のように下らぬ思いに惑わされ、何よりも大切にせねばならない
想いを枉げてはいけないだろう？

翼をはためかせ、その名の通り一瞬で接近する刹那。
手に持った白刃、詠春の愛刀でもあった『夕凧』をかざし、魔性駆
逐の剣が振るわれた。

「桜咲刹那、人外の貴様が幸せになれると思っっているのか？ 忌み
嫌われる血をその身に宿す貴様が、不幸を背負いこの世に生を受け
た貴様が……まるで人のように、幸せになれると思っっているのか！
」

取り出した鉄扇で剣を受け、ヤツの力を流し投げ飛ばす。
そして再び剣を手に、刹那は私を見つめて口を開いた。

「はい……難しいかもしれませんがね、剣も捨てず、生れ始めた幸せも捨てず、お嬢様もアーニヤさんとも、あきらめなければ必ず幸せに歩んでいけると」

……あゝ、うん。

ちよつと待とうか桜咲刹那。

今の状況はな、私とお前の名シーンというヤツだ。

形は変わって、本来ならばまほら武道会の折に出されるはずのイベントだが、原作でも屈指の名イベントだと私は思うぞ……っと、なんの電波だ？

ゴホン！ と・も・か・く・だ！！

そんな簡単に、あつけらかーんと馬鹿みたいに言われてしまつては、何だかシリアス全開に、ちよつと年長者の威厳を出そうと思つた私が阿保のようなんだが……。

「ほつ、ほざくなガキ！ 甘つたれたきちゃまにそれが出来るかッッ！！」

かつ……囃んだあああつ！？

なぜ？ なにゆえ？ こんな場面で？

何がいけなかつた！？ 取り繕おうとした私がいけなかつたのか！？

「きつ、きちゃまつて……ププッ」

かぐつ、神楽坂明日菜あ……貴様は殺す！

後で必ず殺された方がイイという思いに合わせてやる！

必ずだ！ 必ずだぞ！！ 絶対だからな！！

「……はい」

そしてお前は変わらないんだな。

いやー、な。

なんかもう……なんて言うかなあ……まあスルーしてくれたのはありがたいんだけどな。

「だって今、私の目の前にその前例がいるんですから。あきらめなければ幸せになれるって、大切な人と歩いていけるって教えてくれる人が」

うえ！？

あゝ……あああゝ……あああああゝ……よし、殺そう。

「死ね、桜咲刹那」

「ええっ！？ 私間違ったことを何か言ってしまいましたかッ！？」

「その純朴さが気に食わん！！」

「理不尽ですよそれは！！」

とりあえずコイツは死なす。

周囲3km、三百の人形を自在に操る糸。

それをすべてこの女の動きを止めるためだけに扱う。

「ちよっ！ エヴァンジェリンさん！？」

微かな距離も動かさせん。

そして……殴る。

[illegible]

よっし、**戦闘不能。**

耳は聞こえて口も利けるだろうが、戦いには参加できたらうさ。んでもって、ガキどものところに蹴り飛ばしておくか。

「それ見た事か！　こんな風^{ふう}に絶大な力を持つ存在にその道を阻まれるかもしれないんだ！　所詮夢物語かもしれないんだ！」

「うわ……無理矢理シリアスに持っていて……」

黙れ神楽坂。

死ね、もう死ね、今すぐ死ね。

「私は人を殺し、その屍の上に立ち今を生きている。……数は私に比べ微々たるものかもしれないが貴様もそうだろう？ そんなモノもまとめて受け入れてくれる様な人間が都合よく現れると思っているのか!!」

「え？ 何よ今度は……ネタ？」

舌を噛み切れ首を吊れリストカットしろ。

「うつさいのよさつきから！ セツナがどんな存在だからって、どんな道を歩んでいただろうって関係ない!! この先何があるうと私はセツナの友達よ!!」

「アーニヤ、さん……」

「私もそうだから。まだ全然この世界について知らないけど、それでも友達の友達に友達……それくらいはわかるから」

「アキラさん」

「僕もです！ 僕はまだ友達じゃないのかもしれないですけどこの場で友達になりたいです！ 僕なんか力になれるかはわかりませんが、それでも桜咲さんとは友達になりたいです!!」

「……ネギさん」

「みんなさー、そんなシリアスに合わせなくっていけない？ エヴァちゃんだってあんな感じだったし、もうちょい軽くてイイんじゃない？」

氷漬けにして、かき氷機で削って豚の餌にしてやる。

「……でも、幸せには成れるでしょ……誰だって、桜咲さんだって私でよければ手を繋ぐからさ」

「神楽坂さん……はいっ」

……クハハハハ！ そうだそうだ！ 最初っからそうしてれば貴様はよかったんだよ！！
まったく手間をかけさ「それに……さ」……なんだ、その妙な眼は？

「さっき言ってた通り目の前の隼人先生大好きっ子はものすーんごく幸せそうだもんね！ 今なんて痴話喧嘩してるみたいだし！！」

……。

クロス……クロス、貴様だけは必ずクロス。

「ずえっ、なんだよこの『魔力』！ さっきなんかよりずっとテカくて深くて濃い！！ まだあの女手加減してたってのか！！」

しんしんと、雪が降る。

周囲の温度を奪い、熱を消し去り、吐息が白く染まる。

「圧倒的魔力は周囲に影響を与え、時に魔法使いは『天候』すら支

配する」

「これが……父さんと同じ、父さんがやつとの下で封印した『大魔法使い』の力……」

「ハッ！　ぼーや、『大魔法使い』そんなものナギもそうで、ココのジジイもそうで、過去を振り返れば沢山いるではないか。そんなモノ、この私の肌にはどうも合わないんだ。第一ドスが効いて無いではないか！！　だからなぼーやども……私は誰が聞いても恐れ入ってしまうようなカツコイイ肩書きを考えたのさ。世界に一人しかない最強の術者の名前……それがっ！」

凍る、凍る、世界が凍る。

小娘が槍から放とうとする炎も、ぼーやが発現させた光も風も雷も。『完全魔力無効化能力』の阿保も、残らず凍っていく。

「私は『大魔法使い』ではない……そう！　私を呼ぶならば『大魔導士』とでも呼んでくれっ！！！」

「そーいえばちょっと前、隼人先生『大魔導士ってかっきーよな』って言ってたわよね。やっぱ最後まっ！？」

白銀の、氷の世界にただ一人。

私に挑んだ『勇者』どもが氷に閉じ込められ。

そこ歩みを進め、立ち止まり私は叫ぶ。

「があああつ！　今すぐこの阿保面を砕いてやりたいiiiiiiii
いっつー！！！」

八十匹目 キモイくらいの幸せっぷりはその中の本人は気付かず、周りに指摘さ

名ゼリフ、ダイの大冒険屈指の名ゼリフのはず。
名場面、ネギま屈指の名場面のはず。

どーしてこうなった？ どーしてこうなった？

八十一匹目 結末に満足するかは結末が同じでも人によって違う（前書き）

隼人VS坂上先生編以外の結末を。

八十一匹目 結末に満足するかは結末が同じでも人によって違う

「それぞれの結末 その1」

「え」と……あのさ、桜子」

「にやにかな、美砂？」

「何で私たち縛られてる訳？」

「そう……それは世界が悪いのさ……」

「イヤ、意味わかんないからね」

「なあなあ裕奈、ちょっとええか？」

「何かな？ このゆうなちゃんがビシッと答えてあげるさっ！」

「何でウチら裸なん？」

「そりゃそりゃお風呂に入ってたからっしょ」

「……あゝ、そいやあそやった」

「がっちり腕足縛られてんのは？」

「ゲヘヘ、ねえちゃんらエエ身体しとるのう……スケベしよつや」

「それはないっ！ 初めて硬派な男って決めてんのよ！」

「私のお腹が痛いのは？」

「牛乳飲んだから！」

「アレ？ 私つてば牛乳飲んだっけ？」

「飲んだよ」

「うちも？」

「飲んでたー」

「記憶にないんだけど……」

「えとー……ほらっ！ たゆんたゆんが羨ましいって」

「たゆんたゆん？」

「たゆんたゆん」

「たゆゆん」

「桜子、裕奈、アンタら最近何食べた？」

「ぎゅうにゅ」

「あとは……タン塩定食？」

「牛か！ やっぱり牛なんか！？」

「えええっ！ 牛乳持ってこーい！」

「私は五本っ！」

「ったく、くだらないわねえ……あ、私は三本で」

■
■
■

それぞれの結末 その2

「……明石」

「神多羅木……帰って行つたよ」

「そうか」

「しつこいからって、割に合わないからって」

「そうか」

「娘を、娘の日常を守れたよ」

「そうか」

「僕にも……守れたよ」

「随分と腫らした顔だな」

「イイよ、それでも。守れた、守れた……守れたんだ」

「それは、良かった」

「父親らしくなれたかな？」

「さあな」

「コレでよかったんだよね？」

「当たり前だろう」

「……夕子は喜んでくれるかな？」

「怒るだろうな、きっと」

「そう……かな？」

「ああ。ボロボロじゃないかって、死んだらどうするんだって。俺がきつと文句言われる」

「あはっ、そうかも」

「だがそつだな、きつとあの人なら……『後悔が無いなら笑おう』
っ言うだろうさ」

「……そつだね、きつと」

「『元氣は最強』だからな」

「……………」

「なんだ？　なんだその顔は？」

「ううん……うん、ちょっと似合わないなって」

「ほっとけ」

■ ■ ■

「それぞれの結末　その3」

「何とか終了までキープ完了、っと」

「疲れました」

「何もやってないけどね、君は」

「うつくつ……あう」

「イイイヤまあ今回は、僕がちゃんと確認してなかったのが悪かったからさ」

「勉強、した方がいいんでしょうか？」

「それはそれなりに出来るに越したことはないんじゃないかな」

「ですよね……アレ？」

「ん？ 何か問題でも起きたのかな？」

「イヤあの……もう零時過ぎましたよね」

「そうだね、ちょっとただけだけど」

「電力、戻って無くないですか？」

「へっ？ ……あ」

「ですよね！ コレって不味くないですか！？」

「介入者がまだ止めてない……片時も休まずひたすら供給切りに全力かけてる……」

「どう、するんですか……？」

「地味に、崩していくしかないんじゃないかな？ もしくは向こう方が気付いて止めてくれるのを待つかい？」

「……こっ、コーヒー淹れてきます」

「よろしくたのむよ……」

■ ■ ■

それぞれの結末 その4

「誰ダ、てめえハ？」

「『スラぼう』よん、ゼロちゃん」

「ケケ……ケケケケケケケケケケ！！ ドンナいめちえんダヨー！！」

「あら、そんなに私の格好って変かしら？」

「ケケケケ！」

「なかなかにせくすういゝ、だとは思わない？」

「ケケケケケケケケケケ！！」

「うんまつ」

「ケケケケケケケケケケケケケケケケケケ！！！！」

「もう！ そんなに笑わなくなつていいじゃないの」

「鏡デてめえノ顔ヲ見ヤガレ」

「なに、ハルト？」

「私はお前のやっていることがわからない」

「そうかしら」

「私の魔法、お前が本気でレジストしようとしたら可能はずだ」

「そうねえ、ちょっとハルトは遅いわよ」

「封じられても、弾き返すだけの技量や『魔力』を持っているはずだ」

「やったら疲れちゃうから。やわらかくしちゃうだけで終わっちゃったらダメでしょ？」

「……ただの肉弾戦でも、お前はもっと強いはずだ」

「ハルトだつてずーっと強くなつてたわ」

「私はお前に負け続けたからこそ、こつやって麻帆良で『魔法先生』を務められるまでになれたんだ」

「私を越えたつて事じゃない？」

「茶化すな」

「茶化してないんだけどねん」

「目的が、あつたんじゃないのか？」

「それを阻むだけの壁……じゃなくて、躓いちゃうような石が現れたんじゃないの？ そのお蔭でちよつとだけ後ろを見れた、とか」

「私は、お前たちから見れば間違っていたのか？」

「さあ？ それはコレから貴方が決めていくこと。私に貴方の意志を決めさせないで」

「……そうか」

「そうよ」

「ありがとう」

「どう、いたしまして」

■ ■ ■

くそれぞれの結末 その6く

「青山先生」

「ん？ なんや、高畑はん？」

「貴女はどうしてそこまでして……『西』を敵に回しているのでは

ないのですか？」

「味方がいるから。家族と、今日ので鬼爺様も。貫いてエエって後押ししてくれるみたいやしな」

「危険が及んでも、ですか？」

「それよりも強い思いやから、家族の思いも。そう言うてくれたなら枉げる方が失礼でっしゃろ？」

「……その、相手にも……危険が及んだら」

「その時はほっときます」

「へっ？」

「あの人はそないなに弱くないし、力になってくれる人もいっぱいえるし……それに」

「それに……？」

「ウチが必ず傍に行く……どんなことがあっても、絶対に。ほしていっしょに闘うから、大丈夫どす」

「……………」

「高畑はんが何を悩んでるのか知れへんけど、少なくともウチはそうやって生きていくつもりどす。もうちびつとその人のこと信じて、我が儘になればエエんではおまへんの」

雪広さんの、恐らくネギさんとの『仮契約』でもたらされた『アーティファクト』。

私に投げてよこされた『白い手袋』がそれ。

『場所』や『時間』や『内容』を指定されていたようですし、それに両者が合意すると発動するタイプのモノのようです。

私のデータを検索した結果、該当は判明いたしませんでした。

一般的に使われ頻繁に世に出るモノではなく、もっと古い物なのでしょう。

何と言っても『仮想空間』に隔離し、邪魔の無い条件で『決闘』を挑ませるのですから。

『仮想空間』を生み出すという点から『空間支配系』だとは推察されますが、それは数の無いレアだという証明にもなるかと。

しかし、それ以上に私が驚愕したのは。

雪広さん自身が、何度何度打ち飛ばしても、それでも私に向かって来たということ。

それほどまでに、ネギさんの力になりたいと……そう、想っていたのでしょうか。

「……………う、っ……………」

綺麗な金髪を、美しい肌を。

汚し、痛めても、それでもレイピアを手に、闘志を心に。

貴女のそのような姿を見て、私は少し変れたような気がします。

同じように、それ以上にと、マスターのことを想うから。

そうだと想い、機械の私でも想うから、この場を譲ることが出来なかったのだと。

『プログラムされた』と、片付けられる現象なのかもしれません。

それでも私は、それが『心』だと、私自身の『想い』だと、そうだと信じたいと思います。

「謝罪は致しません。ただ、貴女に感謝を」

「……………い」

闘技場。

麻帆良から隔離されたその空間は溶けるように消えていきます。

雪広さんの意識が失われたからかと、考えられます。

命に別状はないかと。

これからの生活に影響を与える様な後遺症も、同様に。

ただ数日か、数週間か、打撲で体中が痛むかもしれませんが……………。

戻って来た麻帆良大橋。

そこは摂氏零度を下回っているようです。

視界に移る氷の柱、凍え付いた地面と空気。

氷柱に閉じ込められたネギさんたちと……。

「うがあああああああああつ!!」

神楽坂さんの姿をした氷の像を粉々にしているマスターの姿でした。
幾つかあるようです。

あ、神楽坂さんの象徴とも言えるツインテールがへし折れました。

「貴様はア……この胸も無駄に育ちおつてからにいいつ!!」

胸のあたりに手を当てて、マスターの小さな手に余る胸を握りしめ。
有らん限りの力でそれをもぎ取り、神楽坂さんの胸は洗濯板になっ
てしまいました。

「フハハハハハッ！ 貴様にはそれがお似合いだ！ 第一どいつ
もこいつも胸ばかり無駄に育ちおつて……はるかも！ 鶴子も！
あのシスターも狂人もそうだ!!」

そう言うマスターはおもむろに、氷の胸を見つめます。

そして服のまき上げ胸のあたりに入れて、谷間をつくってしなっと
ポーズ。

「胸なんて飾りだが……そんなモノなくても私は凄まじくイイ女だ
が！ ……だが、まあ、うん……イイではないk「マスター」ほむ
にゅおいっ!!」

あ、神楽坂さんの胸が粉々に……。

「茶々丸うっ！ どこから見ていた！？」

「『うがああああああああああつ！』からです」

「忘れろ！ 今すぐ忘れろさあ忘れろ！！」

「Yes、マスター。ではメモリーを消去しておきます」

「え……あ、うん、よろしくたのむ」

マスターはクイト、小首を捻っています。
悩んでいるのでしょうか？

「まあそれなら……ッツ！？ 隼人の『気』が……消えた……？
『隔離空間』じゃない！ 枯渴したのか！？」

どうやらマスターは隼人先生のことを常に気を掛けながらネギさん
たちと戦っていたようです。

それは何というか……カッコイイと、思います。

「茶々丸！ 私は行く！！ スラぼう……か？ チャチャゼロと一
緒にヤツも動いているようだしな。お前はとうする？」

「私は……私は、ここでネギさんたちが目覚めるのを待っていても
よいでしょうか？」

「……そうか。好きにしろ」

脱兎のように、マスターは行きます。
空を飛ばうとして。

「へむにゅっ!？」

停電の復旧が終わり、学園結界が戻ったようで、マスターは顔面から地面に当たってしまいました。

復旧にはどうやら当初の予定より少し長い時間かかったようですが、張り巡らされた結界が、再びマスターの『魔力』を封じてしまったようです。

「うぐ……痛い……」

よろよろと立ち上がり、てくてくと歩き。
マスターは走りだします、隼人先生の下へ。

森の中にマスターが消え、一人の少年を見て私は『想い』ます。
雪広さんに、そこまでして私に抗おうとした原因を与えた彼に……
少し、『興味』が沸いてしまいました。
これはイイ事なのでしょうか？

それについて思考しながら、彼らの眼ざめを待つことにいたします。

八十一匹目 結末に満足するかは結末が同じでも人によって違う（後書き）

次と、恐らく次かその次でエヴァ編終了。
はるかさんがいないのは仕様。

八十二匹目 意見ぶつけあっても変わる想いと変わらない想いがある

天に向け、掲げられた香坂くんの右の腕。

炎に包まれ、生き意志を持つように蠢くそれは、やがて巨大な顎のように形を創る。

轟々と燃え上り、チリチリと世界を焼く。

空気は乾燥し、軋むように音を立てる空間で、香坂くんは朱の瞳で坂上先生を射抜くように見つめる。

地を這うように、握られた坂上先生の両の手。

光に包まれ、人の強い意志を示すように輝く、身の丈ほどの一本の光剣が形創られる。

煌々と発光し、明々と世界を照らす。

闇は取り払われ、ただ双方の想いがぶつかり合おうとする空間で、坂上先生は黒い瞳で香坂くんからの視線を受け止める。

それは間。

一瞬だったか、永遠を思わせる時間だったか。

一秒か、十秒か、一分か、十分か、はたまた一時間か。

微かな揺らぎも残さぬ、神聖なる間じゃった。

奇怪に、二人から洩れ出すと起きが心地よい音色を奏でるようで。

何一つ、音の無い果てしなく静かな空気のように。

この戦いが、それがどれほど彼らに多大な影響を与えるのか知らぬ。じゃがそれはますます彼らの意志を強くするための、そんな戦いであるような気もする。

香坂くんの身体。

見るところ『氣』はただの少しも余さず右腕に集められている。

坂上先生の身体。

こちらも同様に『魔力』は両の手だけに微塵と残さず集められている。

全力。

文字通り、すべての力を結集させ、次の一合に挑もうとする二人。

二人は過去の自分を恥じた。

自分の所為で狂わせた人々の人生を。

彼らは心碎く。

同じ道の上で、違う方法で、彼らは歩んで来た。

一人は『現実』を。

一人は『理想』を。

二人はこれからも、歩んでいく。

『現実』は『理想』を叶えるための基となり。

『理想』は『現実』を叶えるための糧となり。

『現実』が無ければ人は人として生きて行けず。

『理想』が無ければ人は人として生きて行けず。

二つは絡み合うようにして、人という存在を作り上げていく。

人は集まり、村を創り、町を創り、国を創り、やがて世界を創る。

世界は『現実』により成り立ち。

同時に世界は『理想』により成り立ち。

そのまた同時に『現実』が、『理想』が、折り重なる。

人は想像し生きていくイキモノ。

『本能』だけではなく『理性』を持つ。

『現実』は人を人として。

『理想』は人を人らしく。

そんな世界の中、折り合いをつけ『現実』と『理想』と付き合っていく世の中。

天秤のように釣り合わせて生きていく世の中。

『現実』に大きく傾かせた男が一人。

『理想』に大きく傾かせた男が一人。

二人は今、ぶつかり合う。

踏み込んだのは、同時じゃった。

二人が二人、その信じた意志の為に歩み続けた男。

どちらが後でも無く……思えば当然じゃ。

炎は天を覆い、地を喰らい尽くすように牙を剥く。

猛りは声を生み、獣のように、獅子のように、竜のように大きく咆えた。

「A A A A a A a a a a a a a a a ! ! !」

光は地を占め、天を埋め尽くすように刃を捧げる。

声に為らない叫びは力となり、剣を持つ手が更に強く握られた。

「ツツツ!!!!」

白と朱は。

炎と光は。

剣と牙は。

混じり合い。

「隼人っ！！」

断絶され、隔離された二人の空間。
その境界に立つ一人の女性。

「勝て」

はるかくんの、たった一言。

「ツッオールアアアアアアッッ！！！」

牙は剣を押し潰す。

そして、それは突如として。

曼荼羅の魔法陣が坂上先生の前に現れ、二人の女性が彼を庇うように両手を広げた。

「口を開くな隼人！」

「はるかも……うん、変わった。スゲー眩しいくらいにイイ女だ」

目の前にいる男。

隼人の身体からはいつもの雄々しい生気がまるで感じられなかった。

『氣』を限界まで使いはたしたせいかな、もしくは先の炎。

『旧支配者』を、『邪神』の石柱をその身を媒介に用いていたからか。

「ケケ……右腕ネージャネエカ」

「……オウ。あんなデカイ相手に力貸してもらって、一本なら安いもんだろ」

私を抱きしめてくれた太い右腕は、肩口から丸々消失していた。

切り口は斬られたようなモノではなく。

輪切りとなっているのに既に塞がれていて、最初からなかったのよう
うに右腕は存在しなかった。

軋む身体。

傷だらけで、震える手で隼人のそこに触れる。

治療術者を待たず、この男が心配でここまで引き摺って来た。
傷口は炎のように熱かった。

「なんでい、ボロボロじゃねえか」

「女同士でちょっと遊んでな」

「綺麗な顔が、もってえねーなあ」

残った左手。

ごつごつした、大きな手が私の頬を撫でる。

……ああ、やっぱり私は……本当に……。

「スラぼう」

「はい、ご主人様」

……スラぼう……だと……？

筋骨隆々の、三つ編みの海パンが……？

シリアスを壊すな。

冗談は今いないんだ。

「”『ベホマズン』”」

「了解よん……こほおおおおつ」

隼人の言葉にスラぼう？ は、大きく息を吸う。

濃密な、ミルクのように濃い『魔力』が、ソイツを中心に集まっていく。

私よりはるかに強大なエヴァや鶴子。

アイツらの『魔力』や『気』をゴミクスだと踏み潰すようなそれ。

「ぶるあああああああああ……！」

天を、地を、世界を震わす野太い声とともに、あたたかな光がマツチヨ紐パン男から放たれた。

……後で聞いた話によると、光は関東一帯を覆い尽くしたらしい。生死の境をさまよっていた怪我人が、不治の病を患っていた子供が、一瞬でその傷を病巣を消し去ったそうだ。

『奇跡の光』と、世界中の人間が騒ぎたてることになったのだが……まあ今は関係あるまい。

「うん、相変わらずの美人さんだ」

私も例にもれず。

「コレ……は？」

炎にまかれ、人形のように立つ女性と子供を守った坂上先生、だったか？

彼もまた、例にもれず。

だが、隼人の腕は元に戻ることはなく。苦しげに、荒い息を吐いていた。

「なんでだっ！ 何でコイツの腕はっ！！」

「……コレは恐らく契約による代償かと。先ほどの『邪神』、旦那様が持っていたいらした『ペルソナ』とも違い、本質的に存在していたモノ。今の旦那様に比べて強大過ぎる彼の召喚に答える条件として持っていたのでございましょう」

瞬間、男は青い服を着た銀髪の美女に変わっていた。

神の造形とも言える美貌を晒す女性だ。

その女が今、ただ隼人の為だけに悔しさを顔から滲ませ。

「ハハ、今度はとんでもねー美人だな」

「お戯れを……。無論、旦那様が望むならば私はどんなプレイでもどんな場所でもどんな時でもWelcomeでございますが……」

恥ずかしそうに、嬉しそうに頬を染める。

黒い想い。

胸の中に、奥で叫ぶ。

私以外……受け入れたあの女の気持ちも併せて膨らみ、嫉妬がまた顔を出す。

が、今はそんな場合ではないということは理解している。

「で、どこ行くんたデメエは」

隼人の口が開かれる。

投げた言葉は坂上先生の背中に当たり、女性と子供を見つめる彼は振り向くことなく言った。

「……もうここに、私のいられる場所はない」

「逃げんの？」

「違う場所で『理想』を叶えるだけだあ」

「ふ〜ん……ま、どーでもイイけどよ……守れて良かったじゃん」

その言葉に少しだけ、先生は反応し。

「相も変わらず、十年以上経っても君はあ……癪に障るよあ」

隼人に振り替えることなく、歩いていった。

「隼人おっ！」

森の奥から、エヴァがこちらに向けて駆けてくる。
息を切らして、懸命に。

坂上先生の隣を抜けて、彼を微かに見る事もなくまっすぐ。

「何があった！ 何で腕が無くなっているんだ！ 大丈夫なのかお前はッ！！ てか貴様は誰だ！！」

「スラぼうでございますが？」

「嘘を付けえっ！ スラぼうはだなあ、もっとこうタマネギでなあ、青くてだなあ」

「青でございますよ」

「違うっ！ 服じゃない！ ……あぁっ！ ともかく貴様がスラぼうであってたまるか！ 貴様はスラぼうじゃないからスラぼうじゃないんだ！ はい論破！！」

「ドコガ論破ダヨ、遂ニばけタナ」

「チャチャゼロオツ!!」

飛び上がり、チャチャゼロに飛びかかるうとするエヴァ。

その小さな肩を無理矢理かき抱いて、隼人はエヴァを胸元に招き入れた。

「うえっ!? なっ、何をしとるか貴様h「ありがとな」……又」

「俺のこと、心配してくれて……また俺の傍に来てくれて……ありがとう」

「……馬鹿者が……私も、お前も、大馬鹿だ」

胸板に頬を寄せて、呟くエヴァ。

「……隼人？」

先の言葉を最後に抱き寄せる隼人の手は力を失っていく。

ズルリとずり落ち、アイツの腕はパタと地面に堕ちた。

「どこへ行くこうというんだ」

「新田、かあ」

目の前に、男がいる。

同じ学び舎に通い、同じ教師を見てあの人と同じ道を志した男が。

「ここにもう、私の居場所はない」

「ふざけたことを言う」

「くふふっ」

私の言葉に、坂上は笑う。

それは最近とは少し違う、昔の……あの事件の前のコイツのように。

「新田あ……お前はアレを強い男に育てたあ」

「香坂の事か？」

「ああ、アレはきっといい教師になるよあ……」

喧嘩でもした……というところか。

『魔法』は私にとって、理解の外にある。

が、随分と気分が良さそうで……何か、あの事件に決着をつけられたのだろうか？

……だがな、坂上。

一つだけ、間違っていることがある。

「私よりももつともつと、香坂を育てたのはお前だよ。お前がいつも、あの男を上から踏み潰すように接して来たからこそ、その力よりも強く跳ね返り、立つことが出来た」

「……………」

「麦のように……お前が冬となり、踏み続けてやったからこそ、アイツは青々とした実を……人に比べればクソ不味くて腐っているのかも知れんが、それでも誰よりも強く立つ麦に成長させたんだ。『責任』の本当の意味を知る、立派な大人に」

「そう……かあ……………」

「そうだよ、お前は教師だ……私などよりも、ずっと優秀な」

手の平で顔を覆い、上を向いて坂上は立つ。

「戻って来い、坂上。お前の仕事は、私がすべて変わりに受けよう。だから戻って来い……お前の負債すべての責任をとれるようになって……何時までも、私がここで待っていてやるから」

「…………約束はあ…………出来ないぞお」

「だったらその時は、あの世で一番美味しい酒を俺に奢ってくれよ……和利」

八十二匹目 意見ぶつけあっても変わる想いと変わらない想いがある（後書き）

次話にてエヴァ編終了です。

八十三匹目 色々あっても最後には『愛』が勝つらしい(前書き)

エヴァ 編終了。

八十三匹目 色々あっても最後には『愛』が勝つらしい

本日は4月20日。

香坂くんの担任する麻帆良女子中等部3年生は、明日から京都へと向けて修学旅行を開始する。

そんな日を控えた今日。

『別荘』の中、香坂くんはその持ち主と向かい合っておった。

あの日……停電の為に学園結界がその効力を失った日。

そこで起きた騒動は、表面上揉消されるような形となった。

『英雄』によって封印されていた『闇の福音』ダーク・エヴァンジェルを担ぎ出し、その息子を成長させるために打たれた茶番。

結果だけ見れば、大成功じやの。

少年は、妙な期待を持たれている少女と手を取り。

父親が封印した『悪の魔法使い』に臆することなく立ち向かう気概を見せた。

その過程で対等以上にそれと渡り合い、『悪の魔法使い』は純な『正義』の心を持った少年から影響を受け、彼女を殺さず改心させた。

と、言うのが魔法使いのお偉いさん方が『英雄の息子』に期待を寄せる魔法使いたちに向けたメッセージの概要だの。

かなり、曲解したメッセージじゃが……政治的に見て、それが一番下らないの、まったくもって。

実際、その場で起きた諍い。

つまりは少年たちの裏で起きていた、大人の戦いじやの。

それは『悪を見過ごせなかった正義の者たちが少年たちの力になるうと息巻き、それを少年たちの為にと止める正義の者とぶつかりあった』……と、いう事になったわい。

その、ほんの少し『暴走』とも取れる行動を先導した『正義感の強い者』は、そのご自分の行動を恥じて麻帆良での『聖地を守る』という名誉ある勤務から外れた。

これもまた、彼らの下で公にされたニュースというヤツだの。

間違いではないんじやが、酷く間違っているおる。

ネギくん自身が、自分の立場をどれだけ理解しているかは知らぬ。本当は知らせるべきなのかもしれんが……子供には子供らしくあつて欲しいと思うワシは間違っておるのじやろうか？

だが耳聡い『英雄』に憧れる者たちは、『英雄の息子』に期待する者たちは。

当然ネギくんの動向が気になり、『麻帆良という地で修行を行っている』という事実を知っておる。

『見護られている』と言えば聞こえがイイが、要は監視されている訳じやの。

その彼らにある程度、情報を流さねばならぬ。

もちろん『常に善であるように』、じやがのう。

……そんな風な情報を流す本国の者たちが、この地には紛れこんどるという事じや。

坂上先生はそのような形で麻帆良を去る運びとなった。

彼がこれまで果たしていた教師としての業務は、新田先生が肩代わりし、他の人間がサポートする形となったの。

坂上先生が、麻帆良で行おうとしていた事。

つまり『ネギくんを餌にアスナくんを誘き出し、理想の世界の礎とする』という目的を持っていた事。

『コスモエンテレケイア完全なる世界』の残党かもしれんという事。

これを知るのは恐らくで魔法使いのお偉方の一部。

彼の行動を擁護しようとしておった者たち。

それに加えて彼と戦った香坂くん本人と、彼らの会話を聞いたワシ。後は坂上先生の行動から、その結論まで辿り着いたエヴァと、詰め寄られた時傍におったスラぼうくとチャチャゼロくんじやの。

本当ならばタカミチくんに教えてやる方がイイのかもしれないが。

そうなれば彼は間違いなく坂上くんを殺すじやろう。

そうはなつてはイカン。

坂上先生の肩代わりをしようと、『彼に長期休暇を与えて欲しい』とワシの下にやって来た新田先生の男気の為にも。

『喧嘩したただけなんで気にしちやいねえっす』と言った香坂くんの言葉の為にも。

表面上、その事実をばら撒かなければ、坂上先生は本国の言うように『正義感が強過ぎた者が責任を取った』という形で麻帆良の人間を納得させることが出来る。

かなり強引じやがの……権力はこう言う時に使つたためのある訳じやし……ホホッ。

坂上先生は秘密主義で知られておった。
本当にエージェントならばそれは当然なのかもしれぬが。

故に『彼の近くで彼の目的を知り働いていた優秀な手ゴマはいなかったのではないか』、というのがワシの出した結論。
他にこの学園で働く教師陣を疑いたくなかった、というのもあるのかも知れぬが……そう言えるだけの証拠があつた。

彼の、死んだはずの妻。

彼女は代々と続く日本の術者の家系じゃつた。

その能力は『魔力残留の痕跡を消す事』。

要は『隠蔽技術』のエキスパートという事だの。

死んだはずの坂上先生の妻と娘は、まるで生きているかのように彼の傍らに控える事が出来ておつた。

二人が本当に生きているのか、生きていない只の人形なのか、それは今問題ではない。

だが『実際に彼女が動いていた』という事ならば、彼は『痕跡を残さず工作をたつた一人で行っていた』、と示唆することが出来る訳じゃの。

彼を糾弾し、吊るし上げる事も出来た。

あの時点で、『奇跡の光』の影響で体力を元に戻っていたワシならば、追い拘束する事も出来た。

じゃがそれをしなかったのは……彼と向かい合っていた新田先生の行動のためによるものではなく……。

『奇跡の光』……『ベホマズン』と、香坂くんは言っておつたか。

『発信源が麻帆良である』、というところはすぐに魔法使いのお偉方の知るところとなつた。

影響範囲からそれを推察するのは簡単な話じゃからのう。

ワシはその瞬間に確信した。

アレをやったのが自分の『隔離空間』を軽々と破壊した紐パンマツチヨじゃと。

そしてそれが、銀髪美女と紐パンマツチヨに変わる存在が、香坂くんがいつも肩に乗せている『スラぼう』と呼ばれる魔物じゃと知った。

なれば……約一年半前、月を穿ったあの十字も、脆弱に見えたスラぼうくんが成したことじゃと。

……ワシは、酷く失礼な事を考えているのじやろ。

じゃが確実に、あの場で坂上先生を捉え糾弾するよりも、重要な手札を得るための行動にワシは出た。

ワシの予測通り、彼は『気にしない』と言った。

ワシはあの場で『一人の男を更生させるという機会』を棄て、『この先多くの人間を正しく導ける完全に自由な場』を得るための行動に出た。

ナギたち、『英雄』などと呼ばれる存在など一笑に蹴り飛ばせる圧倒的過ぎる『力』。

本国の人間たちを抑え込むことのできる、本当の意味で『ありとあらゆる常識を打ち破ることのできる強者』。

それを絶対的な従順さを以て支配する、今はまだ小さく若い、真っ直ぐとした意志を持つ男。

彼の機嫌を取るために、ワシは行動した。

『奇跡の光』が発現された理由を、当然のようにワシは問われた。故にワシは誤魔化しつつ、そこはかとなく『その術者と友人関係にある』と言う事を漂わせた。

このことで、麻帆良に本国からの監視者が更に流入する事じやろう。

じゃがスラぼうくんの……何と云うか『ザコオーラ』とでもいうのかの？

それはワシでも、十数年以上見続けたワシでもその本質を見破る事は出来なんだ。

と、なれば監視者如きに遅れを取るとは思っておらぬ。その実力がバレル事はあるまいて。

ワシは今回の一件で、強力すぎる鬼札を手に入れた。

使い方を誤れば、間違いなくワシは蒸発してしまうじやろう。

じゃが使い方を間違えねば、必ず麻帆良を誰にも影響されることのない教育の場とすることが出来るじやろう。

という訳で、今日もご機嫌取りと行くかのう。

彼の友人の『呪い』を解くという事で。

ま、それもスラぼうくんがやってくれるらしいんじゃないかの。

ホッホッホッホッ。

「なあな、はるかはん」

「ん、何か用か？」

「何であのシスターは隼人はんにあれほど好かれとったのに、アップローチに答えなかったんだと思う？ 半分は淫魔で、他の男に相手させとつたんでしょう？」

「……ああ、それは多分……」

視線の先、スラぼうに呟く隼人が見える。

腰をかがめて、新しく出来た右腕でスラぼうの頭を撫でている。

失われたはずのアイツの右腕。

それは義手でも何でもなく、本当の右腕としてアイツの身体に付いている。

間違いなく、アレの右腕は失われたはずなのに……だ。

あの日、あの後エヴァの『別荘』に入り。

エヴァの持っていた人形の腕を、膨大な『魔力』と『気』を用いて神経や血管を違和感なく接続させる『手術』を行うはずだった。

だが……アイツの輪切りとなった傷口にそれを持って言った途端、人形の腕は隼人の身体に取り込まれ、新しい隼人の腕がアイツ自身の身体から生えてきた。

何故、そのような事態になったのかはわからない。

エヴァも、私も、追い付いた鶴子も、その事態を理解する事は出来なかった。

血が流れ骨が貫き肉が付き皮膚が張られた、あたかな隼人の腕がそこにあつた。

間違えるはずが無い、アイツ自身の腕が。

それと同時に紅かつたアイツの髪の一部が、メッシュのように紫に変わっていた。

見れば昔に比べ、全体的にくすんでいるようでもあつた。

……もしかすると既に、隼人は人間ではなくなっているのかもしれない。

チャチャゼロを、アイツを慕う生徒の一人を『魔物化』させた『魔物の肉』。

それを普通の肉のように喰らい、これまでアイツの身体に変化が無かつたのは『魔物使い』だからだと思っていた。

だがそれは、少し違っていたのかもしれない。

アイツは既に、人外なのかもしれない。

……まあそれがどうだろうと、もはや取り返しのつかないところまでに私の想いは育っているのだろうか。

ただ……それが、隼人を苦しめるならば……私は辛い……どうしようもなく。

「はるかはん？」

「ム、ああ悪い。少し考えていたな……まあ私はシスターじゃないから全部が全部そうだとはいえないんだが……多分怖かったんじゃないのか？」

「怖かった？ 何がですか？」

「『愛されている』という実感。それに答えたいと思い、答えて万が一自分の醜い本性が見えてしまえば棄てられてしまうんじゃないかという不安。今の現状が、幸せすぎる今という時が、崩れ去ってしまうんじゃないかって……だから踏み込みたくないって、思ったんじゃないのか？」

【そうですね、まったくもってその通りです】

「ぶうううっ！！」

「ギヤアアアツ！ 俺ノ霜降り肉ガアアアアツツ！？」

「ゴぼっ、ゴホッ……すっ、スマン」

「俺ノ楽シミガ……俺ノ苦勞ガ……てめえ！ 二十枚ガ十九枚ナツタジャネエカツ！！」

十分だろう、というのは無粋なツッコミなのか？
というか……何で、いるんだ？

【どうやら取り込まれた影響で、精神体としてくっ付いてしまったようです。あ、思考が私に洩れている訳ではないので安心して下さいね】

それはそれは。

喜ぶべき……なのか？

まあ仕方が無いのかも知れんが……だから義母さんが『あまり使うな』と言っていた訳か。

成程、理解したよ。

「何やそれ、勝者の余裕かいな？　ウチに言わせれば考えられへんわ、ホンマに」

「鶴子……ああ、その通りだ」

「……もうエエわ。色んな事あつて、こうやって昔より魅力的なはるかはんに会えたわけやし。ま、ウチの目標は何時でも隼人はんの正妻やから、そこところは覚悟しといてえね」

「……負けないさ」

【当然です】

「そこおッ！　下らん言い争いをせずに私に注目せんかアッ！！」

無視されて、少し憤慨気味なエヴァ。

まあ今日はアイツの『呪い』を解くためにここに集まった訳だしな。

「てかさ、どっちでもいくね？」

「煩い！　私の、十年來の友人の悲願が叶うのだ！　注目するのは当然だろう」

「デメエで言うなつての。まあどっちでもイイけどよ……っーこと

でも一度説明すんぞ。これからスラぼうにエヴァにかかった『呪い』を解いてもらうために『シャナク』を使わせる。だが何度も言うようにコイツは半端ねーくらいに強いからさ」

「わかっている。私の身に宿る、『吸血鬼化の呪い』まで一緒に解いてしまうかもしれないという事だろう？ ……ハッ！ リスクをこの私が恐れると思うなよ、隼人」

「上等、イイ度胸だ」

「……だが一つ、その前に願がある」

「何だ？」

「抱き締めろ」

「……マジで？」

「冗談だ、お前にまだそんな甲斐性があるとは思えん。だから頭を撫でろ、心をこめてな」

「あいよ」

くしゃりと、エヴァの金髪を隼人の右腕が撫でる。気持ちよさそうに眼を細めるエヴァ。

やがて肩に乗るスラぼうに、隼人は指示を出した。

「『シャナク』」

パキりと、エヴァの身に絡まっていた魔力の鎖が砕け散った。と、同時にエヴァの身体は指先から、砂のように崩れ始めた。

「……エヴァ……俺は……」

「気にするな、私は幸せだったぞ」

そう言って笑うエヴァ。

やがて彼女の全身は砂となり、光の中へと消えていった。「なんて言うと思ったかこのボケがアツ……!」

「ギヤアアアツ! 俺ノ霜降り肉ガアアアアツツ!？」

チャチャゼロの肉を喰ったな。

それと……地面に魔法陣?

『仮契約』のか!?

「ズルくないん、アレ?」

「まあいいじゃないか。ハンデというヤツだよ」

「ツト、ツイデニ俺モ」

「！・っーわんわん」

「隼人っ！　コレで私はお前のモノだが同時にお前は私のモノだ！　高々百年と生きていない小娘に、お前はやらんぞ！！　フハハハハハハハハハハッ！！！！」

【スラぼう】

最強の最弱くサイキョウノサイジャク>

「番号」
1

「色調」
青

「方位」中央

「德性」
節制

「星辰性」ラカーユ9352

「アーティファクト」偽典ペルソナ全書

【チャチャゼロ】

■ ■ ■ ■ ■
慕う獣の王< ■ ■ ■ ■ ■
シタウケモノオウ>

「番号」
2

「色調」
翠

「方位」 南

「徳性」 愛

「星辰性」 ラカーユ9352

「アーティファクト」 オリハルコンの牙

【エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル】

「称号」 氷と闇を統べる者<コオリトヤミラスベルモノ>

「番号」 3

「色調」 堇色

「方位」 北

「徳性」 信仰

「星辰性」 冥王星

「アーティファクト」 闇の衣

八十三匹目 色々あっても最後には『愛』が勝つらしい（後書き）

改訂などは、ちょっと時間を置いて見直して随時行っていくます。

なお次話投稿は、三章からは三章すべてのプロットとして作り、次章の目標とする『二十話』に全てを収めるように書きあげてから。今回と同じように連続投稿を行っていきます。

次は一月後か、二月後は解りませんが、その時またこの拙い作品にお付き合いいただければ嬉しく思います。

これからも生温かくも厳しいご指摘ご批判とともに、この作品をよろしく願っています。

読者様方からの疑問の答えてみる（前書き）

読者様方からの疑問の答えてみます。

なにぶん小説を書くのは初心者ですので、荒やわかりにくい表現があるかと思われます。

これからの改訂の参考にいたしますので、できればガンガンお願いいたします。

読者様方からの疑問の答えてみる

【契約の代償として持っていていかれた隼人の腕が戻ったのは？】

・自分は『ベホマズン』に限らず治癒魔法の全般を、『傷を治すモノ』と考えていました。裂傷とか、穴あきとかまだそこにその骨や皮膚や臓器の何割以上かがあれば再構成できると。

よって完璧に契約で持っていていかれてしまった隼人の右腕は、そのような治癒魔法では元に戻すことが出来ないと考えました。もし元に戻せたら、脳みそだけの状態から復活できますからね。

『本物の腕』と書きましたが、腕としては本物ですが『隼人本来の腕』とは違うモノです。

ちよつとわかりにくく書いたようなので、改訂していきます。

【腕一本犠牲にして使うから強大な力を借りられるというわけではないですね。いくらでも生えてくるならば、旧支配者の力は使い放題では？】

・その辺りの制約は、勿論踏まえております。腕としては『本来』のモノではないので、代償として右腕を扱う事は出来なくしております。彼ら『旧支配者』はきつとバカではないですので、あからさまなインチキ行為には気付くんじやないでしょうか？ まあ『それも面白い』と言うのが神様連中なのかもしれませんが。

【ギャグもシリアスも話の整合性が取れないのが多々あるように感じました】

・申し訳ありませんが、具体的にどこなのでしょう？
個人的には考えて書いていたもので、何と言いますか私的見解が入

って、おかしくないだろ？　みたいに思ってしまうところもあります。

とりあえず坂上先生とシスターの言動に付いて伏線が甘かったなあ、とは感じておりますが、そこ以外にどこにありますでしょうか？

『誰』とか『どこのイベント』とかで構いませんので、よろしければご指摘お願いします。

【結局エヴァはどうなったんですか？】

・エヴァは『吸血鬼化の呪い』が解けきり砂になる前に、『魔物化』して生き永らえました。

どうも描写不足だったようです。

【スターウォーズの二次創作が見たいです】

・申し訳ないです。スターウォーズは全部見てないんでそのご期待にはちよつと無理そうです。

【坂上はお咎めなし？】

・彼は学園長が交渉材料に使いました。本来の目的を知っているのはごく一部ですし、殺人未遂を犯したのも、そんな事言ったら魔法使い全員がそうですからね。バトルモノが成り立たなくなる部分もあるかとは思いますが、少しばかりご容赦を頂けたら嬉しいですよ。

【坂上は少なくとも犯罪者ですし、それを新田は認めるのですか？】

・新田先生は『魔法』を具体的に知らないです。漠然とした、お伽話のようなイメージですね。

よって彼自身は何かもめことがあって、隼人と坂上先生が喧嘩をし

て、少し昔のように戻れた坂上先生を見てあのような行動に出た、という事です。

もちろん知らなければ何しても言い、という訳ではないですが、それは具体的に魔法に触れるこれからです。この先坂上先生の行動をどう思つかはまた、新田先生の知る内容によって変わっていくかと。

【スラぼうはどっちがどっち？】

・どっちもどっちです。具体的に言えば『エボルシヤス』中は任意で二人を切り替えることが可能です。そこらあたりの能力は、まあスラぼうだから、とご容赦いただけるとありがたいです。

読者様方からの疑問の答えてみる（後書き）

疑問の度に随時更新いたします。

よろしければ改定の為、ご協力ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6176o/>

俺、転生したんだと

2011年8月9日10時39分発行